THE CENTRAL REVIEW

中央公論

4-1920

春期大附錄號

381 4 3

現代化せる漢文學空前の大結集・斯學の最高權威

國譯漢文大成

（卷末原文附）

會員募集

當代諸大家の努力によりて、譯文の嚴正、註解の懇到に加ふるに、類に由りて或は大意、或は評釋等の項目を設け、飽まで了解の徹底を得ざれば止まざるもの。又古來其事の難き爲めに今日まで何人に依ても企てられざる戲曲小說の傑作を幾と漏れなく此中に網羅せる如きも、本叢書の一大特色なるべく、要するに內容の充實且つ徹底を期せる點に於て斷じて諸他類似書の追隨を許さず。偏に淸鑑を仰ぐ。

編纂評議員（イロハ順）

東京帝大教授 文學博士 市村瓚次郎
東京帝大教授 文學博士 芳賀矢一
東京帝大教授 文學博士 服部宇之吉
帝國學士院長 法學博士男爵 穗積陳重
文學博士 幸田露伴
東京帝大教授 文學博士 上田萬年
宮內省御用掛 貴族院議員 小牧昌業
東京帝大教授 文學博士 白鳥庫吉
帝室博物館長 文學醫學博士 森鷗外

書目

◉經子史部（拾六册）

四書　一册
易經
書經　一册
詩經　一册
禮記　一册
春秋左氏傳　二册
老子、莊子、列子　一册
墨子、荀子　一册

韓非子　一册
七書（孫子、吳子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、李靖問對）
鬼谷子、新語　一册
淮南子　一册
戰國策　一册
史記（全篇）　四册

◉文學部（拾六册）

楚辭　一册
文選　三册
唐詩選　一册
三體詩　一册
八家文　二册
西廂記
琵琶記　一册

還魂記
燕子箋　一册
桃花扇
長生殿　一册
晉唐小說
宣和遺事　一册
剪燈新話、餘話　一册
紅樓夢　三册

譯註諸家

（イロハ順）

東京帝大教授 文學博士　服部宇之吉
文學博士　幸田露伴
東京帝大教授 文學博士　宇野哲人
學習院教授　岡田正之
第一高等學校教授　箭内亙
宗教大學教授　山口察常

第一高等學校教授　安井小太郎
東京女子大學教授　後藤朝太郎
公田連太郎
學習院教授　小柳司氣太
宮内省御用掛 貴族院議員　小牧昌業
東京高等師範學校教授　兒島獻吉郎

奈良女子高等師範學校教授　佐久節
明治大學教授　笹川臨風
拓殖大學教授　宮原民平
東京帝國大學教授　鹽谷溫
釋清潭
東洋大學教授　平岡龍城

◉卅二册

內容　經子史部　十六册
　　　文學部　十六册
兩部又は一部申込隨意

津田青楓氏意匠、菊判總クロース製、天金、一冊紙數約八百頁

◉入會申込は四月卅日限

略規

會費　經子史部、文學部の各部會費は毎月金五圓、但、一人にて兩部申込は毎月金九圓五十錢

申込金　各部金五圓、兩部金九圓五十錢、但此申込金は最終の會費に引當て、會費中より控除す。

送本　來る六月より毎月各部一册宛刊行送本す。

▼內容詳細見本は御申越次第送呈

東京市神田區小川町一番地
電話神田三二六〇番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

文學士 小林一郎氏新著

新刊 自由の生活

（著者最近苦心の大著）

現代に處して意義ある生活を為さんとする人士の一讀を希ふ

思想界の混亂は實に未曾有である。吾等は此間に處して如何に吾等の活路を開いて行くべきであるか。今は徒に樂觀するを許さぬ又徒に悲觀すべきで無い。之を過去の經過に徵し現在の情勢に照して今後の立場を確と定めなければならぬ。著者は此の見地から日本の文明の過去及び現在に對して自由なる批評を試みた。現代に處して意義ある生活を為さんとする人々の一讀を勸める殊に青年の人々と青年の指導の任に在る人々は必ず精讀すべきである。

四六判最上製 美本全壹冊 紙數五百廿一頁

正價金貳圓五拾錢 送料十二錢

文學士 今井政吉著

忽三版


露西亞文明記

四六判最上裝 美本五百餘頁

正價金壹圓七拾五錢 送料十二錢

昔から露西亞は世界の謎であつたが歐洲大戰勃發以來世界は更に一層多くの興味を以て同國を見るに至り、革命勃發後は更に愈々世界的興味の焦點が同國に据ゑらるゝに至つた。そこで我が國は隣國的關係を有する特殊の立場にあるだけ一層露西亞に對する興味を深く感ぜざるを得ない。茲に於てか露西亞研究は實に我が國操觚界の一大潮流となり來つてゐる。朝に夕に露西亞に關する記事の雜誌上新聞紙上に我等の眼に觸れぬ日は無いといふ有樣であるが遺憾なことには未だ曾て纏りたる手頃の冊子にして露西亞國風全體を描けるものが無かつたのに茲に今井氏の本書を得て其渇を癒やすを得たるは我等の心より欣幸とする所である。今井氏は數年間露國に滯在して其社會狀態を具さに研究して此程歸朝せられし士にして其記述する所一々實地の觀察に基けるものであれば安んじて信賴することが出來る要するに露西亞に興味を有せる人士の逸すべからざる有益なる著書である。

振替貯金口座 東京八七七貳番 ■ 大同館發行 ■ 東京市神田區表神保町七


花は櫻
帽子は鷹印



"THE HARVEST FIELD."
OILPAINTING BY FRED BROWN.

本間久雄、小山内薫、河竹繁俊、神近市子、谷崎精二
坪内士行、中村吉藏、楠山正雄、矢口達、秋田雨雀
西條八十、島村民藏、日夏耿之助、（イロハ順）

（十三名家執筆）

ワイルド全集

第壹卷　小說集發行

（中版七百頁惣ポイント活字
リード製美本金箔押箱入本
定價金二圓八十錢送十八錢）

內容目次

- ●オスカア・ワイルドの生涯
- ●ドーリアン・グレイの畫像
- ●アーサア・サヴイル卿の犯罪
- ●カンタウイ・ル幽靈
- ●模範金滿家
- ●WH氏の肖像
- ●秘密の無いスフイインクス

第二卷戯曲集

四月中旬發行

人生の爲の藝術か？藝術の爲の人生か？ワイルドの唯美主義は此千古の問題に向つて大膽なる積極的の答辯を與へ、自然と人生の前に美の靈鏡を捧げて、藝術的改造のキーノートを彈奏しボートレール及びラフアエル前派の直傳せる七彩の虹衣を飜して近代文藝の分水嶺の最高頂に飛舞せる天使群の如く又魔女軍の如き不滅の印象を留むる一大偉觀たり、世界各國悉く其飜譯全集を有せざるなし、我國に於ける缺陷は十三名家の努力に成れる本全集の逐次刊行に依つて始めて滿たさるゝを得ん

東京市麹町區飯田町一の二
株式會社　天佑社
振替東京一〇一二八番
電話番町一一七九番

解散と選擧

原内閣が、下院に多數の味方を擁し乍ら、又普選問題に必勝を期するの成算あり乍ら、突如議會を解散したのは非立憲だと云ふ人がある。多くの人の信ずるが如く、之が或る卑むべき政略に利用されたのなら、不都合千萬に相違ないが、併し單純に形の上から云ふなら、多數黨を以てして自ら解散の擧に出づるといふ事其れ自身は、必しも非立憲にあらず又先進諸國に例のない事でもない。

下院に多數を失ふことなくして而かも解散を斷行するのは、固より特例に屬し、濫りに許さるべき事ではない。之を許して可なるは次の條件に適合する場合に限るのである。曰く(一)新しく起つた問題に付て政府は在野黨と著しく意見を異にする事、(二)其問題は極めて重大なるものたる事、(三)前の選擧の際には這種の問題は殆んど全く起り居らざりし事、(四)反對黨も政府も共に其所見を固執して相讓らざる事、是れ。

斯くして政府は下院を解散して國民の判斷に訴へんとする以上、玆に注意すべき點が三つある。第一は云ふまでもなく爭點を明白にする事である。今度の場合で云ふなら、政府は飽くまで普選尙早を標榜すべく、野黨は之と正反對なる旗幟を揭ぐべく、其間毫末の曖昧をも許さない。第二は競爭を絕對的に公明正大ならしむる事である。双方暫く矛を藏めて第三者の審判を待つと協約した以上、不當な方法を　て彼の決意を左右せんとするは卑劣の極である。第三は競爭の結果に依つて潔く進退する事である。政府にして勝たば普選の提案を握り潰して可。負けたら普選派の聯立内閣にでも政府を明け渡すべきである。

之れだけの筋が立派に通れば、今度の解散も立憲的に無意義とは云へない。けれども之は政黨政治の實蹟が相當に擧つての上の話であつて、粗雜低陋を極めた我國今日の政黨に之を求むるは、云はずと知れた野暮の骨頂であらう。

日本の政界では、品格よりも金が問題となる。餘程開けた識者の間でも政見より品格が問題になる。無論信賴に値する品性の人を得るが根本の要點だけれども、最も高尙なるべき此事に携るに、下らぬ人物の出て來るといふが土臺間違ではないか。代議士に選るゝ程の人は、否自ら候補の名乘りを揚げる程の人は、初めから立派な人物に決つて居ねばならぬ。だから西洋などでは品性の詮議は初めから問題とならぬ。狙ひ所は只政見のみだ。だから又政黨政治は前述の樣な筋道を辿つてうまく行はれ往くのである。

我國の政界が政見よりも先に人物を見定めねばならぬのは、偶々淘汰力と制裁力とが社會的に今仍ほ薄弱なるを語るものであるが、殘念ながら何と云つても、矢張り今の所は、人物本位でゆくより外に仕樣がない。願くは我黨の士よ。所屬政黨の如何を問はず、只信賴するに足る品性の人に投票し給はん事を。

中央公論



第卅五年第四號
春期大附錄號
第三百八拾一號

全國の教育者に寄す

中澤臨川

去る二月中旬、東京市内の小學教員諸氏數千名を網羅した一の組合が出來て、その發會式が某處で開かれたといふ報道を新聞紙上で見ましたとき、私は言ふにいはれぬ感激に打たれました。なぜなら、わたしは夙くからかやうな企の成らんことを切に望んでゐたからであります。追々と言はず、すぐにも同様の擧が諸縣に擴がり、そして終には全國教育者組合の一大聯盟が成立つばかりか、それがまた世界各國の同一團隊と歩武を合せて、眞に有効な働きを現はすのも遠い事ではなからうと信ぜられます。

全國教育者諸君——今私はいそ〱とあなたがたに呼び懸けます。菲才私ごとき者が、あなたがたの前に立つて、何

一と言いひうる事がありませう。況して私は唯今殆んど何の用意もなく、一の感情の發作から皆様を呼び留めて見たといつてもよいのであります。併しあなたがたに對する私の信用と、あなたがたを頼るよりほかはない私の希望とが、私を大膽にさせました。事物に對する十二分の考慮もさることではありますが、或る場合には雜りけのない純な初一念に却て良き道理が見出だされます。それで私は今慌たゞしく皆様に進言する次第であります。

わたくしは深い感激なしには皆様の前に立つことはできません。その理由はなぜと問ふまでもありますまい。一言で申しますれば、數千年來私どもの祖先が努力して私どもに殘してくれた文明は即今一大廻轉期に際して居ります。或はそれが唯ならぬ迷路に立つてゐると申した方がよいかも知れません。多くの識者は「人類の再生か死か」とさへ極言してゐます。どうか皆樣この際今一度あなたがたの胸に手を置いて、今がどれだけ「非常」の時期であるかといふことを篤と考へて見て戴きたい。それでないと私が之から折角申述べたいと思ふ苦衷の一片も或は通ぜずに終りはしまいかと氣使はれます。私どものお互に呼吸いたします現代が何んなに肝腎な時代であるかといふことの眞の自覺が、皆様にも私ども凡てにも必要な一切萬事であります。それは未來を生きようとする者にとつてのアルフアにして同時にオメガであります。この非常時代に對する自覺は、殆んど同時にあなたがたのお採りになつてゐる職業に對する適切明白な自覺となつて現はれねばなりますまい。失禮なお話かも知れませぬが、貴い天職を持つたあなたがたにしてが、四六時中その自身の中に生きるといふことは出來べき筈のものでありません。それは無理のないことで、達道の聖者でさへも或時は奉仕の念の薄らぐ場合があるのであります。然るにこの非常時代に就ての自覺は常平生鈍らされてゐたあなたがたの職業的自覺に對する好個の刺激劑でなければなりません。それは初めは殆んど重苦しい威壓として、後にはこの社會の中に[illegible]に自己の重要な位置と使命とを發見した悦びとして、あなたがたに迫るでありませう。唯ならぬ岐路に迷ひつゝ

ある現下の社會を救ひ出して、それに新しい生命を賦へる者は私どもの無邪氣な後繼者よりほかにはありません。かやうに大切な後繼者を育て上げて立派な新時代を創造する任務を負つてゐる者が即ちあなたがたではありませんか。力强く言ひ易ふれば、即今危機に瀕してゐる世界文明の救生者はあなたがたを差し措いて何處に求められませう。私は決して誇大な言を弄する者でも、特に皆樣に媚びる者でもありません。皆樣が眞に斯の時代を自覺されるならば、それこそ私の申上げる以上の責任觀念と、之に對する自信と勇氣とが、油然として皆樣の胸に漲溢することでありませう。併し華々しい人道の戰士としてのあなたがたの前途には、何れだけ艱難な障害が横はるかといふことをも察しなければなりません。それに對する深い同情と危惧とを私どもは押し隱すわけにはいきません。ありたいに申せば、私は希望と不安とを以て、萬事を打任せたいやうな信賴と同時に何處々々までも脫けない疑惑を以て、皆さまの門出を眺めるのでありませす。私が深い感激なしに今皆さまの前に立つことができないと申上げたのは、かやうなわけ合からであります。

御承知の通り、滿五個年に亘つた世界大戰も昨年に到り漸く局を結びましたが、その結果は決して安心すべきものではありません。かく私の申すのは、傲慢な政論家がウイルソンの十四個條の骨拔きをあざ笑つたり、或は國際聯盟の効果を疑つたり、或は日本特使の無能を罵詈したりする輩に傚はうとするのではありません。血を流した敵味方の民衆が心から望んだ平和は「親愛な和解」でありましたが、さて私どもの前に新たに開展された世界を視ますと、以前よりも憎惡の漲つた婆娑であります。戰爭によつて各國の負つた深い疵は、その上にも憎惡の毒のために汚されて、醜く膿み爛れました。戰爭といふ大地震は世界のあらゆる建物を崩し、あらゆる幹を根こそぎ倒しました。今や底知れぬ不安と動搖とが人類社會を支配してゐます。併し一番惡るいことは、國と國との間、階級と階級との間、及個人と個人との間を分離してゐる激しい憎惡であります。獨逸が英國と親しみえないやうに英國は獨逸と親しむことができません。資本家が勞

働者を愛しえないやうに勞働者は資本家を愛することができません。今の社會に於ては、愛は禁斷の實であつて、憎惡のみが自由な共產物のやうにみられます。

誰がかういふ社會を造つたのだといふことはありません。不幸にして現代の人類が廻り合せでかういふ淵に落ちたのだと見るほかはありません。それにしても私どもの時代が自らの利慾と驕傲との罪から陷つた陷穴へ、何も知らぬ無邪氣な次代者をも誘はうといふのは、餘りに深い罪劫の上塗りではないでせうか。私どもはラッセルと與に次のやうに言ふべきではありますまいか――「罪は我等にある。是等の青年たちを此度の戰場に送つたのは我等の惡るい情慾であり、我等の精神的死であり、溫かい心と生きた靈の眼とを缺いてゐる爲めに博善な生活をすることのできない我等の失敗の結果である。我等をしてこの死から蘇らしめよ。なぜといふに、事實に於て死んだのは我等であつて、我等が生活の恐怖から殺したところの青年ではない。彼等の幽靈は我等よりも活きてゐる。彼等の幽靈からこそ新しい生命が起らねばならぬ。そして彼れに活かして貰はねばならない者こそ我等である」と。

教育家諸君――私どもの陷つた罪惡の淵から次代者を救ひ上げる第一の鍵を握つてゐるところのあなたがたに最も必要とするものは眞の勇氣であらうと思はれます。あなたがたは常に滿潮の如く張り高まつた精神を持たねばなりませぬ。皆樣の決心はいつも社會の同情と贊助とを得られるものと思はれたら、それこそ大きな間違です。寧ろそれとは反對に、皆樣の航路には常に逆風が吹くものと考へねばなりますまい。なぜなら、私どもが今日即刻から皆樣に望む教育は、昨日までのそれとは全く違つた地形の上に打建てられ、そして棟木一本でも古る物の間に合せを許さないのでありますから。それ程の覺悟でなければ、どうして現社會の生きた屍から生々たる新しい精神の芽を蘇らす復活の仕事が成就致されませう。だがあなたがたは決して失望されることはありません。あなたがたの取扱はれる麥芽には「新人道」の

奇蹟的活力が潜んでゐます。「憐むべき不幸な十九世紀」は一方には自らの罪惡の爲めに倒れましたが、併しその偉大な努力と自信、偉大な悲哀と樂天、偉大な傲慢と絶望、偉大な情慾と理性との跡は、決してその儘で消え去るものではありません。あなたがたの培ふ新人道の芽の中には、それ等の力が神秘的に化合されて、發育の時期の來るを待つてゐます。「さらばクリストフ、我等は再び生れる爲めに死なねばならぬ」——から私どもはロマン・ローランに和して、ひたすら皆様の努力の有効を信じませう。

かやうに困難な仕事ではあるが、幸ひにして皆様は多人數であります。屢ば孤獨な思想家を犯すところの自己無力の認識から起る絶望をば皆様は協力によつて防ぐことができます。「新人道の創造」といふ殆んど空前な聖目的——それはあなたがたの個性の働きに歸すべき獨異な目的でありながら、同時に人間以上の或る永遠性を有した共通的の超越目的——かやうな新目的の前に皆様お互が、その光に憧れて、手を携へて慕ひ寄り、そのもとで一致して仕事を爲しうるといふことは、何れだけか喜ばしい事でありませう。皆様の組合運動は昔の宗教運動に似た運動であります。で、あなたがたがその仕事の必要上一の組合を造られるといふことは、純な勞働組合とともに、目下の最必要事とせねばなりませぬ。なぜと申せば、皆様の前途に横はる使命の大きく艱難であるだけ、それだけ、皆様は協力互助を要するからであります。併し今日の我國情に於てかやうな組合がその自由意志に從て成立を持續するには、非常な障碍を突破せねばならぬのは明らかな事柄であります。私は一九〇六年、ジョーレス指導のもとに佛蘭西の教育家たちが組合を造つた抑々から、今日までどれだけ彼等がその組織の自由の爲めに戰つたかといふ歴史を存じてゐますので、猶のこと皆様の活動の前途に對して深い危惧に襲はれます。併しそんな事であなたがたの勇氣がくじかれるとは少しも信じません。それに當時と今とでは第一に時代が違つてゐます。

皆様の組合は、その組合員の物質的自立のために活動したとて少しも差支ありますまい。その必要の爲めには他の組合と聯盟される場合もありませう。皆様は自己の組合の力によつて正當な生存權を主張されて然るべきであります。併し私の玆に皆様に進言致さうとするのは、もつと積極的な組合の任務に就てであります。前々より申した如く、今や皆様の肩上には教育の根本的改造、新人道の創造といふ重大な使命が負はされてゐます。

で、新人道の要求の何であるかに就て、わたくしの常平生考へてゐる事を披瀝して、皆さまの御參考に供したいと思ふのであります。私は再び自分の非才を恥ぢます。かやうに大きな問題は仲々私ごとき者の手に合ふところではありません。そこで私はこの場合十分小心でそして正直でなければなりません。私は誰の眼にも差向き最も切要と信じられるであらうところの二三の事項に就いて、簡明に率直に皆様の注意を促すだけで滿足したいと思ひます。

私は新時代の要求として、平和を愛する強い觀念と勞働に對する正しき觀念とが行き渡らねばならぬと信じます。

何は差措いても私は平和の愛を高調します。人間がお互に殺し合つて悲慘な血を流すといふことほど大きな罪惡がほかにありませうか。人間が今迄戰爭の爲めに設けた多くの口實――主義の戰といひ民族發展の爲めの戰といふ如き――は何一つとして正義の理論の上では成立致しません。是等の分りきつた小供騙しのやうな理想が殆んど神聖犯すべからざる絶對の命令であるかの如く私共の心に浸み渡つた原因は、多年に亘る教育の影響であります。否、悪教育の罪であります。小學讀本の第一卷から私共は武的英雄の尊いことを教へられます。或る戰爭で或る武將が卑むべき戰略を用ゐて幾百千の敵を鏖殺したことが非常な功名譚として特記されてゐます。有效な殺人器を發明した將軍が奇蹟的な人の如くに謳歌されてゐます。私どもの讀まされる歴史の殆んど凡ては血腥い紙であります。町で賣る小供の繪草紙の多くは武者繪に占領されてゐます。かやうな教育の感化が殺伐な軍國主義の國民を造らなかつたなら、それこそ不思議で

す。世界の各國民は獨逸の軍國主義を批難する前に、まづ「自らを知る」必要があります。で、未來の國民教育の第一步は、無邪氣な小供の頭に戰爭と其害惡とを[illegible]な思想を注入することから始めなければなりません。戰爭を憎む思想は愛の思想です。同時に國際同胞の思想です、私は斷言します。世界の教育者が擧つてかやうな方面に向けられる努力の十年、否一年は、今回の講和會議に於ける國際聯盟の規約よりもずつと有效であることを。然るに、戰爭と其害惡とを憎む思想を涵養するといふことは、言葉の上でこそ何でもないやうでありますが、その實行は一大難事です。それは今まで右に向つてゐた教育を全廻轉して、全く反對の左方に向はしめることを意味します。幾千年來の因襲的謬想を根本から革正することを意味します、私どもの教科書と修身書との大半も遠慮なく改訂されねばなりません。あなたがたの司どる教育は「再び生きる爲めに死なねばなりません」。之が斯の非常な新時代に處する皆樣の任務の簡[illegible]に[illegible]て必然なる第一步です。將に生れようとする「生命」があなたがたに委任する使命は、皆さまにとつて無類の光榮であると與に亦重大な責務です。皆さまはこの生命の爲めに何れだけの愛撫を捧げられても足りません。

然るに玆に軍國主義の爲めに一番尤もらしい口實は、防護の爲めの軍備といふことです。世界各國は多年のあひだ此口實のもとに所謂武裝的平和を續けてまゐりました。例へばこゝに二つの相隣接した村があつて、一つの方の村が初他村の者が自分等の農作物を盜みに來るのを防ぐといふ口實のもとに、村界に立番を置いたとしませう。すると他の一方の村でも敗けじと之に倣ふ。とり〲に得物を手にした兩方の番人は次第に增える。面と向ひ合つた彼等のあひだに、いつかは激しい鬪爭の起らないで濟みませうか。古代ならばいざ知らず、今時の世には餘りに馬鹿々々しい事であります。然るに列國の間に行はれる所謂武裝的平和はその愚劣さに於て之と同じ程度のものであります。ナポレオンが攻めた國のうちでも、西班牙は一番手硬かつた。それは西班牙には軍隊らしい軍隊がなかつたからです。現今の露西亞に對

する列國の持て餘しかたが矢張それです。兩々相對した軍隊があればこそ其處に戰爭の慘禍が起りますが、軍備の無い國には勝敗さへないのです。假りに現代に於て、平和を熱愛する無武裝の國民が現はれたとします。この嚴たる正義の一國民に對して、何れだけ暴戾な隣國にしてが掠奪に出懸けうると思へますか。ラッセルの國際的無抵抗主義には强い眞理があります。

それにこの大戰前に於ける如き武裝的平和は、ちやうど山雨の來る前の密雲のやうに、壓殺的效果を人心に及ぼします。かやうな死的緊張の空氣の中に長く住ふ國民の前途には神經的自殺があるばかりです。それは膿んだまゝ切られない腫物のやうで、傷口の開いて血の出る戰爭よりも惡いのです。「愛することのできない心は憎む心よりも惡い」といふ詞がありますが、武裝的平和はちやうどさうした心理狀態に私どもを陷れます。併し私は軍備が絕對に不必要だといふのではありません。國の內外の平和の爲めに或程度まではその必要を認めます。たゞその軍隊は今迄の如く戰爭本位でなくて平和本位であつて欲しいのです。今後の軍隊は右手に高く橄欖の枝を捧げ、左手に低く劍を提げたものでなくてはなりません。わたくしは平和の守護神としての軍隊を欲します。彼の偉大なジョーレスが說いたやうな「新軍隊」が私どもの理想でなければなりません。

今回の戰爭によつて、世界の勝ち誇つた文明は人間の盲目的本能の爲めに裏切られた形であります。人心の深い奧に潛んだ「獸」が白晝公々然と街に現はれて、その殘虐を敢てした有樣には、誰しも驚き且失望させられました。そこで、「人間の本能はいつまでたつても淨化されるものではない、人類の努力は無效だ」といふ古い疑聖的悲觀說が、再び有力に頭を擡げました。併しそれは極端から極端に走つた思想です。私どもはそれに欺かれてはなりませぬ。十九世紀に於ける科學の成功は人類を驕慢にし、私共をして理性に對する危險極る盲目的信賴を懷かしめました。その爲めに私共

もの本能の訓練が全く疎かにされました結果は、人間が利己的になり、殘忍になり、終に今回の戰爭を牽き起す原因にもなりました。つまりは、近代文明が餘りに人間の本能を見縊り、且それを甘やかしすぎた結果です。然るに確かな科學的根柢の上に立つて私は斷言することが出來ます。本能は廣い範圍に於て統制し善導することのできるものであると。で、私どもが戰爭の破壞的本能を轉回して之を平和の建設的本能に變化さすことも不可能ではありません。わたくしの說く平和は消極的平和論者の稱へる如き沈滯無爲の死海ではなくして、湲々として春の野に水かひ、そこに花咲かせ、そこに小鳥を誘ふ河であります。あなたがたの新教育は兒童の心にジエームスの所謂「戰爭の道德的代償」を創造せねばなりません。

戰爭の害毒を說き、平和の貴ぶべきことを敎えるには、今が一番良き時期と思はれます。荒涼たる西歐の戰野、その生々しい血の跡、沍寒の中に餓を訴へる中歐の民、獨逸軍國主義の悽慘た末路——それ等は高價なる活きた教訓であります。私の畏友で、長く巴里に滯在中の吉江孤雁氏からの最近の消息に、次のやうな一節があります——「戰後のフランスは全く疲勞の有樣です。戰勝の中に籠つてゐる深い悲哀は仲々癒やされさうもありません。……この頃では市中を步るく軍人などを見ると、何だか時代錯誤者の代表者のやうな氣がいたしてなりません。今後は戰爭が全くなくなるだらうなどいふ呑氣な考は起しませんが、戰爭は決して爲すべからざるものだといふ事は實感的に考へられます」と。そのフランスでは、最近アンリイ・バルブシュの小說『光』の中の思想を中心として、一の有力な精神的國際主義の團隊が成立ち、その會員中にはロマン・ローラン、アナトール・フランス、ジオルヂ・デュアメル、それからクゴールなどの名士が發見いたされます。この小說の主要の思想をば次の詞が現はしてゐます。曰く、「戰爭はその假面を剝がれた、その爲めに思想家をして理性の法則に從つた社會生活を組織せしめようとする」と。その復たフランスでは、最近に至

國教育者組合が「初等教育の改造」といふ議題を主として開催されました。その席上でアナトール・フランスが激しい平和論を稱へてゐます。これ等の事は皆樣のほんの御參考までに申上げる次第です。

次にわたくしは勞働に對する正しき觀念の必要を說かうと思ひます。勞働ほど近頃喧ましい問題はなく、勞働ほど近き未來の文明を左右するだらうと思はれる重要な因子はありません。「勞働」は現代の巨人であります。之に對する今迄の私どもの措置が果して正しかつたか、現代の勞働の要求は何處まで正しいか、勞働は人生に於て何ういふ位置を占めてゐるかなどいふ事を、皆さまとお互に攻究し合ふことは目下の急務です。わたくしは勞働に對する正しき新觀念が、必ず在來の教育方針に一大革命を齎すであらうことを信じて疑ひません。

事實を率直に申せば、人間はパンなしには生きられません。人智がどれだけ進歩しようとも、勞働によつて食ひ物を得ずに私共が生きられる時期は豫期さるべくもありません。筋肉勞働は人間が生れ乍らに課せられた第一の義務です。社會組織の必要上分業の行はれねばならぬことは勿論でありますが、それにしても全く筋肉勞働から分離された幾いろかの生活樣式の存在する現代文明は多少跛的ではないでせうか。況んや奢侈遊惰の階級を飼つて、その贅澤と貪婪の爲めに多くの者が苦まねばならぬとすれば、それは猶更です。併し社會的正義の立場から勞働問題を觀察した議論は、近頃喧ましく世間を賑はしてゐるので、私が茲に反復する必要はありません。

で、わたくしが主として述べたいと思ふのは、勞働の義務と勞働の福音であります。唯今申した如く生きる爲めには人は働かねばならぬ、生活に必須な品物は手足を使はずには得られません。で、原則としは、どうしてもお互に勞働の苦役を有たねばならない。「汝は汝の額に汗して食物を食へ」と新約書に言つてある事は、私どもが雜りのない正直な心で考へるとき、必ず認めなければならない、避くることのできない、また避けてはならない、第一の義務であります。

腦の勞働を手の勞働よりも貴いと思つたり、安逸な生活を自己の特權のやうに考へたり、又はどんな意味に於てでも筋肉勞働を免れようとする者は、一種の怠惰者であります。勞働の義務はかやうに單純明白で、疑ふ餘地のないにも拘らず、現代の人々は實際にこの義務を認容いたさぬばかりか、却つて之を避けやうとする努力に追はれてゐます。それは近代産業の不自然な習慣から、私どもが勞働の社會的意義のみを觀て、その本然的意義を忘却した結果であります。勞働はただ衣食の爲めの賤しい方便であるとのみ採られるやうになりました。私どもは逆の方向に車を押してゐます。であるから、車の方向から直してかゝらぬ限り、百の改造論もその功を奏しません。

勞働は人生に必須であるといふ事は、勞働が人間の性の根本に根ざした要求であるといふことを意味します。人は勞働するやうに生れたのでありますから、勞働から離れた人間は不具であります。言ひ換へれば、勞働は方便でなくして、それ自らが自足した人生の一目的であり、一の眞劍な生活樣式であります。勿論勞働には苦勞が伴ひます、知識や藝術の追求に努力が伴ふやうに。併し考へることが億劫だからといつても、人は知識を求めずにはゐられません。そのやうに、汗水滴らして勞働するところに眞の滿足と幸福がありませう。「悲みを通じて悅びへ」とは樂聖の詞でありますが、凡ての貴い處世術はみな忍苦の上に築かれてゐます。それが私どもに課せられた必須の義務であつてみれば、それを惧れて避ける者は却つて人生その物を忌避する不幸に陷ります。想ふに、現代人の多數は勞働——殊に自然と親近した勞働——との不自然な分離から、筋肉生活と思索生活との至妙な吊合を失ひまして、神經のみ高かぶつた傴僂となりました。かやうな生活からは健全な、肩巾の廣い、血のめぐりのよい愛や道德や藝術は生れません。そこには黃昏の「蒼い花」は咲きませうが、白晝の眞紅の花は開きません。で、私どもが逆の方向に押して來た車の位置を直し、勞働の必須であること、勞働の貴ぶべきことを次代者に敎えるのは、あなたがたの任務でありませう。私どもの尊敬する詩人ホ

イットマンが次のやうに申してゐます。

Now, I see the secret of the making of the best persons,
It is to grow in the open air, and to eat and sleep with the earth.

(自分は最善の人がどうして造られるかの秘密を知つた。それは大空の下で育ち、大地を伴として食ひ且眠ることである)

次に私は健全な勞働の愛が社會に何ういふ效果を及ぼすかを說きたいと思ひます。この事に就て私は一度或る機會に述べて置いたことがあるので、玆にそれを簡單に繰返すことに致します。若し人類が勞働の根本義務を認容し、各自が喜び勇んでそれを頒つやうになれば、第一に凡ての人間は一の共同目的に於て親愛に結合され、今の社會に行はれるさま〴〵の不調和、例へば階級鬪爭の如きは自然に除かれることになりませう。第二、現代に行はれる罪惡の大半は、一方には飢餓や過勞から起り、一方には浪費や怠惰から起るのでありますが、それもお互に喜んで勞働を頒つやうになれば消滅する筈です。第三、勞働は凡ての者を平等にし、不當な情慾の頭を剪み切ります。第四には、今迄餘りに神經と理智にのみ生きて來た不健全な文明が正しき位置に戻される事と思ひます。

私は餘りに長々しく說きましたが、要するに、平和と勞働との愛を高調することが、皆さまの次代者に對する切實な任務であるといふことに歸します。然るに現代に於て、ちやうど皆樣のそれと同一の任務を荷つた有力な運動が他に起りかけてゐます。それは勞働組合です。眞の勞働組合の目的は、やはり平和の愛と勞働の尊重にあります。この二つの運動は双方が相犯すことなく、少しの讓歩もせずに、自然に同一の感激に溶けうるほど似合つたものであります。お互にその天職を自覺し、國民と人類とに對する責任を解してゐるところの是等の二大團體こそ眞の「勞働者」の集りではありませんか——玆にあなたがたを勞働者と呼ぶのは、私にとつてはあなたがたに對する尊敬を意味してゐます。そこで、

ルクスの次の如き豫言がこの場合に私には彼の考へた以上の深い意義を以つて迫るのであります――「勞働者の團結た世界に平和を齎すであらう」。

現代の社會を救ふには敎育か革命かの二途を出でません。或る識者は革命による神秘的一大飛躍を望んでゐます。そしてかくまでに急迫した狀態に於て敎育は迂遠であると看做してゐます。併しそれは思ひ過ぎか、さもなくば思慮の足りない結果です。私は眞に自覺した世界の敎育者の協力による十年は、この社會を根本的に改めるに十分であらうと考へます。十歲の敎え兒も十年たてば廿年の立派な靑年に成るのでありますから。

私の申上げた事は唯だくどいばかりで、甚だ要領を得ないかに見えます。併しその根本の思想は誰でもが、認容しなければならない單純の理義に過ぎません。愛と靈智と理性と力とが皆さまの胸の中で、必ず私の弱々しい不足な詞を補つてくれるに違ひありません。人生の新しい秩序は今や生れ始めました。偉きな力の春が萌して生命の樹液はあがりかけました。私は深い感激を以つて皆さまの門出を送ります。

我國文化の基本的缺陷

法學博士
ドクトル(經濟學) 森本厚吉

(一)

我國が僅か半世紀間に驚く可き進歩發達をして半野蠻時代から一躍世界の文明强國の仲間入りをしたと云ふ事を我國民は世界に對し唯一誇りとして壯語して居る。若し是れが事實であるならば我國は世界文明史の記錄破りをしたもので誠に慶賀に堪えない事である。然し私は不幸にして近來益々此事實を疑ふ樣になつて來た。勿論我文明は或方面に於ては世界無比の進歩をした事は事實であるが他の方面に於ては一向變化しないものがあつて我文化の性質を精細に研究すると歐米先進國に比して大いに劣れる點があるのである。假りに表面は同じく五大强國の一であつても我文化の內容は充實して居ない缺點がある。故に徒らに皮相的な文明進歩に心醉する事から醒めてよく文化の缺陷を見出し根本的に是を補充し改造する事こそ我國刻下の急務である。

(二)

抑も人類は原始時代から脫出して現代文化の隆盛を樂むに至る迄には長き進化の歷史を有し決して一朝一夕の業ではなかつた。文化進歩の行程には必ず外部に於て自然的要素が發達しなければならぬが夫れと同時に內部に於て人爲的要素も全うされねばならぬ。例へば其要素の主要なるものである言語、宗教、道德、法律、教育及藝術等に於て夫々必要なる訓練と過程を經て發達すのでなければ到底完全なる進化の實を擧げて人類の幸福を全ふする事は出來るものでない。文化の過程は決して魔法杖の作用の如く急變を許さないものである事は數千年の文明史が證明して居る通りである。然るに我國のみ例外で特別に天惠を受けた聰明なる國民であると云ふ事は如何に自惚れが强くても信ずる事が出來ない筈である。

（三）

（編者曰く、此項の冒頭十四行を筆者よりの書面に依り全部削除せり。讀者諸君の御諒恕を乞ふ）×××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××。然しながら我等は餘りに性急な餘り、是非經過しなければならない階段を飛び越す樣なことをせずして着々と理想の實現につとむべきである。若し一朝一夕に黄金時代を暴力を敢てして迄も實現せんとする時には尊い理想も社會を害する恐る可き主義となるのである。進歩の行程には一定の秩序と法則が存在して居るといふ事を忘れてはならぬ。

（四）

是れと同じ推論の立場で現今我國文明史に表はれた事實を批判すると大いに顧慮を要する事が尠くない。蓋し我國が長き眠りから醒めて過去半世紀間に經過した進歩は確かに一面から見ると世界無比である事は周知の事實であるが、斯くも急速に築き上げられた文明には必ず缺陷がある可き筈で夫れが漸く近來問題となり初めたのである。

昨年の國際勞働會議に於ける特殊國委員會で我國の勞働時間から日本も英米等の進歩したる工業國と同樣に八時間制をとらん事を主張した。其時に英國勞働代表者パンニング氏の如きさへ反對して「英國の勞働界が今日の狀態に達するまでには少くも五十ケ年の長い年月を要したのであるがそれを日本が一足飛びに其時代に入らんとするのは却て不利であろう」と助言をしたのである。かゝる苦言を外國人から聞く事は誠に恥かしい事であるが是亦我國民の深く味ふ可き事である。英國政府代表者のバーンス氏が「日本が八時間制より除外さる可きや否やは日本勞働者の能率の程度如何によつて決定せらるべき問題である」と云つて結局國民の提出した修正案で我國一般の工業に九

時間制を取る事になつて特殊國の一つとなつて仕舞つたのである。是れ實に國際的の大恥辱であるが止むを得ない事で我等は是れから深い敎訓を學ばねばならない。矢張八時間制に達するには英國の樣に半世紀の準備を要するのであらう。若し其の準備がない時に時勢にをくれない樣に進取主義の國が取る可き道は二つあるのみである。一は恥を忍んで特殊國の階級に恥ぢて準備を仕直すと云ふ事。二は無理矢理に八時間制の先進國に割り込んで極力其缺陷の補充に努力する事である、此の二途何れかを取らなければならない。國際勞働會議に於ては後者は許されなかつたのであるが一般國際關係に於ては幸に是れを許す丈の雅量を文明國が示して吳れたのである。是れは實に我國にとつては幸福なる事であるが其裏面には非常に無理があると云ふ事を忘れてはならぬ。一躍して鎖國主義の封建時代から五大强國の仲間入りをしたのであるから色々な缺陷が存在して居るのは寧ろ當然のことゝ云はねばならぬ。若し國民が一生懸命になつて早く內容の充實する事に努めなかつたならば國力を海外に發展したり民福の增進を計る等に於て色々の頓挫を來たさねばならず、遂には五大强國の列に入る事が出來ずして小弱國の憐む可き位置に下らなければならぬ事は今度の勞働會議の結果がよく是れを示して居るのである。我國民は今や深く內に省みる可き危急なる秋である。

（五）

現今我國の物質的文明を歐米に比すると勿論餘程遜色があるが兎に角所謂文明の利器は不完全ながらも一通は備はつて居る。蓋し是れは富力さへあれば餘り困難な事ではない。併し精神的文明に至つては一定の秩序、階段を經て始めて進步の實を擧げる事が出來るのである。恰も成金連が一朝にして美服を纏ひ壯麗なる住宅に住ふ事は容易な事であるが彼等の精神狀態を急速に向上せしむる事は容易の業でないのと同じである。世界の文化は絕えず進步して止む處を知らないが我國の文化は果して是れと步調を共にする迄に進步して居るや否やといふ事が今日の大切な問題である。然るに不幸にして前述の通り當然我國の文化には缺陷があるからして時代遅れの事物が少くない。而して其の最も著大であつて且つ基本的な缺陷は社會の單位であり、又國民經濟の基である個人の生活狀態が甚だしく幼稚であつて其能率は甚だ低く新時代に少しも適應しない事である。斯くの如く不完全な基礎の上に建てられた我國現代の文明は到底健全なる發達を長く續くる事が出來るものでない。果し

や新時代の要求が盛に叫ばれる樣になつたのであるが抑も其の要求は如何なるものであらう。

(六)

新時代が要求して居るものの中で其の基礎的のものを秩序をつけて研究して見ると第一に我國民の生活を改造して新時代に適する文化生活を營ましめねばならぬといふ事である。何故に生活改善が基本的に必要であるかと云ふに我國現在の統計其の他の事實が證明して居る通り時代遲れの生活を現在の如く營んで居る場合には心身共に健康に害ありて病に罹り易く、老衰し易く、進取的活動の精神を失ひ易く、遂には死亡率殊に乳兒の死亡率が大になり結局生産能率が益々減少するからである。

試みに現今世界共通の最大經濟問題である物價騰貴に就いて是れを例せんに。此の問題の根本義は分配公正論を別とすれば國民の能率問題に歸するのである。能率を大にして生産能率を増加し物資の世界的缺乏を補ふ事を物價調節の基としなかつたならば如何に名論卓說が高唱されても此の問題を徹底的に解決し得るものでない。

(七)

近來英國でも日本でも同樣に物價調節論が盛に論議されて居る。過日英國の議會で（日本でも同樣）物價騰貴の主因は通貨膨張であるから是れを縮小する事が何より重要であると平凡なありふれた議論が出た時に、チャンバレーンは反對して今日の最大急務は通貨縮小の如き枝葉の小問題ではなく國民生産能力の増加であると言ふ事を極力主張した。是れ實に動かす可らざる眞理で私がかねて一部論者に反對し現內閣の物價政策に贊意を表して居つたのも之が爲めである。勿論通貨縮小策は幾分物價を調節し得るであらうが世界的現象である物價騰貴に對して餘りに大なる效果を得る事は不可能であらう。故に吾人の力說せんとする事は一方に於て分配の公正に努力すると共に他方に於て生産能力の增加を來すべき事である。漸く終を告げた大戰爭の爲めに交戰國は五千萬人を動員した。しかも其の人々は生産力の强力なる壯年者であつて彼等は少くも五ケ年間生産業を捨てゝ不生産的な戰爭に從事したのである。猶此戰爭の爲めに世界は四千億萬圓の戰費と五千億萬の戰爭損害金を費したのであるから合計九千億萬圓の巨額が不生産的に消費されたのである。實に此の戰爭が世界の生産力を著しく減少せし事は驚く可きものであつて物資の缺乏を來すに至つた事は自明の理である。斯の如きことが主因となつて物價騰貴となつたのであるか

ら今日の急務は人類の生産力を大にすると云ふ事を措いて外にはないのである。而して生産力増加の爲めに取る可き方法の中で根本的なるは生産者の能率を大にする事である。

（八）

我國民は歐米文明國民に比して勞働能率が少く生産の實が十分に擧らない事は彼我共に認むる事實である。何故に斯くも能率が少いかと云ふと其根本の原因は我國民の食衣住其他に於ける生活狀態が時代遲れであつて活世界に適應して居ない事である。

過去五十ケ年に著しく進歩したと云ふ我國の文明は不思議にも生活問題に殆ど手を着けず今猶國民の大多數は時代遲れの習慣に囚はれて其の生活狀態は封建時代と殆と同樣であり、我國民のみ恰も廿世紀文明國民の特權を放棄した觀がある。故に親しく我國文化の眞相を視察した外國の學者又は歐米先進國で其方面を研究した我國の先覺者は皆我生活狀態は歐米文明國に比すると百年乃至二百年時代遲れである事を公言して居る、幸に近來此事實が社會の注意を引く樣になつて荐りに生活改善の叫びが聞ゆる樣になつた事は誠に賀すべき事である。

猶思想問題に於ても最近に著しい進歩を來たして今や社會の各方面に解放又は改造の問題が考究される樣になつた。而してかゝる問題の解決に根本的價値を有して居るのも矢張り生活の改善であつて是れが社會改造問題の根本義となり又我國文化の缺陷の根本問題となつて居るのである。故に時代後れの生活から我國民を解放して進歩した新時代に適する文化生活を營ましめる事が我國文明進歩の爲に基本的に必要なのである。

（九）

生活改善の實を擧げるが爲めに根本的に必要なるは生活を科學的に研究するといふ事である。現今生活改善の叫びが高唱されて社會は是れに共鳴して居るにも關はらず其の實の擧がらない第一の理由は今日迄我國に於ては生活其物に對して科學的の研究を怠つたが爲め生活に關する智識の缺乏してることである。其の結果として國民は生活を改善せんと欲しても如何にすべきかを知らず、又之を指導し得る先覺者も乏しく、つまり其實行を見る術なくして、不合理で不經濟な生活狀態から脱出することが出來ない憐むべき境遇にあるのである。今目を轉じて試みに近來驚く可き産業の發達を來たした主なる原因を調べて見るに皆夫々科學的發明が各事業に應用された結果に過ぎない。例へば電氣を利用して産業界の革命を引き起せし前には電氣界の

研究が盛に行はれて後是れを應用して大いに効果を收めたのである。それと同様に社會經濟の根本である生活といふ一大事實に對しても生活に關する必要なる事項を科學的に研究して夫々關係の密接なる科學の原理又は原則を家庭生活に應用する事によつて始めて徹底的に生活の改善が行はれるのである。歐米先進國の國民生活には餘程科學の應用が行はれて居る。時間と勞力を節約して而も生活の能率と樂みを大にするが爲めに色々の新らしい機械又器具が家庭に用ゐらるゝに比して我國では衣食住共に時代後れの習慣にのみ固守して何等怪む事のないのが普通の事實である。要するに我國に於ては生活問題は單に昔からの傳說に任せて今猶研究的態度を以て之に當つて居ないのである。故に現時の生活改善論は主として常識論であつて科學的研究の論據を有してない。從つて改善の叫聲のみ高くして滿足の結果を得る事が出來ないのである。

（十）

然らば生活を科學的に研究するに必要なる教育の機關は如何なる狀態であるかと云ふに、我國に於ては甚だしく不備で之實に我教育界の一大缺陷となつて居るのである。年々歲々各種の學校は多數に新設せられて居るにも關らず此種の教育機關としては僅かに女子高等師範學校、附屬專攻科、日本女子大學等に家事科の設けがあるのみである、高等女學校補習科に於ても幾分生活に關する教育は行はて居るけれども到底現代の家庭を建設し家庭經營の處理をなすに足る實力を有して居ないのである。女子高等師範及其の專攻科或は女子大學の家政科等に於て假りに適當な高等教育が行はれて居るとしても是等を利用し得るものは其の數に於て非常に制限せられて居る。

米國に於ては十數年前より知名の經濟學者等が集つて米國家庭經濟學會（American Home Economics Association）を組織して機關雜誌を發行し盛に生活研究を行つて居る。大學教育としてはコロンビア大學、シモンス大學、ガーランド家庭學院其他著名なる州立大學の一分科大學である「家庭經濟學部」に於て此問題を專攻すると同時に色々の方法で大學教育普及事業（ユニバーシチー、エキステンシヨン、ウオルク）を此の方面に發達せしめ又は家庭經濟學通信教授を行つて立派な成績を擧げてゐる。前米國食糧管理局長フーバー氏が戰時食料政策に大成功を收むる事の出來たのは彼れが米國にある二千萬の臺所を處理して居る主婦と協力して食物に關する生活狀態を改善する事が出來たからであつた。

（十一）

我國に於てはかゝる教育又は研究機關の施設宜しきを得ず生活問題は今猶常識論に任してあるから我生活には不思議なる我國獨得の矛盾が存在して居る。而も其の矛盾が經濟生活に大害を及ぼすもので文明國に於てあるまじきものである。今其の重なるものを二つ丈擧げんに

一、我家庭生活に七十萬の女中を使用して居る事

二、十六才の藝娼妓酌婦の存在を許して居る事

日本程貧乏な文明國は他にないのであるが女中の數に於ては世界第一位を占めて居るといふ事は深く注意を要する社會經濟問題であつて、つまり我國民生活の幼稚なる事を表して居るのである。我國民一ケ年一人當りの所得は僅かに六十圓であつて是れを米國の七百二十圓に較べると約十二分の一に過ぎない。富の程度が高くなればなる程生活が複雜になり從つて家事手傳を必要とする程度が大になるのが當然であるにも拘らず米國で「サーバント、キーピング、クラス」と稱して僕婢を置いて居る家庭は富豪と殆ど同樣に見做されて居る。然るに我國に於ては收入の甚だ少ない中流者に於てさへ女中を置かない事を恥とするが如き習慣を有して居る。從つて其數は七十萬を算し我國女工と殆ど同數である。斯くも多數の女中は如何なる働きをして居るかと云ふに、云ふ迄もなく不經濟、不合理極まる家事の手傳をして終日多忙に生活をして居るのである。若し女中の數を半減して一半の三十五萬人を生産事業に從事せしむるものとすれば、假りに一日一圓の生産を爲すとして一日三十五萬圓、一ケ年一億二千八百萬圓の生産を産み出す事が出來るのである。而して私の計算に依ると、若し生活の改善を行ふ事が出來た場合には少くも現在女中の半數を解放する事は容易な事である。然るに古い習慣に囚はれたる生活を營むが爲めに大切な女子の勞力を無意味なる消費の爲めに空費して居ると云ふ事は新時代の一大矛盾と謂ふ可きである。

（十二）

最近ニューヨーク市に於て女子基督敎青年會の中央部で女中に關し次の如き宣言をなして女中問題の解決に資せんとして居る事は我等の注目を價するであらう。

一、女中を下婢と呼はずして家事手傳（ホーム、アッシスタント）と稱する事

二、勞働條件は次の如く確守する事

イ、勞働時間は一日八時間一週四十八時間を限度とする事

ロ、一ケ月四回の日曜と大祭日を休みとする事

ハ、一ケ年間勤務したる者には夏期二週間休暇を與ふる事

ニ、賃銀は無經驗の者は一週二十四圓（一ヶ月百〇四圓）經驗ある者は三十圓（一ヶ月百四十圓）時間外の仕事は倍額を支拂ふ事、（食事は勿論主人持）

ホ、女中を呼ぶ時には呼び捨てにしないで必ず其の姓に敬語を付する事

是等の宣言と我國の現狀とを比較する場合には如何なる感が起るであらう。今日我國女中の勞働條件を改良すると同時に少くも半數の女中の解放をなし得る迄に我家庭生活を經濟的に營まなければならぬ事は明かな事である。

今日の如く物價騰貴の世の中で一家五人が人間らしい文化生活を送るには少くも一ヶ月約二百二十圓の所得を要するのであるが其の以下の收入より得ない家族でさへ（何等特別の事情がなくして）小なる陋屋に女中と雜居生活をして居る有樣は寧ろ笑ふ可きである。斯の如き狀態で女中を使用する時に起る弊害は次の如く重大であることを忘れてはならぬ。

一、家庭經濟の進歩を害する事である。古來我國では臺所の仕事は女中任せにするのを誇りとする惡習があつて其の結果家政の進歩を鈍くし眞面目に家庭生活改善の機會を主婦又は主人に與ふる事が少いのである、反之米國に於けるが如く若し主婦自ら奮起して日々家事に當る場合は色々と改善の必要を感ずる機會が多く與へられ不知不識の間に家庭經濟の進歩發達を促すに至るのである。

二、子女の教育に害ある事である。兒童に獨立心を養成する事は現今最も必要な事であるが何事によらず女中の手を煩はす習慣をつける場合には獨立的精神を弱くするものである。故に幼少の時より自分の事は自分で處理する氣風を養成するが爲めには女中の使用は大いに害があるのである。

三、身分不相應の支出を増す事である。今日の如く女中を冷遇して居る場合でも一ヶ月女中一人に二十圓以上の費用を要するのであるが一家の生計費に於て二十圓を占むる費目は中產者に於ては甚だ重要なるものであるにも關らず是れが非經濟的に用ひられて居るのは身分不相當なる冗費と稱す可きである。今日物價騰貴の爲めに食物の節約をさへ行つて居るものが二十圓以上の無意味なる支出を有するといふ事は著しい矛盾である。

四、家族的團欒を傷くる事である。大なる家では女中の生活と家族の其れとを分離する事が出來るが中流以下の家では絕えず接觸する機會が多くして一家團欒の家庭生活を不便ならしめ從つて健全なる發達に害を及ぼすものである。

以上は主なる弊害を數へたのであるが勿論女中を必要とする家族も多くあつて女中の爲めに得る利益は少くない。併し公平

に利害を考へる場合には現今の經濟狀態では中流以下の家庭に於ては女中を廢止する事が生活向上の爲めに必要な事と信ぜざるを得ない。

（十三）

生活を改善すれば何故に女中を比較的不必要とするかと云ふ事は、其の反對の事實によつて證明されるのである。卽ち何故に斯くも多數の女中を我國民生活に於て必要とするかといふに、根本論としては我國民が未だ勞働の神聖を十分に自覺せずして家庭の勞働を嫌ふと云ふ事が第一の理由である。自ら當然なす可き事を稍もすれば人手によつてなさんとする弊風は大いに改めなければならぬ。諸官廳に於て給仕小使の數の大なる事商店の小僧の多い事等は女中の數の夥たゞしき事と相俟ちて、他の文明國に於て見る事の出來ない惡性の現象である。

女中を必要とする第二の理由は我國の食物の調理に非常に手數を要する事である。米食を主とする事は我國に於て當然の事であらうが、是れが爲めに特に「飯炊き女」其の他の手傳を多く必要とする事實は大いに考究を要す可き事である。若し外國の進步した家庭で實行して居る樣に二十世紀の科學の進步を臺處や食堂其他の居室に應用して人手を少くして出來るパン食を米食に併はして用ゐる習慣を作る場合には一家の勞力は著しく省き得るのである。

女中を必要とするに至る第三の理由は我國民が二重生活を行ふ事が多いからである。殊に衣服に於て和洋兩服を備へる事其他の色々の點に不便を感じながらも和服を多數に拵へて居るといふ樣な事は我生活を益々複雜にするものである。

次に我國在來の住宅は又著しく勞力を要するものであつて是れ亦女中の手を煩す事を必要にする理由である。其他社交に於ても不規則なる訪問或は季節の贈受の習慣等あらゆる生活の方面に於て勞力と費用とを甚しく要する生活法を我國民は營んで居るのである。是等を改良する事は結局女中の解放となり個人の能力增進となり延いては生産の增加となり一國文化の內容を充實し得るに至るのである。

（十四）

現代の經濟生活に不適當な生活を營んで居る我國民は七十萬の女中を必要とする外に猶五萬の藝者と、五萬の娼妓及び六萬の酌婦の存在を必要として居るのである。是亦文明國の一大矛盾であつて我國の恥辱と云はなければならない。斯の如く多數の藝娼妓の存在せる事は結局我國民の欲望幼稚であつて精神的

に文明國の資格を缺いて居る事を表明するものと云はねばならぬ。文明國に於ては勿論人其の者の賣買は許されて居ないのであるが、藝娼妓に限り俗に身を賣り或は買ふの語が適用され、彼等は人間取扱をなされずして商品と同様視さるるのみならず實際に於ても人身の賣買が行はるゝ場合が多いのであるからして、文明國に於て勿論許す可らざる職業である。然るに今や世界に於て藝者は日本の名物となり、外國語の辭書にさへもGeisha(ゲイシヤ)と云ふ日本語のあるのを見る。斯の如き名物を有する事は實に文明國の體面を傷くるものと云はねばならぬ。

(十五)

五ケ年に亘つた大戰爭は世界の富の分配を一層惡くし富者は益ゝ富み貧者の數は著しく増加したのである。而して富者殊に大小成金が新たに獲得した富の消費狀態を見るのに、勿論各種の生産事業に投ぜらるゝものも少くないけれども、彼等の奢侈行爲が益ゝ増長せる事實は社會が等しく認むる處である。斯くの如き時代に於て藝者が全盛を極むる事は當然の結果であつて例へば日本一の藝者都會と稱せらるゝ沼津に於ては我國の總理大臣の俸給以上の線香代を得て居る藝者は少くないと云ふ事である。富者にして斯くの如く、貧者も亦夫れ相應に酌婦娼妓等の爲めに不德なる失費をなして一般國民の生活狀態は益ゝ悲慘なる狀態に向ひつゝあるのである。

他の文明國に於ては勿論公然藝娼妓等は許されて居ないにも關らず我國に於てのみ斯くも彼等の隆盛を見るのは如何なる理由が存するやと云ふに、先づ第一に我國民生活に於て社交術の發達が甚だ幼稚である事である。社交術は我國に於ては餘り重要視されず、若し來客等に對して巧妙なる款待をなし或は自己の思想を遺憾なく發表し或は表情を能くするが如き者あらば社會は彼等を冷評して藝者の如きものとし侮辱するのは蓋し我國普通の事である。誠意ある巧みな社交術は文明國に於ても社會に於ても國際間に於ても最も重要なるものと認めて居る事を忘却されて居るものと見へる。

(十六)

恐らくは我國民程愛相あしく且つ意志を發表する事不完全にして絕えず苦虫をかみつぶしたるが如き表情をなすものは世界に類を見ないであらう。一家族内に於ても友人又は知人に對し或は他人に對して所謂如才なき談話を交へ互に快感を與へ得るものは數多くないのである。去りながら人類は社交の動物である、彼等が社交の實を擧ぐると云ふ事は自然の要求であつて、是

れが爲めには藝者の如き者の存在を歡迎せなければならない。若し現在の如き社會生活を營む場合には藝者の存在は必要缺く可らざるもので、是れが爲めに乾燥無味なる社會は幾分美化され藝術的に於ても向上するのに役立つ事が出來る。故に現今の問題は如何にせば歐米先進國の如く藝者なくして社交の實を完ふする事が出來るかといふ事であるが、此の問題の根本的解決は同じく家庭生活の改善に起因して居るのである。先づ家庭及小學校に於て所謂趣味の教育を旺にし、幼少の頃より自己の思想の發表表情等を自由に人前になし得る事に注意し、殊に男女間の交際に對しては健全なる訓練を與ふる事に努め各自の趣味を廣くし常識の發達を計る等に顧慮することを怠らざれば藝者の助けなくしても社會生活を樂しみ又之を美化し得る様になるのである。

（十七）

健全なる家庭生活は家族が各自生活を樂しみ一家團欒の快樂を享くる事である。然るに今日家族の者が生活難に迫はれて悲慘な生活を送れるにも關らず、主人が藝者遊びに身をやつすと云ふ矛盾は其罪勿論主人にありと雖も、又主婦が一家を整理し樂しき家庭を建設する事能はざるに起因する事を記憶せねばならぬ。而して樂しき家庭生活の中心は食事である。食事を完全に行はんが爲には食堂の設備宜しきを得ねばならぬ。若し是れ等の點に於て相當なる備を有する場合には現今の如き無意味なる送迎其他の宴會を改良する事ができるであらう。若し各自の家庭を利用して互に招き或は招かれて、或は離別を惜しみ或は歡迎を行ふ事を社會的習慣とするを得ば、自然に社會改良の實を擧ぐる事が出來て、一方に於て無意味なる社交費を省くと共に他方に於ては家庭及社會生活の發達を期する事が出來る。是れが爲めには一家の主婦は舊い社會の傳說から脱出して進取的に家事經濟に關する科學的知識の養成につとめ、進んで其の應用に努力しなければならぬ。斯の如くにして我國の主婦も文明國の家庭經營者の資格を備ふる事が出來たならば、今日我文明の體面を毀損して居る十六萬の藝娼を解放する事が出來、其の結果一方に於て家庭及社會生活の充實を來すと同時に他方に於ては解放されたる青年女子が他の生產業に從事し一國の生產を大にするに大いに役立つものである。

（十八）

以上女中及藝娼妓論を敢てした理由は我國民生活を新時代に適合する様に改善するに非ざれば徒に無用の浪費を大にするの

みならず國民の生產能力を害し、結局社會の不幸となる事を明かにせんが爲であつた。今日幸に總ての方面から生活改善の叫が高くされて居るにも關はらず、是が爲めに科學的研究を進むる事が根本的に必要である事を論ずるものが尠いのは甚だ遺憾である。而して時代遲れの生活狀態を改むる爲めに、我國に於て第一に取る可き手段は生活改善指導者を養成する機關を設ける事である。現在生活改善論を主張して居る所謂先覺者は相當に存在して居るが、彼等自身が自ら進んで一層深く此問題の科學的研究を行ふて其範を示すにあらざれば何の效も奏する者でない。最近文部省主催で開設せられた生活改善展覽會に於て是れを見ても生活に關する研究が未だ歐米文明國に比して甚だ幼稚である事を認むるのである。一例を擧ぐれば食物改良問題に於ても、主として明治十何年頃の衛生局の研究を基として今猶其の時代と同樣に、我國民の食物常習は脂肪を著しく減少して炭水化物を以て是れに代へ得るものとの原則を固守したり、或は有名なマカラム博士の「營養に關する新知識」等の重要なる新知識が殆んど認められず、却て米國普通婦人雜誌の平凡な雜報は重々しく發表してあるが如きは我國に於て此の方面に研究がどれ程の程度に行はれて居るかを略ぼ想像し得らるゝのである。

(十九)

是に於て我國の學界に於て歐米と同じく「家庭經濟學」Home Economics を獨立したる學問として樹立し、此の學問を研究する獨立の教育機關を新設し、以て生活改善の指導者又は先覺者となる可きものを養成する事が必要なのである。斯くの如くにして始めて徹底的に我國民生活の向上を期待する事が出來る。而して之れ以外の所謂改善に關するものは皆枝葉に屬する小問題と認むるのである。

然らば家庭經濟學の內容は如何なるものであるか。米國家庭經濟學會に於て特別委員を選んで此の問題に就いて精細なる調査を行はしめ、其の案が千九百十一年十二月にワシントンで開かれた同學會第四回總會で採用されたのであるが、其定義として擧げて居るものは次の如きものである。「家庭經濟學とは家庭に於ける家族或は其他の團體によりて行はるゝ食衣住の選擇準備及び使用に關して其の經濟的、衛生的、及び審美的方面を研究する特別なる一學科なり」

而して研究事項の內容の要項を擧ぐれば次の如くである。

第一編　食物論

第一章　食物選擇に關する研究

一、理論　二、分類　三、成分及び性質
四、滋養價値　五、生產及び製造　六、不正食品
七、食物價格

第二章　食物準備に關する研究
一、食物調理　二、貯藏　三、取扱法

第三章　食物使用に關する研究
一、理論　二、飲食論　三、給食法
四、食物の社會的關係　五、食物の標準

第二編　被服論

第一章　被服の選擇に關する研究
一、理論　二、分類　三、成分及び性質
四、不正品　五、生產及製造　六、被服價格

第二章　被服調製に關する研究
一、衣服調製　二、修繕修理　三、清潔及洗濯
四、取扱及貯藏

第三章　衣服の使用に關する研究
一、衣服着用に關する事　二、衣服の處理
三、社會的關係　四、社會學的考察　五、衣服の標準

第三編　住居論

第一章　住居の選擇に關する研究
一、分類　二、不正品　三、價格

第二章　住居準備に關する研究
一、設計　二、構成　三、採光　四、室內溫度の調節法
五、換氣　六、給水　七、排水及下水　八、設備
九、修繕　十、手入れ

第三章　住居使用に關する研究
一、理論　二、住居論　三、家屋問題　四、社會關係
五、家屋の標準

第四編　經營に關する研究

第一章　家庭の物質的基礎
一、理論　二、收入（財原及收入分類）　三、勤勞
四、家庭管理

第二章　社會的契約
一、理論　二、法律及政治的考察　三、經濟的社會的及
倫理的考察

第三章　活動及び機能に關する研究
一、理論　二、家族生活　三、團體生活　四、社會的活
動

第四章　目的及び結果に關する研究
一、理論　二、肉體的幸福　三、精神的訓育及び發達

四、愛情及び趣味の發達　五、靈化
六、社會的道德的及び精神的發達

（二十）

以上は家庭經濟學の內容の大體であるが是れを研究するに必要なる科學は誠に多いのである。先づ經濟學、化學、社會學、生物學、物理學、生理學、衞生學、歷史、數學、法學、人類學等の諸學科に於て生活に關係したる方面の研究の結果をかりて以て生活に必要なる事項を研究せなければならぬのである。之



を圖解すれば略上の如く表す事が出來る。勿論各學科を示す圓形の形狀及び其大小は何等學科の輕重を意味するもので無く、單に家庭經濟學の構成關係を表示するに過ぎないのである。

要するに現代我國文化の基本的缺陷は生活の科學的研究が不備である事である。此の缺陷を補はんが爲めには先づ國民一般に生活改善の必要を自覺せしめ、進んで新時代の生活に不適當なる諸種の習慣慣例を打破し更に進んで家庭經濟學を獨立せる一學科として樹立し其の研究機關を備へて生活改善の指導者を教育し、以て一般社會の生活向上を謀る可き事が必要である。其の教育機關として今日歐米で重きをなして居るものは獨立したる家庭經濟科大學及び大學程度の家庭經濟學通信教授等である。我國の教育家及び社會の先覺者は是等の施設に注意する處あつて基本的に我國文化の缺陷を補ひ以て國運の伸張と國民の幸福を增進し、戰後の國際關係に於て勝を占め得るものとする事こそ刻下の急務と信じ、之が爲めに努力す可きである。（九、二、二八）

藝術についての一考察

有島武郎

自然の現象、又は自然現象の機械的再現は藝術とは名けられ得ない。物が或は事が藝術となり得る爲めには個性を不可避的に必要とする。即ち藝術は個性の表現である。表象を媒介としての個性の表現である。

個性は自己を云ひ現はさうとする強い衝動を持つてゐる。この衝動を伴はないものは本然的には個性ではない。而して表象とは個性が自分自身を云ひ現はさうとする煩悶そのものである。人は私の云ふ煩悶といふ言葉を手段といふ言葉で書き換へるのが正當だと主張するかも知れない。然し私の經驗はさう書き換へる事を許さない。私達の個性はいはゞ啞に近い。個性はまだ正しい言語や表情を持つてはゐない。それが自己を表現する時には只吃るばかりだ。啞者の語るのを見てゐると、彼れの口より發せられるものは聲と云ふよりも音である。音といふよりも煩悶である。それと同じい樣子が個性の表現にも行はれるのだ。個性はまだ／＼眞にそれ自身を明確に表現する道を知らない。自然は個性に取つて自由自在に取扱はれるには頑固な意地惡な素材である。個性はその前に立つてそれを取扱ひあぐねてゐる。その姿は悲痛とさへ云へる。

私達の生活を見て見るがいゝ。それが社會的生活であれ、國家的生活であれ、家族的生活であれ、個人的生活であれ、そこに現れ出ようとする個性がいかにゆがめられ、虐げられ、滅裂にされてゐる事ぞ。あるべき生活の相は何所にも見出されてはゐない。右に左に前に後ろに進退動搖して安定を求めるに汲々とはしてゐるが、遂に個性を滿足すべき安定は求め出されてゐない。安定の三支點即ち重點力點支點は常に過程の中にのみおかれてゐて、その終局（Finality）には達してゐない。

又都會の街上を歩いて見るがいゝ。如何に完成された建築物にも、如何に整頓した街路にも、人は自然の中に見出す事の出來ないやうな煩悶と焦燥とを見出すだらう。殊にゴシック式の建築の如きは個性の煩悶そのものを見るやうだ。例へばアミヤ

ン寺院の前に立つて見るがいゝ。それは建築美術の完璧と稱へられてゐるものゝ一つであるけれども、この偉大な建造物を仰ぎ見て、人が受ける感じは瞬時も動きやまぬ息苦しい動揺感ではないか。安定性を最も完全に近く成就したと云はれるクラシツク建造物の正面に對しても、見る人の感覺にある敏捷さがあるならば、それから誤たず受入れられるものは、强いて自らを諦めたやうな沈痛な憂鬱ではないか。眞直な道、曲りくねつた道、廣い道、狹い道、必要以上に淸潔な道、惨ましいまでに汚い道——私達がその上を歩きまはるのは煩悶から煩悶を歩き廻つてゐるのに等しい。而して生活とは一つの形式としての表象であるのは勿論の事だ。こんな外部的な表象の末梢にまで私達が個性表現の煩悶を見得るとすれば、私達の對人關係に於て同じ現象がもつと緊迫した姿で現れ出るのはいふまでもない。一人の理想主義者がユートピヤを描いて、貧乏のない、苦勞のない、矛盾のない未來生活を夢想する時、私達は何とはない反感をすら感ずる程に、私達とこの煩悶とは離れ難いものとなつてゐる。人生のあらゆる悲劇的な事件を憎み、恐れ、憤る間にも、そこに私達は一種の崇高な情緒を感じ、それなしには人生の意義が失はれるやうにさへ思ふは一見不思議といはなければならない。私達の一面は一時も早く悲慘とか哀愁とかいふ惡境地から遁れ出たいと焦る。而かもさう焦りながらもかゝる境地から全く救出された地上生活を想定すると、何んだか持つ筈のものを奪ひ去られたやうな物足らなさを感ずる。悲劇のない生活が一體成り立つだらうかとさへ思ふ。而して地上生活の悲劇で既に十分苦しみ拔いてゐながら、私達は舞臺の上に悲劇を要求し、詩歌の中に哀愁を探り求め、音樂の底に悲痛を汲み取らんとあせり勉める。

何故だ。それは表象が、即ち人間活動の凡ての現はれが、個性表現の煩悶そのものに外ならないからではないか。個性は永久に自らを表現せんが爲めに煩悶する。それは善かれ惡かれ、個性に取つては一體不可離の事實だ。この事實が消滅するのは取りもなほさず個性そのものゝ却を滅意味する。人世が矛盾し、撞着し、悲劇的であつても、私達がそれを厭ひつゝどうしても拒み得ないのは、拒みつゝもそこから退き得ないのは、個性そのものゝ存在を固守してゐるからだ。個性の不可避的な衝動たる表現の完成に驀進しつゝあるからだ。更らに言葉を換へて云へば、個性は意識的にせよ無意識的にせよ、絶えず創作にいそしむ藝術家であるからだ。

凡ての人は廣い意味に於て凡て藝術家だ。人が外來の壓迫から自由にされ、任意に行爲する瞬間には、その時その人は藝術

家だ。シーザーはかくして羅馬帝國を通じて彼れの個性を表現しようとした。サン・シモンはかくして新基督教主義を通じて彼れの個性を表現しようとした。茶人は點茶によつて、一人の勞働者はその箱庭によつて、その個性を表現しようとする。その心持ちは共に等しい。而してその表象の不完全な事も、從つてそこに現はれる煩悶の類はれるのも共に等しい。

かくして凡ての人は己れの個性の表現の爲めに煩悶する。然しながらその表現の方法及び程度には自ら二つの道が生ずる。一方の人は粗笨であるか大膽である。一方の人は精緻であるか細心である。一方の人は表現に用る素材の選擇に關して割合に無關心であり、且つその方法がおほまかである。一方の人は神經質に素材を選び、如何に小さな領域に於てゞあれ能ふだけ完全に個性を表現しようと企てる。政治家とか事業家とか工藝美術家とか云はれる人々は前者の典型に屬する。その人達も私はこれを廣義の藝術家と云はう。後者は世間が呼びならしてゐる藝術家、卽ち私の云ふ狹義の藝術家である。彼れは個性を能ふだけゆがめる事なしに表現しようとする衝動の强さの爲めに、極めて素材の選擇に敏感である。他人の感覺に訴へる場合にも能ふかぎり纖細な純粹な機能を有する機關を選ぶ。卽ち觸覺や味覺に訴へるよりも聽覺視覺を選ぶ。同じ文字、同じ音調を用ひてもそこに彼れ自身の意味を賦與せねば已まない。藝術家に最も特殊なスタイルはそこから生れて、その人の個性と不離な關係に入る。

又ある一方の人は個性の全體(Entity)には多くの顧慮を持たずに、個性の分解にもかゝはらずそれを表現して滿足しようとする。廣い意味の發明家學者といふやうな人々はこの階級に屬する。然るに他方の人は個性の分裂に對しては極度に神經質でその人は個性の統合なしには表現は不可能だとさへ感ずる。從つて表現の對照となるものは直接經驗として取扱はれた生活である。この態度を取るものが私のいふ狹義に於ける藝術家である。

廣義と狹義との藝術生活の間には、實際には峻別さるべき境界線はない。例へば工藝美術が藝術として取扱るべきか否かといふやうな問題は殆ど意味を成さぬ。縱令それが工藝美術品と名けらるべきものであれ、その製作者の態度が純粹な個性表現を求めてゐれば、實用的な一面があるにせよ、狹義の藝術品として取扱ふ事が出來る。その反對は又反對である。

かく考へて見ると、外界からの壓迫によつて働くのでない、内部から働き出される人間生活の諸相の凡ては藝術であつて、それは畢竟個性表現の表象であると見るのは不正當な事ではな

く、より純粋な藝術とは、即ち私達が普通呼び慣はしてゐる藝術とは、

一、個性が全體として表現を求める事。

二、個性が能ふだけ純粋な表現を求める事。

三、從つて個性表現の素材と、訴へる機關とを實用味から離れた纖細なものに求める事。

四、個性表現の闊さと深さとを進んで純經驗に制限するが故に、表現せんとする煩悶即ち表象は醇化され、他と混同する事の出來ぬスタイルを構出する事。

等の特質と帶びるに至るのも又看易い事だといはねばならぬ。

故に個性は自己の表現を完全ならしめんとする內部よりの要求から、個性の解放と自由とに憧れる。個性を外部的の壓迫から切り放ち、內部の要求にのみ應じて表現すべき圈境を求める。これが私達の有する根柢的な藝術衝動の相である。この衝動即ち煩悶が如何なる生活の上にも誤たず發見されるのに私達は注意せねばならぬ。それが政治組織の上にであれ、經濟組織の上にであれ、公的生活の上にであれ、私的生活の上にであれ、現はれ出ない一瞬時もない。生活相の凡ては純粋藝術への一路を目指して煩悶してゐる。

世の所謂藝術の爲めに生きてゐる私達は、この煩悶に對して最も敏感な人々であらねばならぬ。今のやうに實際生活と藝術生活とが分離して、實際生活なるものが動もすれば藝術生活を壓倒し無視しようとする時代にあつて、藝術生活に捧誓するものゝ取るべき態度は自ら明かであるだらう。彼等は思想なるものと實行なるものゝ間に嚴密な區別をおく。而して百の思想も一の實行に如かずと云ふ。私達は思想即實行の確信の爲めに戰はねばならぬ。カーライルは思想を"Crying deed"といつた。一つの思想が發表される。彼等はあれは一箇の思想として面白いが要するに閑人の閑問題であつて、生活のたしにはならないと云ふ。私達は一箇の思想は即ち生活だといふ事を主張しなければならない。而してそれを實證せねばならない。私は思想家と呼ばれ、自らも思想家を以て任ずる人が、短氣を起し、實際運動と稱するものに沒頭するのを見る時に、その自覺の不備を思ひやらずにはゐられない。主張すべき一つの思想、それは嚴然たる實際運動ではないか。この確信が遂行せられ、而して受取られない生活は、個性表現の道程に於て一歩を退いた生活である。一つの藝術的作品が公けにされる。而してそれが個性表現の煩悶によつて裏書きされてゐなかつたならば、それは藝術的と云ふ事は出來ぬ。一つの藝術品は何時でも人の生活內容を一歩なりとも藝術的生活に近けて行くものでなければなら

ない。

世の所謂藝術は――その不完全な形に於てすらも――個性解放への、即ち個性の自由なる表現への觸角として役立つべきだ。藝術と實用的生活との差違が撥無され、衣食が藝術であり、藝術が衣食である最終點への觸角として役立つべきだ。

個性の自由なる表現へ、完全なる表象へ、正しく美しきスタイルへ私達の生活を導かしめよ。

一九二〇、三月十四日

歐洲に於ける改造問題

エム、エー、エル、エル、ビー　米田實

一

『歐洲に於ける改造問題』、世にも斯くの如く廣大で且つ內容の複雜な難問題が、またと有らう乎、一篇の論文、之を紹介して遺憾無からんとする如きは、人力の能くす可き所では無く、就中鈍才予の如きが到底企て及ぶ可き所とは思はぬのである、唯だ頼む所は世上聰慧敏達の君子、洲沙夏螢の數よりも多き一事である、此等の諸君子が煙を見て火の在る所を知り、霜に望んで堅氷を豫想するの才力を有せらるゝに於ては、簡短な丈けそれ丈粗末となる憂ひあり、往々片言半語で仕末を付けねばならぬ予の論文も、幾分か歐洲形勢の紹介上、役に立つ場合があるかも知れぬ、予は斯くの如き詫び言を以て世人の寛恕を請ひ置き、其試みんとする紹介兼論議に移つて見度いと思ふ。

歐洲の春と黎明とが來た、五年の大戰爭を秋冬とすれば、平和回復の今日は春であり、前者を暗夜とすれば後者は黎明である、此春たり黎明たる歐洲に於て吾人は今何物を見るのである乎、國際關係研究を專門とする予の如き讀書生の眼に映ずる第一のものは、邦家領域の變更である、然かも之は大分形付いたと言つて善い、獨墺領地の分配、波蘭、チエックスロワキア復興は略ぼ昨年を以て成り、土耳其の處分、アドリアチック問題及び

之に伴ふユーゴスラウヰアの領域、アルバニアの運命、羅馬尼及ベサラビア關係問題等が今年に殘されて居るのみである、獨逸領であつたアルサスローレンの如きは早くも昨年の選擧で佛國代議院に二十四名の議員を選出して今春大統領デシヤネル氏選擧にも參加したと言ふ程である、從つて予は差當り本論文では領域問題には觸れまいと思ふ、然らば此改變せられた諸國領域に於て今や如何なる改造問題が起つて如何に政治家、官吏、學者、一般民衆を動かして居るのである乎。

何と言つても大戰爭は歐洲の社會を根柢から震撼し、その形姿をも實質をも變動せしめたものである、先づ社會の土臺となつて居る人口はと言ふと、佛蘭西では戰死百四十萬、負傷者三百萬を出し、獨逸では戰死百六十萬、負傷三百七十萬を出し、英國では戰死六十萬、負傷二百萬を出し、歐洲全部では一千萬の死人、二千萬の負傷者、不具者を造つたのである、此働き盛りの男子數の減少、不具者の增加は政治上、經濟上に無影響たることが出來ぬと同時に此間に擡頭した婦人の政治的經濟的勢力は決して輕視することを許さ無いのである、更らに經濟生活はドウかと言ふと、英國は戰費として八百八十億圓、佛國は五百億圓獨逸は八百億圓を費し、各交戰國の費用四千億圓、紙幣濫發せられて物價騰貴し、生活費暴騰したこと世上の知る如くである、國家は如何に之を處す可きである乎、又た戰時中に於組織狀態一變し今日は平和となつても、過去六年間に敎へられた經驗は之を前日の狀態に復舊せしむ可きでは無い、人類は戰時中舊需要を捨てゝ或は舊需要をその儘にして新需要を造り出した、如何に之を充足す可きである乎、各種需要供給の關係も混亂し、不熟練勞働者（諸國勞働組合が排斥して居たもの）は戰爭の名の下に勞働組合規定を蹂躙して、熟練勞働者に代り、婦人も現はれ、新事業、新物具が新しい方面から攻め寄せて居る、商路の具合、爲替、外國投資及信用の形勢が一變し、又た租稅は過重となり、財政問題も複雜となつて居る、此等はドウしても新らしい改造振りを見無くつては落着き得ない所である、然かも此等より一層考へねばならぬことは戰爭が人心に起した變動であらう、蓋し今回の大戰こそは戰前人類社會の罪惡、陰謀並びに種々な缺陷を遺憾無き迄に暴露した展覽場であり、又た或る意味に於て其總計算であつた、歐洲人民は之を見て戰慄した、彼等は之に依つて從來民主政治だと考へて居たものが眞に民主的のものでは無く、國際外交が如何に秘密の裡に隱れて國民の眞利益を裏切つて居る乎、資本家の横暴なる慾望が如何に戰爭を挑發した乎、彼等の信賴した立法部が如何に信賴に背いた乎を知つた、弱者たりし婦人、弱者たりし勞働者は戰爭

に依つて自己等の上に置かるゝ負擔も如何に重いかを知ると共に、自己等が必らずして無力で無いことを自覺した、是れやがてデモクラシー實現の叫びともなれば、又たプロレタリアト覺醒活動の聲ともなつた、而して政治家連も對獨戰勝の必要から「デモクラシーの爲めの戰ひ」と言ふやうな演説を廉賣し廻つたのであつた、是れも明かに民衆の政治的希望を煽揚して、今では舊式政治家自身の禍ひをなして居るものである、事玆に至ては如何でか政治制度、經濟制度、社會制度の一大革新なくして止むことが出來得やう、

玆に於て乎歐洲列國は上記の種々な事情に動かされて、改造途上の身分となつて居る、併し改造と言つても、それには種々の方面やら問題やらがある、國際政策及關係の改造もあれば、內國代議政體の改造もある、政府機關の改造もあれば、産業組織の改造もある、稅制、商業政策、金融政策、原料品問題、主要工業保護問題もあり、消費者保護策卽ち生活費問題もある、教育組織の改造もある、此等の內の一のみが改造問題のすべてでは無いのである、又た國々に依つては諸種の改造問題の輕重、その孰れを先きとし、其孰れを後とする乎の觀念も異つて居る、卽ち上記の諸問題は孰れの歐洲諸國にも共通な問題には違ひ無いけれども、諸國の方の見方は其境遇の異るに從つて自ら違ふ所無きを得ぬのである、例を擧ぐれは、今日佛國人の特殊的に注意を集中しつゝある問題は、戰爭の爲めに荒廢した北部地方(農園の荒廢約八千方哩、家屋破壞數約五十萬、市驛破壞數二千五百五十、鐵道其の他産業損害無數)の回復及び改造を如何にして行ふかと言ふ問題が第一位に居るのである。是れは最も彼等の頭腦を占領して居る、それから新たに獲得したアルサス、ローレン(鉄産地)及びサアル(石炭産地)其の他殖民地を如何に改造し之れと共に佛國の原料品政策及び諸工業策を如何に建直し國勢を增進す可き乎の問題、人口增殖少き同國が、戰爭の爲め殊更らに人口上の打擊を受けたに對し、如何に將來人口策を決する乎の問題、戰後財政難より生ぜる外資輸入及び財政改造問題等である、是れ同國の現狀を知るものゝドウしても怪むを得無い所である、之れに反して戰敗國たる獨逸としては先づ如何にして共和政として國土を造り直し、ドウニカ國際的地位を失ふまいかに腐心せぬ譯には行かぬ、又た世界の嫌厭を買つたのを如何にしてか消散せしめ、又た全く失つた世界の市場を取り還へさねばならぬ、アルサス、ローレン及びサアルを失つて鐵産地及石炭産地を奪はれたので、一は此原料品問題を如何にか解決せねばならぬ、又た新經濟狀態に順應して國內の工業組織を改造せねばならぬ、船舶を喪失したことに就ても、

外國貿易策の改造が必要となつた、償金支拂、外國爲替相場、其他財政問題もこの「改造」に觸れ無い問題は無いやうに見ゆる、此等は特に獨逸が腐心して居る所だが、其教育改造に苦慮して居ることも注目を値ひする、若しそれ英吉利に至つては、戰爭で苦しみ、國債も増加したには違い無いが、獨逸と比すれば雲泥の差があり、佛國よりも遙かに順境に立つので、その改造問題も今の相應な生活を更らに向上し、幸福な生涯に入らんとする努力と見て差支無いと思はれる、其戰爭の結果澤山獲得した原料産地たる殖民地を如何に處分し利用すべきである乎、如何に本國と屬領との政治的經濟的關係を改造す可きである乎、産業上、商業上隨分古い方法を採用して居た時代後れ振りを改めて世上に活躍するの方策を講ず可きである乎、其他科學的研究及調査策、戰時中喪失せる市場の回復策、森林政策、教育政策、等大に其努力を見つゝある所である、而して以上三國が如何に改造問題に熱心である乎は英國が戰時中（即ち一九一七年八月）改造省なる一省を設け、獨逸も一箇月後頃から（一九一七年十月）改造問題の爲め經濟省を設け佛國も戰後經濟問題の爲めに一九一六年五月委員會を、一九一七年九月一省を設け一九一七年十月大藏大臣を大將として各省委員から成る改造問題專門機關を設けたことに依つて、知らるゝ次第である。

併し予は勿論玆にその全部の問題を網羅する譯には行かぬ從つて言議を予の頭に浮ぶ主要なるもので然かも一國のみでなく一般的な性質のものに止むるも、寛量なる讀者は必らずや其の止むを得無い所たるを觀取するに吝ならぬであらう。

二

予が先づ江湖の注意を求めねばならぬ改造問題は國際關係の改造である。

大戰五年の慘禍の經驗が世人に與へた教訓は、將來斯くの如き人類の禍災が再起せぬ樣に、常久的平和が期せらるゝやうに、各國民が國家てふ障壁にのみ拿へられて「外人と敵とを同視した」昔日の夢を十分に覺醒せしむるやうに國際關係の變改を圖らねばならぬと言ふことであつた、此改造運動が發現した第一のものは國際聯盟の組織並びに之を鞏固にする運動であり第二のものは各國外交の遣り振り及び其機關を一新する運動であり、第三のものは國際的經濟、社會關係を改造する運動である。

昨年六月二十八日調印の對獨講和條約で成立した國際聯盟に就ては、種々世上の論議を經て居ることであるから、予は玆に之を論議する考が無い、唯だ如何にしても拒否することが出來無いのは、幾多の缺陷があるにも係らず、其將來の平和に貢獻

する絶大なるものがあることである、成る程同聯盟規約第二十條で「本規約の條項と兩立せさる聯盟國相互間の義務又は協商が廢棄せらるゝこと」を說き乍ら、その次きの第二十一條で、「平和維持を目的とするモンロー主義其他地方的協商が聯盟規約の爲めに何等の影響を受け無いと言ふ所謂「相殺」策を行つたが如き、第十三條で「聯盟國間に仲裁々判に附し得と認むる紛爭」の仲裁々裁判附托を說き、狹隘な法律論者の爲めに逃路を辯護する機會を造つたが如き、國際軍隊を造り得無かつた如き、重大なる缺陷には相違無いのである、併し乍ら大體から言ふと、法律的性質の國際紛議は之を仲裁々判に附し、然らざる性質の國際紛議は之を調停機關に附し、一切の國際紛議の平和的解決方法を與へ、更らに之れが實行を期する爲めに經濟的、武力的制裁方法を設けたと言ふ中心的大事實に至つては、誰か推賞を値ひせずと考ふるものがあらう、而して吾人が忘れてならぬことは、今日の國際聯盟は完成品でなくて未成品であるてふ一點である、今猶ほ殘留して居る英國統一黨中の頑冥派（モーニング、ポースト等の議論之を代表す）、米國内のボトラ、リード等孤立論者、佛國の保守黨の極めて狹隘なナショナリズムの爲め、「折角進みかけては退く」と言ふ樣のヘマを演じたことは事實としても、又た他方に於ける英佛瑞以下諸國進歩主義者、國際平和論者の勢力や決して微弱で無く、然かも彼等が着々「國際聯盟の改造と鞏固策」の爲め大準備をなしつゝありと言ふ顯著な現象をも忘れてはならぬのである。

但し國際聯盟の事は、餘り善く世間に知られて居るから、略して置く、予がドウしても指摘せざるを得無いのは、改造運動が各國外交の刷新及其機關の改造、及び國際的經濟社會關係の改造に向つて注がれつゝあること是れである。

蓋し國際聯盟てふ機關が出來て、如何に世界平和を確保し増進せんとしても、之を利用せねばならぬ所の各國の外交が舊式であつては、佛造つて魂を入れぬ樣なものである、然らば則ち外交改造運動は如何なる方向を執つて居る乎と云ふに、第一は公開外交であり、第二に外交機關の改善である、公開外交（若くは秘密外交排斥）の聲は一九一〇年コツペンハーゲン開催萬國社會黨大會が軍國主義反對を決議するに當り呼號して居た位ゐで大戰爭の爲めに始つたものでは無いが、大戰の勃發と之に伴ふ外交裏面暴露とは、人民をして秘密外交の惡弊と覺らしむるに與つて力があつた、ソコデ一九一五年一月コツペンハーゲン開催の和蘭、瑞典、那威、丁抹四國社會黨會議では「議會をして外交を監督せしむると共に一切秘密外交を排斥す可きこと」を主張し、一九一五年二月倫敦開催英佛露白即ち聯合國社會

では「戰後勞働者が協力して國際的運動團の事に當り以て秘密外交廢止を期す可きこと」を主張した、又た獨墺も同樣で一九一五年四月維也納開催獨墺社會黨大會では秘密外交を排斥し「條約の民衆的支配」を主張し、一九一七年五月獨逸多數派社會黨は和蘭社會黨に對する回答文で「條約の民衆的支配」を主張したのであつた、社會黨と言ふと、人民の一小部分の樣であるが、人民の他の部分は戰時と言ふ事情に遮られて愛國心から政府の批評を遠慮して居た爲めに、無遠慮な社會黨が多數人民を含む勞働階級及び理想家の代辯となつたものに外ならないのである、否な議會政治家間には秘密外交排斥の隨分强い、英佛の關係がグレー外相の手で漸次に變化し同盟的狀態に近づいて居たが、英國人民は之を知らなかつたと言ふので、議會の問題となつたことは世人の知る所である、此要求は例の國際聯盟規約にも反映し、同規約は全篇を通して一切を發表することに重きを置き、輿論に問ふことに重きを置いて居るのは、三尺の童子も解知する所である、否な英、佛、獨、諸議會の形勢も「民論の外交支配」を重んじ今後軍人分子、資本家分子が其利益の爲め外交を動かす機會を絕滅せんと力めて居ることも、昭々瞭々たる所である、その次きは外交機關を構成する人物の改善、機關其者の組織の改善である、たとへば英國外務省の如き、門閥高き貴族、富豪に獨占せられ、「外務大臣に個人的紹介狀が得られる人でなければ同省には入られぬ」と言ふ有樣で無い乎、其他の國々でも外務省は一般人民から離隔せらた官僚（ビユロクラツト）の住み家では無い乎、此事實が民意を重んぜぬ外交振りを見、陰謀を見、邦家の禍を醸成した惡例は、少く無い所である、是れ實に此外交機關を改造し民衆に近づかしめねばならぬと言ふことが、商業分子を注入せねばならぬと言ふ主張と相俟つて、英佛獨以下改造運動の主要なる事業となつて居る所以である。

若しそれ第三の國際的經濟、社會關係の改造に至つては、恐らくは歐洲人の改造運動中最も廣汎で、又た將來度々我國民の注意を喚起する事件を發生するものではあるまいかと思はれる、先づ商工業方面に於ける國際的協力が無用な競爭、嫉視に比して如何に相互的有利である乎は今回歐洲戰爭が與へた有用な教訓の一であつた、卽ち聯合國は對獨戰爭の必要上、すべての勢力爭ひやら嫉妬心を壓抑して、各自をして地理的に資源的に、最も適用して居る任務に當らしめたのであつた。其結果各國それ〴〵其長所を發揮して生産其他の事業に當り、爲めに軍需品、食物、其他物資の供給及運輸十分で、遂に聯合國は首尾善く獨逸を屈服せしむるを得たのであつた、左れば戰後も列國は此有用なる教訓を本とし、各國をして其長所を發揮せしめ有無相通

する方相互の利益であつて、徒らに國境てふ狹い觀念に拿へられて、自國の不長所のものを存置する爲に他の長所發揮を阻害することは、人類に執りても馬鹿々々しい愚擧としか、進歩的な改造論の人々の眼には映ぜ無かつたのである、即ち此等の人々は商工上、戰爭中行つて成功した所のものを戰後の平和社會にも行ひ度いと考へたのである、殊に是れは將來の戰爭若くは國際軋轢を防止し度いと言ふ新希望から見ても、最良策としか思はれ無かつた、蓋し獨露關税の難問題が一九一四年大戰の一原因に數へられて居る如く、一國と他國の資本家間の軋轢が、國際平和攪亂の原因となるとは少く無かつた、競爭中の資本家が自國の政府を動かし經濟的帝國主義に奔らしめ、幾多の戰爭を行はしめた實例も歴史上散見する所である、切言すれば經濟生活の十分なる國際化と言ふとは、歐洲に於ける眞成の改造論者の稱道して怠らざる所である、殊に最近飛行機運送が始まつて國境を無意義のものとする傾向を生じ、税關を時代後れにし始めたが如き、立法部に於ける地方的代表主義よりも職業的代表主義が善いと言ふ思想が歐洲諸國に勢ひを得て來た爲め、國土を異にする同職業者間にも同類意識を强烈にした如き現象は、大に此國際化運動に光明を與へて居るのである。

尤も此種の進歩的改造運動に對しては、反動的改造論者あることをも忘れてはならない、即ち一は戰爭中封鎖やら、船舶不足やらで國際貿易が自由でなかつた或時期の教訓に依つて『自ら不得意なるに係らず主要工業丈けは是非自國内で發達せしめねばならぬ』と考へ、之が爲めにも保護主義を稱道して憚ら無いもの是れである、他は各國共に莫大なる戰費を使ひ、多大なる負債を有する關係から、國家財政々策上關税を高め、其結果經濟生活の國際化を邪魔せんとするもの是れである、左れば右の改造運動の前途には難關頗る多きことを豫期して居らねばならぬのである。

併し乍ら大局から見ると、此經濟生活の國際化は、成効に向つて進むの運命にあるに違ひ無い、殊に最近改造論者の意氣を高めたものは、少し方面が違ふ國際勞働會議である、一國丈けでは如何に勞働時間制限、産前産後婦人保護、小兒勞働制限其他進歩的改革を企てゝも、爲めに此等の制限無き他國との競爭で敗北しては、角を矯め牛を殺す姿となる、ソコデ各國協同の勞働改善策として同會議を開催したが、右會議の成功は確かに上記改造論者に好論據を提供したものと言はねばならぬ、是れ勞働問題の國際化から生ずる利益を實證したものであるからである、否な々々、歐洲では國際衛生會議、國際教育會議を起し、國際聯盟中に國際衛生委員會、國際教育委員會を設けねば

ぬことを主張する聲が起つて居る、コハ將來國際聯盟の發達と共に、重大となり行くに違ひ無い、要するに予は歐洲に於ける改造問題中、國際關係の改造てふことが外形に於て花々しきのみならず、意議頗る重大なるものたるを信じて疑はざる一人である、

三

國際關係の改造に次いで現はれ來る問題は國內政治の改造である。目下歐洲の政治改造問題は如何なる狀勢を示して居る乎、

予は之を思ふと共に、餘りに愧かしき我國の現狀を悲まぬ譯には行かぬ、目下我が政界の改造問題は普通選擧制度の確立である、それさへ多數黨の俗論に累せられ、議會解散の厄をも見たでは無い乎、然かも翻つて歐洲を望めば、普通選擧の採用の如きは、夙に實現せられ終つて、過去の問題と消えて居るでは無い乎、

先づ佛蘭西は一八七五年（明治八年）の法律で二十一歳以上の男子に選擧權を與へて居る、唯だ其地方に於ける六箇月の居住と其名を登籍して貰くとを要求して居る位である、獨逸は帝國時代に於ても二十五歳以上の男子に選擧權を與へて居たが、

一昨年革命後は滿二十歳に達した獨逸人に、其男たると女たる
を問はず選擧權を附與して居る、白耳義では一八九三年の法律
で、西班牙は一九〇七年の法律で各々二十五歳以上の男兒に同
權を附與し那威では二十五歳以上の男女に、瑞典では二十四歳
以上、和蘭では二十三歳以上の男（或程度に於て女にも）に同
權を附與して居る、比較的に西歐文明國中で後れて居たと言は
れて居た伊太利も一九一二年の法律で、文字を解する二十一歳
以上の男子、文字を解せざるも三十歳に達せる男子に（勿論何
等財產上の制限無く）選擧權を附與し有權者數を三百二十四萬
から八百六十三萬に激增せしめたことは世人が猶記憶する所で
あらう、若しそれ憲政の母國たる英吉利では一昨年二月六日裁
帝裁可人民代表法律で「六箇月間選擧區內の家居に引續き居住
せる二十一才以上の男子」「自ら家を構へ居るか若くは自身或は
其夫が年收價格五磅の不動產を借し之を占め居る三十歳以上の
女子」に選擧權を與へ、然かも男子の分の家居と言ふのは獨立
家屋たることを要せず、その性質價格をも問はず、たと
テル內の數室を借受けて居ても善いと言ふのであるから、其普
通選擧制たるや疑ひを容れ無い所である、尤も之以前でも英國
の選擧制は一八三二年の改革法で下級中流社會に、一八六七年
の改革法で勞働階級に、一八八四年の改革法で農業勞働者に投

票權を附與し、幾分の財産上、生活上の資格はあり乍らも、殆んど普通選擧に近かつたことは、記憶せねばならぬ所である、從つて歐洲の政治改造問題は最早や普通選擧では無いのである。

然らば何が問題であるかと言ふに、選擧制改造から言へば比例選擧と婦人參政權とが問題の主要なものであり、根本政治改造から言へば議會政治の不信用を含むと思はるゝ瑞西流の「直接立法」策採用、社會主義者、勞働派の直接行動策、露國過激派のソウヰエット政治問題などを數へ來らねばならぬであらう。

先づ比例選擧から説かう、是れは決して新らしい事柄では無いが戰爭の終末頃から從來よりも矢釜しくなつて居ることは、吾人が見逃し得無い現象である、是れ何故である乎と言ふと、よしや普通選擧制が布かれて成年以上の男子が大抵選擧に參加するとすれば、投票丈けは公平であるかも知れぬが、當選決定が唯だ單純の多數決では到底正確に民論の趨向を代表するとは言はれ無い、例へば此處に二千人の投票あり、甲候補は其一千〇一票を得、乙候補は九百九十九票を得、甲候補のみ當選するとすれば九百九十九人の意見は全然無代表に終らねばならぬ。斯くの如き當選者が聚まつて議會を造つて見ても、そは決して正確に民論の割合を反映するとは言はれぬのである、所で玆に大選擧區とし、更らに比例選擧制を執るときは、此弊害は除去せられることが出來るのである、たとへば玆に六萬の有權者を含み六人の代議士を選出する選擧區があり、比例選擧を採用するとすれば、大體に於て三萬票を得た甲黨は三人、二萬票を以た乙黨は二人、一萬票を得た丙黨は一人宛代議士を選出することが出來て、孰れの人民の部分も無代表には終らぬのである、而して最近斯くの如き改造を試みたものは佛蘭西及獨逸である。

佛蘭西は昨年七月を以て三十四年前制定の小選擧制を改めて大選擧區とし同時に比例選擧制を採用したのである、其改革の理由は、從來の制度では富豪に有利であり、又た地方的人物、地方的利益に拿はるゝ人物の選出を見ると言ふ點もあつたが少數代表が出來ぬと言ふのが重大な理由であつた、而して昨年一月の選擧は實に此新選擧法の下に行はれたものであつた、次きに獨逸はと言ふと、一昨年休戰後、社會黨の新政府は比例選擧法を採用し、之を昨年一月十九日の獨逸約法國民會議々員選擧に適用したのである、其結果各大選擧區に於て各政黨は其獲得した投票數の率に準じて適當の議員數を出すことが出來たのである、之が爲めに孰れの黨派も勢力相應に議員數を出し、就中其領袖株で落選すると言ふやうなことは無くなつたのである、

林では多數派社會黨首領シャイデマン氏と共に民主黨首領ノーマン氏が選出せられ、獨立社會黨領袖アイヒホン氏も當選し、其他例のスパルタカス派さへも出口を得て居たのである、而して此運動は漸く英國にも及んで居る、蓋しパルモア卿に言はすると一昨年十二月に於ける英蘭總選擧では聯合内閣派は五百五十六萬四千三百十八票を獲た丈けで四百二十八名の議員を選出したに關らず反對派は四百十三萬二千九百十二票を得て猶ほ八十一名しか得られ無かつた、之を投票に比例して考ふると聯合内閣派二百九十二名、反對派二百十七名とならねばならぬ所であつた、愛蘭の方ではシンフェン黨は四十九萬五千七百六十票を得て四十七名を選出し、統一黨及國民黨は五十一萬五千五百七十八票を得たに係らず二十一名しか選出し得なかつたが、之も正當にするとシンフェン黨は三十七名、統一黨及國民黨は三十九名を選出せねばならぬ所であつた、一九一八年選擧法制定當時にも既に比例選擧論は起つて居たが、下院で決せられたけれど、是れは方法問題（佛獨等の大陸式リスト、システムとアングロサクソンに人望あるヘーヤシステムの爭ひ）に迷ふて居ると言ふ事情もあつた、從つて今後英國に於ける選擧法改正は必らず此問題に在らねばならぬと、予は信じて疑はぬのである。

次ぎは婦人參政權採用若くは擴張である、我國では婦人參政權を夢想のやうに考へて居るが、歐洲では最早や問題では無い、丁抹、瑞典、那威夙に之を附與し、大戰爭が終末に近くと、充分に婦人の能力を了解した英國は一九〇八年選擧法で、制限的ではあるが三十歲以上の婦人に之に附與し六百萬の婦人は一年半前の總選擧に投票したのである、又獨逸共和國では同年末に婦人參政權を決定し、昨年一月の選擧には二十歲以上の婦人は男子と共に投票したのであつた、而して今日の問題は未だ同權を附與せ無い佛蘭西、伊太利以下諸國に於て同權を附與せしむることであり、又た制限的に附與して居る英國の如きに於ての制限を低め若くは撤廢することと是れである、然かもこは新聞紙を讀まるゝ諸賢の熟知せらるゝ所であらう、又た此外に實際運動として未だ微力ではあるが地方代表主義に代ゆるに職業代表主義を以てせんとする議會共者の徹底的改造論が一部理想家に說かれて居ることも、附言して置いて差支無からうと思ふ。

然らば此選擧制改造から一轉して、一層根本的である政治改造を見ると、誰も露國過激派のソウヰエット政治を想ひ起すであらうが、ソウヰエット政治其者の說明は大分諸方の雜誌に繰返へされて居るから玆に簡單に之を紹介する迄もあるまいと思ふ、その次ぎは前に記した矢張り議會政治の不信用を含むと思はるる瑞西流の直接立法策である、勿論之は革命運動などでは無い、

所謂「イニシエーチヴ及びレフエレンダム」であり、即ち人民の一部が直接に立法案を提議する組織、人民の投票で法律を制定する組織、議會の立法案をも之を人民の投票に附せしめ可否を決定するを得る組織である、之は瑞西では古くから行はれて居るが、近年米國やら、濠洲やらで盛んに擧ばれて居た、米國では一八九八年サウス、ダコタ州之を採用し、一九〇〇年ユータ州、一九〇二年オレゴン州之を採用し、爾後ネヴダ、モンタナ、オクラホマ、ミゾリー、ミシガン、アルカンサス、コロラド、カリフオルニヤア、アリゾナ以下諸州之を採用した、歐羅巴では割合に弘まらなかつたが、目下小さい邦國では此制度の採用を希望する聲がある、政治家に誤られて獨逸に味方した勃牙利などでも、廣く利用が出來るやうにして此制度を採用せんとの議論が、例の君府ロバート、カーレヂ出身少壯政客に稱へられて居るとの事である、若しそれ所謂社會主義者、勞働派の直接行動策に至ては、是れは單に政治改造運動と言ふ可きで無く、寧ろ經濟的社會的改造運動と見る可きものであるから、之を後項に徵せられんことを希望して置くのである。

四

目下の經濟的改造、社會的改造運動とは何である乎、之は今迄壓迫せられて居た勞働階級の覺醒から起つたものである、我國で「改造運動」と呼ばるゝものが、主として之を指して居ることは、江湖の熟知せらるゝ如くである。

勞働者の覺醒や當然と言はねばならぬ、蓋し歐洲大戰の兵員三千萬中の大多數即ち約八割は勞働者であつて、例を擧ぐると英本國の兵員五百五十萬中四百五十萬は勞働者であつた、英國の人口四千三百萬人の內、千五百萬人は勞働者で、其家族を合する時は三千五百萬人になるが、右勞働者千五百萬の內約三分一は出征した、佛蘭西では英國よりも一層勞働者の出征數が多く、殆んど二人中に一人と言ふ割合であつて、此外彈藥武器の製造、供給皆な此勞働者の力であつた、自己の國家に對する貢獻と實力とが如何に大なるかを知り、それにも係らず自己の經濟的社會的地位が慘憺極ることを知つたとき、彼等が一部知識階級の敎ゆる改造策に傾聽せざるを得無かつたのも、亦た何の不思議とす可きことがあらう。

然らば則ち其改造策は如何なる方面に向つて居る乎、と言ふに、種々である、或ものは穩和であり、或ものは過激である、或ものは賃銀增加、勞働時間短縮、其他待遇改造と言ふ幾多の小さい發達の集合に依つて生活の向上を圖るもあれば、勞働者の事業經營を主張して居るものもある、生產機關の公有を呼號

するかと思へば、此際直接行動の外無きを說くものもある、或は全然露國レニン、ツロツキイ流の資本家、中產階級打破の戰鬪やら、ソウヰエット制度に隨喜の淚を流して居るものもある、併し此問題は大分日本でも注意せられて居るから、予は國別にして大勢を檢して見度いと思ふ、無論比較的溫和な國から始めて比較的過激な國に及ぶ積りである。

先づ戰勝國の榮譽を擔つて居る、英佛兩國の形勢は如何。

英國から檢し始めんに、同國は戰後未曾有の勞働紛議に惱んで居る、昨年（一九一九年）の例を見ると、一月から九月迄に行はれた同盟罷業數は一千一百五十七に達し、其人員は二百四十八萬二千で、之が爲めに失はれた日數は二千六百七十七萬九千日に達して居る、コンナ經驗は新記錄（レコード）だと言はねばならぬ、併し乍ら此等が要求した條件を見ると、多數は賃銀增加、勞働時間短縮、及び待遇改善である、唯だ同じ賃銀增加と言つても、三割增給とか、二割增給とか言ふ許りで無く生活を十分にする程度の最低賃銀制を要求して居る點は、最も注意せねばならぬ所であらう、彼等の要求せる最低賃銀と言ふのは、男女をして文明社會に於て人間として生活するを得せしむる程度を下ら無い**最低賃銀の事である、彼等の言ふ所に依ると、男子ならば、**結婚が出來て、相應の家屋に住居し、三名、五名の子供を造つて、一家族を衛生的に發達せしむるは勿論、多少娛樂も[illegible]不時の事件にも準備し得る丈けの賃銀を、最低限度として貰はねばならぬと主張するのである、又た女子の場合はせめて自身を信用ある周圍の裡に置きて愧かしく無く且つ健康に支ゆるは勿論、娛樂及び不時事件準備が出來る丈けの最低賃銀を要求すと主張するのである、此主義は首相ロイドヂョルヂ氏も大體之を容れて昨年五月一日「政府は各職業に對して最低賃銀制を置くを認めた」と公言し又た昨年政府が造つた國民工業會議（資本家及勞働者双方代表者參加、昨年二月十七日開會、三月頃活動）も最低賃銀制を可決した、併し其率の問題に就ては自然紛爭無きを得無いのである、次ぎは勞働時間短縮問題である、英國では勞働者が多年奮鬪した結果、略ぼ一日八時間若くは一週四十八時間制を獲得して居るものが多いけれど、彼等は之でも不十分だと稱へて居る、即ち昨年一月以來鑛夫連の一日勞働六時間を要求して大紛爭を起した如き、ベルフアスト造船職工が一週四十四時間制を要求した如き、クライド造船職工が「五十時間の賃銀を受くることゝして四十時丈け勞働せん」と主張した如き、海軍職工が四十七時間勞働を求めて罷業したが如き、實例**中の二三である、彼等は今後政治上、社會上**勞働者の責任が重くなつて來ると共に、勞働者が社會的、**政治的、**經濟的諸問題

につき研究する位ゐの時間が與へられねばならぬこと、殊に一昨年新教育法律が出來て勞働者に修養上の便宜を與へた以上は國家として之を利用する丈けの時間を勞働者に與へねばならぬことも說いて居る、此外に住宅問題、工場設備問題、其他待遇問題は孰れも彼等の注意を集中し、彼等は先づ此等の改善を集めて、之から勞働階級の向上を圖らんと力めて居る。

併し乍ら一般の英國勞働階級の行動は是であるとしても、又た他方を見れば現在の加き賃銀制度の下に在つては、私的資本家の下に在つては、到底眞成なる勞働階級の向上が出來無いとの意見を熱心に抱懷し、產業國有論を唱道し、產業自治の聲を擧げつゝある人々若くは勞働團體あることをも忘れてはならぬ、革命的思想、直接行動論が一部に行はれて、相當の潜勢力あることをも忘れてはならぬ。

最も善く產業國有と產業自治との主張を共に代表するものは、例の鑛山勞働者であらう、坑夫組合は昨年二月四日十萬四千九百九十七票に對する六十一萬一千九百九十八と言ふ大多數で大罷業を決定したが同二十八日に至て王立委員會の調査報告が至急に行はるゝと言ふ保障を得て右罷業を延期した、坑夫の要求は賃銀三割增加、一日六時間勞働及び鑛山の國有と言ふことであり、此國有と言ふのは大問題を構成した譯である、而して四月炭坑委員會は調査を始め六月二十一日四箇の報告書を發表したが同委員會は「一九二一年から炭坑を國有とするを可とす」との件を反對六、賛成七の多數で可決し以て大に世人の注意を聚めたのであつた、坑夫連が此國有を主張した所以は、何時迄經過しても賃銀勞働者では到底資本家の掠奪を免れぬから、鑛山そのものを貪婪飽く無き私人資本家の手から比較的公平なる可き又た萬人が利益を同うす可き國家の手に置かねばならぬと言ふに在つた、併し乍ら歷史的に箇人主義が強くて自由好きな英國では此等坑夫も無條件に國有に滿足せんとするものでは無かつた、本來國有は彼等の目には壓制の如く、官吏の跋扈の如く感ぜられて居た、ところで彼等の希望する國有は、鑛山を私人から奪つて國有にした上で、勞働者等自身で之を經營せんとするものであつた、卽ち產業自治の別名であり、若くは前者であつたと見れば差支無いのである、然かも右の如き坑夫運動は、已に一般英人勞働階級に有力になりつゝある同樣の思想の反映であつて決して、坑夫間のみの思潮のみを意味せ無いことを世人は切に記憶せねばならぬのである。

併し翻つて檢すれば、英國勞働者間には賃銀增加、時間短縮の外に國有論あり、產業自治論ある許りでは無い、一層進んだ直接行動論あることをも忘れてはならぬ、直接行動とは

か、是れ一の革命論である、政治上の要求一般的產業上の要求を實現する爲めに普通の徑路に依らずして大規模な同盟罷業等を斷行せんとするものである、例の有名なロバート、スマイリー、故アンダーソン（下院議員）ロバート、ウヰリアムスやら、勞働界の元老ラムシエー、マクドナルド氏等は之が贊成論者である、蓋し英國勞働黨は一九一八年組織を改造し從來勞働組合員、社會黨團體員から成つたのを變更し弘く一般の入黨を許し又た「頭腦勞働者」をも迎ふこととしたに係らず、唯多少の勢力を增加した丈けで、未だ容易に政界を風靡するには至ら無い、一昨年の總選擧では總投票數九百六十八萬一千〇十四の內で勞働黨は二百三十七萬四千三百八十五票を占めて五十九名の議員を選出したのである、（尤も之が比例選擧制度の下に行はれたとすれば百二十名の議員を選出した筈であるが、英國は同制を採用して居らぬのでは勞働黨は益々不利であつた）、之では唯だ議會にのみ依賴して勞働者の希望を達することは困難である、從つて他の方法を發見せねばならぬとは、勞働領袖中急進分子の心の中であつたのである。

然かも此直接行動は、勞働派の協議丈けであつて、未だ實行される迄にはなら無かつた、即ち昨年六月二十五日勞働黨協議會は「政治上の武器として同盟罷業を使用する可否」につき意見を決し得無いで決定を延期した、八月二十一日例の三角同盟（鐵道業者、坑夫及運搬業者の大團結）は「露國に對する干涉中止」「徵兵令廢止」等を號呼し之を實現する爲め直接行動を執らんとの提案につき決定を延期し、九月四日又た之を延期した、從つて今日迄の處では一回も實行せられず、トーマス氏、バンニングス氏、ヘンダーソン氏等穩和系は依然成功して居る姿である、併し乍ら世人が之に依つて英國勞働者間の革命熱を過小視するときは、非常な見當違に陷るであらう、論より證據、昨年九月から十月に亘つて行はれ、非常に英國民を苦しめた前紀三角同盟の大罷業は、表面勞銀問題であつたけれども、其の遣り口が革命的であつたと云ふことを否認する譯には行か無いのである。

以上は英國勞働界の大勢である、唯だ同國勞働派の特徵は今日迄の所で露國過激派主義に隨喜して居るもの丶少いことであらう、無論之が影響を受けて居ること、或程度の同情を有することは明かだが、其血を流す程の革命を欲せ無いこと、ソウヰエット、システムを必要視して居らぬことは注意を値ゐする、ラムセイ、マクドナルド氏の如き、ジョウエット氏の如き其例である、尤も昨年二月倫敦アルバート、ホールの集會の如き、全然ボルセウイスムを思はしめたものもあるから、過激派とて皆無

で無いのは勿論である。

予は英佛形勢を說くと約し乍ら、勢ひに任せて餘りに長く英國を說き爲めに佛國に割く紙面を累したことを陳謝せねばならぬ、併し幸ひにも佛國勞働界は、差當りての處英國以上に無事であり、其態度も英國と比肩する程度に於て穩和である。

其諸要求を檢すると、矢張り勞働時間短縮と賃銀增加が主であり、更らに進んだ分子には國有要求と產業自治要求とがある。

產業自治の主張あるや自然である、何となれば佛國こそ例のサンヂカリズムの本場である、サンヂカリズムが例の佛國哲學者ジョルジ、ソレルが主張し、パトーやら、ポール、ルイやら、マクキシム、ルロアやらが說いた拉丁民族の臭氣の多き產業革命案であることは、誰でも知る如くである、英國で近年產業自治論をなすものも、サンヂカリズムに拿れた連中が多い、左れ佛國に於て此論あるも不思議で無い、又たサンヂカリズムが直接行動を挑發するものなるを思ふときは、佛國に直接行動論あるも亦た不思議では無い、

併し大局から見ると現今佛國の勞働派は氣勢が衰えて居るものか活躍頗る遲緩なることを否認する譯には行かぬ、是れ何故ぞ、一は佛蘭西が戰爭で大勝利を得、新らしき發展期に向いて居るので、民心專ら戰勝の果實を收むると、荒廢地帶を修復し、回復の新領土を開拓し、以て從前下り坂になつて居た國勢を回復することに集中し、勞働者もその氣勢に捲き込まれて居るやうな點もあらう、一はカイヨー、マルウイ等急進系（社會主義者連勞働派等が比較的に味方して居たもの、一九一七年以後に於て殊に然り）が叛逆罪などで不人望になつて、多少累を黨に及ぼした點もあらう、一は昨年十一月選擧で保守派、中正派が勢力を得た如く一時反動派が得意な時代となつて居ると言ふ點もあらう、併し乍ら予は佛國の勞働者が必らず活躍し來るの日遠からざる可きを信ずる、殊に善か惡かは姑らく問はず、佛國勞働者の特徵は理窟好きで政治好きなことである、又た十八世紀の大革命、一八三〇年及一八四八年革命に於ける彼等の態度に依りて知らるゝ如く革命的なことである、左れば熱し易き佛國勞働者が今日の如き沈靜を久しうすることは、到底豫期し難い所であらう。

五

予は前項に於て英佛兩國勞働界の改造運動の形勢を說き、其大體は今日猶賃銀增加、時間短縮其他諸種待遇改善等の小さい改善の大きな集合に依つて其經濟社會生活の改造を期しつゝあるけれども、此間若干の有力な團體が今日の資本家との兩

を確信し、產業自治國有、直接行動に奔り、前途容易ならざることを說いた、然らば則ち一轉、其他歐洲大陸諸國の形勢を見れば果して如何。

歐洲大陸諸國にも上記英國流の勞働運動やら、同盟罷業やらがある、併し目下大陸の形勢は一層之より歩を進めては居らぬ乎と思はれる、何ぞや、外でも無い、露西亞のボルセウイズムの思想が洪牙利、墺地利、獨逸、伊太利以下諸國の改造論者を動かし、之を渇仰する勞働階級が決して少く無いと言ふことと是である。

露國の過激主義の思想及び過激派政府の政治の如何は、世上諸雜誌で說かれて居るから、予は玆に之を試みるの要を見無い、併し過激主義が暴力を用ゐ、流血杵を流すの慘劇を敢てして以て資本家階級、中產階級を打破し、共產主義の社會、勞働者を支配者とする社會を出現せんとするものたるは、誰か之を拒否しやう、彼等の標語は市民の平和で無くて市民の戰爭である、然かも彼等の志は一國內の市民戰爭たるに止らずして、世界各國に於て市民戰爭を起さしめ、之に依つて彼等の所謂「勞働階級の解放、自由」を見、その社會支配を見んとするものである、彼等はデモクラシーを信ぜず、之を以て資本家の道具だと考へ、革命に依つて勞働階級の獨裁專制政治を確立し其下に共產制度を出現せんとの抱負を持つて居る、彼等の希望は平等自由無い、勞働者を優越的地位に置き、中產階級資本家階級を之が臣妾たらしめんとするものである、(遠き將來は之を措き)、英國勞働派はその資本家征伐に共鳴するけれどその流血政策に、勞働者獨裁政治と非デモクラシーとには共鳴し無い、然かし洪牙利其他に至つては全然其選を異にするのである。

先づ洪牙利に於て如何に過激派の改造主義に共鳴するものが多いかは、昨年三月二十一日以後約四箇月の長きに亘つて同國政府がベラクーン等共產主義者の手に在つたことに照して明かである、否な當時の政府は一々レニンの指道を受けつゝ政府を行つた痕跡がある、レニンは實に一週間に數回宛洪牙利政府と交信して居たのであつた、(無暗に專門技師を殺したことは、露國革命の誤謬であつたから、洪牙利は之を行ふなと言ふやうな忠告もレニンから來て居たのである)、今右洪牙利共產政府の法律と言ふものを見ると、(一)家屋は一切國有とし、各人家賃を拂はねばならず、室數の割當は家族の人數に依り卽ち一人一室たる可く、又た勞働階級は第一に置かる可きこと、(二)教育は無料として勞働者の爲め大學を設立す可く、『文化教育は勞働者の財產』たる可きとを定め又た(三)同法律は特に勞働階級の子弟の保護を規定し、其他の子弟は全然無視して居たのである、

若しそれ同政府の下に行つた洪牙利の土地分配問題に至つては、世人の知る如くである、今日では同國過激派政府の沒落を見たけれども、此勞働階級の大部分がボルセウイズムに拿はれて居ることは決して非認せらる可くもない、次ぎに洪牙利と相近き墺地利は如何、此處でも過激主義は相應の勢力を持つて居る、唯だ洪牙利の如く烈しくないのは、維也納其他墺地利人民が由來平和的且つ温和的であり、消極的である爲に外ならないのである、是れは殆んど彼等の國民性と言つて善い、然かも昨春三月以來度々騷擾を見、四月中旬暴民の墺地利議會に發砲し、盛んに示威運動を行ひ、六月中旬又々騷動あり、政府をして機關銃を群衆に向けしむるに至つたでは無い乎、市民の鮮血は維也納市會附近の街頭に流されたではない乎、擁護するものは、洪牙利及び露國過激派が運動費を供給した爲めだと言ふけれど、國内の改造論をも忘れてはならぬ、唯だ其實行氣力と堅忍不撓の精神を缺きつゝあるは、恐らくは明瞭な所であらう、

一轉獨逸は如何と言ふに、同國の多數派社會黨は戰時中軟化して居たが、一昨年革命後政權を掌握すると共に益々軟化した、其「結局國家が社會主義的國家となる」と言ふ古き信條だけは捨てゝ居ぬけれど、實際政策として中産階級的議會政治的共和政治を唱へ、政治的民主主義(デモクラシー)を唱へ、彼の「急速に社會主義の理想を實現せんとする」改造計畫には公然反對して憚ら無い、從つて獨逸に於けるボルセウイズムは所謂スパルタカス團に依つて多少の變化を加へて代表せられ、其後漸次少數派卽ち獨立社會黨にも共鳴せらるゝに至つたのである、スパルタカス團の政策を見ると反革命的勢力を増加する所以だと言つて國民議會に反對し、至急勞働者に一切の政權を收め、各工場を社會共有且つ共營とし、土地、銀行、炭坑等より始めて一切のものを共有とすることと主張し且つ武力的革命を企つるところ、洵に急進的であると言はねばならぬ、此派は露國流にソウヰェツト式政府を造り、議會も市村會も廢止せんと希望して居る、例の昨年死んだカール、リープクネヒト氏、及び女丈夫ロサ、ルクサンブルグが主張なり創設者であり、メリング、ルーレ、ツエトキン、ヅンカン等の人々が居る、此派の活動は一昨年來から昨春にかけ盛んであつたが前紀二領袖の慘死で氣勢を殺いだ、併し昨年六月頃及八月頃政府顚覆の陰謀をもやり、同盟罷業をも煽揚して居た、殊に最近スパルタカスの陣營と相並んで事を共にす可くなた獨立社會民主黨の態度は注意を値ゐする、尤も從前から獨立社會黨員でのスパルタカス團に加はり、或は之と協力して居たものもあり、爲めに八月頃の如き政府は此兩團體に對し警戒策を執り、双方名士の家宅探索を行つたこともあつたが昨年十二月に

旬に至り獨立社會黨はライプチッヒに協議會を開催し、席上公然レニンの主義即ち「勞働平民階級の獨裁政治及ソウヰエツト、システム」を自ら採用する決議をなしたのである、勿論多少條件をも附しては居るが、その條件たるや些細で、根本政策から見ると殆んど言ふに足らぬものである、從來議會政治的共和政を承認し、レニン流のソウヰエツト、システムに反對して居た同黨としては改造政策上大豹變を敢てしたものと言はねばならぬ、以て獨逸勞働界の潮流を見る可きでは無い乎。

伊太利は如何、之も勞働階級には過激主義が强くなつて居る、昨年十一月十六日の伊國總選擧が社會黨の大成功を見議員百五十六を出したことは、世人の記憶に新たな筈であるが、此社會黨の綱領とする所を見ると、其第一は速かに露國過激派政府を承認し殊に之との友愛なる精神的關係を承認せねばならぬと說いて居る、それから軍國主義を廢し兵營を止めて之を勞働者の宿泊所學校等とせねばならぬこと、勞働者自ら農工的事業の經營に當らねばならぬことを力說して居る、全然過激主義では無いけれども、その革命的なところは到底英國社會黨の比では無いのである、若しそれ昨年十二月羅馬、ミラン等の同盟罷業、社會黨暴動は當時の新聞紙に明なる如くである、以上で大國は盡きたと考へる、其他西班牙では昨年十一月サラコサの大罷業十二月サンヂカリストの政府脅威があり、又たバーセロナも騷擾した和蘭でも昨年二月頃過激派の革命陰謀が盛んに行はれ、政府も辛うじて之を制止したのである、地理的に露國に近い瑞典、那威兩國に至つては、レニンの宣傳に動かされ之と聯絡して居る過激派がある。

斯く數へて來ると、前記の改造案を有する過激派の勢力が、決して露國に止らず、其影響を歐洲諸國に及ぼし、共鳴者を有する事實を無視する譯には行かぬのである、

述べ去り述べ來つた所、略ぼ刻下歐洲に於ける改造問題の大勢を紹介し得たものと信ずるのである、而して此等諸改造策が人類に有益である乎、大體有益であるとして、各國の文化的、經濟的、社會的發達に照して適當である乎に至つては、是れ箇々の問題と其場所とを考へて決す可き事柄であらう。

唯だ予の所見を言へば、國際聯盟、外交改造、國際經濟的社會的改造等の國際關係改造、比例選擧制、婦人參政權、イニシエチブ及レフエレンダムの政治改造は、之に贊成す可きも、之に反對す可き理由を發見し無い、唯だ勞働派の經濟的社會的改造策に至ては、或ものは速かに行つて適當なものもあらうが、或ものは結局之を實現する機が來るにもせよ、それは他の社會的發達と相待つて着實に進まねばならぬものであらうと思ふ、何

と言つても賛成の出來無いのは、露國流の過激主義である、無論之にも幾多の美點があり、同情す可き點もあるが、其流血的革命を期する所、專制的で事實不平等な政治及社會的組織を齎らしつゝある所、どうしても彼等の再考を促さぬ譯には行か無い、併し最近露國の形勢は、過激派政府が幾多の失敗と苦い經驗に依つて漸次温和化しつゝあることを指示して居る、此實驗並びに國內過激主義者の活動を見つゝある他の歐洲諸邦の經驗が世界の他の改造論者に警告を與へて、正當で良好な眞の改造の途に進ましむる所以ともならば、蓋し歐洲のみならず亦た一般人類の幸福となるであらう。

要するに本論は專ら歐洲の改造問題其者を忠實に紹介するを目的としたものである、予自身の改造意見に至ついては、別に之を說くの機會があらうと思ふ。

新婦人協會の請願運動に就いて與謝野晶子氏に御答へします

らいてう

與謝野晶子氏が私共の希望に從つて、新婦人協會の請願に對する反對理由をお述べ下さつて、氏と同樣の無理解者又は誤解者に對し、詳細な說明を試みる機會を私共にお與へ下さつたことを先づ第一に感謝いたします。

併し同時に私は與謝野夫人の御議論は徹頭徹尾理論と實際と、若しくは理想と現實との間の距離の無視乃至は混同であるといふことを、從つて實際問題に對する批評としての意義を缺いてゐるといふことを指摘せねばならないのを殘念に思ひます。

先づ最初に第一の請願である治安警察法第五條の修正に就、

ての氏の御意見から調べて見ませう。

與謝野氏はかう言はれます、男女の性別を問はないところの普通選擧さへ實現すれば、治安警察法第五條の撤廢の如きは、おのづから解決される問題であるから、新婦人協會が婦人參政權要求の下準備として、か〻る請願をするのは寧ろ順序の顚倒である、と。これは單に理屈としてなら一應尤もらしく聞えるかも知れませんが、少し實際の場合に就いて考へて見るならすぐ間違だといふことが分ります。第一に治安警察法第五條によつて、政社に加入することも政談演說會を傍聽することもその發起人となることも禁じられてゐる婦人にどうして普通選擧要求の實際運動を行ふ自由がありませう、到る處で牴觸して、殆ど手足の出しやうもないに相違ありません。氏は文筆の上でばかり論じてゐられるので或は御氣付きにならないのかも知れませんが、現に私共が今やつてゐる治安警察法第五條解禁の運動でさへ、同法のために、とかく禍され、先頃開いた同法撤廢の演說會も、これを標榜しては出來なかつたばかりか、演題にもこの文字を憚らなければなりませんでしたし、しかもさうまでしてもなほ其筋から色々な注意を受けたのでしたし、又奥むめお氏がこれは別の會の時でしたが、「婦人參政權運動」と題して講演される筈だつたのも矢張りその筋からの干渉で、少しお茶を濁さなければならなかつた位ですから。第二にたとへ治安警察法第五條の壓迫がないものと假定しても、私は氏の言はれるところは今日の我が婦人界の實際狀態と、婦人に對する我が社會の現狀を無視した書齋裡の樂觀的空想であつて、我が國に於ける婦人參政權の運動はその實際的の順序としては、どうしても第一步を治安警察法第五條の撤廢からはじめるのでなければ決してものにはならないであらうといふことを斷定しやうと思ひます。何故なら、與謝野氏が言はれるやうな男女平等主義の普通選擧と治安警察法第五條の撤廢といづれが今日より容易に實現されることかと言へば、それは言ふまでもなく後者でなければなりません。して見れば先づ容易なもの〻實現を期し、然る後にそれを踏み臺として困難なもの〻實現を少しでも容易にしやうとすることは實際の場合に於て誰れでも撰ぶところの當然の順序ではないでせうか。私から見れば與謝野氏の如く困難なもの〻實現を期することによつて、容易なもの〻實現を同時に期さうとするのは却て容易なものまでも困難にする結果に立ち至ることで、最後の目的に忠實なもの〻決して採らない愚かな仕方だと思ひます。

言ふまでもなく私共は婦人參政權を要求する度に於て氏に一步を讓るものではありません。(尤もその要求の理由に至つては

恐らく氏と私との間には多少の意見の相違あることゝは思ひますが）しかも私共が、私共のこの要求を直に團體の要求として實際運動に移すことを敢て差控へなければならないのは何故でせう。賢明なる夫人は私共の說明をまつまでもなく十分御推察下さる筈だと思ひます。

私から見れば與謝野氏は男女平等の普通選擧の實施といふことをあまりに容易に考へすぎてゐられます。たとへ夫人の言はれる如く、政界に於ける一部の急進分子が珍らしく男女平等主義の普通選擧を唱へ初めたとしても、それがどの程度まで眞面目なものかも疑問であるばかりか、極めて少數であつて、矢張り多數政治家の頭には婦人といふことなどは全く問題にもされてゐないのが今日の有樣です。御覽なさい、普選案が上程された二月十四日の議會に於ける島田、植原兩氏の演說を。兩氏は幾度か國民全體の選擧權といふことを繰返しながら、遂に最後まで國民の半數である「女子」の一語を只の一度もその口に發しなかつたではありませんか。既に今日の實際狀態がかうであつて見れば、男女を問はざる普選の實施の如きは今後なほ或る年月と婦人自身の容易ならぬ奮闘にまたねばならぬ一大難事で、決して二三の急進婦人の力によつてなし得られることでなく、多數の力——卽ち多數婦人の團結力によるより外ないのです。

ところが我が婦人界の現狀はどうでせう。私は御參考迄に次の實事を夫人のお耳に入れて置かねばなりません。

私共は今度二つの請願書を殆ど日本全國に亙る婦人に又は婦人團體に配布し、その調印を求めましたが、その結果によりますと、花柳病男子の結婚制度には調印しても治安警察法の方にはそれを拒んだ婦人が少くなかつたのです。そしてこれは男子側に前者の調印を拒んで後者にのみ調印したものゝ少くなかつたのと全く正反對の現象ですが、しかも調印者總數は矢張り、前者の方が後者よりも少し多くなつて居ます。卽ち治安警察法に調印しない婦人の數は花柳病の方に調印しない男子の數よりも少し多かつたといふことになります。

この事實はとかく御自身をもつて他の總ての婦人を律しやうとなさる傾のある氏には或は意外に感じられるかも知れませんが、いかに今日の我が一般婦人はなほ政治といふことに冷淡であるか、否それ以上婦人が政治に關係するといふことに無意識な一種の反感と恐怖と遠慮氣兼と誤解とを有つてゐるかを示すものではないでせうか。

これによつて見ても、與謝野氏が今日新婦人協會に向つて要求されるやうな婦人團體總聯合の勢力をもつてする婦人參政權運動の如きは何處までも現實の觀察と研究との上にその實行方

針を定めなければならない實際運動者の立場から見れば、所謂不可能な空想であつて、我が婦人界の實狀は遺憾乍ら協會の運動を夫人には滿足を與へるやうに導くことを拒んで居ります。何故なら今日私共が直に婦人參政權を標榜して立つ時、協會が今折角企てつゝあるそして夫人が多大の期待をかけてゐられる婦人團體總聯合の成立は忽ち躓かねばなりませんから。「急がば廻れ」と言ふ聞きふるされた俗言を思ひ出して頂きます。

次に私は第二の請願に對する與謝野氏の抗議若しくは質問に移らうと思ひますが、それに先き立ち、請願の內容並に提出の趣旨を明にして置く必要がありますから、うるさくとも貴衆兩院に提出した請願書を左に掲げます。

花柳病男子の結婚に關する請願書

請願事項

花柳病に罹れる男子に對し、左の意味の條項を含む結婚制限法御制定頂き度謹んで請願いたします。

(一)現在花柳病に罹れる男子は結婚することを得ず。

(一)結婚せんとする男子は先づ相手方たる女子に醫師の健康診斷書を提示し、花柳病患者に非ざる旨を證明すべし。

(一)此の證明書は婚姻の屆出に添へて戶籍吏に提示すべし。

(一)結婚後夫が花柳病を隱蔽せることを發見せる場合は婚姻の取消をなすことを得

(一)結婚後夫が花柳病に罹れる場合、又は病毒を夫より感染した場合妻は離婚を請求することを得。

(一)夫より病毒を感染したる場合、妻は離婚後も男子に對し全治迄の生活費と治療費と相當の慰藉料とを請求することを得。

其理由

一、今日非常な勢を以て文明國を脅しつつある花柳病の蔓延が如何に戰慄すべき害毒を個人と社會と種族との上に與へつつあるかは學者の說明や諸種の調査を俟つ迄もなく、私共の絕えず目擊しつつある悲慘事であります。斯る國民的慘害に對し國家が社會衞生若くは種族衞生の立場から、其損失を出來るだけ輕減するやう何等かの手段方法を講ずべきは當然の義務であつて既に歐米に於ては種々な花柳病豫防法を制定し、國庫は莫大なる經費を投じて其の取締りに努めて居ります。然るに我國に於ては、未だ全く放任狀態にあるのは私共の遺憾に堪えないところであります。

一、聽くところに依れば、目下保健調査會に於て、該病豫防法の起草中ださうで、私共はそれが發布の日の一日も早からんことを希望するものでありますが、猶斯る一般的取締りと同時に特に婦人の立場から、家庭と妻たる婦人と子供とを花柳病の害毒から保護する目的のもとに該病男子の結婚制限の必要を痛感するものであります。何故なら私共が今日最も屢々遭遇する、しかも最も默視するに堪えない家庭的悲劇は、結婚前健康であり、純潔であつた所謂良家の子女が、花柳病男子との結婚によつて、彼女自身と、その罪なき子供と幸福なるべき家庭

との上に現に蒙りつゝある幾多の傷ましき被害と、斯る大損害を夫たる男子から受けながら、それに對して全く法律的に保護されてゐない今日の妻たる婦人の餘りに不幸な、そしてあまりに無力にして救ひなき立場とであります。

一、花柳病を家庭内に輸入する者は必ずしも男子のみに限らないのは今更言ふ迄もありません。而も私共が婦へに對しては、特に今日の日本婦人に對しては男子と同樣に斯る取締りをなすことの必要を認めないのは左の如き理由によるものであります。

第一、日本全國の病院に於て取扱つた該病患者の統計は、大正元年より同四年迄の合計三三六、〇五九名中、男二七三、二二三名、女九八、八三六名。これが百分比は男七〇・五九、女二九・四一であります。殊に婦人の該病患者數は夫から感染した既婚婦人が多數でありませうから、賣笑婦を除いた未婚男女の該病患者數の差は一層甚だしいであらうといふことは誰も容易に想像し得るところであります。從つて家庭に該病毒を搬入する場合は男子の方が遙に多く、女子の場合は未だ法律を設けてそれを制裁する必要を認めない程少數だからであります。

第二、且つ未婚女子に對して斯る身體檢査を行ふことは、實際に於ては習慣上可成の困難や、又それに伴ふ危險も豫想されますから、男子に於ける如く容易に實行されさうもありません。その上既に述べた如く該病婦人の數は男子のそれより遙に少數なのでありますから、斯る難事を敢へてせねばならぬ程の必要をまだ認めません。

第三、或る地方又は或る階級に於ける未婚女子にたとへ該病患者の多いことがあるとしても、かゝる局部的現象をもつて全體を論ずることは出來ません。

第四、男子の性的生活は女子のそれに比し遙に放縱に流れ易き傾向あ
る上に、事實今日の男子の多くは放縱であります。それ故花柳病の
媒介者となり、傳播者となる婦人は殆ど賣笑婦に限られてゐるに
し、男子はもつと一般的な意味に於て該病の媒介者であり傳播者
あります。此の事實は夫から感染した婦人花柳病者に比し妻から
染した男子花柳病者の極めて少ないといふ醫師の承認によつて
證明されます。

第五、此の法律は家庭に於ける婦人の保護を目的とするのみならず、婦人を通じてなし得るところの男子の放縱なる性的生活に對する
種の制裁であつて、そこに道德的意義をも併せ含むものであり
す。

一、斯くの如く花柳病男子の結婚を取締ることは家庭を該病毒から保護することで、これは妻たる婦人を保護すると同時に未來の子供を保護し國力の本源である國民の實質的改善を計り、男女共同の義務であり使命である種族への奉仕を全うせんとするものであります。以上。

さて與謝野夫人の抗議は大體左の五點に盡きてゐると思ひます。

第一、花柳病のみに限つたことに就いての抗議

第二、男子のみに限つたことに就いての抗議

第三、「道德的」といふ用語と「處罰」といふ用語に就いての抗議

第四、この請願と戀愛結婚、若しくは共同生活との關係に就

いての抗議。

第一、花柳病のみに限つたことに就いての抗議。與謝野夫人は家庭と社會及び子孫に對し戰慄すべき害毒を流しつゝある病症は花柳病の外に結核もあり、癩病もありなほ他の傳染病及び遺傳病もあるから、特に花柳病と限らず、總括して傳染病及遺傳病の患者とする方が合理的だと言つてゐられます。夫人はこれ程の具體的問題をも刻下の實際狀態をよそにして單純な理論の上からばかり、抽象的に觀、且つ論じやうとする方なのでせうか。善種學的見地から結婚を制限すべきものに、花柳病の外、癩病、結核、癲癇、白痴、其他の精神病、神經衰弱、大酒等のあることは今改めて言ふ必要がありません、併し私は國家が法律をもつて是等の者の結婚を制限するといふことは、元來理論上からは（若しくは理想の上からは）寧ろ大なる反對論者なのであります。それ故私共は花柳病に對しても、何も好んで、それが理論上正しいからとか、合理的だからとかいふやうな單純な理由からかういふ法律の制定を望むものではなく、一に今日我が國に於ける花柳病の蔓延が社會に與へつゝある害毒が、更に言へば、結婚によつて現に我國の婦人と種族とが、蒙りつゝある花柳病の害毒が、敢てかゝる法律を要求することによつて一般の注意を喚起する必要を痛切に私共に感ぜしめるほどそれほど激しいことに起因するのでありますから、誰れか求めてそれほどの實際的必要に現在迫られてもしない他の遺傳病や傳染病に對してまでも同時に煩鎖にして不快な法律的干渉を結婚の上にすることを望みませうや。

例へば夫人が擧げられた癩病の如きは一般から最も嫌惡されてゐる疾病のやうではありますが、その社會的害毒に至つては、今日、花柳病の如くさう戰慄すべき狀態にあるものではありません。數に於て比較にならぬほど少い上に、との病氣に對する世人の深き憎惡は、該病患者並に該病患者ある家族との結婚を忌避し、彼等を隔離の狀態に置きますから、今更法律の力をかりるまでもなく、その撲滅の日は自然と近づきつゝあるのであります。

然るに癩病よりも事實に於ては更に恐ろしい花柳病に對する一般人の態度は案外平氣であり、無自覺であつて、花柳病——殊に淋病の如きは一人前の男子の當然有つところの疾病であるかの如く考へてゐる者さへある位です。かういふ狀態ですから一層取り立てゝ問題とする必要があるではありませんか。

なほこの外の理由として、花柳病の害毒は婦人の立場から見て他の遺傳病や傳染病によつて受ける單なる肉體的苦痛の外に、夫の過去並に現在の性的生活に對する種々な疑惑となつて

夫婦生活の根柢を脅かすところから、精神的にも苦しまなければならないといふことや、この病氣の性質上男子に對する一種の制裁といふやうな道德的意義をも合せて含むものだからといふことなども附け加へて置きませう。

第二、男子のみに限つたことに就いての抗議。これに對する御答へは請願書の中に列記した五つの理由で十分だと思ひますから、こゝでは次の一言を申上げて置きませう。夫人は花柳病患者は未婚男女の何れにも伏在するといふ只それ丈の理由で男女共に診斷書を必要とすると言はれますが、これも私から見れば第一の抗議と同樣の單純な抽象的な議論で、今も述べた如く私共のこの請願そのものが本來理論上の要求から來たものでなく、今日目前の實際上の必要に基くものだといふことに對する理解を缺くところから來てゐるものだと思ひます。私共は未婚男子の中に花柳病患者が伏在するから診斷書を要求するのではなく、未婚男子中に伏在する花柳病患者の數があまりに多數で、その及ぼすところの害毒があまりに甚しくとてもそのまゝに捨てゝ置かれないほどの現狀だから要求するのです。ですから未婚女子中にも亦同病患者が伏在するといふ只それ丈の事實はこの場合議論になりません。しかもこの位の事實は今更夫人の御注意を俟つまでもなく何人も認めてゐることではないでせうか。何故に「事實を公平に觀察せよ」と他に求められる夫人は御自身先づ未婚男女中に伏在する花柳病者の數は男子よりも女子の方が遙に少いといふ事實を、花柳病を妻から感染する夫の數よりも夫から花柳病を感染する妻の數の方が遙に多いといふ事實を公平に觀察しては下さらないのでせう。私は兩者の間に斯樣な差異ある今日の男女に對し、同一の法律を强ふるは却て不公平なことだと思ひます。他日若し未婚女子の中に伏在する花柳病患者が今日の未婚男子の中に於ける程に激増するやうなことがあつたら、その時こそ、婦人に向つても亦同樣の診斷書の提示を要求することにするのが最も公平なことではないでせうか。

第三、「道德的」及「處罰」の用語に就いての抗議。この抗議は正直に言へばあまりに見當違ひなことで、若し、與謝野氏が眞面目に言つてゐられるものだとすれば氏の常識と理解力とを疑はなければならない程度のものです。

この請願が取扱つてゐる問題の性質、內容、提出の趣旨等から考へても、又あの文章の前後から察しても、「道德的な家庭人の立場云々」に於ける「道德的」といふ言葉は極めて一般的な廣い意味での所謂道德で「道德的な家庭婦人」とは、今日私共が嚴密なる意味で最も道德的な結婚と認めてゐる戀愛結婚の實

行者であらうが、又在來の因習結婚の實行者であらうが、何はともあれ、一人の男を夫として守つてゐる婦人——卽ち所謂貞淑な婦人といふ意味だといふ位なことはすぐ分る筈ではないでせうか。して見れば與謝野夫人もこの意味で私共と同樣に又日本の多數の結婚婦人と同樣に「道德的な家庭婦人」の一人ではないでせうか。

それでもなほ與謝野氏は私共が「道德的な家庭婦人」であるといふことをもつて「道德家をもつて自から任じてゐる」こととして「その大膽に驚く」のでせうか。

場合、場合によつてその言葉が含む意味を識別することなしに、相對的の意味に用いた言葉を、絕對的の意味にとつたり、常識的な意味で使つた言葉を嚴密な重大な意味にとつたりするのは大部分その人の頭にも罪があると思ひます。

次に私が使つた「處罰」といふ言葉に對しても氏は餘程お考へ違ひをしてゐられます。私が結婚に於て男子のみから診斷書をとる理由の第一として今も言つた通り不身持な女や賣笑婦の立場からするのでなく道德的な家庭婦人の立場からするのである、卽ち貞淑な妻を花柳病の害毒から保護するのが直接の目的だから云々と言つた一項と、同じ理由の一つとしてずつと後の方で、男性の放縱な生活に對する一種の社會的制裁といふ意味で、「幾分處罰の意味をも含む云々」と言つた一項とをどういふ譯か結び付けて、私共の思ひもよらない一つの事——卽ち私共新婦人協會の人達は自から立派な道德家をもつて任じ、男子を處罰せんとする者といふやうなことに作り上げ「男子專制の橫暴に代へるに女子專制の不作法」などと言つてゐられるのは隨分おかしな論理も成立つものだと驚かずにはゐられません。併し私の信ずる與謝野夫人は男性の撰擇力が女性を改造し、女性の撰擇力が男性を改造するといふ事實を御認めになる以上、婦人が婦人自身と子供のために花柳病の男子との結婚を拒否するといふことは、自然男子の性的放縱に對する一種の社會的制裁となると共に、かういふ婦人の撰擇力を通じて、若しくは利用して男子の性的生活の墮落を幾分でも防止しやうといふことは婦人のためばかりでなく、國家又は社會の立場から見てもよろこぶべきことで、夫人が案ぜられるやうな「女子專制の不作法」でもなく、又「階級道德の世界に限られた」ことでも、「弱肉强食の半獸世界の出現」でもないことを十分承認されるに相違ありません。併し若し今日の男子に媚びんがために故意にこんなことを言つてゐられるのならそれは別問題です。

第四、この請願と戀愛結婚及私の共同生活との關係に就いての抗議。この點に關しては殊に私と與謝野氏とは全然正反對の

見方、考方をしてます。そしてその原因は私から見れば矢張り夫人が理論と事實、理想と現實との關係に對する明瞭な意識を缺くところにあると信じます。

與謝野氏は第一に戀愛結婚の主張者である私が、この請願に於て、現在の因習的結婚を許容してゐるのは何故かと質問されました。

私が戀愛結婚の主張者であり實行者であることは今更言ふ迄もありません。併しいかに自分の理想に、自分の主張に熱心な私でも、多少とも現實に向つて眼を開いてゐる限り、現在最も一般に行はれつゝある結婚は矢張り在來の因習結婚であるといふ事實を遺憾ながら否定する譯には行きません。たとへ私の主張する如き戀愛結婚を結婚の理想と認める人は今日次第に增しつゝあるにしても、實行の上では現社會の習慣を無視することを背んぜず、若しくは無視することから來る社會的非難を怖れて、矢張り因習的な結婚に默從してゐるのが今日の狀態です。そして私はいつも斯う言ふことを覺悟して居ります。私が數年間主張して來たやうな又現に私共が實行してゐるやうな戀愛即結婚の理想が社會的承認を得、一般に行はれる迄には少くとも百年を要するであらう、と。

そこで私が與謝野氏にお訊ねしなければならないことは、今日一般に行はれてゐる結婚は矢張り在來の因習結婚だといふ事實を只事實として有體に認めてゐるといふことが、どうして因習的結婚を許容したことであり、戀愛結婚の主張に反することであるかといふことです。

只事實を事實として承認したことは、言ふまでもなくそれを「いい」と言つたのでも「わるい」と言つたのでもありません、即ち理想の立場から否定したのでも、肯定したのでもないのです。

併し私がこの事實を認めたことは、與謝野氏の考へられる如く戀愛結婚の主張を放棄したのでないどころか更に一層これを高調し力說することの必要を痛切に感ぜしめる間接の理由にはなつてゐるのです。何故なら今日からも多くの家庭婦人が夫の花柳病に感染して苦しんでゐるのは、そしてその害毒が今や私共をして多數婦人に代つてこんな忌はしい請願を敢てしてまでも一般社會の反省を求めねばならぬほどの嘆かはしい狀態になつてゐるのは、勿論今日一般に行はれつゝある因習結婚を通じてのことであり、更に少し誇張して言ふなら、因習結婚そのもののためだとも言へるのですから。若し一般婦人が私共少數婦人の如く戀愛結婚を實行し得るやうな時代が來るなら、その時にはもうこんな法律の制定を要求する必要も理由も何處にも見出

されないでせう。併し我々の理想通りに、さうすぐには戀愛結婚の時代が來ないのが實際社會の狀態なのですから、そこに種々な厄介な問題がその過程に於て生じて來る譯なのです。

それ故、私共は今日の悲慘な狀態に對する一つの對應策として、否、應急手段として「花柳病男子の結婚制限」の如き直接法に訴へると同時に、これをもつて滿足せず、他方に於て益々「戀愛及結婚の正しき思想の宣傳」の如き間接なそして根本的な方法を通じてこの問題の解決に當らうとするので、兩者の間に不離な互助的關係こそあれ、氏が言はれるやうな矛盾も不調和も存在する道理がありません。

思ふに與謝野氏の理解がこの點に達しないのは、既に述べたやうに、この請願の趣旨を誤解してゐられるからでせう。言ひ換へれば、この請願は私共の理想に基いたのでなく、寧ろ何處までも現實の上に立つてゐるのですのに、恰も理想の直接の表現であるかの如く、或は何等かの積極的主張でゞもあるかの如く見做し、唯々理想的見地から、結婚に對する固定した信條をもつて批判してゐられるからです。これは「現に斯くあること」を認め、「現に斯くあるごとに對し、今なさねばならぬこと」を論ずる者に向つて「斯くあるべきこと」を說くので、實は最初から議論にならないことを議論してゐるのです。

夫人はこの三つ即ち「現にあること」と「現にあることに對し今なさねばならぬこと」と「斯くあるべきこと」との間を明に區別された上で、今一度この請願を見直し、且つ批判し直す義務がありはしないでせうか。

私は特に次の一節を混同の最も露骨なよき例として擧げて措きます。

「私達に取つては戀愛の成立と完成が結婚の基礎であり、目的であるのです。結婚が戀愛に先立つことはありません。必ずその結果として來るものだと考へてゐます。(これは與謝野氏のお說をまつまでもないことですが、併し氏も言はれる如く、いかにも「私達にとつては」であつて、「一般婦人にとつては」ではありません。一般婦人にとつては結婚が戀愛に先立つのはもとより、否結婚後に於ても戀愛の生じない場合さへ少なくないのが今日の狀態です)然るにこの請願で見ると、男女相互の間に戀愛の成立することを唯一の重要條件とはしないで、「先づ相手たる女子に醫師の健康診斷書を提示し、花柳病患者にあらざる旨を證明すべし」「現在花柳病に罹れる男子は結婚する事を得ず」といふ法律が結婚の死命を制してゐるやうに見えます。(この請願は與謝野氏や私の如き婦人のためにしたのではなく、因習結婚の下にある多數婦人のためにした

のです、即ち少數婦人の必要からでなく、男子の利己心の犠牲となつて、彼等の母性と未來の子供とを滅ぼさなければならない運命にゐる多數婦人を保護する必要のためにしたのです。)是に對して平塚さん達は戀愛の成立を重要條件とするのは既定のことだと言はれるかも知れませんが到底融和し難い矛盾がそこにあると思ひます。(一般にとつては戀愛の成立などは結婚の條件となつてゐないのが寧ろ既定のことです。)」

さて以上は戀愛結婚の主張と花柳病男子の結婚制限に關する新婦人協會の提案との關係を述べたのでありますが、私は更に進んで、私が主張するところの戀愛結婚の內容と花柳病男子の結婚禁止との間には實際に當つて何等牴觸するところのないことを證明しやうと思ひます。

戀愛結婚の時代さへ來れば、法律をもつて特にかゝる制限を結婚に加へる必要も理由もないであらうといふことは私の既に言つたところです。そしてその意味は眞の戀愛の成立してゐる間柄であるなら、法律の命を待つまでもなく自發的に、言ひ換へれば、戀人に對する彼自身の愛の力によつて、戀人と更にその間に生れるかも知れない子供の一生を不幸にするやうな結婚は思ひ止るに相違ないといふことです。ここに眞の戀愛の發動を見ることが出來ると私は思ひます、これは確に戀する者にとつては悲しいことでせう、併しこの悲しみの前にふたりの愛は一層深められ、高められ、清められて增々「尊貴な戀愛」にこそなれ、與謝野氏が考へられるやうに、結婚しないからと言つて「尊貴な戀愛」を破棄することにはなりません。まして花柳病は不治の病ではないのですから、結婚をしないといつても何も生涯に亘つてといふやうな絕對的の意味のものでなく、言はゞ一時結婚を中止するといふまでのことで、全治を待つて結婚すればいゝのですから、多くの場合これは彼等の戀愛を殺すどころではなく寧ろ眞の意味で生かし且つ完成するためになります。

然るに私と共に戀愛結婚の主張者をもつて任じてゐられる與謝野氏にして「若し男女相互の間に戀愛が成立して、さて結婚といふ社會的法律的の形式の一段に及んで、相手の男子が秘密にしてゐた花柳病のあるために健康診斷書の提示を拒んだら云々」などと變なことを言はれるのはどうしたことでせう。何から見れば、いざ結婚といふ時まで花柳病を秘してゐるやうな男子、そして若し法律さへなければ秘密のまゞで結婚もし兼ねないやうな男子の戀愛は眞の戀愛ではありません、實は最も利己的な、他の總てを自己の犠牲にしやうとする男性の慾情です。最もいゝ意味でウォードの所謂自然愛の程度のものです。若し

かういふ愛をもつて「天にも地にも二つと無い既成の戀愛」などと誤信し、花柳病ある男子なるにも拘はらず喜んで自己を提供する婦人があるなら、その無智と盲目を憐まねばならないと共に、かかる婦人のためにも亦法律上の保護が必要といふことになつて來ます。

萬一與謝野氏の主張される戀愛結婚の內容が斯くの如く非道德的な又非社會的なものであるなら、氏の謂はれる戀愛とは斯くの如き粗野な低級な、利己的欲情以上のものでないなら、私は私共が理想とする眞の戀愛結婚の主張のために反對しなければなりません。

戀愛は言ふ迄もなく個人の自由でせう。併し私は同時に言ふまでもなく、その自由にも亦制限のあることを認めるものです。いかに戀愛は自由だからと言つて、或は「戀愛は高く遙に政治や、法律や、科學や、論理の彼方にある」からと言つて、他人を――子供を傷け、社會を、種族を害する權利はない筈です。今こゝで戀愛に就いて多く言ふ暇を有ちませんが、一言で盡せば戀愛又は結婚の自由若しくは權利は、個人の幸福と種族(社會)の利益の一致の上に、個人の權利と種族(社會)に對する個人の義務との一致の上に認めらるべきものだと私は思つて居ます。して見れば結婚が花柳病によつて制限される位のことは當然ではないでせうか。

私は改めて與謝野夫人に次の質問をいたします。先頃母性保護に反對し、「男も女も自分達夫婦の物質的生活は勿論、未來に生るべき我が子の哺育と教育とを持續し、完成し得る丈の經濟上の保障が相互の勞働によつて得られる確信があり、それ迄の財力が現に男女の何れにも貯へられてゐるのを待つて結婚し且つ分娩すべきもので、たとへ男女にその經濟上の獨立があつても、女子にまだその保障が無い間は結婚及分娩は避くべきものだと思ひます」といふ經濟的條件をもつて戀愛結婚に大々的制限を加へられながら、今日より遙に小さなこの制限を戀愛結婚の理想に矛盾するといふ理由で非難されるのはなぜですか。經濟狀態で制限することは是認されて、健康狀態で制限することは否認されるのはなぜですか。

若し戀愛といふものが氏の言はれる如くなら「熱愛する對の男女の中に財力の有無など何であらうぞ」とまた言はねばなりますまい。それとも與謝野氏は結婚に於て貧乏といふことを考へるのは風流だが、花柳病のことを考へるのは「殺風景」だからいやだと言はれるのですか、それならもう議論の外です。

併し私は思ひます、若し與謝野さんの御孃樣が戀愛が成立したからと言つて、花柳病の男子と結婚され、幾週も經たない中

に、關節炎のためびつこにでもなられるやうなことがあつたとしたら、又可愛いお孫さんが先天黴毒の結果白痴や氣狂ひや不具者にでもなられるやうなことがあつたとしたらどうでせう。それでもなほ「結婚に於ては戀愛のことばかり考へてゐたい。花柳病のやうな殺風景なことは考へたくない」とか、「花柳病者の結婚を禁止するのは、戀愛結婚の理想に矛盾するのだから」などと言つて平氣でゐらつしやるでせうか。

　次に私が今日實行してゐる法律上の手續を經ない戀愛結婚(共同生活)とこの請願との關係に就いてお答へしなければならない順序ですが、これは既に述べたところのこの請願は私自身の必要のためでなく、全く現今の多數婦人にとつて必要なためであるといふことが理解されたなら、自から分ることだと思ひます。何故なら、私にとつては、法律の保護を要求するまでもなく、男女のどちらにせよ、花柳病に罹つてゐる場合は、ふたりの戀愛を尊重する故に結婚する筈がありませんから。この意味で與謝野氏の言はれる通り、私自身にとつてはこの法律は實際無用の贅物に過ぎません。しかも私は私自身ばかりでなく、一般婦人にとつてもこの法律が無用の贅物となることを望んで居ります。言ふまでもなくこの種のことは元來法律に訴へるよりも、人間の道德心(生命に對する愛)更に言へば戀愛並に結婚の眞意義に對する自覺にまたねばならぬことで、無論そこに至らなければ徹底的に目的を達し得るものではありませんが、併しそれは無論一朝一夕に到達し得られることでもないのですし、と言つて現狀の悲慘を目擊しながら默視してゐる譯には行かないのですから、そこで法律の力をかりて被害を出來る丈減じやうとする消極的なやり方もその過程としては止むを得ないことであるのみならず、法律として規定されることが又間接に道德心の發動を促す一助ともなつて、間接にその目的が達せられるやうに思ひます。

　なほこゝで言つて置きたいことは、私共はこの請願が今日の議會に於て、直に通過されるであらうとは最初から考へて居ませんでした。併しかういふ請願を婦人側から提出したといふこと丈でも、この問題に對する一般社會の注意を惹起する上に效果があらうと考へたのと、今一つには内務省の保健調査會目下花柳病豫防法案の起草中で、且つ同法案は專ら公娼私娼に關するものだと聞きましたので、この請願をも何等かの參考としに更に研究して貰へれば幸だと考へたのでした。この點から言へば今度請願委員會に於て「政府參考送附」となつたことをもつて先づ滿足して置かねばなりません。

　以上で私は與謝野氏に對する答辯の義務を一通り果したもの

と考へます。

さて筆を擱くに當つて、私から一つ與謝野夫人への御願があります。この二つの請願運動に限らず、今後新婦人協會の運動なり、事業なりを批評して頂けますなら、私共他の二三の少數婦人が個人としてもつて居る理想や思想や要求や生活のみを對象とし若しくは目標としないで、今日の社會並婦人界の實際狀態を、對象とし、言ひ換へれば今日の我が社會若しくは婦人界にとつて、意義あることか、利益になることか、今日の我が社會、若しくは婦人界の要求に眞に協つてゐるかどうかといふことを標準として論じて頂きたいと思ひます。何故なら今度のやうな新婦人協會の運動とこの運動に携つてゐる一二の婦人の理想や思想や生活との間の距離に對する明瞭な意識を缺いた批評は新婦人協會に對する批評の如くして批評とならず、從つて協會のためにも婦人全體のためにもなつてゐないといふことを、氏ひとりのためばかりでなく、日本の婦人界のために殘念に思ひますから。

私は婦人界のよき指導者でいられる氏の如き婦人がヒステリーなお姑としてではなく、親切なお叔母さんとして新婦人協會のよき相談相手となつて下さることをどんなにか望んでゐることでせう。

不景氣の襲來と我國民生活

法學博士　堀江歸一

好景氣の原因如何

兩三年來我國の經濟社會は繁昌に繁昌を重ねて、恰も黃金時代を現出するやうな狀態であつた。然し經濟社會の全局から見れば、好景氣と不景氣とは糾へる繩の如きものである。即ち幾年か好景氣の續いた後には、何年かの不景氣があり、不景氣が續いて、國民の困厄甚だしきに至つた時には、早くも好景氣の芽をふき出す次第であつて、此循環律は常に諸國の經濟社會に

於ける趨勢を律して居つた。我國の經濟社會も固より此法則の圈外に立つものではなく、歐洲開戰以來既に數年間にも亘つて、好景氣が續いたとしたならば、何時かは其反動として不景氣の襲來す可き譯であつて、唯如何なる時に、如何なる機會に依て、反動の來るかと云ふことが一ツの問題として、人々の注意に上つて居つたのである。

此問題を解決するには、兩三年來の好景氣は何事が原因と爲つて、誘導されたものであるかと云ふことを研究するのを以て、其捷徑とするのであるが、其原因を求むれば、即ち歐洲戰爭の國際間の經濟關係に及ぼした影響に外ならない。即ち歐洲戰爭の結果として、第一日本の輸出貿易は非常な勢で增進し、日本の物資で交戰諸國の軍事上なり、國民生活上なりに關係のあるものであれば、盛に需要され、隨て日本では生產すれば生產するだけ、外國に販路を擴張し得ることゝ爲り、第二歐洲諸國では戰時經濟の急需に應じる爲め、自國生產上の全力を之に傾倒したので、他國に對して物資を供給する餘裕はなく、斯くて日本では歐洲諸國から輸入の杜絕した物資の代用品を生產する事業が相當の刺戟を受けて、繁昌することゝ爲り、第三右に述べた二ツの事情から、多年輸入超過の逆調に陷つて居つた日本の外國貿易は開戰以來遽に輸出超過の順勢に一變し、一方に交戰諸國に於て戰時必要と爲つた海運力を我國の海運業者が提供して、傭船料や運賃の形で、收入を得る譯に爲り、輸出超過に對する決濟金と共に、我國をして外國から年に多額の正貨を吸收することゝ爲り、第四斯く吸收された正貨に對しては、其一部分は處分利用の道も講ぜられたが、結局正貨の增殖と共に、內國の通貨に膨脹を來すことゝ爲り、物資の供給が輸入減少やら輸出增進やらの爲めに、不足して居る場合に、通貨が膨脹したので、物價は非常に騰貴し、益々經濟社會の好景氣を煽揚することゝ爲つた、第五此場合に日本銀行を始め金融機關が市場を警戒する方針を取つたならば、空景氣の起ることを幾分なりとも制限したかも知れないが、政府は政略上好景氣の盛ならんこと、又其永續することを希望し、寧ろ景氣煽揚を主眼とする經濟政策の實行を怠らなかつたのであるから、日本銀行も自然此政府の方針に調子を合はせるし、日本銀行の兌換券が增發されて、自然に市中諸銀行の金銀在高が豐富に爲り、然も日銀其ものゝ金利步合が低廉である所から、市中諸銀行も貸出の條件を寬大にし、益々通貨殊に信用通貨の膨脹を招いて、物價の騰貴を惹起すことゝ爲り、第六米國が我國と同じく歐洲諸國に對して、盛に物資を輸出するので、經濟社會に繁昌を來し、其結果我國輸出貿易の大宗とも云ふ可き生絲を高價で需要することも、我

國の景氣を刺戟する一原因と爲つたのである。

不景氣襲來の狀歷然たり

兩三年來我國に好景氣を齎した原因が以上の如きものであるとしたならば、或時に於て、是等の原因が消滅すると同時に、經濟社會に反動的趨勢が起つて、不景氣襲來の免かれ難いのは、當然の事實である。唯此時が如何なる事を機會として、來るであらうかゞ一ツの問題であつたのであるが、夫れも今日の事情から見れば、殆ど吾人の眼前に在ると云ふことが推測されるのである。私が此言を爲すに就て其理由とする所は種々の方面にある。其第一は外國貿易の逆勢であり、第二は正貨の減縮であり、第三は金融の緊縮であり、第四は物價下落の大勢であつて、是等の原因から、經濟社會は反動的趨勢に支配されるものと斷言するの外はない。元來我國近年の經濟社會に有利な狀勢を展開した最も有力な原因は、外國貿易の順調に赴いたことであつた。即ち歐洲戰爭前まで連年輸入超過の爲めに、我國經濟社會の安全を脅しつゝあつた外國貿易が開戰の翌年から輸出超過の方嚮に一變し、然も此輸出超過たる、日本の物資が盛に外國に輸出されて、一方に日本の市場で、內地產品と競爭す可き外國物資の輸入の制限されたと云ふ二樣の事實から生じたものであつて、日本の產業界を刺戟する力は甚だ大であつた。而して斯く輸出の增加したのは、交戰諸國で軍事上に國民生活上に多額の物資を需要するに拘はらず、內國の生產で之に應ずることが出來ず、寧ろ軍事上の關係即ち兵員徵募、工場徵發等の爲めに、國內の生產力が減縮したので、其不足を補うことの必要上我國に物資の供給を仰ぐと云ふ事實に基いたのであるとすれば、戰爭の繼續しつゝある間、輸出の增加したこととの當然であると同時に、戰爭の終了した今日に於て、輸出の減少しつゝあることも、亦已むを得ない。即ち昨年來貿易の狀況が兎角に面白くなく、本年に入つてからも、一月二月と引續いて、莫大な輸入超過を告げたのは、當然の次第であつて、昨年來頻に經濟社會の附景氣を盛ならしめる爲めに、貿易の將來に就て、樂觀說を鼓吹した原內閣の如きは、今日と爲つては、確に其所信を裏切られたものと云はなければならぬ。

外國貿易の狀況如何

或は從來の我國貿易に於ける事實から云へば、下半季は輸出旺盛の時期であつて、此時の輸出で、上半季に於ける輸入超過を相殺して、尙ほ且つ全體に於て、輸出超過を維持することが多い。隨て我國現時の經濟社會を樂觀する人は一二兩月間の輸入

超過を輕視し、結局下半季の輸出超過で、全年に於ける順調を見るものと考へて居るやうであるが、私は此説に贊成するに就て、大に躊躇せざるを得ない。元來我國の貿易に於て、輸出市場として、重要視す可きは米國であつて、下半季に於て必ず輸出が増進して、輸出超過の趨勢を生ずると云ふのも、要するに生絲を始め重要輸出品が米國に賣れるからである。歐洲開戰以來米國の經濟社會が好景氣であつたのは、今更ら述べるまでもないことであるが、其好景氣は要するに米國の物資が歐洲交戰諸國に向つて、盛に輸出されたからであつて、我國經濟社會の好景氣と云ふのも、自ら或る程度まで米國の煽りを受けた形がある。隨て今後日本に好景氣が續くかどうかを判斷するには、米國の景氣如何を知ることを以て、早道とする。殊に我國輸出貿易の將來を豫測するに、就て然るのである。

米國經濟社會の將來に就ても、種々の説はあるが、私は昨年の同國を以て最早や好景氣の頂絶に達したものと考へる。從來に於ても、好景氣の爲めに、物價は騰貴して居つた、金融も相當に繁忙であつた。夫れでも尚ほ歐洲諸國に向つて、多額の物資を輸出し、此莫大なる輸出を標準として、內國產業上の規模が擴張され、自ら好景氣を維持し得たのは、何故であるかと云へば、要するに米國が歐洲に向つて、輸出貿易の決濟に要する資金を貸付けたからである。即ち歐洲諸國は一方に米國から物資を買入れると共に、他の一方に米國に於て公債を發行し、其代金を以て、物資の購入金を決濟するの手段を取つた。諸國は戰爭と共に內國の經濟社會に動搖を生じた結果金貨を外國に拂出すことを嫌ひながら、一面には外國から盛に物資を買入れると云ふ此矛盾を如何にして調節したかと云へば、之を調節したものは米國の歐洲に對する融通であつて、米國も自國の輸出貿易を擴張する必要に顧み、又正貨處分の一策として、外國に「クレヂヰット」を與へるなり、外國の債券を買入れるなり、種々の方法を講ずることを辭さなかつた。此の方法の講じられる間は、米國の對歐輸出貿易は非常な活氣を帶び、同國の經濟社會に少なからぬ刺戟を與へた次第であるが、米國の富力は固より無盡藏ではない、近來國內の金融は大分緊縮を加へ來り、聯邦準備金銀行の監督局の如きは、屢々諸銀行に向つて、市場警戒す可き旨の訓示を與へるのみならず、本來米國民は外國債券に對する放資に慣熟して居らないから、兩三年來頻りに發行された外國債券を消去し切れない。隨て昨年來英吉利なり、佛蘭西なり、米國に就て外債發を行して、或は外國爲替を恢復したり、或は輸入品の代金を決濟したり、夫れ〴〵便宜を得る目的で、交渉を運んでも、容易に米國の應諾する所と爲らない。米國と

しては今日外債の應募に躊躇するのは、事情の已むを得ない所であらうが、同時に此事は自然米國輸出貿易の進運に一頓挫を加へざるを得ない。即ち米國としては自國の市場に金融緊縮の趨勢を今日以上に强くすることを覺悟の上で、外國債券の引受に便宜を與へるが宜しいか、斯る債券の引受は中止して、金融市場の平穩を保つのが宜しいか、金融業者と製造業者若しくは貿易業者との間に、板挾みと爲つて、一ツのヂヰレンマに陷つて居る。而して此難問題は如何に解決されるか判然しないが要するに米國の歐洲に對する起債力の乏しく爲るに隨て、米國の輸出貿易が次第に減縮し、同國の經濟界に一轉機を來さんとしつゝあるは、明白の事實である。

正貨出入の狀況

私が本年の下半季に於て、日本の輸出貿易が例年と同じく旺盛を加へるであらうとか、又は生絲が今日と同樣の價格又同樣の數量で、米國に輸出されるであらうとか云ふ樂觀論に對して、遽に賛成することの出來ないのは、以上の事情を考量するからである。下半季は兎に角、昨年來日本の貿易が逆勢に陷つた一事は既に正貨の出入に不良な影響を及ぼして居る。即ち日本の政府並に日本銀行の內外に所有する正貨は昨年十二月末に於て二十億五千七百萬圓を數へたが、是れが近頃のレコードであつて、其後は次第に減少して今や十九億圓臺から以下に降つた。是れは何の爲めであるかと云へば、重なる原因は貿易の逆勢に存するのである。固より貿易が逆勢であつても、貿易外の關係で、正貨を吸收する望はあるが、今日の日本では、貿易逆勢の上に海運業の運賃收入も次第に減少せんとしつゝある。是れは歐米諸國の海運業が、段々戰爭の壓迫を免かれて、平和狀態の下に活動し來つたことも一原因であるし、又日本の海運業者が運賃取極めの標準として居る磅貨の下落も他の原因であつて、將來も貿易の逆勢と運賃の減收と二ツの事情から、正貨は減少するものと認めなければならぬ。

金融市場と株式市場

日本の經濟社會全體の利害から云へば、今日國內の正貨が減少し、之に代つて外國から物質の輸入されるのは、當然の趨勢である。日本で最も過剩なものは正貨であり、又最も缺乏して居るのは物資であるとすれば、外國から物資の輸入を受け、之に對して正貨を拂出すことは、自ら經濟の調節を得る所以である。斯の如くして通貨が自動的に縮少され、一方に物資の供給が豐富に爲ると云ふ二重の働きで物價が低落したならば、國民生活

の不安定も自ら除却される次第であるが、斯く經濟生活に調節を期するまでには、幾多の波瀾の生ずることは、之を免かれない。昨今我國で正貨の減少する勢が現はれてから、金融の緊縮する傾のあることは、掩ふ可からざる事實である。即ち正貨の減少は日銀兌換券の收縮と爲り、兌換券の收縮は自然市中諸銀行の有する金銀在高即ち支拂準備金を寡少ならしめる。若しも日本銀行が從來のやうに低廉な金利歩合を維持して居つたならば、市中銀行は日銀から低利で資金の融通を受けて、準備金を補充する見込もあるが、今日の如く日本銀行の金利の高く爲つた場合には、市中銀行たるもの、必ず自衞の爲めに、信用の膨脹を制限して、金銀在高の増加を謀らねばならぬ。是れが昨年の十月頃に爲つて、日本銀行の金利政策が一變し、同月以來二回も引續き金利が引上げられ、三回目の利上實行に就て、風評が世間に眞らしく傳へられ、市中の諸銀行亦日本銀行の態度の定まつたのに鑑みて、同様に金融引締の方針を取るに至つた所以であつて、斯く爲つては、金融緊縮の勢の著しきに至るのも、當然と云はなければならぬ。

既に金利が騰貴し、金融も緊縮し、一方に正貨は次第に取付けられて、益々金融緊縮の勢を甚だしからしめるものとすれば、爲めに不良の影響の蒙るものは株式市場と新事業計畫との二者に外ならない。今日まで金融緊縮金利騰貴の徵候の歴然たるに拘はらず、株式市場が好景氣であり、又新事業の跡を絶たなかつたのは、經濟上の變態と見る可きものであつた。是れは從來經濟社會の變動に乘じて諸會社が莫大な利益を收めた餘剩が今日に至つて尚ほ盡きず、此先き一期なり、二期なり、相當高率の配當をする見込があるのと、地方の大小成金が無暗に株式を買込み、又新設會社の株式に應募するとの結果であつて、一ツの病的現象であると云はなければならぬ。而して今日金利が上進し來り、殊に銀行が資金の融通に手加減を加へ出した以上は、株式市場に放下され可き資金は自ら減少す可き道理である。殊に三月十五日に於ける如く、株式が一齊に暴落するやうな事件が出來　、今後何時同様の事件を繰返すかも知れぬ危險があるとして見れば、株式投機を試みて居つた人も自ら手控へざるを得ないし、又相場が少しでも上れば、之を機會に賣退くこと、爲るから、株式の市價は何としても、其頭を抑へられざるを得ない。

物價の將來如何

從來地方の人士は勿論米なり、綿絲なり、其他の物資を生産し、製造する人々は、大なり小なり株式に投機を試みつ

たか、又は株式を買込んで居つた。然も普通の株式を買うだけでなく、又投機を試みるばかりでなく、東株の新を定期で賣買すると云ふ有樣であり、又地方の斯う云ふ連中を得意先とする專門の仲買店も二三あつたと云ふ風評で、投機熱の地方に行渡つたのは、驚く可きであつた。而して從來の如き黃金時代に際會して、彼等は株式から得た利益金で、自分の產出する物資を買占めたり、賣惜んだりして、物價騰貴の大勢を助成して居つたのは、爭う可からざる事實である。然らば今後彼等が株式の上で、打擊を與へられると云ふことは、取りも直さず彼等をして從來買占め、賣惜んで居つた物資を市場に搬出するに至らしめる所以であつて、此點から見ても、物價は下落せざるを得ない。既に通貨の大勢から云つても、輸入貿易の增加する事實から推しても、又金融の物價に及ぼす可き影響から考へても、物價の下落することは、當然の數であつて、又一旦下落の緖に就いたならば、世間の人氣も手傳うことであるから、存外加速度を以て、下落の勢を示すことゝ考へるのである。今頃に爲つて、未だ新事業發起の廣告が殆ど新聞紙に絕へ間なく現はれ又廣告が出さへすれば、之に釣られて、地方から應募者が集まると云ふ話を聞くが、誠に世間は盲目千人又千人とも評す可き有樣であつて、何とも言う可きの言葉を知らないのである。

經濟社會の自然的調節

一體好景氣の後には不景氣があり、不景氣が幾年か續けば、其次に好景氣の來ると云ふのが經濟上の常則であつて、何ものも此常則の働きを止めることは出來ない。又斯う云ふ常則が働けばこそ、經濟上の現象は極端の所まで行かない內に、自ら調節されるのである。例へば近年の我國のやうに、正貨が無暗に外國から輸入し來つて、國內の物價が法外に騰貴すれば、外國の物資が多く輸入されて、輸入超過と爲り、其代金を決濟する爲めに、正貨が外國に取付けられて、再び諸物價を以前の狀態に復させる次第であつて、之を經濟上の自然的調節と云ふ。此法則を念頭に置いて考へると、我國兩三年來の經濟社會のやうに、物價が騰貴して、尙ほ輸出が增進するとか、正貨が流入しながら、之を取付けるだけの輸入が行はれないと云ふやうなことは甚だ奇怪至極の沙汰であるが、是れは要するに歐米の戰時經濟と云ふ大なる變動に包まれて居つた結果である。諸國は戰爭であればこそ、如何に高い代價を拂つても、日本の物資を輸入することを辭さなかつた。日本の物價が如何に高くとも、原產國に於て、或る物資の輸出が禁止されて居れば、之を日本に輸出して、代價の國際的均衡を求めることの出來ない道理である如く

に、自然的法則は全く其運用を止められて、爲めに日本のみならず、他の諸國に於ける經濟上の現象に異常の事實ばかり、現出し來つたのである。然らば戰爭を終つて、戰時經濟から次第に平時經濟に移らうとする今日に於て、戰時經濟の時代に一時抑壓されて居つた自然的法則が遽に活躍し來るのは、當然の道理であつて、其活躍する形も大凡そ左の如くであると推測し得られるのである。

第一、日本の正貨は輸入超過、運賃收入喪失の爲めに、次第に、減少すること。

第二、正貨の減少は通貨の收縮と爲り、銀行をして自然信用通貨を收縮するに至らしむること。

第三、前二項の事情は必ず金利の上進と金融の緊縮とを招き、新事業を挫折させ、又株式市場を不振ならしめること。

第四、市場に出廻る物資の高を增加し、通貨收縮、輸入增加と相俟つて、一般物價を低落させること。

我國今後の經濟社會には是等諸種の事情が續々發生するものと見なければならず、隨て全體に於て、不景氣に襲はれることも亦覺悟しなければならぬ。好景氣と不景氣と孰れが喜ぶ可きやと云へば、何人も其後者に非ずして、前者であることを考へるのは勿論であるが、左ればと云つて世間が好景氣斗りで終始す可きものではなく、好景氣と不景氣と互に相循環す可き約束である以上は、我國が今後不景氣に襲はれたからと云つて、必ずしも悲むにも當らなければ、憂ふるにも足らない。不景氣の時代に、諸物價が低落し、諸株式の時價が壓迫されたならば、從來好景氣の時代に、是等の價格騰貴の爲めに、利益を占めて居つた人々は遽に不利益の地位に陷るには相違ないが、國富なり、國力なりの上から見たならば、之が爲めに別に大なる打撃を蒙つた譯ではない。單に從來通貨の形で代表されて居つた富が幾分か減少するに止まるに過ぎない。寧ろ不景氣時代に一方に物價が下落して、國民生活を安易にし、又金利步合が上進して、貯蓄を獎勵し、兩者相俟つて、次第に國民の資力を充實させ、他の一方に不景氣時代の壓迫に堪へずして、兩三年來濫興された幾多不確實なる事業に淘汰を來したならば、却て經濟社會全體の基礎を堅實にすることの出來る道理である。唯一の問題とする所は國民に不景氣時代に處する覺悟があるかといふ一事である。

不景氣に處するの覺悟

從來の好景氣時代に於て、我國民全體に浮華輕佻の風のあつたことは、爭う可からざる事實である。會社に就て云へ、

より近頃では例の所得税法改正後に於ける増税の負擔を免かれると云ふ考もあらうが、兎に角一時の景氣に乘じて、無謀な増資を計畫し、其拂込に積立金を振替へるものが續出した。之が爲めに會社の株式に對する市價の釣り上げられたことは勿論であるが、不景氣の時代に爲つた曉に、曩に增資で吸收した資本金を充分に運用し切れず、又積立金の減損した狀態で、今後の經濟社會に處するのが、危險の最も大なるものと云はなければならぬ。個人に就て見れば、兩三年來の成金時代に、生活上に奢侈の風を導いたことの著しいのは、明白の事實であつて、中流の俸給衣食者は別として、他の階級では大なり、小なり成金風に吹かれて、金錢を湯水のやうに遣ひ捨てる傾が現はれて來た。成る程郵便貯金は殖へたであらう、銀行預金も增したであらうが、個人全體の生活が質實の風を失つたことは、都鄙一般に認められる所であつて、一朝不景氣に襲はれた場合に、生活の樣式を華美から質實に向け換へることに就て、人には大なる困難を感ずるであらう。然し從來のやうに政府が先導者と爲つて、物價を騰貴させ、之を補ふだけの增俸を官吏に與へ、通貨を膨脹させて、國民生活を浮つ調子にさせて居つた時代は既に過ぎ去らんとして居るのであるから、國民も生活上に於て緊張した氣分を持たなければならぬ。此過渡の時代こそ、國民生活上に混亂を生ずる時であつて、一方に新事業が衰微したり、既設の事が打擊を受けたりして失業者の生ずることゝ相俟つて、如何なる社會上の不祥事を現出するかも計り難いのである。

斯くて世間の一部には不景氣救濟論が起り、又救濟運動が起るに相違ない。原内閣の立場から云つても、此内閣の存續中は好景氣を以て終始し、政友會は經濟界の保護神であり、福の神樣であると云ふ信望を世間に繫がしたいのであらう。隨て姑息ながらも、人爲的に金融を緩和さすとか、新事業で存立に困難なものに、國家的事業であると云ふやうな名義を付けて、保護を與へるとか、無理算段を行はないものでもない、殊に總選擧を目前に控へた今日に於て、此邊の疑念は猶更ら濃厚ならざるを得ない次第であるが、昨年來日本銀行をして不充分ながらも金融引締めの目的で、金利引上の政策を行はせて置きながら、今日遽に金利を引下げると云ふやうな、金融市場を混亂させる政策は政府の體面から云つても、又經濟社界の利害から見ても、決して行はる可きものでない。關税を引上げて、特殊の產業を保護するが如きも、却て輸入の增進に依て、内國の物價を調節しやうとする大勢に反抗するやうな結果を生じては、何等益する所あるを知らさい。常識から考へれば、不景氣救濟策の如き、到底行はれ可き道理はないのであるが、黨利の爲めに

は無理な理屈を付けて、議會の解散すら、敢てする原内閣のごとであるから如何なる經濟政策が濫行されるかも知れぬ。然し如何なる理由の下に如何なる救濟策を施した所で、不景氣の襲來を絶對に回避し得られるものでなく、却て反動を大ならしめるに過ぎない。今日まで時の政治家が一時の人氣取りに斗り腐心し、物價を調節することを怠り、人氣の煽揚のみに考を廻らして居つたことが經濟社會を今日の危局に陷らしめた原因であるとしたならば、今日こそ不景氣襲來と云ふ大詰に臨むのも勢の已むを得ないものと云はなければならぬ。

不景氣は戰爭の餘殃なり

歐米諸國が彼の如き慘憺たる戰爭に從ひ、巨額の軍資金を費し、多數の人命を殺し、幾年に亙つて不生産事業にのみ夢中に爲つて居つた後に、經濟上に大なる破綻の生ずることは當然であつて、戰爭で國財を空費しながら、却て經濟上の繁昌を見ると云ふやうな事實が續いたならば、夫れこそ石が流れて、木の葉の沈む世の中である。唯歐米諸國で戰後直に不景氣の襲來を見る可くして、其襲來を見なかつたのは、諸國が戰後に爲つても、戰時に於けると同じやうに、通貨を增發したり、信用を膨脹させたり、種々の方策で不景氣の來る事を回避し、戰時の空を續けやうとしたからであつて、其力の盡きた時には必ず恐る可き反動の來ることを免かれない。諸國に於ける種々の狀況から判斷すれば、今日は最早や戰爭の決算を爲す可きの時に到達したものではあるまいか、私の第一に着眼する所である。今日我國の經濟狀態が所謂國際經濟に於ける圏内に在つて、其支配を受けるのは、爭う可からざる事實である。從來好景氣の時代を通じて、我國が莫大な利益を得たのも、一に國際經濟の繁榮に基くものであるが如く、今後世界的不景氣に處して、損害を受けるのも、亦國際經濟の衰微に基く已むを得ざる事相であるやに思はれるが、此際私の大に遺憾とする所は我國に此國際經濟の變動に處して、之に對應するだけの確乎たる經濟政策の存しない一事である。好景氣時代の後に不景氣の時代の來ることは誰れにでも知れ切つた事であるとすれば、何故に當局者は當業者をして好景氣時代に、不景氣に處するの用意を爲せなかつたのであるか、殊に好景氣時代の後半期に於て、通貨を縮少するなり、金利を引上げるなり、適當の方策を用ひて、事業熱の沸騰する勢を抑制し、市場に警戒を與へて、好景氣より不景氣に至る過渡時代を圓滑にしなかつたのであるか。政府は啻に此事をしなかつたのみならず、例の高橋是清氏の如きは、一知半解の經濟論を鼓吹して、世間の虛榮熱を煽り立てたではないか、

而して虚業的會社には多くの政府與黨に屬する代議士が關係して、奇利を漁するに忙はしかつたと云ふではないか。斯く政府や與黨が通謀して、空景氣を盛にし、國際經濟上の關係から、何ともすることの出來ない行詰りの破目に經濟社會を陷らせて、不景氣に沈ませるに至つては、其罪や頗る大なりとせざるを得ない。斯う云ふ間違ひをして居る原內閣が今後も永く日本の政柄を握つて、更に間違を重ねることは、誠に國民生活に災禍を及ぼすことの大なるものである。不景氣は已むを得ないもの、寧ろ今日の形勢では當然來る可きものであり、又從來の放漫なる經濟政策の後を承けて、其災禍も大ならざるを得まいが、願くは不景氣時代に健全なる經濟政策の行はれることに依て、他日の發展を期したいものである。

之を要するに、日清戰爭の際にも、日露戰爭の時にも、戰爭が終つて、暫らくの間好景氣の時代があり、世間の短見者流をして戰爭は必ず好景氣を齎すものであると云ふ感を懷かせたやうであるが、戰爭と經濟とは決して兩立するものでもなければ、調和するものでもない。論より證據、兩戰爭共に戰後に於ては、大なる不景氣を出現するに至つた。今度の歐洲戰爭後の關係も必ず之と同樣である。唯戰爭の規模の大きかつたゞけ不景氣の現はれる時期は遲いが、其一旦現はれた時には、存外根强い力を持つこと、想像される。歐洲諸國でも一時經濟上から有利なりとする謬論があつて、今日は消滅したやうである。日本でも尙ほ斯る世迷言を信ずる人があるならば、今後戰爭の齎す經濟上の患害を實見して、其謬想を打破し、如何なる方面から考へても、戰爭の有害無益なることを認めて、然る可きである。

議會の解散を中心として

＝現下の我政界に於ける頹廢的雰圍氣＝

大山郁夫

政府の行つた『直接行動』としての第四十二議會の解散――議會政治否認者の主張――政界の二百十日――政治的頹廢味の產物――形式及び名義の無視――憲政的規律の弛緩――近代生活の上に於ける頹廢――民衆文化及び民衆政治の希望――普選問題に對する各政黨の態度――舊式政治家達の時代順應性の缺乏――彼等の政治知識上の優越性の崩壞――資產階級の政治機關としての我國の議會――資產階級の政治に必然的に附隨する社會政策――この方面に於ける第四十二議會の記錄――政治の民衆化の準備的段階――第四十二議會に於ける婦人政權問題――我國に於ける婦人の社會事業の趨勢――婦人參政問題の將來――政黨と資產階級――政治的頹廢を事業しつゝある政治家の群れ

一

第四十二議會の解散は、政府が行つた一種の『直接行動』として之を觀察するときは、それに深い社會的興味が伴ふのである。この解散は、單に我憲政史上に前例がないといふばかりでなく、それが行はれた場合に關聯して考へれば、明かに非立憲的のものでもある。政府反對黨の人達が、この點からそれを斷行した政府を痛烈に批難して居るのは、無理もない話である。

けれども、政府に對しても、また政府の反對黨に對しても、些かの交渉をも同情をも持つて居ない私達の立場から、この解散を、――並にそれを中心として展開せられたる政治的及び社會的事情を眺めるときは、それに前例のないことを咎め立てすることゝか、その遣り口の非立憲的なことを糾彈することゝかいつたやうな形式一遍のことを超越した、或る更に深い興味の湧いて來るのを覺えない譯には行かないのである。

前例の有無とか、遣り口の立憲的とか非立憲とかいつ

なことは、要するに、議會政治の形式や名義やに屬することである。さうした形式上及び名義上の一切のことを無視して、政府の當面の現實的必要から、遮二無二あの解散を斷行したところに、それを一種の『直接行動』と見ることが出來る所緣があるのである。唯、この場合に於て、所謂『政府の當面の現實的必要』といふのは何か、といふ段になると、問題は極めて複雜になるから、それに關する考察は、しばらく跡廻はしにする。そして玆では先づ、政府が、議會政治の形式や名義やを一蹴して、率直に右の議會解散を斷行して、一般公衆に寢耳に水の感じを與へた事實そのものを注意して見る。

疑ひもなく、それは劇的効果を、遺憾なく發揮した。けれども、唯それをいつただけでそれに對する批評を打切りにするのは、單に如何にも惜しいといつた心地がするばかりでなく、批評としても不十分なものでなければならぬ。で、私達は、この政府の『直接行動』の意義及び効果を、もう少し立入つて考察して見たいと思ふ。

議會政治が、今の儘では、最早到底、世界大戰後の大變革を經て來た現下の時勢に適合しなくなつたものであることは、ヨーロッパ諸國に於ても、一般に認められて居ることである。そこで、樣々の議會政治の改造案も出て來たのである。けれども、議會政治の改造を計畫するものらは、まだしも改造せられた若しくは改造せらるべき議會政治に對して、多少の程度に於ける希望を掛けて居るものである。ところが、この外に尙ほ、議會政治そのものに絕望して居るものも多くあるのである。フランスのサンヂカリスト等の如きが、すなはち、其一例である。もとより、是等の人達にしても、議會政治が政府の權力の濫用に對する有力なる牽制の具として役立つものであることを、認めない譯ではない。さうしてその上に、議會がまだ存在して居ないものならば、それを發明する價値のあるものであることをすら認めようとする。けれども、彼等に言はせれば、議會政治に必然的に伴ふものであるところの、選擧場裏の競爭とか、議會に於ける各種の掛引とか、議決に關する樣々の煩瑣なる手續とか、下らない地方問題の頻出とか、立法者達の言葉數の競爭のやうな駄演説とか、その高慢な、勿體ぶつた態度擧動とか、――かうしたものは、いくらよく見ても、時間の浪費となるばかりのものであつて、いつでも例外なく立法的行爲を無用に長引かせるばかりで、民衆の現實生活のために必要なる改革の快速なる實現を促し得るものではない。のみならず、彼等の主張に從へば、資本主義的社會に於ける議會政治の下に在つては、普通選擧が行はれようが、婦人參政權が認められようが、結局、

この社會に於ける優越地位の保持者たる資本階級の意思が重要なる立法の上に行はれるばかりであつて、勞働階級は依然としてその脚下に踏み附けられたまゝで我慢しなければならぬ。斯ういふ譯で、曾て議會政治の上に繋いで居た空望に依つて欺かれたと感じて居る彼等は、この上議會に依つて彼等の要求する改革を實現しようといふ希望とか、議會に於ける彼等の代表者を通じて彼等自身の解放を謀らうといふやうな『空想』とかに見切りをつけて、端的に『プロレタリアートの直接行動へ！』と叫ぶようになつたのである。

二

原內閣の人達は、自ら政黨內閣の組織者であることを、ふだんから自慢にして居る人達である。彼等はこの點で、尤も熱心なる議會政治の謳歌者である。そればかりでなく、彼等は、我國の議會政治の現狀を以て、現在の我が國情に最も適合して居るものと見做して居るといつて居る人々の群れの最右端にその位置を占めて居るものである。彼等は、凡そ文明國といふ文明國のすべてに後れて、我國にも遲蒔ながらこの際普通選擧を行はうといふ極めて穩健なる提案にさへ反對して居るものである。それ程も議會政治の現狀維持に熱心な原內閣が、一朝その當面の現實的必要から解散を便利と見たときには、その場合が解散を非立憲的なものとして居るにも拘らず、またその前例の有る無しに拘はらず、その形式上なり名義上なりのことには一切無頓着で、原內閣以外の誰れもが意外とするやうなところで、演劇的、不意打的解散を、吶嗟の間に斷行して、大得意になつて居るのである。これは、議會政治の慣例から見れば、明かに脫線的處置でもあり、番狂はせでもあり、一種の『直接行動』でもある。しかも、この直接行動が、議會政治の否認者に依つて行はれたのでなく、その肯定者、その現狀の謳歌者に依つて行はれたのである。こゝにあの解散の最も興趣のある部分が潜んで居るのである。

この解散といふ形式で完成せられた一種の『直接行動』を、議會政治の現狀維持論者たる原內閣が斷行したといふことは、一般の議員たちに取つては、全然意外なことであつた。それは單に政府反對黨の議員たちに取つて意外なことであつたばかりでなく、政府與黨の通常議員たちに取つてもまた、同樣に意外なことであつた。考へてみるがいゝ。普通選擧法案の運命が議院の內外で大問題となつて、それに關する採決の時が、まのあたりに迫つて來て居る。この普選案を支持する政府反對黨の議員たちの間から選ばれた當日の辯士達も、それに反對する政

の與黨及び友黨から選ばれたそれらも、それ〱自分達の立場から熱辯を振ふ用意をして、順番の廻つて來るのを待つて居る。譬へは古いが、『山雨至らんとして風樓に滿つ』といつた光景が、そこに現出されて居る。もとより、大勢は是より先きに、既に定まつて居た。すなはち、政府側が二十幾票かの差を以て勝利を得ることは、前から明瞭となつて居た。けれども、普選贊成派側の人達は、敗戰の運命の定まつて居る勝負のためにも、死花を咲かせようといふ覺悟（少くとも外面上は）を以て議場に詰め寄せて、勝利の豫感に醉うて居た反對派の人達と、兩々相對峙して居る。一種の陰慘なる雰圍氣が、そこに釀成せられて居る。その時、議院外には、幾萬の群衆が、大河を決するような勢を以て雪崩れ込んで來て、刻一刻、院內の形勢の定まるのを待つて居る。何といふ悽愴な緊張だ！　普選案の勝敗如何に拘はらず、この場面の光景は、我憲政史の一ページに留められなければならない、記念的意義のあるものである。

この時議場に於ては、政友會の一員が、普選反對の演說をして居る。その間に議長の失言が、議場の混亂を招いた餘興がある。次に原首相が起つて冷然として政府の立場を述べる。終りに近づくに從つて、形勢がだん〱不穩になる。最後に、普選問題を『國民の公平なる判斷』に訴へるといふ趣旨が述べられるに及んで、解散の豫感が、各議員を襲うた。次いで解散勅が、大岡議長に依つて捧讀せられた。萬事休す！といつた感じが、敵味方の兩側の議員の間を貫いて走つた。其一瞬間、『全院全員、肅として聲がない』と、ある新聞の議會雜觀は報じて居る。次の瞬間に『萬歲！』といふ、皮肉なる絕望の聲が起る。

すべての議員の習慣的恐怖たる二百十日ともいふべき解散は、斯ういふ段取でやつて來た。政府黨の人達は、一種の諦め的態度で、この災厄に堪へられもしよう。しかし、諦められないのは、反對黨の人達である。彼等は本能的に、『非立憲』的な解散を批難し始めた。それは當然のことである。あの解散は、憲政上の慣例からいへば、どう見ても、非立憲的のものであることは、疑ひもなき事實である。それを政府の反對側の黨人連が指摘するのは、さもあるべきことである。けれども、寺內閣時代に於ては彼等の多くのものと多少共通の立場を持つて居た私達も、今では最早、官僚政治家たちを蔑視して居ると同樣の意味で、彼等を蔑視して居るのである。それだから、私達は、今日に於ては彼等と同じ立場から政府の態度を眺める必要を、毛頭感じて居ない。換言すれば、私達は、問題の立憲非立憲を問ふといふやうな程度を通り越して、それ以外の、若しくはそれ

以上の立場から、この問題を考察して見る必要を感じて居るのである。

三

かうした立場から、今度の解散をながめるとき、第一に私達は、政府がこの桁外づれの解散に依つて一種の『直接行動』を行つた、そのこと自身のうちに、容易に救ふことが出來ない政治的頽廢味を發見することが出來るのでなる。

立憲非立憲といふのは、如何にも、何よりも多く、形式上名義上のことに屬する。けれども、議會政治の規律はまた、何よりも多く、この形式上名義上のことに依つて維持せられるのである。實質上時勢に適合した政府の策應が、屢々、憲法の或る條項の解釋や、或る憲政的慣例から非立憲呼はりをされることがあるのは、この形式上名義上から來ることが、決して少くはないのである。そして、かうした形式上名義上のことが、餘りに時勢とかけ離れて來たことが明瞭になつて來ると、それらを再び時勢に適合させるやうに作り替へようといふ要求が、議會改造の聲となつて現はれるのである。しかし、この議會改造にも絶望するものは、更に一歩を進めて『直接行動へ!』を叫ぶのである。

この意味に於ける議會改造や直接行動の企てを政治的頽廢といふのは、明かに名稱錯誤である。それらは、多くの場合に於て、政治頽廢に對する反動と見るべきものである。けれども普通選擧にさへ反對するものが、——換言すれば、議會政治の否認は愚か、議會政治の改造をさへ感じないものが、政治上の難局に出會ふと、忽ち議會政治の背骨ともいふべき立憲非立憲の問題を忘却して、『小面倒だから遣つ附けつちまへ!』といつたやうな直接行動的解散を、極めて無雜作に斷行するのは、これは何といつても、政治的頽廢から來たものでなければならぬ。

考へてみるがいゝ。假りに今回原内閣が行つたやうな解散を、或る官僚内閣が行つたものとすれば、どうであらうか。さうして、その場合に、殊に政友會が在野黨の地位にでも在つたものとすれば、どうであらうか。かういつた場合に於て、政友會の黨員達が默つて引退がるといふやうなことが、常識で考へ得られることであらうか。否、その場合には、彼等は總立ちになつて『非立憲』を連呼するであらう。もし彼等が『そんなことはない』といふならば、彼等は自ら僞るか、若しくは、自ら僞り且つ人を僞るか、でなければならぬ。しかるに彼等は、若しくは彼等の代表者達は、他人がしたならば『非立憲』と

痛罵するであらうことを、自分達がそれをなし得る地位に在る時には、卒然としてそれを斷行して憚らないのである。これは、立憲政治の規律を無視した行爲であるが、しかし、彼等が縦し現下の政局に於ける主人公であるにしろ、さういふ行爲を平氣で演ずることが出來たのは、直接には彼等自身に特殊なる政治頽廢から來たものであるが、しかし、間接には、現代に於ける憲政的規律の弛緩といふ事實に現はるゝ、一般的性質の政治的頽廢にも共因して居るものである。

舊き秩序の頽廢に陷るのは、必ずしもわるいことではない。新しい秩序が、それに取つて代るべき希望があるからである。しかし、この希望が絶えた時には、全社會の前途には、唯暗黑の世界が横はつて居るばかりである。

これを現下の政局に引宛てゝ考へるときは、政黨内閣が唯一回の實驗で、早くもその前に展げられた政治的頽廢の罠に掛つて解體したとすると、何がそれに取つて代るべきかゞ、當然に我々の問題となるのである。若しそれが、昔の官僚内閣に逆轉する契機となるならば、我々は絶望の世界に向つて一轉歩をすることになる。之に反して、若しそれが、民衆政治の時代に近づく一旋轉期を劃するならば、我々の希望はそれだけ一段と强められることになる。今度の普選問題に關して、普選案の上程と相呼應して、猛烈に行はれたる民衆運動は、この點に就いて、如何なる意義を持つて居るものであるか。この運動の背後に於ける煽動者が誰々であつたかは、我々の問題ではない。それが今後どう展開するかゞ、我々の問題である。若しそれが單に一時の花火的現象として、唯あれだけで永遠の闇の中に消え失せるものならば、政治よ！永久に我々の視野から離れ去れ！

四

右に擧げたやうな政治的頽廢が何から來て居るのかを問ふのは、近代生活の上に於ける一般的頽廢が何から來て居るのかを問ふのと同様に、その明確なる解答を得ることが甚だ困難なる問題である。いふまでもなく、前者は後者の一部を構成して居るものである。近代生活の上に於ける頽廢の原因が探り難いところから、それを簡單に文明病と稱して、あらゆる種類の刺激に滿ちて居る近代生活の不安焦燥の狀態を裏附けてゐる現象として説明するものがある。併し、私達の見るところを以てすれば、近代生活に於ける一般的頽廢と見られるものは、實はブルジョア文化の頽廢なのである。このことに關する私一己の意見は、私は本誌の新年號所載の拙稿『民衆文化の世界へ』に於て、

可なり詳細に述べて置いたから、重ねて述べないことにする。が、その場合に於て、私は、ブルジョア文化の頽廢から脱れ出でる唯一の途は、民衆文化の創造に在るばかりだ、といふ趣旨を論じた。それから來る當然の推論として、私は今玆に、現代の我國に於ける政治的頽廢から脱れ出でる唯一の途は、民衆といふ新らしい、まだ試みられない分子を政治の圏内に引入れることだ、といひたい。この點に關しては、まだ未墾の處女地ともいふべきプロレタリアートに、私は他の多くの人達と同じく、無限の可能性を認めるのである。古代ローマの文化的頽廢の殘壘から、そこへの侵入者としての粗剛なる北方の野蠻人が新しき時代のために新しき文化を更生させたではないか。

政治に民衆といふ新分子を引入れる第一の關門が、普通選擧であるといふことは、無論である。けれども、現代の政黨は、それにさへ反對する。人氣取り政策として、表面上それに贊成を示す政黨も、實はその成立の見込がないために贊成するのである。その證據には、その成立の見込が、いくらかでも附きかけると、その贊成側の諸政黨の間に於て、乾度仲間割れが出來て、結局それが崩れてしまふことになるではないか。

普通選擧は、明かに絕好の人氣問題である。しかし、人氣問題であるからそれがいけない、といつたやうな議論は成立たない。と同時に、この人氣問題に、何等の誠意を持合はさないで投合するのは、わるいことである、といふことは、無論正しい。普通選擧を支持する憲政會や國民黨の態度は、この點から見て、『普通選擧は主義に於て贊成だが、時期が尙ほ早い』といつて居る政友會のそれと、幾らも隔りがないのである。政友會のこの態度が、現代日本に於ける政黨の悲哀を、最も類型的に示して居るものであるが、憲政會や國民黨の第四十一議會から第四十二議會へかけての態度の豹變のごときも、その本質に於ては、それに對して、どこに根本的相異があらう。殊に憲政會の如きは、第四十二議會になつてからも、其所謂幹部派と急進派との間に詰まらぬ悶着を惹起して、最後まで思ひ切つて下らない爭ひを續けたのは、何といふ醜態であらう。わけても、幹部派が、最初は普選實施の時期の問題で急進派と小競合ひをやり、次にそれに讓歩したのはいゝが、また〳〵選擧資格の條件としての『獨立の生計』といふ一項を入れることを固執し、更に三變——した樣に見せ掛けて、實は單に名目を變更したにすぎないところの『正業を營む』といふ一項を選擧資格の條件とすることを主張して、遂に『黨議尊重』の名の下に、よくもこんなに下らないことをと思はれるやうな意地を押し通した。彼

等の普選支持の態度の上に、どこを探せば、誠意といふものにぶつつかることが出來るか。國民黨の第四十二議會に於ける普選問題に對する態度は、大體の上からは比較的に善かつたが、しかし、その黨首が、今尚ほ依然として非立憲的な、そして非民衆的な、外交調査會の椅子に噛り附いて居るやうなことは、その態度の善かつたことが、單に表面的のものに止まつたものであることを證明して居るものでなくて、何であらう。殊に同じ黨首が、解散後の二月二十九日の同黨前代議會の席上で、苟くも普通選擧に加擔しさへするならば、官僚でも何でも提携の相棒にする、といつたやうな趣旨を述べたと新聞に報ぜられてあつたのは、此人の政治的將來を暗示したものと見るべきではあるまいか。兎に角、普選支持を人氣取り政策に用ふる政黨の悲哀は、右の三黨の態度の上に、とりどりに現はれて居るのは、面白い現象といはうか、悲しい現象といはうか。どちらにしても、民衆がその現實生活の必要上から普選を要求して居る態度とは、根本的に違つた動機から來て居るものであるとだけは、たしかである。

五

原首相が、『國情が許さない』の一點張りで、普通選擧の即時断行に反對して居るのは、果してこの人の本心から來て居るものであらうか。世界の文明諸國では、だんだん婦人參政權まで認める傾向になり、既にそれを實行して居る國々さへ少くないのに、我國に於ては成年男子間の普通選擧を認めるのさへ尚ほ早いといふ程も、それ程も、わが國情が後れて居る、といふのであらうか。

我國の民衆が、全體の上から見れば、政治的知識に於て、他の文明諸國民より遙かに後れて居るといふのは、それは事實である。けれども、この事實は、我國の民衆の大多數をいつまでも政治の圏外へ驅除することに依つて救ふことが出來るものであらうか。こんなことを言ふのが背理を極めたことであるとは、判り切つた話である。民衆の政治教育を進めることは、まづ彼等に實物教訓の機會を持たせるといふ意味で、普通選擧を行ふことである。

けれども、今の時代に於て最も政治教育を必要とするものは、民衆であるといふよりも、寧ろ、在來の政治家達自身であるといふ方が、正しいのではなからうか。世界大戰以來、各國の内政外交の上に、幾多の新局面が開けて居ることは、並に開かれなければならなくなつて來て居ることは、掩ふべからざる事實である。我國民にしても、世界の諸國民との交際圏内に入つて

る以上は、そしてその圏内に續けて入つて居ることが必要であ
る以上は、この世界的趨勢に後れて行くことは許されないので
ある。或る意味からいへば、我國民は、東からはアメリカの絕
大なる資本主義の壓迫を蒙り、西からは過激派ロシアのプロレ
タリアート主義の脅威を受けて居るといつた、この重大なる難
局と難局との間に板挾みになつて居る所から、この間に處して
健全なる國民的生存を續けて行くためには、政治的社會的に新
生命を吹き込まなければならない必要が、眼前に迫つて居る、
ともいへるではないか。かうした國民的更生を立派になし遂げ
るためには、在來の政治家達は、その過去から得て來た政治的
習慣を一應拋棄し去つて、新しき政治的教訓から學び直ほさな
ければならない必要があるのではあるまいか。我等の考へを率
直にいへば、まだ何等の政治的經驗を持つて居ない民衆に取つ
ては、これから先きの仕事は、唯新しき政治的教訓を學び始め
るだけのことでなる。しかるに、在來の政治家達に取つては、
それを始める前に、まづ彼等の舊來の政治的習慣を棄てゝ掛か
らなければならぬといふ、非常に困難なる仕事が前に控へて居
るのである。民衆に政治教育を施すことの必要を繰返す政治家
達は、彼等自身の政治教育をどうしようといふのであるか。

六

我々の現實生活上の多くの方面の上に、價値轉倒が盛に行はれつゝある現代に於て、在來の優越者達に取つては、その優越意識を惜氣もなく棄て去つて、新しき教訓を、謙虛なる心を以て學び始めることを必要とする時期が、今我々の目の前に來て居る。かういふ謙虛なる心を最も必要とするものは、來るべき時代の經營の局に當らうとする政治家たちではないか。

しかるに、我國の政治家たちは、この際に於ても尙ほ悟らないで、どこまでも自分達の政治的知識の優越意識を鼻の先にちらつかせて、民衆を一段劣等なものと見て居るのである。成る程民衆は、彼等のやうに現實政治上の陰謀的掛引を知らない。しかし、こんなことが、今後の政治を善くする上に於て、どれほどの效果があるか。成る程、民衆は、從來の政治上の慣用術語であるところの、暗中飛躍とか、政界縱斷とか、反間苦肉とか、妥協術合とか、利益交換とか、買收とか、操縱とか、軟化とか、請託とか、乘せるとか、舁ぐとか、いつたやうなことに依つて言ひ表はされて居る舊來の政治的技巧に掛けては、無力でなければ、甚だ拙劣である。けれども、こんなことが、政治生活の向上に對して、どういふ貢獻をなし得るか。成る程、民

衆は、政治的事件を世間より一日早く知り得る機會を利用することに依つて、株式の賣買に於て濡手で粟を攫む藝當の巧妙さを見せたり、その政治上の特惠的地位を奇貨とすることに依つて、內地及び滿鮮の諸地方に變幻出沒して新舊の事業に關係し、そこで鰕で鯛を釣るやうな、水際立つた離れ業を演じたりするやうなことには、甚だ不向に出來て居る。けれども、さういふことが、どうして、將來の政治生活に於ける彼等のハンディキャップとなることであらう。

在來の政治家達の民衆に對する政治的知識上の優越！　それは、私達の眼には、將來の政治的生活のために、ない方があるよりも餘程ましなことばかりから成立つて居るもの丶やうに見える。在來の政治家達は、民衆は無知だからいけないといふ。けれども、私達の眼には、彼等が民衆に優越して居るものが、唯政治上の狡智ばかりであつて、新しき時代の要求に適合することに掛けては、彼等は少くとも民衆と同程度に無知であるやうに見える。しかのみならず、無知なる民衆と、その無知を利用してよからぬことをたくらむ彼等と、いづれが優り、いづれが劣つて居るであらう。彼等はまた、民衆は煽動に乘り易いからいけないといふ。けれども、さういふ彼等の多くは、憲政擁護運動の時などには、盛に民衆を焚き附けた覺えはないか。煽動される民衆と、煽動する政治家と、どちらが純眞な心の持主であらう。さうして、新しき時代は、ます〳〵不純な心を政治から除き去ることを要求して居るではないか。

我國情が民衆をして政治に參加せしめることを許さないといふのは、いつまでも在來の政治家達をして、その優越意識の下に於て、彼等自身が年來踏みならした道を往きつ戾りつして、固定し切つた型の政治を行はしめよ、といふ意味なのであらうか。それにしては、周圍の社會的事情が餘りに變りすぎてゐる。

七

否、我國の民衆生活の內部からの必要からいつても、その外界の事情からいつても、我國の型に嵌り切つた政治の樣式の上に新局面を開くことは、已むに已まれない時勢の衝動に出て居るのである。

型に嵌り切つた政治の樣式？　それはどういふことを意味するであらうか。

無論、それは、我國の政治が、資產階級的政治の色彩を、ます〳〵濃厚に示して來たことに關聯して居るものである。これ

は獨り我國ばかりに於て見られることでなく、すべての國の議會政治が、一度は通り越さなければならない一段階であり、また、大抵の國に於て、いま尙ほ通り越しつゝある一段階でもある。けれども他の多くの文明國に於ては、議會の門戸が、プロレタリアートの代表者に向つても開かれる樣になつて居るのに、我國にはまだかういふことの端緒に就くことすら、單に前途遼遠といふばかりでなく、その見込さへも附きかねて居る有樣である。無論、資本主義を基調とする社會組織が存續する間は、たとへ議會の門戸がプロレタリアートの代表者に向つて開かれたにせよ、プロレタリアートが實際それに依つて有效に代表せられ得るか否かさへ、甚だ疑問である。まして、プロレタリアートの希望するやうな改革が、議會を通じて實現せられようとは、考へ得られないことであらう。けれども、その先きのことは、その先きのことである。議會の門戸がまづプロレタリアートに向つて開かれたといふことだけでも、更によりよき政治的將來に對する一轉歩であるといふことだけは、疑ふことの出來ない事實である。しかるに我國の議會では、プロレタリアートの代表者は唯の一人だつて見ることが出來ない仕掛になつて居る。プロレタリアートは、如何なる計算の標準に依るにせよ、國民の大多數を占めて居るにも拘らず、舊選擧法に依る三百八十一人の、若しくは新選擧法に依る四百六十四人の代議士中に於て、その代表者を一人も持たないといふことは、政治道德といふことをどう解釋するにもせよ、それが不公正を極むるものであるといふことだけは、たしかである。否、それは、單に不公正とだけいつて濟ませるのもではない。我々の眼前に於て、斯のやうなことが大びらに行はれて居るといふことは、悲しむべきことである。

尤も、我國の議會政治が資產階級の型に嵌つて居ることは、今更のことではない。今よりはもつとひどい制限選擧の下に開かれた我國の議會政治は、初めから資產階級の政治であつた。それ故、今になつて、殊にこの點を取立てゝ言ふのは、あまりにわざとらしいことのやうに思はれないではないかも知れぬ。しかし、物は比較次第で、同じものが、非常に目立つたり、目立たなかつたりすることがある。この點からいへば、大戰前に於ては、我國の議會の門戸がプロレタリアートの代表者に向つて嚴重に閉ざゝれてあつたことは、少くとも、大戰後の今日ほどは目立たなかつた。ヨーロッパ諸國に於ては、普通選擧の如きものは、最早疾つくの昔に解決せられて居て、今日では、社會改造の大時期に入り、そして、各國のプロレタリアートは、その間に於て、それぐ\非常に重大なる役割を演じつゝあるこ

とは、今更取り立てゝ言ふにも當らないことである。かういふ今日の時代に於て、獨り我國だけがこの大勢に取り殘されて、議會が全然ブルジョアジーの代表者ばかりで固められて、資産階級的色彩が餘りに濃厚なる政治を行つて居るのは、あたりまへのことゝして默過することが出來ることであらうか。

原首相は、頻りに、我國に於て階級政治の行はれて居ないことを言つて居る。しかし、此人が、それを言つたと同じ口で、今度の普選案は、階級打破の脅威を含んで居ることを述べて、『國民の公正なる判斷』に訴へるといふ名義で、實は、新選擧法の下に於ける二百八十萬人――内地全人口の約二十五分の一――の偏頗なる判斷に訴へて居る。首相は詭辯上手だから、或は『階級の差別がある』といふとは、『階級政治が行はれて居る』といふとと同一でない、といふかも知れない。しかしながら、これは形式一遍の論理である。階級打破の脅威を感じる階級があるといふことは、社會的に優越地位を占めて居る階級があるといふことである。かうした階級の優越地位は、その階級のために好都合に行はれる政治に依つて維持せられるのでなくて、何に依つて維持せられるのであるか。この位の平明なる質問に答へるためには、政治學の初步的知識だけで十分である。事實上からいつても、從來の三百八十一人の代議士は、その大部分は有意識的に、そしてその少部だけは多分無意識的に、誰れも皆資産階級の代辯者であつた。衆議院からして、既にかうである。貴族院のことは、いふだけが野暮である。かうした議會に、資産階級の政治以外の政治の行はれることを待ち望むのは、こ科學的時代に奇蹟を待ち望むのと同程度の愚かさではあるまいか。

八

もし我國に階級政治が行はれて居ないといふことが、我國の議會に於て、階級鬪爭を暗示するような討論の行はれないことを指すのならば、それは正しい。そして、それはその筈でもある。全部が資産階級で固まつて居る我議會に於て、どうして階級間の軋轢を反映するような討論が取り交はされよう。しかし、この事實は、我國に於て階級政治が行はれて居ないといふことの論據とするよりも、それが行はれて居るといふことの論據とする方が、より多く自然なことではあるまいか。

『しかし、現内閣が、社會政策的施設に重きを置いてゐるといつて居るのは、無資産階級の幸福をも眼中に置いて居る證據ではないか』といふものがあるかも知れない。が、寺内内閣だつて、同じことを言つて居た。のみならず、例の温情主義といふ

ものが、傭主の利己心から出て居るものである通りに、社會政策的施設といふものもまた、資產階級の代辯者たる政府が、該階級の利益を擁護しようといふ動機から出て居るものである。資本主義は、その內部に固有して居るそれ自身の法則のために、達すればする程、それ自身の缺陷もまた增大するものである。それが發換言すれば、資本主義の發達は、やがてそれ自身の最後のカタストロフの來ることの前驅である。この資本主義の缺陷を出來るだけ補塡して、その最後のカタストロフの來る時を少しでも延べようといふ動機が、私的企業に於ては、溫情主義となつて現はれ、政府の政策に於ては、社會政策的施設となつて現はれるのである。

斯ういふ風に、社會政策的施設といふものは、結局　資產階級の政治の必然的附屬物であるが、それすらも、原內閣の下に於ては、徹底的に行はれさうにもないのは、この內閣の背後に在る資產階級の甚だ不聰明なところから來たものであることとは、いふまでもなからう。この方面のことに關聯して、第四十二議會の記錄から、政府の物價調節政策が、國家的溫情主義に一日の長ある貴族院の滿足を買ふことすら出來なかつたことや、多少は社會政策的色彩のあつた政府提出の所得稅改正法案が、院外では富豪連や商業會議所などの反抗を受け、院內では實業家議員連の不平の的となり、遂に與黨や反對黨の議員に依つてまで、肝腎のところを臺なしに改修せられたようなことなどを、手當り次第に拔出しても、我國の議會政治が、如何に資產階級の意向に迎合して行はれてゐるかを知るには十分である。その他、戰時利得稅が廢止せられて、その代りの新稅が興されないことや、貧富の階級間の負擔力から見て、非常に不公平なことは隱されない消費稅が、社會政策の呼聲が盛になつても、いつまでもその儘になつて居るやよなことは、資產階級の政治の成果と見なければ、何と見られるものであるか。或はまた、近年來、社會評論家の問題になつて居る例の治安警察法第十七條が、いつかな廢止せられさうな模樣もないことや、或はまた、今日の勞働階級の生活に最も必要なものと認められて居る勞働組合法の如きも、偶ま立案せられたかと思へば、勞働階級のためには無益有害な『縱斷組合』といふ畸形組合が捻出せられたり、その『縱斷』が『橫斷』に改められたかと思へば、それが嚴重な警察的監督の下に置かれるべきことを規定した草案となつたりするようなことが、際限もなく操返されたのは、政府の考へて居る社會政策なるものが、どういふ性質のものであるかを極めて明瞭に例示して居るものではないか。更に方面を變へて、實際上の勞働運動に對する政府の態度を見れば、資產階級

的政治の色彩が、一層明瞭に現はれて居るのを見逃す譯には行かないのである。此點に關する實例を一々擧げて居ては限りのないことでもあるし、また、その最近の出來事に屬するものは、世人の記憶の上に尙ほ新たに印象せられて居ることでもあるから、玆ではそれを省略することにする。最後にどうしても一言しない譯にゆかないことは、政府も、その與黨も、また其友黨も、主義に於ては贊成だといつてゐる普通選擧、――そして、政府の反對黨は、その即時斷行を支持しさへして居る普通選擧、――それが、政府側の詭辯の上に置かれた反對と、在野黨側の故意に出でたものとしか見えない、詰らぬ末節に關する意見の相異とのために、いざといふ瀨戸際で打ち遣られた事實、――すなはち、今度の解散の、少くとも表面上の理由とせられて居るこの事實までが、資產階級の政治といふことに胚胎して居ることは、無論のことであるが、しかし、その事の確證が、原首相の解散が宣告せられた議場に於ける演說、及び政府が即日に發表した解散理由の說明中に於て發見せられることは、大に注意すべきことである。外のことなら兎も角、今度議會に提出せられた普選案には、現在の社會組織を脅威するが如き思想が潛在して居るといふようなことは、資產階級の政治の立場以外の立場から言ひ得られることであらうか。

九

わるく固定して動きの取れなくなつたやうな型に嵌つた政治から、――すなはち、ブルジョアジーの政治から脫出するために、まだ下手に加工せられて居ない政治的素材ともいふべき民衆を政治圈内に引入れることは、現代の政治の頹廢味を除き去つて、それにフレッシュな生命の力を吹き込むためには、避くべからざることである。普通選擧は、決して、この目的を達成するための唯一の手段であるとは言へない。また、そのための唯一の初步的手段であるともいへない。少くとも、普通選擧に、勞働組合と、言論、集會、結社、及び各種の民衆運動に關する、擴大せられたる自由とが伴ふのでなければ、民衆を政治圈内に於て有效なる働きをなさしめることのための、第一段の準備が出來たものとさへいふことが出來ないのである。

しかしながら、普通選擧さへ實行が出來ないようでは、民衆の政治的及び社會的解放のための、その他の手段が獲得され得る見込は、尙ほ更らない筈でなければならぬ。此意味からして、民衆解放の機運を早めるための準備の第一著步として、まづ普通選擧を要求するのは、極めて自然な順序であるとは、言ひ得られるのである。

現在に於て普通選擧といはれるときには、一般に成年男子のそれが諒解せられて居るだけであつて、成年女子のそれが全然忘却、若しくは除外せられてゐるのである。全國人口の半數を占めて居る女子を全然普通選擧の觀念から除外しては、普通選擧の名が、甚だ變なものに響かないか。もし、女子を例外とする、といふにしても、例外が少々大きすぎる。かう考へて來ると、普通選擧の問題が進行して居るうちには、婦人參政權問題もまた、だん／＼それに伴れて重要視せられる機運に向ふに決まつてゐることは、今のうちから容易に推測することが出來る。

否、婦人參政權問題は、ほんのその片鱗だけではあるが、第四十二議會に於て、普選問題討議の際に、二三の議員の話頭に上つた。すなはち、二月二十日の普選特別委員會に於て、清水代議士が植原代議士に向つて、またその翌日の二十一日の普選特別委員會に於て、高橋代議士が同じ植原代議士に向つて、婦人參政權問題をどう思ふ、といふ質問を放つた。植原氏の右の二つの場合に於ける質問に對する答辯を綜合すれば、氏は、婦人參政權は早晩認めなければならない時が來ると信ずるけれども、從來の慣行によつて、婦人は今でも尙ほ家庭的に男子に從屬して居るものと見做されて居るし、且つ現在に於ては、婦人の政談演說の傍聽さへ禁止せられて居る有樣であるから、それは急な譯には行くまいが、しかし、氏の意見では、今のところ、地方自治團體の選擧權を婦人にも認めるのが、最も時勢に適應した處置である、といふ趣旨を述べたのであつた。

尙ほ之に關聯して今一つ注意すべきことは、原首相が議會解散後の二月二十七日に開かれた政友會の前代議士會に於けるその演說の中に、『……この國情の許す場合には、女子にも選擧權を與へる域にも達しませうし、また左樣に達することは、我黨の希望に堪へぬことであります。……』と述べたことである。現實の問題としての成年男子間の普通選擧に反對するこの老政治家が、理想の問題としては、婦人參政權までに賛成しようとして居るところに、頑冥に見られるその現在の態度を、理想の安賣りで旨くぼかさうとたくらんでゐる、その狡猾さが遺憾なく現はれて居る。と言ひ切つてしまへば、それまでゞあるが、この問題は、さう簡單に片附けてしまふべきものではあるまい。少くとも私は、それから甚だ興味ある推論が引出し得られるものと思つてゐる。しかし、今そのことを述べる前に、私は、この機會を利用して、婦人參政權問題に關する二三の要點を述べてみたいのである。

一〇

若干の男の政治家たちが、内心では少々早すぎることを感じながら、それとなく婦人參政權問題に觸れて居る間に、女の側からも、それに對して探ぐりを入れて居るものが出て來た。私はかう書いて居る間に、平塚明子氏等の組織して居る新婦人協會の盡力に依つて議會に提出された請願の一つを思ひ浮べて居るのである。

珍らしいもの好きの新聞に依つて盛に報道せられた通り、新婦人協會が提出した二つの請願の一つは、花柳病男子の結婚禁止に關するもので、今一つは、治安警察法第五條の中から、女子が政事上の結社に加入したり政談集會に會同したり、若しくはその發起人となつたりすることを禁じて居る規定の撤廢に關するものであつた。この後者は、婦人參政權要求の準備的手段と見るべきものであつて、私の當面の問題に對して關係を持つて居るものである。

第十九世紀の半ば過ぎに、アメリカに於て奴隷解放が完成せられてからも、尙ほ解放さるべきものとして殘つて居た集團は、勞働階級と婦人とであつた。この兩集團の解放運動は、それ以來、西洋諸國に於て着々と續行せられ、殊に世界大戰を契機として、勞働階級及び婦人の社會維持力としての重要さが、いよいよ明確に實證せられ、且つこの兩集團自身に依つて意識せられてからこのかた、その解放運動は急に長足の進歩を遂げて來たのであつた。

大戰のすべての影響が、世界的であつて、戰爭の場面から遠くかけはなれて居る我國にも波及した通りに、右の兩集團の解放運動もまた、或る程度に於て我國にも感應せざるを得なかつた。そのうちにも殊に、勞働階級のそれは、我國に於ても、最近數個年の間に、相當の地步を占めるようになつて來たことは、詳しく說明するまでもないことである。

唯、婦人の解放運動の影響は、我國に於ては、極めて微々たる程度に止まつて居るように見える。が、それは、單に表面上だけのことである。婦人參政權こそは、今までの所、餘りに問題になつて居ないが、婦人の社會事業の方面は、西洋諸國に於けるそれとは丸で比較にならないものゝ、それでも、最近に於ては、我國としては從前に於て見られなかつた程の活況を呈しかけて居る。婦人の教育に對する興味や要求もまた、近來大に增進するようになつて來たことは、顯著なる事實である。かういふ際に、官私の諸大學中に、種々の形式で、婦人に向つて

門戸開放を實行して居るもの、若しくはそれを計畫してゐるものが出て來るやうになつたのは、結局、右の趨勢に應じようとしてゐるものに外ならぬものである。無論、かうした事柄それ自身は、本來の婦人解放運動ではない。けれども、それに導く道路であることは、疑を容れることが出來ない事實である。かう考へて來ると、婦人參政權問題も、いづれは早晩、今日の普選問題のやうに、一般公衆の注意を惹くようになる時節が來るであらう。

この事に關聯して、將來の政治が婦人の現實生活に一層密接なる關係を持つようになつて來るであらうといふことを、注意ずる必要があると思ふ。我等の考ふるところに據れば、將來の政治と、婦人の現實生活との交渉は、先づ地方自治團體の、殊に都市の政治から始まつて、漸次に國內政治を經て、國際政治にも及ぶであらう。現今の西洋諸國の實例から見ても、都市政治が最も多く婦人の現實生活と交渉を持つて居ることは、容易に認められる。我國のことを見ても、今日に於て既に幾分さうであるが、將來に於ては、尙ほ更ら、小學校などに於ける兒童教育の管理とか、公園に於ける兒童達の遊戯機關とか、交通道路に於ける彼等の安全とか、少年犯罪の監視及び管理とか、上水下水等を始めとし、その他各種の衞生上及び淸潔上の設備とか、臺所から出る塵芥の始末とか、牛乳及びその他の食料品の配給とか、公設市場の位置、設備、及び經營とかいつたやうなことが、益す都市政治に於て重要なる部分を占めるやうにならう。ところが、斯ういふ家庭生活と密接の關係のある事柄に、より多く興味を持つものは、各家庭の男子よりも、寧ろ婦人である。それ故、一般の婦人達の現實生活上の知識が高まるに伴れて、彼等は、彼等の住まつて居る地方の政治の或る部分に關しては、普通の男子以上の興味を示すようになつて來るのでなからうか、と思はれる。唯、問題は、彼等の現實生活上の知識がそれ程までに高まるのは、いつのことであらうか、といふ一點である。

國內政治にしても、一切の施設が侵略的帝國主義といふような、外向的傾向を主潮として經營せられる間は、それが直接に婦人の現實生活に交渉を持つことは、比較的に少いものである。けれどもそれがだん／＼社會關係の改造といふような內向的傾向をその主潮とするようになればなるほど、それが婦人の現實生活に對して持つ接觸面がます／＼多くなつて來る筈である。國際政治にしても、戰爭がその常態であつて、親交がその變態である樣な場合に於ては、それに對する婦人の直接の役目は、例外的にしかあるまいが、その反對の場合が生ずるよう

になれば、それに對する婦人の活働が要求せられる機會が、漸次に增加して來るであらう。しかし、この場合に於ても、問題は依然として、婦人の知識的向上の程度を基點として展開すべき筈である。

改造の途上にある世界の空氣は、今後ます／＼、婦人の自覺を促す傾向を示してゐる。我國の婦人界にしても、いつまでもこの傾向の影響の圏外に孤立して行く譯にはゆくまい。さうして、我國の婦人達が、その社會的地位に自覺して、男子と共同して政治に參加するようになるといふことは、大に歡迎すべきことである。それは、自覺したる一般民衆が政治の圏內に入込んで來るのを歡迎すべきものとするのと同じ理由に依つてゞある。

二

理想としては女子にも參政權を認むべきものであるとを公言する程の原首相が、現實問題としての、成年男子のための普通選擧に反對するのは、どういふところから來て居るのであらうか。

彼は唯漠然と、『國情が許さないから』といふ、極めて意味の捕捉し難い言葉で、それを說明して退けて居るが、かういふことが甚だ不合理な言ひ分であることは、前に述べた通りである。

そこで、第二に考へられることは、これも前に觸れたことであるが、それは現內閣が、過去に於ける歷代の內閣のやつて來た通りの、固定し切つて居る型に嵌つたまゝの資產階級の政治を今も尙ほ續行して居るのだから、といふことである。

この點に對して異論を挾むものは、誰れ一人もあるまい。しかし、我國の民衆生活の內外の事情が政治の上に新しき生命を吹き込むことを切實に要求してゐるこの新しき時代に於て、原內閣がいつでもその樣に、依然として資產階級の政治の舊型を固守して、普通選擧の實現といつたような最も初步的な改革にさへ反對して居るのは、どういふ譯であるか、といふ疑問が、まだその跡に殘つて居る。

これに關して先づ第一着に考へ附くことは、我國の現在の政黨が、その成立の性質上、資產階級と絕緣しては、到底立ち行く瀨がない、といふことである。この點は、獨り政友會內閣に於てさうであるばかりでなく、憲政會にしても、國民黨にしても、皆一樣にさうである。若し今後、我國に勞働黨でも起れば、この點に於て一つの例外が作られもしようが、それはいつのことだか、普通選擧もなく、勞働組合もない我國の現狀に於ては、その見當さへも、今のところ全然附き兼ねるのである。

しかし、問題はこの點で盡きるのではない。我等は玆に來つて、我等の出發點に於て高調して置いた、我國の政治界に於ける頽廢的傾向に立ち歸らなければならない。

デカダン的政治家達が、幾ら内心に於て普通選擧を行ふ必要を感じたにせよ、外界から來る不可抗的な、何等かの刺激が、彼等の堪へることの出來ない程度の痛烈さを以て、彼等の上に加へられるのでなければ、彼等自身で進んで、それを實行するようなことは、決してあり得ないことであらう。彼等が資産階級と絶縁するようなことは、到底考へ得られないことであるが、しかし、假りに何かの奇蹟のために、さういふことが起つたにしても、彼等が本心から普通選擧の實行を促進することを企てようとは、考へ得られないことである。彼等は、普通選擧の實行が、結局、彼等をして、彼等が從來から踏み慣れた道を離れて新しき道を歩み、用ひ慣れた政治の型を破つてその新しき樣式を採用する必要を感ぜしめるに至ることを懸念して居る。彼等の政治的常習を少しでも觀察したものに取つては、彼等のやうなデカダン的政治家の群れが、多少でも新しき政治生活を開始することに到底堪へ得るものでないことを想像することは、少しも困難でないのである。新しき政治生活が民衆のために始められなければならない時は、やがて彼等が政治的に廢人同樣の運命を見る時でなければならないのである。これは、自明の事理である。

しかのみならず、頽廢の雰圍氣に浸潤して居るものは、自然と頽廢そのものを享樂するような氣分になるものであるが、現在の政治家の群れに對しても、この點に於ては、毫もこの原則を書き易へる必要はない。彼等は政治的廢頽氣分の享樂者である。議會に於て、野次や暴行が缺くべからざる景物となつて居るようなことはまだしも、彼等が彼等自身の手で作つた芝居の筋書の運んでゆくとにうつゝを拔かして居る有樣などは、到底はたから見て居られたものではない。そして、その最近の實例を示せよとならば、我等は、普選案上程の開幕から、解散の幕切れまでの議會的興行の過程を擧げるだけで十分である、と思ふ。民衆が眞面目になつて、我國の政治的將來を考へる時は、あゝいつた駄劇に憤激しないでは居られない筈である。

『普選は主義に於て贊成だが、その即時斷行には反對だ』などいつた政友會の科白が、誰れだつて眞面目になつて聞いて居られようか。普選に反對なれば反對で、堂々と反對意見を述べるがいゝではないか。また選擧資格の條件としての『獨立の生計』といふ文句は撤回するが、その代りに『生業を營むもの』といふ文句を挿入するといつた憲政會の朝三暮四的口上も、思ひ切

つて人を馬鹿にしたものである。それからまた、樂屋に入つては外交調査會の椅子の座り心地を樂み、表に出ては普選支持の英雄の役割を務める黨首を戴いて居る國民黨の態度にしろ、二重人格の所有者のそれではないか。

第四十二議會の解散前後に於ける我政界の事情を、委細に討究すればする程、我等は我が政界の渾沌狀態の甚だしいのに驚かない譯にはゆかない。總選擧は今我等の眼前に迫りつゝある。我等は一體どの政黨から出た候補者に投票していゝのかをさへも知らない。いや、我等がどの政黨から出た候補者にも投票しようとも思つて居ないことは、確實である。我等は、今年は『神聖なる一票』を放棄して、この政界の頽廢味を驅除する方策を深刻に考へるのが、最も急務だと考へて居るのである。

（一九二〇―三―一二）

個性、組合、社會

（新時代の政治の要件）

杉森孝次郎

新時代の政治の要件は個性、組合、社會の各を理解すると同時に、その三者の關係を理解するにある。十九世紀が吾人に齎らした土産物は多大であつた。けれども、産業の發達と、國際的社會の成長とが、その最主要なものだ。産業はナポレオン戰爭以前にはなかつた。國際的社會は過去凡そ半世紀間に迅速の進歩を遂げたる交通機關の成長以前にはなかつた。事實は或意味に於て學説の豫言者だ。常識の豫言者では尚ほ更らある。國際郵便組合が發達せず、勞働組合が成長しなかつた當時の學説と常識とを、盲目的に信用してをるのが現代人だ。現代に於て極端な守舊復古的な考へを持つてをる人々が、自分達は先覺者ののつもりで威張つてをる例はあり餘る。主觀ほどあてにならないものはないと言ひたくなる現象が多い。しかし、客觀的標準

に照らして見て、現代の人でありながら、産業と國際的社會といふ二大新事實の發達に對して智慧の眼と、感情の鼻があいてゐない人は、いかに當人は慨世憂國、地の鹽、世の光を以て任じてゐようとも、事實無資格者であると斷定してよい。産業の發達と國際的社會の成長、繰り返して言ふが、心ある男女は、この二大新事實に對して、どれほどの理解が準備されてあるかを自問して見るがよい。改造は自己改造に始まらねば無意味だからだ。そして改造が進歩的變化であるならば、その改造は、有機體は、その環境の變化に適應することを意味するからだ。

組合の發達は個性の伸暢だ。なんとなれば組合は個性の機會だからだ。組合が發達するに隨つて、自治の要求がつのる。組合の種類は限りもない。おの／＼の職業がその特有の組合を形成する素質がある。おの／＼の專門もさうだ。廣く同業組合と言つてよい。また直接に職業とか專門とかいふ色彩を帶びない組合が可能だ。購賣組合の如きがそれだ。更にまた組合には地方本位のものもある。國家が現にその一つだ。反國家主義のクロポトキンが口を酸くして宣傳する村的社會も、町も市もそれだ。斯くして、凡そ特殊の興味が二人以上に共通に所有されてをる時には、それを內容として組合が可能にされる。近代殊に最近代は、組合の發達が顯著だ。生活そのもの丶發達だ。渾沌たる有機生活が、手脚や眼鼻の判然と現はれた有機生活に進んで來たのだ。これは歡迎すべき事實だ。問題は、組合が自治を要求するに隨つて、一つの組合と他の組合との間の關係をどうすればよいかといふに始まる。

結論から先きに言ふならば、組合員だけに關する事柄をば自治にし、そとの世界にも關する事柄をば相談または第三者的權威の手を煩はす事が理想態だ。その適切の一例は勞働問題の場合にある。何時間働くべきか、生産物の總收益の分配方をどうすべきか、それからその他の業務經營の問題は、勞働者自身、生産者自身の決定に委すべきだ。けれども、生産品の價格を定める者は、生産者だけであつてはならない。なんとなれば、價格の高低は消費者即ち購買者の興味にも直接の關係を有する問題だからだ。だから、値段を決定するには、生產組合と消費組合との合議が必要條件だ。この機會を利用してすこしく精細に言ふならば、生產組合と消費組合とは、おの／＼組織を有する完全體だ。それ／＼に至上權乃至主權のやうなものを自己內に假定する傾向がある。事が平滑に濟まない際に、敵味方に分かれる可能がある。黨派的になり勝だ。これを救ふ方法として、吾人は中立的權威を有用乃至必要とする。國家がすなはちその中立的權威であるべきだ。

生産組合と消費組合との衝突交爭を支配するために國家あるを要する如く、すべての異なる組合間に調和と協力とを保持するために、國家は必要缺くべからず。クロポトキンは組合自治と、組合連合とを信じて、國家を全然無用有害視した。自治的組合が相互に、自由意思によつて提携し、また自治的組合のすべてが、自由合意によつて總團結する事は、可能である限り吾人はその可能性に機會を與へねばいけない。しかしながら、分業の世の中に、內務と外務とは一と手では背負ひ切れない。內務は各組合の本職だ。これは各組合の自治に一任し得るやうになるが進歩だ。けれども、外務は、その以外の社會と、その組合とに跨がつた問題を取り扱ふ。自分だけがわかつてゐては片手落ちになる。先方と、手前と、兩對を大觀し得なくてはだめだ。すべての特殊の內に普遍を發見する事を專務とする組合が別に設置されてあるにしくはない。國家がすなはちその設備だ。すべての異なる組合に共通の興味、目的、利害、事情を發見し、認識して、それを保護し、處理し、支配する事が國家の任務なんだ。また斯くの如くに、特性の內に通性を發見すると關聯して、異自の各組合を組織して、一團の協力體にする事が國家の任務だ。組合は自治を、國家は協力を內容とする制度だ。分業は生活の原則だ。クロポトキンが分業を信じないのは彼れの淺見だ。個性に名に於て吾人は分業を信ずべきだ。ベートーエンに刷毛を執らせ、ターナーに樂譜を調べさせる制度は、個性に對する深觀を缺いてをる。ワイルドを財政調査役にする制度は、伊國統一の際に、マツチニとカヴールとガリバルヂとに同種の仕事を與ふる制度と等しく不經濟だ。制度は生活の經濟だ。生活の經濟は個性の經濟だ。分業は人才本位の形に於ても、自然才本位の形に於ても、有價だ。自然才本位とは、土地と氣候の賦質をいふ。寒帶と、溫帶と、熱帶と、これだけの差に應ずる自然資源の差もあるでないか。吾人は着ねばならない。けれども、織つてばかりゐては食物が出來ない。だから吾人は耕やさねばならない。耕やすには鍬もいる。だから吾人は鍛治をもつとめねばならない。樂も聽きたい。畫も視たい。その方面の欲望も、素人藝では滿足しない。一人で萬業を兼ねたなら、他人の世話にはならずに生活することができよう。けれども、それは不可能なばかりでなく、各自の損だ。人々の好き不好き、向き不向きがあるのだから、これを物にして、好きな仕事を選ばせ、向いた方面に伸びさせる事が、各人の得だ。損德よりも幸福だ。主觀の滿足をいふのだ。しかしながら、庭に雜木の苗が植えられて、おのがじゞ幹を伸ばし枝を張ることは視る目にも美觀だが、また功利的にも良材を育てる所以だが、年齡に於て一日の長ある老樹

が、低い若木の成長を、光りと空間を占領する事によつて妨げたり、強木が、互ひに逞ましい枝振りを他の脇役にむかつて突き立てたりしては、それこそ「自由競爭」の弊に落ち入る。絕對私營主義（laissez-faire）の弊に落ちる。そこで、各樹の傾向を尊重しながら、その相互間に調和と協力を現實にする庭師の要がある。國家はこの庭師だ。

繪心のある者には專ら繪を學ばせよ。農に工に、特別の愛着と自信を有する人々には、その途に猛進させよ。猛進は雜な表白だ。精進させよ。個性に從つて生活を純化させよ。純化された個性は特色を示す。特色ある個性の集團は組織でなくてはならない。さうでなければ、破壞が生ずる。組織すれば成達が現はれる。樂才厚く、樂志強き人をして、いかにして衣食住の必要を滿たすべきかと苦慮せしむるなかれ。さらばその人は萬億の素人樂人が到底供給し得ない優秀な音樂價を社會に供給するであらう。みづから樂むだけでなく、他の人々をも樂ませ得る餘剩價値を生ずるのだ。耕人でも工人でも漁人でもすべてさうだ。漁人をして遠洋近海に終年游弋するの自由あらしめよ。さすれば彼れは、險を冒して大魚を捕獲する熟練をも積むであらう。風濤の險を冒してだ。また一人一家ではとても食ひ切れない巨額の收獲をもするであらう。かやうな各部專門が、全體の協調に裏付けられてゐるならば、各個性が、その結果としての餘剩價値を交換する事によつて、最善經濟が行はれる。一專門と他專門、一組合と他組合、その間に理想的關係を創造し、維持する役を演ずる者が國家であるべきだ。

吾人は住まねばならない。家屋庭園を必要とするのだ。けれども、門と垣は道路に接してをる。道路は他人及び他家の興味にも活關係を持つてをる。だから、道路に餘りに低く蔽ひかぶさるやうな枝をわか庭からだしてはいけない。隣家の居室に侵入する枝などは無論許されない。これが自治を超越した領域だ。他との合議を要する部分だ。或は中立的第三權威を要する範圍だ。國家も、共產主義も、こゝにその正當の機會を發見するのだ。けれども、庭内に梅を植えるか松を植えるか、泉水を設けるか、まその泉水を菱形にするか、楕圓にするかといふ事は自治の領域に屬する問題だ。風で倒れるかも知れないやうな高塔を路傍に立てる事は、わが邸内だからといふて許可すべからざる事だ。通行人を殺すかも知れないからだ。しかしながら、床の間に牡丹をいけようと、芍藥をいけようと、それは家庭の自治に屬する問題だ。私營主義と、私有財產主義とは、こゝにその正當の機會を有するのだ。私が、漫然として共產主義や、國家社會主義や、官僚主義には無論のこと、贊同しない論據よ

こゝにあるのだ。各人、各團體、各地方の、趣味と、思想と、良心とに機會を與へない制度は失敗だ。團體の、地方のと言つても、根柢は個人だ。人に親切な制度でなくては、その制度は改良される餘地がある。

道路問題をば共産主義、國家社會主義できめ、花瓶に菖蒲をさすか、蹂躙をさすかをば私營主義できめるといふ原則は、生活の全野に當て嵌まる。教育でもさうだ。すべての幼少年者は教育の機會を與へられなくてはいけない、更に進んでは教育されなくてはいけないといふ事は國家の名に於て當然主張される。しかしながら、級內や校內の各男女の素質と性格とを明視して、その教育の手加減を種々にする自由は、教師の保留すべき特權だ。農業地、工業地、商業地といふやうな、地方的習慣と事情にも、教育上相當の敬意を表せねばいけない。大綱と原則は、それが哲學的に聰明であるならば、公定と國定であつてよい。ある方がよい場合がある。生活の比較的物質的な、機械的な方面がすべてこれに屬する。けれども、具體的經營は、その當事者に第一發言權と決定權とが與へられてゐなくてはいけない。意味に於ては、被治者が治者でなくてはいけないのだ。法人が立法者でなくてはいけないのだ。善い意味に於て自繩自縛でなくてはいけないのた。

自治と公定、生活の經緯はこれだ。警察、國防、郵便、交通公衆衛生、これらは公定を便とする事實に屬する。藝術、良心、思想、これらは自治中の自治に屬すべき事柄だ。概して言ふならば、保守は公定を、進歩は自治を便とするのだ。進歩〳〵と騒いでも、人間は大體保守的な動物だ。人間以下の生物と非生物に至つては尚ほ更らさうだ。プラグマチストであり、同時に心理學者であつたジエームスが、人間の保守性を敏感に感じてをるのは、錯覺ではない。保守すべきやうに保守し、進歩すべきやうに進歩するのが正道であつて、主義として相爭ふべき原則的價値をば、保守主義も進歩主義も持たない。けれども、蹈み占めては歩を進め、また蹈み占めてはまた歩を進めるのが事實だから、宇宙の最後に達しない吾人としては、進歩が主で、保守は從たることを承認せねばならない。

一とたび生活の進歩に回顧する時、そして社會も組合も生活の部分なのだが、吾人は永久に新たに個性の價値に驚愕の千萬無量を捧られる。個性の神よと、先づ讃を捧げてかゝらねば濟まぬ氣がする。個性は個人の數多なるが如くに數種だ。個性の內で、數學的興味は、その通有諸人を內容として數學者の組合が發生する。化學的興味は、またその化學的興味の通有されてをる諸人を內容として、精しく言へば諸人の內の化學的興味を內

容として、化學者の組合が出現する。職業と專門と組合の種類が、その當代の個性の内容を反映してゐるのだ。個性を社會といふ擴大鏡にかけて視た時に、專門と職業と組合が存在するのだ。個性内の特殊質の量的に協力した結果が職業と組合だ。さうして出來る組合の種々と多數とを組織した結果が國家だ。卽ち諸組合の質的及び量的兩樣の可能に從つての協力が國家だ。社會は、今日の現實と、明日に對する豫測から言へば、個性と組合と國家との總出演の舞臺だ。今日の現實に於ては、國家と國家との間に組織がない。あるけれども甚だしく幼稚だ。國際聯盟が、海底の眞珠が、暗い沖合の白帆かのやうに、風の吹きかたで折々姿を見せるけれども、押し寄せては押し返し、押し返しては押し寄する國民主義的大潮濤の影に陰れる時が永い。けれども明日の現實に於ては、國と國とが、自由主義の上に今日よりは完全な組織を得てをる事を、吾人は當然希望する。同種同數の材木でさへ、組織さるれば家ともなり、その他有用の器具ともなる。散漫無組織の狀態に放置されては、邪魔になるほかなからう。國際的社會の内容が、組織される餘地は無限だ。無組織は不經濟だ。徒費と浪費だ。交通機關の發達してこのかた、社會といへば國際的社會のほかには絕無だ。國際的社會が唯一の社會だ。自國の、外國のと爭うても、實は國際的社會内の分爭だ。内亂に過ぎないのだ。外國も自國もありはしない。國際的社會を本質の内に大いに含有する特殊組織としてにあらざればだ。國際的社會は、自國の外や上に存せず、その內に、その本質生命として存するのだ。外國に至つては尙更らそうだ。外國は現象で、國際的社會が實在だ。その實在たる社會でさへ、自國の內に生きてゐるのだから、現象たる外國の如きは、影よりも淡い存在だ。國際的社會が唯一の現存及び當來存在の社會であつて、吾人は個性と組合とを手段として、この社會の個性化を力めねばならない。こゝで手段といつたのは、終始離れずにといふ事だ。組合は時あつてか離るべし、個性を離る瞬間はあるべからず。國家も組合の一種でないか。組合を離れてはならぬ瞬間もあるでないかとの抗議もあらう。けれども各國の法律が公認してをる歸化權といふものがあるでないか。無論國家は、國内の他の現存の組合とは權威に於て大いに優つてをる。敎會に屬し、學會に屬し、勞働組合に屬し、政黨に屬し、銀行や會社に株主として屬すると否とは、比較的に吾人の自由選擇だ。けれども、國家に屬すると否とはその程度の自由を超越した權威と制裁とによつて條件づけられてをる。諸組合の組織であるだけに、その諸組合通有の利害禍福の名義の下に國法の制裁力は、到底國內の特殊の組合の規約の制裁力の及ぶ

がたい高度なものとなつてゐる。正當な事である。要件は國家と組合と個性との間に、一身同體、すくなくとも異體同心の關係があるべきことを明らかに心得てゐる事だ。

文化的に相學び、經濟的に相易へ、人格的に相交はる現在の諸國民だ。各國民の國民的生活そのものが、國際的なのだ。けれども、歴史と民族と地理との共有されてゐる個人間に、情愛と利害と趣味と見解の共有される可能は多大だ。この可能が發揮し得る限りの善を吾人は收獲せねばならない。國民主義の力はこゝにある。ただ吾人は、一國全社會の時代と、國際的社會唯一社會の現代とを、正直に識別しなくてはいけない。國家成長の要件は、その環境に適應するにあること、すべての生物もしくは有機體が、その原則に支配されると似てゐる。吾人の組織力が、國境内にとゞまることは本來の意義でない。國際的社會を組織しなくてはいけないのだ。注意すべき一事は、組織は束縛とはちがう。組織と束縛との間には、およそ二つの相反する事物が隔絶し得る限りの隔絶があるといふ事だ。組織は各部の成達を意義とする事實だ。束縛は一部の成達のために他部を犠牲にし、または全部の破壞を意味する事實だ。國際聯盟が、すでに伸びた樹木に垣と天井とを確立すると同時に、これから伸びる必要のある樹木にも、現在の成長を限度と假定したる「保護」を與ふるならば、それはまちがひだ。大木も朽つるあり、幼樹も達せざるべからず、さればすべてを本質的客觀的必要に從うて待遇せよ。國際的社會の上に及ぼす善惡を唯一の標準として、吾人は列國諸民に對する待遇を定めねばならない。自國に對して第一にさうだ。すでに國際的社會の一部的組織として國をなしてゐるのだから、國際的社會を完成する原動力たる位置を、自國が占めねばならないのだ。公善の競爭に於て引けを取つてはいけないのだ。勿論すべての善業に於て備に優れよとはいはない。それが各有限態の最後の理想ではあるけれども、それよりも手近かな必要事がある。國としては自國の分を盡す事がそれだ。自國の可能的最善を國際的社會の利福のために盡すのだ。國際的社會とは言つても、自國がその一要素だ。だから自衛と自達、すなはち自己保存と自己發展とは執客觀の立ち場から見ても正當に要求される範圍を有する。自國の意思が、奉公的であればあるほど、この範圍は擴充される。

個性が原則だと言つた連續として、國際的社會を目的とせよと言ふのは、矛盾ではないかと問はれるかも知れない。勿論確に言へば、個性の背景は宇宙だけれども、社會といふ概念を内包的に充分な意味に解すれば、個性の背景即ち全内容は社會

だ。個性と社會とは、一事實の內觀と外觀だ。社會は歷史的に來個性を生み、育て、新陳代謝させて行く。けれども、心理的に言へば、自由意思の直接所有者は個性だ。さればこそ社會進步の源泉は常に個性なのだ。社會は進步の源泉ではなくて機會だ。社會が發明したためしなどは曾てない。社會が作つた「澁かろか知らねど柿の初ちぎり」の一句も、「逍遙遊」の一篇もないと同じだ。世に作者不明の名品はあつても、作者不在の名品はない。組合と社會とはその最大可能を評價しても、尙ほ且つ個性のための機會であり、個性の所產であるところにその價値を有するのだ。そも〱社會は個人と個人との間には存しない。個人と個人との間には風が吹いてをる位のものだ。社會は個性の內に、それの本質的要素の部分として存するのだ、社會は宙に遊離しては存在せず、個性の內容實質として存するけれども、その個性が非常に聰明なものである時には、その個性はその內容たる社會に對して、酵母の作用を實現する。獨創が即ちそれだ。社會進步の第一步が準備されたのだ。獨創は當分の間は不人望だ。けれども段々時がたつに連れて、社會內の理解ある部分が擴大する。竟には社會の大體乃至全體がそれを採用するに至る。そうなれば社會の大體乃至全體の上に一新進步が結果したのだ。個性の成長を妨碍して、社會の秩序を保たうと努めるのは、餘りに短見だ。

人間は草木だ。動く草木だ。考へて動くことを習ひ覺えた草木だ。機械や制度をも案出し作出するに至つた。けれども、有形の制度即ち機械と、無形の機械即ち制度とに、人間自身がなつたり、使はれたりしては、その人間の聰明の淺さが激しい。社會は工場の觀を呈すべからず、果樹園、蔬菜畑の光景を示すべきだ。社會が若し工場の觀を呈するなら省みて吾人の聰明を增員せよ。これが吾人自身の義務だ。製造せずに生產せよ。すべての製造をば、生產の旗印の下に於て營め。勞働問題に適用して言ふならば、勞働者の人間的必要を犧牲にして物質的善を實現してはいけないのだ。いつでも人間的必要を先位に立て、そのための物質欲の滿足であるやうに行へ。制度がこの意味を佩きちがへない限り、制度は多々ます〱辨ずる。そして、そのやうな制度の多種と多數とは工場林立の觀を呈せずして、大小樹林の鬱々繁茂、近よつて觀れば櫻、杉、檜、樫、欅、それから茶も、山吹も、蓮華草さへも、四方八方に自己生活の自由暢達を享樂してをる事が發見されるのだ。生活が制度を支配してをるのだ。美人がどんなに盛裝しても、吾人は衣裳や化粧そのものに主要價値を認めない。その生命としての人を忘れないでないか。履き物を見ては顏を想ひ、

顔を見ては目を想ふでないか。要點は人にあるのだ。吾人の社會觀もこれでなくてはいけない。

三位一體などといふ言葉は、聯想が不聰明だから成るべく使ひたくない。けれども、組合と社會と個性とが、新時代の三位一體だ。そしてその神は個性だ。權威なき社會は柱なき建築だ。權威は遠からず。各人の內に常在する。盡日春を尋ねて春に遇はず、歸來庭前の枝頭に十分の春を見出だしたといふ古人がある。個性はうしろ姿のやうなものだ。背景だけれど、わが肉眼には常には見えない。

國內に自由を增設し、國際には秩序を創設する餘地と必要は無論ある。國內に於ては、法律が禁じてをる殺人も、國際には公行して怪しまれない實狀だからだ。外交は戰爭の脅威だと評する者にさへも、不幸にして隨分の眞理がある。强國の外交は、戰爭の可能を背景にした示威運動、弱國の外交は、風聲鶴唳、甲强たる獅子の瞬間が來れば、わたくしはあなたと同類だと言つて、爪を收めて低頭匍匐し、乙强たる鷲の瞬間が來れば、わたくしはあなたの同類だと言つて、羽翼を張つて舞ひ附く、恥づべき蝙蝠の生活技術だ。人間の、いや生類の最主要の精神たるべき「誇り」を涵養する機會なぞはありはしない。强國民が愛を涵養する機會がないと一對の現象だ。宇宙間の最大の姉妹德たる、愛と誇りとのいづれをも窒息させるのが現在の國際狀態だ。國際に理性が出演して、支配役をつとめる事は、各國のために必要だ。國際議會も、國際警察も、國際政府も、目錄の內に入れるがよい。自由貿易も、軍備公有も、研究するがよい。しかしながら、急務中の急務は、國際心の開發だ。國際心の開發は、國民心を聰明化する事だ。つまり各人が個性に今一とたび着眼するにあるのだ。個性から割り出した國民主義、個性から割り出した國際主義に、も一度立ち歸る必要がある。隨つて今日の小國が、制度に拘束されて明日も小國でゐなければならないやうな愚策を選ばない結果ともなる。世界を個性の逐鹿場と單純に見てしまう人が、人類の大多數者となれば、有害な國民主義も、有害な國際主義もなくなるのだ。地球を分割する事は、どう考へても欲が小さい。趣味が低い。頭がわるい。ヤソ道から入るに限らない。ナポレオン道からでも濟むのだ。コルシカの愛國者が佛蘭西の愛國者になつた徑路を、地續きの一星だけに、その表面だけに追ひ窮めればよいのだ。

教會衰へて國家昌ふ。衰へた教會は衰へるに値ひしたのだ。昌ふるに値ひする教會が、でるべき時機が熟しつゝある。何人か枯野の一角にマッチを一とつするだけの勞を厭ふのか。それがすられた後に、大小の團扇を持ちだす勞を厭ふのか。經濟的及び文化的實利害が交錯してをる時に、しかもそれが本質的には樂觀を奬勵する仕方に於て交錯してをる時に、唯だ一とつ缺けたるものは世を蓋ふ新宗教の熱と光りでないか。

生存競爭說と相互扶助論

優勝劣敗と相互扶助

文學博士 三宅雪嶺

韓退之の言に「夫鳥俛而啄、仰而四顧、夫獸深居而簡出、懼ニ物之爲ニ己害ー也、猶且不レ免焉、弱之肉、強之食、今吾與文暢、安居假食、優游以生死、與ニ禽獸ー異者、寧可レ不レ知ニ其所ー自耶。」とある。弱肉強食は禽獸の事、人類は聖人の力で是を免れたとするのであるが、人類にも同じく弱肉強食の行はれるとするのがダルヰン、禽獸も強ち弱肉強食でなく、互に扶け合ふとするのがクロポトキンである。自然淘汰と相互扶助と相對して居り、その何れが當つて居るかが問題となる。自然淘汰は必ずしも弱肉強食を意味せず、優勝劣敗をも意味せぬ。考へ樣に依つて是を意味するけれども、必ず論理的に伴ふものでない。強者と弱者と鬪へば弱者が敗けるに極つて居つても、兩虎相鬪ひ、兎が逃げることがある。巨大なる動物で消滅したのが多く、今日弱いのが澤山生存して居る。優勝劣敗と云ふても、何を以つて優劣を分つか。猫が鼠に優ると云へるか何うか。猫は人が畜つて居り、市中の猫を悉く絶やさうと思へば絶やせる。併し鼠はさうは行かず、人の力の及ばぬ處に隱れて生存する。もと優勝劣敗の語を下したのが間違つて居る。自然淘汰で進化すると斷定し、淘汰で生存するものが優種と早呑込みしたのである。自然淘汰で進化すること有るけれど、又退化すること無いとせぬ。矢張適者生存と云ふのが當つて居る。優劣でなく、境遇に於ける適不適に因つて決定することを指す。普通に劣種と看做すところも、劣種の適する場合に、その方が勝つ。身體の強健なる者と肺病患者と、何れが長生きするか。前者に定まつて居るやうで戰場に出て戰死し、肺病患者が生き殘る。塞翁の馬といふ喩は屢々見るところに懸る。ダルヰン自ら自然淘汰で優種が生存するやうに考へたこともあらうが、優勝劣敗といふやうなことを云はぬ。優勝劣敗は獨斷に過ぎて居る。自然淘汰又は適者生存の語の下で、優種の生存するを考へるのがあるが、

日本に優勝劣敗の語あるが爲め、之に拘泥し、勝敗は必ず優劣を以て決し、優種が後に殘るやうに考へるのが多い。世間は優勝劣敗で進み、進歩發達の爲めに競爭を無制限にするの已むを得ざるかに考へ、優勝劣敗は當り前のことであり、是が無ければ進化發達が止まるとする。判斷が簡單過ぎて居る。

優勝劣敗は弱肉强食と同じく、分り易い語であると共に、誤解を招き易い。政治界・經濟界で通俗語として用ゆるのは可、學術上の語として用ゆるのは不可、併し兎も角學術上に出でたので、眞理の爭ふべからざるものとする。注意せねばならぬ。優勝劣敗と云ふては相互扶助と相容れぬ。世界は優種ばかりに成ればよく、劣種を生存させて置くに及ばず、片々から劣種を撲滅してしまへば、文明が進むべき結果になる。併し自然淘汰に於てそれほど優劣が判明せぬ。或る境遇で優種としたのが、他の或る境遇で劣種になる。今日までのところ幾多の淘汰を經て、優種がいよいよ優種になつたのを見るけれど、幾百萬年前の劣種の、依然存在して居るのがある。人類前に劣等種族がどれほど生存して居るか知れぬ。自然淘汰で優種の出來る外、劣種の打ち洩れの多いのを認むるを要する。頭も尻尾も無いやうな海月類が平氣に繁殖して居る。弱肉强食と云ひながら、燕でも雀でも盛んに飛んで居り、鷄や鴨が片々から喰つて歩きさうで、さうは行かぬ。鷲や鷹は餘り多く居らぬ。優勝劣敗と云ふものゝ、何處でも戰鬪ばかりでなく、勝敗ばかりでなく、勝敗に關係ない事柄の方が多い。雀の合戰と云ひ、さう云へることがあるにせよ、普通に餘り見當らぬ。有れば隨分見物人が多からう。犬が喧嘩したり、鷄が喧嘩したりするけれど、喧嘩ばかりして居らず、面白く遊んで居る方が多い。

そこで動物界に相互扶助が行れるのに氣着いたりする。優勝劣敗は日本で言ひ謬つたのにしても、自然淘汰の語の行はれると共に、生存競爭の語も行はれ、多少優勝劣敗と云ふやうに考へるに傾く。自然淘汰を優勝劣敗の意味合に解したのもある。何でも猛烈なる競爭が古往今來行はれ來つたとする。競爭が東洋より劇しいだけ、此邊に氣附く。自然淘汰が事實と知らるるや、日々夜々競爭ばかりのやうに考へる。クロポトキンは生來此の類の事を好まず、人類や社會を善意に解さうとする。西伯利及び其他に居り、動物を見るに、別段に競爭せず、事有れば互に扶け合ふ。人類とて徒らに相爭ふべきものでなく、互に相扶助するのが當然であるといふに考へ着いた。相互扶助に重きを置く事になつた。

ところで相互扶助は優勝劣敗の語と撞着しても、自然淘汰の語と撞着せぬ。自然淘汰は解釋次第で如何になるとも、單に自然の勢ひであり、生存競爭するか、相互扶助するか、是を問はぬ。或る境遇に或る適者が殘存すと云ふに過ぎぬ事實を觀れば競、自然淘汰の行はれる間に、相互扶助して居ることが多い。相互扶助の爲めに競爭することがあり、競爭の爲めに相互扶助することがある。己れの種族と鬪ふことがあるとし、他の種族と鬪ふのは、己れの種族よりも廣い範圍に於て、扶助を事とする譯になつたりする。自然淘汰が有意識にし、又無意識にするが如く、相互扶助も有意識にし、又無意識にする。相互扶助が行はれつゝ、自然淘汰が行はれる。併し双方共にダルヰンが考へたよりも、クロポトキンが考へたよりも、更に廣く行はれて居る。

ダルヰンは綿密なる研究家であり、其の範圍以外に出ようとせぬが、出れば際限がなくなる。クロポトキンは動物を觀察して植物に及ばなんだ。植物にも相互扶助がある。全く無意識であつても、自づと相扶けて居る。森林で大木の許に新に芽を出し、成長しようとするのがある。大木の根の土の崩れぬやうにするところがあるの代り。大木はよく風を防ぎ、新芽の生長するのに便利を與へる。大木で風を防いで興れねば新芽は折れてしまふ。而して植物と動物と相互扶助して居る。雄蕊雌蕊の媒介は昆蟲に據つてされる。肉食動物は草食動物を喰ひ、草食動物は植物を喰ひ、何れも糞を以つて植物に肥料を與へる。死骸も肥料となる。皆無意識に於てする。人類も無意識ですること多いが、文明の進むに從ひ、廣く相互扶助の行はれるに氣附く。初め何氣無く植物を見、荐りに是伐採し、或は開墾の爲めに燒き盡したりするが、後、種々の事情で植物を繁茂させるの必要を感ずる。人類の力で植物を絶やすことが出來るが、是を絶やさうとせず、不用意に絶やして後悔し、禿山に植林したり、いろ／＼植物を繁殖させるに努むる。動物に對しても、力を恃んで悉く之を絶やさうとせず、絶えるやうになれば保存しようとする。益蟲と害蟲とを區分し、益蟲を助けようとする。漁獵でも捕り過ぎれば制限を設ける。魚鳥獸を捕り盡くしては、人類が困るのである。是れ自ら食ふが爲めに保存するのであつて、扶助すると違ふやうなれども、消滅させぬやうにするだけは確かである。動物を殺すにしても、成るべく苦痛を與へぬようにする事が自然に行はれ來つて居る。尙ほ動物で全く人類と沒交渉なのは甚だ多く、相互扶助どころではないやうで、

るが、人類が最も荒凉を感ずるのは、生物の全滅した土地である。砂漠で僅かの叢を見れば蘇生の思ひを爲す。而して叢には必ず昆蟲が居る。植物及び動物で人類と没交渉に見えるのは、注意せぬだけであつて、一度び注意すれば、微妙の間に交渉あるのを知る。今後知識の進むと共に、いよ／＼交渉多い事を見出すであらう。

人類が植物動物と扶け合ふところがあり、實は無機物とも相互扶助するところあるが、人類の中でいよ／＼然るべきである。而してその反對に生存競爭も烈しく、相互扶助の行き屆かぬやうに思へるのは何故であるか。人類間に相互扶助ないではなく、絶えず幾何らか行はれて居り、それで漸次繁殖し、廣く世界に繁殖するに至つたのであつても、自然淘汰を免かれぬ。豫め考へて用意する事が出來ぬ場合が多い。知識及び智慮はなか／＼進まぬ。意識的に相互扶助するのは狹い範圍に於てし、廣い範圍に於て殆ど全く考へ及ばぬ。廣い範圍では無意識的に相互扶助する。歴史を通じて間斷なく多少の戰役が起り、往々悲慘を極むる。近いところで二十四國對四國の大戰役が行はれ、戰死七百萬人に及んだ。それで優種が生き、劣種が死んだと云へず、普通に優種とするところのものの死んだのが少くない。實に惜しい人が澤山死んだ。併しエヂソンは戰役の爲めに文明が二百五十年進んだと云ふたとのこと、それは疑はしいとしても、世界に一變革を來たし、自然界を利用する方法の大に進み、列國協同して事業を企てることも大に進まうとして居る。世界人類の相互扶助の爲めに、大衝突を經たと云ふべきである。而して今尙ほ何處でも騷ぎがあり、特權階級と無權階級、資本家と勞働者と相爭ひ際涯（はてし）無いやうであるが、そこは夙く孟子に「民非水火不生活。昏暮叩人之門戶。求水火。無弗與者。至足矣。聖人治天下。使有菽粟如水火。菽粟如水火。而民焉有不仁者乎。」とあり、之と同じ事をバクユンが言ふて居る。日光や空氣や水や、人の生活に最も缺くべからざるものであつて、何人も之を爭はうとせぬ。何處にでも多くあるからであつて、食物でも衣服でも、何處にでも獲られさへすれば、誰も爭ひはせぬ。文明の力で食物及び衣服を充分に作り出す事が出來る。是まで文明の力を餘計な事に費して居り肝腎な事を懈つた。生活必需品を自由に得る事が出來れば、生存競爭が無くなる。生存競爭で費す力を悉く文明に注げば、どれほど文明を增進し得るか知れぬと云ふのである。

假りに優勝劣敗の語を用ゆるとし、相互扶助と共に行はれるけれど、普通に云ふ所に據れば、優勝劣敗は事實であり、相互

扶助は理想である。相互扶助は常に幾許か行はれながら、いよいよ之を行はうと努め、その行はれぬのを憂ふ。支那で云へば、相互扶助を主にするのが王道であり、優勝劣敗で事を處するのが覇道である。無政府主義者は王道に近く、現在列國の政治が覇道に近いこと聊か奇とする。

生存競爭說と相互扶助說

杉森孝次郎

生活の秘訣は創造だ。生産だ。第三帝國の建設だ。更に言ひ換へれば發明だ。生存競爭說も、相互扶助說も、この唯一最高義に開眼してゐない限り、權威はない。

國内に於て、個人と團體とが、その競爭に費やす精力の幾分を、相助に轉用する事は可能だ。國際に於て、國と國との場合にも同じ事が言へる。さうすれば、國民と人類との興味と努力は、從來よりも多く科學の研究に向けられる。自然資源と人力とを活用する途に進む。他國が現に所有する土地や物や權利を強奪する手段を採らずに、まだ宇宙内に存在しない價値即ち有形無形の財寶を新たに産出する手段を採る。竊盜し強盜する暇に耕やす。蒔く事によつて刈る人となる方法を選ぶ。そもそも吾人は宇宙の分身だ。分身とは代表者といふ意味だ。既成現存の價値即ち善を、他人や他國の手から自己や自國の手に移したとて、宇宙の價値に增加は結果しない。吾人の意思と行動とが、宇宙の絕對價に寄與しないのは恥だ。謂はゆる倫理說上の利己說は隣りの物をわが家へ運ぶ說だ。謂はゆる倫理說上の利他說は、わが家の物を隣家へ運ぶ說だ。その間に創造は皆無だ。他を殺す事によつて自己を生かし、他を小にする事によつて自己を大にし得ると考ふるのは小我の妄見だ。自己を殺す事によつて他を生かし、自己を小さくする事によつて他を大きくする事が出來ると思ふのも、めゝしい小德だ。他が全實在ならば聽こえもする。一部と一部との丈くらべで、勝たせたといつて悦び、勝つたといつて誇る同時間に、全實在は成長の歩武を飛躍的に進めつゝあるのだ。指角力で勝つた曉に、世界が遙かの先きに乾坤一擲の雌雄戰を始めて居るのを遠望するやうな悲劇が生ずる。男としても、女としても、考へ甲斐ある問題は、どうしたら綜合的活路が切り開かれるかといふ事だ。行ひとしても、この考への實行こそが美しい。

マルサスの人口論は最近勢ひを失ひつゝある。クロポトキン

も、その相互扶助說を、人間の生產力の可能に基づけてをるところは價値がある。新價値の發生と成長とに機會を與へる事が新經濟學の眼目でなくてはならない。デリール・バーンス君が『政治の諸理想』に於て、人類が生產に盡力する餘地あるを認め、戰爭に使ふだけの力を生產的意義ある科學工藝に使ふことを希望し、マツク・イーヷー君が『變化しつゝある世界に於ける勞働』に於て、マルサスの人口論に不信任を與へてをる如き、いづれも最近時の傾向に屬する現象である。人間と人間とは、嚙み合はずに助け合ふ事が、欲といふ標準から言つても正當だ。故ジェームスの非戰論を讀まずとも、人類は團結して、自然の敵に對抗すべくその戰鬪力を集中する事の價値は、近代人には次第に常識となつて然るべきだ。

生物學的に考察しても、進化は爭鬪力よりも發明力に負ふところ大なるは注意すべき事實だ。他の生物と喧嘩して勝つ能力よりも、周圍の事情に適應して變化する能力の方が、適者生存の原則を支配するのだ。漸進的變化即ちエリエーシャンと急進的變化即ちミユテーシヤンとが生物進化の原則だ。人の場合に於て、この原則は特に高度の適用を見る。單に生存競爭といへば、生物同志の存在爭ひに限られて響く。これでは不完全な生活哲學だ。クロポトキンは、自分も氣付いてをる通り、生物界に於ける相互扶助の事實を誇張してをる。けれども、他面に於て、謂はゆるダルウィン主義者が、生物界に於ける生存競爭の事實を誇張してをるのだから、無意味ではない。蟻を見ても、蜜蜂を見ても、相互扶助の能力ある生物が、生き殘る種族である事はわかる。個性的には强大であつても、相互扶助の能力無き生物は、種族的に、隨つて個性的にも衰滅する。序でに言うて置くが、デュウィー教授なども、この點には注意してをる。最近時の學者思想家で、單なる生存競爭を信ずる者は例外の迂濶者だ。

マツク・イーヷー君が『社會』に於て、面倒に興味を分類してをるが、元來個生と個生とは、個性と個性だ。人に於て殊にさうだ。男女が、補足的に相助すべく出來てをるやうに、すべての個生間には、この可能が理想的に備はつてをる。理想的にと言つたのは、聰明の發達に隨うてといふ事だ。野蠻人や、下等動物は、聰明が足りないから、しば〳〵相食み、相殺すほかに生くる術を發見しない。人殊に文明人の場合にあつては、他人を「利用」する。町を歩いて見ると、酒屋の隣りが餅屋で、その隣りは吳服屋で、それから魚屋、八百屋、下駄屋、米屋、煙草屋といふやうに並んでゐる。おもしろい現象だ。なれ唄へ、われ舞はんといつた調子だ。立派な相互扶助なんだ。深觀すれ

ば、卽ち明察すれば、すべての異なる二人間乃至多數人間には、この關係が成り立ち得る基礎はあるのだから、爭鬪はどうしても消極的必要事であつて、積極的有用事ではない。不聰明の間に合はせだ。聰明だに增せば、組織的滿足の天國が現前される。實をいふと、組織的滿足の天國を現前する必要の意識の高度なほど、聰明が增すのだ。聰明と創造とは、斯くして因々果々だ。

相互扶助には二元觀がある。組織といへば一元的になる。個性を本位として、全體を組織するのだ。活路の純眞なものはこれだ。友を組織する事が必要だ。敵をさへも組織しなくてはいけない。わが目的のためにだ。友から言へば、彼れ自身が世界を組織する意味になるやうに、すべての人は、すべての友を組織せよ。これこそが、眞の人格主義だ。カントの人格目的說にも悖らない。マキアヱリの利己主義を祖述するわけではない。深己が眞己だ。眞己は天地萬物一體の仁に徹するのだ。愛己の形に於て、質に於て、すべての愛他が行はれるほど、完全な愛他はない。

世界の仕事の十分の九は、競爭の結果だとジエームスは言うた。吾人は競爭を呪咀すべからず。その質を高める事に於ても競爭すればよい。公善を競爭し、愛他を競爭するがよい。生存

競爭の生存に高低種々の程度がある。ナツに取つては、彼れ自
身の信仰がその生存と一體であつた。生存といふ言葉の內容
が、單なる生理的存在の人もあらう。藝術的存在の人もあら
う。消德的存在の人もあらう。科學的存在の人もあらう――殉
者列傳を見ればわかる話だ。生存の意義を眞にし、善にし、
にせよ。その生存の競爭は、眞の競爭、善の競爭、美の競
だ。百利あつて一害なしとはこの事だ。

世界は食堂だ。列國はテーブルだ。吾人は皆な据え膳に
り付かうと願ふ。けれども、世界は臺所でもある。山野河海
圃でもある。魚菜を煮なくてはいけない。魚菜を養育し獲取
なくてはいけない。新食堂々も建てなくてはいけない。有り
はせ物で滿腹しようといふ根性がいやしい。無智と不精から
却しなくてはならない。支那、西比利亞、中央亞細亞、南
に、世界の聰明が河を決したらん勢ひで押し寄せる時は
始まつた。奇しきかな天の配劑。この場合にも、下等な生存
爭主義では敗者となる。

社會主義は自由競爭の弊に反抗して興こつた。ニーチエは
ルキン主義を倫理的に發展させた。十九世紀は生存競爭の高
された時代であつた。最近に及んで、その反對の協力が高調
れて來た。潮汐の干滿だ。音波の一高一低だ。勿論そこに進

は著しいがだ。國内に、そして經濟生活上に協力を求むるの聲は社會主義となり、共産主義となつて現はれた。國際に、そして政治生活上に協力を欲するの聲は國際聯盟となつて現はれた。けれども、國際聯盟は民族の自決と獨立とを意味として主張する。現にチエコ・スロヴキア國の新興となり、昨今はまたシリアの獨立が傳へられる。協力は、生存競爭とは、殊にこの後者が低級なものである時には、兩立しないであらうが、自治獨立とは兩立する。前世紀の半ばに現はれた『人の義務』に於て、マツチニは、人道的相互扶助と併せて國民的團結を唱導した。彼れはまた組合の豫言者的信者であつた。勿論國民そのものが組合の一種だ。クロポトキンも組合の信者だ。組合の信者は、多くは相互扶助說の信者だ。けれども、民族的に組んで異民族に對抗し、勞働者が相組んで資本家に對抗する如き場合に於て、組合の信者はまた實に生存競爭の信者たる一面を示す。大戰をなかに挾んで、相互扶助說が擡頭して來た。顧みるに、十八世紀は協力主義の思想が支配した。コズモポリタニズムが卽ちそれだ。ナポレオン戰爭が機會となつて、歐洲諸國は新國民主義に邁進した。大戰までの經過は、この眞一文字の發展だ。大戰は、すくなくとも交戰各國民をして、國民的に、卽ち擧國一致式に協力せしめる機會となつた。及び敵味方に天下を兩分して、二大組合に形成される機會となつた。相互扶助の哲學も
ば、大戰そのものが或程度までは敎へた。けれども、それよりも主要な事實として、大戰の反動が起つた。大戰は、大なりとはいへども、隨つて列國を二國に縮めたとはいへども、人類同志の戰ひであつた。その反動として、人類的相互扶助說が擡
を得んとしてをる。大勢は、今は相互扶助の方に傾いてをる。無論人間の事だから、競爭は依然として存する。ただその形
改めて來た。競爭の要は頗る心得てをる現代人だ。投票は協
でなくてはならない。マルクスはマッチニの國民主義を笑うた
世界を階級別する事は、世界を國民別すると等しい歷史主義だ。論理主義は、この歷史主義を鋒かさねばならない。けれども、その鋒端は個性でなくてはならない。それから、打つて形成を與ふる鎚も、個性でなくてはならない。個性の名に於て、吾人は宇宙を成壞すべし。

生存競爭は、個性競爭でなくてはいけないのだ。相互扶助は個性の協力でなくてはいけないのだ。協力も競爭も、個性の
めといふ條件を失ふ瞬間に於て、生命は逃げたのだ。

個性は、宇宙論的に言へば、宇宙に於ける位置の特異を條件として成り立つ。生物學的に言へば、地上に於ける物力の分布の不平等を條件として成り立つ。けれども、すべての個性は、

通性の半面だ。個性は、通性に進步を與ふる原動力だ。通性だけでは、社會も實在も進步しない。個性の意義は卽ち社會進步の條件たるところにあるのだ。生存競爭は個性競爭でなくては本統でないから、生存競爭は相互扶助の別名だ。亡びるやうな個性と種族とには、存在に値ひしなかつたのだといふ說明が結局成り立つ。社會がその人、その國民の存在を有用とし、必要とする事が、人または國民が存在を保つための第一條件だ。價値ある個性は、公善の生產者たる意義を有するのだ。競爭と協力とは、こゝに至つて合致する。

此問題の社會的意義

堺利彥

生存競爭といひ、相互扶助といひ、若しそれが單なる生物學上の研究であるならば、決して一般社會の問題にはならない。從つて中央公論もそれを呼物の題目にはしない筈である。殊に生物學の門外漢たる私に意見を求められる筈はない。私は此の問題の社會的意義を考へて見る。

元來、ダアキンが生存競爭といふ事に氣がついたのは、マルサスの人口論を讀んだ時からだと自ら云つてゐる。マルサスの人口論は、人口の增加率が食物の增加率に超過する事を力說して、貧困といふ社會現象の人生に免るべからざるものである事を示し、從つて其の現象に對する資本家の責任を解除した所に、其の學說の社會的價値が存してゐた。所で、其の人口論からダアキンが新學說のヒントを得たと云ふのは、彼が當時人間社會に全盛であつた資本家的自由競爭を粉本として、自然界に行はれてゐる生存競爭の事に考へ及んだわけである。故に生存競爭說の中には、當時に於ける人間社會の生產組織の反映が見られるのである。

然るに進化說が發表された時、資本階級の擁護者たる自由主義學者等は『人間の先祖は猿だ』といふ其の學說を以て封建貴族の特權を打ち破る武器に利用し、貴族階級の擁護者たる保守主義學者は、(例へばキルヒヨウの如き)却つて進化說を以て社會主義の同類と爲し、あんな學說を持て囃すと今に大變な事になるぞと資本階級を威かした。そこでヘッケルが大いに慌てて、進化說と社會主義とは火と水との樣なものだと辯じ、進化說は全然貴族的だと曲論したりしたのは、有名な話である。

實際、當時の資本階級は、上に封建貴族の餘力を敵とし、下に新興の勞働階級を敵としてゐたので、巧みに進化說を兩方面

の武器に利用した。即ち勞働階級に對しては、生存競爭說に依つて資本家と資本家との競爭、國家と國家との競爭を是認せしめ、又適者生存說に依つて資本家優勝の正當を是認せしめ、又徐々緩々として長年月の中に行はれる生物體の進化の例に依つて、社會進化も亦それと同じく決して急激に行はれ得べき筈のものでないといふ事を是認せしめようとした。進化說が盛んな勢ひを以て一世に流行したのは、主として斯ういふわけである。即ちそれが資本階級擁護の爲に役立つたからである。

然るに勞働階級、殊に社會主義者等は、キルヒヨウの指摘した通り、進化說を以て資本階級と戰ふ一つの武器に利用した。マルクスが初めてダアヰンの新著を讀んだ時、非常にそれを感歎して、ダアヰン自身は知るまいが彼は革命の味方だと云つたといふ話がある。實際、ダアヰン說が、一見固定のものと思はれる生物界に不斷の進化發達のある事を說いた所は、社會の進化發達を說くマルクス說に取つて、極めて有力な味方であつたのである。

所が、前に云ふ通り、資本階級は盛んに其の進化說を自己の擁護に利用してゐるので、社會改革者としては、進化說の資本擁護に利用される方面を大いに論破する必要があつた。ド・フリーの突變說が大いに社會の注意を引いたのも、單なる進化學上の修正說としてではなく、前記の徐々緩々たる進化を正當とする思想に對して、突變の可能と有效とを擧示した、其の社會的效果の爲である。

クロポトキンの相互扶助說が、單なる進化學上の修正說、若しくば補足說として、十分の價値を有する事は勿論である。然しそれが、生存競爭說を以て社會の縱斷的競爭を是認させようとする紳士閥學者の努力に對して、大なる邪魔となり、從つて又、一面には勞働階級の親和團結の爲に有力なる學理的歷史的の根據となつた所に、其の社會的效果が存してゐる。換言すれば、相互扶助說は、進化說及勞働階級の武器として利用する爲に、其の弱點と見える部分（即ち敵に利用される部分）について、味方の爲に最も有利なる修正、若しくば補足を加へたわけである。

此の問題については、私としては之だけの事を云つて置けば澤山だと思ふ。若し此の短い說明に依つて、讀者諸君が他の專門諸學者の所說を讀む時の、幾分かの道案內になる事が出來るなら、私として大いなる光榮である。

生存競爭と相互扶助

木村久一

一

生存競爭と相互扶助と云ふ象題であるが、この對立はダーキンとクロポトキンの對立を思はせる。併し生存競爭と相互扶助の對立を、ダーキンとクロポトキンの對立と見るのは、見る者の誤りである。

ダーキンの struggle for existence を譯して、何時も生存競爭と云ふのは正しくない。struggle for existence は直譯すれば『生存の爲の奮鬪』であつて、必ずしも生存競爭ではない。成程生存の爲の奮鬪は、生存競爭の形を取ることが多い。併し生存競爭は、生存の爲の奮鬪の凡てゞはない。

生物同志の間に行はるゝ生存の爲の奮鬪は、成程主に生存競爭であるが、ダーキンは、生物同志の間に行はるゝ生存の爲の奮鬪だけを struggle for existence と云つて居るのではない。自然に對する生存の爲の奮鬪をも、struggle for existence と云つて居るのである。砂漠の縁の濕氣の少ない所に、旱魃と戰ひつゝ、辛うじて生きて居る植物の如きは——ダーキン自身の擧げて居る例自然に對す——る生存の爲の奮鬪であつて、矢張 struggle for existence である。されば生存競爭は『生存の爲の奮鬪』の一部に過ぎない。struggle for existence は生存競爭よりも範圍が廣い。即ち生存競爭は『生存の爲の奮鬪』の一形式に過ぎないのである。この點はクロポトキンも認め居る。

併し『生存の爲の奮鬪』にはもう一つの形式がある。それはクロポトキンの謂はゆる相互扶助である。同種に屬する、時には種を異にする生物が、互に助け合ひつゝ自然に對し、或は他の生物に對して、生存の爲に奮鬪するのは矢張 struggle for existence である。相互扶助は struggle for existence の一形式であつて、これに對立するものではない。而してクロポトキンが、この點に氣附いて居るかは疑問である。

二

併し struggle for existence を狹義に解すれば、生存競爭と譯して可いことはダーキンの著書に明かである。併しクロポトキンの『相互扶助論』を讀んで見ると、彼は狹義の struggle for existence 即ち生存競爭の意味を誤解して居ることが分る。或

は生存競爭と云ふ事を文字通りに、生存の爲に相爭ふこと〻考へて居る。彼はこの語のダーヰンの謂はゆる『比喩的な意味』が分らないのである。

クロポトキンは『相互扶助論』に於いて、動物だけを問題にして居るが、進化の問題は云ふまでもなく、動物だけの問題ではない。植物をも含めた生物全體の問題である。(宇宙進化論など〻云つて、問題をモツト廣くして居る學者もあるが、ダーヰンの進化論は生物だけに關するものである。)而して生存競爭と云ふ事を、クロポトキンのやうに解すれば、植物界には生存競爭と云ふ事はない筈である。ダーヰンが進化を論ずるや、生物全體を問題にして居るのである。されば彼が、生存競爭を進化の要因だと云ふのは、勿論生物全體に通じて云ふのであつて、動物界にだけ通じ、植物界には通じないのなら、こんな事は云はない筈である。これから考へて見ても、クロポトキンはダーヰンの意味を取り違へて居ることが分る。

植物は各々、數百數千乃至數萬の種子を貽す。併し他の植物——同種に屬する、或は種を異にする他の植物の爲に、その中のホンノ僅かきり生存を全うしない。彼等は勿論養分を得んが爲に、嚙み合ひや摑み合ひはしない。併しこれは立派な生存競爭である。

クロポトキンは、謂はゆる兩虎深山に相爭ひ、双龍溶潭に鬪ふやうな事だけを、生存競爭と考へて居る。さればこそ『同種に屬する動物間の、生存の爲の激烈な競爭は、熱心に探し見たが見つからなかつた。』の『同種間には相互扶助が法則だと云ふのである。彼は種を異にする動物間の生存競爭は認めが、同種に屬する動物間にはこれを認めない。これは生存競の意味を誤解して居るからである。生存競爭と云ふ事をこん風に解して居つては、進化論が分るものではない。

次ぎにクロポトキンは、社會生活即ち相互扶助と見て居るしいが、これは大いなる誤りである。或る動物が社會生活をんで居るからとて、それを直ちに相互扶助と見るのは速斷である。社會生活を營んで居る動物間にも、文字通りの爭鬪が決て珍しくない。又文字通りの爭鬪がなくとも、生存競爭の大にあるのである。

或る睦ましい一家で、生活難の爲に、妻が子供を飢ゑさせいと、餘りに食物を節した爲に營養不足に陷つて、その結果病に對する抵抗力が弱くなり、遂に病氣に罹つて死んだとしなら、それは立派な生存競爭である。社會に於ける生存競爭はない、實にその一家に於ける立派な生存競爭である。生存爲に、文字通りの爭鬪でなければ、生存競爭と思はないクロポ

トキンは、この一家に生存競爭を認めまいが、そんな見方は笑ふべき誤謬である。

或る動物が、如何に相互扶助の生存を實行して居つても、食物が少なければ、よし食物の爲に嚙み合ひ殺し合ひはしなくとも、食物を得るに適當に生れたもの、即ち適者が生存して、不適者が淘汰を受けることはどうしても免れない。然らば其處に、生存競爭は立派に存するのである。クロポトキンが觀察した西比利の如く、動物が自然に對して、生存の爲に激烈に奮鬪しなければならぬ所に於いては、それだけ激烈に生存競爭が行はれざるを得ないのである。その西比利に於いて、同種に屬する動物間の生存競爭は、つひ見附からなかつたなどは丸でお話にならない。これを以て見るにクロポトキンは、生存競爭の意味を全然誤解して居る。彼のやうに解すれば、生存競爭は人間の社會に於いても餘り多くない。彼が彼此云つて心配する必要がない位、人間は好く相互扶助を實行して居るのである。

三

クロポトキンは『社會生活は生存の爲の奮鬪に於いて、最も有力な武器だ。』と云ひ、又『如何なる事情の下に於いても、社會性は生存の爲の奮鬪に於いて、最大の强味だ。』と云つて居るが、これは出鱈目である。成程社會生活を營んで居る爲に、生存の爲に利益を得て居る動物のあることは事實である。併し或る動物は、却て社會生活を營まない爲に、敵の目を逃れて生存の爲に利益を得て居る。されば『如何なる事情の下に於いも、』社會生活は生存上の最大武器だなどゝ云ふのは、自然界眞面目に觀察しない者の放言である。

社會生活乃至相互扶助が、或る動物に取つて、生存上の一器なることは事實である。これは烱眼なるダーキンの決して逃さなかつたところである。併しそれは體力や、敏捷や、爪や、保護色等と並ぶべき武器に過ぎず斷じてそれ以上のものはない。ダーキンはさう見て居つた。クロポトキンの『最適は最も社會的な動物である。』などは矢張出鱈目である。

『相互扶助論』の表題は、相互扶助が進化の一要因なること表示して居る。併し本文を讀んで見ると、クロポトキンは相互扶助を、進化の主要なる要因（定冠詞附き單數）とも進化の要なる要因（複數）の一つとも云つて居る。こんな事を云ふは、彼が進化の意味を誤解して居る結果である。予は先に、ロポトキンは生存競爭の意味を誤解して居ると云つたが、彼更に進化の意味をも誤解して居る。

今述べたやうに、相互扶助が或る動物に取つて、生存

であることは事實である。或る動物は確かに相互扶助の爲に、種として繁榮して居る。併し繁榮は何も進化ではない。予は相互扶助は進化どころかその種の進步だに多く促さないと思ふ。人類以外の動物は、相互扶助を行つて居るが爲に、果して進步しつゝあるだらうか。蟻や蜂の社會は段々進化しつゝあるだらうか。又人類の進步は、果してクロポトキンが考へて居る程、相互扶助の賜であらうか。予は人類の進步は、全然相互扶助のお陰を蒙らないとは云はない。併し主なる原因は他にあると思ふ。

或る動物が種として繁榮したからとて、それは何も進化ではない。クロポトキンは繁榮即ち進化と見て居るらしいが、そんな馬鹿な事はない。進化とは、自然淘汰その他によつて、從來なかつた新しい種が生じて行くことを主として云ふのである。かくの如きプロセスは、云ふまでもなく主として生存競爭の結果である。然らば進化の主要なる要因が、生存競爭なることは動かすべからざる事實である。相互扶助を以て、進化の主要なる要因の至主要なる要因の一つとするのは、牽強附會も甚だしいと云はなければならぬ。ダーヰンは何と云つても科學界の巨人である。クロポトキンなどの齒が、容易に立つものではない。

四

要するに、クロポトキンの生物學說は立派に落第である。併しながら、クロポトキンの生物學說は間違であるから、彼の主張は何の價値もないとは必ずしも云へない。我國の生物學者は、この論法を用ゐて居るやうであるが、これは正しい論法でない。クロポトキンは科學者よりは主義者である。彼の主張は彼の生物學說に先だつて居るのである。只だ彼は、主義の主の爲に、都合の好い生物學說を作つたのである。

鳥に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり、鳥類さへかくのし、されば孝養は我等の當然の義務なりと說く人があつてもこれに對して、鳥の反哺と云ひ、鳩の三枝と云ひ、研究に由ば共に事實にあらず、故に孝養は我等の當然の義務なりはひ難しと論ずる人はあるまい。前の論も正しくないし、後のも間違である。孝養は我等の當然の義務なりと云ふ主張は、物界の事實から得たものではない。鳥の反哺や鳩の三枝が、實であらうと事實であるまいと、それはこの主張の價値に關がない。この間に論理的關係をつけるのが抑も間違である。れは事實（Sein）と當爲（Sollen）の混同である。

事實を直ちに當爲とするのは間違である。事實はそれだけ

は、決して當爲を盾むものではない。とは云へ事實を無視して當爲を作ることも勿論間違である。ショーペンハウエルは、男子は多情なものである(事實)から、一夫一妻が至當である。(當爲)と云ふやうな事を云つたが、これは事實を直ちに當爲としたもので間違である。併し若し此世に、男女の一方が非常に少數で他方が非常に多數なら、一夫一妻の主張は不適當である。事實を無視して當爲を作るのは間違だとは此處を云ふのである。

只今の場合、クロポトキンの生物學說は事實(正否は兎に角)であつて、彼の主張は當爲である。而してこの二つの間には、論理的關係はないのである。されば彼の生物學說は落第でも、彼の主張が正しいことは不可能ではない。彼の生物學說は無價値だから、彼の主張も無價値だと云ふ論法は、矢張無價値である。然らばクロポトキンの主張は正しいかと云へば、それは俄かに斷ぜられない。それは動物界などの事實以上、モット高い見地から、モット廣い考慮に由つて定めなければならぬ問題である。動物は動物、人間は人間、無造作な類比などに由つて定めらるべき問題ではない。この點に於いては、クロポトキンも我國の生物學者等も、共に誤謬を犯して居る。

生存競爭と相互扶助

理學博士　石川千代松

生存競爭！　ダーウヰンは彼の有名な種原論第三章に次の樣に書いて居る。

前章に自然にある生物の個體間に變異がある事を示して置いたが、此事實は決して疑問となつた事はないと思ふ。之れ
色に變つた形ちのものが、種であると云はれても亞種即ち變種であると云はれても我々には夫れは如何でも宜しい譯である、例之ば英國にある二三百の疑はしい植物の分類學上の位置は何んであらうとも彼れ等が判然と變つたものであるとの事が承知されさへすれば夫れで澤山である、けれ共唯個體間に變異があるとの事と其内の或るものは判然とした變種であると云ふ事は、此研究の基礎としては必要であるには違ひないが、夫れ計りでは如何にして種が起つたかと云ふ事を理解する事は殆んど無益である。(此問題で我々に必要な事は「如何に生物體の一部の構造が他部の構造又は生活の有樣、又は個生物全體其物が他の個體に對して最も精密に適應して居る樣になつたのであるか」である)。處が此樣な精密は連帶適應(Co-adaptations)

ツツキとヤドリキとに見る事が出來、獸類の毛や鳥類の羽毛に摑まつて居る下等な寄生蟲にも、水中を游泳する甲蟲にも、亦最も弱い風にも吹き飛ばされる翼の生へた種子にも見る事が出來、其他生物界には此の樣な微妙な適應は何處にも亦何れの部分にも見る事が出來るのである。

又私が種の初めであると云ふた變種が如何して遂に判然たる種となつて、同一種間の變種内にある變異とは全々違つたものになるであらうか？　又之れ等種の集合で屬と呼び一屬内の種間の差違と全く變つたものが如何して出來るか？　總て之れ等は次章に一層委しく述べんとする所の生存競爭から起るのである。此競爭の爲めに變異は如何に僅かなものでも、そして如何なる原因から來つたものでも、夫れが一種内にある個體に如何計りでも有益であるならば、其個體と他生物及び生活の物質的の有樣との間にある非常に複雜した關係に於て斯樣な個體は保存されて又此形質が次代に遺傳されるのであらう。すると又此樣な子孫が生存する機會を多く持つ譯である、夫れは何れの種の個體でも澤山に出來る内で、僅かのもの計りが生き殘つて行く事が出來るからである。私は斯樣に僅少の差異でも夫れが必要であるならば保存されて行く事を自然淘汰と云ひ、人間の淘汰力と區別した。併し之れにはハーバートスペンサー氏が使用した適者生存なる言葉が一層確實で又同樣に宜しい譯であ
人類が淘汰で大なる結果を得る事は確かな事實で自然から受
た僅かでも有要な變異を積み疊ねて自分の役に立たせる樣に
物體を適宜に變ぜしむる事が出來るのは明かである。けれ共
然淘汰は後ちに説く如く、絶へずに働いて居る力で人類の
試みに對しては非常に優つたものである。

私は之れから今少し委しく生存競爭を論ぜやうと思ふ。此問題は肝要であるから私は私の將來の書物には一層委しく之れを論ずるであらう、ドカンドルとライエルとは委細に又哲學的に總ての生物は烈しい競爭をする事を示した、植物に付いては
ンチエスターのジインなるダブリウ、ハーバート氏の他には
心に又巧みに此問題を論じたものはない、のは全く彼が有す
園藝學の知識に依るものである。生活の爲めに一般に競
ある事を認めるのは最も容易い事であるが、之れを始終考へ
居る事は困難な事である。併し此事は充分に心の底迄染み込
で居なければ生物の分布、數の多少、消滅、變異等の事實に
係した自然の釣り合ひは中々明白にならないか又は全く誤解
れるものである。我々は自然が快樂で充たされ食物も多過ぎ
程ある樣に思ふ、併し我々はそこらに閑散に鳴く鳥が多くは
蟲や果實を喰ふて生きて居るから、絶へず生物を滅絶しつゝ

る事を忘れるし又之れ等鳴禽又は其卵又は雛は食肉の禽獸に殺されつゝある事をも忘れる。して我々は食物は充分にあるとしても此食物が毎年四季間同樣に澤山あるものでない事を考へない事が多いのである。

ダーウヰンは此樣に生存競爭の章の始の項に書いたが、其第二項には又續けて次の樣に書いて居る。

私が茲に用ゆる生存競爭なる語は一生物と他生物との關係で其生命計りでなく又其子孫を殘す事に迄でに及ぼすもので私は之れを廣い意味で又比喩的に云ふのである。

例之ば二頭の食肉動物が食物の爲に死ぬか生きるかと云ふ時には實に爭鬪すると云ふ事が出來やうが、沙漠の緣に生へて居る植物は濕氣に賴つて生命を保つて居るのではあるが、之れも渇に逆つて競爭すると云ふ事が出來やう、年々何千と云ふ種子を生ずる一株の植物では平均唯一粒の種子が生じて成長すれば足りるのであるから、之れ等の種子は相互の間にも又同じ地面に生へて居る他の植物とも競爭する譯である。ヤドリ木は林檎其他の樹木に寄生するもので夫れと關係して生活して居るものである。夫れで若し餘り多くの寄生木が同一の樹木に寄生する時は宿主は爲めに枯れるであらう。又同一の枝に生へる澤山のヤドリ木は相互競爭して居るのである。夫れでヤドリ木は鳥の爲に分布されるのであるから、其の生存は比喩的には他の有果植物と競爭をする譯である。つまり私は之れ等色々に移り變り行く處の意味に於て都合上生存の爲めの競爭と云ふ言葉を使ふのであるのである。

であるからダーウヰンの生存競爭と云ふのは決して一疋の動物が生存する爲めに他のものと食を爭ふて爭鬪すると云ふ事計りではない、二頭の猫が一疋の鼠を見付けた時には或は之れを得んとして爭鬪する事もあるだらうが、併し之れは澤山の生存競爭の内の一つであつて、生存競爭と云ふても決して自働的のもの計りではなく、多くの場合では他働的である。例之ば東京近傍の野に住む野兎の體面には色々の毛が生へて居るが、東京の氣溫が今日の樣であらば其體色が其棲息する處の外圍に能く似て居るのであるから、其數は先づ年々歲々、他の事がなければ、餘り增減せない譯である。處が何にかの原因に依つて東京の氣溫が下つたので年中雪の降る月が多くなつたとする。すると今迄冬月になつて枯草の內にあつて保護されて居た兎の體色は眞白な世界には不適當になる譯で、容易に其敵の狐に見付けられる樣になる。すると其澤山に居る野兎の內で白色の毛を澤山持つて全體の色が白色又は之れに近いものは他の體色のものに比べると、だうしても狐に見付けられる場合が少ない譯であ

る、であるから之れ等の兎は他のものに比べると生存上都合が好い譯で、從つて子供を產む數も多い譯である。處が此樣な形質即ち此場合では白色の毛の多い事は子孫に遺傳するから、其子供は又同樣に他のものに比べると能く生存して又其形質を子供に傳へて行き總て他の毛色の兎は死滅するのに此白色の多い兎計りは殘つて行く譯である。斯樣にして出來て來た白色の毛がダーウヰンの淘汰で起つても激變で生じても、夫れは構はない、何れにしても白色のものが出來れば宜しいのである。之れは僅かに一例であるが生物界に起る現象は總て皆之れであつて、動物の體色、ミミクレー、本能、等は皆斯樣にして變異の上に競爭で生じて出來たものである。

我々人間の間にも相似雙子の外には二人並べて全然同一のものはない、斯樣な双子でも亦委細に之れを調ぶる時には其間に幾等かの相違を見るものである事はヤンヒンスの研究で分つて居る。であるから變異は何處にもあるもので、變異があれば各個體間に競爭の生ずるのは自然の結果である。尤も今も云た樣に此競爭と云ふは單に自働的のもの計りではない、他働的のものも澤山ある。赤痢、コレラ其他色々の傳染病苗が同じ樣に人體に這入つて來ても或る人は之が爲めに死に、他のものは下痢位で止まり又下痢を起さないで濟むものもある。之れ等は多くは其體質に依るもの、即ち夫れに與ゆる力の強弱に因るものである。又今年流行したインフルエンザの如きものも或る人は其爲めに斃れ他のものは少しく熱が昇つた位で濟んだものもある。

併し生存競爭は單に個體と個體との間に計り起ものでなく、個體を構成して居る所の組織細胞の間にもあるものである。例之ば一本の骨内にある各細胞は其骨が遂げる仕事に最も能く適應してあるもので、夫れは此骨を構成して居る澤山の細胞の内で骨の仕事の最も都合の良いもの丈けが殘つて來た譯である。即ち夫れ等骨細胞間に一種の競爭が起つて其爲めに之れ等細胞の位置方向等が定まつたのである。

此樣な競爭は又夫れ計りで止まるものでない、誰れも知る樣に總て我々の身體も他の生物の身體も同じであるが、澤山の單位から出來て居る事は分つて居る、之れ等の單位は皆生殖細胞内にあるもので、之れが發生して始めて色々の生物が出來るものである、蛙の卵子は發生して來ると始めは蝌蚪が出來て、夫れが段々と變態生長して遂に親の蛙になるのである。して之れ等の單位は色々で階級を異にするもので、或るものは細胞其物の構造を代表するものもあるし、又他のものは細胞又は細胞の群を代表するものである。之れ等が生殖細胞内にある事は蛙

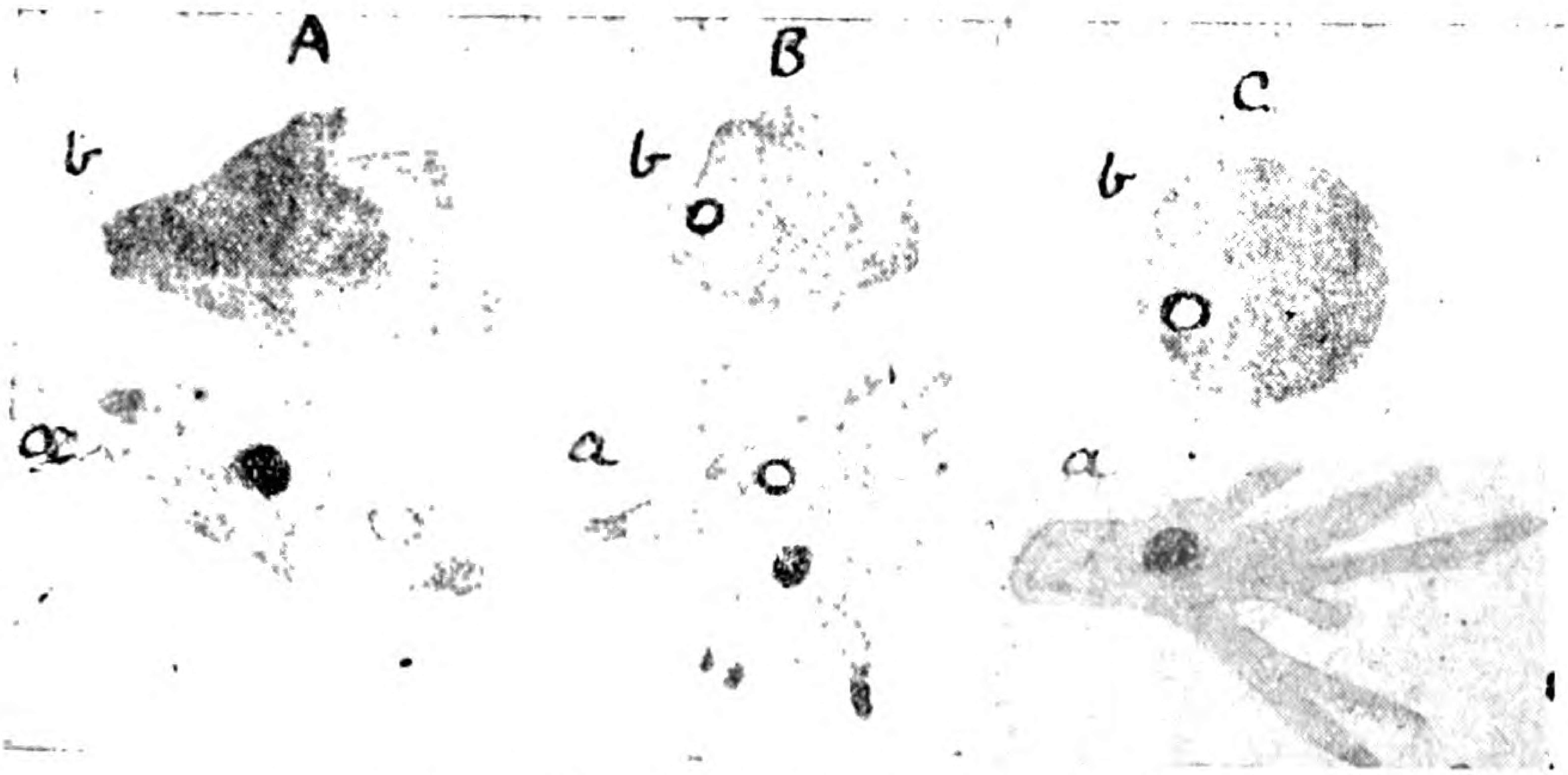
の卵と精子とが一緒になつて卵が發生を始めると出來た子蛙には又親蛙にあつた形質が段々と現出して來るので分る。動物全體の形態、體色、斑紋から各組織器官等も皆兩親にあつたものと同一又は之れに近いものが子供の身體に現はれて來るのである。

であるから、子供の身體に現はれて來る各組織器官等は何れも皆親の體にある生殖細胞の内に單位となつて這入つて居たものである事は疑ひのない事柄である。して之れ等の單位が發生の際色々に發達して遂に我々の體にある各種の組織器官等になるものである。

夫れであるならば之れ等生殖細胞内にある單位は如何にして出來て來たものであるか、我々の如きもの又は總て他の多くの異細胞生物は始めから今日の有樣で此世に出て來たものであると往時は考へた事もあるが、夫れは古い昔時の事であつて、今日になつて、斯樣に考へる人は殆んど一人もないと云ふても宜しからう。少なくともダーウヰンが彼の種原論で正確に生物の進化を證明してからと云ふものは生物の進化は既に論説ではなく事實である事が解つたのである。であるから今日玆に之れを論ずる必要は既にない、唯生物は如何にして進化したものであるかを云ふて行けば宜しい譯である。

誰れも知る樣に最下等の生物で今日我々が知る處のものは單細胞の生物であらう、教科書にでも何にでも書いてある彼のアメーバと云ふものは即ち其一つである。

古い古い昔地球に始めて出來た生物は原形質の一塊であつて、まだ今日の單細生物迄にならなかつたものであつたゞらう、斯樣な生物はヘツケルが云ふ處のモネラの如きもので其單位は同一なものであつたらう、斯樣なものが色々違つた外界の刺戟を受けると其單位に違つたものが出來て來るだらう、例之ば始めの生物體の單位は皆Aであつたらうが、之れが變つた外圍の刺戟を受けてAの或るものは變つてBとなる、すると此ABの單位が各々增殖して遂に二つのAB單位を持つた生物が出來、之れが又ABCとなりABCDとなり遂に澤山の違つた單位から成る生物となるものであるだらう、處が之れ等の單位は始めの内は原形質内に散在して居たらうが、其内に生活して居る時に直ちに働いて居るものと、さうでないものとに分れ其一群は一ケ處に集まつて核となつたのであらう、夫れで核外にある單位は細胞が生活して居る間一定の仕事をして居るが、多くの肝要な仕事は核が掌どる樣になる。例之ばアメーバを有核無核の二部に切斷すると有核の部分は運動も、感じもし、食物も體内に入れて、之れを消化するが無核の部分は擬足を出入すれ



アメーバ有核(下)と無核(上)との二部に切斷した蟲

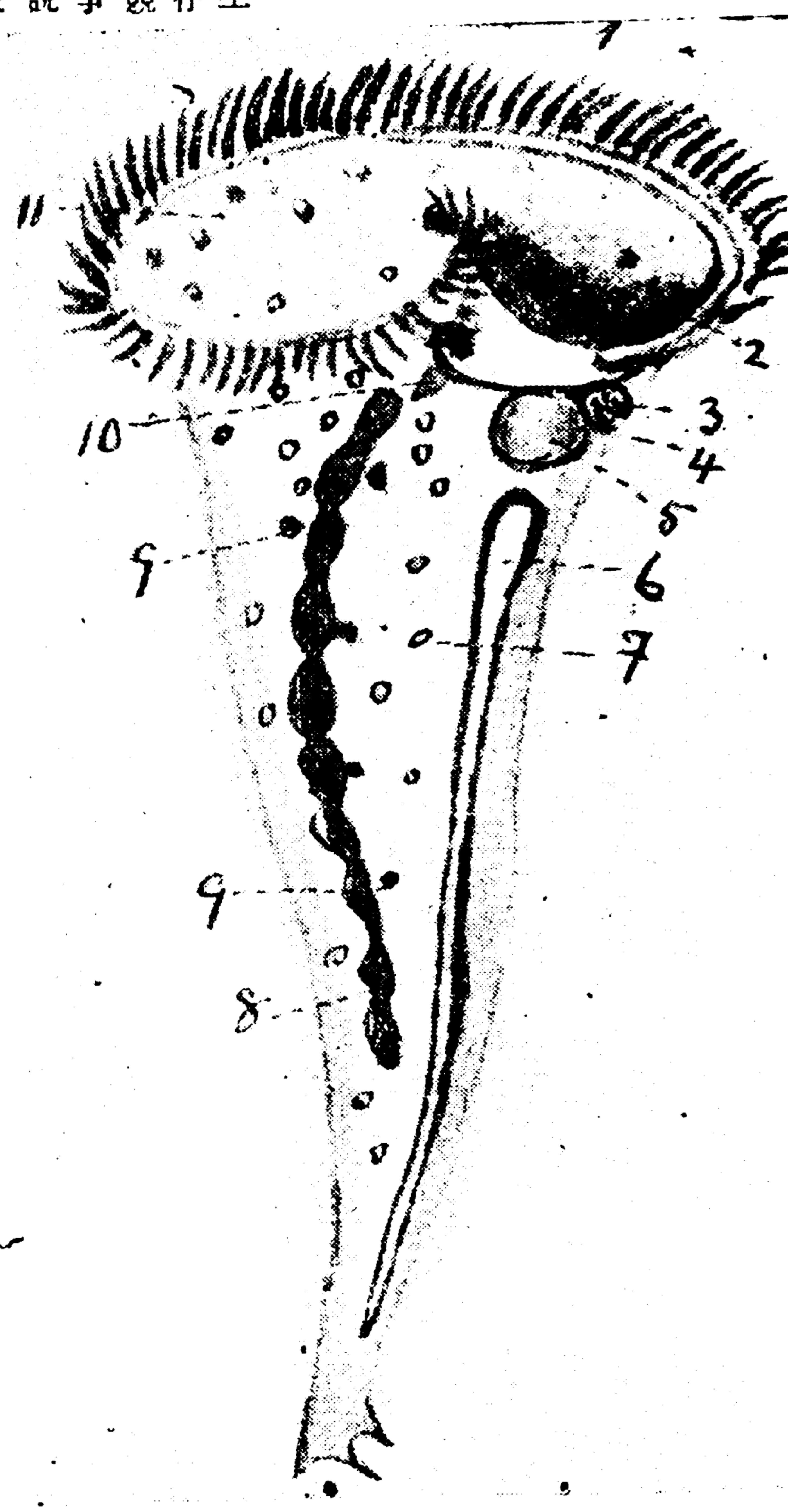
直きに球形になつて食物も取る事が出來ないし、又既に體內に入れてあつた食物も消化する事が出來ないから生長する事は無論出來ない譯である。であつて見るとアメーバには核は中々肝要なものである事は明かである。

　アメーバ計りでない、總て他の單細胞生物でも核と細胞とは斯樣な關係を持つて居もので、單一の細胞としては最も複雜た構造を示して居る纖毛蟲類杯でも核は生活の際に唯肝要である計りでない、又生殖の時に最も必要なものである。

　例之ば喇叭蟲の如きものになると其細胞體內は中々複雜したもので、先づ其前端は平たくなつて、之れが中央に渦卷きの樣になつて其底に口が開いて居、其周圍に太い纖毛が生へて居り、全身の周圍には又細い纖毛が列をなして生へ、又縱の線が見へるが、之れに二樣あつて其一は筋素であつて、他のものは神經の素である。夫れから又體の後端は擬足の樣なものを出すし、體內には又伸縮胞が三つある。其一つは主胞と云ふもので球形で他の二つは細胞と云ひ、細く長く體內の不用液を集めて主胞に送るものである。夫れに又糞の出る處も大概定まつて居る。

　夫れで此樣なラツパムシを切斷して見ると幾つに切つても之等斷片に核さへあれば皆完全なラツパムシとなるが、若し之れを第三圖に示す樣に有核と無核の部分に切斷すると有核のK部は完全な蟲體となるが、無核のabは暫時は生存して居るが纖毛其他の器官も出來ないで遂に球形に變じて死ぬものである。

　であるから此場合でも核が其生活に必要である事は明白である、夫れ許りでなく茲に面白い事には、此ラツパムシ其他纖毛蟲類には總て二種の核があつて其一は大核と云ひ、他の一つは



ラッパムシ

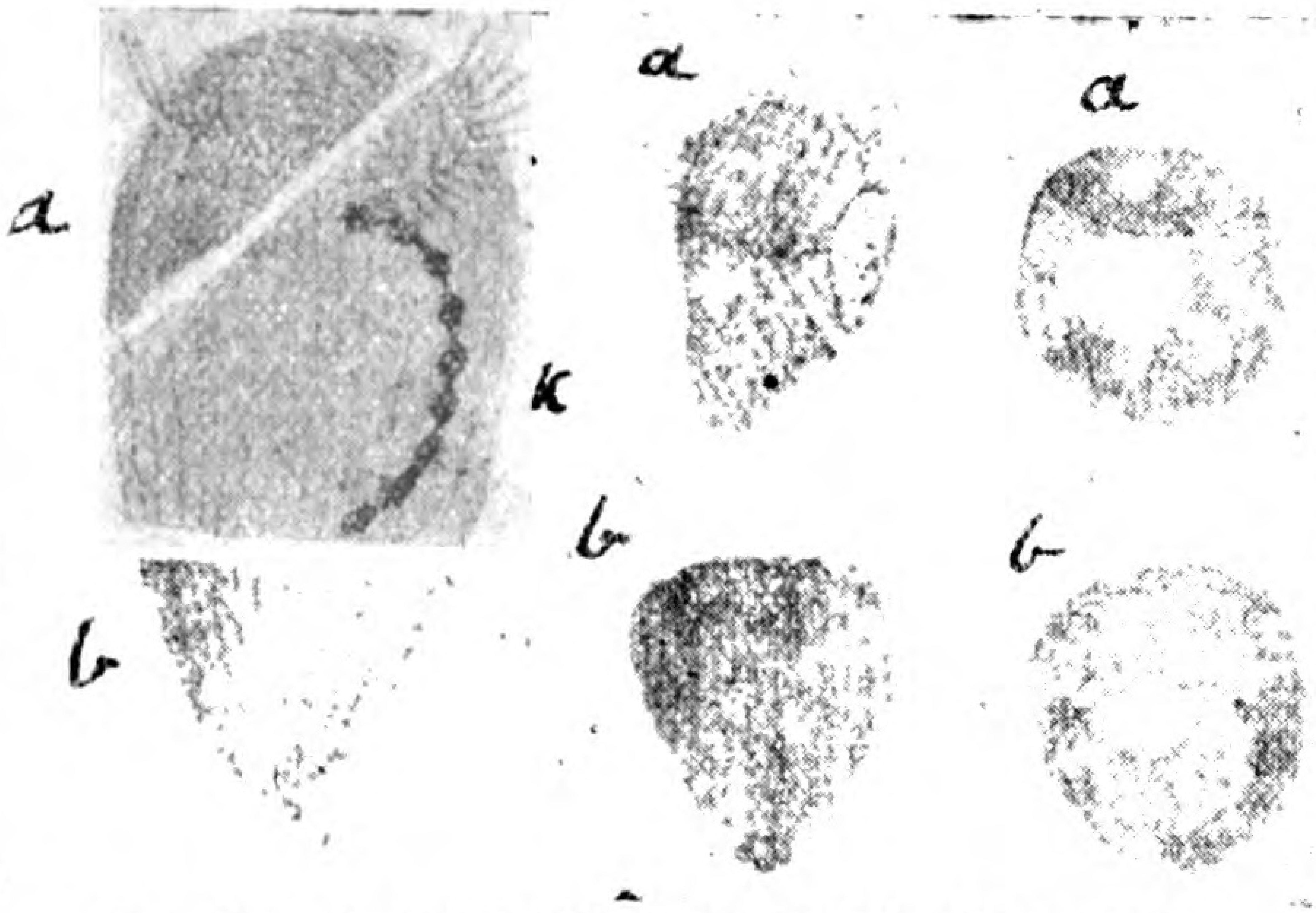
1口盤緣にある纖毛、2前副伸縮胞、3は4の處から體外に排出せられつゝある糞塊5主伸縮胞、6後副伸縮胞、7ゾオクレイン8大核、9 核、10食道、11口、12口盤

小核と云ふ。して此大核は纖毛蟲が生活して居る際役に立つもので、小核は生殖の時に仕事をするものである。夫れは纖毛蟲類は總て生活をして居る時には大核が判然と存在して居るが、之れが接合又は受精を始める時になると大核は消失するのである。して接合の後には殘つた小核から又新たな大核が出來るのである。

單細胞の體に色々の違つた部分があつて之れ等が又皆核が司どつて居る事は此二例でも澤山であるが、之れに今一つ例を示して見やう、夫れはフナムシと云ふて海岸の岩石抔に澤山馳せ廻はつて居る蟲があるが、其鰓の上にトコフリアと云ふ原蟲動物が棲んで居る。此蟲は第四圖Aにある樣なもので、其上の方は四角形をして其四隅から管狀の糸の樣なものを澤山に出して居る夫れに體の下の方には柄が付いて居て之れで今云ふたフナ蟲の鰓に附着して居るのだが、此蟲が增殖する時には核が先づ二分して其周圍に細胞質が集まつて一塊となり、遂に核も細胞質も切れて、小さな元のものとは丸で變つた形ちのものとなり、之れには纖毛が生へて居て、夫れで水中を游泳し、遂に此小體が又フナムシの鰓に着いて元の體と同樣になるのである。であるから此場合では小形の體は始めは元の體とは丸で、違つた形態であるが、之れが又元の體にあつた柄だの管糸だを生じて元の體と同一になるのである。して之れ等が皆核から來る事は別に說明する必要はないのである。

何んにしても原生動物でも纖毛蟲抔になると大層複雜したものが出來て來た事は明白である。此複雜になつたと云ふのは即ち分化で始めは同一の單位から出來て居た原形質に異つた單

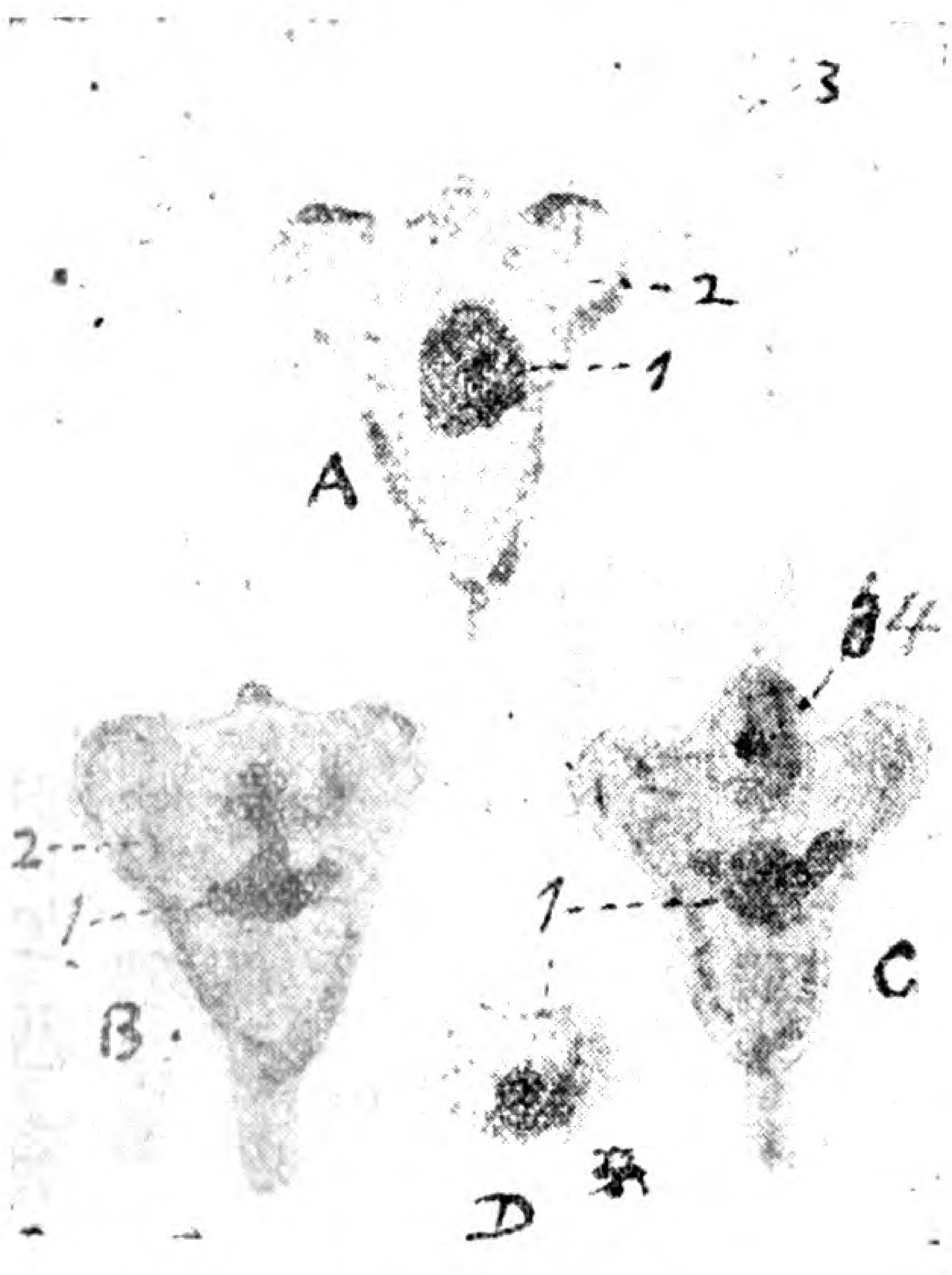
が出來て來たのである、夫れで又蟲體が複雜になつたのである。此複雜になつたと云ふのは卽ち分化で、始めの内は伸縮、求食、消化其他の事を總て成して居た原形質の内に之れ等の仕



ラツパムシをKなる有核とabなる無核の部分に切斷したもの

事を別々にする樣になつたのである。固より動物が單細胞である以上は、之れ等の部分の間に境界はないが、ラツパムシで云ふた樣に或る部分の原形質は主として運動の仕事のみをし、他の部分は感覺のみをし、又或る他の部分は食物を體内に入れると云ふ樣に分化が起つて來たのである。して之れ等分化した部分が一緒になつて原生動物の一個體を成して居るのである。

之れが單細胞生物の進化であつて、此進化を見ると細胞質内に起つた分化に依るもので、此分化があるのと同時に原形質内に又退化が起つた譯である。例之ば今云ふたラツパムシの筋素の樣なものは運動の仕事は余程能くするが其代りに他の仕事は出來ない樣になつた、神經素の所も他の所も皆同一で其分化した仕事は能く出來る樣になつたが之れと同時に他の仕事は出來なくなつた。



A一疋のトコフリア、B其出芽生殖をする處、C芽體4は母體から泳ぎ出さんとして居るもの、D自在になつた芽體、1核、2伸縮胞、3吸管、4芽體の核

單細胞生物が分化したのは既に何億年前の事であつて、之れが彼れ等に取りては最上の分化である。故に單細胞生物は此上優等なものになる事は出來ないのである。處が玆に面白い現象が始まつて生物進化の上に新しい路が開かれた、此新しい路

とは單細胞生物が分割增殖する時に今迄の樣に完全に分れて二個體とならないで、分れたものが一緒に居る樣になつたのである。すると今迄一個の細胞體内に起つた分化或は分業が今度は細胞と細胞との間に起つて來て今迄よりも一層複雜な生物が出來て來たのである。此複雜な生物とは即ち多細胞生物であるが其始めは固より數個の同樣な細胞の集まりであるけれ共、斯樣に多く細胞が一緒になつて來ると前に細胞體内に起つた分業と同じ樣な分業が今度は細胞群の内に起るのである。之れが異細胞動物が出來た元である。

今日の單細胞蟲の内にも幾等も分割生殖する時に完全に別れて仕舞はないで一緒になつて居るものが、あるが其内には一緒になつて居る細胞の數も明白でないものもあるかと思ふと又其數も定まつて居れば、又斯樣な細胞群の形ちも定まつたものがある。して之れ等でも簡單なものでは細胞は澤山一緒になつて居ても、其各細胞は皆同樣であるから、此樣なものではまだ單細胞の群集と違はないのである、處が澤山の細胞が一緒になつて居ると外面に近い處にあるものと内面に向ひた方にあるものとには相違が出來て來るし、又水流でもあれば之れに向つた方と反對の方とにも相違が出來て來る譯である。其外又若し斯樣なものが水底に橫たはるものとすると其上の方の自在な處にある細胞と下にあつて水底の觸れて居るものとの間にも違ひが出來て來る譯であるである。から之れ等一緒になつて居る澤山の細胞の間に相違が出來て來るのは當り前の事で斯樣にして同細胞動物が異細胞動物と成る譯である。して斯樣な細胞群の内に起つた始めの分業は生物が持つて居る二つの大きな生理作用である。即ち今云ふた樣に不完全の分割から出來た同細胞動物に始めて起つた分業は生活と生殖とである。斯樣にして同細胞動物のパンドリナが異細胞生物のボルボクスとなつたのである。まだ細胞の群の間に少しも分業のないパンドリナから生殖細胞と生活細胞とに分れたボルボクスが出來たのである。之れは異細胞動物の出來た第一の階段であるが之れから生活細胞の方には段々と分業が起つて來、種々なる組織器官が出來て來たのである。之れ等組織器官が分化して來たのと同時に各細胞は自分が司どる處の仕事の外の仕事は出來ない樣になつたのである。例之ば筋肉細胞は運動の仕事は完全にするが、自分では感じないのである。神經細胞は之れに反して感ずるけれ共自分では運動はせないのである。之れと同じく總て他の組織細胞は自分が司どる仕事の外他の仕事は出來ない樣になつたものでめる。其代りに自分が司どる仕事は大層能く致す樣になつた。併し此爲めに異細胞

生物の各細胞は個々別々にしては決して生活する事は出來ないものである、又生殖も出來ないものである。

そこで相互扶助の必要が起つて來る、若し斯樣なものになつて各細胞が自分の事計りして居ては其屬する所の個體が滅亡する事になる。之は餘の細胞を見て我々の個體と同樣に考へた譯であるが、斯樣になつて細胞群の間に分業が出來て來ると、各細胞は個體の資格を失ふ譯である。之れで始めに單細胞であつた時の資格が一層高等な個體になつた譯である。

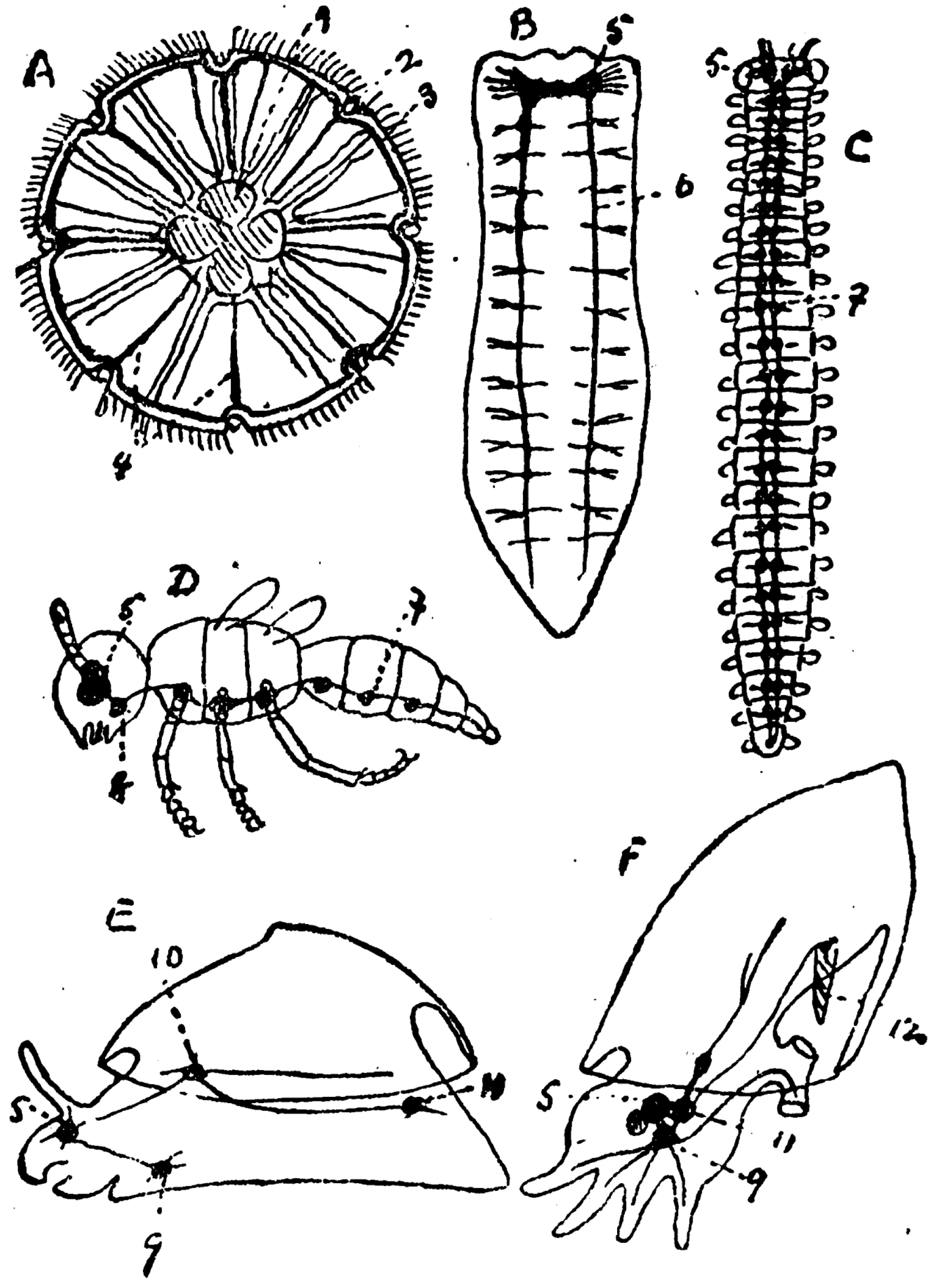
此樣な個體はヘツケルが云ふペルソンで之れが色々の方面に發達したのである、今日我々が見る多くの異細胞生物は即ち此ペルソンである。人間、犬、猫、馬、鳥、魚等から昆蟲介、ミヽズ等に至る迄皆此ペルソンである。夫れで今も云ふた樣にペルソン内の細胞は皆其個體と云ふ資格を失なつたもので、唯個體の一部として働いて居るのである。であるから之れ等の細胞は皆自分の爲めに働いて居るのではなくてペルソンの爲めに仕事をして居るのである。

して之れ等ペルソンには幾億の細胞があるが之れ等細胞は皆我々が生存して居るのと同樣生きて居て幾分も這入つて來れば、呼吸もするし又不要物も排泄するのである、であるから之れ等幾億の細胞は個々獨立したものであるとも云ふ事は出來るが、夫れが實はさうでなくて、自分より上に立つペルソン即ち細胞の社會の爲めに働いて居るのである。と云ふものは今も云ふた樣に之れ等各細胞は別々にしては最早や一個の完全な個體ではないのである。であるから之れ等各種の細胞は其屬する所の細胞群即ち細胞社會の爲めに働いて居るのである。

ペルソンの進化を見ると、先づ始めに消化器官が出來、之れと略ぼ同時に運動感覺等の器官が出來て來る、夫れから神經が分れて來るが、此神經も始めは全身に散在して居る、細胞であるが、之れが體内の定まつた場處に集まつて來て、神經節と云ふもの、とこれから四方八方に出て居る神經纖維とになる。此神經節も下等なものではまだ全身に幾つもある。水母抔ではまだ本統の神經系と云ふものは出來て居ないが、鐘縁に環狀の神經があつて、玆に細胞が集まつて居り之れから幾本もの神經纖維が鐘の頂上の方へ向つて放射的に廣がつて居る。下等な蠕形動物では咽頭の背面に一双の大きな神經細胞の塊りが出來之れから體の側腹面の方へ向つて一双の太い神經が出て居る。此神經にも又細胞がある。ミヽズ、ヒル抔になると此腹走神經は各環節に於て一双づつの球となつて居る。

夫れで之れ等腹走神經連鎖と云ふものは、腦の外に又幾等か獨立して働くものである。之れ等環節動物から昆蟲の樣なもの

になると、頭にある神經球は大きくなり、夫れも種類に依ると段々と其構造が複雜になつて來る。軟體動物でも之れと同じく、下等なものでは神經球が體の色々の處に散在して居るが、少し進んで來ると腦球、足球、外套球、內臟球と云ふ樣な塊りになり其內でも最も高等な鯨やイカになると之れ等神經球が頭の處に集まつて仕舞ふのである。終りに我々に最も近い、又は我々も其內這入つて居る脊椎動物でも最も下等のナメクヂ魚では神經の中央とでも云ふべきものは體軸の背面にある長い管で其前後兩端は細くなつて居る。此ナメクヂ魚には尤もまだ頭が出來て居ないが、夫れから上に位する圓口類と云ふヤツメウナギ抔から頭が出來て來て、今云ふた管狀の神經の前端は脹れて腦となり、夫れから後の部分は管狀で居つて、之れを脊髓と云ふ、して此腦はヤツメウナギ以上



第五圖　無脊椎動物の神經系、Aイ母、Bプラナリ、C環節動物、D昆蟲、E腹足類、F烏賊、1生殖器、2感覺器、3環狀神經、4放射神經、5腦、6側緣腹神經索、7腹走神經球連鎖、8咽下神經球、9足神經球、10外套神經球、11內臟神經球

のものでは皆互つに離れて居るので之れを五腦と云ふて、それから出て居る神經は主として高等の感覺器に行つて居る。

處が之れ等五腦の大さも構造も魚類迄では略同大であるが兩生類からこれ等が少しづゝ、違つて來、鳥類や獸類になると其一番前にある大腦と云ふものが大層大きくなつて來る。して人間では啻大腦が大きい計りでなく其表面に皺が澤山に來て來たのである。

偖てペルソンの細胞は今も云ふた樣に個々仕事をして居るのであるが、其仕事は主として神經から來るもので、神經の命令に依つて何れも皆働くものである。即ち神經の中央は神經球でそれから體の各處に神經の糸が走つて居て、一方には感覺器官に終り、又他方には筋肉、腺其他體内の何れの場處にも行つて居るものである。それ等感覺器官は生活に必要な種々な事柄を知らせるもので、其通信に依つて中央部から命令が下るのである。即ちペルソンの體内で最も肝要なものは神經で下等なものでは全身に散在して居て中央部と稱すべき處もないが、動物が段々高等になつて來ると中央部が次第次第に定まつて來、又それが一番勢力を持つ樣になるのである。

ペルソンの進化は今云ふた樣に種々の方面に向つて發展して居るが、人間では其神經系の中央である腦の發達が最も良くなつたので、又其内にも分業が極度に起つて大腦が最も能く發達したのである。

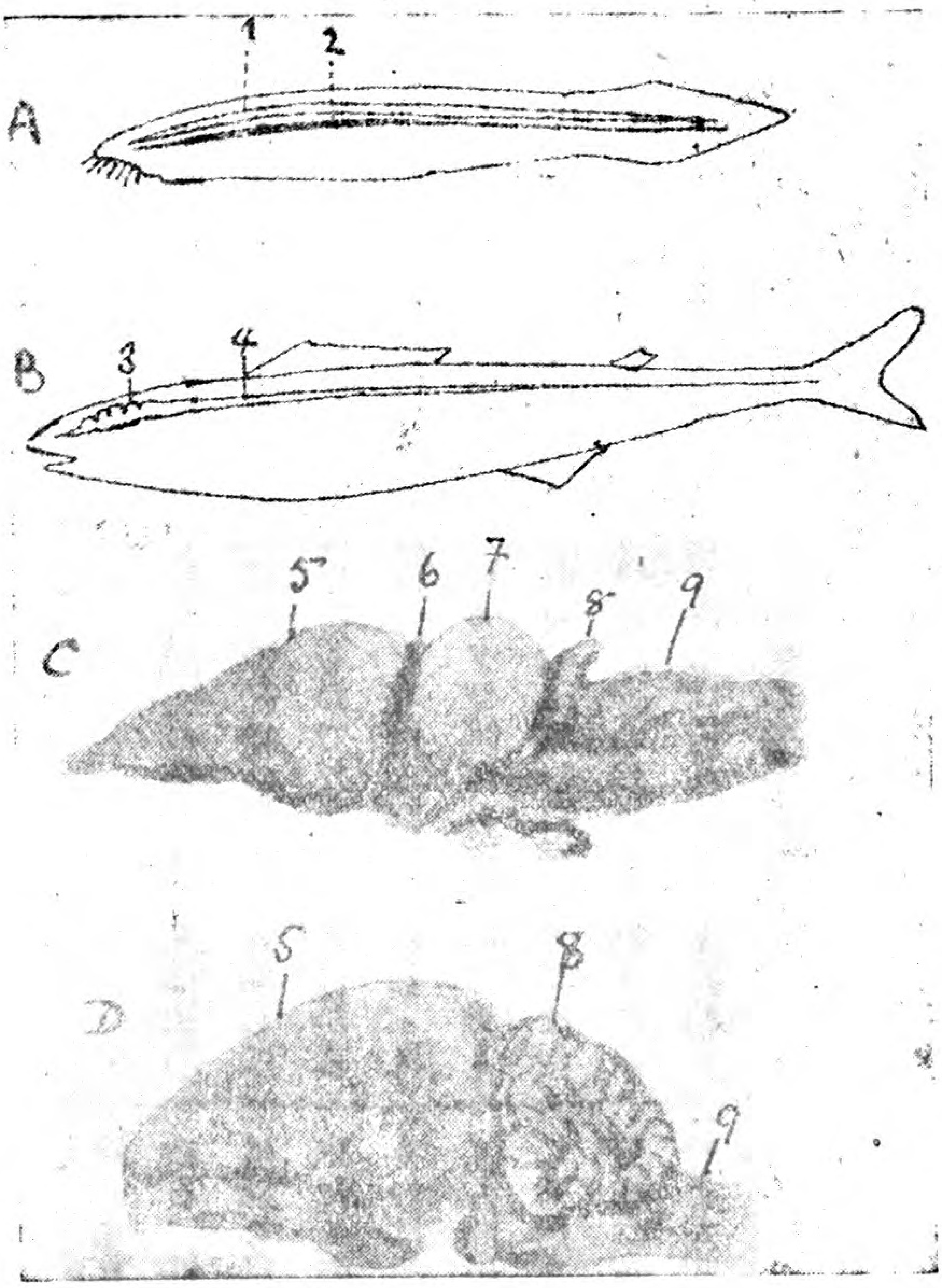
人間に近い類人猿でも大腦は他の獸に比ぶれば能く發達して居るが、人間の腦の發達には遠く及ばないのである。尤もそれも腦の内で感覺抔に關係した部分はサルの腦の方が人間の腦より發達して居るし、犬猫抔の方がまだ一層能く發達して居る。しからば我々の腦で何にが能く發達したかと云へば連想の中樞である。又夫れと同時に言語の中樞である。此連想と言語の內前者はチンパンヂイ、ゴリルラ抔には幾等か發達して居る樣ではあるが、言語の中樞の發達したのは我々人間に限るのである。

此樣にペルソンの發達は色々であるが、我々人間では之れが知識の方に發達したのである。此發達でつまり人間が他の動物を制する樣になる事が出來たのである事は私が別に改めて云ふ必要はない、併しペルソンの發達は多分我々人間を以て最上に達したものと見ても差した間違へはあるまい。

夫れで他の動物では如何であるかと問ふと下等のものでペルソンが分體して生殖するものでは此分體が完全に出來ないでペルソンの群生體が出來るものがある、其最も好い例はヒドラ、クラゲで夫等ではヒドラ體や水母體の連つた群生體が出來て、其

各ペルソンが又個體の資格を失つたものが澤山ある。してこれ等は夫れであるから又一つの個體として見るべきものであるが、此個體は固よりペルソンの上に位するコルムスと稱すべきものである。して此コルムスでは各ペルソンが又ペルソン内の細胞組織又は器官の様な働きをして居るものである。

アリ、ハチ、白蟻になると雌雄の蟲が産んだペルソンが一個々々別々にはなるが、多くは共各ペルソンの間に分業が生じて



第六圖　脊椎動物の腦脊髓、Aナメクヂ魚の輪廓、B、魚、C　蛙の腦、D兎の腦、1腦脊髓　脊索、3腦 4脊髓 5大腦 6間腦 7中腦 8小腦 9延髓

來、之れ等が又或る處迄は今云ふたヒドラクラゲの各ペルソンの様になつたのである。尤も此場合では各ペルソンは彼れに於ける様に全く個體の資格は失はないのである。夫れは之れ等では彼れに於ける如く肉體が聯絡して居ないからである、併し白蟻の女王の如きは又王の如きは種類に依ると一ペルソン内の生殖器の様になつて自分では運動もせなければ求食もせないで唯産卵計りして居るものである。夫れから又職蟲も多くの種類では生殖器が消失して唯生活の仕事のみをして居るものである。それ等も亦ペルソン内の生活細胞又はヒドラ、クラゲの生活の仕事のみをするヅオイド（群生體のペルソンを云ふ）の様にはならないが、これに近いものである。であるから一方にはペルソンが出來、群生體（コルムス）が出來又一方にはアリ、ハチ抔の所謂社會が出來たのであるが、それ等の個體内にある各單位（ペルソンでは各細胞組織、器官、群生體では各ヅオイド、又アリ、ハチの社會では各個の蟲體）は相互扶助して其個體を維持して居る譯である。處がこれ等の個體

に於て其最も能く發達したものは何れも皆それを支配するものである。即ちペルソンでは今も云ふた樣に人間の如く、腦が最も能く發達して又其内にも分業が極度に達して大腦の發達が最も進んだものであるし、アリやハチでも其職蟲が最も能く發達したものである。

併し茲に誤解してイケヌ事はそれ等個體の分子は相互に扶助しては居ると云ふものゝ此扶助は個體の維持の爲めに扶助して居るもので、夫れ以外に扶助して居るものでない。であるから個體の生存に關する時には分子は自分をも捨る事もあるし、又他の分子をも除去する事もある。ペルソン體に有害のバクテリア抔が這入つて來ると白血球はこれを喰ふて後自滅する事は始終ある事だし、又蜜蜂の雄は交尾後に職蜂の爲めに虐殺される事があるのは誰れも知る所の事實である。それ等は相互扶助ではあるまいが、夫れで其屬して居る個體の安全を計る爲めである。であるから相互扶助と云ふでも何れも皆平等に扶助するのではない。又平時でも各個體内にある各分子の仕事が違ふのと同樣に其受くる處の養分其他も違ふものである。又其受ける所の待遇も違ふものである。蜜蜂の卵も仔蟲も其雌となるべき者と女王となるべきものと職蟲となるべきものとでは職蟲から享ける所の取扱方も食物も違ふ事は又誰も知る所の事柄である。

尤も動物で今云ふた樣なものゝ他に多數のものが群をなして居る事もあるが、それ等は多くは生存上の關係から群棲して居るのである。例之ば野兎の樣なもの、馬牛の樣なものは群棲して居ると敵に逢ふた時に都合が好いからであるし、肉食獸でも狼の如きものは群をなして居て自分より大きな獸類を殺すのである。併し彼等でも何にから何迄相互扶助しては居ない。河川に能く見る魚の子供の群は彼れは多くは一双の雌雄らか生れて來たものであるが彼等の内で一疋でも離れるものがあると他のものは集まり來つて之れを食ふのが普通である。

人間に至つては如何であるか。今日の類人猿が一般に群棲をして居ない處を見ると人類の先祖でまだ言語が出來なかつた時分には或は個々別々に生活して居たものではなからうか。何にせよ人間の始めの群は家族であつたらう、これが天候地變、或は猛獸の襲撃を受ける等の事柄から同じ樣な場處に逃げ込むと云ふ樣な事から段々と一緒になつて來、斯ふ一緒になつて來ても始めから平等に相互扶助と云ふ樣な事は決して無かつたらう。今日でも野蠻國で見る樣に又野蠻國の男女關係で見る樣に强者は弱者を使役して居たものであらう。

斯樣にして澤山の人々が一緒になつて來ると各人の技能が違ふので段々に其間に分業が始まつて來て、今日の社會が出來國

家も出來たのであらう。人間の社會は前述アリやハチの夫れの如く一個體の様なものではない、我々人間ではまだ常態で生殖機能を失なつたものもなければ又生活作用のあるものを全く失なつて仕舞つたものもない。であるから我々社會も民族も國家もアリやハチの個體と同一のものでなく、我々の身體は矢張り純然たる個體である。此點が我々の社會が又彼等と異なる所のもので、彼等ではペルソン、群生體、社會内の各分子は其屬する所の個體維持の爲めに働くものであるが、我々では始めは決してさうでなかつたのではあるまいか。

併し人間には今も云ふた様に言語の中樞が腦に出來て來たし又連想力も發達して來たので個々人々の間に意志が疏通するので相互の間の利害を知る事が出來夫れで團結が容易に出來るのである。斯様な團結が即ち民族國家と成つたのである。して斯様になると團結した民族國家は始めてアリ又はハチの如き社會に近いものになる譯である。或は又さうでなくとも斯様な民族の團結が地球上諸方にある以上はさうなくてはならないものである。少なくとも部落民族種族の團結が出來た以上は此様なものは一個體の様になつて他の部落、民族又は種族に對する譯である。玆に對すると云ふても決して他のものに對して殺伐な戰爭をすると云ふ意味ではないが、始めに論じた様に各個の生物間にある生存競爭と同じ様な生存競爭をする譯である、して此競爭に勝ちを得るものは如何なるものであるかと云ふと團結内に一番能く分業の行はれて居るものである事は疑ひのない事である。して最も能く分業の行はれて居る民族と云ふのは取りも直はさずペルソンで云はば人間の如く腦の最も能く發達して全體を最も良く支配して居るものであつて、又國民各個の間に又最も完全な分業があつて、各自が其業を忠實に守るのと同時に又團結體の平安に且つ益々隆盛にならん事を考へて處世して行く様なものでなくてはならない。

これは動物の發達進化に於て見る所のもので、或は個々人々の本能には逆らつて居るやも知れないが、吾人々類は幸ひ知能が發達して居るが故を以て我々個體の發達利害のみを考へる事なく動物進化の此事實を利用して強固なる團結體となる事は國家としては最も必要な事である。

して團結體なる國家が斯の様に分業的に進歩して行くには此團結體内にある各個體間に競爭の生ずるは無論の事にして此競爭があつて實に各種の業務も段々に向上して行くものである事はペルソンも新しい境遇に會へば種々に變化するもので、此境遇に適するものが生存して行くのと同一である。

斯の如くであるから生物の進化は皆生存競爭に依るもので、

單細胞生物間にも、ペルソン間にも、コルムス間にも群棲體間にも民族、種族又は國家間にも競爭があるもので、此競爭があつてこそ生物は進化するものである。して此競爭の起るのは之れ等々個體間に變異があるからで、若し此變異が無いものならば決して競爭は起らない譯で又生物の進化も見る事が出來なかつたであらう。

此節はクロポトキン以來世間で頻りに相互扶助を論ずる人があつて、之れを人間社會に引き延ばして共産主義抔を唱へる人があるが、若し此共産主義が極端に行はれて各人が同一樣に生活する時には進歩は決して起らなかつたであらう。

夫れ計りでなく分業と進化が相伴なつて來たのと同樣に又眞の愛と死もそれと共に生れて來たのである。十九世紀の大動物學者ワイスマン先生が證明した樣に單細胞生物には親もなければ子も無いし又死もないのである、であるから此世もなければ彼の世もない譯である。併し彼等の內にも自然の死はなくとも不自然の死はあるから、彼等にも前に云ふた樣に競爭はあつて又分化があるのである。處が異細胞生物となつて始めて生死も出來て來たし、親子も出來て來たのである。夫々で始めて親子の愛も出來たし、又死と云ふ悲むべき現象も現はれて來たのである。であるから生物には此始めの階梯からして分業と進化、夫れと共に競爭である。

動物の進化が競爭でなくて相互扶助であると云ふクロポトキンは固より動物學も何にも本統に研究した人でない事は明あるが斯樣な似而非學者に欺かれ彼れ之れ社會の事を議論すのは甚だ危險である。

であるから共產同權抔と云ふ事は動物進化の事實でない、併し共產が事實に反して居る、一國内の各人が同一の權利を要するのは動物進化の事實に逆つて居ると云ふても、であるか爲政者や資本家又は權力を持つて居る者達は勝手な眞似をして宜しいと云ふ譯ではない、恰度ペルソン內の比較的に必要な置にある腦抔に餘り多量の血液が行つて他の體部に之れが乏しくなると全個體が病的になるのと同じ樣に之れ等國家で比較的肝要な位置にあるものも手前勝手の事をしてはイケナイ譯である。一ペルソン內にある細胞は何れも皆ペルソンなる個體の爲めに仕事をして居るのと同樣に一國内にある人民は皆職務の別なく、何れも皆國家の爲めに働くべきものである。

斯ふ結論すると少し本題の生存競爭と相互扶助から脫線樣であるが、要するに生物の發生進化は本來は生存競爭に基もので、相互扶助は之れに伴なつて生じて來た現象であると云ふ事が出來やう。併し人間で云へば此相互扶助は全世界の人類に對して絶對の相互扶助ではなく、一團の民族又は國家の生存に關する扶助であつて之れが又各個人間の扶助でなく、國家なる團結體に對するものでなくてはならないものである。

現時生活問題の根本的解決

東京帝國大學文學部教授 文學博士 建部遯吾先生
東京帝國大學社會學研究室 文學士 大場實治先生 (最新刊)

人口問題と食糧問題

洋裝菊判總布上製 全二册 本文附錄共定價金六圓八十錢 內地送料金二十錢

今や我國民生活難の聲や高く移民問題亦常に吾人の腦裡を去らざるなり。世界に於ける我が國現下の國際的他位と國家的使命に鑑みれば我が社會的生活問題や頗る廣汎多端にして容易に之が先後輕重を定むるべからずと雖も人口問題と食糧問題とは蓋し其最も痛切なるものたるや疑なし。著者大學院在學中特に本問題を熱心專攻せらるゝの士今乃ち時勢の要求に應ぜんとし東西最新の學說を經とし、最近の官私調査を緯とし、以て最も精確なる敍述說明を施し、穩正切實なる批評斷案を下されたるなり。若し夫れ附錄としての懇切なる索引と精確なる五十有餘の統計表とは正に本書の價値を倍蓰せしむるものと謂ふべき也。

發行所 東京市神田區北神保
振替口座東京八一一五
合名會社 弘道館

FAGOL

肺結核新藥

醫學博士　高橋順太郎氏創製

ファゴール

實驗

醫學博士　吉本清太郎氏　醫學士　小久保鞆比古氏
醫學博士　佐藤勤也氏　醫學士　佐藤佐氏
醫學博士　中濱東一郎氏　醫學士　中山敏樹氏
醫學博士　澄川德氏　醫學士　月岡道保氏

新藥**ファゴール**が肺結核、肺尖加答兒及肋膜炎等に對する治療劑として最大の効果を有する事は諸大家の實驗に據り夙に學界の承認せらるゝ處也

■諸博士實驗報告集御一報次第進呈
■全國著明藥舖にて取次販賣す

一手販賣元　東京市日本橋區本町四丁目　**友田合資會社**

（製造元　三共株式會社）



死處を探ねて

――漂泊の旅より――

松崎天民

瀧田詞兄――大正六年初秋の誌上に、「湯女物語若僧の妄念」を書いた以來、足掛け四年の間、私は中央公論に御無沙汰して居ました。「氣に入つた物が書けたら、何時でも送つてみよ」と云はれた貴兄のお言葉に甘へて、漂泊の旅路から突然、この一篇を送ります。私は最近四年の間と云ふもの、何一つ會心の物が書けずに、唯いたづらに自分一人で、いら〱のみして過しました。一つには新聞社の夜の勤務が、私の心身を疲勞させたのにも因りますが、又一つには中年期に入つた私の心の生活が、樣々の脅威や壓迫を受けて動搖し、何と云ふ事なしに萎縮し尻込みして居たにも因りませう。今度の此の一篇の如きも、私の「或る心の影の記錄」に過ぎないものでして、依然として當年の稚態を脱し得ぬ愚かさを、お恥しい事に思ひますが、兎にも角にも、貴兄の許まで送ることにしました。三月七日夜、辨天島若狹屋の一室にて

◇

一身上の都合に依り、今月限り退社いたし度く候間、右御届申上候也………

こんなものを書いて出したのが、二月十九日の午後五時頃であつた。社の方でもチヤンと心得て居たことなので、萬事は形式一點張に、滯りなく運んだ。

啓上、御提出の辭表、社長の手許まで差出し候、多年社務に御勵精被下候にも拘らず、忽ち袂を分たざる可からざるは、洵に遺憾に堪えざる所に候、已むを得ず本月限りにて御退社の事と致し候、今月分の俸給は廿五日會計部より御受取被下度、尚今後の御發展を祈り候……

二月廿三日附で、社の方からはこんな手紙が來た。足掛け五年、滿三年八ケ月十五日勤めたM新聞社と私との交渉は、お互から出した此の二通の紙片に依つて、サツパリと斷絕した。

「おい、いよ〳〵社を罷めたよ」
私は先づ、妻に其の事を話した。
「え、ほんとですか、お父さん……」
「嘘もほんともあるか。これから當分、浪人するんだよ。この社宅も、成る可く早く明け渡さねばならないからその積でね」
「さうですか。でも、お父さんは短氣だから、辛抱氣が無いから……困るわ……」
「辛抱も糞もあるか。これから何も彼も改造だ。お前も口癖のやうに、私と別れる別れる云つて居るぢやないか。ほんとに別れる氣があるなら、今が恰度、好い機會だよ」
「馬鹿ね、誰が別れるものですか。お父さんが百萬長者になつたのなら、私の方から御免を蒙ることがあるかも知れないけれど、浪人したり、貧乏したりするのなら、私は別れませんよ。何處までも夫婦だわ……」
「ほウ、不思議な事を云ふね。虚榮心で云ふのかい、それとも本氣なのが……」
「あなたは馬鹿ねえ。二十年も新聞記者をして居ながら、月給が漸く百五十四圓だなんて……。そんな新聞社も罷めるが宜いし、そんな新聞記者も廢めておしまいなさいよ」
「それで、おでん屋でも初めるか。斯う肥滿して居ては、もう人力車夫にもなれまいし、荷車も曳けないからね。遊んで居て、お前に養つて貰はうか、ブラ〳〵ノラクラして……。私の性には、ブラノラが一番合つて居るんだよ」
「戯談ぢやないわ。兎に角、十日ばかり遊んでいらつしやいよ。あなたの留守中に、貸家を探して轉宅しますからね。二百圓もあつたら、十日ぐらゐ遊んで來られるでせう」
「その二百圓を、お前がくれるのかい」
「何うでも……然しあなたも持つて居るぢやありませんか。お父さん隠すから厭……」
妻が此の調子なので、私は先づ安心した。社の同人諸君に別れの挨拶をする事と、社宅を明け渡す事とが、殘つた二つの仕事であつたが、私は二月廿七日の夜、逃げるやうなあはたゞしさで、新橋驛から下の關行二三等列車に乘つた。北海道の若い友人T君と、長男と二男とに送られて、驛前の有樂軒でコーヒーを喫だ時、私は何と云ふことなしに、厭な寂しい氣持がした。
國府津、山北、箱根の雪も、沼津、靜岡では雨になつて居た。靜岡に下車して、或る女の行く方を探ねたが、其匂を嗅ぐとすら出來なかつた。所番地から姓名まで明ら樣に書いて、「この方面に御旅行でもなさいます折がありましたら、是非おたづ

ね下さいまし」と云つて寄來して咽きながら、其女は去年の暮に、朝鮮へ賣られて行つたらしいと云ふ、近所の産婆の話であつた。若い美しい女は、朝鮮三界へ流れて行つても、笑つて御飯だけは頂けるが、浪人になつた此の私は、これから何處へ何しに、何のために旅へ出るのであらう。

靜岡を午後四時三十六分に發つて、掛川、袋井で日が暮れた。暗い濱松、舞坂を過ぎて、辨天島　下車したのは、七時半に近い頃であつた。旅館兼御料理の松月や若荷屋の印袢纏を着た男が、私の傍へ寄つて來たが、私は何と云ふ氣もなく、松月の男に小鞄を渡して、そこの二階座敷へ案內された。火の氣の無い十疊の座敷に、一人ボツネンと座つた時、私は何とも形容の出來ぬ寂しい氣持がした。十燭の電燈が薄暗いのも、雨催いの空で、湖畔の風光が見えないのも、私の心持を沈ませるのみであつた。

「お客樣、御酒、召上りますか……」

宿の女中は襖越しに、肥つた白い笑顔を見せた。

「あア、飲むよ、一本ぐらゐは……」

斯うして、チビリ〱と飲で居ても、私の心は何となくソワ〱して居た。何處に何日滯在して、何日までに何處へ行かねばならぬと云ふやうな、急ぎの旅でもないのに、私の心持は、少しも落着くことが出來なかつた。久し振に職業から離れ、家庭から放たれた暢達さに、謂知れぬ氣隨氣儘を感じて居ながら、私の心持は、何處までも沈み勝であつた。

でも蛤の吸物や、蠣のフライや、鯛のさしみや、さうした新鮮な膳に向つては、舌皷を打たずに居られなかつた。一本ぐらゐが二本となり、三本となつたが、氣持は鉛のやうに鈍く重くなるのみで、更に少しも浮き〱しなかつた。

「姐さん、今夜、靜に泊めて貰はうと思つて來たんだが、何うも寢つかれさうでないよ。八時四十分の豐橋行に乘ると、午前一時の一二等急行の間に合ふからね、それで發つやうにして貰はうよ。折角だつたが……」

「左樣で御座いますか。では歸途に是非ね、お待申して居ますわ」

「あア、生きて居たら、また來るよ」

「御戲談ばかし……今度はお一人お連れなさいましよ。殿方お一人では、お淋しくつて……」

「古い女房でも連れて來るかね」

◇

豐橋の夜は雨に更けて居た。

「旦那、急行ですか、まだ二時間足らずもありますよ。何うです、明るい所へ御案內いたしませうか。へゝゝツ、一時間二圓なんですよ」

驛前に居た若い車夫は、私にこんな事を云つたりした。

「へえ、藝妓か淫賣なのか」

「藝妓ですよ。何しろ田舍ですからね」

「そんな者に用はないが、洋食屋があるなら、案內してくれないか……」

雨の中を車夫に引張られて行つたのは、停車場からさう遠くはない布屋と云ふレストランであつた。私はそこで、若い元氣の好い車夫と共に、熱燗を傾けながら、オムレツやフライを食べた。この邊は國民黨の大口喜六さんの地盤ださうで、東京では何うか知らないが、この地方では評判の好い人だと云ふことを、車夫は一杯機嫌で問はず語りに話したりした。

雨中をまた停車場へ引返して、私は午前一時發の急行列車に乘つた。英國人の夫婦者が、長々と寢そべつて居る裾の方へ、小さくなつて腰掛けて居る間に、名古屋、岐阜、米原をうつゝに過ぎ、京都で晴れた廿九日を迎へた。去年の夏、妻や子供達と共に、三等急行で大阪から歸京した頃の事が、何となく思ひ起されたりした。大泉黑石、田中貢太郎の二家と共に、この行を共にすべき筈であつたに、二君とも俄に支障が出來て、私一人が孤獨の旅の寂しさに浸つて居る事などを思つたりした。

大阪へ着いたのは、朝の七時過ぎであつた。驛前から電車に乘つて、難波驛から南海電車に乘換へ、先づ天下茶屋に亡妻の弟W君を訪ねた。風呂に入つたり、朝御飯の馳走になつたりした後、亡妻の父や叔父を訪ねて、一日を酒と馳走と話の中に暮した。悲しい旅でもなく、嬉しい旅でもなくて、たゞブラリと漫然、何うにでもなれと云つたやうな、切迫つまつたやうな、やけくそのやうな旅の心を、私は親しい故舊に依つて、慰められたやうな氣持がした。

「何ぞ、急ぎの用でもあつてかいな」

「いゝえ、たゞ遣つて來たまでの事ですが、實は東京から一日でも二日でも、逃げ出して見たいと思ひまして……」

「えらいこツちやな。ま、然し丈夫で結構やなア。奥さんも子供衆も、みな達者だすかいな」

「え、みな、ピン／＼して居ますが……」

何時もは急がしい旅で、通り一遍の挨拶をすると、ソコ／＼に歸つてしまう私であつたが、今度は亡妻の父に面しても、落着いて話の出來るやうな氣持がした。私の三人の子供のためには

切つても切れぬ外祖父に當る人は、輕い喘息の持病があるのみで、齡よりは若く丈夫さうに見えた。

「今の奥さんは、よう出來てる人や。それに生さぬ仲やさかいなア、どつちやにも氣兼氣苦勞はおますやろが、そこが何ちウても辛抱や。まアま、貧乏して居ても、達者に暮せるのが、何よりだすよつてなア……」

斯うした父の言葉を聽いて居ると、私は不思議に涙ぐましい氣持にさへなつた。何も彼も妻に任せて、のん氣さうな旅に出て居る私自身の姿が、もう何うにも斯うにも爲様がなくなつた者のやうに思はれたりした。

「君が社を罷めた事を、Ｙの温泉に居られるＴ先生にだけ、手紙で知らせて置いたよ」と云つたＫ新聞の親友Ｗ君の言葉を、私は此時、フト思ひ起したりした。Ｔ先生からは早速返事の手紙が來て、「松崎のために、適當な死處を得させたいものである」と申された由を、Ｗ君から聞いた時、私はホロリと落涙したやうであつた。亡妻の父と差向いになつて、大阪の御馳走になつて居る時、私は其の事を思ひ浮かべて、更に涙ぐましい氣持になつたりした。

「さうだ。私の今度の旅行は、自分でも明瞭と意識しては居ないが、その死處を探ねて、彷徨ひ歩いて居るのではないか……」

私は其の時、旅に出て居る私の氣持と云ふものを、初めて知ることが出來たやうに感じた。そして、何時までも一つ所に、ジツとして居たいやうに思ふ心持の後から、直ぐ何かの強い力にグン／＼引張られるやうな氣持がして、ソワ／＼と落着くことが出來なかつた。

亡妻の弟は、忙しい勤務の身を繰合せて、私をいろ／＼と待遇してくれた。

「中座はこけら落しだんね。何せ純歌舞伎式の大建築に、大阪の名優惣出と云ふ大がゝりやさかい、入場券の買メを遣りよつて、とても私達は齒が立ちまへんわ。角座の山長は人氣が下火やし、辨天座の澤正なんか、兄さんは見とおまへんやろし……。何うだす、これから堺へ行て、散財なとしまよか」

「散財も面白いが、何だか氣がすゝまない。私はこれから天王寺へ行つて、Ｙさんと逢つて來るから、それからの事にしやうよ……」

天王寺逢阪町で、古くから精神病院を營むで居るＹドクトルは、私の二十年來の知己であつた。大阪へ行く度毎に、何時でも私のために一夜を割いて、南地の情趣の中に浸るのが例であつた。今度も宇治から京都の方へ行つて、靜に一日一夜を遊び暮さうとの電話であつたが、私は何となく心がすゝまなかつ

た。

「そしたら、南で御飯など食べませう」

私は其のYドクトルに招かれて、南の昇龍と云ふ割烹店で、あつさりした晩飯の馳走になつた。二人の間には、精神病者の生活、近頃の小説、女優の近狀、大阪の食べ物、東京の藝妓、宇治の花屋敷など云ふ事が、次々の話題に上つた。Sと云ふお茶屋を廢めて、藝妓の置屋を始めて居る老女將が來て、酌したりした。

「さ、これから何處ぞへ、繰込みませうか」

「いえ、疲れて居ますから、これで失禮しませう」

私はさう云つてドクトルと別れ、亡妻の弟と共に、堺の一旗亭へ行つた。そして酒を飲で見ても、藝妓の顏を見ても、私の心持は、不思議にドンヨリと暗く淀み行くのみであつた。

◇

三月一日は、大阪で暮した。

K日報社に舊友S、Kの二君を訪ねたり、M新聞社にS氏と逢つたり、U新聞社に副社長U氏や、舊友、O、Kの二君と逢つたりした。更に池田町に、舊友K君を訪ねたが、大阪方面へ出た不在中で、逢ふことが出來なかつた。

大阪が次第に郊外へ擴大して、郊外居住者が多くなつた として、南海電車も箕面電車も、乘客の數が激増し、普大抵の努力では乘ることが出來なかつた。東京の滿員電車以上に、混雜して居る車中で、平氣で捲莨を吹かして居る男が多いのを見て、私は腹立しい氣持がした。府の爲政者も、電車の當事者も、土地の新聞紙も、この電車中の喫煙を禁じ得ぬところに、一般の慾に生きる大阪人の一傾向を思はせたりした。

電車の沿線に、別莊風の新しい建物が殖えて居るのも、今日の大阪を說明するに宜い事實であつた。何んなつまらぬ芝居でも活動でも滿員客止となり、何んな下等な料理屋でも貸座敷でも繁昌し、何んな不別嬪の藝妓でも娼妓でも、一人殘らず賣れて居ると云ふ、これが私の見た大阪であつた。頭の髮を長く生して、ハイカラな洋服を着た若い男も、大手をふつて歩いて居た。頭髮を中央から分けて、ケバ〳〵しい女優のやうな扮裝をした若い女も、平氣な顏をして歩いて居た。働いて遊ぶと云ふそれが格外に、非常規に、今までの日常生活の水平線から、飛び離れて居るやうに見えるのが、今日の大阪であつた。

然し、私のためには、大阪は第二の故鄕のやうなものであつた。父とたゞ二人で貧乏暮しをした幼年　私が、西區幸町の居色した土の上を歩いて居た。難波のお多福茶屋の近所には、母

から二厘四厘貰つては、おでんを買食して居た幼い私が、まだ殘つて居た。東の北久太郎町や、北のお初天神の傍や、南の日本橋筋には、丁稚奉公して居た十一二歳の私が、鼻を垂らして歩いて居た。北の樽屋町や、西の浦江には、工場の勞役者として、汗を流して働いた二十一二歳の私が、平かならぬ顏をして動いて居た。北の出入橋の附近には、漸く新聞記者になつたばかりの二十三歳の私が、色の褪せた單衣羽織を着て徘徊して居た、南の難波新地の路次内には、良人となり父となつた私が、貧しさうな顏をして立つて居た。土佐堀川の肥後橋の畔には、洋服を着て自轉車に乘つた私が、右往左往して居た。堀江や北新地の貸座敷の二階には、初めて酒と女の味を知つた二十六七の私が、何の苦勞も無さ相に、浮かれ唉いたりして居た。——

さうした懷しい大阪、思ひ出の深い大阪ではあるが、あはたゞしう過ぎて行つた十六七年の月日に、すべてのもの皆が、その形骸を變へて居た。單り形容のみでなくて、新しい大阪、大きな大阪は、その核心からして、殆ど甦生したかのやうな觀を以て、私の視覺を驚嘆させて居た。町には電車が四通八達し、洋風の家屋は殖え、川筋は少し綺麗になり、お茶屋の軒の角行燈は、丸い電燈に代つたりして、すべてが新しい色彩の下に、新興の氣運を醱酵して居るらしく見えた。幼い若い私と云ふ一人の男が、生活の喘ぎをつゞけて居た昔の影は、何處にも僅に游らと、漸く殘存して居るに過ぎないやうであつた。

「もう懷しい大阪ではない。思ひ出に生きる大阪でもない。新しい大阪が、新しい旅客としての私を、抱擁してくれるばかりである……」

斯う思ふと、私は一刻も早く大阪の地を離れたくなつた。御池橋の東詰で、煮豆や佃煮屋を營み、成功して居る舊友のT君からは、月ケ瀨へ梅見に行かうと誘はれたが、私は其の好意を有難く思つたのみであつた。世に隱れて、大きな罪を犯した者が、其筋の搜索の眼から逃げて、各地を轉々して居るやうな心持を、私は自分自身の姿に想像して見たりした。苦しい東京、厭な東京、悲しい東京から、漸との思ひで逃げて出て居ながら、私は辨天島でも落着くことが出來なかつた。大阪では故舊や舊友の好意に抱かれて、何時まで寢そべつて居ても、更に心を煩はさない筈であるのに、私は一刻もジツトして、大阪にとゞまる氣持がしなかつた。

その夜はA社のO君に招かれて、北新地の青樓に五時間ばかりを過したのみであつた。新歌人のY氏や、小說家のN氏、俳優のK氏、劇評家のO氏などゝ、酒食の友であるらしいO君は、若い淸らかな何の苦勞も無さ相な顏をして、「茨城の綱」を唄つ

たりした。大阪の所謂ぼんちタイプに出來て居る人ではあるが、新聞社に勤めて居るだけに、金錢の臭味が少しも無いのが、何より好い感を起させた。

「里見弴が來よつてな、エラウ感心しよつた料理屋があるぜ。圓丸屋と云ふてなア、そら美味い物を食べさせよる。今夜はあかんけど、明日の夕方から何うやいな」

　O君は斯う云つて、是非そこの美味い料理を食べてみよと、熱心にすゝめてくれたりした。然し僅に二日居たのみで、もう浮き足になつて居た私は、O君の好意に甘へて、ゆつくり大阪料理の美味に、舌皷打つ氣持にはなれなかつた。

「生きて居たら、何時でも食べられるがな。そんな美味いのやつたら、今度、來た時に、連れて行つておくれよ」

　私は斯う云つて、O君や藝妓達と別れ、十一時頃北の新地を出た。大島紬に仙臺平の袴を穿いて、小鞄一つを提げたのみの私は、南行の電車に乘つて、うつらうつらとしながら、何處へ行つても落着くことの出來ぬ心を、自分で哀れにいとしいものに思つたりした。

　その夜は、一人で新町に寢た。

◇

西の入船で食べた小鮎の鹽燒が、案外に美味かつたので私は思はず盃を重ねた。

「何うだす、もう一晩泊りなはれ」

　と亡妻の弟は勸めてくれたが、私は逃げるやうに、入船を出て、雨の中を湊町驛に馳せ付けた。恰度、午後五時發の鳥羽行が出る間際で、思へば大阪の三日も、あはたゞしい間に過ぎた。

　二日午後六時過ぎて、奈良を過ぎて笠置驛に着いた時、私はそこの溫泉宿で、一夜を淋しく過さうかと考へても見た。けれども、暗い中に四五點の灯が見えるのみで、驛のプラットホームが寒い雨の中に沈んで居る樣を覘いては、急に下車する氣持が失せてしまつた。兎にも角にも、山田まで行つて、そこで二三日を靜に過さうと、私は突差に心を極めた。

　山田に着いたのは、十一時半を過ぎた頃であつた。驛前の車夫を呼んで、何處とも云はずに乘ると、車夫も默つて輓き始めた。

「おい、五二會ホテルだよ」

「へ、もう寢てますか知らん」

「高い所だから、輓いて登るのが厭なんだらう」

「高あすしなア、それに寒むあすでなア」

「遲いからね、古市にでも行くか」

「古市、備前屋ですか、杉本屋ですか」
「まア待て、五二會ホテルはまだ起きて居るだらう。湯にでも入つて、のび〳〵と寢る方が、疲れが治つて好いよ」
「さうあすなア、俺は何處へでも行きますが……」
何となく面白くない淋しい旅ではあるが、それでも備前屋に遊女を見る位の戲れ心は、私の何處やらに殘つて居た。車夫の話に依ると、十圓もあれば大威張で、油屋お紺の昔の情話を、眼前に彷彿させる事が出來さうであつたが、私は矢張り丘の上に在る五二會ホテルに入つて、靜にそこの客となつた。
東京を出てから、僅に五日目ではあるが、一月も二月も長い旅に出て居るやうな、淡い旅愁と云つたやうな感が、私を無口な男にして居た。宿には女支配人の小仙さんや、能く笑ふ女中達が居て、傷み痍ついて居る樣な旅客を、腫れ物にでも障るやうに、親切に待遇してくれた。伽藍のやうに寂寥とした大きな構への中に、滯在客と云つては私が一人限りで、何だか斯う計り知られぬ大きな孤獨の中に、私一人が吸込まれて居るやうな氣持がした。
三日は終日、ウト〳〵と寢た。東京を發つてから五六日の間、私は毎夜のやうに、いろんな夢に惱まされて來た。最初の一夜は汽車の中で、高架線上の電車衝突と云ふ、慘めな出來事に驚かされた。次の一夜も汽車の中で、長男哲郎が高等商業學校の入學試驗に及第し、鼻下に黑い髭を生して居る樣子を見た。その次は堺の　亭で、二男の逵郎と三男の俊郎とが、私の枕許に立つて、「お父さん、ロンドン行の汽船が出ますよ」と云つたやうであつた。新町で寢た夜には、妻と夫婦關係を結んだ頃の一日を、夢か現の間に見たりした。湊町から山田までの汽車中では、私が第三期の肺結核に罹つて、茅ケ崎の南湖院に入院して居る惡夢を見たりした。……
神經衰弱と云ふ程ではないにしても、私の心身は輕からず疲勞して居るやうであつた。五二會ホテルの六疊の和室で、終日うつら〳〵して居る間にも、私の背には冷たい盜汗が滲むで居た。東京を出さへすれば、家庭から離れさへすれば、暢達した氣持になれやうと思つて、折角、かうして旅に出て居ながら、私は反つて東京を懷しみ、家庭を戀しく思ふやうな、不思議な氣分に苛責れて居た。
「女房にも別れてしまはう。新聞社も退いてしまはう。三人の子供は、學校の寄宿舍や、親戚の許に預けて、私はほんとの私一人と云ふものになつてしまはう」
私は幾度、斯う思つたか知れなかつた。女房とは「別れやう」と云ひ、「別れませう」と云つて、お互の理窟の上からは、離れ

〳〵になり得る可能性がある樣でも、二人の情感の微妙な作用は、今日まで二人を二人の儘の姿にして、密着させて居た。罷めやう〳〵と思つて居た新聞社からは、何の造作も變哲もなく、完全に退社することが出來たが、さすがに快い氣持のみはしなかつた。M新聞社と云ふ特別の對象から離れた事は、私にとつて幸福でこそあれ、決して不幸ではなかつたが、たゞ其の事に依つて、過去二十年の記者生活から、少しの間でも遠のくと云ふ事が、私にとつては人知れぬ淋しさであつた。

「何も彼も改造だ。ほんとの一人ぼつちになつて、すべてを出直す事にしやう」

斯う思つた事も、いざとなつては、たゞ私の心持を、人知れぬ孤獨に陷れるのみであつた。斯うして一人旅に出て、僅五日か六日、家を離れて居ても、直ぐ東京が懷しくなるやうな弱い心持で、何うして一人ぼつちになどなり得やうぞ。私は何處までも妻や子供を私の道連れにして、一緒に泣いたり笑つたりしなければ、暮して行けぬ男なのであつた。

私は臥床の中で腹這になりながら、大阪や東京の知友へ宛て、十餘通の手紙を書いた。繪はがきに短い文句で、のん氣さうな旅の樂みを書いたり、或は原稿紙に四五枚、春淺い伊勢路の消息を書いたりした。然し私の心持とペンとは、別々の離れ〳〵になつて、何とも云へぬ不愉快をも、私は何時の間にか愉快なものにして居た。

赤福餅の主人濱田穗三君が來て、「よう來やはつた。來やはつた」と歡んでくれたりした。

「五日でも十日でも、ユツクリ遊んで居たら宜しいがな。何あ出けまへんけれど、これでも何かの役には立つ男やさかい、安心して遊びなはれ」

濱田君は、酒味を解する友の一人であつた。

◇

翌日は大廟に參拜して、我が文運の興隆を祈願した。宇治橋を渡つた所には、大砲等を置いてあつて、餘りに公園式らしく見えたが、五十鈴川で口嗽いで、老杉の樹立の間を歩いて行く刹那には、さすがに崇高な氣持がした。

寒い北風が吹いて、再び冬が來た樣に思へたが、地方から來た團體の參拜者は、次から次へとつゞいて居た。紅色した櫻花の簪を、帽子や襟に佩して、ワイ〳〵さわぎながら舊道を行く一團の中には、四十から六十餘までの女が、五人も十人も交つて居た。新道の方は電車が通つたり、自動車がブー〳〵砂塵を上げて居たが、舊道は古市から宇治へかけて、お杉お玉の昔の

名殘が、町家の軒にも漂つて居るやうに思はれた。街道の土產物を賣る店や、中食御支度所などでは、口々に喋舌り立て、道行く參詣人を呼込で居た。

「お休みなさいまし、お掛けなさいまし」

「お土產物は此方でございます。お安く勉强いたします。名物のお菓子は此方でございます」

「御中食はいかゞ様で……。溫い牛鍋も出來ます。親子丼、おすし、ぜんざい、何でも直ぐ差上げます。御中食はいかゞ様で――」

背の高い男の聲や、肥つた赤ら顏の女の甲聲が、入亂れて賑はしく騷がしく聞えて居た。一年中の農閑を偷んだり、又は生涯の書入れにして貯へた金を旅費にして、遙かにお伊勢詣に來たらしい人々の顏には、何とも云へぬ仕合せらしい喜悦が、色濃く漂ひ漲つて居るやうに見えた。近所隣の誰れ彼れと一團を組むで、紫の旗を先頭に、ゾロリ／＼と歩いて居る様は、長閑な伊勢路の景物であつた。

私は本屋に立寄つて、二三冊の三月號を購つた後、直ぐ宿へ歸つて寢た。山田へ滯在して居る間に、今日此の頃の心持を、記錄にとめて置かうと思ひ立つたが、寒いのと淋しいのとで、ペンを執る氣持にもなれなかつた。宿の女中は笑ひながら、

「默つて寢てばかり居あすと、毒あすしなア。藝妓さんでも呼で、お浮かれやす、よ」

など、云つたが、お生憎様にも藝妓と遊ぶやうな浮かれ心は、東京に忘れて置いて來た私であつた。四日も正午頃まで床の中に居て、此の日頃の私と云ふものを描いて見たりした。

恰度、新聞社を罷める一週間ほど前のこと、私は又子供の事から、妻と言爭つたことがあつた。長男が輕い風邪に罹つてそれを醫師に診て貰ふ時日の遲速から、不用意に私の云つた言葉を癪に障へて、二人は口穢く罵り合つたことがあつた。

「馬鹿、出て行け。貴様のやうな奴は、もう俺の女房ではない。離緣するから出て行け。今さつさと直ぐ出て行つてしまへ……」

「何だ、出て行けだ。あア、出て行くとも、こんな家に誰が居てやるものか。さ、今直ぐ出て行くから、六年前の私にして返せ……」

互に感情が激して來ると、傍でハラ／＼して見て居る子供達に對しても、恥しい思をするやうな事が、これまでに決して珍しくはなかつた。大抵の場合には、さうした大きな言ひ募りや罵り合も、痴話喧嘩のやうな終末となつて、二人はもう二人の力では、何うにもする事の出來ないやうな不思議な糸に、引張

られて居ることを減ずるのみであつた。

然し其の罵り合も、不用意の間に程度を越えて行くと、もう二人の仲直り位では、何とも收拾出來ないものに變つて行くのであつた。そうした時には、私が他に泊つて、妻の顏を見ないやうにして居るか、又は妻が親戚の許へでも行つて、二三日歸つて來ないやうにするか、何れかに出るのが例であつた。

「何うだ、考へて來たか……」

「え、決心して來ましたよ」

「いよ／＼別れるつもりなんだね」

「別れます。別れるのは……別れやうと思へば、何時でも別れますけれど……」

「けれど、何うしたんだ……」

「……………」

斯うした形に依つて、大抵の場合は平靜に歸して居た。又これが正反對に、妻の方では何しても出て行くといふのを、私の方が下手に出て、賴むやうにして仲直りしたことも、今日までには、決して珍しい事ではなかつた。

思へば夫婦になつてから足掛六年、二人の間の喧嘩と云へば、何時でも其の原因は、三人の子供からであつた。私のためには血を分けた子供でも、妻のためには生さぬ仲の子供であることが、何時も二人の夫婦關係に、力強い波瀾の種となるのであつた。そして二人が若しほんとに、別れてしまう心持で居たのなら、六年後の今日を待たずとも、別れる動機はこれまでにも度々あつた。それが何うやら斯うやら夫婦として暮して居るのは、二人とも別れる機會を失つて、ズル／＼に今日まで引摺られて來たやうなものであつた。

「もう宜い加減にしやうよ。緣があつて夫婦になつたのだから、別かれるばかりが二人の幸福ではないのだ。斯うお互に無遠慮になつては、氣隨氣儘も出て來るし、腹が立てば怒りもするし、要するに二人とも忍耐力が足りないのだよ。今後はお互に注意して、たとへ喧嘩をする時があつても、別れるとか去るとか云ふやうな事は、口にしないやうに心掛けることだね」

斯うした一場の小波瀾を過ぎてから間もなく、私は去年の八九月頃から罷めやう／＼と思つて居たM新聞社を、二月限りで退社することに爲つたのであつた。

あれや此れやのいざこざから逃げて、呑氣な旅の月日に嘯かうと思ひ、あはたゞしく飛で出た旅も、さて私一人の寂しい道中では、何の面白味も愉快もなかつた。反つて過ぎ去つた樣々の事が、それからそれへと思ひ起されたりした。

◇

三月五日は、久し振に鳥羽へ行つて見た。

「鳥羽は好い所、朝日を受けて、上り下りの船が着く……」共の鳥羽へ初めて遊んだのは、今帝御即位式の盛觀を、新聞社へ通信する用務を帶びて、京都、奈良、伊勢へ出張した時であつた。二十年前から鳥羽の明媚秀麗と云つたやうな風光に心醉して、樋の山を遊園地に經營し、今日では東洋遊園地株式會社を起して居る一森彦楠翁が、私達一行を案内してくれた。

結婚したばかりの妻も一緒で、私は樋の山に登つたり、待月樓に寢たり、二つ一と云ふ藝妓を見たりして、口々に「好い所ですね」と云つたものであつた。樋の山の皆春樓の座敷で、ビールを飲みながら俯瞰すると、大小八十餘の青螺は、深碧した海光の中に點々として、明るい美しい一大畫圖を、私達の前に展開して見せた。晴れた秋の日の午後で、私のやうな近眼者にも、遠い富士山の姿が手に取るやうに眺められたりした。漁業と造船と軍艦の假泊と、それ等がこの風物に更に一段の景趣を添えて、幾夜の旅にぼやけた私の心持を、よみがへらせたものであつた。

それから六年の月日は、瞬き一つする間に過ぎたが、春の喜びに目ざめたらしい鳥羽の島山は、麗らかな太陽の光の下に、再び私の前に展がつて居た。新に一森翁が購つて、旅館を營むで居る對神館は、鳥羽驛近くの渚の前に、別莊風の瀟洒な構へをして居た。正面に小さく神島を眺め、左には答志島が長く裾を引き、右には坂手島、菅島の二つが、重り合つて見える眺望も、私には生面の喜びがあつた。一森翁の舊主と云ふ關係から、岡部長職子爵の一家は、毎年暑熱を此の鳥羽に避けるさうで、對神館と云ふ名も、岡部子が命名したと云ふ話であつた。私はK君に案内されて、そこから樋の山に登り、皆春樓の一室で休憩した。新聞紙上で有名になつた桝本卯平氏は、この皆春樓の離れ座敷に居て、「工場から見た勞働問題」とか云ふ本を、一ケ月間で脱稿したといふ話なども あつた。

「今夜は恰度滿月ですよ。何うです、一晩この山にお泊りなさいませんか」

K君は斯う云つて、しきりに勸めてくれたが、私は懐しい鳥羽の風光の中に浸つて居ながら、落着いて春の夜の月を觀る心持にはなれなかつた。親戚や友人の好意に甘へてさへ居れば、大阪、京都、岡山、廣島、熊本、名古屋、山田、鳥羽の島山と云ふ風に、私は何處にでも落着いて、半年や一年を遊んで暮せる身の上であつた。妻を捨て子供を捨て、一思ひに自らを殺し

てしまうと思へば、死時も死所も到る所に、私を待受けて居る筈であつた。大阪の故街の前で、馳走になつた居た時にも、私は此のまゝスーと死んでしまつたら、何んなに心安からうと思つて見た。山田の五二會ホテルの二階で、うつら〱と寢て居た時にも、大きな地震か何かゞ起つて、アッと云ふ一呼吸の間もなく、死でしまつたら面白からうと、飛でもないことを想像して見た。黄昏近い鳥羽の海、人が住むと云ふ坂手が管で、世に隠れて一生を終るのも、面白からうと思つて見た。……

伊勢山田は寒いのに、鳥羽はぽか〱と暖かであつた。靜に落着いて、原稿でも書かうとするには、樋の山が最も適さ相に思はれた。

「今度は氣まぐれ旅行ですからね、何處に行つても氣分が落着かないのですよ。大阪へ行かうと思つて行くと、直ぐ歸りたくなつてしまうし、辨天島へ泊らうと思つても、直ぐ發つてしまうと云ふ風で、自分でも不思議に思つて居るのです。こゝへは又、長逗留のつもりで來ますから、その時は是非、御厄介になりますよ……」

私は斯う云つてK君と別れ、其の日の夕暮れ頃には、五二會ホテルへ歸つて居た。昨日まで私が唯一人であつた客室には、一組二組の客が來て、中には古市の藝妓をあげて、有明節などを唄つて居る客があつた。一夜泊りの浮かれ男達を相手にして、彈いたり唄つたりして居る古市藝妓の言葉を、襖越しにジツと聞いて居ると、少し尻あがりではあるが、早口の田舎〱して居るのが、何となく可憐に思はれたりした。

その夜、私は赤福餅の主人に招かれて、宇治の別宅で馳走になつた。男二人差向ひのチビリ〱と飲みながら、十時頃までに白鷹の一升瓶を空にした。然し二人の話は理に落ちて、盃は水を飲むやうに冷たくなつて行くのみであつた。

「藝妓入らずで飲むのんも、宜いもんやで」

「さうだ、生じつかの女は、居ない方が宜い」

こんな事を云つて飲んで居るところへ、八歳ばかりの男の子が、襖越しに顔を出した。

「父ちやん、鉛筆と手帳、買つてや」

「よし〱、おすわりして、伯父ちやん、今晩はするね。……松崎君、僕、この子、可愛うてな。一人子やさかい、甘らんね」

「さうだらうとも、……能く肥つて居るね」

「この子、若し死だら何うしやうと、僕、何時もさう思ふと、泣かされるね」

「馬鹿、そんな事を思ふ奴があるか」

その子の可愛らしい顏を見て居るうちに、私は三男の俊郎の事が思ひ起されて來た。可愛ざかりの四つの秋、生みの母に死別れた俊郎の事を思ふと、赤福餅の子供などは、何んなに幸福だか知れなかつた。

「子供は可愛いもんや。僕、何のために働いて居るね、みな、子供のためやないか……」

「さうだ、さうだ。第二の自分を殘す爲めに、いや、ほんとの自分を完成するために、子供は、やがて大切な自分なんだよ」

「もう、そんな話よして、飲まうやないか」

內宮に近い宇治の夜更けた頃、二人とも素面のやうな顏をして、別れの言葉を交した。

◇

六日は終日、宿に居て暮した。

東京の妻から消息があつて、留守中の出來事を、何くれとなく云つて來た。

社の方からも一日も早く社宅を明け渡してくれねば困るとの話がありました、あなた樣がお立の後は、哲郎と共に一生懸命に探して居ますが、何うも宜い家がありません、五室か六室の家があつたので、家賃五十圓敷金七百圓を構はずに、約束の手金を渡して置きました、大塚仲町四十九番地ですが、湯殿も無いし、臺所もないので困ります。他に家賃九十圓敷金千圓の家が、上富坂町にありますが、九十圓は考へ物だと思ひます。

それに新聞記者だとか、文士だとか云ふ事を聞くと、體好く斷はられてしまひます、現に中澁谷に、敷金三百五十圓、家賃七十圓の好い家がありましたが、家主の楠本と云ふ材木屋の主人は、新聞社に勤めて居た者だと云ひますと、貸しさうな顏をして居たのに、實は他に先約があつてと云つて、昨日斷つて參りました、大塚仲町の家主の麻屋でも、新聞社の社會部に勤めて居たと云ひましたら、エ、社會主義者ですかと云つて、顏色を變へて居ました、そして手金をソツクリ返して、今晩斷つて來ました、社の方も困るでせうが、此方も身分を家主に理解されぬので、折角五六十圓の家があつても、斷られてしまひました、仕方がないから、あなた樣がお歸りの上で、貸家探しをしやうと思つて居ます。

それから柳谷秋月さんが、宿屋を斷られて困ると云つて來ましたから、當分宅に泊らせる事にいたしました、盲目ですから宿でも厭がるのでせうが、折角寄席へ出るやうになつたのに、氣の毒だと思ひます、それから廣島の妹夫婦が、一日に上京して寄りました、あかん坊は可愛い顏をして居ます、一月ぐら

東京に居るさうですから、お歸りになりましたら、逢つてやつて下さい、あなた樣は宅の事は御心配なく、愉快な旅をおつゞけなさいませ、御留守中に轉宅したいのですが、前申すやうなわけで、ホト／＼困り切つて居ます……

私は此の手紙を見て、住宅が無い事に脅しつけられて居る東京生活の悲慘さを、今更のやうに思ひ浮かべて見た。新聞記者とか文士とか云ふ階級に對して、高利貸に等しい貸家業者輩が更に何の理解も有つて居ないのは、今に初つた事ではなかつた。三菱に勤めて居るとか、郵船會社に出て居るとか、但しは大藏省か日本銀行へでも通つて居ると云ふと、ペコ／＼頭を下げる癖に、新聞記者とか文士とか云ふと、多くの家主はこれを敬遠したり、又は毛嫌したりするのが例であつた。折角、開いて居る貸家でも、法外な敷金や家賃を請求したり、他に先約があるなどと噓を云つて、貸さぬやうに仕向けるのが、今の家主氣質と云ふものであつた。さうした東京に住んで、これから後も、文筆に關つた仕事をして、一家五人の糊口を過さねばならぬかと思ふと、私は重苦しい壓迫を感ぜずには居られなかつた。

盲目の琵琶師柳谷秋月が、私の家へ轉げ込で來たと云ふのも、悲しい出來事の一つであつた。彼は今年三十二歲になる壯年であるが、九州に生れて各地を放浪して居る間に、私の故鄉美作の山中に留つて、自己流の薩摩琵琶を彈奏しながら生活して居た。そして盲目の不自由をも思はず、新しい樂器の發明に苦心して、半それが成就した頃、腸チブスに罹つて、入院せねばならなかつた。その新樂器は電力を應用し、ピアノのやうな指彈によつて、ピアノとオルガンの音を同時に發すると云ふ極めて大仕掛のものであつた。彼は薩摩琵琶の他に、柑橘類の樹の葉に依つて、微妙な音を發する柴笛の名人であるが、彼は其の藝能に依つて、衣食するのみが目的ではなかつた。不幸にして青年の頃、兩眼を盲いたけれど、聲樂と樂器に特殊の興味を有つて居たのが、彼のためには唯一の慰藉でもあり、また自らを活かして行く道でもあつた。

その柳谷秋月が、鄕里の友石田君の紹介狀を持て、初めて私を訪ねて來た頃、私は猛烈な流行性感冒に罹つて、瀕死の床に横つて居た。彼は私の枕頭に座して、數奇を極めた半生の經歷を語りながら、自分でも感極つてか、歔欷いたり、嗚咽したりした。父が戯れに通じた看護婦の腹に生れて、まだ乳房が欲しい頃、若い美しい母は、九州の田舍の醫院で、毒藥を仰いで冷たくなつて居た。幼い頃から知らぬ他人の手に育くまれ、やつと青年期に入つた頃、軍人生活を送らうと志したが、それも思へば果敢い月日に過ぎなかつた。聯隊長の養子に迎へられ

て、一子を生むと間もなく、猛悪な眼病に苦んで、病院の門を出る頃には、常闇の痛苦に泣かねばならぬ身の上に落ちて居た。それから後の半生は、盲目の薬師として立つに決心し、各地を放浪し流轉しながら、雲の美作路に迷ひ入つたが緣となり、東京へ出る一月前まで、夏は涼しくて鮎の美味い勝山の城下に居て、人の情に生きて來たと云ふ話であつた。

困るのはお互である、何んなに貧乏して居ても、人の世話が出來るのは幸福である、秋月は眼が見えない、何うか親切にしてやつてくれ、何も彼も、東京へ歸つてからの事……

私はこんな返事を、妻に宛て書いた。厭な東京、苦しい東京悲しい東京から逃げるやうにして旅に出て居ながら、私は矢張り其の東京へ歸らねばならなかつた。

そして、七日の午後四時頃には、人力車に乘つて、名古屋の町を歩いて居る私であつた。

◇

山田から名古屋まで、三時間餘りの汽車中で、私は桝本卯平君の顔を見た、四日市藝妓の顔を見た、津の市會議員の顔を見た、桑名の宿屋の女將らしい顔も見た。皆が皆、幸福らしくニコニコして、元氣に、美しく、有福らしいのが、私の心には羨ましく見えたりした。

名古屋ではS新聞の主筆K君が、愛する弟にでも抱きつくやうな温情を以て、私を歡び迎へてくれた。早い大學出ではあるが、名古屋に居ても、毎月丸善から新らしい本を取寄せて、熱心に讀み、熱心に書いて居る此の畏友は、名古屋を中心とした地方に於ける文化運動の先覺者と云ふ概があつた。

「今夜は、ゆつくり遊んで行けよ。僕もこゝへ來てから七年になるが、もう宜い加減に浪人してもいいと思つて居る。今まで讀だ物を統一するには、二年ぐらゐ遊ばねば駄目だからね。君も當分は遊ぶことさ……」

K君は斯う云ひながら、私を河喜と云ふ料理屋へ案內してくれた。淸榮連の藝妓も、そこの女中も、名古屋には成程、美人が多いと云ふことを、私はしみじみ知ることが出來た。河喜は第二流ださうであるが、何を食べても料理加減が好くて、無遠慮に舌皷を打つたりした。

明治三十六年の夏、關西で有名な小說家W翁に隨伴して、名古屋の料理を食べたり、名古屋の美人を眺めたりしてから、恰も十八年振に見た名古屋市であつた。東海道を幾往復の途上、何時か一度は下車しやうと思つて居ながら、私は遂に其の日まで、名古屋に親しみを感ずることが出來なかつた。A新聞の文

局長から憲政會の代議士になつたK君や、脚本家になつたN君など丶共に、名古屋、熱田と云ふ風に、第一流の美味い物屋を食べて歩いた頃の事が、それからそれへと思ひ起されたりした。けれども、其の時分に歩いた私の足跡は、十八年と云ふ短からぬ月日の隔りに消えて、今では電車が通つたり、自働車が急いだりして居るのみであつた。

深夜に近い頃、K君に別れた私は、まだ懐中に若干の金を殘して居た。明日は蒲郡で晝飯を食べ、夜は辨天島に寄つて、そこで最後の一夜を明さうと思ひながら、驛前の宿屋へ送られた。急行へ乘れば八時間、もう半ば東京へ歸つたやうな氣持がして、今朝まで過した山田の寒さが、淡い心に懐しまれたりした。何を爲ると云ふのでもなく、何を讀むと云ふでもなく、何を食べると云ふのでもなく、唯ボンヤリと過して來た八九日の旅路の様が、今更のやうに思ひ起されたりした。何處へ行つても落着くことが出來ず、あはたゞしい思ひで、次から次へと急いで來たことが、取返しのつかぬ損失でもしたかのやうに、後悔されたりした。こんな事ならば、熱海か修善寺の温泉へでも行つた、靜に寢そべつて居た方が、何のくらゐ好い保養になつたか知れなかつた。如何に氣まぐれとは云ひながら、快々として樂まぬやうな旅の日を、追立られるやうな心持して過して來たことが、今更のやうに口惜しく思はれたりした。

けれども三月八日の午後一時、蒲郡の常盤館に入つて、そこの二階から大島小島を眺めた時には、少しも惡い氣持はしなかつた。鳥羽の島山を見て來た眼には、景色が散漫でもあるし、女性的でもあつたが、明るくて暖いのが、避暑には不向で、避寒には適き相に思はれたりした。それに常盤館の構へは、避寒と云ひ設備と云ひ、旅館としては至れり盡せりで、一室八疊大の室つきが、一晝夜四圓の室料であるのも、高いとは云へなかつた。茶代を廢止して、一錢も受取らず、室料や宿泊料で極めて居るのも、温泉宿でない東海道筋の海岸避寒地としては、聊か異色として宜かつた。

私はこゝで鹽湯に入つたり、晝飯を食べたりした後、次の汽車で辨天島に向つた。名古屋のK君には、「蒲郡でゆつくり寢やう」と云つて置きながら、そこも私の心を落着ける所ではなかつた。景色の好い所、居心地の宜い宿へ行つても。たつた一人でジツトしてことが、私には堪え難い苦みなのであつた。

辨天島では、もう電燈が點いて居た。四邊が餘りにパツとして、水も淺く乾からびて居るやうに思へるのが、私には厭であつた。今度は若荷屋の客になつて、夕飯の膳に向つたが、魚は東京より新しくて美味くても、電燈の光が暗いのが、私の氣分

を引立たせなかつた。

「姐さん、十時七分の夜行で、東京へ歸るよ。泊めて貰はうと思つて來たが、何うも淋しくていけない。こんな所、男が一人で來るところではないらしいね」

十六七の美しい女中は、默つて笑顏を見せるのみであつた。最初も辨天島、最後も辨天島にして、今度の旅を終らうとする私は、それでもまだ幸福であつた。これから歸らうとする東京には、長い〳〵苦しい〳〵ほんとの旅路が、私を待受けて居るではないか。

一思ひに呼吸の根を絕つべき死所は、辨天島にもあつた、蒲郡にもあつた、鳥羽にもあつた、山田にもあつた。名古屋にも大阪にも、私一人を殺すに適い場所は、此所にも彼所にも轉がつて居た。けれども、私が探ねて歩いたのは、そんな死場所であつたらうか。

さうではない――私は半生を安んじて托すに足るべき死處を、探ね求めてさまよひ歩いたではなからうか。

二等室に寝そべつて、靜岡沼津を夢うつゝに過ぎた時、私は初めて思ふ儘に泣けるやうな氣持がした。

「私は東京で死ぬるのだ……」

大阪及び大阪人の爲に

――生方敏郞氏の大阪觀を評す――

石丸梧平

緖言

中央公論三月號に掲げられたる生方敏郞氏の「日本一？の大阪」と云ふ文章を讀んで、私はおもしろいと思つて居た。大阪と云ふところは日本の都會の中でも可なり特色の著しいところなのだが、そしていろ〳〵複雜々多なものを含んで居るのだ

大阪には文筆の人が少ないものだからこれを世に紹介すると云ふやうことはなかつた。尤も文藝の作品としては、岩野泡鳴氏の「ぼんち」、上司小劍氏の「鱧の皮」その他の作品などに多少現はれては居るのだが、然し、大阪と云ふものを文藝の作品として現はすには、あまりに僅少に過ぎる。創作はもと〱大阪の地理、人情、生活、思想などを概念的に表現すべき任務を持つて居るのでないから、隨つて十篇や二十篇の短篇創作が出たからとて大阪と云ふものの全體を見せることは出來ないのである。その點では表面からの叙述を本位とする旅行記、風土記などによつて、(ほんのバアーズ、アイ、ビュウに過ぎないが、然し)反つて大阪なるものゝ一寸した概念だけは得られる譯である。

けれどもその大阪の概念は、これまで、あまりにも貧弱に、皮相的の觀察によつて東京の文士――京阪旅行の文士によつて紹介されて居るのである。文士は文章を書くのが商賣だから、ともかくも見たところを書いてそれを新聞雜誌に發表すると云ふことは、決して惡いことではないのだが、今度の生方君の「大阪觀察記」が意外にも大きい反響があつて、甲是乙非、中には大に憤慨して中央公論社に投書するものさへ頻々だとのこと――で、かうした妙な因緣から私がこゝに再び大阪のことを書くと云ふ順序になつたのである。

これまでも大阪のことを書いた文士もあり、掲載した新聞雜誌もあつたが、斯うした事件を起させるに到つたのは、中央公論の勢力か、生方君の妙筆力かは知らぬが、何れにしても、それにつゞいて何か書かねばならぬことになつた私こそ、一寸當惑せざるを得ない。尤も私は大阪の生れで、泡鳴、小劍、梅溪の諸先輩よりは、遲れて東京入をして居るので――東京へ移つてからまだ二年にしかならないのだから、大阪の記憶や印象はそれ等の人たちよりは新しいかも知れぬが、さて、十四日の夜突然に中央公論記者の訪問を受け、一夜のうちに何か三十枚ばかり書けと命ぜられたのでは一寸當惑せざるを得ないのである。――どうせろくなものは書けまいが、然し中央公論記者はあの生方君の記事に憤慨してどし〱投書して來る大阪人に對して、記者としての公平な態度を持して、それなら、大阪生れの私なら、鄕土を愛する心から、そして多少は大阪を知つて居るところから、何か適當なことを云ふだらうとの心盡しで、こゝに題まで與へて「大阪及び大阪人の爲に」と云ふことになつたのである。

大阪のことなら私も大に書いて見たいと云ふ心持がせぬでもなかつたが「大阪人の爲に――」は、一寸困るとその時思つたの

であつた。生方君を論敵にすることはよいとしても、その論敵の云つてることにも御尤なことが多々あるのであるから、それを一々辯駁するわけにはいかぬのである。

だが、よく考へて見ると「大阪人の爲めに」と云ふ意味は、生方君が例の皮肉な調子で、大阪人には可なり反感を抱かせるやうな書き方をしては居るが、然しあの言説を眞面目に聞く大阪人に取つては、大に爲めになることもあるのである。隨つて私がこゝに、更にその生方君の言説を敷衍することになつても、慥かに大阪人の爲めになるのである。ましてやもし生方君の言説を攻撃するところでもあれば、その點は「憤慨生」の心持にも多少添ふ處があるかとも思ふ。――何れにしても、中央公論記者から與へられたこの題目は、今となつては、やはり一番適當なよいものゝやうに思はれて來た。

で、ともかく書くことにする。順序立つてまとめる隙もないので、私の大阪印象記を思ひ出すまゝに書きつけることゝする。

公平に云ふと、生方君の大阪觀は、割合によく出來て居る。氏は自ら稱して鈍感なりと云つて居るが、然し十日や二十日の旅行者にして、あれだけのことを見、そして感じて來たとすればあまりに鈍感でもない。これまでの京阪旅行專門の二三の文士よりは遙かに好いところがある。唯、恐るゝのは、生方君が、他人からお話を聞いて來たことを、そのまゝ書いて居ると云ふやうな點があること、その爲めに、大阪人の根本の心理に觸れて居ないところなどもあつて、なるほど大阪人の憤慨しさうな點もあるのである

序に一寸云つておきたいことは、生方君が云つてることは、重に純粹の大阪人に對しての批評であつて、所謂「無産智識階級」に屬する人のことではないのである。だから、その無産智識階級の人々があれを讀んでは「おれも大阪人だが、まるで當つて居ないぢやないか」と叫ぶものがあるかも知れないが、それは叫ぶものゝ方が野暮なので、その無産智識階級の人々は、こゝに生方君の云ふ所の大阪人には、既に範圍外になつて居るのである。

尤も私の眼から見ると、大阪に住んで居る以上は、よしそれが無産智識階級者であつても、大阪人に違ひないのだから、さう云ふ人間をも大阪人の中に入れて、そして現代の大阪――否い大阪ばかりでなく、今や變化しつゝある大阪人と云ふものをも明かに論じなければならぬ筈なのだが、十日や二十日の旅行者にそんなことを求めるのは極めて無理なことであると云はねばなるまい。多年大阪に住んで居た私にさへも、その複

なき「大大阪」「新大阪」を一言にして盡すと云ふことは甚だ困難なことである。たゞ私は、私がかねて大阪人を描いた三部作を發表しやうとするに就て、その最初の企てとして、「船場のぼんち」を書いたのだが、あの作の主人公なども、殊にはその周圍の人々（父母や女や店員など）は皆舊式の大阪人で新時代の大阪人ではないのである。私はあの作につゞいて新時代の大阪人を描かうとして居るのだが、私の研究もまだ充分に遂げられて居ないと共に、また事實ほんとうの新時代を代表する大阪人と云ふものが、まだ容易に見出されないのである。全然他國人で、大阪へ流れて來て、新聞記者や官吏になつて居る人、一寸大阪に住んで居る人はないことはないが、それ等の人を大阪人として取扱ふのはまた不適當なのである。――それに就て後章に於て少し述べるつもりだが、ともかく生方君の大阪觀察は、多少表面的概念的になつたとは云へ、舊時代の大阪人を見て稍々成功して居ると云はねばならぬのである。――たゞそれ風土記の範圍に止まることは勿論だが――。

一、大阪人の信仰

生方君は、その「大阪の陰口」の最初に於て、「大阪ほど殺風景な所はない」と云つて居る。それは一面から見れば尤もなことだ。然し、かういふ事も考へねばならぬ。大阪人自身には彼等の生活は彼等の信仰によつて、その欲するまゝに生きて居るのである。東京から遊びに來る人のために都合のよいやうに作つてゐる都市ではない。尤も京都や奈良のやうに舊い寺や美しい公園を他國人に見せるために、そして、その他國人から金を貰つて生活するために存在してゐるやうな町はいさ知らず、大阪人の生活と信仰は、それ等の都市とは大に違つてゐるのである。旅行者の生方君が、殺風景と見たからとて、大阪人自身はその生活が、それほど殺風景だとは思つて居ないのである。なるほど、黒煙は濛々として上つてゐる。森もない、山もない。從つて町に變化はないであらう。生方君の所謂「高き屋に上りてみれば大阪は、煤煙の外に何物もなし」は傑作だが、然し、それは何處までも旅行者の詠んだ傑作である。大阪人自身の內部生活は、決して旅行者の見るやうな空虛なものではない。

で、大阪人の生活は何であるかといふと、生方君も指摘してゐる通り、正しく金である。金が大阪人の生活の信仰の的となつて居るのである。從つて、彼等が持つてゐる宗教は、たゞ金儲けの神又は醫者代りの神が、その信仰の對象なのである。天滿の天神樣が、開運の神であり、服部の天神樣が、脚氣專門の神樣であることは、宜なるかなである。即ち、天神樣が、能勢の

神、學者詩人にならうとするもの丶對象物でないところに、大阪人の信仰の徹底してゐる所を見ることが出來るのである。たゞに天神様ばかりではない。惠比壽様だらうが、お釋迦様だらうが、日蓮様だらうが、いかなるものでも、それが、大阪人の神様であり、佛様であり得るためには、その本來の能力は問ふまでもなく、すべて、金をくれる神様でなければならぬのである。

大阪人の生活は、この信仰のもとに統一されてゐるのである。

すべて我々が一日でも生活してゐるといふ事は、何等かの自分の生活を統一すべき信仰を有することによつてである。その信仰が、理性であらうとも、戀愛であらうとも、金であらうとも、何等の選ぶところはない。たゞ、空々漠々、無信仰の生活をしてゐるよりも、そこに、金といふ的確なる信仰をもつてゐる事の方が、その個人にとつて、どれだけ、生き甲斐のあることか知れない。「高き屋に上りて見れば」煤煙の外に何ものもない大阪も——そして森や山のない大阪も、のみならず學問藝術のない大阪も、彼等自身の生活には何等の苦痛ではないのである。彼れ等は、金と云ふ唯一の信仰によつて、そしてその金から派生する、彼れ等に都合のよいいろ〳〵の快楽によりて、彼等はその生活に意味を見出して居るのである。この點で彼等の生活は明かに統一されて居ると云はねばならぬ。何の理解もない他人から、趣味の高下などを勿體らしく説かれるのは、大阪人に取つては寧ろ迷惑なことと云はねばならぬ。

然し、問題は、大阪人のその信仰が、一個の正しき人間として生存するには適當なりや否やと云ふことになる。金を信仰することゝ、戀愛を信仰すること、理性を信仰すること、或はまた、他の如何なるものを信仰すること、その何れが、人間としての全存在に對して、正しきやと云ふことである。

こゝまで論じて來ると、生方君が、大阪を以て「金の都」と笑ひ、「煤煙の外に何物もなし」と罵つたことに、多少の意味が生じて來るのだが、然し、生方君の言葉は、大阪人の充實した内部生活に一應の同情と同感とを寄せないところに、その獨行者らしい缺陷があるのである。

で、私は茲に其結論を述べるべきだが、私は今少し他の方面よりも大阪を見ることにしたいのである。

二、大阪人の生活と遊蕩並に趣味

大阪人の生活は、一言にして云ふと、やはり「金」を中心と

した生活である。無論生活といふ以上は、食ふこと、性慾のこと、色々の趣味のことなども入つて居るべきだが、然し、それ等のことを論ずるにあたつても、この「金」といふものを根柢として考へねばならぬ。生方君は「大阪は何處へいつても青葉の森も林も見えない」と云つたが、それは、一面、大阪人に自然を愛する心がない、趣味がひたすら物質的だとも云へようが、然し、大阪人が「金」を中心としての生活、商賣大事の生活からいふと、その森や廣い原などがないことの方が、その生活の上に便利なのである。生馬の目をも拔くといふ忙しい都會の生活なら、その町は、その商賣をする點でありさへすればよいのである。徒らに、廣い空地や、森や、林やがあることは、交通の上にも、時間短縮の上にも、極めて不便で、どこまでも都會としての選擇した商賣地を求めてゐるのである。東京のやうに、森があり、林があり、大きい住宅があり、さうした都會では、忙しい、そして氣の早い大阪人には、商賣が出來ないのである。この點からは、他國人には如何にも殺風景な都會と見えるだらうが、大阪自身にとつては、それが都合のいい商賣所なのである。無論、彼等にも、生命が欲しいし、衞生にも多少の注意は拂つてゐるから、住宅は大抵郊外に持つてゐる。そして、大阪の市内では、たゞそれ、商賣に便利、金を儲けるに便利でありさへすればよいのである。その點は、東京の町が商賣にも、住宅にも、散歩にも都合のいいやうに、人間の全體的生活を完成しようとしてゐるのとは、大阪はまるで考へ方が違ふのである。それに就ては尙ほ後章で述べる。

さて、大阪人の生活は、かくの如く、金中心である。そして金と、色と、酒とは大阪人の三拍子で、從つて、遊蕩は大阪人の最も貴重なる生活なのである。

性慾と酒――それを大阪人からとり去ることはとても出來ない。實際、本當の金儲けにかゝつてゐる大阪人は、隨分よく働いて居る。心を惱し、頭をいためて激しく働いて居る。東京人の大部分の人々が、無產知識階級で、所謂月給取りの生活をしてゐるに反して、大阪人は、朝早くから夜遲くまで寸分の暇もなく、死に身になつて金儲けにかゝつてゐる。つまり、東京人の月給取りが、朝の八時から午後の四時までを役所なり、會社なりで勤めて、その勤めは如何にも他人のためだといふやうに不平らしくだら〳〵して、從つて、心に餘裕があり空虛があるに反して、大阪人の生活は、全く寸分の暇もない充實した生活なのである。(よし、使用人であつても、大阪人の仕事振りは、さうした、月給取りの働きぶりとは大に違ふ)で、その疲れ切つた大阪人の娛樂は、書物を讀んだり靜かに物を考へたりする

やうな樂しみよりは端的に、性慾と酒とにその悦樂を傾けるのである。多忙な彼等の生活は、なるべく、刹那的に最も燃燒した強烈な快樂を求めようとする。それは、性慾の刺戟に外ならぬのである。そして、酒がこれに加つて、一層その刺戟を有効にするのである。

こゝまで語つて來ると、大阪人の趣味といふ事を更に附け加へて云ふ必要もない位である。酒と女の外に、何があるか。それに次ぐものは、先づ芝居であらう。それも、大して考へる藝術としての演劇ではない、見て面白い芝居としてである。その他、特種な人の特種な趣味としては、二三ないではないが、それは取り立てゝ、いふほどでもあるまい。要するに、彼等の趣味は、精神的のものよりは、物質的のものであることは、生方君の言葉通りである。――そして、そこに、大阪人が、彼等の生活を改善しなければならぬ大きい暗示があるのである。

三、デモクラシーと大阪――

無産智識階級の問題

大阪は平民の都である。東京が官吏や貴族の都であるに對して、大阪は全然平民の都である。住友、藤田などの二三の男爵はあるが、それさへも公卿や武士の果てではなくて、純然たる平民の進化したものである。この點に於て、大阪が平民の都であることには何人も異存はあるまい。

だが、大阪がデモクラシーの都會であるかといふ質問に對しては、否と答へざるを得ないのである。それは、平民だが、しかし富豪が多いといふことである。そして、金を尊重する一般市民は、その富豪に對して反抗するよりも、むしろその百萬長者たることは、彼等が終生の目標であり、憧憬であることによつて、全然デモクラシーの市民ではない。この頃では、或は新聞雜誌の議論を多少でも見たものが、デモクラシーの智識を得てゐるかも知れないが、然し、今も尚、大部分の市民が皆、デモクラシーなどに對しては、阿呆らしいと思つてゐる位である。

生方君は、天王寺公園を論じて、あの茶臼山をとり入れないのは、正氣の沙汰でないといひ、藤田家が網島へ邸宅を構へたために、小春治兵衛情死の舊蹟たる大長寺を轉居させたといふことをも述べて、大阪人が自然美や藝術傳説をも眼中に入れて居ない事を笑つて居るが、それは、私としては、大に同感だが、そこは大阪人の非デモクラシー的思想が、富豪のそれ等の行爲に對して甘んじて是認してゐるわけなのである。

凡そ、今の世の中に、大阪人ほどデモクラシーでない人間は

あるまい。それは徒らにデモクラシーの叫びを以て富豪に反抗するよりも、さうした無駄な時間を利用して一日も早く自分自身が、その富豪にならうと考へてゐるのである。勞働者に至つては、更にさうした思想さへも持つてゐない。少くともこれまでは持つてゐなかつた。それは、大阪人の生活は、餘りにも當面の物質生活に追はれてゐるので、さうした本當の人間性としての反省を缺いて居たのである。つまり、思想生活が、なかつたのである。その思想生活のない點が大阪人の大なる缺陷である。大阪人は當面の生活に對しては、可なりはき／＼と、彼の生活哲學によつて處理して行く。實生活に交渉のない空想的のことは、彼等には、全然計算の外にあるのである。即ち、實生活に沒交渉なるものは、眞理でも何でもない。眞理の眞理たる所以は、實生活に何等かの影響を及ぼさなくてはならぬ。つまり、實生活に都合のよいものそれが眞理であり、不都合なものそれが非眞理である。眞理とはプラトーの哲學が示すやうな宇宙の大法とやらの絶體的無條件なものではなくて、相對的のものだ。人間自身が、自分の都合のよいやうに作つて行くものだ。――さうした考は近代の新しい哲學の一つたるプラグマチズムに符合してゐるやうだが、然し、大阪人の思想生活に缺けたる點は、餘りにもそれが淺薄に見える。

そして、深く根本の人間性を考へるまでもなく、一も二もなく、その金の權威に服從してゐたのである。その服從は、可なり賤しむべき妥協の生活である。だがそれがために、大阪人の生活は破壞や反抗の生活ではなくて、服從と建設の生活であつたのである。金持を見ても「あんなに一人が金を持つて樂をしてゐるのに、他の千人が貧乏に苦しんでゐるといふことは、不合理だ」といふ風に、考へるよりも「己れもきつと、あのやうに金持になつて見よう」と考へるのである。そして、その建設的努力は、非常なものである。大阪人のその根づよい努力は、やがて十年、二十年の後には、一小僧をしてよく百萬長者たらしむるのである。

かくの如くして、大阪人の生活は、今日迄無事な生活であつた。否、建設的努力の生活であつた。然し乍ら、大阪にもやうやく、無產智識階級なるものが、增して來た。彼等は從來の大阪人の生活を無自覺と叫び、非デモクラシーとして、攻擊する。事實、無產智識階級者が叫ぶ如く、大阪は資本主義の都會であつて、それに對して、幾多の貧弱なる勞働者を出してゐるのである。昔は、一小僧もよく百萬長者を望んで、達し得られたかも知れないが、今日の如く、その資本主義的傾向が益々盛となり、貧富の差が、いよ／＼激しくなるに至つては、その下

層民は如何なる努力を加へても、遂に、その百萬長者に達することは得られなくなつたのである。

即ち、大阪は商業の都であると同時に、工業の都となつてゐる。まことに黒煙の都といふ、煙突がまさしく林立してゐるのである。數年前の統計ではあるが、日本の職工數は、凡そ八十五萬人あつたと記憶する。而して、大阪にはその職工が凡そ十一萬人ゐる。この十一萬人の職工をはじめ、所謂、大阪の下層社會の人々の生活が、どんなにみじめなものであるかは、私はこゝに詳に述べる暇はないが、物質的に發達してゐる大都會だけにその物質上の差異、貧富の差は、言語に絕するのである。

これ迄、服從的の人間であり、建設的努力を惜まない人間であつた大阪人が、今や新しい思想の輸入によつて、デモクラシーを叫び、反抗の旗を飜すに至つて、こゝに大阪人の生活の新なる曙が來たのである。大阪人が、本當の自覺によつて、人間としての正しい生活に入ることが出來るとも云へようが、同時にそこには革新の危機が迫つてゐるのである。

私は先に、「大阪人の信仰」を論じ、そして、大阪人のその信仰が、一個の正しき人間として生存するに、適當なるや否やの問題を提出しておいたが、こゝに、自らその解決が來たのである。そして又、私は、「大阪人の生活と遊蕩」を論じて一應は、その酒と女との世界をも是認しておいたが、しかし、その根本に溯つて考へるに至つて、彼等の生活が、餘りにも皮相的、衝動的のものであることの反省を促さざるを得ないのである。

要するに大阪人の生活は、その旺盛なる生活意志は尊敬に値するが、今一歩退いて、人間性としての根本の生活を思はなければならないのである。それには、彼等が新しき精神生活に生きねばならぬといふことである。そして、彼等の經濟生活も、一度その根本に引きかへして、新なる精神的自覺のもとに出發すべきであるといふことである。彼等は餘りにも忙しい物質生活をしてゐる。今や、勞働者に對しても八時間勞働の叫びの高い時、彼等はよしや、他人に雇用されるのではなくとも、然し、事實に於て、その「金」のために、彼等の尊き全生活を――僅かなる睡眠時間を除いては全部それに沒入してゐるのである。それは、何のための沒入であるか。人間が、信仰をもつことは喜ぶべきことだが、餘りにも哀れなる信仰は、「金」に對する盲信は、彼等の全生活を自ら蹂躙しつゝあるのである。彼等は先づ何よりも、その金より解放されなければならぬ。そして新に、人間としての全き生活を建設せなければならないのである。

四、大阪人と藝術

大阪人に取つて、今、何よりも必要なることは、彼れ等がその藝術によつて、彼れ等の生活を觀照し反省することである。大阪人が意志力に於て、他の何人よりも強く、その奮闘的生活の、大に尊敬に價するものあるに係らず、その思想生活がなく、その藝術を持たないが爲めに、彼等の生活は、常に的のない矢の如く、放たれたる奔馬の如くである。たゞそれ無鐵砲には進むけれども、彼れ等のほんとうの生活は見出されないのである。たゞ金を得る爲めの大立志力は、まさしく狂馬奔馬の歩みにも譬へられよう。

こゝに於て彼れ等にほんとうの生活を與へるものは藝術に外ならないのである。

藝術は元より物質的欲望を滿足させてはくれない。然しながら彼れ等の生活が靜かに省みられたとき、そこに彼れ等の姿を見せてくれるであらう。そしてほんとうに彼れ等の行くべき道を示してくれるであらう。舊大阪が新時代の大阪に移らうとするには、先づその新しい人間としての教養を必要とする。空虚な形式的教育ではなくして、人間としてのほんとうの姿を見せてくれることに於ての藝術の力が、今日の大阪人に取つての唯一の要求でなければならぬ。たゞこれまでの大阪は、いろ〳〵の事情からそれ等の藝術が生れなかつたのである。昔は近松を出し西鶴を出した大阪が、現代では、藝術家たらうとする一人の希望者もないかのやうである。いや廣い大阪のことだから無論あるにはあるのだらうが、私が嘗て五年間奉職して居た大阪府立今宮中學校では、その幾百人の卒業生の中、その文科大學に志したものゝ一人をも見出さなかつたのである。

かくの如くして大阪人の手によつて、大阪を描いた藝術は殆んど生れたことがない。泡鳴氏の「ぼんち」小劍氏の「鱧の皮」は、僅かにその代表作で、大阪人は、それ等の作に對して多くの感謝を捧げなければならぬのである。(大阪にもこの頃は若い智識階級の間に、可なり藝術的雰圍氣を作りつゝあることを私はよく知つて居る。そしてそれ等の少數の人々は、これ等の作に就て、或は不滿を述べる人もあらう。然しながら、それは、私のこの論議に於ては、殆んど問題にならぬほどの少數の例である。)

私も近く、大阪人を主人公として二三の作を發表した。中にも「船場のぼんち」は可なり讀まれたさうだが、そして私は何よりもこれを喜ぶのだが、希くばこの藝術品を以て、たゞ新聞の三面記事をよみ、遊蕩の見本、參考でありたくはない。藝術は元より明らかさまに教育を主眼とするものでもなければ、主義の宣傳でもないのだから、「船場のぼんち」に於ける作者は、あ

の作の中で、あからさまに「遊蕩するなかれ」「親に孝行せよ」「よく働け」と云つたやうなことを說いて居る筈はない。だが、今日迄如何に思想生活に缺けて居る大阪人とは云へ、あの作をよんで少くとも一應は、自己の生活を反省して見るであらうと思はれる。その反省こそ作者の唯一の願ひであり、同時に讀者の生活の向上であらねばならぬ。かくの如くして大阪人の生活を描いた藝術が大阪人の將來の新しい生活を見出す道程とはなるのである。單に大阪人の生活を描いた作品に止まらない。凡そ人生の姿をあからさまに見せてくれる藝術、そしてそこには人間の步むべき道をほのかに示してくる藝術は、どれだけ人間生活の上に大なる收獲であるか知れないのである。大阪人にはこれまで、その何ものをも持てなかつたのである。そして一度も自己を顧みることとなしに、ひたすらに奔り步んで居たのである。ひたすらに金を追ひ――よしやそれは大阪人の生活を一時的に充實せしむべき信仰であつたとは云へ、その金を追ふことの遂に誤れる信仰、空虛なる信仰であつたことが、おのづから明かになつて來なければならぬ。この時、彼等の胸には藝術が生れなければならぬ。反省が生れ、而してそこに、ほんとうの人間性の爲めの正しき道が見出されなければならぬ。――こゝまで論じて來て、ふと私に思ひ出させたことは、大阪人の中にも、かの煩雜極りなき物質生活に飽き、又物質的成功の頂點に達しての悟りの結果、種々なる形式によつて、一種の宗教的信仰に入る人が可なり多いと云ふことである。が、然し、私はこゝにそれをも正當なる道として認めることは出來ないのである。それは彼等の生活が迷信から迷信への移轉に過ぎないからである。一個の人間の爲めには迷信も何ほ可なる場合もある。然し、迷信は遂に迷信たるに終る。殘されたる幾多の民衆の爲めには有害でこそあれ、何等の人間的生活の向上を促さないのである。

どこまでも、彼等の生活に今、尤も必要なることは、藝術である。藝術によつて先づ人間を正當に見ることである。而してその上に新しい正しき道を築くことである。

×

私には、大阪に於ける藝術の實際運動を如何にすべきかと云ふやうなことに就ても多少の案はある。大阪の富豪が生駒の聖天さんに幾萬金を寄附する代りに、大阪の人間性を向上せしむべき新藝術の運動に對して幾許かの金を如何にして投ずべきかと云ふやうなことも語りたい。然しながら今は紙數も盡きたからそれを割愛して置かう。何れ機會を得て改めて論ずるであらう。たゞ思ひ出さるゝことは大阪には今、懷德堂と云ふ支那の

舊い學問を傳へることを專門とする敎化機關があることである。これはたしか大阪市内の官民が一致してこれが爲めに多くの寄附金などを集めた筈であつたが、現代の大阪市民の爲めに、懷德堂の如き敎化機關を設けて、そしてそれがどれだけの効果を現はして居るのか――私はあれが企てられた當初から切にさう感じて居たことだが、今日あの懷德堂に於て尙ほ、黴の生えた支那の儒學を、然も黴のまゝで、大阪市民の前に說きつゝある大學敎授並に學者諸先生のあることを――如何に時代錯誤の甚だしきかに驚かざるを得ないのである。然も百五十萬の市民の中、その何十人が毎回その講座に臨みつゝあるかを數ふるならば――否恐らく何十人の多數をも集め得ないであらうを思ふとき、大阪人が凡ての營利事業に實際的手腕を有しながら、思想並びに敎化の事業に對しては常に無關心無定見であることを悲しむものである。

×

與へられた紙數三十枚が丁度盡きた。云ひたいことは山々あるが、何れまたの機會を待つことゝしよう。生方君の大阪觀、同君の例の筆鋒で、可なり皮肉でもあり、時には不眞面目とさへ思はれる點があるから、云はれた當の大阪人の中にはなるほど憤慨する人もあらうが、然し大阪人としての私などは、同感すべき點が多々あつた。たゞあれを讀んで憤慨する人は、多少でも深い迷夢から醒めつゝあるのである。喜ぶべきことだ。――更に、あの「大阪觀」を讀んで、それがたゞ舊大阪人の殘骸として笑ひ得る新らしい大阪人の、一人にても多からんことを、大阪人としての私は、切に希望する次第である。

（三月十五日）

食と便と性

寺田精一

□はしがき

食とは食事のこと、便とは糞尿をすること、性とは異性に關係したことをいふのである。かかる意味での食と便と性を同列

にして觀察することは、頗る奇警の取合せのやうである。けれども私は、この一見奇警に思はれる取合せの中から、吾々自らを知る興味ある共通點を認めるのである。それはこの三者が、何れも吾々に羞恥を感ぜしめるといふ點である。

吾々の所有して居る精神作用の中には、其の現はれ方や其の外形から見て、極めて様々なもののあるのはいふまでもないが、時には一つの作用と他の作用とが殆んど相矛盾したやうな行き方をして居ることがある。勿論、この種の例は決して少くないが、就中吾々が興味を感ずるのは、吾々の社交性と羞恥との關係である。社交性も羞恥も、共に對社會的又は對他人的のものであるが、然も一は他の同類に成るべく接近せやうとするものであるのに、他はそれと反對に他の同類に接近するのを避けやうとするものである。即ち吾々人類は、共同生活とか群居生活とか社會生活とかいふ形式で、生存を保持して居るものであるのに、反面に於てそれ等の生活と矛盾した行き方に出やうとする羞恥を持つて居るのは、抑如何なる理由に基づくものであらうか。而してかかる矛盾した行き方に出で勝ちの羞恥を伴ふもので、其の最も標本的なものは私がここで問題とした食と便と性とである。

微笑するの快を得んが爲めに微笑し、怒氣を發するの快を求めんが爲めに怒氣を含むと認められぬ吾々の感情生活は、又赤面せざるの不快を避けんが爲めに赤面するものでもない。食や便や性に對して、吾々が羞恥を感ずる場合にも、亦それ等に對して羞恥を感じないことが苦痛で堪えられないと知つて、自ら努めて羞恥を感ずるやうなものではない。羞恥が食や便や性に極めて密接な關係を持つて居て、知らず識らずの間に隨伴して現はれるのには、吾々の本性に最も重要な意義を持つて居ることを思はねばならない。然も食と便と性とが、何れも同じやうに吾々に羞恥を起さしめるには、又それが特殊な點で共通したところの存在をも思はねばならない。私はこのやうな立脚地から、一見頗る奇警な取合せのやうである食と便と性とを、同列に置いて取扱つて見るのである。

□ 懇親と會食

如何なる時代にも亦如何なる民族に於ても、多數のものが相集つて飲食を共にすることが行はれて居る。私はかかる會食を、其の發達の上から、又其の動機の上から、或は又其の效果の上から見て、吾々人類の社會生活に極めて根柢の深いものであると考へる。假令それが宗教的信仰を介して現はれるにしても、儀禮とか凱旋とか和解とかいふ社會的事實を介して現はれ

るにしても、少くも懇親の意味の加はつたものに、飲食を伴はないものは絶對にないといふても過言ではない。殊に今日吾々の行つて居る會合で、懇親の意味で開かれるものには、幾分形式や分量に相違はあつても、飲食を除外して行はれるやうなことはない。

このやうに懇親といふ意味と多數のものと飲食を共にするといふことが、興味深くも關係して居るには、固より種々な原因があるといはねばならない。

一には、飲食の欲望は吾々の持つて居る欲望の中で最も根本的のもので、自己の生存の爲めの榮養の關係から、最も强い要求を以て現はれて居る。のみならず其の要求には、自然が注意深くも味ひの美感といふものを附け加へて、吾々は飲食の享樂に耽りながら、自然に自己の榮養物を攝取し得るやうになつて居る。かくて飲食は吾々の强い要求で又强い享樂である。この强い要求を滿足せしめ、この强い享樂を滿足せしめる機會を捕へて、吾々の遠い祖先は懇親の內容を豐かならしめるやうに利用することを見逃さなかつた。懇親といふことが、相共に要求を滿たし相共に享樂を滿たすことに依つて、最もよく其の内容を豐かならしめることは、他の多くの場合から推しても明かなことである。懇親と會食といふことは、この意味からも說明される。

二には、飲食の效果は吾々に少からぬ安易と融和と落ちつきとを與へるものである。元來、吾々は空腹に際しては、自然の必要から換言すれば飲食の獲得に對する努力といふことから、自然は吾々に爭闘的傾向と焦々しさとを與へた。吾々人類の原始生活は、誠にこの焦々しさと爭闘的傾向とで、自らの飲食物を獲得しなければならないやうな運命を持つて居つた。飲食物の獲得といふことが、吾々の生存に極めて强烈な要求であつた丈けに、今日の文化生活を營むやうな狀態になつても、上の焦々しさと爭闘的傾向とは、決して消滅しては居ない。一日の仕事を終へて家庭に歸つた主人が、夕食の前にはぷり〳〵した態度で、家族のものに當り散らして居たのに、食後になつて何處を風が吹いたかといふ態度になつてしまうことなど、必ずしも珍しいことではない。これ等は飲食の要求が滿された結果、粗野な放逸な性情が一變して融和され落ち付いた例である。かくの如くに滿腹に伴つて得られる安易と融和と落ちつきとが、又吾々の遠い祖先によつて懇親の場合に利用されることも、蓋し爭はれぬことといふてよいであらう。

けれども吾々が、飲食に關する原始的狀態を考へる時には、上述したやうな二つの條件の外に、尙有力な一つの條件を認め

ねばならない。それは即ち飲食に對する不安といふことである。この不安の排除といふことが、懇親の反面的立證として極めて有意義なものであつて、それが又懇親の場合に飲食を共にすることに依つて、一層懇親の實を擧げ得るものであり、そこを吾々の遠い祖先が捕へたものに相違ないのである。

□ 會食の恐恥

吾々の社會を見ると、樣々な場合に多くの人と飲食を共にすることが、一種の不安とされて居る。その不安は、普通に輕い程度の恐しさと恥しさとによつて經驗されて居る。固よりこの恐しさと恥しさとは、今日の吾々には複雜な境遇上の影響から、必ずしも單純な形式では現はれて居ないで、個人によつて少からぬ相違がある。けれども私自らは、自己の幼少の時を回顧して、一つの興味のある事實を持つて居る。私は幼少の時、特に小學校へ入學する前頃までは、上に述べた食事に對する著しい恐恥を持つて居た、いふまでもなくそれは多數の人々と共にされる食事の場合に於てである。「明日はお祖父さんの幾回忌だからお詣り下さい、精さんも連れて來て下さい」とか「お嫁さんが來るから精一もお出でよ、澤山ご馳走してやるから」と親戚の人から言ひ傳へられると、其の頃の私は堪へられない特殊の苦痛を感じた。そこで其の日になると何時でも遠い友だちのお家へ遊びに行つて歸らなかつたり、お家の押入れなどへ潜ぐり込んで、息を殺して隱れてしまひ、家の人達が私を捜しても知れないので、捜しあぐんで出掛けたのを知ると、やれやれと押入れから這ひ出したものである。けれども時々は、見つけ出されたり、不意に呼びに來られたりして、厭應なしに連れて行かれることもあつた。さういふ時には、私のおよばれ厭ひを知つて居る親戚の人達は、何時でも座敷の片隅へ六曲屏風を持つて來て、私を其の中へ連れて行つてくれた。私は六曲屏風にくるくると圍まれながら、高い足のついたお膳に向つて、なるべく箸の音も立てないやうに、ご馳走になつたものである。今でも其の頃の幼なかつた自分が、可笑しくもありありと目の前に見えるやうである。

私が何とはなき輕い程度の恐しさと恥しさとを感じた此およばれ厭ひは、決して未知の人の中へ出た時ばかりではなくて、一所に食事をしたことのない面識ある人々と會食する時でも同じことであつた。然しながら其の時分の記憶によると、面識のない人々が居はしないかといふことが、最も強く私の苦痛の中心となつて居つた。「皆知つた人ばかりだから」と親切によく云ひ聞かして貰つて、さてお座敷へ行つて見ると、時々見たこと

もない遠い親戚の人々が居て、「やあ、これが寺田の精さんか」といはれると、もう駄々をこね始めたもので、よくこのやうな目に出會したのである。

私の幼少の頃のおよばれ厭ひは、上のやうな狀態で、稍其の程度を逸したものである。けれどもこの種の傾向は、大凡如何なる子供にも見られて居る、只其の程度が私の場合のやうに、そんなに著しくないまでである。その例として私は、小學校生徒のお晝の場合を擧げたい。小學校あたりの子供が、お辨當を食べる時には、お互に右手で辨當箱を蔽ひ隱くし首を前へ曲げて、急いで食べてしまうものが少くない。殊にこのやうなことは、學校へ入學して程なくの子供等で、お互に親しみの出來ない頃に多く見られる。かかるお辨當を隱くすといふことは、必ずしも自分の持つて來たお辨當の飯の分量やお菜の種類などを、人が見ては恥しいからと意識して隱す場合と限つたものではない。只何とはなしに隱したいのである、食べて居るところを見られるのが厭なのである。

かくの如くに會食に對しては、輕い程度の恐しさと恥しさとの現はれる場合が少くはないが、それが自己の極めて親しい人々の間であると、却つて會食が樂しいこととなつて、およばれ厭ひの反對のおよばれ好きになるのである。かかることは初めに恐しさと恥しさとを感じた會食であつても、それが度々繰り返へされて、會食者に親しみが出來るやうになると、漸次に其の恐しさや恥しさが薄れて行くのである。幼少な時の私のやうに程度を逸したおよばれ厭ひでも、度々同じお家へ招待されると初めには厭で厭で仕方なかつたものが、遂には自ら進んで行くやうになつたものである。何故に、かくの如くに會食殊に親しくない人々の中に於ける會食が、特殊な恐しさや恥しさを伴ふのであらうか。

二　所有の不安

猫や犬に、大きな魚でも與へた時には、それが可成りに飼ひ馴らされて居るものであつても、直ちに銜へて緣の下や木の陰や庭の隅へ持つて行つて、そこで食べることは少くない。彼等は何が故にかゝることをするのであらうか。子供の遊び對手になつて居るので、ご褒美の意味で食を與へて尚暫く遊ばせやうとすると、彼等は食物を口にするや直ちに子供を置き去りにして隱れてしまうことゝが珍しくない。猫や犬が本能的に行ふ上のやうな動作は、いふまでもなく食物の所有に對する不安に、其の根本的の原因があるのであつて、他から掠奪されるのを防ぐのである。但し彼等が、食物を掠奪されるのを恐れて、これを

敢てするのでは勿論ない、彼等は生れながらにそれをするのである。自然は動物の個體を保護し、其の生存を全からしめる爲めに、しかく注意深くして居る點に、吾々は興味を覺えるのである。吾々が親しからぬ人の中で食事をするのに、特殊な恐しさや恥しさを經驗するも、亦この猫や犬の場合と同樣な根柢に因るものである。

子供に菓子などの與へられた時に、彼等はそれを隱して置いたり、室の隅の方へ行つて食べたり、又は直に口へ詰め込んでしまつて離儀さうにもぐ〳〵やつて居たりすることがある。吾々はかゝる事實を、單純な或は不行儀な行爲としてのみ、輕々に看過すべきものではない。其の根柢には、それを敢てするやうな深く又強い要求が遺されてあるのである。この意味で、吾々は婦人などが一人で食べるのを喜んだり、隱れて食べるやうな形跡のあり易いことを見て、強ちに彼等の單なる遠慮勝ちな現はれと解したり、又は其の食物が薩摩薯とか餠菓子といつたやうな婦人の好むもので、男子から冷笑されるのを恐れる爲めであらうと、解すべきものでもない。即ち食物の所有といふことに伴ふ特種の不安な感が、其の最も主な原因となつて居るのである。

いふまでもなく遠い遠い吾々の祖先は、食物を獲得すれば、それを他から掠奪されることに對して、多大の注意を拂はねばならない狀態にあつたのである。從つて食物を所有すること自らに、不安の念を感ぜしめて、他からの掠奪を逃れしめやうとしたのである。今日の吾々の社會のやうに、所有權の觀念が發達し、又秩序のよく保たれて居る場合に、上に述べるやうな自然の用意が現はれると、吾々はそれを目して奇妙なことだといふのである、其の本源に溯れば寧ろ當然なことゝいはねばならない。この事實は、文化に浴して居る今日の社會で、吾々の生存上の資料となるものに向つて、又自ら發展して現はれて居る、それはいふまでもなく財物に對する不安である。

私は嘗て急に財産家になつた人の家へ宿つたことがある、其の時私は戶閉りの嚴重なのに一驚を喫したのである。雨戶には縱にも橫にも太い鐵の棒が篏められ、其の內側にある硝子戶には太い針金で織られた網が張りつめてあつた。其の時、自分は動物園の獅子や虎や豹などの猛獸を入れる檻よりも恐しい要心深い內に眠むるのだと思つた。急に得られた財物に對する不安は、其の家の主人をしてかくまでに每夜の安眠を脅やかして居るかと、私共が財物を持たぬ安易さ氣樂さに思ひ至つて、財物の豐かな反面に於ける悲哀を、つくづく感じたのである。

財物に關する問題は、私の當面の問題ではないが、吾々が生

存上の資料たるべきものを所有することが、自然に不安の念を與へることに注意しなければならない。かくて吾々の食事に對する不安が、食物の所有に對する不安に基づくものであることを知るのである。

□ 儀禮と食事

食事が吾々に不安を感ぜしめることは上に述べたやうであるが、この不安が吾々のやうに感情生活の濃かに發達したものであると、單純な不安といふことでなくて、多くは羞恥といふ複雜な内容を持つたものとして現はれて居る。この羞恥を伴つた食事を共にすることが、懇親の表徴であり、のみならず食事といふことが、吾々の日常生活に關係の多いもの丈けに、樣々な儀禮に關係を持つやうになつた。

我が邦で朝廷の恒例の儀式といふものには、色々なものがあつた。即ち元日の節會・白馬の節會・踏歌の節會・豐明の節會等は、其の主なものであつて、其の他公家では大臣大饗とか内宴とか曲水宴とかいふものが行はれ、何れも酒や食が出されたのはいふまでもない。室町幕府の頃から鎌倉幕府以後になると、武家で特別に行つた埦飯（わうばん）といふ儀禮が行はれ、公家の大饗のやうなもので、正月の諸大名が將軍家へ出仕して、お祝ひの御膳部を獻じ奉つたものである。後にはこれが正月に限らず行はれ、料理を振舞ふことにもなつたのである。其の他、客を招いて相共に飲食をするものには、祝賀・披露・感謝・慰勞・送別・留別等を意味する樣々な宴會が行はれる。

かくの如くに社交を謀り懇親を主とする方面のみから見ても、種々な儀禮があつて、其の形式と内容とは固より一樣ではないが、そこに共通したところは、廣い意味の食事といふことで且それが主な要素となつて居ることに注意しなければならない。

結婚の儀禮にも、亦食事といふことが一つの主なものとなつて居る。即ち一順の盃事も終り、燗酒も出でて稍々宴の酣となつた頃、折を見計つて、待女郎又は媒酌人の夫人は、新郎新婦を誘つて其の席を離れ、別席で高盛の本膳で食事をすますことに、普通なつて居るやうである。夫婦が共に食事をするといふことに、家庭生活の最も主な一つであるから、それが結婚の場合に特別な形式で行はれるのに、何の問題もないことではある。けれども古人がこゝに意を用ひ、又意を用ひるやうになつたには、種々な動機や要求があつたものといはねばならない。換言すれば、一所に食事をするといふことを一つの儀禮とした根柢には、深いものがあるといはねばならない。其の一つとし

て私は、結合された異性がそこで今迄の他人としての分け隔てを去つた親しみに導かうとする企のあることを認めてよいと思ふ。假令かゝる際に於ける新夫婦殊に新婦には、食物が咽喉を通らぬやうに恥しいものであるにせよ、共に食事をしたといふことに、可成りな意義がついて來るのである。其の意義は、相愛の人々が其の愛の生活に於ける享樂の一として、相向き合つての食事を敎へるやうに、不安を去つて親しみを味ふといふ點である。

世に、ご馳走政策といふことがある。相應に用ひられて居ることであつて、それが吾々の社會から消滅することなくして、寧ろ漸次に頻繁に行はれるやうな傾向にあることは、廣義の食事といふことを考察する上に、注意すべきことである。卽ち所謂ご馳走政策が消滅しないで益々盛んに行はれるといふのには、それ相當の效果が認められて居るからである。固よりご馳走政策の行はれる目的と行はれ方とには、種々なものがあつて、これを一樣にいふことは出來ない。けれども所謂ご馳走で飲食が主であるから、鄭重な形式のものでも、大凡程度の限られたものである、然るに其の程度の限られたご馳走を受けたものが、お目出度くもご馳走して吳れた人に對して好感を持つて來るのは事實である。かゝる事實から觀察すると、ご馳走に費された金高や食物の如何で、必ずしも好感を持つに至つたとはいはれない。例へば十圓の現金を貰つて「失禮な奴だ」と怒る人も、十圓のご馳走に招かれ、然も半日の暇を潰してしまつて、多くは喜ぶものである。時には可成りな粗末なご馳走でも大に效果を擧げ得ることがある。そこで吾々は食卓を相共にしたといふ點から、先づ好感を得るに至つたものと解するのが、至當のやうに思はれるのである。然もこの食卓を共にするといふことは、羞恥を去つて親密を增すといふ事實に思ひ至らねばならない。尙この事實を側面から證するもので、酒の使用に注意しなければならない。

□ 親和と酩酊

酒程、理窟のつき又利用のよくされ得るものは殆んどない。寒ければ溫まらう、熱ければ暑氣拂ひ、悲しければ慰めの爲め、嬉しければ喜びの爲めに、又甘いお菜のない時には酒でもなければ飯が食べられないといひ、お甘しいお菜があれば直ぐに飲では惜しいといふ。このやうに全然相反したやうな事實に、如何樣にも關係の結びつけられるものは酒、ばかりである。何が故にかやうに廣く自由に關係が結びつけられるかといふに、酒といふやうた媒介料が、吾々の生存上に如何に密接な關係を持

つて居るかを示すものであるといふことが出來る。

のみならず酒ほど如何なる民族にも深い關係を持つた者は少い。我が邦では既に素盞嗚尊の時代には、八つの瓶に入れる程、簸の川上の片田舍にすら酒があつた。支那では遙に遠い禹の時代にあつたことが傳へられて居る。其の他印度でも西洋でも、其の酒の性質や醸し方こそ相違して居るが、太古の頃から用ひられて居つたことは明かなことである。かゝる歴史的事實からしても、酒は人類の生存上に、善惡の問題は第二にして、至大の關係を持つて居ることが明かである。

翻つて考へて見るに、複雜に發達した精神の持主である吾々は、種々な意味から吾々の日常生活によつて、少からぬ內的經驗が然も強く深く味はつて居る。この強く深い內的經驗は、人類の進んだ知能によつて又從來の經驗によつて、人爲的の影響が色々に加へられて居る。かゝる人爲的の影響には、固より文化の關係から又民族性の關係から樣々なものがあるが、それ等の文化や民族性を超越して現はれて居るものに、痲醉性含有物がある。私がこゝに問題とした酒は、この痲醉性含有物の最も一般的のものである。吾々の遠き祖先は、其の永い歷史の間に於て、何れも符節を合せたやうに、頗る容易に且頗る早期に、酒精含有物を發見して居る。この偶然な發見による酒精含有物は人類の煩雜な內的經驗を人爲的に調整し變化する上に、最も好都合なものとなつて、廣く傳播するに至つた。

而して吾々の感情生活には一面には快を一層深い快として享樂し、不快を出來得る丈け減少せしめやうとする可成りに强い要求があると共に、他面には吾々が孤獨を厭ふものである丈けに、何等の不安のない場合には、不必要に本能的に現はれて來る羞恥を抑けて、社交の滿足を味はうとする要求がある。かかる場合には、恰も酩酊が最も適したものとして取扱はれて居る。從つて吾々の社會では、多數人が集合して食事をする場合に、傳統的に極めて廣い範圍に酒を用ひて居る。この事實を側面から說明するならば、食卓を共にして相互に親和の實を示すことの必要な場合に、理論上から排除さるべき不安や羞恥に反抗して起り勝ちな感情上の不安や羞恥を少くすることが、頗る有意義なこととなつて居る。けれども感情裡に動く不安や羞恥は、理論上では容易に排除されぬことが多い。かかる場合に酒を用ひることは、不安や羞恥を抑けて、融和や懇親を濃かならしめる上に、頗る其の效果が認められ來たつたのである。

かくて酒のやうな痲醉材料は、直接吾々の生存保持に對して必要なものではないが、融和や懇親を望む場合に食事に附け加へられることになり、更にそれが不安や羞恥を除く上に、單純

た食事よりも效果の多いところから、寧ろ酒が主となり食物が從となる場合も生じて居る。儀禮などには、この種の形式のものが稀有でない。殊に、羞恥を取り去り親和を求めやうとする儀禮、例へば親分子分の盃事や義兄弟の盃事や結婚の盃事などが、それぞれ重要な意義を持つて居る如きそれである。尙これを反面から見れば、不安や羞恥を取り去るに好都合なことが、漸次に一定の形式を備へて、特殊の儀禮となるに至つたものともいはれるのである。この事實は前に述べた食卓を共にすることが儀禮の重な部分となつて居ることの多い事實と相關聯して、頗る興味のあることといはねばならない。

□ 排泄の警戒

發達した住宅建築に於ては、吾々の日常生活に無くてならない便所の構造が、便所の性質として最も適切に建てられて居ることはいふまでもない。けれども極めて簡素な住宅建築に於ては、便所の構造も亦極めて單純なものである。けれども如何なに單純な便所であつても、赤裸々な露出の防がれて居るのが普通である。食事をすることが、吾々の生存上當然なことであるのに、不安や羞恥を感じて居る吾々は、又生理上已むを得ない排泄に對しても、不安や羞恥を感じて居る。其の不安や羞恥の存在する表明が、ここでいふ排泄の警戒となつて現はれ、便所の何れもが外部よりの覗ひ見を避けるやうな構造となつて居るのである。

然らば何が故に、かかる現はれ方となつて居るのであらうか。固より糞尿が排泄物であるが故に、吾々は本能的に不快な臭氣を持つたものとして經驗され、又捨つべきものとして不潔に解されるのであらう。けれどもそれ丈けで、糞尿をする行爲を人目に觸れないやうにすべきものだとか、羞恥を感ずるやうになつたとは解し難いのである。換言すれば、吾々がこの種の排泄をのみ隱れてするところに注意すべき事實の存在を認めなければならない。

糞尿に對する警戒といふことは、決して吾々人類に於て初めて現はれたものとはいはれない。かの猫などは、排泄した後に排泄物を後足で埋める一つの本能を持つて居る。この本能は可成りに弱く現はれて居るものであつて、家庭に飼ひ馴らされ、床の上に置かれた場合にも行はれるものである。かかる本能は何の爲めに行はれるのであらうか。これはいふまでもなく彼等の自己保存の本能の一つとして現はれるものであつて、自己の排泄した糞尿によつて外敵から追跡されるのを防がんが爲めに、敢てそれを隱蔽するのである。

そればかりでなく排泄をして居る時は、他より襲撃を受けて最も都合の悪い時である。下等な動物などを觀察しても、動きながら即ち外敵から逃げながらでも排泄し得るやうな特性を持つた動物は別として、排泄の際に外敵がこの襲撃に對し少からぬ用意をして居るものが少くない。例へば草や木や岩のやうな掩獲物のあるところを選んで、排泄を試みるもののある如きそれである。かの犬などが、太い木や大きい石や家の角などへ、好んで排泄するのには、固より鋭敏な嗅覺を利用しての道知るべともなるのであるが、その外に掩獲物に隠れて隙の多い排泄時を安全ならしめやうといふ本能の現はれも重要なものだといふべきである。

このやうに考へる時には、排泄に伴ふ吾々の羞恥は、單純に不快な臭氣とか不潔とかいふことで、發生したものとはいはれない、それよりも一層吾々の個體の保全の上に肝要な自己保存の本能に基づいて居るものといはねばならない。それが社會組織の發達するにつれて、もはや普通の生活に於ては外敵の襲撃に對する用意を不必要とするに至つてまでも、羞恥といふ感情を伴ふものとして存續し、のみならずかかる場合は、羞恥を感ずべきもので人目に觸れないやうにするのが禮儀であるといふやうになつたのである。尚この問題は以下の實事を述べることによつて一層明瞭に知ることが出來る。

□　便事の羞恥

上述のやうに排泄即ち便事には、吾々は特殊な羞恥を味つて居るものであるが、今日の吾々の社會では、頗る興味ある事實となつて現はれて居ることが少くない。

この種の一例として、私は小學校などに於て間々起る兒童の過失を擧げて見たい。幼少な子供のことであるから、彼等は不用意にも往々教場の内や運動場に於ける體操の時などに、排泄の要求を急に感じて來ることも少くないであらう。かかる場合に彼等の多くは、極めて苦痛に感じながらも、容易にそれを先生に告げやうとはしない。只「先生お小川にやらして下さい」とか「先生便所へ行つてもよろしうご座いますか」といふ頗る單純な言葉であるが、彼等には著しい羞恥なことどして考へられて居る。彼等は決して大人の場合のやうに、かかることを公然といふべきものではないといふやうな禮儀や習慣で、羞恥を感じて居るのではない、これを皆の居るところで先生にお願ひすると皆が笑ふだらうといふ感情の上からの自己制止である。かくて彼等は、腰掛けながら又は立ちながら、過失を敢てするのである。固より幼少な子供であるから、便事が何故にお友だちに笑

はれるものであるかを考へて差控へるのではない、只何とはなしに笑はれやしないかといふ頗る強い虞れと、何とはなしに恥しくてならないといふ念に襲はれるのであつて、決してそれが家庭の人々から、便事は人の前で發表すると笑はれるとか、恥づべきものだと敎へられたに因るのではない。換言すれば、吾々は本能的に便事に對して一種の羞恥を感じて居るのである。

かかる事實と表裏して興味のあるものに、次の事實がある。野外に於ける放尿や脫糞は、普通の狀態に於てするよりも、頗る出にくいといふ人が少くない、殊に脫糞の場合に於てさうである。この事實は、決して不自然な現はれ方ではないのであつて、吾々の本性からいへば寧ろ當然のことである。勿論、かかる事實が吾々の今日の禮儀や習慣に反したことであるから、それに因る無意識な自己制止の可成りに働いて居ることも想像するに難くはない、けれどもかかる場合に普通に人の經驗する羞恥以外の一種の不安を伴ふことは、吾々がこの問題を觀察する上に、輕々に看過してはならないことである。卽ちこの場合の野外といふことは、適當な掩護物があるにしても、何時如何なる方面から見出されるかも知れぬといふことを意味して居る。其のやうな狀態が、不安を感ぜしめるのである。これを吾々の遠い遠い原始時代に溯つて考へるならば、野外に於ける放尿とか脫糞とかいふことは、容易に外敵の襲擊を受ける危險狀態にあのものといはねばならない。従つてかかる場合に不安を感ぜしめ、頗る出にくいとの經驗を得せしめることも、强ち不自然なことといふことは出來ない。

尙これを反面から證明するものに、次のやうな事實がある。吾々が旅行する場合に眺望絕佳な山巓や一日千里といつたやうな絕壁の上で、脫糞されたのを發見することは、決して珍しいことではない。卽ち旅行家の一つの惡戲といふべきものである。かかる惡戲は、何が故に上のやうな個處を選んで故らに行はれるかに興味があるのであつて、强ちに登り極めた滿足や暫く續けられた身體的勞働の休息に作つた生理的變化からの要求とのみ解さるべきでない。固よりこの種の行爲が、極めて單純な好奇心滿足の要求から行はれることもある。けれども野外に於てすら不安を感じ出にくいといはれるものが、上のやうな個處で行はれるには又相當の理由がなければならない。それには眺望絕佳とか一目千里とかいふことが重要な條件となるので、これ等の個處は、何れも他から發見され又は襲はれる虞れのない所謂要害堅固なところである。この要害堅固であるといふことが、やがて吾々をして隙の多い行爲である便事に對して、悠々たる餘裕を與へるものと見ねばならない。少くも私は、この眺望を

上のやうに解釋する。而して上にいふやうな山巓や絕壁の上などには、決して人類のみが惡戲として放尿脫糞をするのみではなくて、他の動物が又それを行つた形跡を發見することも少くないのである。

□便所の恐怖

便事に對する吾々の羞恥は、又人類に樣々な癖を起さしめて居る。私がここで問題とした便所の恐怖の如き、其の最も著しいものである。

世には便所に甚だしい好き嫌いを持つて居る人がある。其の好きといふのが、必ずしも其の構造の美しいことや其の掃除の清潔であることとには因らないので、多くは如何に構造がよく又掃除が清らかであつても、自分で入り慣れたものでないと落ちつきが惡い、これに反して其の構造や掃除は極めて不完全なものであつても、日常入り慣れて居るものであると、却つて落ちつきの感ぜられるものだといふのである。かかる點からの好き嫌いといふことは、決して稀有な例ではなくて、少しく神經質のやうな人には、見られ易いことである。其の極端なものが、便所の恐怖といふ特殊な一つの癖である。

便所に對する恐怖癖を持つた人は、假令其の必要のある場合であつても、慣れた便所殊に自分の家の便所でないと、排泄を完うすることの出來ないのが普通である。そればかりでなく、一層この傾向が極端になつて來ると、假令現在に於ては排泄の要求はないにしても、若し其の要求が起つた場合に、自分の慣れた便所がなかつたらば困るがとの杞憂に、少からぬ精神を苦しめるものである。いふまでもなく、かかる極端なものは常態ではない、けれどもそのやうな形式の變態が現はれて來るところに興味があるのである。卽ち意識的に心得て居るのでなくとも、自ら便事に對する隱れ場所として、安全であり落ちつけるといふ點に、好きといふことが出來て、然らざる場合に、厭いといふことが出來るのである。

このやうに恐怖を經驗するのでなくて、他人の家で便所へ行くことを頗る羞恥なことと感じて居る人もある。これは入り慣れぬ便所が、不安であるとか落ちつきが惡いといふのではなくて、便事を他人の家ですることいふ點に、少からぬ羞恥を味つて居るのである。これは必ずしも禮儀作法などを辨へた成人に限つたことでなく、幼少な子供に於ても見られるのであつて、恰も前に述べた小學校の兒童が學校に於ける過失の場合と類したものである。只異るところは、便事を人の前で公表するといふには限らないで、便所へ行くことを人に知られるのが恥しいの

である。

これに反してり入り慣れた便所であると、何等の杞憂もなく頗る落ちつきの得られるものであるから、或は詩の好きな人が唐詩選を釣して置いたり、忙しい人が新聞を持ち込んだり、時には太平樂な氣分の落書がされたりするのである。私が學んだ或學校の便所などに於ては、其の學校の學生の無邪氣なところにも因るのであらうが、太平樂な氣分の落書が、便所文學といふやうな形式となつて現はれ、堂々と便所文學募集などと書き出され、それに應じて樣々な悠暢な心持ちに滿ちた所謂文學が書き足されたやうなことが屢々見られた。

これは吾々の食事が、知らぬ人の間に於ては羞恥を感ぜしめるものであるのに、親しい間ではそれが極めて重要な享樂と變ずるやうに、本來吾々の遠い遠い祖先が、便事の際に注意しなければならなかつたやうな境地に、今日の吾々が置かれると、少からぬ不安とか羞恥とかを經驗するのであるが、若し安んじてなし得られるやうな境地に置かれると、暫時の特殊狀態に少からぬ悠々さと落ち付きとを與へるやうになるのである。

□ 處女の赤面 ●

食と便とを述べた私は、次に性の問題に入つて、それに吾々が羞恥を感ずる點を研究しなければならない。先づ處女の赤面といふことを取扱つて見やう。

處女が異性殊に青年男子の面前へ現はれて、赤面するやうになるのは、彼等が肉體的に成熟期へ近づいたか又はそれに入つた頃に於て、最も顯著に見られる事實である。處女のかかる時期は、一方からいへば青年男子からの選擇を受け、又は自らそれ等を選擇して、自然の進む途へ入るべき時期である、從つて青年の男女は、相互に接近するに都合よく出來て居なければならない。それを羞恥を感ぜしめて赤面せしめる自然は、何の巧みを以て居るのか。固より處女の赤面といふことは、決して青年の異性に接近するを根本的に避けしめやうとするものではなく、彼等のそのやうな機會を可成りに強く要求して居る。青年の男子も亦さうである。かくて祭とか花見とかいふ人の多く出る場合は、青年の男女が極めて其の多數を占め、「人込みにはもう懲り懲りだ」とか「あゝ疲れた、もうお祭なんどへは行かない、こんなに着物を皺にして、あら、こんなに汗にして」とかいひながらも、次の機會には、先きの苦しみや疲れや不平やを奇麗に忘れ、又も喜び勇んで雜鬧へ入るのを望んで居る。このやうに青年の男女は、互に接觸の要求を持つて居るのに、何故接觸を避けやうとする羞恥の表現たる赤面を、殊に處女に

からしめて居るのであらうか。

尤も極めて精緻な發達をして居る吾々の感情生活は、決して素樸な内容をのみ有しては居ないで、性の問題に關聯した場合の赤面が、單純な其のままの羞恥ではなくて、時には性の許容を示すこともあれば、又時には愛情の表示たることもある。從つて處女の赤面を、直ちに羞恥其のものとしてのみ取扱ふことは出來ないでもあらう。けれども性に伴つた赤面が、憤怒に伴つた赤面とは大に異つて、少くも羞恥の要求を少からず含んで居ることは、爭はれないことである。

一部の人は、處女の赤面を目して、美の表現だといふて居る。消極的な性的生活を營む女子に於て、個人と個人との接觸に消極的な要素の加味された羞恥に至り易いことは、其の本性に似合はしいものとして、女性の美點と認められることは、必ずしも無理な觀察ではない。かの含羞とか恥みとかいふことが、處女の表示であり又其の美であることは、何人にも認められることである。異性からの選擇を受け異性からの愛を得やうとして居る時期に、處女が其美を含羞や恥みに於て現はすやうに、自然が敢てしたとも解される。

但しこの含羞や恥みが、男性から美として受け取られるには、又他面の根據も認められる。含羞や恥みが、羞恥であるからには、羞恥の本性として對手からの回避といふことが當然加はつて居る。異性から見れば、接近からの回避といふことは、少からず異性の不安と興奮とを起さしめるものであつて、愛の爭鬪に於ける努力の發現を要求するものである。この意味で含羞や恥みが、異性をして強い性的努力に向はしめ、油斷を戒しめることになり、ここに接近からの回避を制して獲得慾を昂進せしめるのである。これ亦處女の赤面に對する一つの解釋とすることが出來る。

その外に處女が赤面をして羞恥を感ずることには、處女期の危險期なることを思はねばならない。換言すれば、最も異性の注目の焦點となるべき時期であることは、他からの侵害に、最も警戒しなければならない時期である。この點は男女の性質の相違と青年の男が比較的に赤面することが少くて女に著しく現はれるといふ二つの事實からでも說明される。即ち性的生活が積極的であつて異性を侵害する傾向のある青年の男子には、比的の赤面が輕い程度で現はれるのに、性的生活が消極的であつて異性に侵害され易い傾向のある青年の女子に、性的の赤面が強い程度に現はれて居るのである。何れの民族でも、その原始的な又は未開な狀態にあつた時代に最も普通に行はれた掠奪結婚といふことが、矢張り何時も男子が女子を掠奪して行つたの

である。

かゝる事實から見るも、處女の赤面は強ち彼等の美の表示のみではない、かの食や便が、最も隙の多い襲はれ勝ちな爲めに羞恥を感じて居ると同じやうに、處女が他からの侵害を警戒する意味で、羞恥を感ずるやうになり、それが赤面となつて現はれることは、自然の行き方といつてよいと思ふ。

□會合の秘密

性的生活に於て異性の會合といふことは、最も重要な事實である、又愛の享樂の中最も有意義な事實である。それは植物が昆蟲や風の媒介で性的生活を營むのと異つて、吾々人類は先づ異性の接近といふことで性的生活が始まるのであるから、こゝに述べる會合が、色々な點から興味ある問題を持つて居る。

吾々の愛の生活は、他の總べての方面に於ける享樂と同じやうに、享樂其の物に大なる目的と要求とを持つて居るのであるから、其の他の樣々な刺激殊に其の享樂の妨害となるやうな刺激は出來得る丈けこれを排除しやうとする自然の傾向がある。而して愛の生活に對して最も妨害となる刺激は、いふまでもなく他の同類の接近といふことである。「無人島へでも行つて暮したい」といふやうな感嘆語は、愛情の高潮した異性間に於て間々用ひられることで、彼等は複雜な社會生活をなさねばならない運命であるのに、彼等自らの同類の全部を回避して居るのである。かゝる惑溺の感情狀態でなくとも、成るべく同類は回避して、出來得る丈け濃かな愛の生活に享樂を求めやうとするのが、享樂者の最も自然的な要求である。

けれども同類を回避といふことは、決してそれ丈けの原因から起つては居ない。卽ち食物を得又は財物を得たものに、特殊の所有に對する不安の經驗される吾々は、滯りなく異性を得たといふところに、對同類的に少からぬ不安を感ずるものである。其の最も一般的で側面的な現はれ方は、嫉妬といふ感情である。而してかくの如き對同類的の不安は、其の愛情の强ければ强い程、亦其の愛情の獲得が困難であつたならば困難であつた程、一層深く起るのが普通である。言葉を換へていへば、獲得した愛の對象を失はんことを虞れて、他の同類に對する警戒となるのである。

兎に角、愛の享樂に於ける會合には、他の同類を回避したり又は警戒したりする必要がある。この回避や警戒といふことが、吾々の感情生活では、羞恥といふ形を以て現はれて來るのである。殊に愛の享樂が新しいものであり又は濃厚なものであればある程、一層この羞恥は顯々に現はれて來る、これはいふまで

もないことである。たゞに愛の會合に於ける秘密といふことが生じて來るのである。のみならず人目を忍んで會合するといふことが、他の同類を完全に回避し又撃破し得たといふ滿足と安心とのある丈け、一層この種の享樂として內容の豐かなものになるのである。

かくて愛の會合は、聲の大きいもの同士であつても、忍び聲で行はれ、所謂喃々喋々となるのである。又、大きな室で會合されるよりも、小さな室が選ばれるやうになり、こゝに所謂四疊半となるのである。或は又、戶外の單純な會合であつても、木の蔭や物蔭が好まれる。固より吾々には種々な好奇心があつて、不安の中に享樂することが又一種の快感を與へることがある。盜み食ひや盜み見るといふことに、特殊な興味の持たの勝ちなのはこの例である。愛の秘密な會合が、時々はこの單純な不安に基づく興味が主であることがある。けれどもこの種ゝものは、愛の享樂其の物が主たる要求でない丈けに、それが秘密を要しなくなると、感興の索然たるものを經驗し、今迄の感興に裏切ることが少くないのである。但しかゝる場合は、不安に對する感興や好奇であつて、羞恥を中心として取扱つて居る私の當面の問題には、關係の薄いものといはねばならない。即ちかゝる場合には、羞恥の強く見られない場合が少くないのである。

□ 獲得の誇示

性の生活に於て、愛の獲得が安全になつて來ると、前に述べた會合の秘密といふことから、漸次に誇示といふことになつて進んで來る。

けれども獲得の誇示は、必ずしも性の生活に限られたものでなく、食物の獲得の場合にも見られることである。禮儀作法などに制限されないで、自然的な發展に任された幼少な子供は、お菓子などを貰つた時に「お菓子貰つたよ」とか「このお菓子お甘しいよ」とか、甚だしきは「お菓子欲しくないか」とかいつて、お家から飛び出し表に居る子供等に見せびらかすことがある。これは子供に現はれた本能的な獲得の誇示である。いふまでもなく食物の獲得といふことは　吾々の原始生活に限られず或意味からいへば今日の文明生活に於ても、生存上の優勝的地位を示すものである、從つてそれが單純な示し方でなくて、誇示となつて現はれるのである。かくの如き傾向は、複雜な關係になつて居る今日の財物に於ても、容易に見られることである。かの豐かな生活をして居る人が、衣服や邸宅に、實用とか生活上の心持とか美的見地とかいふ範圍以外に出でて、時には極め

て不調和な笑ふべき程度にまで、裝飾に力を盡されて居るとがある。かゝる衣服や邸宅は、財物の豐かさを見て貰ひたさの誇示であるから、それでよいのである。これ等のものは別としても、骨董品や美術品の蒐集家が、少しく集められて來ると、切りに人に見せたがり自慢したがるものである。勿論時には、自分獨りで見るも不本意だからとか、藝術の爲めとか、公衆の爲めとかの但し書きの附いて居ることはあるけれども、又それが相當な眞面目から出て居る場合はあるにしても、獲得の誇示といふことが、頗る強く其の根柢に働いて居るのである。但し私は、このやうなことを善いとか惡いとか批判するのではない、さう現はれるのが自然の行き方だといふのに過ぎない。

新婚の夫婦とか、極めて睦じい夫婦などは、兎角相携へて外出したがる傾向のあるものである。それには固より樣々な原因があるであらうから、一概にかれこれいふことは出來ない。けれどもかゝる夫婦の相携へての外出には、公認された愛の生活を戶外へ延長して、單に彼等自らのみが相互に享樂するといふのではない、他の同類に對する誇示が可成りに有力な動因になつて居る。秘密から公認へ、不安から安心へ、羞恥から誇示への進み方は、愛の生活の發展には常に見られる事實である。かゝる愛の獲得に伴ふ誇示は、決して社會の傳統から公認された夫婦といふものに於て見られるのみではない、愛の爭鬪に打ち勝つて相互に愛の獲得を認める時、自由な愛の生活からでも誇示として現はれる。

而して愛の獲得に伴ふ誇示は、愛が何時も對手を要するものである丈けに、自己と對手との愛の強さで、普通は興味のある現はれ方をするものである。卽ち自ら強烈な愛を捧げ漸くにして愛を獲得したりと信じた一方が、多くは獲得の誇示に出でやうとする。換言すれば、最初に獲得したと自信したものが、又は愛のより強いものが、連れ立つての外出を強いる傾向がある。これは誇示の性質として、當然さうあるべきもので、愛の獲得に對する喜悅は、單純な落ちついた其のままの喜悅としては滿足されない、これを他の同類に誇示することに因つて、一層強い滿足卽ち勝利者としての滿足を求めやうとするに至るものである。

かくて睦しげな男女の連れ立ちを見て、「ちエッ」といふやうな感嘆詞を投げかけることや、男女の品定めを試みることや、嫉妬の念を起したりすることは、誇示せんとしつつある男女の或は何れか一方の、如何にも期待して居た思ふ壺に嵌まつたもので、彼等は外國のもののかやうな態度を見て、一層の滿足を味はずには居らないであらう。

□ 許容と解放

却說、性の生活が吾々の羞恥を招くものであることは、上に述べたやうであるが、その性の生活による羞恥は、相互の又は對手に對する許容といふことで、解放されてしまうものである。尤もこの許容といふことは、必ずしも單純なものではなく、又それが必ずしも性の問題にのみ關係したことでもないのである。

先づ食事に就いて見ても、初めには極めて遠慮勝ちであつたものが、お互に氣心が知れるやうになると、何等の障壁を置かないで解放的に箸を取り得るやうになる。便にしても、極めて親密な間柄では、便所から呼びかけたり又話をしながら、敢てすることなど、必ずしも幼少な子供のみに限られたことではない。殊に興味あるのは、性の許容に因る解放の大膽といふことである。特殊な不幸な境遇にあつて、性的羞恥心の甚だしく鈍痲したものは別として、其外の普通のものであれが、異性に對して羞恥の薄らいだことは、假令其の意味には色々あるにせよ、明かに或種の許容に入つたものといふことが出來る。それには性的生活の許容でないものもあるであらう、即ち單純な氣心の許容もあるであらう、けれどもそれが相當の愛の生活に入り得る狀態のものであつたならば、少くも性的許容の第一步だと見ることが出來る。何となれば性的の羞恥が、外部に對する警戒であり回避である以上は、一方に於て警戒や回避が排除されることによつて、性的の羞恥が鈍ることになり、他方に於て羞恥が薄らぐことによつて、警戒や回避が弱くなり、そこに許容が現はれるのは當然なことである。

次に不健全な境遇や年齡の長ずることで、性的羞恥心の甚しく鈍ることがある。この種のものも亦或意味から、解放の狀態にあるものといふことが出來、其の裏面に於て少からぬ性的變態が見られ、極めて寛大な性的許容をも持つて居ることが少くない。其の最も甚だしいものは、醜業に從つて居る婦人といふことが出來る。但しこゝにいふ性的許容が、必ずしも愛の生活に於ける眞の許容といはれるとは限らない。けれども許容と解放とが、密接に關係して居ることは、次の事實からでも推察することが出來る。

上流の婦人などが、其の更衣に際して又は其の入浴に際して或は又其の化粧に際して、中流の婦人などに比較すれば、極めて大膽な態度を示す場合が往々ある。この大膽な態度といふのは、女らしい羞恥を缺いて居ることをいふのである。而して彼等が其の更衣や入浴や化粧をする場合に、樣々な人を侍べらし

めるのはいふまでもないが、それ等は何れも彼等よりも著しく位置の低いもの又は使役者である。この位置の低いものとか使役者とかいふことは、彼等から見れば劣敗者である、優者が劣者に對する尊大はそれ等を同等に見ないことになる、それがやがて性的の不安や警戒に安易を與へ、前に述べた許容と異つた意味での許容となるのである。從つてそれ等の弱者の前に臨んでは、解放的態度となり、性的に大膽となるのである。かゝる事實は、其の侍者たり世話するものが、必ずしも同性の場合に限らないで、時には異性であることも珍らしくない。我が邦の女湯に於ける三助は、この種の一例ともいはれるが、羅馬の全盛時代に、豪奢を極めた貴婦人等が、入浴や化粧や更衣等の室内の雜用に黑奴を使役した如き、亦其の一例といふことが出來る。

□ 闇黑の放膽

闇黑の力とは、昔からよくいはれたことである、何が故に闇黑がしかく吾々に威力を與へるのであらうか。これはいふまでもなく闇黑に因る羞恥心の減退である。羞恥心の減退が、如何に吾々を放膽に導くかは様々な社會現象から觀察して、決して其の事例に乏しくない。即ち吾々は自己の社會生活に於て、羞恥といふことから少からぬ不安や杞憂や警戒を感じて居るものであるから、若しそれ等の消極的な制御的な感情が排除された場合には、吾々の持つて居る活動性が、極めて赤裸々に現はれて來るのである。

男女間の密會や驅け落ちが夜陰に行はれたり、窃盗の少からぬ部分が夜間に行はれたりすることなどはいふまでもなく、又簡素な低級な享樂とはいふものゝ、親しい男女が薄暗い活動寫眞館の内に落ちつくが如きも、公然の誇示にまで進まない睦まじい男女が、其の連れ立つての散歩を薄暮に選ぶが如きも、闇黑に力づけられてのことである。歐羅巴の大戰爭で、獨逸や佛蘭西や英吉利あたりの大都市に、不良少年の激增したことは著しいものであるが、それ等の原因には固より保護者の不在・警察看視の弛緩・慈善事業の休止・兒童收入の增加等の關係したことはいふまでもない、けれども航空機の襲撃に備へる爲めに都市の街路の絶對闇黑といふことが、頗る注意すべき一條件として數へられて居る。即ち當時の獨逸や佛蘭西や英吉利あたりの大都市の兒童が、如何に闇黑に力を得て、彼等の單純な惡戲や不良な欲望滿足を追求しての不良行爲に至らしめたかは、これを察するに難くはないことである。

尚、例を擧げていふならば、窃に買ひ來つたお菓子などを、

暗黒な室で食べたり蒲團に潜ぐり込んで食べたりするものも、單純な隱れ食ひの享樂とのみいふべきでなくて、矢張り闇黑によつて得られた大膽が、少からず關係して居るものと見ねばならない。又吾々が普通に羞恥を感ずる便事が、餘りに明るくあるよりは、却つて幾分の薄暗さが、落ちつきと安易とを與へることなど、闇黑による羞恥の減退を示すものといふことが出來る。

そのやうに吾々は、闇黑といふことで羞恥を少からず薄弱ならしめ、かくて放膽に至ることは爭はれない事實である。これは要するに、私が上來述べて來た羞恥の根本的性質に、大に關係して居るのである。即ち闇黑の中に居ることは、他から發見され難い境地にあるものである。この他から容易に發見されないといふことは、一面に於て不安や警戒を多く要しないことであつて、それがやがて私羞恥を去らしめるものである。尤も吾々人類のやうに、複雜に發達した精神を持つて居て、道德的感情といふ他の動物に見られない作用を持つて居る時には、其の道德的感情が又闇黑によつて少からず鈍痲し、所謂良心の力を減退せしめるものである。

動物は何れも自己保存の本能から、他よりの襲撃や侵害を虞れて居るが、今日の吾々人類に於ては、先づ自己問題に對する用意が可成りに有力に働き、それが羞恥ともなつて現はれて居る。然るに闇黑はこの同類に對する用意を排除する上に力がある。それが羞恥の鈍痲となり、又放膽ともなるのである。

□ 結末

最初に述べたやうに、吾々は一方に於て社交本能とか群居本能とか共同生活とかいふものを持つて居つて、出來る丈け孤獨な生活を避けやうとして居る。それであるのに吾々は他方に於て同類との接近を避けるやうな羞恥を持つて居る。然も其の羞恥は、食と便と性との三つに共通して見られ、何れも吾々の日常生活に、特殊な色彩を與へ、人生の内容をして少からず豐かならしめて居る。而してこの食と便と性との三つは、又何れも其の行はれるに際して、他からの侵害や襲撃を受け易い隙のある時であると共に、又侵害や襲撃を警戒しなければならない時である。そこで自然は、吾々に羞恥なる特殊な感情を與へて、本能的にかゝる場合に於ける用意に備へるやうにしたものといはねばならない。

かゝる自然の注意深い方策は、吾々が社會的に複雜な形式と、内容とを有するやうになるに及んで、漸次に特殊な習慣や禮儀の主なものとして取扱はれるに至つた。即ち人の飯を食べて居

るのを覗くものではない、飯を食べる時には開け放して食べるものではない、糞尿は便所でするものである、人の目に觸れるところでするものではない、親しい男女の居る室へ無斷で入るものではない、性の交際は赤裸々にすべきものではない、といつたやうな習慣や禮儀が發生するやうになつたのである。

要するに吾々の有する羞恥は、決して吾々の生活と矛盾し現はれでなく、吾々の生存上に極めて有意義なものであつて然も其の根本は食と便と性とに基づいて居るのである。

（をはり）

筆の山

大町桂月

筆と紙とをあてがつて置きさへすれば、獨りで繪を書いて樂んで居りて、育つるに世話の燒けざる子なりきとは、よく我母の語りし所也。この樂は十三四歳の頃までも續きけるが、それより後は、詩文を作るの樂、之に代りて、今日に至れり。云はゞ、余は生れてこの方、筆と相親める也。されど、余は字を書くことには趣味を有せず、殆んど習字といふことをなさゞりき。それにて、原稿を書くには、間に合へど、手紙を書くに閉口したりき。揮毫を乞はれて、益閉口したりき。手紙は止むを得ずとするも、揮毫は一切斷らむかと思ひたること幾度なるを知らざるが、余の舊作を記臆し居りて、あれをと乞はれては、いやも云へず。どうせ、拙文を公にする身なり。字は一層拙なれも、五十歩百歩也。拙を以て辭すべきに非ずとて、どし〳〵筆を揮へり。以爲へらく、何人もたゞ寫眞代りに余の筆蹟をむるなるべし。まさか余の筆蹟に戀れるものは一人もあらざべしと。然るに、思ひがけずも、余の筆蹟に戀れたるものあ瀧田樗陰これ也。

樗陰ともあらう人に戀れられては、余の心動かざるを得ず樗陰や、酒を持ち來り、對酌して陶然となる頃、さき頃、或る

にて貴方の筆蹟を見て、大に氣に入りたり。一つ御揮毫をといふ。惡筆なりと、先づ頭を掻き、何も書く道具無きかと問れば、そこには抜かり無し。紙筆は用意の上也。布袋然たる大柄も軽く朱顔にこく〲と、我が爲めに墨を磨り、我が爲めに活きたる文鎮となり、少し細工せられたり、少し氣取られたりなどゝ、肯綮の言を放つに、心愈勵み、消しては又書き、又消して又書き、彼我共に滿足するに至つて止み、樗陰は筆を置いて去りぬ。次には酒と共に、墨を持ち來り、次には酒と共に硯を持ち來り、次には酒と共に椿處の篆刻を持ち來りて、書の道具、樗陰の爲めに、一と通りは揃ひぬ。

滿鮮の旅行を終へて歸りし時、又一人余の筆蹟に戀れたるものあり、松本道別これ也。道別曰く、滿鮮より歸られてよりの御筆蹟は、臟氣減じて、仙氣加はれり。芋錢畫伯の畫と相副はゞ、面白きものが出來るべし。余之を沽らむと思ふ。可ならんかと。沽り物と聞きて、首を傾けゝるが、道別曰く、貴方は平生文筆が忙しきに、地方の知らぬ人より揮毫を乞ふもの續々として始末に困り居らるゝやう也。揮毫は一切我に任かされずやと。それも可からうと頷けば、芋錢畫伯に紹介せられずやといふに、相共に筑波山に登るを機として、途に芋錢畫伯を訪ひて、其承諾をも得たるが、道別は神人生活を爲すやうになりて、その企は立消えとなりたり。

加藤美命氏と共に、吉野村の梅を訪ひ、房州の鏡浦に浮び、
本アルプスに上り、九十九里濱に遊びけるが、九十九里濱に
びし時は、依頼に應じて、數十枚に揮毫したりき。美命氏も亦
の筆蹟に戀るゝ一人となりぬ。余に謂つて曰く、百幅會を作
て、貴方の書を天下に頒たむと思ふ。可ならむか。余は貴方
共に旅行してより、始めて山水の趣味を解しぬ。これより共
廣く天下の山水を探らむ。さるにても唯書を人に恵むといふ
は無し。書に揮毫料を取られよ。貴方の文は既に天下に行は
たり。書も同じく天下に普く行き渡らせたきものなりといふ
昔は武者修業といふ事ありき。今の世筆の武者修養も亦面白
るべしとて、之を諾し、先づ足利地方に赴き、次に奧州に赴
ぬ。

十年この方、依頼を受けて揮毫すること、數千枚の多きに
しけるが、原稿と同じくなぐり書きを爲して、書くに勞せざ
代りに、少しも進歩を見ざりき。古今の名筆を見るには見るが
唯見て樂むのみにて、少しも身に付かざりき。殊に生れ付き
が無器用なれば、書畫は如何に學びても、物にならざるべしと
自ら諦めたりき。まゝよ、自我流の原稿體にても、俯仰して
地に耻づる所なしと思ひけるが、斷酒以來、心機一轉する所あ

回顧すれば、生れて五十年、余は唯文章一方のみを目がけて進みたりき。書物を讀むも文章の爲め、山に上るも文章の爲め、酒を飲むも文章の爲め、文章のためには、あらゆるものを犧牲にして、馬車馬の如くに、傍目もふらざりき。それにて、一高點には達するを得るも、大を致すこと能はず。詩文書畫の四つを兼備せるは、支那に在りては蘇東坡、日本に在りては賴山陽だけぐらゐなものかと思ひしも、少し立入りて見れば、維新以前の學者の大部分は、學問の外に、文を作り、詩を作り、書を善くし、畫をも善せることを知れり。賴山陽は畫に通ぜるを以て、耶馬溪を形容し、支那の畫家を引用しても、肯綮を得たるが、齋藤拙堂は畫に通ぜざるを以て、木曾川の溪山を形容し、支那の畫家を引用して、全く見當違ひをなせりと、さる專門家の言ふ所を聞きて、大に悟る所ありき。富士山に登りて、益悟る所あり。富士山に登るに、唯吉田口なら、吉田口一方を上下するだけにては、未だ富士山を盡せりとは、云ふべからず。余や吉田口をも上りたりき。須走口をも上りたりき。御殿場口をも上りたりき。須山口をも上りたりき。大宮口をも上りたりき。頂上を一周したりき。中道を一周したりき。裾野を一周したりき。富士見三景を一周したりき。遠く四方の諸國よりも富士を眺めたりき。伊豆の大島よりも富士を眺めたりき。斯くて余は始めて富士を知るに足れりと自信す。翻つて余が筆の山登りを見るに、唯一方の文章口のみを上らむとあせりし也。頂上はまだ程遠し。まづ〳〵五六合あたりに達し居るものならんか。暫らく目には上を目ざずして、中道を廻り盡し、然る後、頂上目掛けて上らむと決心しぬ。筆の山にて、文章道に近き上りは、書道なるべきも、書道に達せむには畫道を知らざるべからず。畫道を知らむには、諸技藝の美を曉らざるべからず。余は筆の山の中道めぐりも、前途遼遠なる哉。

書の一事だけにても、和様一方だけにては狹し。本家の唐様を知らざるべからず。唐樣も眞行草のみにては、なほ狹し。隸に溯らざるべからず。なほ篆に溯らざるべからず。一々字の由來を知らざるべからず。ざつと古今の名筆に目を通したるが、唐以前、古に溯れば溯るほど、筆力勁くして、字體整はず。唐以後降れば下る程、字體整ひて筆力弱し。之を今の我國に見るに、日下部鳴鶴は卓然として一頭地を拔く。鳴鶴は勁き筆を以て整へる字體を書かむとす。晩年に至りて、雅致を加ふ。云はゞ、正道の大家也。之に反して、中村不折は弱き筆を以て整はざる字體を書かむとす。云はゞ、奇道の大家也。專門家以外政治家にありては、伊藤公の書、雄渾にして、如何にも大政治的也。軍人に在りては、上村大將の書、俊雋にして、如何に

大將的也。いづれも詩を善くす。文士にありては、夏目漱石の書、逸氣を見る。池邊三山の書、高致を見る。伊藤公や上村大將や、漱石や、三山や、今や亡し。少し維新以前に溯れば、貫名海屋は弘法以後の名筆の稱あり。何處か我鐘辯に似たる所あり。これならとて、臨しかけて見たるが、とても似付かず。圓轉滑脫の妙を蘊せる弘法大師は、齒が立ちさうにも無し。その末流の御家流は、ちと閉口也。轉じて本家に立入り、何子貞の書は、何處か我鐘辯に似たる所あり。これならとて、臨しかけて見たるも、とても似付かず。徒に名家の體を學ばむよりは、一々字に就いて研究し、古今大家の長所を取り、之を自家の性格と趣味とに融和すれば、一家の書を成すに足るべし。その自家の性格と趣味とを養ふ上には、多く名筆とも親まざるべからず。自箇流の僞字は、外道に墮つ。俗字も避けざるべからずとて、井原雲涯に就き、なほ芳賀楊園に就き、字を問ひて、益する所多し。楊園は漢學者にして、字典の著さへありて、能く字を識る。伏見宮殿下に經を講じ、書をも指南す。將棊は二段の實力あるが、碁は余と伯仲の笊碁也。雲涯は鳴鶴の高足にして、書道に精通し、詩文を善くし、今現に『書勢』といふ月刊雜誌を發刊して、書道の發揚に力む。二十年前、出雲の簸川中學校にての同僚なりしが、當時既に一とかどの能書家なりき。

雲涯曰く、書の器用なる人は往々早く小さく固まり一
無器用なる人、却つて大成すと。この言、余の意を强うす。
谷一六は、字を書くことを好みたるも、拙劣にして、寄せ書
爲す毎に、人みな眉を顰めけるが、遂に大家と成れりと聞き
益余の意を强うす。器用なる人、眼識高くして、力めて止ま
れば、これに越したることなけれども、器用なる人は、多く字
早く整ひて、早く滿足し、毫も苦心せず。大成せざる所以也
無器用なる人、苦心せざれば、それまでの事なれども、無器
なる人は、器用なる人よりも苦心すること甚し。大成する所
也。何事にも、傑作には、大なる苦心伴ふ。文章とても、苦
せずして、すら／＼書く人は、必ず大成せざるべし。余初め
を書くに、毫も苦心せざりしが、筆の中道廻りを爲すに及びて
苦心するやうになれり。從つて遲々たれども、多少の進步を
る。我に適する筆をとて、東京中の筆屋より數十百本の筆を
ひ集めたるが、書き易き筆を用ゐて、らくに書くよりも書き
き筆を用ゐて、苦心して書く方が、却つて味のある字の出來
ことを知れり。ちと生意氣なるが、如何なる書家にしても、
筆を一定して、唯らくに書かむことを工夫するに至れば、其人
の書は必ずや發達が停止すべし、『弘法筆を擇ばず』の俗諺に
は、眞理あるを覺ゆる也。

選擧の夢

黑頭巾

一

◉春の夜に、レコードを聞きつつ、端無く、選擧の夢を見る心地す。若し、音譜を以て、選擧を寫し出すを得ば、そは、頗る興味の豐かなるデスクリプティブ、ミュージックのレコードの一枚を得るなるべし。

◉極めて、寫實的に寫し出せる大なる時計店の音譜を聞きつつあれば、大時計、柱時計、目覺まし、小時計、懷中時計、あらゆるさま〴〵の時計の音、靴の音、丁稚の口笛、その他の微妙なる雜音を混じへて、すべてゼンマイより起る音響の海の波立つ波線が、吾が皷膜を打つて、それが還原されて、大なる時計店の店頭に、それ等の大小、各種、無數の、割據せる時計の、おのがじし、特有の努力を競ひつつある光景が、髣髴として、吾が眼に映つる。既にして、あらゆる無數の時計が、一齊に、時を報ずる音聞ゆ。

◉寫實音譜の妙味、人を醉はしむるに足るもの無くんばあらず時計店の音譜、その最後の、一齊の共鳴、すなはち大鬪鬨を報するは、殊に、おもしろし。

◉同じき種類の音譜に、アルプス山中の狩獵を寫し出せるもの、また時計店のに讓らざるの興味あり

◉曉鷄鳴く。次いで角一聲、獵者を招集するらし。朝のチャアーチの鐘、太く鳴る。霜を踏む鐵蹄の響、林を過ぐる風の音、獵の笛、犬の聲。すべて一切のものを見ずして、音波の上に、鹿を逐ふ獵の光景浮ぶ。

◉吾輩、嘗て虞初新誌を讀みしとき、秋聲賦ありし事を思出す一篇の文章、唯だ專ら半夜、一室の光景を、音響のみによつて描き出して、人をして神往せしむるものあり。聲、蕭然として むとき、屛風を排して見れば、唯だ一介の人物、一箇の机、 枚の扇とのみありしと記す。

◉對話も無く、叙事も無く、彩色も無く、只だ音譜のみを以て

光景を描き出す、寫眞音譜の興味此の如し。偶、音譜を以て、選擧の政治劇を寫し出すを得ば、一箇の新らしき試みのレコードならん事を思ふ。

二

◉選擧の音譜は、先づ議會譜より始めざる可らず。此の事、固より一箇の夢想たるを失はざるべし。然れども、若し、毎議會の一幕を選んで、その音波を描き、そのレコード一枚と議長の寫眞とを併せ見聞せば、音譜より見たる議會史たらずんばあらざるべし。

◉音譜より見れば、貴族院のは、洋々として波立たざる大江の靜かなるが如し。その波瀾を描ぐるときと雖、大勢を以て押して行く。音譜の上には、單調たるを失はず。衆議院のは、大波、小波、さま〴〵に湧いて、雜音の音波を以て充たさる。譬へば、危礁の亂立する溪谷の水の音の如くなるべし。

◉或は、これを、時計店の店頭にも譬ふるを得べし。議長は、店頭の中心たるべき大時計にも比すべし。大小、無數の時計の音、その刻みゆく針の響、おの〳〵雜然、紛然として、その同時、一齊に競ひ起り、織綴しつゝある音響は、これを筆舌に寫し出すを得可らず。唯だ、眞に、一枚のレコードのみ、能く、これを寫すを得べけん。

◉時計の音調、おの〳〵一ならず。その高く、低く、或は、大に、小に、或は、奇異の音を立て、或は、雅みやかに鳴る。その形の、箇々に、箇性を發揮すると同じく、その音響も亦た、特色を競ひつゝあり。

◉禽園に禽獸の共鳴するとき、各種の聲色の、混揉して、節波する音譜は、萬花の滿開しつゝある花壇の色譜にも比すべし。然れども、その混揉を織綴する音譜の興味は、大なる時計店の店頭に若かず。

◉小選擧區によりて、新に議會に送らるべき議員の數は、舊時に比して、頗る多きを加ふ可ければ、音譜より見たる、次の議會は、議會史に於て、その音波の混揉を更に、複雜ならしむる所以に於て、一新時期を劃するものなり。

◉音聲は、新らしき興味を以て、次の議會に期待す。憂世の聲、愛國の聲、經綸の聲、彌次の音、卓を叩く音、水を呑む音、咳の音、破調の洪音、靴の音、低聲、耳語、斷續の響、執拗の響、すべて音譜の上に、内容の響を暴露し來らん。

◉音聲は、併せて過ぎし議會を回思す。『朕、帝國憲法第七條ニ依リ、衆議院ノ解散ヲ命ズ』、一聲、青天の霹靂、あらゆる音響一齊に消ゆ。暫らく、嚴肅なる沈默の後、やがて起る滿堂、一

様の、萬歳の聲。かくて第四十二議會の普譜、畢る。

三

◉此の頃の春雨に美しきものは、盆栽の椿(つばき)なるべし。その力ある青き葉、その葉のかげに、一雨、一雨に、紅熟しつつある隣國の寄玉。半ば紅く、その半ばは、未だ青く、青紅の斑を帯びたる瑪瑙の玉の、流れに磨かるるにも較ぶべし。

◉石楠木の固き蕾こそ、深き興味を以て、その破蕾の春を期待さるるなれ。去年の初冬に、初めて、つぼみて、麗はしき青き表皮に包みて、半年を送る。此の頃、朝暾に、雨の中に、日々、その堅くるしきつぼみを見守りつつ。やがて、梅花萎み櫻花飛ぶならん。

◉今年の石楠木は、去冬、議會の召集されし頃に、つぼみたるが、その開くは、恰も總選擧の時なるべし。

◉總選擧は五月十日――綠蔭の風漸く薫るころ、椿(つばき)の紅實の輝くころ、石楠木の花の開くころ。而して五月十日こそ、最近の吾國民史に思出多き日なれ。

◉同じ日に行はれたる古今の事實の間には、必ずしも因果律の存するに非ず。然れども五月十日は、吾が國民の忘るゝ能はざる日。その同じ日に、普選案の運命を決すべき總選擧行はるべし。

◉明治廿八年の五月十日には、遼東還附の、大詔渙發され、國民の眼中、皆、涙あり。その涙は、やがて日本民族の意氣の泉となれり。同卅三年の五月十日は、今上陛下、御成婚の記念日、瑞祥、極無かりし。

◉東京に、始めて、電信の開設されしは、今より約半世紀の前、明治五年の五月十日。およそ電氣の力、世界を支配してより、文明一變す。此の五月十日の事も、吾が日本の爲に、新時期を劃せるものならずんばあらず。

◉數多く行はれし總選擧の中にて、廿五年五月十二日に於ける松方内閣の選擧干渉こそ目覺ましきものなりしたれ。今待たれつつある總選擧が、人をして此の大干渉の記念日を聯想せしむべき五月十日に行はるるは、何等かの因緣あるべきや。今の政府は、當時の松方内閣の如く、思ひ切つて、大干渉を逞しうすべきや。如何。

◉玉手箱は開けて見るまでは、儼重に、密閉さるること、譬へば、石楠木の蕾の如くなるべし。來る五月十日、總選擧の玉手箱は開かれて、干渉の白煙、立ちのぼる可きや。

四

◉原首相は、美名を藉りて、解散の理由を説明したるも、如何

に、その說明の巧妙なるも、解散の不自然なるは免れず。彼は、國民の意志を問ふと稱すれども、實は、その必要あること無し。國民の意志を問ふといはざれば、解散を爲すべき名目あらず。

◉政府が議會に多數黨を擁して、解散を斷行したるは、原を以て嚆矢とす。解散の眞意、果して那邊に存するや。敵と味方と、互に、辭令を交換するを要せず。直ちに、その肺腑を兩いて眞意を暴露せしむるを要す。

◉政友會の期するところは、更に〳〵、大多數を、議會に擁して、反對黨をして、議場に、隻言半句無からしめんとするにあり。黨略としては巧妙なるものたるを失はず。然れども、その爲に解散を敢てするは不法たるを免れざるべし。

◉首相は、普選案の重大なるを力說し、その可否、單に、議場にて決せられざるだけにては十分ならず、須く國民の判斷に待つの必要ありと言へり。

◉當然の理窟より見れば、國民の意思を示す爲に議會あり、代議士あり。議會は、小事件のみを議決する機關にあらず。若し、重大なる問題に逢着する每に、更に、國民の判斷を待つの必要ありとして、議會を解散すべき理由あること無し。

◉普選案に統一なかりしは、在野黨の爲に急所なりし。此の明白なる急所をば、いかで、原が見逃すべきや。

◉去年、勝運に乘じて、選擧區を縮少し、小選擧區を議決して先づ、その地盤を固め、今年、解散の結果、その小選擧區を利用して、更に、大多數を占めんことを期す。政戰の巧妙なるは政友會、確かに憲政會の上に出づ。

◉選擧區の縮少は、政友會の大利益なり。而して原首相は、納税十圓を三圓に減じて、選擧權を擴張したる事を誇說したるは選擧區の縮少を掩護したる雄辯ならずんばあらず。譬へば、選擧區の縮少は、その本體にして、選擧權の擴張は、その爲の極なりし。

◉大隈內閣の交迭以後、憲政會は、政友會の爲に、着々、機先を制せらる。此の如くして、最近に『豫期せざる解散』に至る此の總選擧が、政府の豫期の如くならしめば、或は、覇權長く政友會に掌握せられん。若し、憲政會に策士の智多星あらしめば、一轉機を發見するは、却つて此の時に在り。

◉柔道より見れば、此の總選擧には、政友會は、體勢、力量、ともに優つて、當に掛つて壓迫し來れば、立業にては、勝算おぼつかなし。憲政會の爲には、寢業の外、良途、無かるべし。

五

◉第四十二議會の解散を、若し、醫術の上より見ば、恐らく膝

むし齒の激痛に堪えかねて、その病齒を拔き去りしにも譬ふべし。今日の治術にては、局部麻酔の法の進歩したるが爲に、齒を拔くには、手術の簡單なるのみならず、その爲に、何等の苦痛を覺えざるべし。

◎齲齒の激痛は、極めて堪え難きものあり、或は、生命の安全を脅威するかと思はるるものも無きにあらず。少數の反對黨の議會が議會に於て、政府に、激しく肉薄し來るは、則ち、むし齒の激痛に似たらずんばあらず。

◎如何なる激痛のむし齒と雖、若干時の耐忍を敢て能くするを得ば、鎭痛の法、必ずしも困難なるに非ず。激痛あればとて、忽ちに病齒を拔き捨つるは、智勇あるに似て、實は短慮なり。

◎激痛のむし齒は、生命を脅威するものにあらず。假令、あらゆる齒が悉くむし齒なりとするも、生命は安全なるべし。齒痛は、腦神經の中樞に近きを以て、人を短氣ならしめ、智者も爲に、その智を攪亂せらるることあり。議會の肉迫戰の爲に、大政治家も、往々にして、興奮して、失敗の迷路に、迷ひ入る。

◎斷じて解散すべくして、解散せざりしが爲に失敗したるは、最後の桂內閣たりき。解散す可らずして、解散したるは、今の原內閣なり。

◎桂內閣のときには、病根、齒にあらずして、深く神經系統を侵したるを以て、須らく猛然として、激痛を傳へつつある齒を拔いて、病源を探る可かりし。原內閣のは、此の如く、蒼惶として齒を拔くには及ばざりし。

◎齒科醫が、朽齒を奪ひ去るに、卒然、局部麻酔を施し、刹那に、小さきくぎぬきを以て齒を奪ひ去る。齒を失へる客は、濟然として、手術の苦を知らず、暫らくにして、自ら探つて、口腔の議席の空しくなれるを知る。

◎齒科醫より見れば、朽齒には何等の權威無し。病者の心には奪はれたる齒は、切り捨てられたる爪片の、檐端に落ち散るを見るとは同じからず。失はれたる齒は、齒科醫の手より、無雜作に、くぎぬきを一振して、唾壺の中に捨てらる。その刹那の前まで、尊き口腔の機關に、權利ある椅子を占めたりし齒が、憐れにも。

六

◎近來の吾國の、第一流の政治家にして、解散を爲さざりし者無し。始めて政黨內閣を組織したる原敬も、また敢て、解散を爲せり。解散を爲さざりし唯一の政治家は、公山縣のみな

◎解散を爲さざりしといふを以て、政治家の大手腕なりと速斷するを得ず。然れども、兎も角も、敢て、解散を爲さざる

ざるまでに、切迫すること無かりしを見れば、山縣内閣が、議會と、正面に衝突せざりし巧妙を認めざるを得ざるべし。

◉彼は直接に、解散の當局者には非ず。然れども、解散の動力となりしことは少からず。彼は、間接に議會の解散者たるを失はず。

◉近來に於ける大隈、寺内の解散の動機が、山縣に存するは、世人の知るところなり。彼は解散の當事者たらずと雖、その背景を爲せり。

◉彼は、或は、自ら幸にして解散を爲さざりしを、光榮として誇説すること無きにあらずと聞く。然れども彼は、解散に關係あるのみならず、寧ろ、解散だけより見れば、巧妙なる解散を爲せる政治家ならずんばあらず。

◉解散を敢てするは、譬へはぬかみそ桶に手を突込むが如くならずんばあらず。ぬかみそに手を突込むは、何人も躊躇するところ、已を得ずして、衝に當る。公山縣は、手を懷にして、ぬかみその漬物を食ふべき佳賓たるを得たる者なり。

◉如上の意味より見れば、原は、解散に巧ならず、寧ろ、事を好めるに近し。山縣と原とは、解散を爲すの直接、間接たるとを問はず。總選擧の見地よりして、全く、解散の目的を異にす。

◉小黨分立は山縣の理想にして、絶對多數の大黨の樹立は、原の理想なり。山縣は、大黨を打破せんが爲に、解散を必要とす。原は、小黨を一掃し、大黨の獨擅臺たらしめんが爲に、解散を强行せり。

◉解散の形式に於ては、山縣のは自然的にして、原のは、甚不自然なり。内閣が少數黨に據る場合に、解散は已むを得ず。多數黨を擁して、解散を爲すは不自然なり。

◉原は、解散に先だちて、かねて公山縣の同意を得たるや否を詳かにせずと雖。定めて、如才無き彼は、かねて同意を得なるべく、その理由とするところは則ち、解散の前、議會にける彼の演説の要旨なるべく、併せて、彼は、それを以て、選擧に、反對黨を壓迫するの綱領となすなるべし。

◉彼の演説に、普選の運動を以て、社會の秩序を脅威するもと言へるは、彼が、公山縣を動かしたる解散の理由の、最も力なるものなりしなるべく、此の趣意を掲げて、彼は、總選に對するならん。

七

◉待たるる五月十日の總選擧に對して、吾輩は、政友會の歴史を回想せざる能はず。政權に執着せる隱忍、持久の努力が、則ち近來の政友會の歴史にして、またそれが原敬の傳記な

いふべし。

◉此の如き、隱忍、持久の努力を敢てせるは、原敬に非れば能はず。政友會に於て、創立者たる公伊藤は理想家、第二代の侯西園寺は恬淡なる繼承者。而して第三代の原敬こそ執拗にして有力なる守成者ならずんばあらず。政友會の地盤を築き上げたる者は原敬なること疑を容れず。

◉政友會に原敬あるは、徳川十五代に於ける三代家光なり。政友會に於けるも、徳川氏に於けるも、規模の大なる政治家は、ともに、その第一代たるは論莫し。然れども、始めて諸侯を臣僚とするを得たるは、ともに第三代にあらずや。

◉伊藤、西園寺は別とし、政友會は、松方、山本、寺内に接近し、隱忍、持久して、遂に天下を取る。隱忍、持久の歴史は、すべて今日あるが爲とすれば、解散を強行するの後、理想的大多數を議場に確保せんとするは、その歴史的精神の當然に、到着すべき結論なるべし。

◉原は、政黨の首領として、また、嘗て、再び內務大臣として、屢々總選擧を經歷し、他に、彼に匹敵すべきほどの、總選擧の研究者を見ず。彼は、現代の政壇に於ける隨一の選擧通ならずんばあらず。

◉彼は這般の閱歷、研究を有して、今、尤も有利の地位に居り、これに加ふるに、彼の一身、ともに油の乘つたる全盛時の精

を以てす。五月十日の總選擧に對する彼の、働振こそ見ものなるべし。

◉五月十日の總選擧は、政黨の立場より見れば、關ケ原の一戰たるを失はず。政友會の多年の、隱忍持久も、此の一戰の爲原敬の半生の努力も、それの爲に、精彩を發すべし。

◉若し、此の一大戰に、政友會が、理想的の成績を收むるを得ば、原敬の地位、勢力は、著るしき增進を見るべく、將來の政壇に、大御所たるを得べき彼が地盤は、此の時に築かれん。

八

◉解散前の形勢を以て、若し、總選擧を卜し得可くんば、二黨の振はざるを惜しむ。原を語れば、その政敵たる子加藤を對照せずんばあらず。近時、原敬ひとり颯爽の勇姿あり、而し子加藤の氣勢揚らざるは何故ぞや。

◉政爭は、守るに苦んで、攻むるに利あり。攻勢に立つとき議會の少數黨、能く、多數黨を壓倒するに足るものあり。少黨橫暴の一語、なほ記憶に新なるものあるべし。

◉多數黨と少數黨との鬪爭は、大男と小男との角力の如きもあり。多數黨は、最後の票決の、恃むべきあり、泰然として

うるを待べし。少數黨は、則ち、土俵一杯に、刎ねまわつて、精悍に突張らんことを要す。

◉國技館の土俵に見よ、小力士は必らず多く動いて、大力士を誘發し、遂に、それをして隙を見せしむるを要す。少數黨が多數黨に挑戰するは、此の如くならずんばある可らず。その誘發するといふは、敵をして破綻を發露せしむるの顯引なり。

◉山本内閣の崩潰する時。大隈内閣に、憲政會が政友會に肉薄したるとき、ともに這般の意氣あり、少數黨の意氣、能く、多數黨に突撃し、攪亂せしめて、多數黨の力、恃む可らざるに至らしめたるに非ずや。

◉第四十二議會の少數黨には、這般の意氣を缺如せるにあらずや。多數黨の陣形、亂れずんば、少數黨に勝算立たず。

◉小力士、能く健鬪して、大力士を混亂せしめ、同體に斃るゝときは、勝負たとへ、分明ならざるも、そは小力士の成功に歸すべし。此の際に於て、意氣旺盛なるものは必らず取直ほしを主張す。これ即ち少數黨が解散を要望するの聲ならずんばあらず。

◉大隈、寺内、二代の内閣のとき、その解散は、悉く少數黨の誘發に出づ。此の場合、解散は則ち勝利の第一歩なり。原内閣のとき、全く、これと異なり、解散は多數黨の壓迫より出づ。

◉小力士の意氣と健鬪と足らずして、大力士より、悠然、歩を進めて、敵を土俵際に壓し、勝敗の勢、明らかなる刹那に、大力士、忽ち手を收めて、自ら取直ほしを主張するが如きは、散に於ける原敬の意氣なるべし。

◉彼は、一番の角力に二度、勝つべく期待せるにあらざるか。然らずんば、更に、理想的に、大きく、目覺ましく、鮮やか勝たん事を慾望せるならずんばあらざるべし。

◉如上の意味に於て、取直ほしは則ち強者より弱者に對する威なり。これと同じき意味に於ける解散は、多數黨より小數に對する壓迫なり。

◉凡そ對抗は、重量によりて計算せらるべし。重量に速力をじたるものが則ち動量なり。されば小數黨は大なる速力を有て、始めて多數黨の小なる速力に均衡す。若し、多數黨にしてかねて大なる速力を有せしめば、多數黨は巨巖の如く、小數は累卵の如くならん。

◉若し、解散前の儘の、兩者の勢力、意氣ならしめば、總選の結果は豫めトすべきのみ。少數黨にして、粉碎を免かれんせば、その速力を増し、意氣を勵ますの外なし。政爭に於け意氣は、物理學上の動量には、知られざる一勢力なり。

◉少數黨は氣合勝せざる可らず。普選反對者は沈默すべく、勢

敗者は絶叫せん。少數黨は、金戰す可らず。舌戰せざる可らず。金戰は多數黨の重量なり。舌戰は則ち少數黨の速力なり。

九

◉政府は、斷然毫も選擧干涉を爲さざる可きことを明言す。道理は、此の如くならざる可らず。然れども、嚴正なる意味に於て、果して、能く、些の干涉無きを期するを得るやは、興味ある觀察に値ず。

◉動機を穿ちて言はば、解散の效價は、選擧干涉によりて、始めて生ずるなるべし。干涉の政治は無かるべき筈なり。然れども干涉の理勢無きを得るや如何。

◉今の內相床次は、先きに、議會に於て、熊本縣に於ける選擧干涉の事實の一部を認めたるにはあらずや。速記錄の鉛筆の痕、なほ鮮やかなるものあるべし。正直なる彼は、恐らくは此事を忘れざるべし。乃ち、來るべき總選擧に臨むべき彼の責任の自覺は、痛切なるものあるべきなり。

◉選擧干涉に有名なるは、松方內閣。時の內務大臣は子爵品川彌次郞。その干涉は極めて露骨にして、猛烈なるものなりし。露骨は則ち拙劣を意味す。その以後の政府にして、此の如き露骨にして拙劣なる干涉を爲したるもの無し。

◉試みに、松方內閣の干涉の一例を擧ぐ。薩摩は、首相の出身地なるを以て、特に、力を籠めて、反對黨を掃蕩し去らんとしたるべし。而して薩摩人の純朴なる、尤も、露骨に、それを遂行したり。

◉長谷場純孝に對抗せしむべく、政府は、高等學校の一敎授を指名して、これを後援したり。その敎授は、かねて政論に素養あるには非ず。眞率なる理學士にして、數學、物理の外、何等、世故の閱歷なし。唯だ、その長兄が、時の一顯官たりしといふのみ。

◉干涉は遂に野黨に克たず。此の抗爭は、六十票の差を以て、政府の敗北に歸せり。然れども、始めて逐鹿場に馳け出したる一敎員が、勁敵長谷場と、これほどの接迫戰を演出するを得たるを見れば、當時、干涉の威力の、如何に大なりしかを見よ。

◉此の理學士は此の時の選擧の外、その前後、未だ嘗て、政治に干係せず。今日に至つても、政治に超然たり。大隈內閣のときに長州に於ける官選の一候補に、一の農學士を押立てたると竝し、好一對なるべし。

◉理學士の經歷したるところに據れば、總選擧の日、警官、拔劍して、村里を馳せまはり、田畝の間に立てる有權者を驅つて、選擧場に赴かしめたり。かくして、僅に、六十票の差あり。若し、相當の候補者ならしめば、勿論、長谷場は壓倒されしを疑はず。

◉今や、此の露骨なる選擧干渉の國の人、床次、内務大臣たり。然れども、時世の變遷、全く別世界を爲し、内閣大臣も亦た當時に比ぶれば、頗る老ゐたり。若し、干渉を試みるならば、此の如く、露骨にして蠻勇ならずして、巧妙にして怯密なるべし。

◉時の首相、松方、恐らくは、今の床次よりも若かりしなるべく、内務大臣の子品川は、今の内務次官よりも遙に若かりし。彼等は壯年にして、尙ほ、多少、維新志士の氣慨を帶びて、蠻勇なりし。

十

◉床次の國よりは、嘗て、選擧干渉に、一機軸を放出したる子大浦を出せり。干渉政治家としての大浦は、議會史に特筆せらるべし。床次は、先輩、西鄕、大久保に憧憬しつゝある者、彼は、大浦と、その活ける世界の斷面を異にす。

◉大浦は政治家としては、無學、無理想なりし。然れども、實行の手腕あり、膽略あり、その圖太とき一事に至つては、床次は到底、及ばず。

◉大浦の、細密にして執拗なる態度は、彼が警察政治家たるに由る。明治以來、警察官より出身して内務大臣に至れる者、大浦の外に無し。則ち、彼の經驗閲歷も亦た内務大臣として、前後に唯一なるものといふべし。

◉警察官の補充難は、各府縣の、ともに苦しみつゝあるところ、乃ち、來るべき總選擧に對して、更に、一層、その補充難の倍なるべきを想像す。吾輩は、これに依つて、嘗て、東京毎日新聞に掲載されたる或府縣の警部採用試驗の珍答案を思出す。

◉總選擧に於ける候補者の人物低下は、屢、世評に上る。然れども、警察官の人物低下も、恐らくは、觀察に値するもの無くんばあらざるべし。

◉珍答案といふは、警部採用の常識試驗に、答案の中に「クレマンソー」とは西洋の草花。「竹の園生」とは、醫師の家庭「乃公」とは、大將乃木の雅號。「美人局」とは、電話交換局の事といへるあり。此の如きは、定めて、試驗官を驚倒したるを疑はず。その餘、なほ、幾多の奇拔なる答案ありしなるべし。

◉竹の園生を醫師の家庭とせるは、餘りに無學と雖、また一種の頓才あり。乃公を乃木の雅號とするも、强ち無理ならず。美人局を電話交換局となせるは、流石に、世情に通ずるもの。

◉然れども、竹の園生を知らず、クレマンソーを知らずして、警部たるを得ば、驚くべし。此の如き、警察官に出つて、總選擧の擧行に關係せられんとするは、悲しからずや。但し、これ等の中より、他年、子大浦の如き、政治家の出現する無きを保

せず。警察官、必ずしも人物無しといふこと勿れ。唯だ、人物低下の大勢は、否認し難かるべし。

◉床次をして、子大浦の手腕無からしむるとも、恐らくは、憂とするに足らざるべし。總選擧の總指揮官は、原首相あればなり。

◉警部試驗の、珍答案に擬して、越後の一操觚者の中に奇譫を爲せるものあり。今の場合に、錄して以て、話柄に供すべきもの無からず。

◉擬答案の中にいふ、「二重生活」とは二階住居。「共產主義」とは、姙婦預り所。懷疑派とは、刑事巡査。またいふ「內省」とは內務省。「秉公持平」とは、歷史上の人物。「社說」とは神官の演說。「文化運動」とは、江戶時代の騷動。浮浪生活とは船乘り。泡沫會社とは、シャボン製造所。「乙夜」とは、甲部巡査の非番。「本能滿足」とは明智光秀の喜。「處女」とは町內の娘。

◉此等の奇譚、總選擧の爲に言へるに似たるもの無きにあらず。願はくは、秉公持平をして、歷史上の夢たらしむること勿れ。而して「月桂冠を戴く」を解して、酒の饗應と爲せるもの尤も妙といふべし。五月十日の夜當選者、晩酌に思出して一笑すべきなり。

◉候補者の低下は、選擧區の縮少に本づく。小選擧區にては、議會に於けると、縣會に於けると、多く、候補者の相違を見ず。小選擧區は、時勢の進運に、倒行逆施するものたらずんばあらず。

◉代議士は地方的なる可らず。小選擧區は、則ち議員をして、いよ〳〵ます〳〵地方的ならしむ。議員の低下といふは、則ち候補者の地方的となれることを意味す。

◉小選擧區に於て、候補者の地方的化せざらんことを求むるは難題なり。地方的化するが則ち自然なり。若し、極端に、選擧區を小さくして、一家より選出せしめば、その主人、當選すべき筈なり。

◉選擧區を放大ならしめて、全國を以て、一大選擧區となさしめば、立候補を宣言せる天下の名士は、恐らくは悉く選出されん。

◉選擧區を擴張せしめば、理想選擧、行はるべし。選擧戰に、演說のみ、必らず有效ならん。選擧區を縮少すれば、情實と利害とに依つて、候補者の勢力は定まる。その情實、利害といふもの、すべて地方的なるべし。

◉或町内に、看板を掲げて、安賣の競爭を爲せる二人あり。甲は、世界一の安賣を標榜す。乙は、町内一の安賣を標榜す。競爭の結果、人氣は町内一に集まれり。

◉世界一の看板は、宜しく、廣世界に於て爭ふべし。狹き町内に於て爭ふは、須らく町内一ならずんばある可らず。小選擧區の選擧戰は、此の如くして、つねに、町内一の勝利に歸しつつあるなり。

◉町内一が、世界一に若かざるは、いふまでも無し。然れども、町内一が、つねに勝利を制しつつあるところに、議員低下の問題は歸着す。

◉若し、全國を擧げて、一大選擧區を爲さしめば、その當選の決定は、全國の總票數を計算せざる可らざるが故に、多大の日數を要すべく、その中、多くの同點者を發見するなるべし。同點者は年長に由つて決定せらるべく、同庚者は抽籤に依らん。

◉此の如くするときは、投票の法定數を定め易からず。入學試驗に於けると同じく、最高點より順次選拔して、所要の議員數に達せしむるの外無し。

◉此の最大選擧區の總選擧に於ては、議會をして、立法上の、一の大なる學校と見做して、それに入學すべき議員に向つて入學試驗を行ふものならずんばあらず。

◉小選擧區は、地方的感情を囚ふの結果を來たす。國民の意思を問ふは、大選擧區なるを可とす。地方問題には、縣會あり。縣會と國會と、略ぼその選擧區を同じくするの妥當ならざるは、絮說の必要無し。

十一

◉物價、昂騰して已むこと無し。唯だ昂らざるものは金利ばかり、下るものは、候補者の資格ばかりなるべし。人物、いよいよ下りて、選擧費は、いよいよ高し。

◉此の總選擧に於ける、選擧費の、全國に於ける總額の莫大なるは、豫想の外にあるべし。此の巨額の金を、石を擲つ如くに、擲つて惜まざるを見れば、選擧は、興味としても、何よりも面白ろきものなるべしと思はる。

◉選擧戰の興熱は、啻に、候補者のみにあらず、應援者、運動者の方、却つて候補者よりも興味の熱中すること、譬へば鬪犬を鬪はすが如くなるべしといふ者あり。

◉山に獵して、犬を驅つて鹿を逐ふに鹿を獲るものは犬なり。然れども、狩獵の興味は、犬にあらずして、犬の後援者たるべき獵夫等に在り。

◉角力場に見るも、土俵の上に、勝負を爭ふ者は力士なり。然

れども、力士の角力よりも、ひゐき〳〵の角力と見ゆることあり。此の意味に於て、土俵に上るべき力士は、傀儡とも見ゆ。また或は、敵味方の氣分の象徵ともいはれざるにあらず。

◉選擧に於ける買收は、天下、公知の事實なり。今に於て、買收無き選擧を想像するは難し。買收の廢止は問題にあらず。買收の巧拙が、則ち問題なるべく見ゆ。

◉經濟上より見たる買收は、一の融通機關となることもあるべし。譬へば、一の換氣法の如し。兎も角も、雰圍氣を變化するに足るものあり。

◉營々、逐々として、父祖、累代、その爪に火を點して、始めて能く築き上げたる財產、或は柚の木に登りて、柚を取る如くにして辛うじて得たる財產、それ等のものが、選擧に依つて、一炬の煙となるは珍づらしからず。

◉選擧運動は道樂なり。道樂なるが故に、金を散ずるに興味あり。金は、元來、これを集むるよりも散ずるに興味あり。金を得んとする者は、澁面を作りて苦しみ、金を散ずる者は笑面あり。

◉然れども、選擧は、素面にて出來ることには非るへし。慈善事業にも投ぜず、その子女の學資にも、なほ制限を加ふるを怠らざる人々が、湯水のように金を擲つを見れば、選擧は、慈善よりも敎育よりも興味多きものなるべし。

◉如何に、耽溺を好む人なればとて、一箇月を醉うて暮らさん事、容易ならず。選擧の運動は、三箇月に涉り、醉うて、昏々として、覺むること無きが如きものあり。選擧は、酒よりも濃き味あり。

◉選擧運動の巧妙にして、公徳に害少きものは、公共事業の寄附にあり。此の總選擧に於ける、此の意味の寄附は、隨分、巨額に上るべし。これ等の寄附金は、すべて、これを小學敎育に投ぜしめ、以て、次期の國民を作る爲に、貢獻せしめよ。

十二

◉時間を考へては、碁は打たれず。世帶の事を考へては、酒を飮むは馬鹿々々しかるべし。然れども、家を破り、產を擲つて悔ゆること無きを見れば、選擧戰は、自己滿足なることを知るべし。

◉古來、藝術の大家が貧に處して、晏如たる者。或は、烈士が節に殉ずる所以。それ等は、すべて、常人の苦痛とするところにして、彼等が愉快とするように見ゆるは、彼等が、此間に、自己滿足を得つつあればなり。

◉自己滿足の如何を見れば、人物の高下を知るべし。人物の

き者、隱れて出でずして、高踏に自己滿足を求め低き者、自己滿足を選擧戰に求めつゝあるを以て、候補者の低下といふなるべし。

◉惡貨、行はるれば、良貨は隱る。人物と經濟と、皆、此の如し。近來の小紙幣の粗惡なるは驚くべし。人々、蟇口を開いて錢を出すに、先づ、小紙幣を撰んで拂ひ、銀貨をなるべく後に出す。

◉此頃の、市場に、ふるき小紙幣の多きを見よ。實は必ずしもふるきにはあらず。その甚だしく粗惡なるが爲に、容易に、ふるくなりて、新物と交換せざる可らず。良貨には、慶長小判、依然として貴けれども、これ等の小紙幣は、半年の流行兒たるを得難かるべし。

◉立候補の資格、低下すれば、するほど、人物は、いよ／＼隱れて、小紙幣の世とならん。國家の組織、健全なれば、此の小紙幣といへども、用を爲すこと、良貨に異ならざるべし。

十三

◉先年、大阪パックに、羽織一枚の商賣といふ記事ありしことを思出す。流石の大都會、日日、盛大なる葬儀あらざること無し。羽織一枚あれば、未知の人の葬儀に、新聞を點檢して、悉く會葬せんことを力む。一回毎に、得るところの、饅頭、風呂敷、その他、いろ／＼の分配物、以て、糊口するに足るといへるなり。

◉選擧の運動員といふもの、則ち羽織の商賣ならずんばあらず。羽織なければ、運動員たるを得可らず。借りても、羽織を著ざる可らず。運動員の生命は、羽織なり。若し、選擧の事務所に、羽織を著け袴を穿ち、小カバンを携へて、用舍を徘徊せば、必らずや運動員と誤認されん。

◉候補者が運動員の一人に要する金額、一票買收の平均額、その一つ／＼は、巨額に上るにあらず。然れども來るべき總選擧に於ける選擧費、一人の平均額、およそ三萬圓乃至、五萬圓なるべく、その最多なるものに至つては、優に、十萬圓にも上るなるべしといふ。

◉一場の戰爭に、一隊の兵士の發射する銃を集めて、一塊となすを得ば、それは、一箇の砲彈に値すべし、選擧費に對する觀察も、また此の如くなるべし。三萬圓乃至十萬圓は、金銀戰に於ける、一箇の砲彈たるを失はず。選擧費は、縦令、一箇の砲彈に値すとも、選擧戰は、唯だ一箇の砲彈を擲ちたるにては成功せず。必らずや無數の銃丸を發射し、その總額が、一箇の砲彈に値せんことを要す。

◉戰鬪に於ける銃丸は兵士に依つて發射せられ、選擧戰に於ける銃丸は、羽織によつて撒布せらるるの相違あるのみなり。

◉此の意味より言へば、理想選擧といふは、彈丸の少き事、彈丸を多く、撒布せざる事、舌を以て劍鋒と爲す事を意味す。

◉然れども、往々にして、理想選擧を標榜して、その實は、陰に、實彈を撒布するものあり。此の如きは、仕掛ある竹刀を揮ふものにして、勝負の法としては巧ならんも、武士道より見れば、卑怯といふべし。

◉理想選擧の純なるものは、當年の田中正造なりし。選擧に於ける彼は、その潔白なる全人格を現はせり。彼には、全然、買收、といふ事無かりし。彼の性行、屢々、奇激に陷りしことも無きにあらざりしが、此の一事は、彼の爲に、議會史に特筆せずんばある可らず。

◉田中正造こそ理想選擧の張本といふ可かりし。彼の、晩年、貧しかりしは事實なり。彼は、僅に廿錢の茶代にも、拂ふ能はざるときには、借用證を書いて與へしもの、尙ほ彼の國に存すと聞く。

◉河野廣中も亦た大理想選擧の雄なるものなり。彼にも買收なし。買收す可き運動費無くして、議會の元老となれり。彼は、唯だ印刷費のみを要すと聞きしが、印刷費も亦た近年、暴騰し、彼の選擧費は、當年の比にあらざるべし、

◉若し、その選擧區に於ける、絕對の勢望を有し、何等の競爭をも許さず買收の必要も無きといふ意味より見れば、盛岡に於ける原敬も亦た一の理想選擧たらずんばあらず。田中正造のを積極的の理想選擧なりとすれば、原敬のは、消極的ともいふべし。

十四

◉吾輩は、切に、一票の興味を思ふ。當選の秘訣は、確かに一票を獲得するにあり。一票を積んで、大勢を成す。一票を確かむるは、煉瓦建築に於ける、一片の積方を愼しむが如くなるべし。

◉一票は碁盤にかける一子の如くならずんばあらず笊碁は一票を輕んず、故に、大成の望無し。名手は、一子を惜しむこと吝嗇が、金を尊重するに異ならず。

◉選擧に老練なるものは、敵に、唯だ一票を勝たんことを期すること、譬へば、碁の名手が、一子の勝を期するが如くならずんばあらず。笊碁は、則ち、素晴らしく勝たんことを思ひて、却つて敗北を招く。

◉組織的に、戸別訪問の法を創立したる者は、選擧の名人なる

かな。戸別訪問といふは、則ち一票を確保するの精神に外ならざるなり。

⦿中立の有權者は、運動員に對すること、恰も、生命保險の勸誘員に對すると同じき氣分を示すこと無きにあらず。運動員は、勸誘員よりも、うるさきことあるべし。

⦿戸別訪問を爲す上は、一票を確保するの意氣を徹底せしめざる可らず。運動員は、勸誘員より、以上の根氣無ければ、徹底せず。然れども、餘り、うるさがられては效無かるべし、勸誘員の悶々しき態度ある可からず。

⦿投票を集むると、寄附金を募ると、保險を勸誘するもの、三者は、同工異曲なるもの無くんばあらず。其の中にて、無記名の投票、尤も困難なるべし。假令、投票の約束を爲したればとて　履行を監督するの良法無し。不履行を強制すべき名案も無し。

⦿運動員は、屡々、その顏を、有權者の玄關に示して、而して相淡泊にして、いやがられざること、澤庵・茶漬の如くなるに至れば、その運動は頗る有效なり。一票は、掌中に收めらるべし。

⦿然れども今世の一票は、感激に由つて動かず、打算によつて傾く。運動、及び運動員の效力は、斟酌せざる可からず。

⦿先年、立候補の推選狀に、清き一票を投ぜん事を求むるの文あり。清き一票は、選擧の常套語となれり。清き一票は、打算情實を離るる事を意味す。此の名句の創作者を知らず。

十五

⦿一票の興味は、なほ語るべきもの少なからず。一票の差をもつて、勝敗の決したるとき、殊に、その興味、深し。その場合敵、味方の同點數を控除して、唯だ、眞の一票のみ、勢力を有するを見る。

⦿勝敗を決するは、唯だ一票にて足れり。然れども、その價値ある一票は、多數の票を積み重ねて、始めて能く、之れを得る。譬へば槍ケ岳は、槍ケ岳の絶巓の小さき平地の如し。

⦿槍ケ岳は、一萬尺の高峯。その連山の間に、嶄然として雲を抜く所以のものは、その絶巓の小さき平地のみ。然れども、その絶巓の小平地のみを、かくの如く、天空に捧ぐるを得ず。

⦿一票を得るの理由にも、曲折あり。叡智なればとて、必らず一票を贏ち得るの理無し。叡智と、叡智ならざるものと、相爭ふて、叡智ならざるもの、却つて勝つことあり。若し、その勝敗の理より見れば、叡智も恃むに足らざるを知る。

⦿子加藤が、先年、衆議院の選擧戰に敗れしは、智者、必ずしも勝たざるを見るべし。それと同時に、奧田義人は、二箇の

選擧區に戰ひて、二つともに月桂冠を得たり。殊に、その一は、加藤と爭ひしものなり。加藤と與田と成敗の事由は、委曲に考査せば、興味ある挿話を得るならん。

⦿凡そ、餘りに叡智なる者は、豫言者たるに適すれども、亭長たるに適せず。無類の亭長ならば、天下を取るを得べし。議員たるも亦た此の如くなるべし。

⦿議長たるに適する者は、議員たるを得ざること無し。議員たるに適するも、必ずしも議長たるを得ず。議長の候補者は、概ね選擧戰に、成功すべき理由あり。則ち、念に念を入れて考ふれば、議長の資格は、議員の資格なり。

⦿然し、餘りに、念に念を入れるも、過ぎたるは則ち及ばざるなり。地方の議會に、議長を爭ひて、滿點を以つて當選したる者あり。若し、それをして、一票を除く滿點ならしめば、理想的なり。絶對に滿點なりしは、滿盤の水に、水を注ぎたると同じかりし。

⦿此の當選したる議長が、自選したるは、いふまでも無し。若し、その自選の一票が、則ち、幸にして、自他、決戰の一票たらしめば、一票の効果、顯著なるものあり。

⦿聞く、此人、前回の選擧戰に、一票を以つて敗れたるを以つて、深く、人情の賴み難きを思ひ、此に至つて、大勢の有利なるに係らず、念に念を入れて、自選の一票を投じたるが、計らず滿點の喜劇を演出したるなり。譬へば大宴會の電燈の、停電の爲に、失態を起せしを印象するに過ぎて、次の大宴會には、電燈の外に、瓦斯燈と、蠟燭とを併せ點じて、萬一の停電に備へたるが如し。絶對の滿點は、餘りに赫灼たるに過ぐ。

十六

⦿地方議會の議長、選擧戰に、一票を以て、勝敗の決したるものあり。敵味方の候補者を對照するに、多くの點に於て、敗者の、却つて優れるを見る。唯た勝者に取るべきは、偏へに、その平凡、律義にして、二つの大勢力の間に介在するを得べき性格にあり。その叡智にても、精悍にても、雄辯にてもあらず。

⦿智辯、閲歷ともに、此の勝者に、遙に優さりて、而して議長を宿望しながら、却つて議長たるを得ざりしものあり。その辯禍根を爲せり。彼の先輩、東京より書を寄せて、議長となりたる後にあらざれば、決して氣を吐くこと勿れといひ、切に、その平生の辯力を警戒す。

⦿斯人、政友會員なり。議長の第一候補となるとき、中立派と懇談を試む。中立派の援助を得るにあらざれば、過半數を制するに定まらざるが故なり。中立派も亦た好意を表す。

◉此の席上、彼、花嫁のやうに爾やかに默してあらしめば、萬事、解決す可かりし。彼、油が乘り來つて、前議會に及び、痛切に、憲政會の横暴なりし事を說いて、感慨、淋漓たるものあるに及び、突嗟に、席上の雰圍氣に變化を與へ、中立派の神氣、一轉せり。

◉蓋し、中立派は、此人が憲政會の横暴に憤慨するを見て、忽ち、ひそかに、此人、志を得ば、政友會が憲政會に報復するなるべきを恐る。乃ち、憲政會の横暴去つて、政友會の横暴來るなり。此の夜、中立派急に結束して、彼の議長たるに反對す。

◉此の人をして、寡言、訥辯ならしめば、議長たるを失ふの憂は無かりしなり。議長は、雄辯ならざるが宜しく、鋭敏に過るよりも、寧ろ鈍重なるが可なるべし。議員たるも亦た同じ。

◉二つの多數黨の間に介在して、その横暴を制するは、中立派の妙味なること、此の如し。二大政黨をして、各、半數以内に留まらしめば、中立派、よく、兩者を制するを得ること、猶二人に對する唯一人の場合なるべし。此の場合、中立派は、少數にして、絕對多數黨たるの實權を得べく、若し、中立派に人物あらしめば、中立派の横暴、行はるべし。

◉中立派の妙味を、極端にあらはするには、議員が總計、如何に多くとも、必ず奇數なる可くして、二大政黨の人數、まさしく、相匹敵せしめば、殘るのは唯だ一票が、全局の死命を制するを得べし。眞に、尤も際どき中立は、唯だ一票にて可なり。それが、また尤も、優勢なる一票なり。

◉尤も痛切なる中立の一票の極致は、則ち超然主義ならずんばあらず。公山縣は、超然主義の大政治家なり。彼れは、議會の内にも、外にも、超然主義の妙諦を發揮するに苦心しつゝあり。彼が、總選擧に、純然なる中立派の扶植の爲に努力するは、その主義の貫徹に外ならず。

◉操縱の巧妙といふ意味より見れば、中立派の扶植ほど、おもしろきは無かるべし。適度に、中立派の扶植を全くするは、總選擧に於ける、殊に、複雜にして困難なるべし。超然内閣が政黨を駕御するは、此の外に良途無く、若し、その事、成就せざれば、解散を行ふて、有效なる中立派を樹立するを理想とするなるべし。則ち、尤も痛切なる中立の一票は、公山縣の理想境なるべし。

◉先年、大隈内閣の總選擧に、中立派の扶植、見事に行はるゝや、彼に、「崩れては、またも湧き立つ、荒波の、けさはあとなき、春の海かな。」總選擧の後の感想を歌へるもの。併せて、その軟らかなる微笑を想見すべきなり。

◉小さき勢力を大きく働かせ、數多の大勢力の均衡せんとせる

趨勢を利用し、操縦を以て、政治を爲さんとするは、戰國策の精神なり。今の公山縣は、既に、政黨の必要を認めつつ、尙ほ中立派を、飽くまでも活用せんとするは、雀、百まで、その魂を忘れざるものなるべし。

◉來るべき總選擧に於て、中立派の扶植と、その勢力と、果して如何。此の總選擧に注目すべき一大問題は則ち是。

十七

◉世上、或は、次期の內閣を豫想して、逸早く、田內閣を說く者あり。田は、男田健次郎なり。此說の可否と、彼が宰相たるの器識の如何とは、暫らく措き、興味ある一觀察たるを失はず。

◉彼は、公山縣と、原敬との間に、介在する一勢力なり。此の介在といふ事が、彼をして有力ならしむ。彼は、その精悍なるに於て、男後藤に優さり　公山縣の信用は、それより以上に出づべく、而して敵は則ち、それよりも遙に少く、彼の行動、多く、世上の問題を惹起せず。

◉著るしく世人の注意に上る人物は、大成すること容易ならず。注意さるれば、さるるほど、その短處も、研究せらる可く、頭角を拔くに隨つて、非難も亦た、それに伴ふ。男後藤は、それに當るべし。少年にして高科に昇るのは、一の不幸といへるは、此の見地より觀ても、眞實なるを思ふ。

◉彼が、政友會に因緣を結びたるは、寺內內閣に、總選擧の選擧長を勤めたるに由る。內務大臣の男後藤あるに、彼が遞信大臣にして、總選擧の鍵を握りしは、公山縣の鑒識に出づ。

◉公山縣は、男後藤を招き、彼の機鋒、餘りに鋭適にして、切れ過ぐるは、敵を作る所以なれば、暫らく、內閣の基礎を固むるが爲に、總選擧の鍵を、遞信大臣に讓るの、彼の爲めにも得策なるべきを、內諭したるらし。此の如くして、田遞信大臣は、總選擧の鍵を握りて、政友會は好意を表して、憲政會を壓倒し、併せて、中立派の扶植に努力せり。

◉新らしき總選擧に對し、公山縣は、再び彼をして、中立派の扶植に努力せしむべく、彼を通じて原首相にも、その意を致したるなり。而して原は、全く、中立派を援助するの意思無きを明白に答へたるを以て、彼も亦た手を收めて、何等、總選擧に關係するところ無かるべしと傳へらる。

◉此の總選擧に、中立派が依然として頭を擡ぐるを得ると、得ざるべきとは、議會史に於ける旋轉期を爲すものならずんばあらず。有力なる中立派の扶植は超然政治家の理想にして、二大政黨の對立は政黨政治家の努力なり。

◉此の二の、政治思想の潮流の衝突が、政友、憲政の二黨の抗

爭と、その斷面を異にして、來るべき總選擧の上に行るべし。而して原敬は、敵黨を壓倒すると、同時に、純中立派をも壓伏せん事を期しつつあり。

十八

◉若し、有力なる中立派が成立せずして、二大政黨を操縦すべき超然的勢力が消滅するところならば、超然主義、則ち官僚派が、政治上に、一大勢力たるを得るの時期は、斷絶すべし。隨つて、政治上に、元老を存すると雖、そは消火山と同じく、噴火力、絶えて、空しく、巍然として聳ゆるのみなるべし。

◉近來、これまで、超然派が、事實の上に、潜勢力たるを得しは、議會に、中立派を扶植し來たればなり。中立派は、超然主義の爲に、無二の要塞なり則ち超然主義の二〇三高地ならずんばあらず。

◉原敬の、最近に於ける、意氣の旺盛なる、必らずや、此の二〇三高地を突破して、以て、超然主義の、難攻不落の形勢を、陥落せしめんとするの方略、歴然として見るべきものあり。此の總選擧に於て、彼は、横に、憲政會と戰ひ、縦には、超然派に挑戰しつつあるものなり。

◉若し、彼の方略が、成功して、此の總選擧の結果が、著々として、豫期に副ふものあらしめば、將來に於ける、議會の政爭は面目を一新せん。而して、此の立場より見て、原敬の事業は、甚だ大ならん。

◉然れども、超然派、固より謀士なきにあらず、手を束ねて、衰運を待つものにあらざるべし。乃ち、深刻なる意味の暗鬪が、總選擧の前後に、彼等と内閣との間に行はるべし。

◉吾輩を以つて見れば、超然派は、宜しく、速かに、政黨として、その主張を鼓吹すべし。純然として、中立を稱するが故に、孰れの政黨よりも、壓迫せられ、疎外せらる。鳥にあらずして、鳥らしく飛ぶものは、鳥の世界には容れられず。超然派は、須らく蝙蝠たる可からず。

◉公桂が、憲政會を組織したるは、餘りに唐突なりしも、尚ほ能く、一大政黨を樹立するを得たり。今日に於て、超然派の、政黨化するの急なるは公桂の時よりも甚だし。唯だ時機、切迫して、首領たるべき一大人物無きは惜むべし。

◉若し、超然黨、組織せらるれば、それと、國民黨との對照は、興味あるものなるべく、畢竟、議會に、大小、一對の政黨が、錯綜して、抗爭することとなるべし。

十九

◎總選擧の感興は語つて盡さず、春の泉の渾々として、湧いて已まざるが如し。世人、屢々、選擧を、戰場、または狩獵に喩ふ。吾輩、端無く聖書を想起す。選擧は、或は、天國に喩ふべきものなり。

◎古來、宗教家、しば／＼天國を、戰場或は狩獵に譬ふ。基督は、これを以て、婚姻に喩へられたり。蓋し、婚姻は、人生の幸福事なれば、天國の愉快と、幸福とを形容するに、尤も適せり。

◎聖書にいはく、天國は、燈を執つて、新郎を迎に出る十人の童女に比ぶべし。その中の五人は智く、五人は愚なり、愚なる者は、その燈をとるに、油を携へざりしが、智き者は、その燈と、ともに油を器に携へたりと。

◎新郎の來ること、遲かりしかば、十人の童女は、皆、假寐せり。既にして、新郎、來ると呼ぶ聲す。童女、皆起く。油を携へざりし者は、油を買ふべく、出でゝ、歸りて、門を叩けば、新郎既に、賀筵に入れる後なり。

◎選擧戰に出でん者は、これ等の智き女と同じく、かねて十分の準備を爲さざる可からず。而して婚姻に往くの喜を以つて、出戰せんことを要す。

◎昔年、京都、同志社卒業の一靑年、傳道の爲に北海道に往かんとす、荒尾精を訪ひて、箴言を求む。荒尾、爲めに、蠟燭の二大字を書して、與ふ。靑年、その意を解せず。荒尾、乃ち答へて曰はく、蠟燭は、己が身を耗して、他を照らすものにあらずや。傳道の事、また、此の心を以つて、從事せざる可からず。

◎議員は、政壇の蠟燭たらずんばある可からず。彼等は、政治宗の傳道師あり。己が身を耗らして、他を照らすに非ざれば、崇高なる天分を全うし難し。此の意味に於て、今の河野廣中、杉田定一等は、當年の燭蠟なるべし。

◎然りと雖、濫りに、產を破り、家を滅する意味のみに於て、蠟燭たるに過ぎざるもの、田舍には少からず。土豪、もしくは、舊家の落魄は、選擧の道樂に因るもの多し。

◎若し、夫選擧の騷動が、世風に與ふる惡影響に至つては、彈指さるに堪えざるものあり。唯だ、家を破るのみにては濟まず、既に、恒產を失ひ、隨つて恒心を失ひ、碌々として、ゴロツイテ以つて生涯を送るものあり、彼等は、退いて舊里の地主たるを得ず。進んで政治宗の傳道師たるを得ず。蓋し、眞に、政壇の蠟燭たるを得ば、身を殺すと雖、惜しむに足らざるものあらん。

◎世に傳ふ、山芋、化して鰻となると。若し、鰻を物色して、前生、山芋たりしものを探がし得て、これを畑に齎らし歸ると雖、鰻は、再び山芋に戾るを得ざるなり。

三月十八日、春風、漸く、石楠木の蕾を吹き長じつゝあり。

黑　頭　巾　再記

私はオノトを使ふ

私の仕事の能率はオノトの爲めに二倍して居ます
私の社は重役初め皆オノト、私の社がイツデモ
何事にも率先するはオノトの敏活なる効率の爲めです

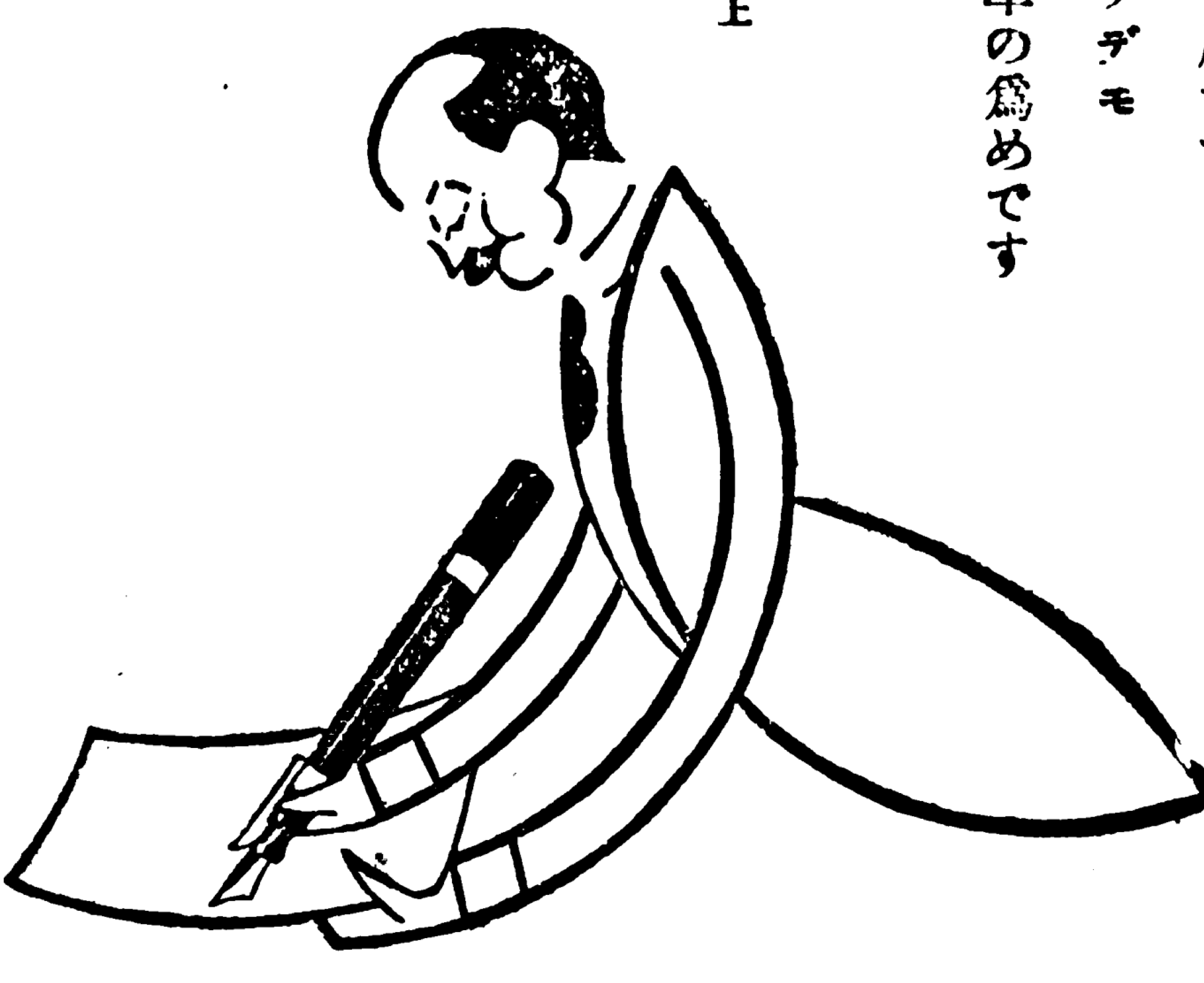
オノト萬年筆 無飾七圓飾付八圓以上

アルビオン萬年筆 飾付五圓五拾錢

オリオン萬年筆 無飾貳圓八拾錢

萬年筆用 **アテナインキ** 四拾五錢

送料各拾八錢



大阪心齋橋筋
（振替大阪七四番）

京都三條通
（振替大阪一七三番）

東京日本橋通
丸善株式會社
（振替東京五番）

福岡上西町
（振替福岡五千番）

仙臺國分町
（振替仙臺一五番）

時論

原首相の訓示を讀む

法學博士　吉野作造

原内閣が議會解散の理由として聲明する所のものは、初めから變なものであつた。解散當日に於ける首相の演說に觀ても、其後政友會幹部の表明せる所に觀ても、殊に原首相が或は首相の資格に於て、或は政友會總裁の資格に於て、其後屢々宣言せる所に觀ても、殆んど一として成程と諒解の出來るやうな筋の通つた議論に接しなかつた。尤も原首相は理窟を言ふ事を嫌ひな政治家と見え、議會に於ける質問應答を見ても、何かと云ふと、さう云ふ講釋は此處で承りたくないなどゝ云つて逃げる。普通選擧問題討議の際に於ても、首相が今井博士其他に與へた飜弄的答辯の中にも、理窟なら學校で言へ、政治家として立つなら理窟を捏ねるものでないと云ふやうな態度があり〳〵と見えて居つた。政治を哲學と科學とから離し、全く行き當りバツタリで行くべき筈のものとする、他に類型のない、世界無比の畸形的政治家に向つて議論に筋の通る、通らざるを責むるのは無理かも知れない。それでも首相自身は解散斷行に對しては相當の理窟を捏ねて居る。人が理窟を捏ねる時には、ソレは屁理窟だといつて抑へて居る癖に自分丈けは勝手な理窟を捏ねると云ふ點に於ては、原首相も格別他の平凡なる政治家と色彩を異にするものではない。我々は固より斯う云ふ政治家の議論には初めから一文の値打も置かないから、忙しい時には讀みもしないでもいゝ事にして居るけれども、世の中には總理大臣の云つた事だからとて之を金科玉條と心得て居る人もあるさうだから、總選擧を眼の前に控へて居る今日の場合としては、之を全然不問に附する譯には行かない。いゝ加減の理窟を間違のない眞理だと盲信して選擧に臨まれることは國民の一人として我々之を默視することは出來ない。

尤も原内閣の大周章てに周章てゝ議會を解散したことは、誰が何と云はうと實際の理由は外にある。と云ふ風に考へて觀れば、爲でもいゝ解散を無理にしたのだから、表面を糊塗する解

散理由に筋の通らない所あるは當然である。併し政府では飽くまで普通選擧問題が解散の理由であるとし、今度の總選擧も亦之を主たる爭點として居るのだから之に對する國民の覺悟は追て他の機會に於て說くべきが如く、兎かく簡單なるを得ざるも、差當り、普選問題に對する立場を明白にすると云ふ事の第一の必要であることは云ふを俟たない。そこで原首相などの說明も自然我々國民の問題になる譯である。普選問題に對して我々國民は如何なる態度を採るべきやの點は從來本誌上に於ても屢々說いたから今繰り返して之を述べない。こゝには只原內閣の普選實行反對論、殊に解散の理由とする所について些か冷靜なる批判を試みよう。

原首相は內閣を代表して解散の理由を述べた事が屢々あるが、其中最も簡單にして要領を得たものは三月十八日地方長官會議の席上に於ける訓示である。之によつて觀ると普通選擧論に反對の理由、而して解散を以て普選運動に對抗した理由には大體次の四大項目がある。(一)昨年改正した許りで未だ一度も實行せざる憲法附屬の大切な法律を急遽改正せんとするは憲法政治の發達を期する所以にあらずとする事。(二)納稅資格撤廢の根本目的は階級制度打破にあり、從つて現代の社會組織を脅威する極めて危險なる趣旨に基く事、(三)普通選擧は國論なり輿論なりと云ふもそは決して健全なる多數國民の希望と認むべからず、一部煽動者の策略に出づるものなる事。(四)よし選擧權の擴張が所謂世界の大勢なりとするも、我國の國情は戰爭の直接參加によつて物質上精神上偉大の變化を受けた西洋諸國と同一に律すべからず、卽ち世界の大勢なりと云ふ單純な理由を以て我國の選擧法の改正を叫ぶは謬れる事。

原首相を初め政友會の幹部は昨年改正したばかりの選擧法を一度も實行せずして復た改正するのは朝令暮改も甚しいと云ふて、如何にも立憲の常道に反するやうにいひ觸らし、之と同じやうな考を洩らしたものは外にも隨分多い。成程朝令暮改は普通の場合に於て愼むべきであり、何等重大なる意味なくして、一年ソコ〳〵の中に二度も法律の改正を企つるは愼重の考慮を要するに相違ないが、併し之は絕對の原則ではない。本當に必要があるなら、二度でも三度でも度を重ねて改正して差支はない。要はたゞ普通の例を以て推すことの出來ない異常の必要があるか否かによつて決すべきである。而して普通選擧問題は此種の急迫の問題として唱へられて居るのに、之に反對するものが、實質的に之を論難するを避けて、朝令暮改は愼むべしと云ふ

ふ形式論一點張りで行くのは、之れ取りも直さず尾生梁を抱いて溺るの類ではあるまいか。假りに一歩を讓つて原首相の云ふが如く、斯く改正を屢々することが立法の威信に關し、國民をして憲政に不信を抱かしむる所以であるとしても、單に之れ丈けでは普通選擧論に反對するの有力なる理由とはならない。何故なればゞ之を主張するものは右の損害にも代へ難い急迫の必要を普選の施行の上に認めて居るからである。普選の施行が實質的に如何なる影響を政治の發達の上に有するやを見ずして、改正を屢々することが不可ないと云ふやうな形式論に隱るゝのは兎角我國の政治家の通弊であるが、之れ一つには彼等が公務の決裁に自已の責任を明かにするの膽略に乏しきの結果である。自分がいゝと信じてやることなら前例が何だらうが、因習が何だらうが、どん／＼決行して責任を一身に取るべきである。前例がどうだの、規則がどうだのと云ふのは責任を避ける、即ち確信のない政治家の爲す所である。

今日の普通選擧運動が階級打破の目的を有するから、いけないと云ふのは實に奇々妙々の議論である。原首相が普通選擧を主義として贊成するや否やは今度の訓示に於ては明瞭でない。只首相は選擧權の財産的制限は所謂國民政治思想の發達と共に低下に次ぐに低下を以てすべきもので、つひに全然納税資格を撤廢するの時期あるべきを豫想して居るから、或意味に於ては漸進的普通選擧論者と云つていゝ。只首相が斯うなるのがいゝと觀るのか、いゝわるいに拘らず斯うなるのが勢だと觀るのか、斯う云ふ肝腎な問題になると何時も曖昧を極めて居る。よく云へば老獪だが、わるく云へば蒙昧で、如何に學問と政治とを離して考て居る人とはいへ、よくも之で首相の役が勤まるものと我々は實に不思議に堪へない。何れにしても首相は右のやうな理由に基くものなら、又之を後年に期するものなら、必ずしも反對でないやうだから、其中時勢が變つたからとて、自ら普通選擧を提案するに至るかも知れない。悪意に解すればオツポルチユニストの面目を遺憾なく發揮して居る云ひ方であるが、それは暫く別問題として原首相は普通選擧には必ずしも反對ではないが、只今日の普通選擧提議には反對だと云ふやうだ。何故反對かと云へば第一が即時實行を主張する點に於て、第二は其目的其動機が階級打破にある點に於て、國家の爲めに宜しくないと云ふのである。

普通選擧の實施に關する漸進論と急進論との利害得失は既に論じ盡されたる問題であつて、學界の定論が殆んど排斥に一致して居る漸進論を改めて首相の口から聽いたとて我々は別に不思議とも思はない。只普通選擧運動と階級打破とを結び附け、現

在の社會組織を脅威する極めて危險なる者であると述べたのは、思想上何等の根據なき妄論ではあるが、一部の世人が毛蟲の如く怖れ嫌つて居る危險思想と結び附けて普選運動に對する反感を不當に挑發せんと試みたのは、政略としては或は其妙を得たものかも知れない。識者は固より其淺薄を笑ふだらうが、風聲鶴唳にも怖れ戰く輩が案外に所謂有力な階級に多いから、或意味に於ては之れ亦普選運動の氣勢を挫く有力な手段たり得るかも知れない。斯う觀れば普選運動と危險思想とを結び附けるのは議論ではなくして政略である。普選運動を卑下するに足るものなら何でも之を利用すると云ふ淺い考から出たものに相違なからう。●其議論に原首相は階級制度を大事がつて居る辯に「納稅資格三圓以上と云ふが如きは之を階級制度と觀ることすら既に適當なる見解にあらず」と云つてゐる。之を階級制度と觀るべからずとすれば納稅資格の撤廢は階級制度の打破でもなんでもない。而かも世上には階級制度の打破と云ふ事を蛇蝎の如く嫌つて居る少數の人もあるが、階級制度を打破せねばならぬと絕叫して居る多數の國民がある。階級制度の打破になるからいけないと云ふ原首相の論據は其儘取つて、其れだから普通選擧を早く實行せねばならぬとする多數國民の論據になる。階級打破と云ふことがいゝかわるいかを實質的に深く究めず、傍

の秘書官などから階級打破と云ふものはわるいものなさうだと聽いて直ぐ之を舞臺の上に持ち出したものではあるまいか。田舍者が時勢後れの着物を着て獨りハイカラがつて居るの觀なきを得ない。

第三に首相は普通選擧論を以て輿論の要求なりとする說を否定して居る。此問題の議會にあらはるゝや、「議院外に於て騷擾を醸し、或は議員に迫り或は議會を脅かし、善良なる國民を恐怖して以て其主張を貫徹するの形勢を作爲せんとする」ものあつた事は我々は之を認めて苦々しく思ふ。併し斯くの如き一部の不健全なる運動があつたからとて、直ちに普通選擧論を國民の輿論にあらずとするのは穩やかでない。尤も、之が輿論なり輿論にあらずと云ふ爭は、計數的に明白にし難い。●天下は欺くからず、輿論の歸嚮する所の何れにあるやは自ら定る所あるも、強いて異を樹て、之は輿論でないと云ふものがあつても、普通に之を論破する手段はない。原首相が普通選擧論を國論にあらずと云つたからとて之が間違だと明白に立證することも出來ないから、首相が此際「幸に多少の差によつて衆議院に此法案を否決し得たりとするも、其れのみにては此問題を解決して以て民心の安定を觀る所以の途にあらざるにより之を國民の公平なる判斷に訴ふるを以て憲政上適當の所置なりと認め、衆議院の

解散」を斷行したのは寧ろ我々に於て原内閣に多とすべきである。世間には今度の解散を非立憲だと罵るものもあるが、予輩は少くとも形の上では非立憲として責むべき點はないと信じて居る。尤も議會を解散した本當の動機の他にあると云ふ推測の下に於ては議論は自ら別になる。尤も原首相が反對黨の非立憲呼ばはりに對して他の機會に於て與へた答辯は我輩甚だ之に與みしない。首相は政友會の或會合の席上に於て、普通選擧論の果して國論なりや否やは今度の解散に於て之を明白に知るべき絶好の機會を與へられたのであるから、反對黨は寧ろ之を大いに喜ぶべき筈であるのに、却つて政府を非立憲なりと責むるのは不思議であると云うて居る。政府の解散の非立憲にあらざる所以を正面から堂々と説明せずして、敵黨の揚足を取るに止るのは餘りに首相の器に似合はしからざるのみならず、偶々以て理窟の如何に拘らず、自分に都合のいゝ事には喜ぶべき筈とする陋劣なる自家の心事を表白したものである。解散並びに總選擧が反對黨にとつて喜ぶべきであるとしても、理に於て許すべからざるものあらば非立憲として之を責むるのは當然である。只今度の解散は理に於て非立憲にあらず、又實際に於て反對黨の喜ぶ所でもない。此等の點を正々堂々と論破しない所に我々は大いなる遺憾と不滿とを首相に寄するものである。

終りに國情の相違を云々する首相の議論にも、著しき思想上の矛盾と淺薄とを暴露して居る。首相は歐洲の形勢を說いて「眞に國家の運命を賭して戰爭に從事すること五年、此間に於ける物質上の變化は勿論思想上の變化に至つても亦驚くべきものあり、故に戰勝を得たる國も戰敗したる國も、之を戰前に比すれば其國情に於て雲泥の相違あり」と云ひ、更に我國に就ては「戰爭に參加し直接間接に戰爭の爲めに物質上及び精神上に變化を觀たりと云ふと雖も、決して彼國に於けるが如き狀態にあるものにあらず」と云ふはいゝ。此前提から來る結論は、我々の立場からすれば、だから我々は一層緊張して、西洋が血を流して購ひ得たものを、十分に收得するの心掛けが肝要だと云ふ事にならなければならない。然るに原首相の結論は「之を同視して以て我國を律せんとするが如きは謬れるの甚しきもの」とし、「國內の紛爭に沒頭する」を言を極めて戒めて居る。即ち一切の改造、一切の革正を手控へて、今までの方針で着實にやつて行けと云ふのである。我々は西洋諸國が血の洗禮によつて平時に想像することの出來ないやうな大飛躍をした、今まだ十分に整頓をされてゐないが、從來の面目を一新し、新文明の途上に活潑なる步武を進めつゝあることを疑はないので、直接戰爭に參加しなかつた我國が、爲めに今尚ボンヤリして居るのを

觀て非常に心配して居るのであるが、原首相などは恐らく、西洋諸國は五年間の戰爭の爲めに非常に混亂して居る、混亂して居るからいろ／＼な問題も起る、我々は國狀も違ふから斯くの如き問題を我國に論議するの必要がない、今までの通りの流儀で平凡にやつて行つていゝと考へるのであらう。戰爭の終結に伴ふ所謂不安動搖を困憊の結果としての自暴自棄的紛雜と見るか、或は一大鐵槌に目醒めたる新文明の產みの苦しみと觀るか、卽ち此兩樣の觀方の相違が、我々と原首相などゝの考の相違かも知れないが、それでも原首相に確たる理論上の根據があつて其見識を極めらるゝたらいゝ。只漠然國狀の相違だの何だの外形的の差別をば無反省に自分の立場の辯護に利用されては困る。

之を要するに我々の觀る所からすれば、原首相の普通選擧反對論は理論的攻究の結論ではなくして、彼の政略の第一前提である。理論は只其政略を掩ふ所の極めて粗末なる着物たるに過ぎない。筋の通らないのは當然の話である。之を筋の通つたものとして論ずる丈けが野暮の骨頂であるが、只世間には首相の言なるが故に之を輕信して、此重大なる總選擧の場合に去就を過るものあらんかを恐れて一言辯駁を試みたまでゞある。

予は段々と原首相の議論を非難したが、併し之は何も原內閣と政友會とを罵倒する爲めの趣意ではない。甲黨を揚げて乙黨を罵ると云ふやうな事は我々の常に眼中に置かざる所、我々は只甲黨であれ乙黨であれ、兎に角政治の議論には筋道が通ればいゝと考へて居るのみである。筋道の通らない話は、教室の問題なら落第點を附ける丈けで濟む話であるが、政治の事になると兎角暗黑が附き纏ふ。明るみへ出せないいろ／＼の汚ないものが伏在すればこそ、話に筋が通らないのである。我々の恐れるのは筋の通らない事其れ自身よりも寧ろいろ／＼の暗黑の伏在することゝである。此意味に於て予輩は何も證據があつていふのではないが、國民の一人として政友會と原內閣と並びに原首相其人をも信賴する能はざることを斷言するを憚らない。といつて他の政黨と他の政治家との間に信賴に値するものが少しでもあると云ふ意味でない事は勿論である。

そこで今日我國の政界の狀態では、裏には裏があるのだから其言論に筋の通らないのは當然の事になつて居る。誠に慨はしいが致方がない。けれども斯くては國民の一人として誠に堪へ難いから、我々は白々しい嘘と知りつゝ、之をまともの話と請取つて無理にも政治上の言論に筋道をつけたいと思ふ。筋道の通らない話を無理に筋道の通つたものとして解釋し、其解釋の

結論を假導に向つて強制すると云ふのが、政治に對する國民的監督のせめてもの手段であると信じて居る。いはゞ嘘から誠を引出さうと云ふのである。原首相の訓示を態々批評したのも畢竟此趣意に外ならない。

原首相の訓示は前申す通り議論としてはなつて居ないが、只議會の多數黨を率ゐながら解散を斷行したと云ふ事夫れ自身は反對黨の動もすれば難ずるが如く必ずしも非立憲ではない。立憲政治の先進國を以て居る英國でも斯う云ふ例は絶無ではない。只反對黨が之を非立憲と罵るなら、國民は之を罵るものに常に立憲的に行動することを要請するの權利あることを認めなければならない。之と同じく政友會内閣が今度の解散を非立憲でないと主張するなら、解散に伴ふ總選擧は斷じて立憲的に之を施行すべきであることを要求しなければならない。忠良なる國民の判斷を求むる爲めに解散をしたのが決して非立憲でないと云ふ其舌の根の乾かぬ中、幾多不正の競爭を風評するものあらば、我々國民は大いに之を責めなければならない。

終りに予は今度の解散並びに選擧に關して各政黨に對する態度を一言して置きたい。予の此論文は原首相並びに其與黨に向つて相當に強い非難を加へて居る所から、時節柄政友會反對の政治的色彩を推定されるかも知れない。けれども予輩は特に政友會に反感を有するものでない。況んや、他の政黨に向つて特別の好意を有するものでない事は勿論である。一言にしていはゞ今日の政黨にはすべて同情を有つことが出來ない。故に政友會に代ふるに憲政會や國民黨を以てするの特別の必要を認むるものでないから、或一部の人の如く原内閣を一日も存在せしむべからずなどゝ云ふ運動には加はれない。今度の解散は普通選擧問題によつて起つたのだから、立憲の常道からいへば專ら此問題に對する賛否の意見によつて何黨に投票すべきかを決すべきであるけれども、前にも述ぶる通り、我國の政界は西洋諸國の如く簡單明白な政見の爭ではない。表面の一皮を剝けば其下にはいろ／＼の暗礁がある。之を如何に始末するかと云ふ事が又重大な問題であつて、普選問題も之の解決をつける重大な要素には相違ないが、併し斯う云ふ表面の問題を唯一の主題として政權を爭ふべく我國の政界は餘りに複雜して居る。そこで總選擧の場合でも、普通選擧の施行と云ふ事丈けを眼中に置いて去就を決することは出來ない。元老に關する關係は如何、軍閥財閥に對する關係は如何、其他いろ／＼の裏面的諸關係を考慮の中に入れて其上で何黨を擧ぐることが、一番よく今日の政局の進展を期することが出來るかを愼重に考へなければならない。斯

ら考へると政友會内閣を倒して果して其後によりよき内閣を作り得るか否かも問題となる。故に予は施政の謬つた點、議論の筋の通らない點には假借する所なく非難の鋒先を向けるけれども、それが必ずしも政友會内閣の即時的倒壞を希望する意味でない事はいふまでもない。

さうかと云つて今の政友會を其儘選擧に勝たして安心だと云ふ意味では勿論ない。政友會が駄目なら他の政黨はどうかと云へば之も駄目だ。斯くてあれも駄目、これも駄目と云ふ事になれば、結局我々國民の選擧に對する態度は何處に極めていゝかと云ふに、姑く黨別を超越して「人」に着眼するの外はないと云ふ事になる。一個の人格として信頼するに足るや否やを先づ觀る。政友會たると憲政會たるとは姑く問はない。之によつて先づ政黨其物の廓淸を計るのが肝要であるからである。信頼に値する人が二人も三人もあつた上で初めて自己の政見と合する人を選むべきである。政見を後にすると云ふ事は立憲の常道ではないけれども、今日の我國に於ては之も亦致方がない。

獨逸反動革命の觀察

三月央、獨逸の平民政府が保守派乃至帝政派の反動革命によつて顚覆を餘儀なくされたといふ報道は、前々から社會黨内閣の失政と之に對する國民的不安の風評が高かつたとは云へ、少からず我々を驚かした。我國に於ても、急進的傾向を取る者は、爲めに多大の失望を感じ、之に反して反動的傾向を取る者は密かに意外の痛快を感じたやうに見えた。併し乍ら、パウエル内閣に代つてカップ内閣の出來たといふ事は、果して獨逸社會主義（必ずしも社會黨と言はず）の失政と云ふ事が出來るか。或は保守的帝政派の潛勢力の偉大なる事を證明することが出來ると云ふ事が出來るか。果せる哉此反動革命は週日を出でずして失敗に終つたらしい。其所謂成功の日と雖も、新政府の威力の及ぶ所は僅かに伯林の附近に止るやうであるが、何れにして我々は未だ獨逸の共和制の基礎を左程薄弱なりと觀ることは出來ないやうだ。保守派帝政派の勢力も素よりまだ十分に侮り難いには相違ない。されぱと云つて今後の獨逸が事に依ると帝政派の乘つ取る所となるべしとまでは考へられない。今度の反動革命が皇帝引渡問題によつて激成せられたる民心の興奮によると云ふも、斯う云ふ傾向が彼等の考の主たる流をなすものと觀るのは恐らく事實ではあるまい。

反動革命の行きさつは之から段々詳細の報道が新聞にあらは

るゝにつれて、明かになるであらう。今の所まだ破道が斷片的で纏つた觀察を下すことが出來ないけれども、只大體の輪郭丈けから云ふなら、近世歷史上にあらはれた定型と著しく異るものではないやうだ。近世の政治的諸革命は殆んど符節を合するが如く次の五つの階段から成つて居る。各階段の時期に長短の別はある。長かれ短かゝれ、之れ丈けの階段を經て結局革命が其趣旨を貫くに至ることは同じである。(全然失敗に歸したものは別として)第一は新精神勃興時代である。姑く佛蘭西大革命を例にとつて云ふなら、十八世紀の後半、ヴォルテール、ルソー、モンテスキユーなどの活躍した時代は即ち之れである。古き桎梏の下に苦みながらも、民衆に希望を抱かしめ、踴躍止む能はさる熱情を感ぜしめたのは即ち此時代である。革命の力はこゝに養はれた。第二は舊物破壞時代である。新精神に燃えた民衆の熱情は遂に爆發した。只勢の趨く所其止るべき所に止ること能はずして極端に流るゝことを常とする。斯くして淸粹純眞な革命家は往々にして排けられて、燥急狂暴の彌次馬が跋扈する。其結果は實は當初の理想に悖り、所謂革命の効果は革命の精神に裏切ることゝなる。そこで當然に第三の失望時代が來らざるを得ない。失望するものは啻に穩健な識者ばかりではない。燥急狂暴の煽動家に雷同した民衆彼自身も亦實物教訓の前に遂に頭を垂れて彼等自身の先途に怨嗟の情を寄するやうになる。社會はやがて亂雜に厭きて秩序を思ふ。而して新しき試みに失敗した多數平凡の徒の常に陷る所は舊い經驗に逆戻りすることである。更に第二第三の新しき試みに苦心する少數者もないではないが、多くの場合に於て彼等は容れられない。斯くて一時現實に失望した民衆は昔時壓制の苦痛を忘れて舊き經驗に未練の情を寄する。茲に反動政治家は乘ずべき絕好の機會を見出すのである。此第二第三の時代は千七百九十三、四年より九十八九年頃の佛蘭西の狀態が最も鮮かに示して居る所のものである。さうして其次に來るものは第四反動時代であることは云ふを俟たない。新しき試みに失敗した佛蘭西の民衆は千七百九十年前後、あれ程突飛な改革を斷行してより未だ十年ならずして、絕代の專制君主那翁一世を迎へたではないか。彼の專制政治に謳歌すること十有餘年、其外勢によつて沒落を餘儀なくさるゝや彼等の更に迎へたものはルイ十八世である。反動時代の繼續斯くも長きに亘れるは、考へて觀れば不思議と云はざるを得ない。只此時に當つて我々の特に注意せざるべからざるは、如何に失望の極、復古的精神を旺ならしめたとはいへ、此時代の民衆は革命以前の民衆にあらず、兎も角も一度新しき風潮の中に呼吸したものであると云ふ事である。故に彼等は意識的には舊

改の復活を計つても、無意識的に自らその間何等かの新味を加へざるを得なかつた。こゝに今然舊きものに滿足することの出來ないと云ふ新時代の精神の伏在するを認めなければならない。否、復古的風潮は一時の反動的現象に過ぎずして、彼等はまた早晩純乎たる新精神に覺醒せざるを得ない。是に於て最後に來るものは整理時代である。卽ち一旦舊制にたよつた事の結果、出來上つた諸々の關係を新らしき精神に合するやうに整理すると云ふ時代である。而して反動時代に於て再び時を得た特權階級が容易に新精神に順應するを拒む時に、整理時代は往々にしてまた革命の形を取ることがある。佛蘭西の七月革命、二月革命の如きは畢竟此意味のものに外ならない。斯くして漸く革命の効は兆緒に就き、更に改むべきもの戰ふべきものゝ數多く存することは云ふ迄もないが、先づ新しき精神が新しき時代を築き上げつゝ順當に其步武を進めると云ふ事になる。之れ丈けの順序を踏み損つて革命に其効を全うせず、國家社會も支離滅裂ならしめたものもないではないが、今日文化を以て鳴つて居る國の多數は先づ此れ丈けの順序を經て居ると丈けは疑を容れない。

斯う云ふ型を標本として獨逸今次の反動革命を觀察すると、我々は其由來を研め、其將來を忖度するに多少諒解する所あるを思ふ。講和以前一兩年間の思想動搖は、他の交戰國に於けると同じく、新精神勃興時代と觀ることが出來る。只舊物破壞時代が他の國に於けるが如く著しくないのと、又長くないのとが獨逸の特色で、從つて失望時代も普通の例に觀るが如く深刻ではないやうだが、最近社會黨政府の施政に對する不滿の聲や、部隊を通じて秩序弛緩し、民衆が生活上著しく不安を感ずるに至つた事なぞを觀れば、矢張り程度を異にするの差はあれ、此二つの時代が矢張りこゝにもあらはれたと云はなければならない。して見れば反動時代の來るのは當然であつて、それは強ち帝政派が兼々此陰謀をたくらんで居つたとか、前獨逸皇帝が遙かにアーメロンゲンから糸を引いて居つたとか、皇帝引渡問題について民衆の敵愾心が一時に激發したとか云ふ事のみに依るものと云ふ事は出來ない。けれども第二第三の時代がそれ程深刻なものでなかつた丈け、第四の反動時代も左程の働きを見せないで忽ち屏息するに至つたのも亦怪むに足らない。して見ればこからの獨逸はこゝに初めて整理時代に入つたもので前途如何になるやは略ぼ之を想像するに難くないやうな氣がする。

斯く考へて觀ると獨逸革命の經過は只其中間に位する各時期の長短の差こそあれ、大體の形は普通の定型に著しく異るものではないと云つていゝ。

以上の觀察にして誤なしとせば、我々は第一、革命後最近までの社會黨政府に失政の非難あり、又民間に不平の聲が高かつたとしても、之は革命の進行に通有の現象にして、寧ろ當然の話と云つていゝ事である。之によつて獨逸の社會黨が駄目だの、獨逸の革命は結局失敗に畢るだの、又は獨逸の民衆が決して革命を悦ぶものでないなどゝ觀るのは恐らく謬りであらう。獨逸の社會黨政府に眞に許すべからざる失態ありしや否やは別問題として、兎角斯う云ふ新しい時代には、第二流第三流の瀰次馬が飛び出して一旦事を謬るを常とし、否らざるも兎角世間の非難を蒙り勝ちなものである。第二に注意すべきことは獨逸革命後の經過が他の革命の場合に比し極めて穩健なる進行を見た事である。之れ畢竟過去の政狀が他國の如く酷烈でなかつた結果であらう。帝政時代の獨逸は其形式を專制にして實際可なり民主的なものであつた。治者階級の誠實と民衆の訓練が革命的混亂の時期を斯くも短縮するものであると云ふ事は我々の大いに注意を要する點であると思ふ。第三に獨逸に今日尙所謂帝政派の勢力が相當に强いからとて其優勢を過信してはいけないと云ふ事である。革命はいはゞ大洪水のやうなもので一切の舊いものを掃蕩するとはいひながら、何所の國でも舊勢力の殘黨が相當永い間社會の煩を爲したものである。殊に獨逸の革命は頗る穩やかに行はれた丈け、舊勢力は殆んど其儘存在を許されて居る。佛蘭西が那翁三世の帝政に終りを告げしめた時、新しき議會を作るべく選ばれた議員の三分の二は王黨であつた。而かも時勢の要求は終に共和政體として結局固まらざるを得なかつた。我國などゝ國情を異にする西洋に於ては、蓋し當然の事であらう。何れにしても所謂舊勢力は畢竟するに舊勢力に過ぎない。之が一時反動の潮流に乘じて頭を擡げるのは歷史上から觀て當然の話であつて、之によつて新時代に於ける彼等の復活と權力とを想像するならば大いなる謬りであらう。先頃予は獨逸の友人から手紙を貰つた。彼はもとプロシヤの士官で生粹の帝政派である。而かも彼は書面の中に革命後の獨逸に軍事視察の爲め多數の軍人を派遣する日本政府の時代錯誤を罵倒して居つた。之によつて觀ても獨逸の落ちつく先が分る。

之を好むと好まざるとに拘らず、今や新らしき時代の舞臺は鮮かに吾人の眼前に展開しつゝある。劇中の小波瀾に眩惑して、大勢の進行を看謬つてはならない。

デモクラシイの史的發展の觀方について

佛蘭西革命を中心とする十八世紀末の革命運動は所謂中產階級の自由平等を建てたに止り、下層勞働階級と婦人とを閑却した。從つて之は本當のデモクラシイの運動ではないと云ふ人がある。甚しきは貴族僧侶の特權と財產とを奪ひ取つた中產階級が、自分の階級の利益の爲めに、勞働者や貧民を搾取することが、當時デモクラシイの假面を被つて橫行したと罵る人がある。之は或意味に於て正しい。併しながら之を以て佛蘭西革命を動かした所の此時代の根本精神を不純なり醜惡なりと罵る人があるならば、大いなる誤りである。

第一に考へねばならぬ事は此時代の識者が下層階級と婦人とを閑却したのは、今日の我々の考から云へば無論正しくはないが、此當時の社會狀態並びに通有の思想から云へば恕すべき點がある。何となれば下層階級の人も婦人も社會生活並びに經濟生活の上に於て、當時未だ獨立の單位たるを得なかつたからである。貴族僧侶のみの社會の表面に跋扈することが當時激しく非難された事は云ふ迄もないが、之を非難して同じく獨立の地步を主張した中產階級は、下層階級と婦人をば自己の保護の下に自己に從屬するものと視て怪まなかつた。斯く觀られたもの自身と雖も之に對して甚しき不平はなかつた。若しあつたとしたならばそは極めて少數の部類である。少くとも此時代は下層階級や婦人の之から段々自覺し初むることになる端緒の時代であつて、此點は今日の時勢とは大いに違ふ。成程理論上に於ては人權宣言などにあらはれて居るやうにすべての人の自由平等を宣言したけれども、下層階級と婦人との事實自覺しない且つ社會的に經濟的に從屬的地位に甘んじて居つた時代に於ては、中產階級の人のみが、活動の表面に立つことは自然の順序である。故に當時の思想から云へば、婦人と下層階級とは各々據り賴む所あり、從つて中產階級の人の叫ぶ自由平等は、彼等階級の自由平等のみならず、彼等の代表する下層階級並びに婦人の自由平等をも叫ぶものであると云はなければならない。少くとも當時の社會的單位の全部の自由平等を唱ふるものであつて、其精神に於て決して不純なる階級的利害に動かされたと觀るべきものではない。少くとも斯く觀ねばならぬとする者は正當ではない。萬民に參政權を認むべしと云ふ抽象的議論と、兒童には此權利を認めなくとも親に之を與へたゞけで十分なり

とする實際の制度との間に我々何の矛盾を感ぜざるが如く、當時の中産階級は自分達の階級の手に實權を握ることは、即ち萬民の爲めに實權を握ることだと考へて居つた。當時の人が下層階級と婦人とを閑却したからとて、直ちに其動機を不純なりとするのは昔と今との時勢の變を知らざるの議論である。

尤も革命運動者の中に自己の階級の爲めと云ふ不純な動機に動いたものゝあることは爭はない。否、革命運動者の多數は或は斯う云ふものであつたかも知れない。事物を皮相的に觀れば、眼に觸るゝ所只此醜穢なる一面丈けであるが、併し之れ丈けなら佛蘭西革命は決してあれ丈けの大事業を爲し得る道理はない。其陰に潜む根本の精神に實に高貴なるもののあるを認めねばならぬと云ふのが予輩の持論である。此高貴なる根本精神が革命を起した原動力であると同時に、又實際的革命運動の峻嚴なる批判者でもある。少しく不純な動機で動くものがあると、之を不可なりとして更に此所に第二の爭闘を現出せしむるも亦此根本精神が活躍して居るではないか。人はすべて攻者の地位にある時には比較的純な動機に動くけれども、一旦被攻者の地位に代ると、其地位を守らんが爲めにいろ〳〵不純な考を抱くやうになるものである。佛蘭西革命を爲し遂げた中産階級も亦此例に洩れない。其初めは相當に純な動機に動いたと思ふのであるけれども、やがて彼等は不純な目的の爲めに浮身を窶すやうになつた。そこで彼等の所謂デモクラシイは餘程怪しいものになつて來るが、之を怪しと觀る精神が即ち革命を指導した根本の精神ではないか。所謂革命の趣旨が一旦の成功と共に段々墮落し初めるのを觀て、當初の革命其物の精神まで之を疑ふものあるけれども、それは歴史の正しい觀方ではない。初めから彼等の動機が不純なものであるなら、何所から後に彼等の立場を非とする所の精神的活動が生れ得るか。我々は現實の人にはいろ〳〵の變遷あることを認める。けれども此等の人を起たしめた精神は後に此等の人を非難する所の精神であつて、此精神の一貫があればこそ社會は段々と清められ段々と進歩するものであると考へる。

故に予輩は佛蘭西革命當初の精神を決して不純なものとは認めない。當時の中産階級が下層階級と婦人とを閑却したと云ふ事實をも之を諒とする。只當時は恰度時勢の遷り變り目で個々の解放若くは自覺と云ふ事は單に中産階級特有の現象ではない。やがては下層階級も亦中産階級に倣つて同じ道を踏み上る、更に後れては婦人も亦自覺し初める。而して此自覺は革命の當初中産階級が取つたやうな態度を下層階級と婦人とをして取らしめなければならない。斯うなると此等のものにも社會的

單位たるの地位を與へねばならぬ實際の必要が起る。時勢の變が貴族僧侶階級の特權を打破して、中產階級の自由を認めたと同じく、又新たなる時勢の變は、下層階級と婦人との自由をも認めなければならない。佛蘭西革命當初の精神は卽ち十九世紀初頭に至つて儼として之を要求するのに、當時の中產階級は惜しい哉、十八世紀末の貴族僧侶と同じ謬想に陷つた。貴族僧侶が時勢に逆行して中產階級の自由を承認せざらんとした如く、十九世紀初頭の中產階級は又下層階級と婦人、殊に勞働階級に對して頑迷なる態度を取つた。茲に所謂憎むべき資本主義の惡影響が十九世紀全體を汚すことになる。斯くして一派の論者は十九世紀を通じてデモクラシイの精神が何所に動いたかと云ふのであるけれども、併し十九世紀を通じて本當のデモクラシイの精神が動いてゐなかつたとしたなら、資本主義に對する絕えざる非難と絕えざる反抗と、而して之を顚倒することによつてよりよき世界を造らんとする絕えざる努力とは何所から來たと觀るべきか。初めデモクラシイの運動の擔當者であつた中產階級が後に資本主義の傀儡となつたからとて彼等の當初の誠實を疑ふのは謬りである。彼等を動かした最初の精神の純粹を否認せんとするのは以ての外の誤りである。斯くして予輩は佛蘭西革命當初の精神には飽くまでも敬意を拂ふ。只非難すべきは初め忠實であつた中產階級が、後に時勢の變に應じて更に新しき局面にデモクラシイの精神の徹底を妨げた事である。

デモクラシイの精神は時勢の變に應じて夫れ〳〵其發展の態樣を異にする。差別に執着すれば一見彼此相容れざるが如きものもあるけれども、一皮剝いで奧の精神に立つて觀れば、等しく之れ皆同じ思想の流れであると觀なければならない。佛蘭西革命の當初中產階級の手に實權を奪ふと云ふ事がデモクラシイの精神であつた時代もあるが、選擧權の擴張によつて中產階級の特權を打破せんとすることがデモクラシイの運動であつた時代もある。之れ皆同じ精神の流れであつて、此等の複雜なる事象の陰には同一精神の一貫を認めねばならぬのであるが、若し外部の形式に囚へられて中產階級の自由の爲めの運動がデモクラシイだとすれば、次の時代には之が虛僞のデモクラシイとなる。之を虛僞と批判して起つた選擧權擴張の運動や或は經濟生活に於ける解放の運動の如きもやがて又僞のデモクラシイとなるの日なきを必し得ない。此點に於て予輩はデモクラシイを分つて政治的、社會的、經濟的などゝするの說き方には多少の便利を認むるに拘らず、重大なる誤謬に陷るの虞れあるものとして之を取らない。

以上の點は細目に亙つて尙說くべき多くのものがあり、殊に實際の歷史について一々其例證を求めることが正當な理解を得る爲めに極めて必要であると思ふけれども、餘り講釋めくから今は略する。偶々虛僞のデモクラシイと眞正のデモクラシイとの區別並びに關係、各種のデモクラシイの歷史的連絡と云ふやうな問題について二三の誌友から熱心な質問を受けたので、玆に簡單に要點丈けをお答して置くのである。

小題小言四則

●**人道主義的政治思想の難點？** 新人會の機關「先驅」は淸新の氣に充ち、讀むべきもの頗る多いのに豫々敬服して居る。其三月號に於て赤松法學士が予が本誌新年號に掲げた「國家生活の一新」に對して叮嚀な批評を試みられた事は深く感謝する所である。同君の識見と熱情とは最もよく新人會の精神を代表するものとして予の豫々敬服する所、從つて大體に於て同君の立場にも同感の意を表するを辭せない。只予の論旨に對する同君の非難の中、次の二つの點に於ては遺憾ながら承服することが出來ない。第一は佛蘭西革命の精神に關する解釋の點である。此點は偶々前段に掲げた「デモクラシイの史的發展」に關する小篇が恰度同君に對する答辯となり得ると思ふから玆には略する。第二は社會現象乃至政治現象の考察に於ける君の所謂經濟的要素の地位に關する問題である。君は自ら人道主義者を以て任じ、又新理想主義の立場に居ると稱せられ、而して更に經濟現象を最も無視すると說かれて居る。經濟現象の重視が新理想主義の立場と必ずしも相容れないものではないが、君の所謂經濟生活に關する考は果して嚴密に新理想主義の系統の中に安定し得るや否やを疑ふものである。君が「法律や習慣に於て我々が正義人道を高調しても、經濟生活に直接の效驗の及ばない場合に結局其社會生活は空虛である」と云ふ。此言ひあらはし方は法律、習慣に於ける正義人道の高調は、經濟生活に何等の效驗がないと斷定するものとは限らないけれども、若し彼と此との間に互に相影響する關係があるとものとする立場を取るなら、君の立場は即ち予輩の立場である。然るに君が此點に於て予輩の見解に不滿であるとせらるゝなら、君は即ち外の方でどんなに正義人道を叫んでも、經濟生活には何の係はりもないから駄目だと云ふ立場を取るものと云はざるを得ない。更に又君は云ふ、「我々が經濟生活に於て完全に正義を實行し得てこそ我々の人格は初めて完全に解放さるゝので

ある」と云ふて居る。經濟生活さへ整へば人格の全體としての解放が全うされると云ふのか、且つ又經濟生活に於ける正義の完全なる實行は他の方面の事と關係なく、獨立に成就し得るものと考へて居るのか承りたい。さうでないと云ふなら君の立場は即ち予輩の立場と異るものではない。若し違ふと云ふなら前の例に於てもあらはれて居るが如く、君は少くとも經濟生活と云ふものを他の生活關係と分離して、孤立的に考へて居らるゝのではあるまいか。問題は所謂經濟生活なるものは抽象的概念に止り、具體的には他の生活關係と分離することの出來ないものと觀るか否か、從つて又經濟生活はそれのみが他と無關係に單獨の進步發展を遂げ得るものと見るかどうか。赤松君が我輩と立場を異にすると云ふ以上、君の立場は即ち經濟生活の孤立的存在を主張する立場でなければならない。之は唯物的人生觀とどれだけの距りがあるか。而して之は又新理想主義の立場と一致することが出來るかどうか。併し段々論じ詰めて行つたら恐らく君の立場は即ち予輩の立場と著しく異るものではなく、只いひあらはし方の差が、精々右から觀ると左から觀るとの差位のものであるかも知れたい。

◉評論界の惡傾向

人の說を批評する時には、書いたものに拘泥して、あゝ云つたら斯うなると形式的に固定的に批判する癖に、自分の說が他から批判されると、書いた時の氣分を基礎にして、あれから之と內面的に厭くまで發展させて辯護すると云ふのが普通の人の傾向のやうだ。何か意見を發表するとしても、斷片的に氣紛れに書いたものは固より論ずるに足らないが、兎も角眞面目に一個の說として發表したものである以上、其說は單に紙の上にあらはれたのみでなく、根本の精神と云ふものが無くてはならない。それをあらはすには論理上の形式や、其他いろ〳〵の約束があつて完全にあらはすと云ふ事は餘程困難であるから、表面の缺點によつて直ちに其說の價値を批判するのは正しい方法ではない。又完全な表現の頗る困難なものである以上、他の批判は即ち我が蒙を啓く所以であつて何も牽强附會の辯を弄して自己の過ちを隱す必要もない。思想界の論戰には自他共に無用の無理を通すと云ふ事が往々にしてある。自分が何所までも正しいと無理を通すは勿論いけないが、他人の說を何處までも正しくないと無理を通すのは醜陋である。要するに他人の說でも之を固定的に觀てはいけない。紙にあらはれた所によつて、其奧に潛む其人の根本的立場を求め、之を基として其人の思想の系統を內面的に發展させて初めて正當なる價値判斷を得らるべきである。斯くして初めて評論は思想の進步の上に意義がある。

◎道德的判斷と法律的判斷

道德と法律とは其理想的意義に於ては全然相容るべきものであるかも知れないが、實際の社會的規範としては必ずしも兩立するものでない。之を兩立するものと考ふるのは理想と現實とを混同するものである。兩立せざることについての原因はいろ〳〵あるが、其一つの肝要なる點は道德的判斷は判斷の對象物を全體として觀るに反し、法律は主として之を箇々の行動について判斷するからである。平素どんなに正直であつたものでも、出來心で人の物を盜めば法律は之に竊盜の罪名を課するに躊躇しないが、道德は只一度の過失によつて其人の全生涯を非議することを敢てしない。斯く法律と道德とは同一對象物の價値判斷について時々相容れないものであるが、併し之を相容れざるがまゝに放任するのが道德法律の理想ではない。政治は即ち之を出來る丈け一致させる役目を取るもので、例へば彼の刑事政策とか、或は法律の自由解釋と云ふが如きは畢竟斯くの如き政治的必要によつて生れたものである。而して今日の政治學は兩者の究極に於ける一致を理想とする政策樹立の方針として、法律を出來る丈け道德の要求に從はしむるやうにして居るのであるが、一部の偏狹なる社會には道德の方を法律に從はしめんとするものがある。其最も極端なるものが、國家あつて初めて道德ありとする彼の所謂國家至上主義であるが、之ほど道德を奴隷的に取扱はないものでも、法の禁ずる所は道德的價値判斷の如何に拘らず、假借する所なく之を罰すべしとする法律萬能論である。即ち道德的價値判斷の結論に顧慮すべしとする政策的根本方針を省みないのである。さう云ふ所から近頃偶々何かの法條に觸れたからとて――甚しきは彼の治安警察法第十七條とか、新聞紙の出版法の彼此の箇條のやうな惡法に悖つたからとて、社會の多大なる尊敬を受けて居る人が、意外にも法律上の罪人となると云ふ奇妙な現象を頻出する。之れ果して喜ぶべき現象であらうか。尤も偏狹なる論者は斯くして初めて社會の安寧を保ち得べしと云ふかも知れない。けれども斯くの如き遣り方が生む所の當然の結果は、第一に法律的判斷に對する疑惑と不信とであり、第二に法律と道德との隔離であり、第三に遂に法律道德其れ〳〵方面を異にするにつれて國民の生活を分立せしむることである。之れこそ眞に憂ふべき現象ではないか。予輩は此點に於て警務官憲と檢察機關との特別なる反省を求める。

◎對手方の言ひ分

或人は當節を混亂の世と云ふ。成程問題が頗る多い。多いと云ふよりも險惡と云ふ方が特色であるかも知れない。問題が多いからとて又問題が險惡であるからとて放任して置く譯には行かない。放任して置くのは

ゝ。其解決が適當を缺くことになると世の中は益々混亂する許りである。然るに今日の問題解決方法に於て我々の最も遺憾に堪へないのは、對手方に十分なる發言の機會を許さない事である。よしんば發言さしても其言ひ分に何等の道理を認めざらんとする事である。支那問題、朝鮮問題の解決に此點が最も露骨を極めて居る。勞働問題についても勞働者の言ひ分に曾て道理の認められた事があるか。そこで心あるものは此等壓倒せられて居るものゝ爲めに代辯者たらんとして飛び出す。飛び出すものゝ中には、單に虐げられたるものに對する同情から起るものばかりではない。斯くすることが眞に社會の爲め國家の爲めだと思ふものもある。けれども此等のもの少しく辯ずれば忽ち危險思想と目せられ、外來思想に心醉したものと罵らるゝ。斯くては問題は永久に解決しない。どの道對手方の言ひ分にも相當の理由があるに相違ない。殊に支那朝鮮の問題や勞働問題などについては政府並びに資本家の過去の失態が紛亂の主たる原因であらう。之を少しく明るみへ出すと國辱をさらすものなどゝ罵るやうでは駄目だ。今日の時勢は臭いものに蓋かし切れない。し切れないものを、なし得たと安んずるならば、之れ我國の愚を世界に曝らすもので、之れほどの國辱はない。政府も資本家も亦國民も內外各方面の問題につきもつと相手方の言ひ分に傾聽する雅量を養ふことが必要である。



思潮

中澤臨川

時事拾得

田園工業

農村に於ける手工藝の普及を計る爲めに、山本鼎氏が近頃信州の某地で創められたといふ試みは、私の考では、非常に有意義の事柄である。氏の發意は主として藝術的見地からであらうと察するが、一般勞働問題の解決に惱みつゝある時代、殊に「歸農運動（バツク、ツーゼランド）」の喧ましい今日、それはもつと適切通俗な經世的の立場からも考へて見なければならない問題であらうと思ふ。

「勞働」に對する今後の對策としては、現に世間で稱へられてなるところの産業自治、報酬增加、時間短縮などは最も緊要な方法である。併し新制度のもとに於ても矢張今日の大規模な都市集中的工業が經營され、その結果極端な分業制度が依然として持續されるならば、それだけでは未だ勞働の改善は十分に望むべくもない。所謂勞働の「苦痛」はもつと他（ほか）の方法によつて剪りつめられねばならない。

その方法としては、極端で不自然な分業に代へるに、或る程度まで完業と混業とを奬勵することが肝要である。この事に就ては私は他の場合に詳説して置いたので、玆にはそれを反覆すまい。勿論社會の發達につれて益々分業が必要となるのは分りきつた事であつて、自然的でそして自發的な分業が社會組織の有機的ソリダリテとしてその成員相互を親密に結び附ける肝腎の楔であることは疑ふべからざる事實である。併し現代に行はれる極端な分業が、之に從事する勞働者の願望に何等の顧慮なく、多くの場合强制を意味する如きは甚だ好ましからざることである。そこで勞働の理想として、一方に於ては成るべく一の製品を作り上げるまでの各工程に一人の職人を携はらせることと、即ち分業に對する完業が唱道され、他の一方に於ては、一人の勞働者が一生涯同一の狹い職業を以て押し通す不愉快に對して混業――殊に農工混業――の方法が唱道される。然るに今の社會に於て、完業即ち手工産業の容れられる餘地のあり、

つ理想に近い農業の行はれうべき天地は、田園に於ける工業を措いてはほかにない。かやうな意味のもとに私は田園工業の奬勵を欲するものである。

更に他の一面から觀察するに、近代に於ける大規模産業の結果は、都市に多くの人口を集中せしめて田園の荒廢を招いた。都市と田園との間には次第に反目的の溝渠を生じた。都市生活が憧憬の的となる一方には農業輕侮の思想を促進せしめた。かやうな傾向がどの點から見ても望ましからざることは說明を要するまでもない。

猶ほもう一つ努ふべき事が我等の前にある。現代の勞働者が土地と自然とから全く切り離されて無理な都市生活に沒頭してゐるといふことは、健康の點から言つても、道德の點から言つても、由々敷き問題である。都市工場の職工の境遇が田舍に住む者より外形的に良好であるかに見えるからといつて、それは微しも羨むべきことではない。自然と接觸した生活の自由や潤味や元氣やを失つて、嫌厭すべき單調な機械勞働に就くといふことは、僅かな外形的經濟生活を以ては償ひうべからざる損失である。あらゆる勞働中で農業は一番健康的で且つ變化があり、人間の德性に善良な影響を及ぼすのは疑ふべからざる事實である。トルストイが曰つた、人間は天性として他の如何なる勞働よりも農業勞働を好むと。

叙上の如きさまざまの點から見て、能きるだけ農工勞働の調和を圖り、不自然な都市集中生活から幾多の勞働者を救ひ、荒廢に瀕した田園人口の復活を來たし、併せて勞働苦痛の主要な原因の一二を剪除する爲めに、田園工業の發達を奬勵するといふことは甚だ有意義の事であらねばならぬ。幸ひにしてこの兩三年來は農村が異常な繁榮に向つてゐるのであるから、こ[illegible]運と充實した資力とを利用したならば、私の考へてゐるやうなことが案外容易に實現されはしまいかと思はれる。

田園工業を大別すると次のやうな三つになる。(一)農業と直接關係のあるもの、(二)手工藝、(三)組織された細工業。第一の例はバタやジヤムの製造とか植物油の搾取とか、藁細工とかいふ物を含み、第二は手工的の木細工や機織物を意味し、第三は農業とは直接餘り關係なく、現に都市の工場で行はれてゐるやうな組織された近代的工業を指すのである。そのうち第一及第二は餘り振はぬ乍らに今迄も行はれてゐたのであるが、今後は更に之を發達せしむると共に、組織的統一を圖つて、商的活動に優越の地步を占むるやう努力すべきである。何事によらず殆んど組織の缺けてゐるといふことは、我國の農村産業の一大

缺陷である。猶ほ第二の手工藝は機械的製品との競爭を避ける爲め、美術的製作品を主とすべきであつて、山本氏の珍らしき企はこの點に着眼されたところから起つたことゝ思ふ。

第三の工場的工業は、製絲業などを除いては、今日迄殆んど存在しなかつたと謂へる。蒸汽機の發明に伴つた所謂産業革命は在來の家庭的工業を一掃して、之を都市の大工場の手に奪つたのであるが、その後時勢の進歩は此趨勢が必ずしも絶對的のものでないことを想はしめる。私は現代の集中的工業に對して、今後は或る程度の分散的工業が起りはしまいかと豫想する。その理由は凡そ次の如くである。

（一）大規模工業が小規模のそれに比して非常に能率的であるといふ考は、深く現代の企業家の頭に染み渡つて、殆んど盲信の域にまで達してゐる。勿論或る工業に於てはそれは爭はれぬ事實に違ひないが、必ずしも全部の工業が其規模に比例して能率を増加するものとは信じられない。機械的能率の増進にも或るマキシマムがあり、殊に人的能率に到つては、幾千の職工の働く工場よりも五十人百人の職工の働く工場の方が優秀であるかに考へられる。要するに今日まで大規模産業が幅を利かしてゐた所以は、工場内の製産能率よりも寧ろ商取引の便宜といふ點にあつた。で、若し幾つかの比較的小規模な工場が分立してゐるにしても、その間に完全なトラストが行はれ、全體が一の有機的組織のもとに活動するならば、それは決して大規模の工場にひけはとるまいと思ふ。かやうな點から私は地方的（ローカル）又は産業（インダストリアル）的によく統一され、そして村々に分たれたところの工場の存立の可能を信ずる者である。私のいふ第三の田園工業とはこの種のものを指すのである。

（二）大規模産業の起因は主として蒸汽動力の性質に據つたものである。蒸汽機はその特性として集中を必要とし、遠距離の力の傳道を厭むのである。そこで已むなく之を中心として大きな工場を建てる必要がある。然るにその後電力の發明があり、殊に之が遠距離輸送と能率的配電法との技術の發達につれて、我等は必ずしも動力の集中に苦心する必要をみなくなつた。換言すれば電力の特質は蒸汽力とは正反對に、集中的でなくて寧ろ分散的である。即ち我等の新しい動力は工場の點綴的分立を許すに充分である。

更に之を田園工業の立場から考へるに、我國の農業は灌田を主とするところから、農村の在るところには必ず田用の堰水がある。而してこれ等の田用水は冬期は殆んど不用のものである。で、若し現今は殆んど利用されてゐない是等の夥しい水を農閑の時期だけ發電用に使用したならば、人の手と動力とが

依つて、在來は火の消えたやうな冬の田園を賑やかな工場地に振り向けることは容易の仕事である。

(三)冬期の農村は甚だ閑散であるのが常で、いかに之を利用すべきかといふことは今迄も喧ましく稱へられたところである。幸ひに先に述べた如く、我國の田地はちやうどこの時期だけ利用しうる恰好の發電水力を最も手近に有するのであるから、之を用ひて工場を起し、無聊に苦んでゐる手をそれに振り向けるといふことは、殆んど一の必然（ネセシチイ）とも思はれるほど自然の仕事である。

叙上の諸理由から私は私の空想の可能を信ずる。そして近き未來に於けるわが農村の賑ひをありありと想ひ浮べることが能きる。かくて都市に迷ひつゝある幾多の壯丁が、樂しい歸去來の辭を誦つて、再びその故郷の山川に幸福な勞働を見出すであらうといふことの、必ずしもユートピアではない。

過激派とロシヤの未來

ロシアの過激派は今得意の絶頂にゐるかに見える。彼等の敵はユデニツク、デニキン、コルチヤツクと相次いで衰滅したので、聯合國も今は餘儀なく勞農政府を承認せねばならぬ立場に押し詰められた。併しこの兩者の間に通商條約が成立するとしても、それがロシヤにとつても世界の平和にとつても、露ほども效果のあるもので（な）いことを我等は心得てゐなければならない。なぜなら、レーニンの常平生から公言して憚らぬ如く、それは單に彼等の困難な時代を彌縫する爲めの一時の便宜に過ぎないのであるから。レーニンの眼からみればデモクラシイの平和や國際聯盟やは、皆な資本との劣惡な妥協の諸形式であつて、何れも「意識的叉は無意識的にブールジョアの奴隸たること」を意味するのである。

過激派と聯合國とはその社會的理想に於て根本に相違してゐる。かやうな國家が對立するといふことは歷史あつて以來の出來事である。で、その二つが單なる平和條約によつて妥協しうると考へる因循的思想が抑もの誤りである。兩者は飽くまでも相爭ふべき性質のものである。

昨今の外國電報は、頻々として倫敦に於ける列國首相會議が過激派承認に傾きつゝあることを報じてゐる。さるにても何方便な世の中である。虎と狼との親しげな道連れよ。

ロシヤの未來を決するものは、何といつてもその國民の大多數をなす農民を措いてほかにない。ロシヤの民族性を理解することは、やがてこの國民の歸趨を窺ふべき唯一の道である。レ

ーニンの異常な人格と過去一年間に於ける勞農政府の外面的成功とを觀て、直ちにロシヤが過激派の天下となりきつたやうに考へるのは、保守的恐怖家と急進的新らしがり屋とが與に陷り易い早計な斷定である。

新刊の『ヒツバート・ジョーナル』は珍らしくもトロベツコイ公のロシヤ通信を載せてゐるが、之によれば今やロシヤの到る處には農民を中心とする宗教運動が非常な勢を以て起りかけてゐることを窺知することが能きる。「新しき社會的二大敵峙が、殊に都會と農村との間に生じつゝある。……復活の奇蹟が今日現實にロシヤで起りかけてゐる」と筆者は言つてゐる。

或る意味では賢明な過激派が殊に注意して撲滅に努めた共國の宗教的分子が、反對に猛烈な勢を以て頭を擡げたといふ現象は、ロシヤの民族性に通曉する者からみれば聊しも不思議な事ではない。之は流浪の半生を外國で讀書にのみ費した窮措大たちの起した革命の當然陷り易い手ぬかりであつたとも謂へる。トロベツコイは昨年モスコウで催された諸種の宗教的集會を目撃し、且つ素朴な農民の演説を聞いて、彼等の思想の透明に深く感じたと言つてゐる。「我等は神を忘れた、そして獸となつた、之が我等の不幸の唯一つの源である」といふのが彼等の偽らざる信仰で、それがやがて「基督は蘇れり」の感動的讃歎となつて、新しきロシヤの都鄙を波打たせてゐるのである。

單純な農民の信仰はその具現の的をえて益々火の手をたかめた。「我等はお互の凡てが兄弟であることを感じうる爲めに、我等の愛する一人の父を要する」といふ彼等の願は、教父ティーンの偉大な人格によつて達せられた。彼は今全ロシヤを通じての尊敬の中心であり、過激派政府にとつての無上の大敵である。正教ロシヤが長く求めてゐた眞の「父」は彼によつて體現されたかにみえる。あらゆる殘虐を平氣で行ひうる過激派政府も彼には指一本染めえないといふことが既に一の奇蹟である。

物質宗の聖人レーニンと精神的偉人ティコーンとの何れが勝つかによつて、ロシヤの未來は決せられる。

私は眞の破壞のあとにくる眞の建設のいかなるものであるかを、近き未來のロシヤに於て觀ることが能きると想つてゐる。

新獨逸の民衆藝術

戰後の新獨逸が舊の軍國主義に復活するとは誰も想つてゐないことである。然らば新に起るものはゲーテの情緒主義かカントの理性主義かといふに、一切それ等の事は當分は樂しい謎として殘されねばならぬ。

さもあれ、現に新獨逸に起りつゝある藝術が民衆本位の氣分を多分に有しつゝあることは諸種の報道から窺ひうるところの頼もしい現象である。この國に於ける最近の革命後、伯林政[illegible]

ユニッヒには同時に藝術民衆化の團體的運動が起つて、有力な藝術家が皆之に參加したと謂はれてゐる。で、伯林に於ける同會議の宣言書は次のやうな詞を以て始まつてゐる。

「藝術と民衆とは一の渾一體を形造らねばならぬ。藝術は最早や少數者の贅澤であつてはならぬ。併しそれは民衆の幸福と生命とであらねばならぬ。一の大きな建設的藝術の羽翼の下にもろ〳〵の藝術を統一することが我等の目的である。今日以後の藝術家は普遍的感情の鑄形者であり、新國家の外面的象徴に就て責任を負ふべきである。彼は亦いろ〳〵の形式――彫像から貨幣、郵便切手に到るまで――を決定せねばならぬ。」

かやうな社會的運動が藝術の本質にどれだけの影響を及ぼすかといふことは、今後の成績に俟たねばならぬが、併しそれが一の世界的傾向であるからには、決して一時の空ら騷ぎに終るものでないことだけは確かである。

更に演劇の方面を見るに、それが民衆化の運動はもつと具體的に進行してゐるやうである。帝政の終末と共に古い劇場監督の法規は全部廢棄せられ、その道の天才ラインハルトの立派な指導のもとに、全獨逸の演劇は今や類例のない氣運に向つてゐる。伯林にはポエルリッツ博士の設計になつた一大劇場が建てられたが、その構造はあらゆる點に於て舊式の因習を打破したと謂はれてゐる。で、その第一の希望は「役者と民衆とのより親密な接觸」であつて、觀覽料の如きも他の劇場に比して五割乃至七割方安く、最上の席で僅かに五マルク、一番安價な席が一マルクといふことである。ラインハルトの弟子の某がかやうに言つてゐる。「今や獨逸には新しい諸々の力が舊國家の陷落のあとに起りつゝあるといふ事を世界に知らしめねばならぬ。その力は藝術的傳統の復古であつて、かの軍國主義とは何等の共通點をも持たぬものである」と。

アインスタインの相對律

現今の科學界に於て一番問題の中心となつてゐるのはアインスタインの相對律(Theory of Relativity)である。相對律が光の波動速度に關するミケルソン及モーレイの實驗と在來のエーテル說との間の矛盾を解くに役立つことは今迄も知られてゐた事實であるが、更に最近の出來事はこの說の確實性に對する一の有力な證據を與へた。

重力により光が屈折を受けるかどうかといふことは昔からの疑問であつたが、今迄は之を確かめる實驗上の材料を缺いてゐた。然るに昨年五月に起つた日蝕の觀測隊が、ブラジル及阿非利加西海岸に於て撮映した太陽附近の寫眞によれば、明からに光が太陽の重力によつて屈折される事實を證明してゐる。で、

問題はたゞに其邊にとゞまらないで。是等の寫眞からの計算によれば、光の屈折率はニュートン力學から推測される量の二倍以上になつてゐて、ちやうどアインスタインの相對律からの算定と符號してゐる事が分つた。此事實からして相對律に關する議論が目下の科學界を賑やかしつゝあるのである。

相對律とはどんなものかといふ事を極く簡單に述べると、アインスタインは古來のニュートン力學が時間及空間の絶對存在を假定したのに反對して、宇宙間には絶對の長さもなければ又絶對の時もないといふ事、それ等は單なる觀念に過ぎないといふ事、空間及時間は觀測者の立つ特殊の位置及運動によつてそれぞれ違ふものであるといふ事を主張した。例へば地球上での時間と他の星での時間とは同じものでない。それ〴〵の星はその特殊の歴史に應じた私的時間を有してゐる。で、若し地球上の者がその私的時間から公的時間を窺ひうる爲めには、地球と全宇宙との相互關係から判斷し出さねばならぬ。それのみならず、この公的時間といふものも實は地球の住人にとつての公的時間であつて、他の星の住人の公的時間は亦それとは違ふのである。

アインスタインの相對律はニュートン力學の法則に根本的改訂を加へたといふばかりでなく、古來の時間及空間の觀念に對する革命であるので、哲學に對しても大きな影響を及ぼすであらうと推想される。今カント哲學に就て之を見るに、

(一)彼は時間、空間及因果律に關する先天的知識を假定し、我等の知覺は是等の範疇に當て嵌めて凡ての事物を受入れると看做す。

(二)彼の哲學は時間及空間の先天的知識の無限性と事物の有限性との間の矛盾を力説する。

然るに、ゲオルグ・カントルによりて眞に實在する「具體的無限」が發見されてから、カントの觀念的無限の思想が第一に崩され、そこからラッセル等の新しい哲學が生れた。で、若しアインスタインの相對律が成功するとすれば、時間及空間に關する絶對の觀念が矢張訂正されねばならぬところから、カント哲學は更に今一つの方面からも打撃を受くべきである。

「憐むべき不幸な十九世紀」

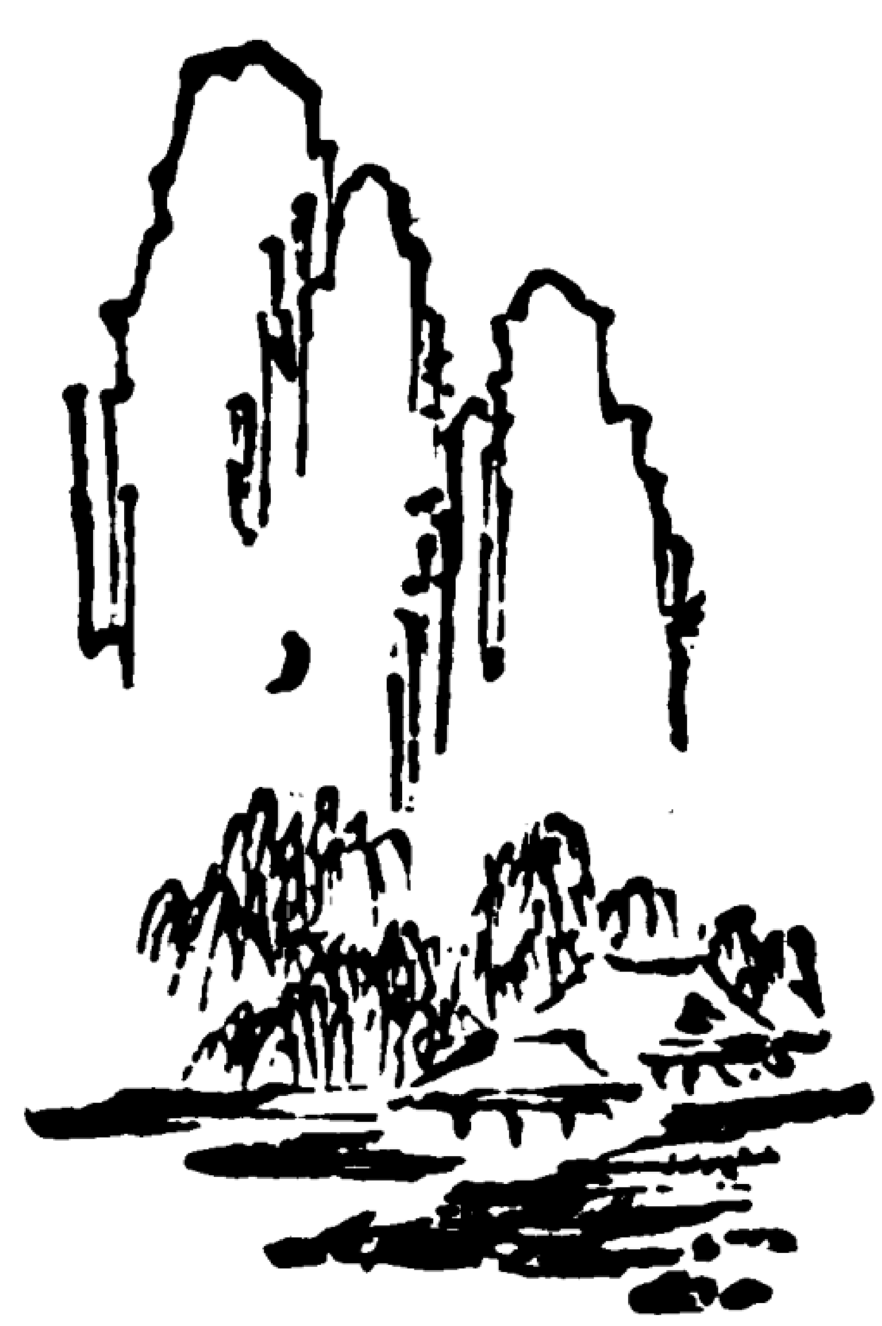
ギルベルト・ミレイが『現代評論(コンテンポラリイ・レヴユウ)』に寄せた一論文の中で十九世紀を批評した次のやうな一節が非常に面白く讀まれた。

「憐むべき不幸な十九世紀、それは希望を以て我等を充たした。それは我等の前に幾多の大きな原則を與へた。大膽な理想主義と强健な常識を以て、それは自由と文明と國際的友誼との希望ある邦の方へ我等を導いた。然るにその登り阪の殆んど分

後の一步のところに一の陷穽(おとしあな)、裏切りの足場、底知れぬ破滅があつた。で、人類は、物質的にも道德的にも、それが急にジョンソン博士の時代に逆戾りしたよりも惡い災難の島へ打上げられた。」

ミユレイはいかなる理由によつてかやうな災害が人類を見舞つたかといふことを明白に說いてゐないが、それは私に言はせれば簡單である。つまり十九世紀の人間は、理智に對する危險で盲目的な信仰に陷りすぎた結果、本能に裏切られたのである。

併し我等はミユレイと共に我等の前途を深く懷疑するには及ばない。我等はロマン・ローランと共に次の如く言ふべきである――「私は十九世紀の罪惡をも善德をも、その深き悲みをも、その混沌たる驕慢をも、その英雄的努力をも、その超人的事業の堪へきれない重荷を負つた絕望をも……敢て隱しはしない――それが我等であつたのだ。汝青年よ、汝今日の人よ、汝等は我等を步み越へて進め、汝等の脚下に我等を踏め、そして猶進せよ。汝等は我等より偉大で幸福であれ。」



中央公論第卅五年春期大附錄號小說



鮫人

谷崎潤一郎

第二編　公園に住む俳優の群（つゞき）

第三章

「さうだよ、きつと上海で遇つたんだよ。でなけりや君があの男を識つてる筈はない、――あの男は何か君と話でもしたかい？」

「いゝえ」

薫はさう云つて首を振つた、――まだ何か知ら考へながら、――

「話なんかしたことはないの。でもあたしたちの芝居を何處で見たのかしら？上海では二箇所でやつたのよ、演舞場と、日本人倶樂部と、……」

「日本人倶樂部で見たんださうだ」

「倶樂部でやつたのは一と晩きりよ、それもほんの一時間ばかり。――何でもね、南博士とかつて云ふ方の歡迎會があつて、その餘興にやつたのよ。」

「ぢや、君は其の時にあの男の顔を舞臺から見ただけなんだね。」

「さうか知ら、――」

「さうか知らつて、それより外に見る譯がないぢやないか。君はあの男に惚れたんだらう、だから覺えて居るんだらう。」

「嘘よ、知らなくつてよ」

　薫は眼の角でちらりと問題の男の方を偷み視てから、むッと口を結んで服部を睨みつけた。――舞臺裏の薄暗い所ではあつたが、黒い睫毛の蔭で小さく光る眼の球のすばしッこくくりくり動くのが見えた。

「だけど、一遍きりぢやないわ。たしかに二度お目に懸つたわ。日本人倶樂部の時と、それから其の後でももう一度何處かしらで、……」

「そんなに誤魔化さなくつてもいゝよ。君はあの男に惚れたのさ、惚れたから一遍でも覺えて居るのさ。あれは君の惚れさうな男だからね。」

「嘘よ！　服部さん、そんな事を云つてあの方に聞えたら惡いわ。」

「まあいゝから來給へ、あの男に紹介してやらう。――おい、おい、薫さん」

　彼女は服部の手を振りもぎつてあたふた椅子の方へ逃げ出した。

　問題の男、――服部が其の晩樂屋裏へつれて來た、薫が支那で二度遇つたと云ふ書生風の男は誰であるか？　云ふ迄もなく南貞助である。南は服部と一緒に松葉町の路次を出て、淺草劇場の向う角にある今半支店の二階へ上つたのであつた。實は服部を其處へ送り込んで置いて自分は逃げ出す積りだつたのだが、服部がどうしても放さないので仕方なく話相手になりながら、盛んな勢で飲み續け喰ひ續ける友の樣子をしまひには感心して見惚れて居た。胃の腑が充ち酒

が循るにつれて服部はしやべる事もよくしやべつた。南は先とは反對に聽き手の方へ廻されてだらしのない醉態に壓倒された形だつた。彼は服部から頻りに議論めいた氣焰を吹つかけられはしたけれども、云ふ事が亂脈でとんちんかんで要するに噴臭い息を嗅がされたに過ぎなかつた。たゞ此の醉漢の口から「淺草劇場」―「梧桐寛治」―「林眞珠」等の名が、議論の合間に時々思ひ出した如く繰り返されるのを聞いただけである。

「僕は今夜君を樂屋へ案内するよ。ねえ君いゝだらう、附き合つてくれるだらう、――君だつて一遍ぐらゐあゝ云ふ所を見て置き給へ。あれが僕の世界なんだ、僕の憧れてるものは彼處にあるんだ。ほら彼處に！　直ぐ此の向う側に――ちよいとでいゝから彼處へ行かうぢやないか。梧桐寛治を紹介するぜ、林眞珠と云ふ素敵な女の兒を見せてやるぜ。」

「その女の兒に君は惚れて居るのかね」

「あゝ惚れて居る、――公園の奴等には秘密なんだが、君だから白狀しちまはう。實は惚れて居る以上なんだ、あの女の兒の顏を見ないぢや僕は生きちや居られないんだ。あの兒の傍に居さへすりや僕は今にきつといゝ繪が畫ける。要するに先の議論なんかどうでもいゝんだ。あれを見てくれりやあ僕の考へてる事はあの兒の顏に現はれて居るさ。」

「そんなに云ふなら其の兒を見せて貰つてもいゝが、しかし表から這入らうぢやないか。僕は樂屋へ行くのは嫌だよ。梧桐寛治に紹介されたつて仕樣がないもの。」

「まあさう云はずにさ。――梧桐寛治つて男は世間ぢやひどく惡辣な人間のやうに思はれてるけれど、其の實芝居者には珍しい正直な好い男だよ。君はあの男の芝居を見たことはなかつたかい。」

「ないことはない。ルネッサンス協會の時代に帝劇でも見たし、此の間支那でも見た。上海の日本人倶樂部で親父の歡迎會があつた時に、――」

「そりや不思議な縁だ、それぢや是非紹介しよう！　表から這入らうたつてとても滿員で這入れやしないから。」

さう云つて服部は、否應なしに南を引張つて來たのである。

が、南は舞臺裏へ這入るや否や直ぐと後悔した。たゞでさへ人みしりをしたがるお坊ちやん育ちの彼だ、こんな別界――彼に取つては知らぬ外國の土地とも云ふべき怪しげな場所へ連れ込まれたのであるから、頼りにする者は服部人だのに、その服部が醉つて居るせゐかちつとも頼りにならない。梧桐寛治に紹介するでもなく素敵だと云ふ少女に會はせてくれもしないで、「便所へ行つて來る」と云つたきり、何處へ姿を消したのやら容易に戻つて來ない。南は長い間待ち惚けを喰はされて、樂屋の入口に彳みながら迷ひ兒のやうにウロウロ其邊を見廻して居た、――それも極く臆病な、誰かに咎められはせぬかと云ふ風なおどおどした眼つきでである。――なぜなら彼の立つて居る傍に板圍ひをした溜りがあつて、其處に控へて居る樂屋番らしい半被姿の男が、先から時々怪訝さうに南の方へ氣を配つて居たから。その男の顏を見ると、南は木戸口に貼つてあつた「開演中面會謝絶」「無用ノ者樂屋へ出入ス可カラズ」といふ掲示の文字を想ひ出した。若し南が「お坊ちやん」にふさはしい何處となく上品な青年でなかつたら、此の久留米絣に小倉の袴を穿いた書生ッぽに對して、樂屋番は疑ひもなく默つては居なかつただらう、――「お前さんは何か用があるのかね――」彼は幾度かさう云はうとする樣子であつた。番人の溜りの横には狹い窮屈な梯子段があり、其處を上り下りする人々も通りすがりに振り返りながら、皆ヂロヂロと南に一瞥を與へて行く、――往來で打つかり合つた犬と犬とが、ちよいとの間鼻をひくひくやらせて相手の匂を嗅ぎ分けるやうな工合に。――それらの犬どもは大概役者たちで、扮裝をしたのもあれば地頭に浴衣がけの手拭ひをぶら下げたのもあり、顏は孰れもお白粉を塗つて居て、そのお白粉の奧から眼玉をパチクリさせながら、南を視詰めて行くのである。扮裝をしたのは是れから出演するのだと見えて舞臺裏の蔭の方へ消えて行

く。手拭ひをぶら下げたのは、頻りにぞろぞろと繋がつて南の前を通り過ぎつゝ樂屋口を出て行く。樂屋口の外は今しがた南が潜つて來た裏木戸の内側で、俳優たちの名札を貼つた下駄箱が置いてあつたり、便所へつゞく板敷が通つて居たりした。で、手拭ひを下げた連中は板敷を渡つて便所の傍まで來ると、其處の左手の羽目の方へ這入つてしまふのであるが、實は便所の隣にある樂屋風呂へ行くのだつた。それを南が發見したのは、今に服部が出て來るか出て來るかと思ひながらぢつと便所の戸の方を眺めて居たからである。が、いつ迄待つてもなかなか服部は出て來ない、事に依ると、友達が此處に斯うして居るのも忘れてしまつて、先生湯に這入つてでも居るのぢやなからうか？——ずべらな服部のことだから何とも保證の限りではない。南は馬鹿らしくなつたのでいつそ默つて歸らうかとも考へたけれども、今迄かうして居て急にこそこそと逃げ出すのは、やはり樂屋番の手前きまりが惡いやうな氣がするので、しよざいなさに又その邊をキヨロキヨロ見廻し始めた、——但し、もう便所の方角はあきらめてしまつて、今度は自分の前にひろがつて居る暗い舞臺裏の方へ眼を向けたのである。舞臺裏——其處には第一章の終りの部分で說明した如く、歡樂の灯の海を蔽ふ大きな垂れ幕が暗澹たる障壁を成して茫漠と連なつて居たのだが、南の注意は最初そんな所までは屆かなかつた。ちやうど梯子段の上下に電燈がともつて居て、彼の立つて居る近所だけがぼんやり明るかつたので、彼は先づうす明るい中で働きつゝある道具方の混雜を、「垂れ幕の此の方側にある勞働國」の狀態を、一種の好奇心を以て眺めた。此の勞働國——炭坑の坑道のやうな朦朧たる光のうちに多勢の黑い人影がうようよして居る場所の床板は、地べたと撰ぶ所がない迄にザラザラして居て、其處に廻り舞臺の圓周の一部が、トロツコの軌道の如く太い線を描いてカーヴして居る。カーヴに沿うた外側には左右の「袖」から白い壁のやうなものが幾つも引き摺り出されるのだが、ちよいと見ると人間より數層倍も大きい癖に輕い平べつたいものらしく、二三人の手で造作なく運ばれて來ては鎹で床に留められて居る。それ

が次ぎの幕に使はれる書き割りであることは南にも察しが付いたけれども、爪のやうに骨を張つた裏が見えるだけで表には何が畫いてあるのやら分らなかつた。書き割りと書き割りとの間からはいろいろな小道具が持ち出された。王樣の玉座かと思はれる金紙づくめの椅子が出る、宮殿の階になりさうな張り子の石段が出る、廻廊の柱が出る、燭臺が出る、絨緞が出る、クッションが出る、幔幕が出る、……それらの物が渾沌と散らかつて居るなかに、たつた一つ此ればかりは本物のグランド・ピアノが、右手のずつと隅の方に据えられて居る。此れは今度此の劇團に加入したピアニストの井口昌吉の爲めに置いてあるので、日に二度づつは幕間を繫ぐ演奏の際に舞臺へ引き出されるのだが、用の少いわりにひどく嵩張るので道具方から邪魔扱ひにされて居る代物だつた。で、恰も其のピアノの所に、五六人の人影がかたまつて垂れ幕と書き割りの隙間から舞臺の方を覗いて居るのが、ふと南の眼に留まつた。彼は其處で不思議なものを見たと思つたのである。舞臺からぼうツとさして來る青白い光線に輪廓づけられて、腰をかゞめながら表を窺つて居る五六人の人影、――中には出場を待つ俳優らしいのもあり、何處からかもぐり込んだ子供や守りツ兒も交つて居て、その後ろの方に、半顏を明りに照らされながら立つて居るのは確かに服部であつた。便所へ行つた筈の彼はいつの間にか其處に戻つて居た、――しかし南の見た不思議といふのはそんな事ではなく、さうして立つて居る服部の淋しさうな横顏――横顏の中にある際立つた眼の表情――であつた。一體に服部は不斷から淋しさうな俤の男であるから、別に異とするには足らないやうなものゝ、**その横顏は常にも增して悲しげに打ちひしやげ、寒風に曝されてでも居るやうに眼瞼をショボショボさせながら、どうかすると又酒が醒めかゝつたらしく襟頸をぞくぞくふるはせて居る。**が、舞臺を覗き込んで居る眼の方は顏よりも一層悲しげに、狂人のやうにも、醉ひどれのやうにも、或は白痴のやうにも見える奇妙な沈痛な光りが燃えて居て、その光りの底からは、例の襟頸をふるはせる度びに涙を湛へたやうな潤ほひが輝き出すのである。さうし

顔が淋しさうにひしやげればひしやげるほど、眼はいよいようつとりとした光りと潤ほひとを加へて行く。それは南の位置からは大分隔たつて居たに拘らず、或る云ひ知れぬ美しさを以て彼を襲つた。その——服部の顔に嵌めて置くのには勿體ない崇高な色つやの瞳は、何を視詰めて居るのだらうか？　其の玲瓏たる面には何が映り、何が感ぜられて居るのだらうか？　その瞳は凍つて居るのか泣いて居るのか夢を見て居るのか？　——南の驚きは其れであつた。彼は此の一年間の服部を知らなかつたので、作者が第一篇の第一章で説明したところの、服部の「痴呆ちみた瞳の中にも時を閃めくことのある深い悲しみを帯びた清しい耀やき」に、今始めて接したのである。——

「僕だつて君の云ふやうな永遠なものがある事は信じる。」

——南は今、服部がさう云つた先の言葉を想ひ出した。なぜなら服部のその眼つきの裏にこそ、彼の憧れつゝある永遠なものが影を宿して居るやうに思へたから。が、本人の服部は自分がどんな眼つきをしどんな眼つきで居るかも知らずに、熱心に舞臺の方を見守つて居るのである。それにしても彼にそんな眼つきをさせて居るものは何であるか？　舞臺ではどんな芝居が演ぜられつつあるのか？　——そこまで考へ及んだ時に、南はやつと服部が惚れて居ると云ふ少女の事に心着いた。彼は我ながら察しの悪かつたのを悔みながら、又改めて服部の表情を檢査するやうに注意し始めたのである。實を云ふと、南は少女その者には餘り興味を持つて居なかつた。平生から異性に對しては冷淡な男でもあり、それに、いくら服部が口を酸ッぱくして褒めちぎつたところで、どうせ淺草の女優だからと額を括つて居た。で、彼としては問題の少女を見せて貰ふよりも、寧ろその少女が服部の瞳の中へ投げ込んで居る美しい反映を、たゞその反映だけを、見せて貰ふ方が有り難かつたくらゐである。彼はさう思つた、——自分と服部とは美に對する感覺が違つて居る。だから服部が感じても自分には感心出來ないものが澤山ある。しかしもともと「美」と云ふものの本質が一つであ

る以上は、二人の感覺の間にも何處かに共通な點がなければならない。さうして其の共通な點を感ずるには、服部が、れて居る對象——たとへば其れが少女だつた場合に、少女その者を見るよりも服部の眼つきを見た方がいゝと。なぜなら其の眼つきには、南が直接に少女を見ても恐らくは其處から抽き出すことが出來なかつたであらう彼女の美の秘密が、氣高く淨らかな結晶となつて凝り固まつて居たのだから。或は少女の美は不純な彼女の肉體を拔け出して服部の瞳に集まり、其處で永遠なものに合致したともいへるのである。だが、ほんたうに美しいものは長く此の世には止まつて居ない、——服部の眼の耀やきも直きに一人の妨害者に依つて掻き壞された。南が今迄氣が付かなかつた垂れ幕の陰の暗い所に、白い柔かい衣裳を纏つた人影があつて、それがひらひら走つて來たかと思ふと、不意に服部の手を執つたのである。と、服部は振り返つてにやにや笑ひながら話を始めた。人影は女のやうであつたが、多分問題の少女ではなく、寧ろ少女の事に就いて服部を冷やかしてでも居るのだらう、——さう極めてかゝつた南は、やがて意外なことを發見した。彼等は頻りに南の方へ流眄を使つて何か囁き合つて居るのである。明かに二人の間には南自身が話題に供せられて居るのだつた。服部がヒヨイと此方を見て女に耳打ちをする、女もうなづきながら又ヒヨイと此方を向く、さうして何がおかしいのだか二人ともクスクス笑つて居る。——南の方からは向うが暗いのでハツキリしないけれども、其處に居る女の樣子はだんだん分るやうになつて來た。彼女は——それが問題のものであるかどうかは判然しないまでも、兎に角一人の少女であつた。のみならず南がやゝ豫想外に感じたのは、古代の西洋の風俗めかして賓やかな薄絹を垂れた少女の體つきや手足のこなしが、遠くからのせゐか割り合ひに下品でなく、且いかにも無邪氣さうに見えたことである。顏はふつくりと下膨れのした圓い輪廓が想像出來るだけだつたが、明りの加減でチラチラ光つて居る澄んだ眼つき、——服部を見上げながら、何事をか思ひ詰めて居るらしいその眼つきは汚れのない處女の心が覗いて居る貴い窓

で、笑ふ度びに其處からは小ましやくれた愛くるしい表情がこぼれ、又ちつと考へ込む時は不思議に悧巧さうになり、その間には折々偸むが如く南の方へも視線をやるのである。さうして、しやべりながら子供が物をねだるやうに肩を揺ずつたり、服部の手を握つて引つ張つたり、膝まで透き徹つた眞つ直ぐな脛をピンと揃へたり組み合はせたり、たつた今しがた舞臺でクルクル踊り廻つた餘力がまだ體中に殘つて居て、運動好きなしなしなした手足を彈ませて居るやうにも見えた。尤も、此れ等の可憐な光景は、南があまり淺草と云ふ所を輕蔑し過ぎて居た爲めに、却て實際以上に美しく感ぜられたのかも知れない。孰れにせよ彼の平生の趣味から云へば、日本の女が西洋臭い服裝をしたのは餘り好ましいものではない筈だのに、その少女の姿からはお伽噺の挿繪のやうな或る輕快さが汲み取られた。「すると矢張り彼れが問題の少女なのかな、」——と、南は思つた。「きつとさうに違ひない、それであの兒を己に紹介する積りなんだ。」——服部と少女とは南の方へ歩いて來さうにしたのである。が、どうしたのか中途で彼女は服部の手からすつぽりと脱けて、暗い方へ急いで逃げて行つてしまつた。

「やあ失敬した、大分待たせたね」

さう云ひながら、服部は道具方の混雜の間を避けて南の傍へやつて來た。近くへ寄ると相變らずどんよりとした浮かぬ顔つきである。「失敬した」と云つて居る辭に別段氣の毒さうな樣子もない。

「今ね、向うに居るあの女の兒を君に紹介しようと思つたんだが、駄目だつたよ。羞澁(はにか)んでばかり居て、」

「あの女かね、君が惚れて居ると云ふのは？」

「惚れて居る？」

服部はちよいと頷いた風だつたが、

「あゝさうか、君にそんな事を話したつけか。どうも先は醉つて居たもんだから――」

「ぢや、やつぱりあの女だね」

「いゝやさうぢやない、あれは違ふんだ。あれは黛薫と云ふんだ。」

「あの女よりも、君の惚れて居る女はもつと美人かい？」

「どうだかな、好き好きだからどうとも云へないな、――あの女だつてなかなか惡くないんだから。」

「さうだらう、――淺草の女優にあんなのは澤山は居ないだらう。」

「成る程、君もさう思ふかね」

服部の口もとに謎のやうな微笑が見えた。

「なぜ？」

「なぜつて、あの女は君を見た事があるんださうだ。」

「何處で？」

「上海の日本人倶樂部で。――見物の中に君が居たのを舞臺からちやんと見覺えて居たんださうだ。」

「そりやえらいな、一遍きりでよく覺えて居たもんだな。」

「一遍きりぢやないとも云つて居るよ、その後もう一遍何處かで見たつて。」

「そんな事はないだらう、見たとすればあの晩だけだらう、僕の方ちやちつとも氣が付かなかつたけれど。」

「一體あの黛つて云ふ兒は物覺えのいゝ兒なんだが、それにしても少し妙だね。きつと君に惚れたんだよ。」

「まさか」

南は顔を紅くした。

「眞の方にどうでもいゝけれど、眞珠を君に會はせたいもんだな。もう直きに芝居がはねるから樂屋で待つて居ようぢやないか。」

「さあ、しかし電車がなくなると困るから、――」

さう云つて、南は袂から時計を出した。それはいかにも南らしい趣味の一端を示すもので、彼は常に短い黑のリボンの着いた可愛らしい舊式の金時計を、懷ろに入れて居た。――男持ちと女持ちの間ぐらゐな、小型な、唐草の彫りのある、厚ぼつたい兩蓋の時計である。

「何だい、まだやつと十時ぢやないか。もう直ぐだから待つて居給へ。折角此處まで來て、僕の惚れてゐる女を見ないで歸るのはひどいよ。」

「見ないでも大概分かつたよ、――君の樣子で。」

「まあいゝツたら！　それに僕は寛治に用を頼まれたんで、もう少し居なけりやならないんだ。」

「だから君は居給へ、僕は先へ歸るから。」

「そんな事を云ふもんぢやない！　用を濟ませてから一緒に歸らうよ。ねえ君、さうしようよ。」

服部は頻りに「ねえ、ねえ」を繰り返した。どうかすると彼は時たまこんな工合に非道くしつツこくなつて人に絡み着く癖があつたのである。さうして其の癖を發揮し出したら思ひの外剛情で、だだツ兒のやうに意地を突ッ張つて誰のいふ事も聽かなかつた。

「ねえ、いゝだらう少しぐらゐ遲くなつたつて！　まあ兎に角に二階へ行かうよ、こんな所の樂屋を見るのも面白いも

んだし、公園の役者だつてそんな厭な奴ばかりぢやないから會つて見給へな。梧桐寛治なんか君が見たらきつと氣に入るぜ。豪傑氣取りの人の好い男だから。」

また梧桐寛治が出たな、と南は思つた。彼は服部の此のしつッこい癖を知つて居たので、諾々跡に從ひながら狹い梯子段を上つて行つた。

色は黒いけれども目鼻立ちの正しい身なりのキチンとした貴公子風の南、それの案内役をする一張羅のぼろ洋服を着た服部、――一人は異郷の土を踏むやうに珍しげな眼つきで、一人は會ふ役者毎に「おう！」と心易く聲をかけながら、梯子段を上り切ると左へ折れて長い廊下へ出た。「此處が大部屋だよ」さう云つて服部は、其處にうようよかたまつて寢ころんだりあぐらを搔いたりして居る男たちを顧で示したが、南は何となく無氣味に感ぜられてどんな樣子だかよくは見られなかつた。彼はたゞ廊下の片側に赤ッ茶けた穢い疊の廣間があつて穢い硝子窓があつて、窓際に大小いくつもの鏡臺があつて、ところどころに襟垢の附いた不斷着やら、不潔の點では恐らく其れにヒケを取らない種々雜多の衣裳やら鬘やらが、引懸けてあつたり放り出してあつたりして、其處に兩肌を袒いだのや、がッかりと死んだやうに打つ倒れたのや、黒い胴中に白い首を持つたのや、鼻柱を刷毛で叩いてゐるのや、右と左と色の違つたメリヤスの股引を穿いてゐるのや、板の間で舞臺の足つきを踏んで居るのや、いろいろな人影を通りすがりにちらと眼に入れただけだつた。廊下を突きあたつて右へ切れると、左側の羽目に幕を垂れた戸口が二つ附いて居て、一方の口には「梧桐寛治」と記した札が貼つてあり、一方には「梧桐總子、波川芳子、黛薫、林眞珠」の名が貼つてあつた。「此處で待つてよう」さう云つて服部は其の幕の一つを上げて中へ這入つた。

此の二つの部屋――寛治の樂屋と女優部屋とは寛治の方が幾分か狹かつたけれども、ちよいとした板仕切りがある

だけで中では繋がつてゐたのである。で、服部は南を梧桐の部屋の方へ待たせて置いて、自分は暫く彼方此方うろつきながら落ち着かない様子だつた。それには何か外に理由があつたのかも知れないが、南に云はせると、一體に此の天井の低いせせツこましい部屋の空氣が人を落ち着かせないやうに出來て居た。いつもおつとりと落ち着いて居る南自身でさく、此のガランと空明きになつて散らかつて居る部屋の中へ踏み込んだ時、何處へ腰を据えていゝやら、立つたものか据つたものかを戸惑ひをしたくらゐである。それは部屋と云ふよりも、廣大な劇場の建物の容積を縦横に仕切つた際に、どうかした加減で出來た無駄な不規則な空隙に過ぎないので、ほんの僅かな物と物との狭間であつた。その部屋の前の廊下は何處へ續いて居るかといへば其れつきり先はない、中途で消えた虹のやうにツンボと切れて、切れ目から先は屋根裏の穹窿に近い空々漠々たる劇場内の大空間であり、下を瞰おろすと無數の見物人の頭がもくもく波打つて居る。若し見物人の方から此の部屋を見上げたら觀音堂の鳩の巣のやうに思はれただらう。だから此處に居る人間は大地に礎を置くシツカリした床の上に居るのでなく、高い建物の屋根裏に吊る下つて居るのである、軒場に懸けられた籠の鳥も同然である。まことにそれは公園に住む俳優たちの樂屋に適しいと云はねばならない。なぜなら流轉の激しい淺草に於ける彼等の運命その物が、一つの吊る下りであり宙ぶらりんであるから、風が吹けば彼等はいつ何處へ飛ばされるか知れないのだから。殊に、せツかちで大膽で始終劇界の八方へ目を配つて居る梧桐寛治の樂屋としては、此れ以上適當なものはないのだつた。彼はいつ吹き飛ばされるか知れない吊る下りの位置を少しもアブナツカシク感ぜず、其處に堂々と根據を据ゑて、云はゞ城の天主にでも登つた氣で、高い所から公園全體を、或は劇界全體を睥睨して居る積りなのである。梧桐はそれでいゝかも知れぬが、靜寂な生活に馴れて居る南は其處にさうして居ると、天井からは頭を壓さへつけられ床からはソハソハ追ひ立てられるやうで、不安な、ムツムツした氣持ちになつた。自分がこんな所に住

んで居たら、一日暇があつても一ペエジも本を讀むことは出來ないだらうと思はれる。何しろ室の一方にある肘掛窓の上が直ぐぴつたりと天井になつて居るくらゐ、その部屋は背が低いのである。さうして此の狹い一局部へ、劇場内の夥しい人いきれが上昇して來るものと見えて、たゞでさへ蒸し暑い晩だのに其處に籠つて居る惡氣流は特別だつた。五分と立たないうちに南は微かな頭痛を感じ始め、體中の血が髮の毛の方へ騰つて來るやうでぼうツと氣が遠くなりさうだつた。少しでも外の空氣を吸はうとして窓枠に腰をかけたが、窓の向うには殆んど手がとゞきさうな距離に——隣りの活動寫眞館の裏側であらう——海鼠板の壁が塞がつて居て、微塵の風も這入つては來なかつた。彼は窓から出來るだけ首を出して空を見上げた、が、僅かな庇間から窺はれる空の方は曇つて居るとも晴れて居るとも分らず、公園の火氣がほの紅くもやもやと立ち罩めて居る。左を向くと劇場前の往來のぞろぞろした人通りが、黑い建物と建物の隙間から監間のやうに明るく細長く光つて居る。

「君、君、何を見てるんだね。」

と、服部が後ろへ來て云つた。

「何つて、此隙間から往來が見えるんだよ。かうして見ると淺草はえらい景氣だね。」

「えらい景氣さ、此の頃は毎晩こんなだ。」

南は窓から首を引込めて、頻りに蟀谷の痛みを揉みながら今度は室内を眺めた。衣裳だの鬘だのゝ散らかつた工合は大部屋と變りはないけれども、多少その邊が片附けられて細々した茶道具や裝飾品を置いてあるのが、却て部屋を一層せゝこましく落ち着かないものにさせて居る。こんな所に住んでまで物を飾り立てたりする人の氣が知れないやうだけれども、梧桐の腹では「英雄閑日月あり」と云ふところを示したいのであらう——外國の演劇雜誌から切り拔いたらし

い舞臺面や俳優の寫眞の額が懸かつて居るのはいゝとして、それらの反對の方の壁には「南無妙法蓮華經」の髯題目が掛けてあり、鏡臺の左右には澤山な小さな支那人形が「巨人梧桐寛治」の護衛兵の如く座蒲團を取り卷いて居る。

「あの南無妙法蓮華經は、あれは何だね。」

南は不思議さうな顏をした。

「あれは滑稽なのさ、寛治が日蓮の信者になつちまつて此の頃始終あれを拜んでるんだ。羽織の紋にまで法華の紋を附けてるんだよ。ね、此れを見給へ。」

さう云つて服部は、一本の釘へ何枚も何枚も引懸けられた衣類の間からぺらぺらしたものを一つ摘まみ出した。それは、よれよれになつたお召の羽織の袖で、鐵無地に法華の紋が茶で縫ひ取つてあつた。

「あの人形は支那から買つて來たんだらう？」

「天津で買つたんだつて云つてたがね。――あれは水滸傳の人形ださうだが、先生あれを飾つて此處を劇界の梁山伯と號してるんだ。」

その時ちらりと金髮の鬘（かつら）を被つた可愛い首が女優部屋の方から此方を覗いた。

「あら服部さんなの？――びつくりしたわ誰かと思つて」

それは南が先（さつき）舞臺裏で見た通りの、白い寛やかな衣裳を着けた、優雅な手足を持つた圓顏の少女だつた。明るい處で見る容貌は先より數段美しく思はれたが、此の少女の人を魅する力は顏立ちよりも寧ろ全身の肉と骨とを蔽ふ奇妙に滑かな皮膚の色つやにあつた。自分でもそれを知つて居るのか襟から下には少しのお白粉氣も施してないのに、冷めたい感じがするほど青白く冴えた肌には曇り硝子を日に透かしたやうな幽かな深い光澤があり、且その光澤に怪しい潤ほひ

を添へて居るものは、腕、肩、脚のところどころに繻子の目の如く密生して居る銀色のむく毛であつた、その細かな而も燦然と生え揃つたむく毛の部分は日本人よりも西洋人の肌に近く、明りに反射する猫や海豹の毛皮を連想させ、無邪氣な顔の表情と對照すると艶麗ではあるが一種の鬼氣を帶びて居た。人は恐らく此の顔と此の皮膚との神秘な調和に惹き付けられることであらう。――

「もう濟んだの、ひどく早かつたね。」

「いゝえまだ此れからよ、今忘れ物をしたから大急ぎで取りに來たの、―あとでいゝ物を上げるから待つてらつしやい。」

「あ、ちよいと、ちよいと、」

服部は出て行かうとする少女を追つた。

「ちよいと待ち給へ、君に此の人を紹介しよう。――」

「いま大急ぎだから後で後で、」

さう云ひ捨てゝ、少女は競爭者がスタートを切るやうに一と息に廊下を走つて行つた。

「成る程、僕は思ひ出したよ、」

と、南が突然云つた。

「先は暗かつたんでよく分らなかつたけれど、顔を見たら思ひ出した。あれなら僕も覺えがあるんだ。」

「さうかね、あれなら覺えがあるかね。――しかしあれは先の兒とは違ふんだが、」

服部は眼をつぶりながら云つた。

「あれは薫に似てるけれど違ふんだよ、あれが林眞珠さ。」

「林眞珠？——あゝその名前も今思ひ出した。あの兒ならたしかに見たことがある。」
「やはり日本人倶樂部でかい？」
「さうだ、——いや一度きりぢやない、日本人倶樂部の時と、その後もう一度會つて居る。」
「どうして君はそれを覺えてるんだね？」
「そりや覺えて居る譯があるんだ。あの晩日本人倶樂部で芝居を見た者は、僕ばかりでなく皆覺えて居るだらう、——あの兒に就いて不思議な事があつたんだから。」

南と服部とは、互ひに疑惑を持つた眼つきで顔を見合つた。

第三編　林眞珠

第一章

云ふ迄もなく、服部はその「不思議な事」を聽かしてくれるやうに南に頼んだ。幸ひ樂屋には二人の外に誰も居なかつたので、芝居のはねるのを待つ間に、南は次ぎの如く語つたのである。——
「その事件は當時上海の新聞にも出たくらゐだから、兎に角不思議な事件なんだ。が、僕は新聞を讀まなかつたんで精しくは知らないけれど、あの晩は其の場に居合はせたことだし、あとで人に聞いたこともあるしするから、極く大體だけは知つて居る。尤も僕の知らない部分の方に面白いことがありさうなんだが、……」

さう前置きをして、さて南は話し出した。

「……君は知つて居るかどうか、僕は去年の四月の末に東京を立つて、上海に着いたのは五月の一日だつた、――最初に南へ行つてそれからグルリと北を一と廻りして又南へ歸つて來ようと云ふ計劃だつたものだから。そんな譯で、上海では旅の支度だの知人の訪問だのいろいろ用があつて半月ばかり滯在して居たが、ちやうど其の間に親父の歡迎會があつた。それも親父ばかりの歡迎會ぢやなく、一緒の船でやつて來た或る代議士の歡迎を兼ねて居たんで、可なり賑やかな盛大な會で、參會者の中には支那の政治家や實業家なども大分交つて居た。で、その時分にルネツサンス協會の連中がやはり上海で興行して居たもんだから、歡迎會の餘興にその連中の芝居があつた。倶樂部と云ふのはなかなか立派な建物で、會場も廣かつたし、舞臺の設備もちやんと出來て居たし、先づ一と通り本式の芝居がやれるやうになつて居たんだ。尤も、あの時の芝居の事は僕に聞くよりか寛治氏に聞いて見給へ。寛治氏でなくつても一緒に舞臺へ出た者ならよく知つて居る筈だから。――出し物は「ヴェニスの商人」の法廷の場と、それにもう一つオペラ風の物だつた。寛治氏の考へではシャイロックの方で腕を振つて、オペラはほんの附けたりだつたかも知れないが、僕はヴェニスの法廷よりもオペラの方を未だに覺えて居る。なぜかと云ふと、不思議な事件が起つたのはそのオペラの開演中なのだから。ところで、此れも寛治氏に聞く方が早いのだけれど、あのオペラと云ふものが又頗る變つて居た。一體淺草でもあんなのを時々やるのだらうか？　淺草でやるのは大概西洋風の物ばかりぢやないのだらうか？　――それが其の晩のオペラと云ふのは支那の小説を歌劇風に脚色したもので、扮裝や體のこなしなどは支那芝居を眞似て、たゞ俳優の唄ふ歌の節やオーケストラだけが西洋流だつた。しかし君の話だと寛治氏は水滸傳が好きださうだから、あゝ云ふ芝居を考へるのも無理はないかも知れない。それに、今も云ふやうにあの晩は支那側の出席者も多かつたから、その人たちにも分るやうな

物をと云ふ註文もあつたのだらう。題は『浪子燕青』と云ふので、やはり水滸傳の中の燕青が李師々に遇ふところ、――主な役者は道君皇帝と、皇帝の寵愛する妓女の李師々と、李師々の老母と、美少年の浪子燕青と、まあそんなものだつたが、僕は燕青以外の役者の顔や名前などは忘れてしまつた。いや燕青にしたつて、あんな事件が起らなければ多分忘れてしまつただらう。つまり燕青をやつたのが林眞珠で、あの女の兒が美少年に扮して歌を唄つた譯なんだ。あのシーンは水滸傳の中でも一番濃艶でぼうツとした夢のやうな感じを起させる所だから、變つたオペラだとは云ふものゝ、寛治氏が彼處へ目を付けたのは惡くはない。あれへ支那音樂のメロディーを取り入れて、もつと完全なオペラにしたらきつと面白いだらうと思ふ。けれどもあの晩やつたのは極く貧弱なお伽歌劇のやうなもので、役者もうまいとは云へなかつたし、殊に肝心の燕青の歌が一向振はなかつた。あの女優は、此の頃はどうか知れないが其の時分にはまだ聲の練習が出來て居ないで、舞臺へ立たせるのは可哀さうなくらゐだつた。尤も歳が歳だし、ほんの子供のやうだつたから無理もないのだが、あんな子供になぜ燕青などゝ云ふ主役をやらせたのか、而も男のやるべき役を少女にやらせたのはどう云ふ譯か、いづれ何かの都合には違ひあるまいが、なんぼ好い加減なオペラにしても亂暴過ぎて居た。それも支那人のお客を前に置いてやるのだから、ハラハラして見て居られないやうな氣がした。が、斯う云ふと、いかにも眞珠がみじめだつたやうに聞えるけれど、必ずしもさうではない。あの兒は、――まあ舞臺度胸があるとでも云ふのだらうか、――自分でも聲の惡いのを知つて居ながら、外に何が恃む所があるかのやうに割りに落ち着いてやつて居た。さうして其態度がうまく成功した。もともと浪子燕青は男なのだから、彼女が聲變りの時期にある少年のやうなイヤな聲を出しても、それが見物人の――就中支那人のイリユウジョンを壞すほどではなかつたらしい。いや其の爲めに却て男の兒らしく思へたかも知れない。此れは後で聞いた話だが、支那人たちの間では燕青になつた役者が一番いゝ、顔の作りにも何處となく

支那人らしい趣があり、衣裳も一番よく似合ひ、どう見ても支那の美少年だと云ふので感心した者が多かつたさうだ。のみならず彼等の殆んど凡べてがしまひまで眞珠を男だと思つて居た。――此の男だと思つた事から間違ひが起つたのだから、それを僕はもう少し精しく説明しよう。――」

「一體あの眞珠と云ふ兒は、先の樣子では餘程女らしくなつて來たが、去年はまだあんなに胸や腰の周りが出て居なかつたし、おまけに舞臺では男に扮して居たのだから、ほんたうの男の兒のやうに見えたのは事實だつた。支那人ばかりでなく、日本人でも男だと思つた者が大分あつた。嚴密に云へば、あの時分の彼女の體つきは男と女の中間にあつたと思ふ。手足の曲線が男のやうに引き締まつて居て、それで又肉づきの何處かに女のやうなふうわりした柔かみがあり、其處に一種の美しさがあつたやうに思ふ。さうして僕の考へでは、體つき以外にも、たとへば表情とか態度とかのうちにも、男と間違へられる素因があつたに違ひない。その證據には、僕は彼女を男と間違へはしなかつたものゝ、女にしては少しキツ過ぎる、冷酷な女ぢやないかと云ふ印象を受けた。なぜなら、――先はあんなにニコニコして居たけれども、――その時の舞臺では非常に不愛憎で、ニコリともしないで、眼を除いては殆ど無表情とも云へるほど顔の筋肉をぴんと突張らせて澄まして居た。落ち着いては居たが憎いやうな落ち着き方だつた。それから、歩く時の足の運びなどが、どうかした拍子にとても女ではあゝは行かないと思はれるくらゐキビキビして居た。そのくせ又なまめかしい形をすると馬鹿に女らしくもなる。君は水滸傳の彼處を讀んだことはないだらうが、あの中に李師々が燕青の腕に彫つてある花の入れ墨を見たいと云つて、袖を卷くつて見るところがある。あの時の彼女の爲種などは殊になまめかしかつた。男に扮して居ることを忘れてでもしまつたやうに體が柔かだつた。李師々がその刺青をぢつと眺める、燕青が前に云つた奇妙なやさしみのある肉づきの腕を伸べて、羞を含みつゝ顔をそむける、――そこで暫くの間デュエットを唄ふ譯なんだ。唄は歡

目だつたけれど其處だけはちよつと繪になつて居た。それが濟むと、道君皇帝が微行の姿で、白衣の秀士になつて、月夜の花の蔭から庭先へ現れる。皇帝と李師々に命ぜられて燕青が漁家傲の曲をうたふ——ところで其の曲が此の話に關係があるんだ。芝居が其處まで進んで來る間、歌はすべて日本語で唄つて居たのに、その漁家傲の曲だけを純然たる支那語で、支那風のメロディーを入れてうたつた。僕には支那語だと云ふことだけが分つたけれど、あとで聞くと、支那人に聞かせる爲めにスツカリ水滸傳の原文の通りにやつたのだと云ふ。その後僕は水滸傳の彼處のところを讀み返して見たから、文句の初めの方は今でも覺えて居る、——

一別家郷音信杳なり
百種の想思
腸ちぎるゝこと何れの時にか了らん
燕子來らず花又老ゆ
一春瘦せて腰小なり
薄倖の郎君いづれの日にか到らん

——まだ先があるのだがたしか斯うだつたと思ふ。で、此れも後で聞いたところに依ると、燕青が此の歌を支那語でうたつて、ちやうど其の「燕子不來花又老。一春瘦的腰兒小。薄倖郎君何日到。」の文句の邊へ來た時だつたさうだ、突然い、い、ほー—おツと云ふやうに長く引いた甲高い叫び聲が何處かで聞えた。それは明かに支那人特有の響きとアクセントを持つ

た聲だつた。支那の芝居へ行くと、見物人がよく「好！」と云つて喝采して居る、その「ハーオ！」と云ふのが、喉の裂けるやうな高い調子なので屢々「カーオ！」と云ふやうに、鳥の啼き聲に似てあれよりももつと頓興に聞える。だから僕はその時に聞えた聲を例の「好」だらうと思つた。それまで支那人たちは靜粛に見物して居たのだが、支那語の歌が出たのでお世辭に褒めたのぢやないかと、さう思つた。が、意外にも、その聲は舞場から起つたのでなく、會場の外、——舞臺の後ろの方から聞えて來たのだつた。さうして其れが聞えると間もなく、今しがた道君皇帝が出て來た花の陰から、役者でない者が、——苦力のやうな穢い服を着た一人の支那人が、舞臺へ跳び出した。その跡から又一人の日本人が慌てて跳び出して、その男の肘を捉へて引つ張り込まうとしたが、あべこべにぐいぐい引き擦られて行つた。支那人は痩せた、頤髯をぼうぼうと生やした、もう五十以上の老人のやうだつたけれども、何しろ恐ろしく背の高い男で、舞臺の役者たちが急に人形のやうに小さく見えたくらゐだつた。それに勞働者だから膂力があつたのだらう、日本人に肘を取られながら何か分らない事を口早やに罵りつづけて、燕青に扮して居る眞珠の傍へ一歩一歩詰め寄つたかと思ふと、彼女の顔をまともにぢーいツと眺め入るやうな工合だつた。その時の光景、——その苦力の老人に視詰められた刹那の眞珠の様子は、何と云つたらいゝか、兎に角或る奇異な感じをわれわれに抱かせた。その時まで憎いほど落ち着き拂つて居た彼女は、老人の顔が彼女の鼻先へぬつと突き出ると、いきなり唄を止めて一二歩後へ退つて、身構へをしつゝ冷やかに老人の方を睨み返した。それは實に女とは見えない敏捷さで、何がなしにはツと思はせたほど大膽な擧動だつた。——睨み合ひの時間はほんの二分か三分に過ぎなかつただらう、老人はわれわれの方へ背を向けて居たし、それに髯がもぢやもぢやして居るので、どんな表情で居たか分らなかつたけれど、恐らく薄氣味の惡い眼つきで睨んで居たに違ひない。なぜなら、老人の眼を見返して居る眞珠の眼の中にその薄氣味の惡さが現れて居たから。彼女は出來るだ

け冷淡を裝つては居た、が、その大きく睜らいた瞳は包まうとして包み切れない戰慄を帶びて耀やいて居た。さうして、その耀やきが増すにつれて老人の方も息をせいせい切らして肩を顫はせながら、もう少しで彼女に飛びかゝりさうな氣勢を示した。其の時分にまた一人男が出て來て、二人がかりで老人を押さへて居たので、若しさうでもなかつたらほんたうに飛びかゝつたかも知れない、いや事に依ると、眞珠の足もとへ跪いて拜んだかも知れない。――さう云ふ風な哀れつぽいところが老人の様子に窺はれた。恨んで居るのか、泣いて居るのか、愚痴をこぼして居るのか、支那語だから意味は分らないやうなもの〻、「わしが此れほど頼んで居るのになぜお前は默つて居る？　どうか一と言返辭をしてくれ、たつた一と言！　たつた一と言！」とでも云つて居るやうに思へた。その調子は非常に悲痛で、今にも氣絶しさうな苦しさうな聲を搾つて、やはり眞珠の顏を正面から視詰めたまゝ、絶え間なく身悶えしながら一つ言を繰り返すのだつた。すると又一人男が出て來て、今度は三人がかりで無理やりに老人を舞臺の外へ引き擦つて行つた　で、暫く邪魔をされた芝居は無事に進行を續けることになつて、再びオーケストラの音樂が鳴り始め、燕青の眞珠は舞臺の前方に立つて漁家傲の曲を始めから唄ひ直した。――

一別家郷音信杳なり
百種の相思
腸ちぎるゝこと何れの時にか了らん
燕子來らず花又老ゆ
一春痩せて腰小なり

しかし、その唄ひ振りは先よりも一層不出來だつたのみか、聲が低くつて殆んど聞き取れなかつた。明かに眞珠は今の驚きがまだ鎭まらないで、それを一生懸命に堪へながら唄つて居た。彼女は、痩せ我慢をして居る顔を觀客に見られまいとするやうに、少し仰向いて天井の方へ眼を据ゑたが、その眼つきは遠い空の星をでも視つめつゝあるやうな、或はまた、外へ注がれずに心の内へ注がれたやうな眼つきだつた。と、唄の文句が例の『薄倖郎君何日到。』のところへ來た時に、又してもあの老人のほーおツと云ふ奇妙な叫びが、前よりもずつと微かに、舞臺裏の餘程離れたところでこだまの如く響いた。さうしてそれが響くと同時に、天井へ向けられた眞珠の顔は更にぐつと仰向きになり、瞳はからくりが止まつたやうにうつとりと一つ所に漂ひ、喉からは聲が出なくなり手は力なく兩方へ垂れた――が、それもほんの一瞬間であつた、次ぎの瞬間にはドタンと云ふ音を立てゝ、彼女は仰向きに打つ倒れた。――」

「以上に述べたところは『不思議な事件』と稱するものゝ發端に過ぎないかも知れない。けれども僕自身が目撃したのは其處までなのだ。舞臺で眞珠が卒倒するや否や、李師々に扮して居た女優――事に依ると、それがあの燕と云ふ少女ではなかつたらうか？ ――その女優が、もう芝居も何も忘れてしまつて、急いで眞珠の傍へ走せ寄つて抱き起しながら、『眞珠さん、眞珠さん』と云つておろおろしたけたたましい聲で呼んだ。それはいかにも親身になつて友達の身の上を案じ、いたはやつてやると云ふ風な美しい情愛の溢れた態度だつた。いたはつて居る者といたはられて居る者と、此の二人の少女は、やはり一對の可愛らしい夫婦に見え、未だに一方が李師々であり一方が燕靑であつた。燕靑はがつくりと仰け反つた體を李師々の膝の上に抱かれ、直きに正氣づいた樣子だつたが、でもまだ夢から醒め切れない眼つきで、

うつらうつら李師々の顏を見上げて居た。——そのとたんに、舞臺は幕を卸してしまつた。」

「それから間もなく、會の幹事らしい人と梧桐氏とが幕の外へ出て、一場の挨拶があつた、——まことに申譯のない話だが、御覽の通り亂暴者が舞臺へあばれ込んだために、燕青役の林眞珠が卒倒したので芝居を續行することが出來ない。眞珠と云ふ女優は何分十六七の子供のことだから、驚きの餘り一時氣を失つたのに過ぎないのだけれども、まだ起き上れずに樂屋で介抱されて居るやうな始末である。で、われわれから當人に代つて皆樣にお詫びを申し上げる。——何でもそんな風な口上だつたと思ふ。尤も、その口上を述べたのは幹事の方で、梧桐氏は一緒に頭を下げただけだつた。一體あの梧桐と云ふ人は非常な感情家だと見えて、ひどく昂奮して口もきけないくらゐムシヤクシヤして居る樣子がありありと分つた。が、まあそんな事はいいとして僕はそれから先をよく知らないのだ。あの、苦力(くーりー)のやうな老人は何者だらうとか、何の積りで舞臺へ闖入したんだらうとか、いろいろ其の晩も會の席上で噂が出たことだけれども、日本人側では誰も其の消息を理解する者が居なかつた。たゞ支那人側で、一人の紳士が幹事に對して斯う云ふことを云つたさうだ、——今更飛んでもない騷ぎを惹き起して萬々その罪を謝する次第だが、實はあの老爺は、今夜特に私の供として馬車の馭者臺へ乘せて連れて來たのである。と云ふ譯は、あの老爺の娘と云ふのが英租界廣東路の近くにある某妓院の妓女であつて、私は彼女から今夜父親を供に加へてくれるやうに頼まれたのである。彼女がそんな事を頼んだに就いては、聞いて見ると深い事情があつて氣の毒に感ぜられたのでつい承知したのだが、まさかあの親父があんな亂暴を働かうとは夢にも思はなかつた。しかし斯うなつて見れば私が其の責任者であるから、どうか私をあの林眞珠と云ふ俳優に會はせて貰ひたい。老爺が失態を演じたのは、つまりあの少年(と、紳士は云つた、彼も眞珠を男と間違へて居た。)を自分の息子だと思つたからなので、その理由をよく私から説明して罪を謝したいし、出來るだけは慰藉の手段を盡したい

と思ふ。――まあそんなことだつたので、幹事は眞珠が女だと云ふ事や、純粹の日本人で決して支那人ではないと云ふ事を話してやつたさうだ。その紳士は汪と云ふ姓の男で、銀行家で貿易商をやつて居て、上海の實業界でも重きを成して居る人間だつた。廣東路の妓女なる者は蓋し汪氏の馴染みの女だつたのであらう。なほ汪氏の申し立てに依ると、――何處まで本當だか怪しいものだけれど、――自分は彼女と特別な關係がある譯でなく、たゞ心がけの正しい哀れな身の上の少女なので、常に目をかけてやつて居る。彼女はもと南京の林と云ふ立派な家柄の娘であつたのが、親はあの通り苦力に落ちぶれてしまふし、外に賴る者はなし、據ん所なく妓院に身を賣つたのである。それもまだほんの雛妓で、一人前に客の相手が勤められる歲ではない。ところでなぜ彼女の父が自分の供をして日本人倶樂部へ來たがつたかと云ふと、彼女には幼い頃一人の兄があつた。兄とは云ふものゝ僅か一つ違ひで、顏だちも彼女にそつくりの兒で、生れた時に肌が眞珠のやうに美しかつたから『林眞珠』と呼ばれて居た。然るに今から八九年前、林家が沒落して一家散り散りになつた際に、兄は何者の手にか拐かされて行くへ不明になつた。それ以來彼女も彼女の父も、前者にはたつた一人の兄、後者にはたつた一人の息子である眞珠の身の上を、一日も忘れたことはないのである。父が上海へ來たのは職業を求める爲めでもあつたが、一つには兄が此の地へ連れて來られた形跡があり、その在りかを尋ねんが爲めであつた。彼女自身も勿論ではあるが、彼女にも增して兄の方を愛して居た父は、どのくらゐ眞珠を戀ひ慕つたか知れない。歲は取るし、力はなくなるし、糊口には窮するし、こんな時に息子が居てくれたらどんなに手助けになるだらう、――老人は始終それのみ云ひ暮らして居た、さうして片時も搜索の念を斷つた事はなかつた。すると、つい五六日前に、目下米國租界文路に於ける日本人の演舞場で興行中の劇團のうちに、林眞珠と云ふ俳優のある事を彼は探り出して來た。のみならずその劇團が、今夜日本人倶樂部で開かれる歡迎會の餘興に出ることをも突き止めたのであつた。自分が彼女から賴まれて老

人を連れて來たのは、そんな譯からである。彼等親子が眞珠と云ふ少年の行くへを尋ねつゝある事は前から聞いて居たし、且その林眞珠なる日本劇團の俳優が、或は彼等の求むる少年ではないだらうかと、自分もふとさう思はないではなかつた。殊にあの芝居の幕があいてからは猶更だつた。なぜなら、あの俳優が女であらうとは知らなかつたし、燕青に扮して出て來たところでは、聲と云ひ顏だちと云ひ、どうしても彼女の兄弟としか見えなかつたから。『私の兄は私に似て居るとは云へ、私よりもずつと器量の優れた、まるで女のやうな美少年でした』と彼女はいつもさう云つて居たが、あの燕青こそ正しく其の通りだつた。だから老人が間違へたのも實に無理がないのである。が、それにしても舞臺へ闖入したのは無作法千萬な次第で何とも申譯がない。一體あの老人は耄碌しかゝつて居て、平素は至極柔和な正直な男でもあり、それに最初の約束が、芝居を覗かせてくれないでも、馬車の隅ッこへ乘せて門前に待たして置いてくれれば、出入の際にでも様子を見屆けることが出來ようからと云ふ話であつた。さう云ふ條件がなければ自分と雖あの老人を連れて來るのではなかつた。思ふに老人は門前で待つて居るうちに漸く我を忘れて、混雜に紛れて何處からか芝居の見える場所へ忍び込んだのであらう。さうしてあの燕青の唄ふ漁家傲の曲を聞いて、『燕子不來花又老。一春瘦的腰兒小。薄倖郎君何日到。』と云ふところへ來て、幸か不幸かその文句が支那語で唄はれた爲めに、感動のあまり夢中で舞臺へ驅け上つたものに違ひない。老人が燕青に向つて喚き立てゝ居た言葉は、ひどく急き込んで口早やに語られたのでよく聞き取れなかつたが、『おゝ、お前こそ私の伜の林眞珠（Lin-Chên-Chu）だ！　私の眞珠よ！　私の寶よ！』さう云つて居るのだけは明かだつた。しかし眞珠の方では一と言も答へなかつたから、老人は激しく其の不人情を詰り、次ぎには泣き聲になつて訴へた。あの様子はいかにも粗暴に見えたやうなものゝ、決して手荒な事をしようとしたのではなく、我が子を思ふ一心か知らず識らず夢中になつた迄である。それ故、その衷情を憐れんでやつて、どうかあの老人の罪をあまり深

く問はないやうに願ひたい。謝すべき所は老人に代つて私から幾重にもお詫びをしよう。――」

「――汪氏はさう云つてから、更にまた下の如く附け加へたさうだ。――唯今の貴下のお話では（貴下とは幹事を指すのである）あの燕青に扮した俳優は女の兒であつて、且純粹の日本人だと云はれる。けれども、斯う申しては甚だ失禮であるが、私はあの兒が果して女兒であるか、露骨に云へば貴國の少女ハヤシ・シンジユであるか支那の少年リン・チエンチユウであるかに就いて、今以て疑ひなきを得ない。貴下は勿論さう信じて居られるであらう、が、あの俳優は貴下を始め凡べての日本人を欺いて居るのではないだらうか？貴下は先刻老人が舞臺へ暴れ込んだ時のあの少年（と、汪氏は既にさう云つて居た）の素振りを何と見られたか？あの素振りには强ひて老人を知らざるものゝ如く裝つた風がありはしなかつたか？彼が氣絕したのは單に驚愕の結果であるか？若しさうだとしたら暴れ込まれた刹那に氣絕すべきであるのに、老人が拉し去られてから多少の時間を置いて、再び『湖倖郎君――』の唄になつた時に氣絕したのはなぜであるか！これ等の點に就いて、貴下は宜しく綿密たる觀察を下すべきである。――汪氏がそんなことを云ふので、その疑念を解く爲めに幹事は彼を樂屋へ案内した。斷つて置くが五月と云へば上海の季候は可なり暑い。で、多分梧桐氏の差金か何かで、眞珠はわざと浴衣一枚のだらしのない風つきで、寢臺の上に横たはりながら汪氏の見舞ひを受けたと云ふ。舞臺では兎も角もさうした取り亂した樂屋姿を見れば矢張り女の兒に相違なかつたので、汪氏の疑ひは直ぐと晴れた。梧桐氏は苦力の老人を打ん擲ると云つていきまいたさうだけれども、何しろ土地の有力家たる汪氏が仲へ立つたから、そん眞似は出來なかつた。それで其の事件は、汪氏から若干の見舞ひ金が出てその晩は一と先づ收まつたのであつた。」

「然るに其の後二三日過ぎて、汪氏は改めて陳謝と慰勞の意味を兼ねて眞珠を上海の郊外にある彼の別莊へ招待した。

招待を受けたのは眞珠と、あの晩の會の幹事と、その外あの劇團に關する女優のうちで成るべく若い美しいところを二三人連れて來てくれろと云ふ註文だつたさうだ。「人を馬鹿にして居る」と云つて梧桐氏は一旦拒絶したが、幹事の取りなしで結局招待に應ずることになつたらしい。眞珠の外にどんな俳優が出席したかは明かでないが、若い女優ばかりだつたことは確かである。主人側は汪氏と、それから例の妓女が出席した。その晩の宴會の模樣は當時の新聞に精しい記事が出た筈だけれども、僕はそれを讀んで居ない。要するにそれ等の記事は、當夜汪氏の別莊に招待された人々は、日本人たると支那人たるとを問はず、はしなくも一堂に會した上海の妓生林瑤娟と東京の女優林眞珠との、容貌その他にかける不思議な類似に驚かない者はなかつた事、且瑤娟には嘗て眞珠と云ふ兄があつた爲めに、その女優を懷かしがること一と方でなく、二人は汪氏の媒介に依つて其の夜直ちに姉妹の契りを結んだ事などを傳へたのであつた。が、それだけならば別段仰々しく書き立てるほどの値打ちはないのだが、そのあとで又一つの事件が起つた、――と云ふのは、當夜宴會が終つてから、『折角姉妹の誓ひを立てた印に改めて私の父親にも會つて貰ひたいし、せめて今夜一と晩は一緒に泊まつてくれろ』と云ふ瑤娟の懇望を諾けて、眞珠だけが別莊に引き留められて明くる日の夕方まで歸つて來なかつたのである。此の事に就いては新聞の報道がまちまちで、誰も最後まで眞相を摑むことが出來なかつたらしい。たゞ一つ明瞭になつたことは、その晩夜更けてから眞珠は瑤娟を置き去りにして、汪氏と二人で姿を晦ましてしまつたと云ふ奇怪な事實である。そして彼女は、明くる日の夕方梧桐氏の旅館へ獨りでふらりと戻つて來たのだが、其間の時間を如何にして何處で暮らしたかが大切な問題であるのに、それが全然暗雲に包まれて居る。眞珠自身が梧桐氏の問ひに答へたところでは、一體あの汪と云ふ紳士が非常な好色家であつて、瑤娟を利用して眞珠を慰まうとしたのだと云ふ事になつて居る。つまり、最初は瑤娟に對する親切からであつたらうが、眞珠が女であることを知り、且そのなまめかしい樣

屍姿を見た瞬間に汪氏は心機一轉して、忽ち慰勞會の一場を案出したのである。さうでもなければ、汪氏ともあらう者が一妓生と一俳優との間に立つてあんなに斡旋の勞を取る譯がない。或は瑤娟までが汪氏の旨を啣んでグルになつて居たかも知れない。なぜなら、ゆうべ會が終ると間もなく瑤娟は眞珠をとある一室へ案内した。其處には先日の老人瑤娟の父親が待つて居たので、眞珠は支那人のボーイに通辯させて暫く彼等親子と話をして居た。すると、夜中の三時頃に、此れから親子二人で自働車を以てあなたを旅館まで送り屆けようと云はれた。泊めてくれる約束だつたのに變だとは思つたけれども、眞珠は其好意を謝して自働車に乘つた。――ところが意外にも彼女の後から乘り込んだのは汪氏一人で、あれと云ふ間に車は眞暗な路を疾走し出した。そんな譯であるから、眞珠が瑤娟を置き去りにしたのでなく、瑤娟こそ眞珠を陷れたのである。さて自働車で連れ込まれた場所は或る宏壯な庭園に圍まれた奥深い邸の一室だつたと云ふ以外に、眞珠はその地點を指示することが出來ない。恐らく矢張り郊外にある汪氏の別莊の一つだつたかと想像するのみである。その一室で汪氏は彼女を嚇したり賺したりして弄ばうとしたのだが、彼女は夜中反抗して云ふ事を聽かなかつた。で、汪氏もしまひにはあきらめたと見えて、今朝になつてから昨夜の無禮を詫びて、晝飯の饗應をした後やつと歸してくれたのである。それも、此の事件を決して公沙汰にはしないと云ふ一事を誓はせてからであつた。歸る時には例の通辯のボーイが附き添つて幕を垂れた箱馬車に入れられて、一時間ばかりゴトゴト揺られたかと思ふと、アストル・ハウス・ホテルの前の大きな橋（ガアデン・ブリッヂ）のほとりに卸された。此處から彼女は一行の泊まつて居る西華德路の吉田旅館まで、獨りで歩いて來たのだと云ふ。――」

「しかし、此の申し立ては何處までほんたうかあてにならないのだつた。なぜなら、梧桐氏は眞珠と汪氏との名譽の爲に成るたけ此事件を秘密にしようとしたに拘らず、間もなく上海の日本新聞に素ツ葉拔かれて『汪氏の不德』が批難され

ると、今度は支那の新聞紙が『事件の眞相』と云ふものを傳へた。その記事に依ると、眞珠の申し立ては怪しくなつて來るのである。第一に、支那側では眞珠を『奸譎な女優』だとして居る。さうして、汪氏が瑞娟を利用して彼女を欺まうとしたなどゝは眞赤な噓で、事實は全然反對であつて、――眞珠が瑞娟を利用して、汪氏を蕩し込んで其の財嚢を搾らうとしたのである。いや、搾らうとしたではない、たしかに色仕掛けで少からぬ金品を卷き上げたと推測される理由がある。現に彼女は西華德路へ歸つて來た同日の午後二時頃、大馬路の寶石商某號の店頭に馬車を駐めて、汪氏と相携へて其の店へ這入つて行つたではないか。さうして其處で養殖眞珠の首飾、翡翠の耳環、紅玉の腕輪等代價數百元に價するものを買つて貰つたではないか。それを疑ふ者は某號へ行つて調べて見るがいゝ。なほ憎むべきことは彼女は此れ等の品を强請同樣の手段で、買つてくれなければ日本の婦人を辱めた罪を鳴らすと云ふやうな脅喝的言辭を以て手に入れたのである。――此の記事が現れてから、日本側の新聞記者が其の寶石商へ取り調べに行つたところが、果して事實であつた。眞珠は其の時まで汪氏に買つて貰つた寶石類を隱して居たのである。のみならず其れがばれた後にも、『私は決して汪さんに身を任せた覺えはありません。ゆすりをしたなんて飛んだ云ひがかりです。』と云つて泣いて口惜しがつたさうだ。彼女に云はせると、それらの品は汪氏の方から無理押しつけに買つてくれたので、つまり公沙汰にされる事をひどく恐れた結果、口止め料として與へられた、――それを彼女は、早く梧桐氏に打ち明けるべきであつたのを、上海を去る迄は誰にも見せるなと云ふ汪氏の賴みでもあつたし、若し打ち明けたら取り上げられはしないかと云ふ物欲しさから、隱して居たに過ぎない。――此の言ひ譯も可なり不自然のやうだけれども、一般に日本人は同胞の肩を持つて、彼女の人氣に關はるやうな事や『ルネッサンス協會』の信用を傷ける事が內地へ傳はつては困ると云ふので不利益な事實があつても其れを揉み消してしまつた。ところで、此れだけで見ると、新聞紙上の喧嘩では日本側が負けたのである

が、しかし支那側の報道も悉く正鵠を得て居るとは云へないのだつた。先づ何よりも眞珠を『奸譎な女優』にしたのは明かに本人を知らない證據であつて、まだやつと十六七の少女に過ぎない事が分つたら意外に感ずるであらう。いくら支那側に味方をしても、あのいたいけな年頃の少女にそんな膽力や智慧があらうとはとても考へられない事である。次ぎには、汪氏がしたゝかな好色漢であることは平素から隱れもない事實だつた。さうなると、結局兩方に嘘があるので、眞珠は汪氏にうまうまと口說き落され、其賠償として汪氏は彼女に腕輪や首飾を買つてやつた、――まあそこいらが一番眞相に近いらしく、要するに馬鹿を見たのは道具に使はれた瑞娟親子だ、と、そんな風に一時は誰も觀察した。然るに、此の觀察がまた次ぎの事件で引つくり覆されてしまつた。――

第二章

南の話が其處まで進んだ時に、先から何か物思ひに沈みながらぢつと耳を傾けて居た服部は、不意に言葉を挾んだ。

「君、君、ちよつと待つてくれ給へ。忘れないうちに聞いて置くが、君はその眞珠が買つて貰つたと云ふ首飾や何かに就いて、もう少し精しいことを知らないだらうか？　どんな彫りがしてあるとかどんな模様が附いて居るとか云ふやうな事を。」

「さあ、それは分らないね、なぜ？」

「[illegible]

「あの兒は日本へ歸つてから其れを着けたことはないだらうか知ら?」

「どうもないやうには思れる。僕は一遍も見たことはないよ。」

「尤も日本の女は首飾だの耳環なんてものを着けやしないけれど、女優をして居れば着ける時がありさうなもんだね。」

「あゝ、一着けたいと思へばいくらでも着けられるよ。舞臺でも着けられるし、舞臺でなくつてもあの兒は洋服を持つて居るんだから。」

「それぢや事に依ると、梧桐氏に取り上げられたか、でなければ着けることを禁じられて居るんだらう。何處までもそんな品物は貰はないと云ふ事にしてあるかも知れないね。」

「あゝさうだらうよ。何か細工がしてあるに違ひないよ。さうでもなかつたら、その時分一緒だつた連中が今も大勢居るんだから、その噂が出なけりやならない筈だと思ふ。役者なんて奢はそんな珍しい事件があると、いくら口止めしたつてしやべらずにや居ないものなんだが、さう云はれると一度誰かに、眞珠が上海で或る支那人とどうとかしたと云ふ話をチラと聞いたことがあつたけれど、不思議にその事件は誰もあまりに問題にして居ないやうだ。」

「さうかね。あれだけの騒ぎを揉み消してしまつて内地へ知らせなかつたとすると、やはり梧桐氏の手際がうまかつたんだらうね。」

「さう云ふ事にかけると、梧桐よりも梧桐夫人がえらいんだよ。梧桐は正直な男だからしらいを切ることは下手なんだが、夫人の方は大人しさうに見えてナカナカ腹が据わつて居る。何しろ生れが生れだから外交官の夫人にしても耻かしくない様な素養があるし、頭が進んで居るし、此の社會であの女と太刀打ちの出來る人間は男の方にもちよつとないだらう。不斷は思ひやりのある愼しみ深い人なんだけれど、協會の爲めとか夫の爲とか云ふ事になると、いろいろの知慧

を出して、役者たちを操縦したり欺したりするのが實にうまいんだよ。だからきつと夫人が何とかごまかしてしまつたんだね。」

「成る程、或はそんな事かも知れない。それに段々後になつて考へて見ると、汪氏と眞珠とが果して關係があつたかどうかも分らなくなつて來るんだ。要するに事件の中心が何處にあるのだかサツパリ掴まへ所がなくなつてしまふんだ。」

「それもやはり、わざと分らなくするやうにいろんな事を云ひふらしたんぢやないだらうか。」

「さあ、それもあるだらう、――しかし今も云ふ其の後で起つた事件と云ふのは、決して作り事ぢやないんだ。僕は先、あの女優に二度會つたことがあると云つたね、その二度目に會つた時に其の事件が起つたので、僕は多少それを知つて居るんだ。」

「あゝさうだつけ、――その續きを聞かして貰ふんだつけ。――君は眞珠に二度會つたと云ふし、無も君を二度見たと云ふんだが、やつぱり其の時に見たんだらうね。」

「あゝ、さうに違ひはあるまい。あの時なら舞臺で見るよりもよく見えたかも知れない、――それはちやうど日本人倶樂部の歡迎會があつてから一週間ばかり後のことで、上海に住んで居る僕の親父の知人が日本へ歸ると云ふので郵船の波止場まで見送りに行つた時なんだ。何でも朝の八時頃ごろだつたと覺えて居る。親父と一緒に船へ行つて知人に挨拶を濟ませてから、出帆にはまだ二三十分間があつたので、サロンで茶を飮みながらいろいろな人と話をして居た。すると、協會の一行も其の船で歸るのだと見えて、梧桐氏夫妻を始め女優らしい女が大分その邊にうろうろして居る。君の今の話で思ひ出したが、成る程あの總子と云ふ夫人は馴れたもので、あゝ云ふ場所で人を外らさない應接のしかたなんかは、藝人とは云ひながら少しも下品にはならず、しとやかで如才がなくて、さすがに旨いもんだと思つて僕は感心して、

聞いて居たよ。僕の親父なんかも誰かゝら紹介されて、あの夫人に取つ掴まつて辭令を巧みにやられたもんだから、——親父はあの通り子供見たいな所があるから、ひどく面喰つて居たやうだつけ。」

「さうだらうね、あの調子でやられたら君のファザアは困つたらうね。君は紹介されなかつたのかい？」

「僕は掴まると面倒だと思つたから、其の處を逃げ出してデッキの方へ行つた。さうすると其處に、何事が起つたのか、大勢人がかたまつて居る。僕は纔かに人ごみの間から覗いて見ただけだつたが、最初は或る西洋人の女の兒と支那の婦人とが別れを惜しんで居るやうに見えた。西洋人の方も支那人の方も頻りにハンケチで眼を擦つて泣きながら立ち話をして居る。それを大勢が取り卷いて見物して居るのだつた。船の上ばかりでなく、陸にも人が集まつてみんなデッキの方を見上げて居る。ところが其の西洋人だと思つたのはよく見ると洋服を着た日本の少女で、——それが林眞珠なので、支那人の方は妓生の瑞娟なのだと云ふ。つい二三日前まで新聞であんなに騷がれたのに、その問題の二人が斯うして仲好く別れを惜しんで居るのだから實に不思議だ、實に分らないと云ふので、來合はせた新聞記者までが煙に卷かれて、みんなあつけに取られながら様子を眺めて居るのだつた。二人の話は、やはり新聞記者の一人かと思はれる日本人が通譯して居て、その話し聲が時々僕の處へも聞えて來たから、大凡そどんな事を云つて居るのかは推測された。『どうか此の間の誓ひを忘れないで下さい。いつまでもいつまでも此の妹を見捨てないで下さい。』さう云つて瑞娟がほろほろ涙をこぼすと、眞珠の方でも同じやうな事を云つてしくしく泣いて居る。『出來るなら私も日本へ歸りたくはありません。一生あなたと離れたくはありません。私の可愛い妹よ、どうか私の事を忘れないで』と云つて、しまひにはシッカリ抱き合つて、お互ひの肩の上へ顔を伏せてさめざめと泣く。そのうちに出帆の知らせの鐘が鳴り出したので、見送り人はそろそろ船を下り始めたが、二人は容易に離れさうもない。で梧桐夫人や何かが心配して、宥めたり賺したりしてやつと二

人を別れさせて、瑤娟を船から下ろした。瑤娟はその時「私も一緒に日本へ行くんだ」と云つて、だゞを捏ねて仕方がなかつたさうだ。僕は瑤娟の跡へ附いて行つたのでよく覺えて居るが、ちやうど彼女が船を下りると、波止場の群集の間から一人の老人がよぼよぼと駈けて來て彼女につかまつた。それが此の間の苦力の爺——彼女の父親だつた。後で聞くと、父親はあまり身なりが穢いのと風采が怪しいので、上船を許されなかつたのだと云ふ。僕は其處でまた何事か起るだらうと思つたから、暫く波止場に立ち止まつて老人の樣子を見て居た。と、老人は娘の肩に手をかけて伸び上りながら、船の方を向いて一生懸命に叫んで居る。果ては手を擧げたり地團太を蹈んだりして身を悶える。眞珠は欄杆に凭れて、悲しい樣な恐ろしいやうな何となく底の知れない表情で親子を視詰めて居たが、やがて船が動き出して其の表情が陸から見えなくなると、今度はハンケチを振り出した。瑤娟も同じやうにハンケチを振つた。その時老人の顏には云ひやうのない絶望の色が浮かんで、ぱつたりと地べたへ倒れたかと思ふと、倒れながら水へ落ちさうな所まで這ひ出して行つで、船の影を追ひながら手を高く翳してまだ何か知ら叫びつゞけて居た。ちよつと支那の佼貿を見るやうな工合だつた。いつ迄立つても老人はなかなか其處を動きさうもなかつたから、僕はいゝ加減にして歸つて來たけれど、それから一時間以上もさうして居たんださうだ。——事件と云ふのは此れだけなんだが、まあ君はどう思ふね? 此放後の出來事があつてから、前の推測は殘らずあてが外れてしまつたんだ。瑤娟親子が道具に使はれたんだとすると、あんなに眞珠を戀ひ慕ふ筈はないからね。」

「さうして上海での評判はその後どんな風だつたらう?」

「たゞ不思議だと云ふだけで誰にもよく分らないのさ。それきり眞珠は日本へ歸つてしまつたんだから、聞いて見る譯にも行かないし、みんな馬鹿にされたやうな氣持ちがしたことだらう。それから、僕はもう一つ大事なことを云ひ洩

らした。老人は波止場で船の影を見送りながら叫んだ言葉は、『チェンチュウ、チェンチュウ』と云ふのだけが僕に分つたけれど、それは斯う云ふことだつたさうだ、――『眞珠よ、眞珠よ、お前はやはり私の倅だ。お前は決して女ではない、女の風をして世を欺き、私たち親子を見捨てる氣なのだ。いくら隱しても私にはちやんと分つて居る。お前は何と云ふ薄情な子だらう!』――老人はそれを云ひつゞけて口惜しがつて居たんださうだ。眞珠が男ぢやないかと云ふ疑ひは、もう外の者は誰も問題にしなかつたのに、老人だけは飽く迄さう信じて居たと見えるんだね。」

「で、君はそれに就いて何か考へたことかあるだらうか。」

「別にどうと云つて、考へても見なかつたけれど、しかしあの芝居の時と云ひ、船の時と云ひ、眞珠の素振りには何か知ら深い譯がありさうにも思はれるね。あの兒は、今夜の樣子で見ると、あれからちようど一年立つた譯になるんだが、もうどうしても女だと云ふ事は疑ひの餘地はない。あの老人だつて今年の樣子を見たらまさか男だとは思はないだらう。だが其にしても瑤娟の親子と眞珠との間に、何か關係がなければならないと云ふやうな氣がする。あの兒は前に支那へ行つたことがあるとか、支那で生れたとか云ふやうな事實がありはしないか? でなければ支那人の血統が交つて居るとか? 林眞珠と云ふ名前も、偶然の暗合と云へばそれ迄だけれども、日本人の女の名にしては少し妙ぢやないか。」

「いや、あれは何でもないんだ。あの眞珠と云ふ名は、此れも暗合と云へば云へるんだが、あの兒の肌が眞珠色をして居ると云ふので、梧桐氏が附けてやつた藝名なんだ。」

「成る程、あれは藝名なんだね、そりや僕もうつかりして居た。さうなつて來るとてんで問題にならないね。」

「ほんたうの名は、たしか『林しづ』だつたと思ふ。――それに梧桐と云ふ男は弟子を取るのになかなかやかましいか

で、折角世話をしても直きに止められたり謀叛されたりしちや困ると云ふので、女優なんかになると戸籍謄本を取らせたり證文を書かせたりするくらゐだから、あの兒の身元なぞもよく調べたに違ひないよ。何でもあの兒の内は深川の猿江か何處かで、今では落ちぶれて居るけれど、もとは神田邊で代々藥屋をして居た東京の舊家ださうだがね。實は僕も、眞珠の身元を知りたいと思つたことがあつて、寛治に聞いて見たらそんな話だつた。それから――あゝさうだ、僕は一度あれの親父と云ふのを見たことがある、いつだつたか樂屋へ訪ねて來た時に。何でも小間物屋の番頭見たいなりをした四十五六の男だつけ。眞珠によく似て居たから一と目で親父だと分つたよ。まあ戸籍なんぞはごまかさうと思へばごまかせるし、梧桐の云ふ事だつてあてにはならならないが、親父の居ることはたしかだし、母親もまだ達者ださうだし、何にしても江戸つ兒の血筋を引いて居るには違ひないね。言葉も純粹の東京辯だから、――」

「だけども、あの顏つきには何處か斯うぼうツとした、支那人と間違へられさうなところがあるだらう?」

「あゝ、それはある、顏の感じから云ふと支那人臭くつて、どうも江戸ツ兒とは見えない。一つには全く大理石のやうにきめが細かで色が白いせゐかも知れない。さうしてあのぼうツとしたところがあの兒の特徴なんで、あれが或る時には初ひ初ひしい愛嬌に見えたり、或る時には妙に曖昧に見えたりして、何だか氣心の知れない子供だと云ふやうな氣を起させるんだよ。だからほんたうに無邪氣なのか猫を冠つて居るのか、實は僕にもよく分らないんだけれど、その分らないところが又僕の氣に入つて居るんだ。」

「ぢや、上海での出來事のやうな不思議なものが加はるとすると、なほ君の氣に入る譯だね。」

「さうだ、一體あの兒にはさう云ふ不思議なところがあるんだ、――」

その時、南は服部が奇妙な眼瞬きをするのを見た、――それは、何か斯う、遠くかすかに消えかゝつた記憶を、心

の底に喚び返しつゝあるやうな工合にであつた。が、どんよりと濁つたまゝ宙へ向けられて、さうして眼瞬きを續けて居る眼つきを、若し知らない者が見たら或はぞツとしたかも知れない、……何かぞツとするやうな薄氣味の惡いものが其處にあるのだと云ふことを、南も感じたのである。彼は先から、餘程服部の好奇心を動かすべき話をしてやつた筈だのに相手が思つたほどにも驚かない様子なので、不審を抱きつつある矢先であつた。「自分が愛して居る女の身の上に關するとだし、非常な怪しい事件なんだから、あの睡さうな顔の中にもいくらかびつくりした表情が現れさうなものだのに、さう云へばいやに落ち着いて居る。」――で、南は、服部が事に依ると上海の話をちやんと知つて居て、わざと空惚けて居るのかとも想像した。けれども今日までの服部は、南に對してそんな人の惡い不正直なやり方をしたことはない。人間がガラリと變つてしまつたのなら格別だが。孰れにしてもあの林眞珠と云ふ女には或る深い秘密が纒はつて居てそれと上海の事件と關係があり、その關係の或る部分を服部が知つて居るとか、嗅ぎ付けて居るとかではないだらうか？　南の推測は其處までしか行かなかつた。もともと彼は服部の爲めに此の話を持ち出したので、自分はそれ以上頭を惱ます興味を感じなかつたのである。

「上海でさう云ふ事件があつたと云ふのは、今日始めて聞くんだけれど。……」

と、服部は續けた。

「……あの兒にはまだ外にいろいろ不思議なことがあるもんだから、僕はその話を聞いてもそれ程意外だと云ふ氣はしないんだよ。そのくらゐな事があるのは當り前のやうに思はれるんだ。さうかと云つて、僕は今のところあの兒の秘密を何も知つて居る譯ぢやない、そんなに知りたいとも思はないし、いつ迄も知らずに居る方がいゝやうにも考へるんだが、しかし時々、どうも不思議でならない氣がする。さうしておかしいのは、僕以外に誰もその不思議に氣が付いて居

ないらしいんだ。ぢや、何處がどう云ふ風に不思議だと云はれると、僕もちよいと返答に困る。此處が不思議だと云つて指すことが出來ない。たゞ腹の中で獨りで考へて居るだけなんだ。僕があの兒に惚れたのは此不思議な氣持ちに引つ張られて行つた點が餘程あるんだよ。こんなことを打ち明けるのは君が始めてなんだが……」

服部の薄氣味の惡い眼瞬きは、いつの間にか極まりの惡い眼瞬きに變つて居た。

「君が愛して居る女を斯う云つちや濟まないけれど、あの兒はどうも氣立てが素直でないやうに思はれるね。僕はたつた二度しか見ないんだが、――そりや無邪氣なところもあるし、瑞娟と抱き合つて泣いた樣子なんぞ情が深さうには見えたけれども、僕はどうも氣持ちのいゝ印象を受けなかつた。あの兒よりはまだあの蘋と云ふ兒の方が、……」

南はさう云ひかけて急に默つた、――芝居がはねたと見えて廊下をバタバタ鳴らして來る賑やかな足音が、その時聞えたからである。

（此の章終り）



美しき氷河

室生犀星

姉が嫁入りしてから私はよくその海岸へ遊びに行つた。ことに東京から出かけるときなど、ときとすると一と月餘りも滯留することがある。越中伏木の港も海べりに寄つた小綺麗な遊女屋にはさまれた大きな料理屋で、姉はそこの磨き立てられた帳場に、いつもきちんと座つてゐた。いつの間にか、すつかり垢ぬけした姉は高い丸髷に結つて、抱え藝者の揚げおろしの覺え書きをしながら、唇のところに漆のやうな墨の痕をつけて、子供のときからの左の頬のほくろをぽつちりと星のやうに浮かしながら、二年振りで訪ねて行つた私を迎えてくれた。

私は裏の離れの六疊まで、長い料理屋らしい敷石のまはりの苔むしたのをつたひながら行くのが好きで、いつも其處の離れで起きたり臥そべつたりしてゐた。そこには、立山で捕れたといふ座敷一杯にひろげられた深い艶々しい熊の毛皮がどつしりと敷かれて、夏の初めではあつたが不思議に冷々したさわりを臥そべつてゐる私の肌につたへた。どこか、高麗芝のやはらかい上に臥そべつてゐるやうで、全體からくる落ちついた漆黒な毛皮の感じが、極めて涼しい氣もちをあたへた。そこから

母屋までの中庭の袖垣にからんだ千日蔓の青い綠葉越しに、夕方近くなると、浴場に隣つた化粧室に六人の抱え藝者が皆揃つて、夏の晩方の長くつづく青白い光線のたかに肌ぬぎになつて化粧してゐるのが能く見られた。それらは皆いちやうに鏡臺から反射された青白い光で、胸もとから襟首へかけて實になまなましい隆起された部分が、ことさらに蒼白く、かつきりと別な强い呼吸をしてゐるもののやうに見えた。みな一樣に一心になりながら鏡を凝視してゐるので、すや俯向き加減に暗みがかつてゐる髮のところに、まざまざとぽつたりした白い露き出しな腕が、いろいろな曲がりくねつた格構で、暗いねんばりした藻のやうな髮を引きのばしたり、ぴんの前髮をたぐつたりするのが、ときどき香油に練りつけたやうな髮の地に鈍い光をにじませるほかは、室の內部のくらみに雜りまぎれて、ただ、奇麗なぐなぐなな白い手つきだけが、靑い矮い袖垣のよこからと、その故意と破れを見せた雅やかな隙間から、ちやうど、田舍の洗ひ場であらはれてゐる大根のやうに、美しい加之も絕え間なく微動する光線のあいまに、ちらちらと透いて見えた。

さういふ光景は私にとつて珍らしいものでなかつた。それは每日のやうに、長い夕ぐれになると、きつと見える光景であるからである。私は每日それを見てゐるうちに、いつも靄棚の上にむづむづと動く氣味わるい、柔らかい不思議な生きものをすぐに思ひ出した。ただ、柔らかく白いといふより、その背中に竹の節のやうな暗みがかつたものが、いくつとなく割れ込んで、その節はさながらむしのやうな暗みある陰影を各々もつてゐた。それればかりではなく、どこか牛と共通なものをもつ顏や、さらざらした小さなひれのやうな足などが、むづむづと指にでも這ひつくと、うす擽くねばり强く腹のそこまで氣味惡くかんじさせることなど、いつも袖垣の隙間からそれと感じられるのであつた。たとへばちらちらと目にうつる手の一部や、胸の部分がかなり隔つてゐるせいもあるが、なぜか袖垣の割竹や、千日蔓の青いみどり葉

もが、ことにふしぎな青い心臓をもつ意志も考へも言葉もない蟲けらが、實にふしぎな或る空氣のなかに沁みこんだ傳說や口碑をそつくり抜け出して、毎日、あゝいふ風に蜘蛛が糸をくるやうに長い髪をたぐつたり、さらに、それらをぐるぐるに巻いたりしてゐるのではないかと、私はいくたびとなく注意して眺めてゐた。ただ、みんなは默つて、慌しさうにせかせかと、あるものは、ぽつちりとぐみのやうな唇紅をさしたり、あるものは揉みついた乳房を小さく襟ではさみ込んだりしながら、だんだん暗くなるあたりから、たへず趣はれてゐるやうにとり急いでゐた。そのとり急いだやうな、足早な手つきが、だんだんに執念深いお祈りでもしてゐるやうにぴんと角のやうに小指だけをつッ立てたり、また、奇體に天井から品物でも受取るやうな格構になつたり、さらに、あたまのなかから水のやうな冷たいぢやぶぢやぶしたものを汲み出すやうにも見られた。さうかと思ふと、殆んど想像もつかないほど永い間一ところに眠と左の手が、停まつて中々動かうとしないのもあつた。そのひろい胸もとにだんだん夕ぐれの暗みが這ひかけると、奇妙にその胸部から腹部へかけて膨らみが加はつてゆくやうにもおもはれた。一様にへしつぶされたやうに上目してさし覗くためであらう。あるものは平つたい鰈のやうに顔面がゆがんだり、あるものは髪をいじくつてゐる白い腕の肉つづきが、ぼんやりと一枚の布を引きのばしたやうに流れてゐたりした。しかし其等のものが眺めれば眺めるほど、ごつちやに入り亂れた感覺を惱ましてきて、ただ、ほんの、ちらちらする白い紙片が散らばつたやうに、極めてうすく、輕く、ふわふわした綿雪のふるやうにも眺められた。が、その人間の肉體がふくむ不思議な脂肪が放つ一種のにぶいとは云へつやつやしい光澤の蒼白さは、むしろ拭きこんだ紫檀のやうなこつくりした地味な光をもつて、やはらかい絹ものの陰つたときのやうに、ときをり白く白く蒼白くひらりとかがやいた。それほど私の目も毎日のことでありながらも、いちはやい眩惑にとらへられてしまつて、その一部分づつを味ふより、むしろ、やはりむづむづと青葉の上を這ひうごいてゆく蠶のやうに思は

れてしかたがなかつた。

「ご飯をおあがりくださいまし。」

と呼びにきた半玉のお鶴は、もう、すつかり化粧を總えて、白い、鋭どい波をうつた美しい襟脚を長くぬき出して、眼尻にさした紅をキと光らして言つた。お鶴は二人の半玉のうちでも一番子供らしく、その上、麻のやうに白く小さく痩せて、ひ弱さうに見えた。

「ね、はやくいらつしやいらましな、おんぶして行つてあげませうか。」

と微笑ひながらいつものやうに椽に立ちながら、此方をながめた。

「おんぶして行つてくれるならいいね。けれども眞ン中から折れさうだな。」

と言ふと、すぐ聲を出して笑つて

「あなたよりか最つと大きなお客樣をおんぶしたことがあるわ。大丈夫よ。」

「さうかい。ぢや、ひとつ……」

と私は笑ひながら立ちあがると、すぐ、袖垣のところから、これも半玉のお吉が紅くふくれたやうな、つやつやした肥えた顏を出して來た。が、すぐ私はお吉がやや不愉快さうな目をしばしばさせてゐるので、わざと椽側に立つて笑顏を見せた。

「いまね。兄ちやんがおんぶしやうとお言ひなさつたの。」

と、お鶴は無邪氣に言つたが、お吉はすぐ

「お帳場で今あなたを呼んでゐらしつたわ。すぐ行かなければいけないわ。でも、いつもあなたはおつかひが遲いつて

言つてゐたわ。」
とお吉は、鮪のさしみを二つくつつけたやうな、大きな美しい唇さきで言つて、すぐ私ににつとして見せた。お鶴は
おどおどして、そのうへ、人のよささうに
「さう。ぢやわたし行かなければわるいわ。兄ンちやん、すぐにいらつしやい。」
と言つて、からからと敷石をつたつて走つて行つたあとで、お吉はすぐ私のそばへ來ると、ぺろりと舌を出した。長い濕かさうな、ぺろぺろな美しい緋縮緬のやうな冴えたいろをしてゐた。
「お吉さんは人をだますことがうまいな。」
と、私はいひながら、ぢつとその血色のよい牛肉のやうなてらてらした頬をながめると、いつものやうに、ぐつと引き寄せられるやうな愛着をかんじた。抓つて見たいほどぽたぽたとしてゐるからだ。
が、お吉はいきなり袂をたくしあげて恥かしさうに、多少わざとらしい習慣的な手つきで顔をかくして
「ふふふふふ……。」
と袂のなかで笑ひ聲を立てた。それがどうしても癖になつてゐるらしく、私が何か一と言をいふと、すぐに初められた。そのたびごとに、私はそつと脇の下へ手を入れられて、くすくすと擽ぐられるやうな氣がして仕方がなかつた。
「もうご飯が濟んだの。みんなが、――。」
と言ふと、やはり笑つてゐて、わけが分らなかつた。馬鹿にされてゐるやうに、ちよつとの間、小腹が立つたので
「何とか言へ。お吉坊主め！」
と言ふと、わつと言つて泣き聲をあげたかと思ふと、大きな目で、しがみつくやうに私を凝視めたが、すぐ泣き出し

た。私はびつくりして
「なぜ泣くんだ。何んにもしなかつたぢやないか。ひとが見ると困るぜ。
と言ふと、そろそろと袂から顔を出して、しやくり上げながら甘えた聲で
「あたし、坊主ぢやないわ。」
と言つた。こんな廓で坊主といふ言葉が禁ぜられてゐることを思ひあてたので、つまらないことを私も言つたものだと、こんどは其の辯解をして
「ちよつと言つただけだ。氣にかけない方がいいよ。わるかつたら謝まるから。」
と私は心でおかしがりながらも、まだお吉も子供だなと思つた。
「謝まらなくてもいいわ。ぢや、坊主ぢやないつて言ひ改めて頂戴。」
と言つたので、私はさうでないと取り消すと、彼女ははじめて笑ひがほになつた。にんがりと、たつぷりした頬を段々にゆれさせた。
「さあ行かう」
と私は椽下駄をひつかけると、いきなりお吉は椽にあがつて
「おんぶして行つて頂戴。」
と言つて、肩さきをつかんだ。それが無邪氣な、そとからだんだんに敎へられたやうなところもあつた。
「よし、來た――しつかりつかまつてゐるんだよ。」
と言ひながら、私は重いさかなのやうなものを背中にのせた。胸、腹、足、さういふ肢體の部分部分がはつきりと感

じられた。つめたかつた。が、どちらかといへば、その重みがすればするほど、背中にりんかくが鮮かすぎるほど、ほたぽたして來るのだ。

私はあたりを見まはした。もしや姉にでも見つかりはしないかと、暮れかけた袖垣のあたりを見たが、人氣がなかつた。若葉のかほりを濕っぽくふくんだ海の香のする風が、蒼いあたりにこもつてゐた。そのとき、ふとふりかへると、お母屋の二階の手すりから、お鶴がほの白い浴衣をきて、ほつそりと立つてこちらを眺めてゐるのを見たので、私はそつと袖垣のかげへお吉を負つたままかくれた。背なかから

「誰かが見てゐるの。」

といふお吉の聲がした。

「うん。だまつて――。」

と私の頸首にふうふうかかる生温かい呼吸を氣にしながら立ち竦んだ、お吉はこころもち、息をつめるやうにした。

――お鶴は、しばらくすると、室へはいつて行つたので、私たちはまた庭の敷石をつたつて、お母屋の方へ、植込みのかげをぬひながら行つた。母屋にはすつかり灯がともれてゐた。

姉が飯をつぎながら

「おまへは來るごとにごはんが少量くなるのね。ずいぶん澤山たべた子なんだがね。」

と言つて、また輕くついだ。

「子供のときとちがひますよ。姉さんだつて、もう皺がよつたぢやないか。」

と私は額にはいつたしはを見つめた。まだ脂氣があつたが、若い時分のやうな練りあげたやうな底ちからのある艶は

が最う失せてゐた。
「ほんとにね。おまへがそんなに澄ますやうになつたんだから。」
「そんなに澄してゐるかな。さう見えるかね。」
「そんなに氣にしなくつてもいいわ。もつとたんとおあがり。」
と微笑しながらいふ姉は、いつまでも幼年時代の私のあどけない姿を描いてゐるらしかつた。ときどき、私の目をぢつと見つめて何か讀もうとするらしかつた。それが、こんな派手な料理屋にきてからする目つきだつた。
「もうお嫁さんをもらつたらいいぢやないの。」
と言つて探るやうにする目は、やはり何處かに鋭い光を潜ませてゐた。六人の抱へ藝者をつかつてゐるだけ特別な、ひとの目からすぐ心に割り込んで何かをさぐり當てやうとするところがあつた。
「いいのがあればね。しかし綺麗な子でなくちやいやだな。」
と言ふと、すこし考へるやうにしながら
「おまへはどんな女のひとがすきなの、言つてごらん。」
と言つて、珍らしさうに返辯をききたがつたが、
「さうだな。お吉といふ子があるね。あんなのが好きなんだ。」
と言ふと、姉は吃驚したやうに呆れた目をしながら
「まあ、おまへは——あの子はしやうがない子なのよ。手癖がわるいし、踊りが下手だし、とても十四には廻りかねる

と言ふのを私は笑つてききながら
「しかし利巧ならいいぢやありませんか。」
すると姉はむつかしさうな顔をして
「でもね。あの子は、あんな小ちやいくせにお客様をあしらふことがうまいのよ。藝者だちだつて呆れかへるほどなんですよ。いつかもね。自分で勝手にお客のところへ行つたりしたことがあるの。あんなやくざな子をすきぢや姉さんはいやですよ。どうしてお前はそんなことを言ふやうになつたのだらう。」
と姉はあてが外れたやうに言つた。
「好きなら仕方がないさ。」
と私は食事をしまつて椽側へ出た。晩方からどつと涼しくなつてきた。すると姉は女中にあとかたづけをさせながら、帳場から私のうしろ姿を憂欝さうに見つめてゐたが、何か考へ込んだらしく、私のところにやつて來て
「あの子にかかはらないで下さいよ。家の抱え女に隙を見せるとたいへんですから。」
と、おどおどと囁いた。が、私はぶつつけに
「心配しなくともいいんですよ。」
と言つて庭へでた。お吉は袖垣のところに待つてゐた。星あかりの涼しい海鳴りがしづかにして來た。
「ご飯がすんだの。」
「うん」
と言つて私はそのそばへよつた。お吉のからだからはいつも脂こい匂ひがしてきたが、わたしはその執念いむん

んするのが好きだつた。悩ましく苛々と心にまで絡んでくるやうな匂ひだ。私はその匂ひをかぐときに、私のからだからもそれと同様な匂ひが發せられて、それが雜つて湧き立つやうにおもはれた。

「何がそんなにおかしいのだ。」

と言つてもお吉はからだを揉むやうに紆曲らせ、そのうへ腰をかがめるやうにして、唇のさきで、まるで笛のやうに笑つた。

「ふふふふふ……。」

と。私はその聲をきくごとにむづ痒い性慾的な、どろどろな穴へおしこめられるやうな氣もちになつて、ちつと闇のなかに咲いた黑ずんだ牡丹の花のやうな顏を見すえるごとに、いきなり飛びつきたくなるやうな、烈しい情慾をかんじはじめた。

帳場の磨きあげた長火鉢のところにゆくと、通りから涼しい松並木をゆすぶる風を受けながら、藝者衆が立て膝をしたり、たばこを喫んだりしてあちこちにごろごろしてゐるのを眺めてゐた。まだ何處からも坐敷の聲がかからないみんなは、手持無沙汰に三味線の糸をかへたり、講談本をよんだりしてゐた。藍いろの浴衣をひつかけたお吉も、いつの間にかねえさんだちの間にはさまつてゐたが、私のかほさへ見れば、きうに視線をくたくたにもじらせて、わけのわからない笑ひ聲を出した。それが白痴のやうにも見えるほど突然で、ねんばりした糊をひきのばしたやうな頰が、そのたびごとに動いて三つも四つもえくぼができるほどだつた。

私のすぐよこに小六さんがゐた。せいの高い二十をでた一番はやりつ子で、ぐつと裸脚をぬいで、太い樑のやうな立膝をしながらゐたが、そつと私の耳にささやいた。

「兄ンちやんはお吉さんをおすきなんでせう。さうでせう。」

と、他のものに知れないやうに言つて、ちよいと微笑をしたがすぐに元のまじめな顏をした。

「どうだか……。」

と私は笑つて見せて、ちよいと小六の目を見たが、その目のひかりはいきなり私の急所を衝いた。私は何かしら微笑せずにゐられないやうな氣がした。そこへ姉が來たので私はぷいと立つて離れへかへりかけた。あまり藝者と帳場で話をすると、姉は神經質なぴりぴりした顏をするので、わざと座をはぐしたのだ。

庭の敷石づたひにゆくと、いつの間にか料理番が打水をすましたらしく、敷石も涼しげに濡れ、植込みの這ひ松のひくいこんもりした上にも、ちらちらと露の匂ひがふくまれてゐるやうだつた。夜になつて靜かになつたあたりに、すぐ波の音が裏戸に迫つてきこえた。

「あンちやんか。」

と呼ぶこえがするので、はつとすると、いつの間にか店からさき廻りしてきたお吉が、そで垣のところにまるまると蹲んでゐるのが、白いふわふわした犬のやうにぼんやりして見えた。

「お吉か。いつの間にきたのだ。」

と近づくと、上目した大きなのが、空あかりに透いて美しくいきいきして見えた。が、すぐ、唾をふくんだやうな反ッ齒なやうな笑ひごゑが、ふふふ……と起つた。

「いいものを上げやうか。ほら。」

とお吉は白いものを、踴んだまま手のさきにもつて差しつけた。あめン棒だ。私はいきなりそれに食ひついた。それほど、私はお吉にあつた瞬間からすつかり巻きつかれたやうな、する通りにされる悩ましく苛々した快よさがおそふてくるのだ。

「お吉、海へゆこうか。それでも母屋に用事があるといけないな。おれが敎へたやうであとで小言をくひはしないか。」

といふと、お吉は立ちあがつて

「かまはない——な、アンちやん。」

と言つて、馳け出した　裏戸が重い憂欝な音を立ててあけられると、もう姿が見えなかつた。海はくろずんだ大きな釜底のやうに、どつしりと地にくひ込んで置かれてあるやうに、しかも、渚はずつと白い波の穗で長い線を波止場までつづけてゐた。ひと口にいへば夙いでゐるやうで、しかも底全體がこほうこほうと遠鳴をつづけてゐて、それがこんもりと立山連峯と能登半島とに抱かれてゐるやうな位置にあるので、ことに、重々しく暗く憂欝に鳴つてゐた。沖には漁船の灯があつた。お吉は波打際まで勢ひきつて走りつづけたが、すぐに踏み停まることができないでぢやぶぢやぶと二三歩波間に踏みこんだが、こんどはすぐに砂地にかけあがつた。

「アンちやん——ちやん——。」

と叫びながら、裾もあらはに私にかじりついた。

「もうすこしで海へ陥り込むところだつたわ。」

と言つて、こんどは素足になつて「アンちやんも這入つたらどう。涼しくていい氣もちよ。」と言つて、波打際のしづ

かに寄せるところをぢやぶぢやぶ歩いた。私もその氣になつて、どこか頭の中までしんとするやうな、最初の一歩を海の水に浸すと、爽やかでせいせいした心持になつた。どこか、ぬらぬらした非常に長い生きものが絶え間なく脛にさわつてゐるやうで、むづむづしかつたけれど刺戟の快よい海水の冷たさが、足のさきから沁みこんだ。お吉の長い脛のさきにひらひらしてゐる足全體が、ひらつたい鰈の腹のやうに白くぶるぶる震へてゐるのが、どこか藍いろめいた暗い水のなかに、ハッキリと砂地にくつついて見えた。見れば見るほど晒されたやうに平つたく、刻んだやうに水のせいで震へてゐた。

そのときお鶴の聲が家の裏戸あたりからしてきたのを、いちはやく私は耳にいれたので、二十間ばかりさきの暗い裏戸のあたりを見つめると、果して例の重い戸があいて、やや明るい離れの電燈の餘映が、お鶴のほつそりした姿を浮かせた。

「お鶴さんがきたわね。あがりませうよ。」

とお吉はすぐに器用に乾いた砂のくつつかないやうに、今、波のひいて行つたばかりの濕つた固い砂地をつたつて下駄をひつかけた。私もそのとほりにすると、もう、お鶴は、ほのあかるい波打際のあかりに私だちを見つけたのか、ばたばた馳つて來た。

「まあ、そこにいらしつたの。お吉ちやんも一しよだつたの。お母屋にどつさりお客様があるんで忙しいんだわ。」

とお鶴はすこしあてつけるやうに言つて、こんな夜中にこんなところに來て居ちやいけないと言ふやうな意味をふくませた。

「いま來たばかりだわ。でも足をよごしちまつたんだもの。」と言つて「ねえ、アンちやん。」と甘えるやうに言つた。

私はうなづいて見せたが、蒼くほつそりした顫えるやうな小ちやいお鶴の顔を見ると、すぐ、その目が悲しげに私を詰責してゐるやうだつたので私はわざと微笑をそつとお吉にしれないやうにちらと注いで、すぐ、その目をただ廣い砂地つづきの遠い松並木の方へそらしてしまつた。それきり三人は默つてあるいて、すぐ裏戸からはいつて、私は離れの部屋にもどらうとすると、お鶴がゐるのにも關はないで、すこしばかりやり過して置いて

「あとからまた來るわ。きていい。」

と囁いたが、私は默つて椽から室へあがつた。おほかたお鶴が寂しさうにこちらを向いて眺めてゐるのが氣になつて、あれはきつと物悲しがつてゐるにちがひないと思つたからであつた。

二人が去つてしまふと、そこの圓窓つづきの椽側のすだれ越しの燈籠にも灯が點れて、たわわに枝垂れた秋のわか柴がしつとりと打水にぬれてゐるのを眺めてゐた。そこには小さい机もあつたし、客は絶對に通さなかつたしするから、いろいろな讀書もできるのであつた。

しばらくすると、椽廊下をするすると誰かがあるいて來るらしい、しづかな上草履の音がしたので、私はねころんだまま、そつと聞耳を立てると、その微かな音がひつそりと途絶えたのに氣がついたので、もしやお吉ではないかと半分ばかりからだを起しかけたが、やはり音がしなかつた。ふしぎだつたので今度は起きて椽側へ出て見ると、お鶴がぼんやりと佇つて、私を見るとぢつと俯向いてゐた。その陰氣さがすぐに私をうなづかせた。あまりお吉とばかり遊んでゐるために、妙に自分が嫌はれたやうな氣もちになつてゐるのだ。それにお吉にしろお鶴にしろ、毎日いろいろな藝者と客との交渉を知つてゐるので、自然女ばかりの家だけに私を珍らしがつた。それに私と姉との關係もあるのだ。

私はそつとお鶴を呼び込んで

「さあ、おはいり。あつちは忙しいかね。」

と話をまぎらせるやうにすると、子供らしく

「お吉さんはお座敷に出ましたわ。それで來ましたの。」

と言つて、稽古扇をぱちぱちいぢくりながら言つた。平常からお吉が流行つた。きやつきやつと騷ぐお吉は陰鬱なお鶴にくらべて客はみな好いた。だからいつもお鶴はひとり殘されて、綺倆のわるい藝者だちと、いつも帳場にぽつねんと座つてゐた。――それをおもひあてて私はなるべくお鶴の氣をやはらげるやうに話しするやうにした。けれどもお鶴は椽側に立つてゐて、やはり、ぢつと憂はしげにしてゐた。

「何を考へてゐるのかね。そんなに俯向いてばかりゐて――。」

といふとお鶴は靜かに微笑つたが、やはり踊の扇をいじくりながらゐて、默んまりをつゞけた。お吉のことを考へてゐるんだ。あたり前のうちの女の子なら、そんなに深く考へないのだらうが、やはり習はされた一種の廓の心理といふものにお鶴もとらはれてゐるのだ。

「お吉のことだらう。なんでもないんだ。お吉もお前もみんな好きなんだよ。ただ、お前と遊びはぐらしただけなんだから、氣にかけない方がいい。」

といふと、

「でもあたしよりお吉さんをおすきなんでせう。」

と、そつと覘ふやうな、どこか甘えたやうな聲で言つた。

「同じだよ。つまらないことを考へないで此處へおすはり。」

といふと、やつと熊の皮の上に、やせた小さな膝を乘せた。見つめてゐるとどこか肺の弱いらしい半玉として寂しすぎる子であつた。

「あたし、いつでもかう思つてよ。いつぽんにならない前に死んでしまふの。」

と、この子の癖のやうにいふ、ひくい沈んだ聲で言つた。

「お前はすぐそんなことを考へるから、だんだん陰氣になるばかりなんだよ。もつと明るい氣もちにならなければないんだ。」

と、私は元氣をつけるやうにいふと、その反對に益々沈み込んだ。

「でも一本になるのはいや。その前に死んでしまつたほうがいいわ。ほんとに長生きしないわ。したくないのよ。」

と、こんな話になると、すぐ能辯になるのだつた。

「けれどもね、死ぬ死ぬつて言つたものはなかなか死なないもんだよ。しよつちう、お前のやうに口ぐせに、そんなことを言ふもんぢやないよ。」

といふと、寂しく綻れたやうに微笑つて

「でも言ひ當るといふことがありますわ。しまひには、きつと病氣になるやうになるわ。今年の秋あたりに——ほんとよ。きつとなつて見せるわ。」

と、その子供らしい言葉のなかにも、動かない陰鬱さがこもつて、しかも、しつこくそれを信じやうとするのが私には少し氣味がわるすぎた。ことに暗い陰氣な話になるとお鶴が急に元氣になることも氣になつた。たとへば病人が病氣の話を非常に好きなやうに、お鶴の厭世的ないとしげな魂が、ときどき、やはり私のこころを沈ました。その沈んだ

瞳は蒼白い顔のなかで一番强く光つてはゐるものの、たへず、あてのない仄白い煙のなかをさぐるやうに、いつもぼんやりしてゐた。それが子供らしくない深い思慮になやまされた悲しげな瞬きと光りとを私にときどき、はつとおもはせるほど接近させてきた。

「學校では一番せいせきが、いいつて言ふんぢやないの、だから今のうち勉强したらどう。」

と、藝妓學校で一番せいせきがよく、いつか姉が「あのお鶴といふ子は、半玉なぞしないで、學校の先生にでもするやうに仕込むといいと思ふの。頭がよくて、何んだつて出來るんだつて――。」と言つたことを、ふと思ひあてた。それほど、お鶴は覺えの敏り深いところがあつた。生れつきから彼女の撰ばれたものが異つてゐたのだ。半玉よりやはり讀み書きがふさはしかつたのだ。その偶然なかけ違つた運命のまはり合せが、彼女をしていつも帳場に何時も寂しく一人で座らせた。客がつかなかつた。

「わたし學校もいや。みんないや。」

と言つて、どこかから底のぬけたやうに、がつかりしたやうな吐息をついた。妙に年よりじみた生え際のおしろいのはけ方の拙いのが、もの寂しく目立つてきた。

「ぢやどうしたらいいの。」

と言つても、しづみ切つたやうな熱情が、もう起上らないやうにも見えた。

「あたし、死んだほうがいいわ。」

と言つてやはり俯向いてゐた。私も默り込んで、そのほつそりした顔を時々眺めた。

母屋には客が立て込んでゐるらしく、海岸らしいざれ唄に伴れて三味の音が賑やかに起つてゐた。やたらに人々の魂を煽り立てるやうな陽氣な騷々しいなかに、凍え上つたやうな白々しい淋しさが潜んでゐるのを、そのざれ唄の絶え間や、三味線の途絶えたときに、森として脈打つてくるのを私はきいてゐた。ときどきにどつと上る大勢の笑ひ聲のとてつもない高いのにまじつて、きやつきやつと叫ぶ女どもの疳高い、しかも華やかな抱きしめられるやうなのが、ひき裂くやうにするかとおもへば、こんどは確かにお吉らしい若い踊り上るやうな叫びごゑや、腹をかゝへて笑ひさゞめく苦しさうな調子さへまじつて、その座敷に立つこまかな埃さへ目に描かれるほど、はつきりと私はそれらの騷ぎを想像したが、そのきい〱——と擧げるお吉の叫び聲のするごとに、私は青ざめるほどの熾烈な衝動に襲はれた。まだ十四やそこらで、殆ど想像することもできない豐富な肉感と、あふれるやうな誘惑的な嬌態、または完全な娼婦のもつあらゆる若やいだ技巧の艶透さに富んだ彼女に、私は恐ろしいほど一種の肉感から入つた愛をかんじてゐたのだ。どうしても逃がれることのできないやうな憎々しいほどの美しさ艶々しさは、かうして臥ころんでゐる私のそばまで、じり〱と或る強い膿液をそゝぐやうに、私の心や神經をくさらせ、しびれさせて來るのであつた。

しかもお鶴の精神的な美しさにくらべて、これはまた何といふ烈しい美しさであつたらう。凝然と見詰めて居れば居るほど、人間の中の動物的なものばかりを撰り出して、それに非常な刺戟をあたへるやうな美だ。誰しも飛びついて行つて揉みくちやにして仕舞ひたいやうな神聖をそとにした愛らしさだ。——私はぢつと目をとぢて、巫山戲散らしてゐるやうな聲一つ遁すまいと聞きほれてゐた。ときには、その腕をねぢもがれでもされたやうな、故意とらしい痛々しい叫びごゑにつれて、どつと起る大きながらがらした醉ひしれた笑ひ聲が、しびれきつてゐるやうにふらふらして聞えたり、高い藝者のこゑらしいのが、何か特別なコワいろをつかつたりするのに、ぱつたり笑ひごゑが止つたりした。さう

かと思ふと、急に雨垂れのやうな座外れのした三味せんが、ぽつん、〱と鳴り出したりした。私に神經を掻き廻はされたやうな、自分でも髮がぼう〱に亂れてゐるやうな、いら〱しながら熊の皮の上をあちこちと轉がつてゐた。獸皮のもつ荒いさわりは、うすい浴衣を隔てゝ肌身をちく〱とさし込んで來た。かうした永い間を送つたあとで、きうに椽側にばた〱と音がした。誰だらうと起きあがると、いきなりお吉が室に飛び込んで、私に採みつきながら、私のながい髮をくしや〱にした。

「醉つてゐるな。おまへは――。」

と言つて、その顏を見据えると、やゝ亂した髮がぺつとりと額にねばりついて、その今まで騷ぎ廻つたらしい上氣したてかてかな頰は、まるで搗き立ての紅餅のやうに、うすい皮をもう一枚かむつたやうに光つてゐた。おほ方、二三杯の無理に强ひられた酒のせいであらう。小さな唇から烈しい息ぎれと一しよに、熟柿くさい、それ故に得もいはれぬ支那料理のしつこい香味のやうなものが、いきなり私のはな先きにぶつかつた。――お吉は、すぐ引き裂いたやうに笑ひころげながら

「それや面白かつたわ。ずいぶん赤いでせう。熱くて熱く〱――。」

と言つて、大手をひろげて、袂で顏をあをいだ。

「また叱られはしないかね。お客があるんぢやないか。」

と言ふと

「あつたつて暫らくはかまはないわ。だつてナンちやんが淋しからうと思つてきたのよ。いやなら行くわよ。そんなに姉さんのくちまねしなくてもいゝわ。それに、さつき來るつて言つたでせう。だからお約束をしたから來たのよ。」

と言つて、顔をぬつとさし出して、あかンべえをするやうな格構をした。

「それならそれでいいんだ。お前が小言をくふとわるいと思つてさう言つただけだよ。さう、むきにならなくつてもいい。」

と、私はふしぎにこの小さいものの全體から來る魅力にだんだん引摺り込まれるやうな惑はしさをかんじ初めた。ずきずきと物がいへないやうな迫つた顔つきの華やかさが、波うつて私の口もとをふさいで來るのだ。

「もう知らないわ。わたし行つてよ。」

と言つて、いきなり指癖らしくとんとん踏んで

「い、い、い。」

と歯をむき出して、いきなり室をとび出して行つた。私は呆氣にとられてぼんやりと、まだ目にのこる紅いつやつやしい頬を目からのがすまいとしながら思ひ浮べた。ことにその手や足は絶え間なく踊つてゐるやうで、はしこい犬か何かのやうに迅いのだ。ことに背中から腰部へかけて美事な肉體の流れたところは、何といふむくむくした力のこもつてゐることだらう。まるで氷河だ。動かないやうで微妙に動いてゐるのだ。凝り固まつてゐて底から柔らかい流れが續いてゐるのだ。しかもそれらは眞赤に燃えつくしてゐるのだ。

「ふふふふふ……。」

と、そのとき庭の植込みのなかから、噴き出したやうな聲で笑ふこゑがきこえた。まるで耳に呼吸(いき)をふきかけられた擽つたさと、逆にねぢあげられたやうな性慾的襲來とを、私は同時にかんじながら。

「お吉か——。」

と椽側へ出て呼ぶと、燈籠のほのあかるいかげに白い犬のやうにうづくまつたお吉は、ぐつと顔を擡げた。私の正面に。しかもその大きな眼は限りもない大きさと、きらきらした明るい若い光をもつて、ぴつたりと矢のやうに私の眼にいりつけられた。と、すぐ、その白い犬のやうな形ちで踞んでゐたのが、すつきりと立ちあがつて、急にからだを揉み折るやうにして

「ふふふふふ……。」

と高く艶々しい笑ひ聲を立てゝ、いきなり母屋の方へ馳け出して行つた。わざと敷石をつたはらないで、柔らかい苔の生えた地面をふんで行つたのか、まるで猫のやうに音がなく、ゴム玉をつづり合したやうな形ちで、からだを振るやうにして、馳け出したのだ。さつきから彼處にぢつとかくれてゐたのだ。と思ふと私はやつと慄然と身ぶるひをかんじた。ありありと植え込みの暗い高まりに、ほんのりと潜んでゐた白くぼやけたものが、まだ其處にぢつとしてゐるやうに目にゑがかれた。

お母屋の二階にはもう騒ぎが歇んで、電燈ばかりが煌々とかがやいてゐるのが、すだれ越しにもう可成晩い時間を示した。私は重く熱い頭を冷たい庭の空氣にさらしながら、あちこちと歩いてゐた。お母屋のほうへ近づいて見ると、座敷がへりの内藝者がみな疲れたらしい上氣した顔つきで、ねそべつたり頭痛膏をはつたりしてゐた。それでも未だ火を落さずに早いと見え、さらに鏡臺に向つてゐる女もゐた。しかしそれらは皆一樣にぐつたりと酢ざらしにした鰯のやうに柔らかく疲れこんで、だらしなく胸もとをひろげて團扇の風を樂しんでゐた。けれどもお吉の姿が見えなかつた。

内庭から料理場の泉水のある裏庭へ廻ると、前の通りから引いたちよろちよろとした出水めいた小川の水を溜めて、

そこに、うなぎ、うぐひ、なまず、鯉などが生簀に圍つて活けてあつた。夜目にも黒々としたぬらぬらな長い生きものが、ひつそりと冷えきつたやうに眠り込こんでゐた。どう區別もできないほど數多く入れてあるので、それらはみな一と塊りになつて、一つが動けばみんなが靜かに動き出すやうな氣振りを見せるほか、溜め水も森としてゐた。

そのとき何心なく不意に窓さきから料理場を覗くと、うすぐらい内部に料理番の爺もゐなくて、一種の燒きものの執念深い魚の匂ひが、煤ばんだあたりの空氣に沁み亙つて、おほ方、いましがた擦ろしたらしい山葵の烈しい香氣が、まだ矢のやうに殘つてゐて私の嗅覺を刺戟するほか、音一つなかつた。と見ると、戸棚の隅の方に白いものがうづくまつてゐるのが見えるので、なほ、ぢつと見据えると、髮かたちから、よこ顔から、まるまるした腰つきからお吉であることがわかつた。いまごろ何をしてゐるのだらうと見ると、すぐ前に生じろい一枚の皿があつて、皿のなかに何か魚肉の燒いたものらしい狐いろした幾つかの塊まりがのせてあつた。それを一つづつお吉は手にとつて口のところに持つて行つたが、小骨のささくれ立つた肉ででもあるのだらう、それを唇のさきで一本一本拔いては、その骨を皿のへりのところで、ごりごりなすりつけてゐた。そのたびごとに、頰のにくせんがもぐもぐと動いて、あごのひとかたまりの肉と、よく調子をそろへて全で二つ食つついた薄紅い大福餅のやうに上と下とからうごいてゐた。

さうかと思ふと、ときどき四邊を大きな眼で、ひと廻り掃きつくすやうに明るく少し不安げに見廻したのち、くすりと一つ無邪氣さうにむしろ子供らしく微笑つて、また、ていねいに小骨を拔き拔きつまみ食をつづけてゐるさまは、ちやうど一疋の白ねづみが、ちよこなんと尻をおとして座り込みながら、小さい手で食べものを口の端へもつてゆくのと同じい姿勢であつた。しかも、その大きな目が、ときをり、ぴつかりとあたりの薄ぐらい中にひらめくのが、あたかも彼の赤い可愛らしい白ねづみの大きな出目をおもはせるほど、つみのない、ひそひそした快樂にひたつてゐるらしかつ

た。さうした三四分間の後、かの女はすつかり食べおへると、その蒼白い皿をいきなり流しの水桶のなかへ沈ませて、妙にかう嬉しさうに手を拍つやうな格構をして、すぐさま料理場をす早く飛び出して行つたが、そのとき、私は窓から首をすつこめて龜のやうにしやがんだ。と、そのときは最う窓のところをお吉が通りすぎたあとであつた。

暑い日も昏れかける前まで、みんな晝寢をしつづけた。夜は長くまで起きてゐるので、晝寢はかれらの唯一の休息になつてゐた。お吉とお鶴とが、私のうとうとした快よい晝寢をさましてやつてきたが、二人ともまとまらない話をしながら、同じい熊の皮の上で、よこになるかと思ふとすぐに眠り込んでしまつた。こんどは反對に私の方が眼覺めて、遠い立木に啼くらしい蟬の聲を懶げにきいてゐた。波の音も靜かな日だ。お母屋も今ひるねのさかりらしく、皿小鉢の音一つしなかつた。唯大きな家全體が明るすぎる初夏の日ざしのなかに、しんとして靜まりかへつてゐた。庭をと眺めると乾いた土の上に、寂しすぎるほど明るい外光が、どつと流れこんで一本の緑深い梅の木を丸浮かしに彫りあげ、その蒼々したかげが爽然と微風にこまかく影繪のやうに浮いてゐた。これらの全景のなかにささやいてゐるものは、春や秋に見られない明るい佛教じみた寂しさで、文字通り「遍照」とか「光明」とか「寂光」とかいふものの精神をつたへてゐるやうだつた。ときをり眩しすぎる地上を見詰めてゐると、何の蟲であるか胡麻粒ほどの小さなかたまりのやうな生きものが、どこまで歩いてゆくつもりなのか、のろのろと靜かに寛くりと這つてゆくのを見詰めた。それが僅か三四間隔つてゐる地面なのに非常な遠方のやうな氣をおこさせ、たかが庭ぢうを歩いてもどれほどもないのに(それは人間の私の考へであるが)殆ど長途の旅行者のやうに、またなく幽遠な測り知れない寂しい道のりを辿るもののやうに、ものうい

私の眼に映り出した。それらの手や足をあやつる昆蟲の豫測しがたい精神が、どういふ風に、たとへば人間の吾々と同じやうな考へらしいものを有ち、その考へらしいものが吾々と同じいやうに、いろいろな深い意向をあらはすものであらうかなどと、泌々、いまは眼をすゑて眺めるのであつた。しかも、どこか人間の吾々より別な敏逸な叡智に輝くもののやうにも思はれた。たとへばその觸角のぴりぴりとこまかく動くなぞが夫れだ。――さういふ風に私は、あかるい地上と、どこか人間の吾々の心を爽に新しみを加へて呉れるらしい青い梅の木の、たゞ無心にゆるゆると伸びあがつた姿が、すつかり心にまで陰をおとしてゐるのを更らに趣き深くながめた。

しかも此處にはまたお吉の肘まくらをしながら、目を閉ぢて深く睡り込んだ姿と、おなじい格構で眠り落ちたお鶴とが、地上をてりかへした夏の日ざしに、その顏面のすみずみまではつきりと見分けることができるのであつた。よく見ればお吉はやはらかく唇をほつれさせ、なかから二三枚の白い齒がほの見える程度の、よくありがちの浮きあがつたやうた唇元をしてゐて、そこから、かるい呼吸が糸のやうに正確な時をきざんで、この世界のものとおもはれないほど落着いて睡りこんでゐるのであつた。睡りが深くなればなるほど誘はれやすい皮膚の蒼白さは、最うすつかり全面にゆきわたつて、いまはあの輕はづみなお吉とおもはれないほど、あどけなさに澄み込んでゐた。ただ、そこには、眉にしろ、閉ぢて一とすぢの線になつた目にしろ、やはらかいほねのないやうな小さい鼻にしろ、髮のなかから食み出た不思議な3の字のかたちした淋しい菌のやうな耳にしろ、すべて皆靜止してゐて邪氣ない哀愁さへふくんで見えるのであつた。それらの部分がおのおの一つづつの呼吸をしながら、ばらばらに這ひ出しはせぬかと思はれるほどの靜止狀態が、ときどきもかもがとうごく唇もとの動きにつれてひりひりと少しづつ震へてゐるのが、わけても先刻地面の上に這つて行つたものの姿をおもはせた。この少女のたましひの夢見た世界をのせて這つて行つたもののあるやうなふしぎな心でまじまじ

と更らに眺めた。

それにくらべてお鶴の蒼白さはやや鑛物のそれに於て感じられるものを浮かして、あざやかな眉根のあたりにすつと刷かれた一とすぢの皺は、かの女の憂欝な日頃の悲しさうな色をうかべてゐた。お吉にくらべて、どこか貧しげにほつそりとした長い顔のせん、または、青葉でこすりつけたやうな額の蒼白さなど、よく二人の心もちの相違してゐるところを表はしてゐたが、併し、お吉のねがほのたるんだ安らかさにくらべて、すこしも弛みのない非肉感的な内に別な神聖なものの漂ふてゐることが分つた。それほど嚴くはないけれど、どこか犯しがたい冷たさがあつた。

二人はただ、何事も忘れはてて睡つてゐるらしかつた。同じく肘枕をして、同じく子供らしく少し齒をあらはにしてゐた。ふしぎにそれらの寢姿のなかに私の情慾を動かすものがなかつた。あれほどお吉の生き生きした肉感が、この寢姿からは私に刺戟してこなかつた。處女のみがもつ冷かな、また決して直ぐ心に迫ることのできない威嚴といふものに近い空々しさが、そのからだのまはりを守護してゐるやうにおもはれた。別なこの宇宙の意志のはたらきによつて處女のみが守られてゐるといふ、いとも不徹底な想念が私に去來するほど、ひとしく子供らしく無邪氣な、なにもかも信頼しつくしたやうにすうすうと息をしながらゐた。

誰でも女のねむつた顔には哀感なしで眺められないやうに、やがてはみな均しい娼婦に陷ち入らなければならない此の運命を私はことに物悲しくかんじた。しかし私はいまはすつかり頭が冴えきつたので、この二人のそばをはなれて庭へ出た。庭は暑かつた。梅の木のすずしい陰を映した地上にゆききする、いろいろな這ふものを眺めた。蟻もゐた。あかいのも黑いのも、小さく大きいのもゐた。ひからびたみみずもあつた。蟬の穴もあつた。私の眺めた方二尺にたらない世界に、これらの種々な生活者の姿が目にうつり去り、また現れはじめた。絶え間もなく慌しくいそがしく、あるも

のは走り、あるものは飛び、然うして凡て一種の思慮ありげな目と足とをもつてゐた。眠れるものは人間だけであつたか。と、お母屋のほうを見ればやはり皆靜まり返つてねむりこんでゐた。ひろいひろい空の光りと私とだけがあるやうに、すつかり音も途絶えてしまつた。

私はそのとき目をあげて見ると、二人の少女は邪氣なくすやすやと、しかもその鋭どく白い足をすらりと鞘からぬいた刀のやうに、まつ黑な熊の毛皮のうへにのせてゐた。それは震える一本の白い街道などに打ちこんだ白い道標のやうに、それほど、ふしぎに人間ばなれして眺められた。まだ眠りたりない私のあたまは、さらにふしぎなことには、その足だけがむづむづと柔らかく殆ど目にとまらぬほど微かに動いて見えた。あたかも一疋の這ふもののやうな純白で鈍な光をふくんだ足は、そのぎんなんの實のやうな指さきを揃えて、呼吸を噛みこんで靜まりかへつてゐた。

突然、そのとき私は襲はれた。かうした異性がふたりまで深く眠つてゐるのを見詰めれば見詰めるほど、反對にほんの瞬間ではあつたが、眩し過ぎるほどの白晝を私一人で默つてゐなければならないことを、まるで全世界にひとりきりで生きてゐるやうな恐ろしい寂しさにおそはれたのである。しばらくでも默つて居れば居るほど、からだぢうが森と脈打つて、靜まりかへつて呼吸も絶えるかと思はれるほど、強烈な耐らない寂しさに押し込められたのであつた。――私はそつと彼女らのそばに近寄つた。音を偸みながらぬき足をしながら……

私はそのとき、この狹い六疊の座敷一杯にみなぎつた不思議な匂ひに先づ胸をふさがれた。それは汚れた指と指とを擦りあはしたときのやうな、執念い山百合の匂ひのやうなものや、密柑の皮を燒いたときの匂ひや、またふしぎにねつちりした脂肪の分泌された上に舌のさきをあてた時のやうな匂ひなどが、こんもりと蒸れあがつて、そのなかに二枚の美しい肥えた鯛のやうに彼女等は靜かにねむり込んでゐた。

私はそつと肩に手をかけた。圓い肩の肉線が轉げこむやうに掌におさまつて、くるりと一と廻りするやうにさへ思はれた。

「お吉。お吉。」

と、ゆすぶつたが、それは蒟蒻のやうにねばりこく、ぐなぐなな心のほうに、肉すぢの張つた若い彈力がこめられてゐて、揺ぶられるごとに纖い腕の露き出しにされたのが、幾度となく毛皮の上に辷り落ちた。死んだもののやうな蒼白い手さきから肘のところまで、ひとすぢ流れた光線がうすい脂肪のつやを傳つて走つてゐた。

「お吉。」

と、呼んで妙に喉にかすり付いたやうな黃ろい自分の聲音におどろきながら、私はいくたびも呼びあげて彼女らをさまさせた。

二人はほとんど一しよにぽつかりと目をさました。同時に薄目をまぶしげにあけ、同時に手のひらで瞼をこすつた。なかばゆめのなかにありながら、私であるかないかさへ判らない目つきが、だんだんにおちついて來た。

「目がさめたのかい。」

と私はさし覗くやうにすると、ふたりは同時にぼんやりした澁いやうな聲で

「ええ。」

と言つて妙に日脚を讀むやうに土藏のしら壁に目をうつした。が、その顏には同じく眠り足りた、どこか力のぬけたやうな善良さうな子供らしさが期せずしてだんだんに現はれた。すがすがしく晴れあがつてゆくやうに、目のふちから少しづつの紅みが潮しこみはじめた。

「まあ、あたしずいぶん睡つたわね。幾時でせうか。」

と言つて、へいぜいとは全でちがつた技巧のない顔で、きよとんとした目つきでかう言つてお鶴と私とを等分に見た。お鶴は

「さうね。幾時かしら。」

と私の顔を見た。最うかなり永く睡つたので、自分の仕事の遲れることや、小言をくひはせぬかといふ小さい憂慮を、すぐ表にあらはしたが、お吉はそんなことを氣にかけないで

「さう、三時――まだ早かつたわね。あたしずいぶん面白いゆめを見てゐたの。」

とあどけなささうに言つて微笑つた。やはりいつものやうな、しつこい微笑ではなく、眠り抜いたあとの淡々したところに子供らしさが、きれいに漂つてゐて見えた。

「いくら起したつてお前達は起きようとしなかつたんだよ。」

と私がいふと、何か思ひ出すやうにしてお吉は小首をかたげたが

「まるであなたが呼んでいらつしたのが夢のやうに覺えてゐたの。やつぱり呼んでいらつしつたのですか。」

と言つて、素直にわらつた。お鶴もすぐ言葉をついで

「えゝ、あたしは、はつきり覺えてゐましたわ。庭のほうへも出ていらしつたのね。」

と言はれて、私はぞつとした。お鶴のことゆゑ、そつと目をとぢてゐながら心で眼覺めて私のことを感じてゐたらしく思はれた。そのせいか、どこか薄目をあけてゐるやうな彼女のねがほを私はいま一度目にうかべた。

庭の日もだいぶ移つて土藏の白壁にちらちらと次第に日が上へ上へと、夕ぐれに近づいて行つた。

「さあ、みんな行くんだ。あちらでもそろそろ起きる時分だぜ。」

といふと、お吉はすぐ頬をふくらがして、こころもち脣を尖がらして

「すぐあたしだちを邪魔にするのね。ねえお鶴さん。」

と二人は顔を合せたが、そのとき、お鶴は曖昧な目つきでお吉に相槌を打つて首肯いて見せたが、すぐ今調子を合したけれど本統はさうではないといふ意味の淋しい微笑を、すこし目で知らせるやうにそつとお吉に知れないやうに送つた。

が、お吉はかう言つてしまつた瞬間から、すぐ私のそばから立ちあがつたときから、先刻からの靜平な顔がさつと變化つて、もうコケッテッシュな表情が花のやうにあらはれはじめた。一刷毛なすりつけたやうな活動的な紅みが頬のあたりの、眠りから醒めかけたもの憂い蒼白さを完全に拭きとつて、美しい朝焼けのやうに流れはじめた時から、もう子供らしくない生き生きした輝いた瞳が、一時にぱつと開かれたかと思ふと、こんどは別な狡いスネたやうな力を込められたまま、旺盛なつやつやしさを湛えながら、いきなり

「行きませうよ。あたし、アンちやんが厭になつた――。」

と叫ぶやうに言ひ放つて、お鶴の瘠せた肩をひッ摑んで、すぐ肩をくみ合せ、あてつけがましく室を出て行つたがもぢもぢとしてゐるお鶴の肩の上から、するつと顔を振ぢ向けて、

「ふふふふ……。」

と揉みくちやにしたやうな顔ぢうに刺身のやうな厚い皺をきざみ込みながら、大きな目を白目ばかりにして、つやつやと花のやうに笑ひ棄てた。そのとき、それとは反對にお鶴はそつと偷み足をしたやうに振り顧つて、蒼白い晒された

やうな靜かな微笑をたたへた。が、それよりも私はすぐまたお吉の顏のほうに視線を吸ひとられた。またも烈しい私の動物的な情慾がその時から起りはじめた。

波の音がする。間もなく日が暮れるだらう。



長崎夜話

大泉黒石

發端

(一)

「黒助」と云ふ名の起りは、彼が洗湯へ行くのを嫌ひ、髪刈ることを懶がつて、年中日當りの悪い處に生えのびた青白い瓢箪のやうに、怪しげな姿をしてゐるからで、情ない洒落でもなければ、心細い冗談でもない。況んや、作者が思案に餘つて、物好きに與へた主人公の名ではないのだ。この黒助が廿歳の春を迎へて竹籔の中に逃げ落ちた。港から凡そ廿丁「山ノ圖」と言ふ丘へ片寄つた竹籔の中にシーボルド博士の墓がある。その籔だ。黒助が、生存競爭に追ひ詰められて、籔の家に引越したことは親類縁者と雖も知らぬし、彼に最も近しくする乳母一家にすら隠してあるんだ。こんな平和な街、こんな穏やかな町に住み馴れてゐて、先祖代々からの家財道具を根絶やしした上に、尾羽打ち枯らした影のやうな姿を、親類縁者や乳母一家の目の前に晒すに忍びなくなつたからだ。一つは彼等の呑氣な生活ぶりを見るのが業腹でもあ

た。一つは彼等の話を聞くにつけて、癪に障ることが多くなつたからだ。乳母は死んで、その娘と母親の一家が、毎月一に、鯨肉の藁苞を下げて、この零落した舊主人の機嫌を伺ひに、態々田舍の濱からやつて來た。その手土産が、毎月小刻みに小さくなつて來るのが不愉快なんだ。貧乏してから、手土産の返禮が怠り勝ちになつたので、毎月いくらかづゝ儉約するのは、こちらを馬鹿にしてゐる確かな證據だと考へた。この老婆と娘とは、濱邊の村で鯨を商つてゐる羅馬教の信徒な。老婆はECCE HOMEと云ふ文字を刺繍つた黑羅紗の札を皺だらけの頸にぶら下げてゐる。娘のおふじは黑羅紗の代りに、アルミの馬利亞の首を下げて、中世紀頃和蘭陀で流行つたやうな齒の長い大きな木櫛を、臆面もなく插してゐる。そして二人とも、ごつ／＼した木綿の盲目縞を着込んで來るんだ。鯨の肉が小さくなつて行くのは仕方がなくても、家の中の然るべき場所に据えてある道具のたぐひが、片端から失くなつて、はじめ狹かつた部屋の中が、だん／＼廣くなつて行く心持ちを、彼女等に見透されるのが恥かしかつた。「坊つちやんのお袋さんの手垢の附いたものは、いつ見ても懷しい」と云ひ乍ら、部屋の隅に棄てるやうに置いてあるミシンの蓋を、彼女が迂濶臭つて見ると、いつの間にか、空つぽになつて居たりなんかする。「今に坊つちやんが學校を出て東京へ上らつしやると、偉らう出世して戻らつしやまけ。今暫くの辛棒なもし」と云ふんだ。そんな時に限つて黑助は小説に讀み耽つて居て、ぞつとするんだ。彼は暇さへあれば西洋の小説を讀んでゐる。でなければ、窓から顏を出して一時間でも二時間でも町の空を、ぼんやり眺めてゐる。ある時には、買つてから、かれこれ半年にもなるが、未だ曾て一枚の繪もかいた例のないスケッチ帖を懷に入れて、用もない街を、ぐる／＼廻つてゐる。それで黑助は中學を卒業やうとしてゐるが、卒業して、さてどうしやうと云ふ分別もなかつた。彼はこう云ふ譯からして、籔の中の家に引移つたことを誰にも知らせずにゐる。彼が藪の中へ、一人の盲目の祖母を連れて流れ込んだことを知つてゐるのは、その二階を貸してゐる額緣屋の夏藏一人なんだ。額緣屋と

云つても、通常の額縁屋ではなくつて、露西亞の小說家ゴンチャロフが言つたやうに、黑船以來この町が生んだ畸形な商人の一人と形容して差支へない程、變つた額縁屋なんだ。黑助と夏藏との關係は、丁度黑助が生れる前後から始まるので、黑助が誕生前から、隣りの家に間を借りて自炊してゐた、何處の學校にも籍のない學生が即ち彼で、その頃新聞を配達してゐて、黑助の家にも、よく饒舌りにやつて來たが、間もなく何處にゐるか解らない親が死んで、彼が兵隊に取られて、日淸戰爭が始まるや否や、支那へ追ひやられたつきり、數年！　否、十數年！　黑助の家の方でも、ぐれ出したゝめ遂に何處で何をしてゐるのか解らずに來たんだが、その夏藏と黑助の家のたつた一人の生殘者の祖母とが、往來で遇然に出會したのが、そもそも鐵の中へ入つて行く動機となつたのだと言へやう。その時、祖母の口から、黑助の一家が殆んど死絕へた上に零落て、大人になつた黑助と二人で他人の二階に住んでゐることを、くど／＼と聞かされて驚いたさうだ。夏藏は戰爭で死損なつて、また港の街へ戾つて來て、間もなく、居留地の、ある外國商館に傭はれて働いてゐたさうだが、その商館の主人が、間が惡くて露西亞人だつたゝめに、今度は日露戰爭が始まると同時に商館が潰れて、再び十數年前の浪人に逆戾りした彼は、まだ獨身者で、黑助が始めて鐵の中の一軒家に夏藏を訪ねて行つた時、彼は薄暗い仕事場のやうな二疊敷の部屋で、額縁を拵へてゐた。黑助の目には、何だか夏藏が、塵溜を涉つてゐる鼠のやうな氣がした。鐵の中へ引移つたのは、その翌日と思ふ。彼は空いてゐる二階の三疊の一間を、親切に只で貸して呉れたんだ。町の何處からでも見ゆる丘や山が、引越した雨の日の窓から黑助の鼻先に出し拔けに飛び出したり、軒廂の臂木に刻りつけてある六翼天使の頭の上から、靑大將が、ぬつと鎌首を持ち上げたりして彼を驚かせた。黑助が「この天使の像は昔から此家に取りつけてあるんですか」と尋ねた時、夏藏は「この家は元和蘭陀屋敷の離居で、異人の醫師が住んでゐたげな。けんど、醫學校が出來る年に此處で死んだぞのし」と云つた。和蘭陀屋敷が廢つてから何年になる

か、黒助にも夏緘にも、判然解らなかつた。

籔に圍まれた住居を繪に畫くたらば、薔薇油を零した花絨毯にナラヤナの涅槃を延べたやうに見ゆるだらうが、近づいて、つぶさに眺むれば、庭地一面に生えのびてゐる蟲取團扇の毒々しい刺や水ヒヤシンスの醒さい匂ひに眉を顰むるだらう。その庭地に立ち入つて、猶つぶさに見渡すなら、AYR SYPEROと云ふ文字を彫んだ和蘭陀人の古墳や、オダコン人魚の石像が、苔を着て累々と轉つてゐるのに驚くだらう。夏緘の工房の縁先などには、海から拾つて來て棄てた山鷸貝が、白い鬚を物々しく怒らせてゐる。はじめて此處へ來た時、人間の世界に、此程寂かで落ち着ける場所は、何處を探し廻つても見つかるまいと考へて、黒助は喜んだ。實際此所に籠つて居さへすれば、親戚友人はもとより、物賣り女も立ち寄ることを遠慮するんだ。ほんの一丁か二丁しか町を距れぬ竹籔の中に、こんな便利な巣を構へてゐる夏緘の生活を羨んで、引移つて來ることは來たんだが、愈々此家に住んで見ると、突然の寂寥が彼を脅かして、厭つて跳び出した五月蠅い街の中が、一頻り戀しくなつて、日が暮れると、灯取蟲のやうに、慌しく町へ出て行く。でなければ、まるで話相手にならない夏緘の工房へ、のそ〳〵入つて行つて、彼の仕事を茫然眺めるより外に仕方がないんだ。それは、いつも黄昏で、空を翔る小鳥や鴎や、港の外に彷ふ船の目標のやうに、いびつな街の中空へ、聳へてゐる天主堂の鐘架に、丁度その時刻になれば、グルマチカを綴ふた一人の聖爐をぶら下げて僧侶が現はれて、松脂を焚くんだ、その松脂の煙が、纖い絲の薄膜となつて、直ちに青眞珠色の夜霧となるやうに、街の空を蔽ふ時、丁度海の底から浮き上る水母の影を見るやうな淡々しい内障眼の月が、どこからともなく漂ふて來るんだ。二階の窓から、こんな世界を眺めてゐると、何とも云へず心細くなる。そして、シーボルドの墓に錆びた鐵の鎖で重々しく釣されてゐる鯨油蘭燈の灯が、浮浪者のやうな微風に搖れて、瓦鳩が啼くやうに、ぼう〳〵、ぼう〳〵と、春の夜曲を始めやうものなら、彼は追はれるやう

に夏藏のアトリヱへ、階段を下つて行くんだ。二階も一間、階下も一間、その階下の三疊が夏藏の工房とは言ふけれども、埃を浴びた机！　さら〳〵と砂の落ちる泥火鉢！　今にも倒れさうにぐらついてゐる戸棚！　その狐色に焦げて、陷穽のやうに、ふわ〳〵する疊の上を歩るくと、壁土が他愛もなく零れて、常春藤のやうな青黴を噴いだ色繪が剝げやうとして顫えてゐる。その机には、夏藏のメモランダと、誰の遺影とも知れぬ一枚のぼやけた寫眞が置いてある。その泥火鉢には、立ち消えする炭の死骸に杉箸が添てある。その戸棚には、茶碗皿と切れない〳〵一丁の剃刀と繪の具の器が雜然と列べてある。たゞこれだけで、戸棚の佇む處に盲目の祖母が終日坐つてゐたり、ボレイン姫が秘藏の時辰儀じみて、動くことを知らぬ目醒時計が据えてある黑助の部屋とは疊數から何から、少しも變らない。この狹い工房の中央に蟠つてゐるのが即ち此家の元來の借り主である夏藏なんだ。彼は毎日此工房で額緣を拵へてゐる。町から仕入れて來た「煙管の羅宇」の燻し竹をナイフで削つて、それを組合せて粗末な額緣が出來上ると、風呂敷包みの中から、細長い桐の紙を取り出して、小皿の繪の具に坊主筆をひたすんだが、暫く見ないうちに、何處で覺えたものか、「富士に帆掛舟」や「日の出の松」の繪が出來て行くのを黑助は最初不思議に思つたんだ。勿論彼に繪心がある譯でなく、繪畫の趣味も何もあツたものではなく、燻し竹を削つて、額緣を拵へて、その中へ、遊女のコロタイプ寫眞を穿め込むのが唯一の業で、その寫眞の邊に貼り附ける桐紙の繪にしたところで、後にも先にも「富士に帆かけ舟」と「日の出の松」が身代の彼なんだ、その彼にこんな道樂。ではない、癖。奇妙な癖がある。「町の名所は三菱船渠にお諏訪の祭」と寫眞の裏面に書く癖だ。小唄の先は「春はカルルス菊人形。夜は丸山。お寺もないのに大德寺」と續くんだが、どうせ書いた處で、一枚毎に裏から、馬糞紙の裏打ちをするのだから、人目につかない無駄骨にもならうし、大體西洋のヤトロスに、よぼ〳〵の文字が讀めるものでないことを、知つてゐて、得意がる處が可笑かつた。この見すぼらしい工房の仕事は一切夏

藏が切り廻ししてゐたんだが、黑助が二階へ引越して來てまもなく、遊女のコロタイプ寫眞の買ひ出し方を賴まれた。と云ふよりも、學校へ出掛ける途中で買へもするし、いろ〳〵な遊女の中から、格好な美人を選り分けて買ふと言ふ處に面白味を見出して、自ら進んで、類のない役目を引受けたと云ふ方が適當だらう。學校の歸りには必ず大德寺の坂下を通るんだ。大德寺の裏には丸山遊廓がある。その大德寺の石段の下が、つまり、黑助の道連れを捲く場所なんで、石段を登り詰めてから、耳の上まで、すつぽりと帽子を冠つて、昔ながらの遊廓へ舞ひ込む心持ちや、遊女屋と料理店の間に挾まつてゐる繪草紙屋の前を迂路つく氣持ちに釣られて、土曜日には缺かさずやつて來る。赤い毛布を敷いた繪草紙屋の店先には、いつも七八人の旅人が煙草を喫ひ乍ら、列べてある遊女の寫眞を買つてゐる。ある時には、西洋人が赤毛布の上に胡座を搔いてゐることもある。「Woman with a fan」とか「Beauty on the veranda」とか樣々の奇怪な說明をつけたボチセリの女を見るやうな、寫眞を、黑助は、おど〳〵した手附で選り分けるんだ。店に坐つてゐるお主婦やお主婦の子らしい若い娘が、何かのはずみで笑ひ出すことがあれば、黑助は人の蔭に縮こまり乍ら、はつと思つて眞つ赤な顏を上げるんだが、黑助が笑ひの的でないことが解ると、安心して、そこ〳〵に纏めた百枚餘りのコロタイプ寫眞と金とを引替へて、あたふたと、教科書の包みに忍ばせて店を跳び出すんだ。ある遊女の寫眞には、こんな長々しい文句もあつた。

"Oh, little winds, her little hands
In time with tunes from faery-lad
Are moving; and her bended head
Knows nothing of long years sped

Since heaven more near to earth was hung,
And gods lived, and the world was young."

一度目二度目までは、何とも思はなかつた。繪草紙屋の方でも通り一遍の客と見たらしかつたが、それから行くごとに、だん〳〵親しい顏を見せたり、馴れ馴れしい話を仕掛けられたりして、黑助も萬更惡い心持こそしないが、少々氣味が惡くなつたんだ。毎土曜日、それも午後三時前後と、きちんと定つた時刻に、中學の制帽制服で、眞面目な顏をして、冗談一つ叩かずに、いつも、物に怯えるやうに、きよと〳〵とやつて來て、コロタイプ遊女を百枚餘り買つて行くことから足がついて、黑助の不思議な使命と、夏藏の珍妙な稼業が露見しやすまいかと思つたんだ。面妖な目付をして黑助の擧動を見る遊廓口の交番の巡査の前を、急ぎ足で通り過ぎる時よりも、遊女屋の二階から退屈な首を出してる遊女に揶揄れる時よりも、これが怖かつたんだ。露見したつて差支へないやうなもの〻、やつぱり氣になるんだ。馬鹿々々しいことには、秘密曝露の曉に、同じやうな商賣を始めて、夏藏の向ふを張る者が出來たり、内證遊廓へ紛れ込む事實が、學校の耳に入るやうなことがあれば一大事だと、その邊まで心配する癖に、その癖に土曜日の午後三時が、一週間のうちで、一番待ち遠しい時刻なんだ。土曜日にコロタイプ遊女を仕入れるのは、その翌日、港へ西洋の船が幾隻となく入つて來るからだ。和蘭陀船や、阿米利加の軍艦や、露西亞ぶねや、葡留途駕留船！ 土曜日に品物を仕上げて遲かないと、賣り損ふからだ。土曜日の宵の口から、深夜まで、一名の助太刀が夏藏の工房へ、突然現はれるやうになつてから、ぼろ〳〵の壁に映る影が二つになつた。この助太刀が、黑助だとは斷るにも及ぶまい。たつた一人で別段に淋しいとも、不自由だとも思はずに生活して來た夏藏が、思ひがけぬ話相手に轉り込まれてからは、妙なもので、一日一度黑助が工房へ顏を見せなければ、態々二階へ呼び出しに來るやうになつた。この話相手が、いつの間にか、面白半

分に額緣製作の手傳をするんだ。全く、暇潰しには手頃の仕事なんだから。土曜日の晩には、土穴のやうな工房一面に、艶めかしい遊女が撒き散らされて、仕事に力が入つて、どし〳〵捗どるんだ。こんなとき夏藏は釣洋燈の下に列べられた製作品を眺め乍ら感慨に耽る癖があるんだ。「どうです！　この花魁は！」と云ふ癖があるんだ。「いゝ女だなあ！　何とも云へないな！　マトロス風情に賣りつ放すのは惜しいなあ」と殘念がる癖があるんだ。と思ふと、「然し、阿蘭陀人もめりけんマトロスも、こんなんでないと承知して買つて呉れんからの」と諦める癖があるんだ。そして黑助に「坊つちやんはなか〳〵目が高い。今度の花魁は揃つて別嬪ぢやのし」と云ひ乍ら、大聲で笑つたり、涙を滾したりする。仕上げた額の中の、手招く女、肘枕の女、頰杖つく女、笑つてゐる女、つんと澄ましてゐる女、多情らしい女、浮氣さうな女、愛嬌のある女、ない女、つゝましやかな女、お饒舌さうな女、女の國から、ありつたけの女が飛び出して來て、二人の前でさまざまな嬌態を盡してゐるやうだ。これが翌日になると、夏藏に背負はれて、洋船の甲板で、金のない水夫(マトロス)や船員に賣られるんだが、賣られたコロタイプ遊女は、やがて彼等の故鄕へ行く珍奇な土産物の函の奧へ藏はれるんだ。愈々日曜日の朝が來ると、夏藏は淺黃色の葛籠(つゞら)に額緣を詰めて、それを背負ふて藪の中から波戸場の方へ、ぶら〳〵と出て行く。そして大抵夕方頃には品物を賣り盡して戾つて來るんだ。處が、夕方になつても、日が暮れても却々戾らないことがある。漸く八時か九時、へと〳〵に疲れた足を引摺り乍ら、藪の巢へ戾つて來たとするんだ。「留守中お世話樣でした。濟みませんが、お茶を一杯吹ませて下さい。咽喉が燥いて、咽喉が燥いて」と云ひ乍ら、二階へ昇つて來たとするんだ。すると黑助が「今日は馬鹿に遲いぢやありませんか」と冷めたい茶を振舞ふだらう。その時、夏藏はこう云ふんだ。「大きに。大きに。今日はね。大變な處へメリケンのお供をしましたぞ」。それから、藪の中に、くすぶり乍ら日曜日一日をぼんやりと、まことに退屈な顏をして暮した黑助に、外(そと)の出來事を語つてやらうと身構へるんだ。

今日はね。メリケンの軍艦で商ひする考へでしたから、艀舟で漕ぎつけると、時間が早過ぎると云ふので、艦の上に上げてくれないからのし。でも海の上で時間を待つのも氣が利かないと思ひましたから、一層のこと軍艦の方は思ひ切つて、沖に停つてゐる商船に出掛ける氣になつたのですのし。艀舟賃はかさむけんど、どうでも埋め合せが附きますからな。思ひ切つてさ。漕ぎ寄つて見ますと、犬が歩き廻つて、やつと棒にあたつたやうに、船員がすぐ甲板へ上げてくれて、機嫌よう買うてくれましたぞのし」と元氣な樣子を見せるんだが、黑助には夏藏の商賣が不安でならないんだ。こんな時、どの船でも相手にならなかつたら、夏藏は恐らく戻りの艀舟賃にも窮するだらう。でも、持ち廻る葛籠の荷物が、思はぬ處で、すつかり空になる時のことを考へると、反對にそれだけ歡びが深いやうにも思はれた。その拾つたやうな歡びに夏藏が出逢つてゐるんだと思ふと、寄生虫のやうな生活を立てゝゐる黑助にも、明るい心持が沁み渡る。

「いゝ鹽梅でしたよ。荷物を賣つて、そろ／＼歸り仕度をしてゐる處へ、二三人のマトロスがやつて來てさ。You know Swa temple? と出し拔けに聞くぢやありませんか。此奴てつきり、諏訪のお宮を尋ねるんだ。ことによると案內せろと賴むかも知れないと思ひましたから I go!!! と一つ打つつかると、マトロス先生解つたと見えて、私の肩を叩き乍ら、You go now? と喜ぶのさ。こうなると一つ奴さんを船から引出さうと云ふ氣になりましたから、Yes! Yes! Oyes I go and you go, and Suwa temple to sen go! とやつつけたと思つて下さい。」夏藏はこう云つて眞面目に鼻や額の汗を手拭で拭くんだ。黑助は相手の無智な顏を凝乎と見詰めてゐると、洋船の甲板で、アメリカの水夫を捕へて、手振り身振りして、珍妙な言葉で臆面もなく遊女の額緣を賣りつけてゐる野卑な、でも滑稽な夏藏の樣子が浮んで來る。黑助が苦しさうに笑ふと、夏藏もにや／＼笑ふんだ。お客と云ふのが粗暴な西洋やアメリカの水夫で、賣り手が、この夏藏と來てゐる處に、どんな可笑しな事が持ち上るだらうと思ふと、いつかは一度、夏藏の供をして、その場の光景を

見たいと思つた。黒助が「それから、どうしましたか」と云ふと、彼は慌てゝ「私も空葛籠脊負ふて、ずつと家に戻るのも面白くないし、諏訪のお宮は途中にあることだしね。十錢で案內してやらうと云ひましたさ。なあに、テンセンでもツウエンセンでも、只儲かるやうなもんだのし。それでマトロスを引張つてお宮を廻つて來ましたが、あの寫眞を見て野心起したもんでのし。あぶない處でマトロスと一緒に遊廓へ、はまり込む處でしたぞ」

と云ひ乍ら髭のない顏を崩して笑ふんだ。

(二)

折角親類縁者の小五月蠅い口からと目からと遁れて、いくらか氣が休まりかけると、惡戲の神樣は、すぐ彼を引つ掠つて、また七面倒な騷々しい世間へ投げ込みにかゝつた。その手始めが、おふじの老爺が死んだことだ。それから、卒業試驗のどさくさのことだ。おふじの老爺が天主堂の物置き見たやうな病室で息を引取つた次の日が、試驗の初日に當つてゐた。學校を出て、何をするのだかどうすれば飯が食つて行けるのか、たゞ、晚になつて、西洋料理屋に忍び込んで、人が食ひかけた皿を、盜んでぺろ〳〵舐めてゐる、のろまな、空巢狙ひ見たいな藝術家の夢ばかり見てゐる黒助も、流石に、卒業試驗の日取りの定つた日は、胸が痛んだ。

實際、黒助の生活に注意する者は、彼が何の爲に每日學校へ通ふのだか、合點の行かぬことだらう。朝起きて焚いた飯を辨當箱に詰めて出掛ける處は尋常にも見えやうが、さて行く先で、飯時の鐘が鳴る迄は、教室の一隅に蹲まり乍ら、机の下で、辨當を出したり引つ込めたり、どうにか、こうにか、辛棒はしてゐるけれども、愈其時刻が廻つて來ると、物凄い目の色で、辨當を抱えて教室を跳び出すんだ。黒助の食堂と云ふのは、運動場の片隅に取り殘されてゐる疎

らな楊梅の林の、その中の芝生と定つてゐた。それには色々の理由もあるだらうが、成る可く人混を避けたいと思ふ氣質からだと云ふのも一つだつた。ニコロ・ピサノが冗談に刻み損ねて戀人に送つた不具の傀儡や、その削り屑によく似た形や色どりの古めかしい西洋人の家や、パン屋の風車を乘せて港の岸へ傾いて行く滑らかな艶々しい堤を、讀者が船の上から一度でも眺めたことがあれば、その堤の頂きの芝生を、同じやうに眺めて

　我等はこんなに愉快になつちやつた。
　想像しても見給へ。
　山のやうな高い丘。
　白い石灰の壁。
　瓦の屋根や木葺の家や。
　茅の小屋も楊梅の森も。
　みんな綠の岸に塊つてゐる。
　こんな景色は、全體誰が描いた繪だらう。
　いゝや、畫いたのぢやなくつて。
　妖術パレーから、
　そつくり取つたやうな、
　まあ奇妙な、町のデコラチヤ！

と云つた、先刻のゴンチヤロフの心持が解るだらう。辨當の箸を忘れる日は、躑躅の小枝をへし折つて、不器用な手

附で食べるんだ。では、そんなに旨しい辨當かと云ふと、大抵毎日、干鰯だつた。だから、それほど戀しい握り飯の芯から、珊瑚玉のやうな梅が現はれる迄は、心靜かに食つてゐて、漸く十粒、二十粒の小さい塊が殘る時分になると、黒助の心は次に暗くなつて、そうなると、もう名殘り惜しさうに、最後の一粒まで、箸の先で悠々と弄ぶんだ。それから、暫くは、爐邊に蹲つてゐる幸福な猫見たいに、一切の苦勞を忘れて、うつら〳〵した心持ちになつて、兩足を投げ出したまゝ、港や沖合を、ぼんやり眺めてゐる。丁度その時刻になると、頭の上の日の光が、エメラルドへ流れ込んで、港は一面に、若い孔雀が翼を廣げたやうに眩しく輝く中を、白い小さい三角帆のヨットや、スカートを捲り上げた足で汐水を蹴り乍ら轉つてゐる女を乘せた獨木舟が、夢のやうに浮いて來るんだ。三十分餘り經つと、漣々立ち上る。そして、止むを得ない足どりで、教室へ戻るところは Böcklin の「愛の春」や「死の島」の神韻縹渺として人間の魂に溶け込みさうな壁畫に見惚れてゐた旅人が、フォンテネブロー派の陰鬱な、鳶色の森の中へ迷ひ込んだ時の、云ひやうのない淋しい姿に見えるのだつた。それから先は、もう魂の失せた人間の脱殼見たやうに、何の變哲もない藪の中に戻る時刻を、ひたすらに待ち侘びると云つた具合で、早く云へば、彼は學校へ辨當を食ひに行くんだ。こんな人間が、あと幾日すれば、卒業試驗だ。あと五日、もう、あと三日、二日だと云つて、さて其當日となると、海の上で思ひ懸けぬ颶風に出逢つた羅針盤のない船のやうに、此處に改めて、絶望的な歎息を吐くのだと大袈裟に誇張したつて、讀者は格段の不思議だとはすまい。慌てて、勉强するにも、その時分には本と名のつく本は一冊も、その一冊の本を買ふ金もないのだから、日頃の怠け癖や、自分の物なら、何に限らず、ついうか〳〵と賣り飛ばす病氣を、何遍も何遍も後悔して、すつかり悄氣けた揚句に、今度は、卒業試驗だから、そう膠もなく振り落すやうな意地の惡いことはしないだらう、などゝ、情ない量見を起して、自分を慰めて棄て鉢にもなれぬ男なんだ。

生憎と云ふ言葉が、大抵間の悪い時とか、たまに都合の悪い場合に、かりそめに借りて來て用ふるためのものだとすると、黒助の場合に、一寸適用し兼ねるが、まあ、生憎懐中に一文もない、その前々日が日曜だつた。黒助は學校に納める別れの涙金と云つたやうな金を一圓だけ、どうあつても拵へる必要があつて、金を造る手段として先づ何を賣らうかと苦心した。その結果、賣れさうな物は夙くに失くなつてゐて、思ひ切り惡く壁に釣されてゐる着古しの古袴が、「外に工面のつけやうがなければ」と云ふやうに見えてゐた。處が、その袴へ手をつけたのが、凶兆だつた。とも云へる程、後から後からと様々な小面倒な、どんな小面倒でも氣の病める事柄が、黒助を悩ましに來た。その最初が啞の小犬なんだ。(尤もこの小犬が啞だと解つたのはずつと後のことだが)その次に彼を脅かしたのが不意の客なんだ。丁度藪陰を蹣めき乍ら虫取團扇を臭いで見たり舐めて見たり、今にも嘔きさうに前肢を突つ張つて、苦しさうに首垂れてゐた灰色の小犬なんだ。質屋に行く出會がしらに、嘔きたくつて、嘔きたくつて、嘔けないで、木鼠のやうな縁色の目から、ぼろ〳〵と涙を零し乍ら、ふらついて來るのと出逢つた。

「畜生。いやな奴だな」

と首筋を摘んで、藪の外へ棄てやうとすると、破れた提灯見たやうな骨だらけの腹を、いきなりグイグイと動かして鼻の先へ泡を噴き出した。黒助が驚いて芝生へ放り出すと、そのはずみを喰つたものと見えて、恐ろしい痙攣が、海嘯のやうに、尻つ尾の方から胸へかけて、烈しく傳つて來た。小犬は頭を地上にぐい〳〵と押しつけたかと思ふと、到頭そこで吐いて了つた。そして、

「あんなに酷く狂ひ廻つたり、藻掻いたりして、よく死なゝかつたものだ」

と最初、摑み出さうとした癖にこゝへ來て何ともし兼ねてゐる黒助を、氣の毒さうに凝乎と見上げてゐた小犬が、切

くして中氣病み見たやうな足どりで、臺處の土間へ、のそ〱入り込んで、流しの水溜へ汚ない鼻を突つ込んでから、また申譯のない目付で黑助を見た時も、追つ拂ふだけの勇氣がなかつたんだ。と云ふよりも、づぶ濡れになつた木鼠のやうな目や、泥だらけの鼻の格好が可笑しくて、笑ひ出したからこそ、工房の中から夏藏が煤けた顏を出して何ですかと云ひ乍ら、覗きに來て、

「汚い犬だな。何處の犬ぢやろか」

と云つたんだ。

「先刻藪の中を迂路ついてゐたんです。野良犬でせう」

「坊つちやん。そんなら早く河の中へ投げ込んで了ひなんし。おいらは困る。家なんぞへ入つて來たつて、何にも食へやしねいぞ、もつと氣の利いた家を探して入り直せ」

と篭の上の貧乏團扇を翳し乍ら、ぱたぱたと煽いで見せた。小犬は土間の隅に逃げ込んで、暗がりから、きよと〱と目を光らせた。

「此奴圖迂々々しい。却々の横着者だぞ。お前のやうな穢え犬は何處でも飼ひ手がないから、家へ入り込んだんぢやろ。馬鹿にされんぞ。こら！」

と睨んだ時、黑助が、

「私が今川かけに棄てゝ來ませう、近くだと又戻つて來るから」

と云つたのも、入口の嘔吐が見つかつて今にも無慈悲に蹴跳ばされさうな形勢だつたからだ。だから夏藏に小犬を任せて出て行くに忍びなくて黑助が、氣味惡さうに小犬を引つ張り出して行くと、夏藏は安心して、二三度川の中へ棄て

なさいと云つた。もとより、川の中へ放り込む考へはなかつた。藪の外へ放り出して置けば、勝手に何處へかへ行くだらうと思つた。處が藪を抜けた處で路傍にうつちやつて、行かうとすると、後からのこ〳〵跟いて來た。さうなると構はずに町へ歩き續ける譯にも行かなかつた。ある家の蔭へ放り出して置いて、慌てゝ物蔭へ身を潜め乍ら、秘かに小犬の様子を見た。すると小犬は棄てられた場處から往來へ迷ひ出て、通行人を見ると尋ね人を探し當てたと思つて、頻りに小さい尾を振つて跟いて行くかと思ふと、それも違つてゐたと云ふやうに急にがつかりして、眞個の尋ね人を、ぐる〳〵と探し廻つてゐる姿が、どうしても見て居られないで、折角捲きかけた小犬の前へ黑助の方から飛び出して行つた。すると、漸く主人に巡り合つた積りで、汚ない鼻を足元へ押し付けたり、纏れかゝつたりするんだ。黑助は態々藪の中に引き返して、誰の持ち物ともつかない破れた鷄籠の中へ夏藏に氣取られぬやうに小犬を隱して、上から黴の生えた莚を被せて置いて、往來へ駈け出して、それから質屋で用を足して戻つて來る途中で、御苦勞にも、夏藏の目を掠めて、鷄籠の中を覗いて、やつぱり泥まみれの小犬が溫順しく蹲まつてゐるのをみると、まるで盜人が穴の中の隱し物を時々出して見るやうな心持ちで、「エス」とか「ポチ」なんどと、出鱈目な名を呼んでゐて、犬の方から他愛もなく、舌を出して、黑助を舐めにかゝると、もう、すつかり、自分の飼ひ犬にしたくなつて來るのだつた。

黑助は身分不相應に羞恥心や虛榮心の强い男だ。それで質屋へ行かうなどゝ覺悟するからには、よく〳〵のことなんだ。藪の中を五六丁港の方角へ出た處に中島川が無數の石橋を渡して、堤の櫻に圍まれて流れてゐる。阿彌陀橋と相對して、丸一屋の土藏があつた。黑助は丸一屋の土藏の下で、勇氣を付け直して、いきなり紺暖簾を潛らうと云ふ考へだつた。處が、其處まで來ると、暗い土藏の窓から突然、眞白い女の顏が幻のやうに現はれた。黑助は跳び上つて横町へ逃げ出した。それから、露路から露路へ、當もなく、ぐる〳〵廻つては、幾度も決心をし直すけれども、土藏の近くま

で來ると、女の顏が見えて又引き返すのが、自分でも齒痒くて堪らないんだ。一層のこと質屋は廢めにしやうと思つて歸りかけると思ふと、思ひ切れないで、彈ね返されるやうに、土藏の前までやつて來るんだ。漸く土藏の下を躊躇んで通り拔けた時、今度は入口の紺暖簾の下から足元を覗いて見た。すると垢じんだ白足袋と、燒杉の薩摩下駄が後を向いてゐた。黑助はそれに勢を得て入つた。白足袋と薩摩下駄は暗い土間に立つてゐて、格子戸の中で、虫蝕んだ羅漢のやうな顏の番頭が頻りに算盤を彈いてゐた。薩摩下駄が、

「もう二十錢貸してよかろ」

と突然格子戸の中へ首を突つ込んだ時、自分のことのやうにひやりとした。番頭が眼鏡の下から、新期に入つて來た黑助を見た時もひやりとして顏を赤らめた。薩摩下駄が番頭に彈ねつけられて困つた顏をしてすご〳〵出て行くと、急に心細くなつて來た。黑助の番が迴つて來て、慌てゝ佩いてゐる袴を脫いでから、海賊を釣るすやうにして、格子戸の口へ提げて行くときは、耳ぶたが、火のやうに熱くなつてゐた。が、そんな初心な處を見られるのが、また辛かつたんだ。そして成るべく低い聲で話をして貰ひたいと思つてゐる番頭の云ふことが、意地惡く、家の中で、がん〳〵響き渡るんだ。暖簾の外へ跳び出すまで、土藏の中から先刻の女が、ひよこひよこ店へ出て來なければいゝと、願つてゐたが、到々出て來なかつた。番頭が、黑助の見すぼらしい袴を、つく〴〵眺めて、何とか云つた。黑助は、

「よろしうございます」

と云つた。すると、番頭が大きな大福帳に一圓紙幣を一枚挿んで、筆を添へて出した。

その時、奇怪なことには、黑助は頭の先から、足の爪先まで、わく〳〵顫へて、胸騷ぎが始まつて、汗びつしよりになつてゐた。同時に、何だか、これで一人前の男になつたやうに、馬鹿々々しい嬉しさが腹の底から込み上げて來て、一

圓紙幣を握り詰めたまゝ、川邊をどん〳〵駈け出してゐたものだ。藪の中では夏藏が支那人の繻子賣りを相手に頻りに饒舌つてゐて、黑助の顏を見ると、

「犬は河の中に棄てましたか」

と言つた。黑助は、にや〳〵笑ひ乍ら、成る可く、出がけに佩いてゐた袴が、失くなつてゐるのを悟られぬやうに、こそ〳〵と臺處の土間から入つて行つた。土間へ入るまでは、殆んど無心だつた。土間へ入つていつも黑助の破れ靴が狸の泥舟のやうに傾きかけて、脫ぎ棄てゝある外に、一足の草履もない筈の上り框に、いつのまにか、黑鼻緒の籐表と同じ色の草履とが列んでゐるのを發見した時、はてなと云ふ樣子で、暫く上るのを控へた。夏藏の方の客でないことは夏藏か支那人の繻子賣りと緣側で饒舌つてゐたのを見ても解る。そうすると、二階に來てゐる客には違いないのだが、藪の中の隱れ家に、客の來る道理がなかつた。黑助は脫ぎ棄てゝある下駄の主を想像して見たが、どうも見當がつかなかつたものだから、何となく薄氣味惡くなつて、このまゝ客が歸るまで、も一度外をぶらつかうかとも思つたり、ことによると、乳母の一味ではないかとも思つたりしたが、また、誰も知る筈のない隱家へ、突然訪ねて來る客が、どんな人だか知りたくもあつたから、板敷から梯子段の下まで、こつそり這ひ寄つて、二階の動靜を窺つて見た。けれども、姿は勿論障子に立ち切られて見えないし、不思議なことには話聲も聞えないんだ。梯子段の下に五分間ばかり、伸び上つてゐるうちに、ふと、二階の方で、黑助が戾つて來た足音を聞きつけて、急にひつそりしてゐる姿が、客の目の前に浮んで來るやうで、何だか極りが惡くなつて來た。だから、到々思ひ切つて、それも、ほんの今の先歸つて來たんだと云ふ風に、態々土間へ下り直して、ばた〳〵と足駄の音を立てゝから、恐ろしい物を見るやうな、いやにそわ〳〵した氣持ちで、梯子段を上つて行くんだつた。

前に云つたかも知れないが、漸く、漸く、こうして姿を眩ませて來て、ほんの幾日も經たないうちに、あつけなく、お島一味に、嗅ぎ出された。梯子段を上り切つて、お島とおふじとが訪ねて來てゐるのを見たときは、後ろから「わつ」と脅かされた氣持だつた。よく／＼生甲斐のない人間を、乘せたがる、目に見えぬ車——例へば、火の車のやうな——が、あるならば、そして、その車に、ヤクザ車と云ふ名前をつけて置いて、藪の中に、うつちやつてあつたとするならば、まつさきに其ヤクザ車に乘り込んだのが、夏藏で、その次の客が黑助で、續いて例の小犬、それから、最後とは云へないかも知れないが、兎に角、氣のつくまいと思つた學校まで、態々黑助の行衛を訪ねに行つて、老爺（佐太郎といつた）の危篤を傳へがてらに、恨みを述べに來たお島とおふじが乘りかゝつて來て、この五人の客が一塊りになると、突然、藪の中から、ヤクザな響を立てゝ軋り始めた。ごろ／＼ごろ／＼と、軌道を踏み外した荷積車のやうに。このヤクザ車が、タンクのやうに、路のない處と、路のある處との見分けがつかずに、向ふ見ずの恐ろしさで。

（三）

黑助の記憶にある佐太郎老人は、いつも、肺病が筒ぽうを着て氣味の惡い咳をする影法師に化けたやうな、よぼ／＼の老人だつた。どう云ふ譯だか、お島は老人を嫌つて、鯨屋を始める頃から「爺さんは、役に立ちません。今から老耄れて、先でどうして暮らせますぞ」と云つたもんだ。間もなく老人は天主堂に傭はれた。お島の方では、逢ひに行く樣子もないやうだつた。

「それは氣の毒だな。もう愈々駄目かね」と云つた時、お島が「えゝ。もう三日も持ちますまい」と云ふのが、早く片づいて仕舞へと云ふ樣に聞えて、老人が可哀相だつた。老人の娘が黑助の家へ乳母に來て間もなく、ある小學教師と駈け

落ちした先で死んだ時から老人は落膽して「あんな薄のろが、御堂に入つて、よく用が足せますぞに」とお島に罵られる程、ぼつとなつたんださうだ。丁度、今日あの埋立地に隣接してゐる出島の、唐人屋敷に、丸山遊廓の女郎が、役人に率ひられて通ふ時代があつたであらう。その役の一人に青年時代の彼を見出すことが出來たんだ。役人は彼女等の送り迎への外に、「女郎衆が唐人の金をくすねて戻りますので、調べますぞ。女郎衆の方でも段々狡うなつて仲々見つからぬ處に隱して歸りますが、それが了ひに露れて、一人々々唐人屋敷の出口で、尻叩かれますとすぐ出ましたぞのし。」とお島の話を借りて說明したい仕事を持つてゐた。黑助がこの話を聞いた時に「何處へ隱したんだらう」と呟いた。お島は笑ひ乍ら「尻を叩いて出ると云へば、大方解りますぢやろ」と云つたことがあつた。その唐人屋敷が取り壞されてから、鼠尾を始めて、彼等が住んでゐる濱の村に、小さいカトリツクの寺院が建立されて間もなく、老人は羅馬教の熱心な信者の一人に加つたんだ。

お島は、黑助が、無斷で藪の中へ引移つてから、一向たよりをしない言ひ譯に、困つてゐることを、始めから承知で來たやうに、黑助が極り惡さうに、何か云ひ出さうとすると、出し拔けに橫合から色々のことを饒舌り出すんだ。そして歸りがけに、氣の毒さうに藪の外まで送つて行つた黑助に「あなたとは、小せえ頃からよう馴染んでゐた爺ですけ。息のあるうちに一度逢ふて貰ひませうと思ふて、來ましたぞなもし」と云つた。その樣子で見ると、まだ四五日は大丈夫らしかつた。處が、その翌朝、黑助が夏藏の目を盜んで、鳥籠の中の小犬に朝飯を入れて戻つて來るのと、殆んど一緒に、おふじがしよんぼりやつて來た。彼女は老人の突然の死を報せに來たんだ。處が老人が死んだと云ふことが、どうしても云へなかつたと見えて、盲目の祖母の方から

「佐太郎は、まだ持てゝゐるかのし」

と切り出されるまでは、まるで、馬鹿のやうに、坐つたつきり、黙つてゐた。黒助が、彼女の海風に荒れた横顔をふと見たとき、頻りに、しばたいてゐたので、あゝ、老人はもう駄目だと思つて、一人で呑み込んだやうに、

「おばあさん。爺さんは、死んだよ」

と云つたんだ。すると祖母は頓狂な聲で、

「何時(なんじ)頃、佛になつたけ」

と云つた。その時、始めて、おふじは、

「今朝七時ぞなもし」

と云つた。それも一生懸命らしかつた。その證據には左樣云つて了ふと、まるで、小僧が使ひに來たやうに、うろたへて、歸つて了つた。

「何と云ふ馬鹿な娘ぢやろ。爺さんが死んだら、死んだと、さつさと云へばいゝのに、いつまでも黙つてゐるぞい」

と云つたかと思ふと、今度は黒助に、

「お前一寸行つて來たらよかろ。あれや、お前に來て呉れと云ひに來たんだぞい。あの薄のろのことだから、云へないで、歸つて了つたのぢやろ。行つて見るがいゝ、葬式でもするのぢやろ」

と云つた。

「そら行くことは行くが、香奠はどうしますか。」

「耶蘇宗だから、いるまい。鬼に角、おふじに追ひ付くやうに行かないと、あれが困るぢやろから」

と黒助を追ひ立てに、態々梯子段の口まで、こそ／＼這ふて來た。冷(ひや)つこい風が自然に湧いて來る處で、忙しくいろ

いろの用事を考へ乍ら着物を脱いで、柱に釣した。黑助は氣が進まなんだ。天主堂が氣に食はぬ譯ではなく、其處に住んでゐる、一人の赤ら顏の僧侶に出逢ふのが厭でたまらないんだ。さつと、半年ばかり以前に、一度、佐太郎が、肺炎で死損なつたときに、見舞ひ、と云ふより、彼の物好きから、見物に出掛けた。

その時、黑助を老人の病室に導いたのが、赤ら顏の醜い僧侶だつた。そのとき、病室と云ふよりは寧ろ物置同然の狹い部屋に、老人は藁蒲團の上に毛布を敷いて、すや〱と眠つてゐたが、黑助が途中で買つた手土産の芭蕉の實を提げ乍ら、入つて行くと、老人は突然薄い瞼を開けた。そして胸の上に組んでゐた枯枝見たやうな手をほぐして、黑助を歡迎するやうに、ふら〱と動かして見せた、かと思ふと、また、力なく、すや〱と眠に陷つて了つた。病人は一人ぼつちだつた。まんまるく肥つた赤ん坊を抱いた摩利亞の畫像の前に立てゝある蠟燭だけが、生命あるものゝ如く、燃えてゐた。黑助が、「お爺さん。容態はどうかのし」と何の氣なしに云ふと、この僧侶が、驚いて、慌てゝ「もう耳が詰つて、聲も出なくなつたから、返事は出來ないだらう」と低い聲を黑助の耳へ持つて來た。そして、黑助が持つて來た芭蕉の果を、事さらに二本の指で摘み上げて、「こんな物を食べる様な呑氣な病人ではない」と云ふ風に眉を潜めたり、頭を振つたりして、嘲けるやうに笑はうとしたんだ。黑助が、意外に重々しい病人の容態に驚いたのは實際だが、同時に病室を教へて呉れた此僧侶が、直ぐ引返すかと思ふと、さうでなくて、丁度囚人に逢ひに來る面會人を監視する態度で、半死の老人を盜み出されやしないだらうかと云ふ様子にも、少なからず意外だつたことだ。可哀相に老人は監獄で病みついた病人のやうに、便器も看護人も與へられずにゐたんだ。熱が出たと云ふ話もあつた。その時だつて、氷の一缺も呉れなかつたらうと思ふ故でもなからうが、溫厚な、眞個に神のやうな感じのする僧侶の中に、どうしてこれほど醜い顏に、梟の嘴と云ひたい鼻をつけて、蝙蝠の翼のやうな衣を纏ふ大男がゐるんだらうと思つた。このモンスターが、時々衣の袖を

張つて病人の顏を覗く姿は、老人を地獄へ誘き寄せるために、僧侶に化けて天主堂へ忍び込んでゐるサタンだと言へた。ある時、「御堂のお坊さんの中に、一人醫者がゐまして、風邪を引いても、下痢しても、葡萄酒を吳れますぞ」と佐太郎が云つた醫者が、自分を迂散臭さうに見てゐる此モンスターのやうだし、耳が詰つて、聲も出ないなど〻は、自分を早く追つ拂つて了ふための口實らしい氣がしたんだ。老人は此處で往生するのを、昇天することだと思つて、喜んでゐるだらうが、見舞の客や世話人に一々こんな不愛相な監視人を附けられて、話も出來ずに了ふのは不幸と云ふよりも悲慘だと思つた。「お前は何でえ長つ尻だらう」と云ひたい歩るき方で、モンスターは部屋の中を行つたり來りした。折角老人に逢ひに來て、顏を見たばかりで歸るのが物足りないのも無論だが、一つは、餘計なことを饒舌りかけて、眠つてゐる病人を驚かされては困るなど〻、物々しく警戒する僧侶が忌々しかつたから、こつそりと寢臺の側へ近寄つたんだ。枕元に芭蕉の果を置いて鰯のやうな瞳を見開いたま〻、木伊乃のやうに凝乎と天井を仰いでゐる老人の顏を思ひ切つて覗き込んだ。同時に、後で「あ！」と叫ぶ聲がした。「左樣なら！」と云ひ乍ら、黑助は飛び出した。と云ふやうな記憶があるんだ。

着物を脫いで靴を穿いた。と云へば、何だか襯衣一枚になつたやうに思はれるが、彼は着物の下から洋服を着込む習慣をつけてゐたんだ。「重盛諫父」の繪の中に出て來る淨海入道の軍服見たやうに、襟の間から金釦がはみ出たりなんかしてゐる。いつの頃にかと、物の本にある通り、いつの頃からか、こんな變竹林な風彩を編み出して平氣でゐるんだ。袴をなくすると、直ぐ袴の入用が出來たり、靴の入用な時に、いつも破れてゐたり、實際靴が破れたのは、この頃始まつたことではないのを、今更らしく、うんざりして、靴を穿くまでには、疳癪を起して、二三度土間へ叩きつけるやうな芝居じみた所作をやつてからでないと、穿けないんだ。破れた靴なら、直しにやればい〻のを、繕ふ日數も要るし、

こんな、つゞましやかな、片づいた仕事が、元々嫌ないんだ。黒助は、暫く臺處に腰かけて、愚にもつかぬ思案に耽つてゐた。そのうちに、佐太郎の葬式へ行くのが馬鹿々々しくなつた。

何だつた佐太郎の葬式なんぞへ、のこ〳〵出掛けたり、あのモンスターの顏なんぞ見ねばならぬかと思ふと、理由もなく腹が立つて來て、いきなり、子供が拗ねるやうに、板敷に寢そべつた。黒助の側の、竈の上で、鉢卷をして舌出してゐる火吹達磨が、やけ糞に轉つてゐるのを凝乎と見詰めてゐると、大きな吐息と一緒に「何てえぼろぼろの家だらう。何も彼も、化け物見たいな形をしてやがる」と呟き度くなつて來た。すると、突然大きな蜘蛛に襲はれた一匹の子を妊んだ油蟲が、壁際から柱へ、難澁さうに、よと〳〵と逃げて來るのが見えた。

「畜生。こつちへ來たな」

黒助が頭を擡げると、油蟲は板敷へ匐ひ出た。かと思ふと、不意に暗がりへ、ごそごそと逃げた。黒助が油蟲の行衞を探してゐると、眞つ黒い板敷に、水銀のやうな光が、ぎら〳〵と輝いた。腰を屈めて、隙して見ると、美しい圓い光は、水晶の珠數玉を鎖いだやうに、梯子段の下まで、點々と列んで居た。其光の玉を辿つて行くと、二三段目で消えて了つたとき、今にも降り出しさうに時雨れて歸つたおふじの顏を、ふと思ひ出して、子を妊んだ先刻の油蟲のやうに、ごそごそと靴の上から甲掛を穿いて、急いで出て行つた。暗がりから外へ出ると、篩にかけて落される日光が、丁度簾を垂れたやうに藪を潛つて、斜めに草生へ走つて居た。突つ切ると、いきなり、頭の上から外套を押つ被せる勢ひで、その日の光が明るくなつて來る往來を歩るき出した。(以上發端)

天主堂の門の前に來るまで、到々おふじには追ひ越せなかつた。けれども、おふじの跡を追つかけて急いだので、

佐太郎の葬式――と云ふより、告別式に間に合つてよかつたと思つた。その告別式があるともないとも、一言も斷らずに、おふじがあたふたと歸つて了つたので、黑助の方で、推量して來なければ、間に合はない筈だつた。何故なら、その告別式らしいものが、丁度黑助が、禮拜堂の扉を排して、堂の中へ、入らうか入るまいかと逡つてゐる時、既に始まつてゐたからだ。黑助の仕度は兵卒が行軍に出掛る時のやうだつた。彼の後ろからは一人男が、中折帽子を被つて、堂の扉を押し開けて、入つて行くのを見て、靴の甲掛を脫してポケットへ捻じ込んだり踵を振りかへつて見たり、爪先を氣にしたりして、跛足が跳んで歩る格好で、堂の中へまぎれ込んだ。跛足の眞似をしなければ、足の先から靴が拔けて落ちるからだ。死んだ老人の骸は夙くに柩に納めて、上から硝子の函を被せて、僧壇の下で、其處に集まつて默禱してゐるお島やおふじや僧侶達に守られてゐた。

「おふじの奴、俺の顏を見たら吃驚して、喜ぶだらう。まさか、跡を追ふて來やうとは思ふまいからな」

處が、吃驚する筈のおふじや、慌てゝ跳んで來て口達者に挨拶する順序のお島も、柩の前に蹲まつたきり、うんとも、すんとも言はないのだ。カトリック敎徒の告別式に顏を出すのは、これが皮切りだが、堂の中に蹲つたきり、脇目も振らずに、咳一つするのを恐れて、神の裁を受けに來た罪人のやうに、つくねんとして、後から誰が入つて來やうが、そんなことには無頓着で僧侶の司祭を待つてゐる處は、何よりも先づ異様の感がした。黑助の豫想は到々、この調子で歸るまで外れて了つたのだ。で、扉を押し開けて入つた當座は、何處におふじがゐるのか、お島が何をしてゐるのか、それさへ見當がつかないで、暫く扉を背にして、茫然立つてゐた位だつた。

青空の下にも、こんな暗い息苦しい一劃の世界があるがと怪しまれるほどの陰欝な、廣い禮拜堂の中に、紫や黃や綠色の奥ぶかい窓を濾されて來る空の幽かな明りに、僧壇に横へてあつた佐太郎の柩も、柩の周圍に佇んでゐる素麻衣の僧侶

も僧侶の足元に額づいてゐる三人の男と三人の女も、何とはなしに、地の底に向つて一様にぼそぼそと呟いてゐるのではないかと思はれた。彼等の頭上には、少かに二本の蠟燭がともされてゐた。女は髮をすつぽりと、白い布で包んでゐた。その女と云ふのは、お島とおふじと、黑助には未知の一人の年增だつた。黑助がおづおづ入つて來た時、黑助を振返つて見た赤鬼のやうな顏、紫がゝつた天刑病者のやうな顏、蒼褪めた土佐衞門の顏が、此、三人の男だつたのだ。處が、僧侶に引かれて、この三人の男の後ろに跪づいた拍子に、ふつと自分の顏が、柩を蔽ふた硝子の函に映るのを、ちらりと見た時、跳び上つて驚きたいほど、物凄い、黄色い餓鬼の相をしてゐたんだ。此處へ足を踏み入れる人間は、アラビア物語の魔法壺から湧き上る人間のやうに、見る間に、相貌が一變するのではないかとさへ思はれた。黑助は、柩の前に列んでゐる僧侶の顏を、一つ一つ見て行つて、自分に一番近く、あのモンスターが、柩を見下ろし乍ら、心地よげに突つ立つてゐるのを發見して、人知れず一分二分と、いざりの樣に、ずるずる遠ざからうとした時、堂の中を巡つて來る松脂の煙が、會葬者の袖と袖との間から、烈しく鼻を衝いた。そして、ふらふらと氣持ちの惡い眩暈を覺えた。と思ふと、女も男も俄かに立ち上がつて、蛇の首の金色の杖の先で、柩の蓋を靜かに開く僧侶の樣子を、息を殺して見守つてゐた。一人の僧侶は祭壇の上からクリスマトフを抱へて來て死人の顏に振りかけた。それが濟むと、小さい黑塗りの十字架を伍人の手に握らせた。三人の男は、見世物でも見るやうな腰付で、柩の中を覗いた。すると一人の年若い僧侶が、この會葬者の一人一人に小さい黑表紙の本を渡しに來て、細い細い聲で、黑助に、

「あなたは信者ですか?」

と尋ねるんだ。

「いゝえ。」

「では、祈禱がお解りになりませんでせう」

「えゝ」

僧侶は、三人の男に配つて歩いた同じ本を黒助に渡した。

「あなたの番が來たら、此處をお讀みなさい」

と云つて立ち去つた。僧侶が、毛むくじやらの拇指で、指さして呉れた頁を、黒助は口の中で二三度繰り返して見た。

「エノクを死の門より
エリアを死の恐怖より
イザクを父の犧牲より
ロトを火の雨より
三人の少年を火の竈より

「救ひ給ひし如く、この僕の靈を救ひて、天國の榮を與へ給へ」と。氣がつくと、黒助の前におふじが、白手拭を冠つたまゝ、しよんぼりと立つてゐた。同じやうな本を抱へて、讀みかけては、行き詰り、讀みかけては行き詰り、何遍も同じ文句を讀みかけて、讀み切れないで、そしてやつと一行辿つて行つたかと思ふとばつたり、默り込んでしまつた。三人の男と黒助とが、もどかしさうに、おふじを見た時、漸く解つたのだが、彼女は、しく〲泣いてゐたんだ。その時おふじの横顔が、あの荒くれた、がさがさした、潮風に傷められた横顔が、不思議にも、磨きをかけた象牙のやうに滑らかな生白い光澤を帶びてゐた。時々、ぼうつと息を吹きかけた刹那の曇りが、丁度、穏やかな波の上を走り過

ぐる一塊の雲の影のやうに、浮く一方から消えて居た。黒助は此瞬間、おふじを綺麗な娘だと思つた。けれども、禮拜堂の中から、ぞろ〳〵出て來る男の、今まで、浮世とはまるで縁のない姿に見えたのが、明るみへ出た時、褄をあてた足袋や、そゝくれた帽子や、平凡な顏のつくりに變つてゐるのを見ると、やつぱり、黒助と同じやうな人間だつたと云ふ氣がしたり、美しく見えたおふじが、矢つ張りきめの荒い顏の、無敎育な漁村の娘に戻つてゐるのを見ると少なからず失望したりした。否。それよりも、柩の前で、まるで佐太郎の死骸と靈魂とを、何處かの世界の隅から受取りに來て、涙を零して悼んで居るやうな、黒助とは、習慣も言葉も、肉體に籠つてゐる魂さへも異つた人間としか見えない振舞ひをした彼等が、堂の中から、吐き出されて、草芝の端に建てゝある僧房の一室に引揚げた時に、急に人間の世界へ跳び込んで來たやうに、吐息して見たり、胡座を掻いて見たり、女は髮を包んでゐた白布を取り脱したり、煙草を喫んだりしてゐて、佛の後始末に就いて、騷がしく饒舌り出すのを聞いてゐると、また少なからず奇異の感がした。一人の男は白足袋を穿いてゐた。一人の男は木綿の黒紋付を羽織つてゐた。一人は、中氣病みのやうな目付の半老人だつた。そして、こんな相談を始めたんだ。相談と云ふよりも謀叛を始めたんだ。白足袋の男がこう云つた。

「爺さんは耶蘇宗でも、先祖は代々淨土宗ぢやないか、爺さん一人が耶蘇宗の葬ひで、浦上の墓地に納まつたら、先祖に濟むまいぞ」

黒助は、この男も耶蘇敎の信者でないのだと思つた。すると、黒紋付の男がこう云つた。

「それも、左様けどな、今さら、佛を擔ぎ出す譯にも行くまいがのし」

「何、構ふものか。佛を貰ふて來て、宿の寺で、お勤めし直したらいゝさ」

「御堂の神父がそれで承知するかな」

「承知するもせんも、親類が皆佛宗の方で葬式を出すと云ふからと云つたら、何ぼ解らず屋の坊さんでも、仕方がなしに、引き渡してくれるさあ」

黒紋付の男は、また「それも、さうだな」と云つた。

「それで、佛の引渡しが叶はぬと云ふたら佛を盗み出して連れて歸るだけのことぢやないかのし」

お島が用足しに出て行つた後で、年増の女が、

「耶蘇宗もよいけんど、死んだ佛が、それぢや、先祖さんと、あの世で逢はれまいぞ」

と云ひ出して、男を笑はせた。黒助の後ろで、こんな埒もない話を默つて聞いてゐた、おふじは、佐太郎の死骸が、どう云ふ風に納まるんだらうと云ふやうな顔付で、心配さうに涙ぐんでゐた。處へ、老人が横合から、

「そんなこともあるまい。死んで落ち付く先は、耶蘇でも淨土でも一つ場所だ」

と呟いた。その後で、

「しかし、耶蘇宗も有難いけ。あの佐太郎が酒を廢めたり、煙草を廢めたりしてさ。濱の者の手前、自分一人耶蘇宗になつたと云ふことを隠してな、稲荷の祠に十字架を入れて朝晩拜んでゐたつけがのし」

黒助は落ちついて、こんな、とりとめもない話が聞いてゐられなかつた。時々、黒紋付の男がおふじの袖を引いてはこそ〳〵と耳み打ち話をするのが、妙に氣になつたり、それよりも、試驗の心配が、むつくり頭を擡げて來たりして、話の切れ目を待つてゐた。黒助は僧房を出るまで、黒紋付の男とおふじの內證話が氣になつてゐた。おふじが出て來たら、あの男は何だと尋ねる積りだつたが、白足袋の男と、老人の後ろから、跟いて來たおふじが、始めて覺へた挨拶を述べるやうに、「おほきに、有難うございました。明日お禮に上りますぞなもし」とおろ〳〵云つて了ふと、黒助の方

から、引返して、あの男は一體誰だとも聞けなくなつて、お島とも逢はずに、天主堂の森を一人で、例の跛の眞似をして、潜つて行くのだつたが、黒助が折々好きな活動寫眞で聞く辯士の口上を一寸借りて言つても差し支へなければ、此處にはからずも黒助は、天主堂の森の中で、彼が夏藏に内證で飼つてゐる小犬に出逢つた。實際それに違ひないと思つたんだ。色合から、顔つきから、歩るき方から、短かい尻つ尾の具合から、あの小犬にそつくりの犬が、ザンボアの蔭から、不意に足元へ、じやれかゝつて來て、跛を引いて居る黒助を危なく躓づいて轉がさうとして、黒助が慌てゝ跳びのいた時、尻つ尾に火をつけられたやうな狼狽へた形で、鬼のやうに森の外へ逃げて行くのを見ると、黒助は、けつとして立ち停つた。逃げ出した小犬は、瞬く間に、何處へ行つたか、見えなくなつて了つた。立ち停つた黒助は、すぐ、藪の鳥籠が、夏藏の手で何處かへ取り棄てられて、左まで離れてゐない天主堂へ、黒助の臭を嗅ぎながら、あの小犬が跟いて來た光景を想像した。それから、夏藏が、鳥籠を引つくり返していきなり小犬に跳び出されて魂消たり、あとで、それが黒助の仕業だと知つて、澁い澁い顔をしたり、他所の家へ厄介になつてゝ、食ふや食はずでゐる癖に、隱れて小犬なんぞをよく平氣で飼へるものだと呟いてゐる有様まで想像して、突差の烈しい不安に襲はれた。そして藪へ戻るまで、藪の中へ戻つて、先づ夏藏の工房を、こつそり覗つて、夏藏が、そうでもないやうな格好で、頻りに燻竹を削つてゐるのを見澄してから、怖々藪の中へ引返して、鳥籠に被せてある、ぼろぼろの筵を引つ剝がすまで、頭がそれで一杯になつてゐたんだ。筵を剝いで、小暗い籠の中を覗くと、小犬の姿が見えなかつた。鳥籠の周圍をぐるぐる見廻して、黒助が置いた場所に、きちんと鳥籠や筵や縁の缺けた茶碗が据えてあつて、少しも動かされた跡もなし、小犬が外へ跳び出た樣子もないので、彼は、今一度、鳥籠の中を覗いた。そして、また「エス」とか「ポチ」なんどゝ出駄雑目な犬の名を呼んで見た。が、籠の中からは何の音も聞えないので、黒助は、工房の中をすかして見て、

「あの時の小犬がやつぱり彼奴だつたかしら」と考へた。そう考へると、いきなり、今度は、大きな鳥籠の四方に垂れてゐる莚をのこらず、除り去らずにゐられなかつた。小犬は矢つ張り居たんだ。隅の暗がりの、柔らかい眞黑な土を掘つて後ろ向きに顔を突つ込んでゐたんだ。食べようが、食べまいが、生きやうが死なうが、ちつとも構はない姿をして寢てゐたのがやつと見附かつたとき、黑助は喜びの餘りに、また出鱈目な犬の名を呼んだり、鷄籠を、ゆすつて見た。が、小犬は知らずにゐた。「可笑しな犬だな、聾犬かしら」黑助は、竹の小枝で小犬の尻を突いた。すると、やつと氣がついたやうに、跳び上つて、木鼠の目を見張つて、眩しさうに黑助を見て、尻つ尾を振るんだ。

「やつぱり、天主堂で見た犬は違つてゐたんだ、夏藏は、まだ、此處に小犬の居ることも知らないんだ。」

黑助は、元の通りに、鷄籠の上から莚を垂れて、漸く安心して、二階へ驅け上つた。

天主堂から歸つて來た晩に須原が、ひよつこり、訪ねて來て、話もないのに、殆んど、一時間ばかり黑助と向き合つて坐つてゐた。いつも試驗が近づいて來ると、恐怖病に取りつかれるのか、神經衰弱にかゝるのか、黃色い顔や手足の皮膚が、黝ずんだ靑味を帶びて、物の化に襲はれた人間のやうに、始終眉を釣り乍ら、びく／＼と唇を顫はせて、歩いたり、話をしたりする男だ。須原はこの町の或老官吏の一人息子だつた。そして頭腦の悪い處へ、學校はよく休むし、黑助のやうに、朝起きぬけから、でなく、床の中から、小説を讀む男だ。そんな處が黑助と似てゐる故か、黑助の方から二三度遊びに出掛けたことがあつた。その時見たんだが、須原の家の座敷の床の間に、二三本の刀が、刀掛に掛けてあつた。須原が二三年續け樣に落第した時に、彼の年老いた父が、刀を拔いて、須原に自殺を迫つたと云ふ話を聞いてゐ

たのを、ふと、その時、思出して、其時、「今度はどうなりますか、首尾よう行きますと、ほんたうに助かりますぜのし」と云つた彼の母親の淋しい、痩せた、白い顔を見た時、自分のことは、ふつと忘れて、「おい・君・今度こそは、しつかりしないと、お母さんが可哀相だぜ」と忠告したことがあつた。二三日前に、街の中で、偶然に出逢ふと、須原は、例の情ない目付で、「今度の試驗に、君は切り拔けるだけの自信があるか」と云つた。その時黒助が「まるでないよ。仕方がないから、成り行きに任せやうと思ふんだ」と云ふと、彼は、一人の味方を發見したやうに、言葉に彈みを持たせて、嬉しさうに、元氣よく「俺も左樣だ」と折り返した調子が、左樣だから安心だ．と云ふ風にしか聞えなかつた。その時、會話の中に、「一番手剛いのが、」と須原は指を繰つて、「えゝ、代數に幾何に三角に物理に化學にそれから、英語だ」と云ひ乍ら、苦笑した。「それぢや、まるで、何にも知らないんだ」と笑つた黒助に「いや・然し、受持ちの敎師が一人だからね」と意味のあるやうな、ないやうな謎みたやうなことを云つた。それが、この晩になつて、やつと解つた。と云ふのは、須原が、黒助の顔を見るや否や、出し拔けに、「お前は、あの福田を、一體、どんな性質の人物だと思つてゐるのか。神妙なクリスチヤンだと思つてゐるだらうな」

と云ふんだ。福田といふ敎師が、つまり須原の、一番困つてゐる學課の受持敎師なんだ。詳しく説明すれば、ひよろ〳〵と痩せた、脊の高い、髮を分けた、時々、涎を垂れて、粗忽でもしたやうに、あたふたと、口を拭く、まだ三十前後の基督敎信者だ。もつとも、黒助の學校は、アメリカの宣敎師が建てたミツシヨン式の中學で、生徒にこそ、さう無理に押しつけないが、此處へ傭はれて來る敎師と云ふ敎師には、まるで、種痘でも植えつける氣で、否應なしに、耶蘇敎の空氣を吹きかけて置いて、信徒の中へ叩き込んでゐたやうだつた。

「さあ。性質や人物は知らないが、下宿なら知つてゐる。ひいらぎ屋だらう。それだと、俺の祖母さんの遠縁の家だが

ね」

「さうだらう。知らないかも知れない。どんな悪いことでも、悪いことゝ名のつく事をやる時にさ、お前なんぞに嗅ぎつけられるやうな明るみでしやしないし、第一彼奴、お前悧巧だからね。處が、神様は何時まで、彼奴の罪悪を見遁してはゐないぞ。一寸これを讀んで見ろ。驚く可きことを發見したんだ。」

と云ひ乍ら袖の中から、くしやくしやに揉みほぐした紙片を出して、黒助の前へ放り出した。それは、「福田先生。油屋」と認めた、勘定書だつた。藝者代とか酒代とかを合計て、七八圓ばかりのものなんだ。黒助も、これには一寸意外な目を見張つた。

「これは、女郎屋のつけだあ。な。油屋と云ふのは女郎屋だらう」

「さうさ。怪しからんぢやないか。この間の赤新聞を見たら、彼奴は、何處の娘と教會で結婚すると云ふ記事があつたが、それが眞個だとすれば、彼奴は大變な偽善者だ。クリスチヤンの假面を被つた色魔かも知れないぜ。何が當にならぬと云つて、クリスチヤン位當にならぬ、險呑な人間はないぞ。あれで我々に向つて、高慢な理窟をこねたりなんかするが、考へて見ると、あんな遊冶郎は、我々の試驗場に入つて來る資格はないぢやないか」

とまくし立てた。

「それや、クリスチヤンの中にも隨分怪しい手合はあるさ。福田がその一人だとした處で、せつぱ詰つた僕等の大晦日間際になつて、資格があるの、ないのと云つた處で、どうなるものか。僕の知つてゐる教會には、もつと猛烈な奴がゐるがね。以前海老名さんの手下になつて説教なんかして歩いた男で、ソシヤリストなんだ。その男が、先達女郎買ひに行つて、一晩女の顔を見なかたつそうだ。」

と云ふと、須原は、氣の拔けたやうな調子で

「振られたのか」

と云つて苦笑した。

「振られたらしいんだね。翌朝女郎が來て、氣分が惡いとか何とか詫びると、腹を立てゝ、厭味の一つも列べるかと思ふと、あべこべに、女郎へ敬服して了つてさ、厭な客に一度も顏も見せないで、夜明になつて挨拶に出て來る人格が見上げたもんだとか、厭な客にはね、希はくは、今後も出ない樣に祈るとか、頻りに女郎の意志を尊重したやうなことを云つて、自分が若し成金だつたら、お前さんの操の高い處に惚れ込んで、目の前で千圓積んで見せるが、見る通り牧師に、そんな派手な眞似も出來ないと云ふんだ。」

「きざな奴だね。」

「成金の眞似は出來ないが、出來ないと云つて、まるつきり出來ない譯ではない。此處に持ち合せが五十錢あると云ひ乍ら、その五十錢を紙にくるんで、何とか歌がかつたことを書いて女郎にやつた處が、女郎は非常に喜んださうだが、クリスチヤンとか、その、今云つたやうな、五十錢位のソシアリストなんて連中は、大抵、そんなもんだよ。稲田にした處で、獨り身の下宿住ひだから、たまには遊びに行くだらう」

「行くだらうて、お前、それで、いゝと云ふ筈はなからう」

と須原は、黒助が逃げやうとするのを、後ろから、追つかけて來るんだ。

「惡いことには違ないが、惡ければ、どうするのか」

須原の眼は、だん／＼光りを帶びて來て、二三度、ガク／＼と齒の根を顫はせたかと思ふと、首筋から顎へかけて、

ぞつとする程の鮫肌の粒々を噴き出して、肩を怒らせ乍ら、餘程の決心をしたかと思はれるほどの、意氣込んだ調子で、

「彼奴を懲らさうと思ふんだ。懲らすことが出來なければ、脅かすだけでもいゝ。懲らすか、脅かすか、どつちかさ。今日は、お前にそれを相談に來たんだ」

黒助は、はじめから、女郎屋の勘定書を利用して、須原が、あの涎臭い教師を、今云つたやうに、脅やかして置いて、たゞそれだけではなく、もつと、もつと肝腎な落第から遁れると云ふことに結びつけ度い樣子を、いくらか悟つてゐたんだ。然し、須原が、興奮した言葉には、驚いた風を見せた。

「君と俺と二人で、やるのか？それは無謀だぞ。」

「橋本にも話はして來た。さうして贊成させて來た。だから君も出て呉れたまへ」

「橋本だつて、君だつて、俺だつて、落第しさうな怠け者ばかりだね」

と云つて、生白い微笑を浮べて、小さい溜息を吐いた黒助も、どうかすると、須原の狂氣じみた熱に感染しさうだつた。けれども、臆病な、この須原のやうに、思ひ切つて棄て鉢になれない黒助は、却々承知しさうに見えなかつた。だから、須原の腹の中を見透したやうに、

「卒業間際になつて、そんな手荒い眞似をしたところで、出て了へば、あんな奴に用はないのだから、よしたまへ。よしたまへ。」

と態と冷淡に構へたんだが、云ひ募ゆれば、「苦しまぎれに、ばたついたつて、どうなるんぢやない。お前はまだ血迷つてゐるんだ」と云ふのが、眞個の處だつた。福田を脅かすのは痛快だらう。それが成功して、物になればいゝが、黒

助には、そんな突つ飛な冒險を夢中になつてやつてのける膽つ玉もなければ、第一、面倒だつた。けれども試驗を恐れてゐることは、須原と變りはないのだ。それから、一口も利かずに二十分ばかり向き合つてゐて「さうかね。然し俺は、やる積りだ。君も今一遍考へて、男らしく決心をして呉れたまへ。俺は、明日の朝、返事を聞きに來るから」と云つて歸つた。男らしく決心をして呉れと云つたのが、無性に癪に障つて、そんな見つともない強請の眞似までして、本業しなくてもいゝんだと、反對な感情が起つた。けれども、やつぱり試驗は怖かつた。須原が歸つて暫くしてから、「あゝあの時、相談に乘つてやればよかつた」と後悔した。處が、翌朝になつて、須原が、返事を聞きに來ることは、知り乍ら、黑助は、夏藏と一緒に藪の家を跳び出した。須原に與ゆる返事が怖いのと、夏藏に誘ひ出されたからで、丁度いゝ鹽梅だと思つたんだ。

須原が、その前夜歸つてから、間もなく、二疊の工房から、のそ/\二階へ上つて來て、明朝、アメリカの船を見に行かないかと誘つたんだ。彼は、珍らしく、食ひ物を持ち出した。串ざしの黍團子だ。竹の皮を開けて、

「さあ。何卒御遠慮なく、召し上れ。お午に町から買つて來ましたのさ」

と云ふ處が、いつもの夏藏とは、餘つ程異つてゐて、幾らもない團子を、さも食ひ切れぬ程、積み重ねたから、勝手に食へと云ふやうに、何遍も催促するんだ。それから、船の話を持ち出して、夏藏特有の世界へ、暫くは黑助を引き摺り込んでゐた。

「日曜日でもないのに、行くんですか」

「えゝ。商法は日曜でけんど、明日は遊びさ」

「行きませうかね」

と云ひかけて、須原のこと、幽靈のやうにつき纏つて來る試驗の顏が、目先にちらついて、一寸、控へて、えゝ儘と云ふ氣で、

「是非行きませう」

と答へると、夏藏は、頻りに、紅茶やチョコレートや西洋料理の話を持ち出して、船へ行けば、手摑みに食へさうな旨い說明をつけて、黑助の好奇心と、いつも滿足されない氣とを、頻りに煽り立てたんだ。そう云ふ譯からして、朝八時前に藪の家を出ることは出たけれども、すぐ其足で、波戶場へ行くかと思ふと違つてゐた。

「晝頃がいゝから、それまで町をぶらつきませう」

と否應なしに晝過ぎまで、黑助を連れ廻つて、二時頃、ある薄汚ない、港町の支那饂飩屋(チャンポン)の二階に轉がつてゐて、黑助が、

「もう、そろ〳〵出掛けやうぢやありませんか」

と云ふ度に、

「も少し待つて下さい。成る可く夕方の方が都合がいゝですのぞし」

と云つて、まるで、子供を騙すやうに、日沒近くまで、天井の低い、鼠穴だらけの、油臭い部屋に引つ張つて、それから、何度も、支那饂飩屋の帳場に時間を見に行つてから、漸く海岸へ出掛けた。夏藏は海岸の石垣に、無數にくつついてゐる艀舟の屋形に菰掛けのあるのを選んで、船番に斷つて借りた。時々、黑助にも漕がせた。船を漕いで居て、ふつと、藪の中のことが氣になるのだつた。洋燈は誰がつけるだらう。直ぐ歸ると云つて跳び出して置いて、晝になつても、日が暮れても、一向戾つて來ない彼を、あの、どろ〳〵に潰れた白い目を見張つて、窓から覗いて待つてゐやしない

かと思ふと、船はどうでもいゝと斷つて戻りたくもあつた。そのうちに、藪の中へやつて來るおふじのことや、老人の死骸の後始末を、どうつけたか、朝飯も食はせずに來た小犬のことまで氣がゝりになつた、けれども思ひ切り、歸りたいとも言へないで、ずる〳〵に港の中へ搖られて行くんだ。もう、その時刻には、波の上の、彼方此方に、明りが見えた。燃え燼のやうな色合から、水色へ、水色から灰色に移つて行く空に、今一つ、今二つ、三つ、四ツ。ぽつり、ぽつり數へたら、いくつも、雨粒見たやうな星が見えて、とまの蔭から、行き違ふ舟が小さい横波をたてゝ通り過ぎた。黑助は屋形の中から出たり入つたりして、夏藏が指して見せる巨きな洋船から、可なり距れてゐる淺洲に、沈みかけた一隻の木船を見出したとき、「あ、乞食の巣だ。」と言つた。夏藏にも、指して見せた。黑助はその黑ぼけた海苔のついた木船に一人の年老いた和蘭陀乞食が住んでゐることを知つてゐた。

ある時、港へ碇泊した船の音樂隊が、音樂隊が練り廻るには、至つて不調和な街を、賑やかに囃し立てゝ通つた。その音樂隊を見物する路傍の群衆に混つてゐた黑助の耳にこんな問答が聞えた。「誰が通るのだらう」。それから、誰が通るのだらうと呟いて、往來を突つ切らうと企てたと見えて「行列が通つて了ふまで、跳び出しちやいけない」と巡査に咎められて、「どうして？　どう云ふ譯でかね」。「樂隊が通るんだ。」「あゝ。樂隊か」。暫く聲が途切れて、「お前は稼ぎの戻りかね。」と云ふ巡査の聲が聞ゆる時分には、群衆がどよめいて、樂器を抱へて列を作つた水夫の靴音が、濛々と渦いて來る埃の中から、ざわざわと響いて來た。水夫は群衆の前で、奏樂を始めた。すると突然「フーラー」と云ふ大きな聲が群衆を驚かせた。黑助が振り返つた時は、今まで巡査と渡り合つてゐた老人が、帽子を脫つて、頻りに頭上で振つてゐたんだ。鯨の鬚ならこの位は光るだらうと思ふ白髮が、ぎら〳〵輝いてゐた。その老人と云ふのが、和蘭陀乞食なんだ。昔その邊に頰といふ肉のあつた跡の深い洞穴に、幽かな血の色を漂はせ乍ら「萬歲！」と怒鳴つては、大

夫の靴音と調子を合せ乍ら、ヴァイオリンを抱へたなりで、雀のやうな足どりで、ことこと、こと、こと、と足踏みを始る。と云つた乞食だ。

黒助は夏蔵の舢舨が、老乞食の船の側を、ぴちやぴちやと通り過ぐる迄、木船の上を眺めてゐた。この船に住んでゐて、街へ稼ぎに來る老人と、彼は遊廓の入口で、よく行き合ふんだ。それは老人の稼ぎ場が居留地のバーでなければ、遊廓の入口に、たつた一軒殘つてゐる西洋人の酒場と定つてゐたからだ。老人は酒場の入口に蹲踞み乍ら、いつ來るとも解らぬ髪の赤い客を待つてゝ、合力を乞ふたんだ。ポンペイの廢墟には化石やラパと少しも變らぬ人間が住んでゐるさうだが、灰の底に埋もれぬだけのポンペイと云ひ度い此町にも、さまざまの不思議な人間が彷徨してゐる。彼はその一人だ。

世の中の「娘」とか「妻」とかと職業の部に入るならば、老人の商賣は「乞食」と言つても差し支へなかつた。それも、通り一遍の無藝な流れ乞食でなくて、老人は多少の景物を見せて物を乞ふた。それはヴァイオリンなんだ。老人はヴァイオリンを抱へて歩いた。抱へて歩るくばかりでなく、爪の先で、絃を摘み上げて彈くこともあるが、音がしないのだ。けれども、音がしやうが、しまいが、ヴァイオリンを彈く手數には變りがないと云ふ風に、一軒々々の戸口を廻つて歩るく仕事を始めたのは、餘程以前からで、恐らく黒助が生れない時分からだらうと思はれる程「和蘭陀乞食」と云へば、街の人々の目に馴染んでゐた。

港の片隅に沈みかけてゐる幽靈船然とした、おまけに、何處の港にも籍のない、ぼろぼろの木船が、この靜かな港へ、何處からともなく、漂着した、その船は港へ入り込んだ時から、餘程破損してゐたと見えて、間もなく、二進も三進も動かなくなると、食ひ物に窮して、思ひ思ひに船を棄てゝ上陸した船員の中に混つて、働いてゐた一人の青年が、此老ひた

る乞食なんだ。この年になるまで、もし故郷があるとすれば、その故郷へ戻ることも出來ずに、最初はどうにかなるだらうと云ふ氣だつたのが、白い顔や灰色の髪が次第に黝ずむにつれて、始め嫌つた勞働や大道人夫の眞似をし乍ら、傾いた船の中に殘してある女や子供を養つてゐるうちに、だんだん老ひ込んだり、零ぶれて行つた漂泊者の群に加つて、街の中や、海岸を彷ひ彷ひ心細く、こうした悲慘な藝人になつて了つたんだ。それ以來、二十年も三十年も港の一角に吹き寄せられたまゝ、修理の見込みのない船を、あの凹んだ目を一層凹ませて、海岸の石垣にもたれ乍ら、ぼんやり眺めてゐる老人の姿を見る度に、黒助は、何だか、今一つの、自分の影を見詰めてゐるやうな、淋しい感に打たれる。それにしても、二十年彷ふても三十年漂ふても、日本人と差別のない程言葉が旨く使へるやうになつても、周圍の人々と、同化する力がないのか、同化したくないのか、陸の上に、一構への小屋すら拵へることが出來ないので、日が暮れかゝると、さも嬉しさうに、沈みかけた船へ、いそ／＼と戻つて行くんだ。

「もう、そろ／＼爺さんが艀舟を漕いで、戻つて來る時刻ぢやありませんか」

と云ひ乍ら、老人が浮し板同然の小舟で波を分けて來る處や、老人が、海ねずみを相手に眞つ暗な船室でヴアイオリンを彈く處を想像してゐると、夏藏が、

「あれを、御覽ぜろ。居ますぜ。居ますぜ。爺さんの友達が。」

と可成り遠のいて行つた甲板を顎でしやくつて見せた。甲板と云つたけれども、船全體が甲板だ。帆柱も煙筒もファンネルもないんだ。たゞ船の中央に、三角形の、崩れかけた、でこぼこの船長室が、白蟻の塔見たやうに取り殘されてゐるだけだ。その船長室の中から、髭も髮も伸び放題に伸びた白ガウンの男が、出て來て、二三遍舳から艫へ、足のない船幽靈のやうに、往つたり來たりして、消えて了つた。その後から、入れ違ひに、子供を抱へた一人の女が、舳へ出

て蹲んでゐるのが、小さくなるまで見えてゐた。そして黒助が「あの女が、天主堂の方を向いて拜んでゐましたぜ」と云ふのと殆んど同時に、黑い船が巨人のやうに目の前に現はれて、急に息が塞つた。そして、漕いでゐる艀舟が、全く巨船の蔭に吸ひ込まれると、足の先が、わく／＼した。海の底から、次第に持ち上つて來る波が、突然艀舟の前に、ふくらんだかと思ふと、艀船の舷へ、一氣に押し流した。眞つ黑な蔭から、突然、空を仰ぐと、白と黑との柔らかい煙が、撚り合つたなりで、船の背中から、糸筋のやうに、ゆる／＼と騰つてゐた。巨きな船が、こゝまで來ると、右にも左にも浮いてゐて、狹い波の路次を、ふか／＼と揺られてゐるのが、地獄を行くやうな？ 氣味の惡さを覺えて、早く明るみへ遁れたかつた。すると、煙を吐いてゐる船に、夏藏は、ぐい／＼漕ぎつけた。そして、急いで水縄を舷の窓下の扶々に引つけて、船の鐵板と摺れ摺れに寄せた艀舟の上から、窓を、怖々隙して見た。

「何處から甲板に上るんですか。」

夏藏は返事もしないで、窓の蓋をこじ開けて船の中を覗いてゐたが、

「コモドール。コモドール。」

と秘然り呼んだ。そして、舌打ちし乍ら、黒助の方を振り返つて、

「甲板には、夜だから、上げて呉れませんがな。今に、マトロスが、出て來ますぞ」

と氣の毒そうに云ふんだ。それでは、まるで約束が違つてゐる。大體船の上を見物がてらに、夏藏が何を仕出かすのだか、それが面白いから、來たんだと云はうとして、黒助は、頗る浮かぬ顔をして見せると、

「實はね。坊つちやん。マトロスを船から、おびき出して、金儲けをするんですぞ。儲かつたら、あなたにだつて、骨折は出しますよ。確かに儲かりますけ」

と、流石に今まで嘘をついて、自分一人の力では、迚も仕事が首尾よく運ばぬと思つたのか、相棒の一人に黒助を連れ出したとしか受取れないやうな詫び方をして、「儲かりますぞ。儲かりますぞ」と念を押して見せるんだ。黒助は一寸意外だつた。實を云ふと、そんな馬鹿げたことが出來るものか、人を騙して置いて。手先に使はれて堪るものか、勝手にするがいゝと怒鳴つて、餘程、そんなことは御免だ。マトロスに脱船させたりなんか、あさましい眞似は、しなくてもいゝんだと彈ねつけて置いて、歸りたかつたんだ。けれども、海の上で、そうも出來なかつた。たゞ無性に不平らしい樣子を見せつけてやるのだが、遲鈍な夏藏は、そんなことには、まるで無頓着で、黒助が、それで承知したと思つたのか、それとも、今更、愚圖々々云つた處で、始まるもんぢやないんだ、お前なんぞは、他人の家へ岡迂々々しく、只で巣食つてゐるやうな、苦勞知らずだ、ふゝん、と云つた顔付で、すましてゐると、出し拔けに、圓い船窓から、大きな赤ら顔が、ぬつと出た。

「お。コモドール！　早くお出なさい。早く早く。」

と、夏藏は慌てゝ手招を始めた。そして、一體、どうなるんだいと云つた形で、舷べりに茫然突つ立つてゐる黒助に「この人ですぞ」と片つ方の目を閉つて見せた。そして今度は、赤ら顔に、黒助は俺の片腕に頼まれて來たのだと云ひ度さうな紹介を始めたのだが、碌々言葉を知らない處へ、持つて來て、急き込んでゐるものだから、黒助が聞いてゐて、先刻の不平も、むかつ腹も、俄かに忘れて噴笑出したくなる程可笑しなことを平氣で言つてのけた。すると、マトロスは油煙のついた小鼻に皺を寄せて、二三遍領いた。夏藏が二口目に、コモドールと呼ぶ水夫が、この男だつた。これから、夏藏の手引で街へ拔け出して、遊廓へでも流れ込まうと云ふんだらうと思ふと、赤ら顔が、何となく狡さうに見えた。コモドールとは、水師提督のことだらうが、夏藏が、この水夫にコモドールとか、ミスター・キヤピタンなどゝ云

ふのは、此赤ら顔を喜ばせるためなんだ。水夫は、直ぐ窓の中へ首を引込めた。愈々彼奴が着替へて抜け出して來るんだなと思つてゐると、今度は、下甲板の端の薄闇に現はれて頭の上から、「おい。おい。」と下を覗いた。夏藏は、頻りに、手招した。すると、水夫は、また引込んだ。

「何をしてけつかるんだらう。早く逃げ出して來りやいゝのだ。へまなマトロスだな。」

夏藏が狐のやうに、横を見たり、後ろを振り返つたりしてゐると、恐ろしい音が空に聞えた。黒助が、艀舟の屋形に摑まつて、驚いて空を仰ぐと同時に、太綱が、とぐろを捲いて甲板の上から落ちて來て、首を縮めると、太綱の端は船と艀舟の間に、だらりと下つた。太綱の一端は、甲板の鐵欄に結びつけてあつたんだ。その太綱に捕まつて、一生懸命にぶら下つて來る水夫を見乍ら、夏藏が

「どうです坊つちやん。マトロス奴。旨い藝當をやるぢやありませんか。」

と呟いた。

「大膽だなあ。見つかつたら、と云ふ氣も起らないのかしら。」

見つかつたら、こつちだつて、側杖食ふんだと思ふと、太綱に縋りついて、するする下つて來るのが、もどかしくて、黒助は、一人で氣を揉んでゐたんだ。然し、甲板にも海の上にも人影のないのが、せめてもの氣休めだつたんだ。

「遊ぶとなると、あの通り生命がけだからのし。あれであなた。少しでも手を緩めたら最後、海の中へ落ち込むのですからのし」

「そんなにしてまで、陸へ上つて遊びたいのかなあ」

船の甲板から艀舟まで、凡そ二丈餘りもある處を、水夫は、到々下りて了つた。その拍子に、艀舟は烈しく左右に搖

れた。マトロスは屋形の中に、よろけ込んだ。

「どうです、先生旨く拔け出したぞ。もう大丈夫だ」

と云ひ乍ら、さも安心したやうに、屋形の上から、菰を、どし／＼被せて、黑助に、早く船の舫を櫓の先で突いて與れと合圖した。それから、夏藏は、今一息だといふ格好で、無暗に漕ぎ出した。黑助は、手持不沙汰に、舶べりへ、確乎つかまつてゐたが、

「船の上から、太繩を垂れつ放しで來て、ばれやしないだらうか」

と氣掛りさうに云ふと、夏藏は、平氣で、

「なあに、心配することは、ありませんよ。大將の友達か誰か、解いて、たくり上げますぞ。」

そんな處に、ぬかりがあるものかと云ふ積りに聞えた。それでも、夏藏は、追手に迫られてゐるやうに、たゆみなく、漕いだ。沈みかけた木船の側を通つた時、蒼褪めた灯が、艫の先に瞬いてゐた。そこまで來ると、海岸が目先に一寸一寸と稍近づいてくるやうな氣がして、張り詰めてゐた氣が段々緩んで來た。港の岸に艀舟を纜いでゐる夏藏の後ろから、丁度、忠臣藏の芝居で、定九郎が與市兵衞の後ろから、藁づとをくゞつて現はれるやうに、きよときよとして、マトロスが出て來た。夏藏は石垣の上に匐ひ上つて、マトロスと黑助を陸へ引上げた。艀舟を貸した船番が、懷手をして、石垣に腰掛け乍ら、にや／＼笑つてゐた。

「これから、何處へ行くんですか。私は家が心配だから、早く歸りたいけれども」

「家？」

と夏藏が鸚鵡返しした。そして、家へ行つたつて何の妙があるものかと云ふ風に、

「家のことなら大丈夫ですぞ。」

と云ふかと思ふと、マトロスの目の前で、

「此奴を引張り出して、これから、うんと費はせるのですけ。な。」

と云ひ乍ら、倫も、昔からの親友でもやり兼ねる圖迂々々しさで。

「有難う。」

と云ふや否や、猿のやうな手附で、マトロスが取り出した煙草入の巻煙草を、一本摘んで口に咬へた。

「折角これまで辛棒したのですけ、も少し交際(つきあ)つてお出。今日は儲かるんですから、そうしたら、あなた」

夏藏は咬へてゐた巻煙草を地面(べた)へ落して、うろたへて、拾つた。

「あなただつて、空手で、ぶら金で、歸へるにも及ばない。」

「私は儲からんでもいゝ。」

「酒の一杯も飲んでゐるうちに、氣が替つて來ますぞ。」

と云ひ乍ら、何處へ行くとも教へずに、それは、まるつきり豫期しないことではなかつたのだが、到々遊廓の中の、いつも黒助が、コロタイプ遊女を買ひに來る繪草紙屋の前まで、有耶無耶に引摺つて來て、「あそこへ行かう」と、「カフヱー・ヂ・ラ・マリン」を指した。マトロスは、よからうと云つて、頷いた。

繪草紙屋の前から酒場(サルーン)を見ると、不可敵艦の一隻が往來へ船尾(とも)を向けた格好にも見える。そして、蛇腹の鱗を重ねた様に、路端へ迫り出た露臺(ヴエランダ)を、一段二段と數へ上げたら、或は五階以上の建物とも云へる代りに、また、虚心に眺めては、たゞの平屋としか見えなくて、ライノセロスの角(つの)に像つた正面の屋根の突起(かど)に、ずつと以前から刻りつけてある

DEBIT TABACO と云つたやうな文字からして、日本人に讀ませるのか、西洋人に讀ませるのか、兎に角、古めかしい淨瑠璃專門の奥深い寄席か、それでなければ、何代目一力なんどゝ、まだ蜀山人や賴山陽や鐵翁などが、この邊に流連けした噂の立つ頃から、黒光りに磨き立てた揚屋でなければ、冴へない廓に、たつた一軒、こんな幽靈じみたサルーンが、混つてゐると云ふことが、何にしても突拍子なものだから、「全體、何をするうちだらう」と審かつて不遠慮に家の中を覗いて行く漂客の中には、肥つちよの、でも、「バタミーヤの酒場」でウォズウォースが出逢つたさうな色の小白い、何時も大きな籐籠を抱へて市場へ買ひ物に行く娘が、小暗い土間に彳み乍ら、鸚鵡の籠を覗いてゐるのを見ることがあるだらう。何時商賣をするのか？ 客があるのか？ どうして生活て行くのか？ と其處を通る度に考へたり、棕梠見たいな、ばさ〳〵した髪の毛の女が、露臺へ現はれて、憂愁な目付で、まるで異つた世界の人種が、ぞろ〳〵と遊廓を指して行くのを、見下ろしてゐる時などは、その女が、さながらにバスチーユで殺された女革命家の幻でないかと思はれる程、牢獄の廢墟がゝつた淋しい酒場なんだ。

「ほい。爺さんがゐますぜ。」

「あ。煙草を喫んでゐますね。何か強請るでせう。」

黒助は水夫と夏藏に跟いて、思ひがけぬ不思議な場所へ踏み込んで行く心持ちで、乞食の老人が、葡萄酒の空樽に凭りかゝつてゐる脇を、おづ〳〵通り抜けて、酒場へ入つて行くんだ。

「私は二三度、こゝで遊んだこともあるし、泊つたこともある」

とマトロスが、先に立つて、窓の下の卓子にかけると、夏藏と黒助は、彼と向き合つた。夏藏の話では、彼が日曜日に、遊女の額緣を賣りに出て、晩く戻るときは、大概、こゝで、何處で知り合になつたとも解らぬマトロスや、この

に、よく見かける外國の浮浪人を相手に、飲んでゐるらしかつた。そして、勘定は、相手の客に、押しつけるらしかた。マトロスと卓子を隔てゝ、向き合つてから、相手の容貌に注意してゐると、今まで、少しも目につかない瑕瑾が、段々はつきり見え出した。小鼻の柱の油煙や生え際の斬り疵や、歪んだ頭の窪みや、水兵服の斑らな油汚點や、そう云つた薄汚ないものが、點々と浮き出て來て、夏藏に見込まれるだけに懐の裕かな男とは、どうしても受取れなかつた。すると、マトロスの方でも、始めて氣づいたやうに、黒助をしげ／＼と見るんだ。恰も不思議な日本人だと云ふ心持で。何故なら、黒助の眼は綠色で、髮の毛は、猫のやうに柔らかくて、灰色だつたからだ。

　すると、黒助は、慌てゝ横を向くんだ。家の中は、思つたよりも、明るくて、ビールスタンドや硝子窓の下に五六人の、勞働者風の男や、居留地の會社員らしい青年が佇んで見たり、蹲んで見たりしてゐた。それは五六人が五六人乍ら、何處の國の言葉ともつかぬ言語で唄つたり、獨り言を咎してゐる、何處の國の人間ともつかぬ西洋人なんだ。お互に相手の饒舌ることが呑み込めぬらしく、頓珍漢な話をしてゐる客ばかり揃つてゐた。マトロスと夏藏と黒助とが、一の古ぼけた卓子に就いた明窓の腰には、一寸位の間隔に、四角な陶器の厚板が塗り込めてあつた。丁度この港が開けて、色々の船が入つて來る時代に生きて居つた和蘭陀畫工の、醉興な素畫を巧みに模寫して、着物の裾や襞卷のひだまで、どんなに目まぐるしい早さで掃いて來てたやうな一刷毛の小さい脈までも傳へやうとするやうに、朦朧としたコバルト色に、例へばハルスの「戀人」やミツの「風車」やヴェルミルの「花園」やテルベルグの「海邊」が、細い線や太い點で、燒きつけてあるのが、見えた。窓の上部の縁は、黄色くくすぶつてゐた。腰掛けの後ろに當る處は、處々缺けたり、泥がついてゐた。その窓の下の椅子に凭りかゝつて、頻りに靴下を編んでゐた娘が、面倒臭さうに、ぼて／＼とスカートの尻を摘んで來て、何を食べるかとか、酒はウイスキーにするかとか尋ねたかと思ふと、まるで芝居の楽屋のやうな暗がりへ入

つて行つた。

黒助は、入口の空樽に凭りかゝつてゐた老人が、どんより濁んだ、衰へた目を、しばたき乍ら、ビールスタンドや、帳場や、ごだごたと取り散らした卓子の間を、無作法に歩き廻つたり、土間の片隅に佇み乍ら頻りにトランプを弄んでゐる半ば酔ひどれた荒くれ男や不破戸漢らしい人相の客を、じろじろと見廻してゐるのを見た。夏蔵と黒助とが、マトロスと向き合つて、まだ碌々口も利かぬうちに、酒場の娘が、「また此奴が来て、腰の抜けるまで飲み倒れるのだらう」と云ひさうに、ことさらにコトンと音を立てゝ、小指ほどのウイスキーの洋盃を、三つ列べたててから、マトロスの横顔を覗き込んで、また椅子の上で、編みかけの靴下を、いぢり始めて間もないことなんだ。マトロスは舐めかけたウイスキーの洋盃を、「まづいね。まづいね。」と顔を顰めて置いたかと思ふと、氣が替つたやうに、ふいと立つて、づか〳〵と帳場へ行つた。そして、棚に列べてある、酒瓶のレツテルを、片つ端から讀みかけては、今にもマトロスの力で押し倒されさうな帳場の中に立つてゐた、じゝむさい身柔をして、パイプを咬へて、兩手をポツケツトへ突つ込んでゐた亭主に、饒舌りかけるのを、きつかけに、全くきつかけに、黒助と前後になつて洋盃を、ぐつと空けた夏蔵が、あの、無神經な、實際筋肉も感覺も血液もない、のつぺらぼうな顔を外向けたとき、その木偶の顔に、くつゝいてゐる二つの眼に、不穏な光が閃めいた。かと思ふと、する〳〵と伸び上つて来た左の腕先が、マトロスの洋盃を蔽はうとして、わなわなと顫へた五本の指が、蛸の足のやうに、する〳〵と内輪に曲ると、彼は、ぎゆうつと洋盃を握り詰めて了つたのだ。けれども、自分の手がマトロスの洋盃を握り詰めたことを意識してゐるのかと疑はれる程、彼の視線は、帳場へ向つて、まともに注がれてゐた。その途端に、饒舌つてゐたマトロスが、ぴしやりと亭主の肩を叩いて、突然振りかへつた。夏蔵の腕は、大きな蛇が天井から落ちるやうに、卓子の端からする〳〵と辷つた。黒助は全身の筋が、ぴちんとし

た。然し、こんな發作的の恐慌は、すぐ、マトロスの前後へ、雪崩れかゝつた七八人の客に呑まれやうとしたが、夏藏がマトロスの洋盃を盜まうとしたことが、マトロスに發見されないまでも、夏藏や黑助の不安な心を、したゝか脅やかしたのは、突然、群衆の中で、「泥棒！」と叫んだ聲だ。而もそれが、マトロスの聲だつたからだ。マトロスは物凄い目をむいて、反對に、小氣味の惡い冷笑を浮べ乍ら、のそ〳〵と夏藏の側へ、ふらついて來た。黑助の顏は一時に蒼褪めた。そして唇を烈しく顫はせ乍ら、「とんだ失禮」と呟いた夏藏とマトロスの樣子を見てゐると、マトロスは、いきなり、洋盃を摑んで、ぐいぐいと呷つた。

「あの乞食が私のポツケットへ手を突つ込んだんだ。間拔けな泥棒ぢやありませんか」

と云つて、笑ひ出したとき、今まで、頻りに憫れを乞ふてゐた夏藏の目の色も黑助の緊張つた顏も、「あゝ。違つてゐたんだ」と、云ふやうに、がつかりしたやうに、急に、以前の穩やかさに戻つたかと思ふと、恐ろしく草臥れて來た。其處へ群衆に小突かれて、のそりと、熊のやうに、恐怖に打たれた老人が土間へ入つて來た。

「彼奴は乞食ぢやないんだ。君。あいつは、掏摸だよ」

マトロスは、帳場の棚から、ぶら下げて來た酒瓶を、荒々しく、皮肉に、夏藏の前にごとんと据へて、二三杯引つかけてから、娘の膝の上の小鋏を引つ奪くつて、老人の側へ、よろけて行つたかと思ふと、いきなり老人の白髮をざくざくと鋏み切つた。そしてポツケットから摑み出した赤表紙の手帖に乘せて、その赤表紙を、ぐつと前へ突き出して、

エナ。メナ。ミナ。モナ。

ユダヤ人の髮の毛。

泣いたら赦せ。

エナ・メナ・ミナ・モナ・

と奇妙な文句に節をつけ乍ら、ビールスタンドの前を、ぐるぐる廻つて歩くと、群衆は、こんな不思議な芝居は見たことがないと云ふやうな目を見張つて、呆れてゐた。處が、老人は泣きもしなければ、怒りもしない臆病な目つきで、それからマトロスが「お前の命はこれ、消えたんだ」とマッチの火で、一摘みの白髪をじり〳〵燒くのを、温順く見てゐた。群衆は笑ひ出した。黑助も夏藏も、自分達が引張り出して來た水夫が、こんな性質の惡い惡戯者だとは思ひもよらなかつたと云ふ風に、暫く呆氣にとられてゐた。始め、いけすかない奴だと思つたのが、段々憎々しくなつたけれども、これから金を費はせやうと肝腎な矢先だけに、餘計な差出口をしたり、止めだてしたりして、あべこべに此方へ食つてかゝられては大變だと云ふ處から、見ぬ振りこそしてはゐたが、何の抵抗も出來ずに、葡萄酒の空樽に腰かけたなりで、醉められた猫見たいな、みじめな樣子をしてゐる老人を見ると、腹の底で「無茶な奴だ。無茶な奴だ」と憤りを覺えぬ譯には行かなかつたんだ。了ひには、何だつて、こんな奴を選り好んで船から引張り出したんだらうと、夏藏が小面憎くなつて、今更のやうに、人の惡い、意地穢ない、しみつたれの夏藏の、あの水夫のウイスキーを掠め損ねて、まだ物足りなさゝうな形をして、にや〳〵笑ひ乍ら、夏藏の脇へ氣拔けして戻つて來ると、群衆の中で顔を顰めたり、鼻の先へ右の手を立てゝ、團扇のやうに、ぴら〳〵と動かし見せたりする者もあつた。そして、「あ！ これは間違つた。どうも失禮」と云つた時の下等な苦笑が、あさましく思はれて來た。髮の毛を燒いて了つて、またがや〳〵と騷ぎ出さうとして、後ろから、例の小娘が料理の皿を運んで來て、マトロスの卓子に、放り出すやうに置いて、一寸口を尖らせたかと思ふと、踵を翻へして行かうとしたとき、マトロスが、ふゝんと云つた調子で、また、ひよろ〳〵立ち上り乍ら、

「この皿は洗つてないぢやないか」

と云ひがゝりらしい苦情を列べると、騷ぎかけた群衆は、それまた始まつたと云ふやうに、卓子の周圍へ、ぞろ〳〵集りかけた。黑助は夏藏の蔭で、ひや〳〵してゐた。

「洗つてないことがありますか」

「だつて、これこの通り、皿の眞ん中に、ぼつきり洗ひ殘りがくついてらあ。」

「何を云つてるんだらう！　ブラシのついた針金の環を首に掛けた船の煙筒掃除夫の癖に！」

娘は、膨れつ面して、今度は土間の隅の、ピアノの椅子に腰かけた。

「煙筒掃除夫だつて？　煙筒掃除夫だつて？」

マトロスは、蛇のやうに首を擡げて來た。そして、群衆の二三人を突き退け乍ら、娘の側へ跳んで行つた。

「誰が煙筒掃除だい。」

「五月蠅い。あんたですよ！」

娘はマトロスを押しやらうとした。

「ふん！」

マトロスは、すご〳〵引返へそうとして、ふら〳〵と氣の替つた犬みたやうに、娘の背中から、口に含んでゐた肉片を吐き出す樣に

「淫賣！」

と怒鳴ると同時、娘は跳び上る程ピアノを叩いた。そのまゝ、平氣でピアノを彈き出した。すると、群衆は、こんな

亂暴者に構つてゐたつて、興が醒めるばかりだと云ふ樣子で、今度はピアノの周圍を、取り卷いたり、床の上で、踊る眞似を始たんだ。

そんなことを、馬鹿のやうに口を開け放して、羨ましさうに眺めてゐる夏藏が、今まで何の考へもなさゝうな顔をしてゐて、突然「コモドル。つまらないから、出掛けませう」と云ひ出した。こんな處に、まご〳〵してゐては、今にマトロスから喧嘩吹つかけられるか、床の上に、醉ひ潰れて了はれた日には、金儲處か、態々艀舟を借りて、マトロスをに引つ張り出した苦心が、何にもならない上に、一文の骨折賃にもありつけないで、一日の仕事を棒に振るに定つてゐるんだと云ふのが黑助の腹だつたが、夏藏は、どんな積りだか、「出掛けませう。」を繰り乍ら、秘かに相手の顔色を窺つてゐた。

「今度は何處へ行きますかい」

「何處へ行くつて、的はないけどな。いつまでも此處に、へたばり込んでちや、金の費はせやうがなかたい。店でも素見かして、物を買はせて置いてな、頭はねるさ。」

「買ふだらうか？」

「旨く買はせるのさ。其處が手際ですよ」

そんな手際がお前にあるのかと黑助は云ひたかつた。マトロスは物を食ひ乍ら、充血した眼を上げて、狡さうに時々、二人を見るのが此奴等も俺に跟き纒つてゐる泥棒だらう、一體、何を二人で、こそ〳〵相談し合つてゐるんだらうと疑ふやうに思はれるんだ。その都度、黑助はふつと話を止めたり、マトロスの視線を避けたりした。そして、思ひ切つて、跳びて出して歸ることも、出來ず、時々、心にもない世辭を列べたり、マトロスをそゝのかして、酒を取らせやうとし

たり、マトロスが時々、思ひ出したやうに取り出して中を覗いてゐる大きな蟇口を氣にしたりして、偶然に、酒場の土間へ、小さい野良犬が、ひよろ、ひよろと、まぎれ込んで來るのを見ると、跳び上る程驚いたりして。

夏藏は商賣から云へばどんな慾目で見てやつても、平生ぬらくら者の癖に、こんな時には一寸驚くほど追従の巧みなマトロス專門の幇間だ。馬ならば、馬子の不意を狙つて、跳ねる駄馬だ。人相から云ふと、下衆張つた澆季の盧舍那佛だ。その魯純な佛頂面を、木精臭いウイスキーで赤くして、マトロスの機嫌を取るために、取つてつけたやうな道化役者の眞似をしたり、「コモドル！　街へ出掛けやう、そして、お前さんは土産物を買ふ筈だつたでせう！」と、初心の小説家が、西洋の脚本を直譯するやうな、謎を掛けては、こつそり笑壺に入ると、マトロスの方では頭から夏藏の奥の手を見拔いて了つて、五月蠅いと云つた調子で、直ぐ、何處かの港で覺え込んだ鼻唄で紛らすんだ。

電燈が點くと酒場の中が、くつきり明るくなつた。新らしく入つて來る客も殖えて、一層賑やかになつたが、夏藏の手管は、いつも急所を外れたやうに効目がないのだ。おべつかのありつたけを列べて了ひ、秘術の數を盡して了つて、それで手應へがないのに、夏藏は、まだ諦めがつかずに、どろんとした目尻に皺を寄せて「コモドル。さあ美人を見ませう。愉快な處へ案内しませう、そして土産物を買ひませう」と同じことを繰り返すかと思ふと、悲慘にも「私が贈り物をしませう。紀念の贈り物を！」と懷に一文もない癖に、まるで木戸錢の安い芝居小屋の舞臺で、情ないオペラ女優か馬の脚が、獨白に悶へて列べるやうな文句を口から出任せにぺらぺらと饒舌るのを聞いてゐてさへ冷汗が泌み出るのに、言葉に詰ると、遠慮なくこんなことを黑助に言はせるので、了ひには、黑助がむつとして見せるんだ。すると夏藏は、

「こゝが、この商賣の骨の折れる處ですよ。今に此奴が酔つて來ると氣が太うなつて、何でも、うん〳〵と言ひなり次第 なりますぞのし」

と言ふんだ。

「夏藏めゝあべこべに飲み料の勘定を押つつけられやうと思つてやがる。このマトロスが夏藏なんかに喰へるものか。」

と思つた。けれども夏藏は、喰いついた以上は、前齒が折れても放すものかといふ態度で、マトロスを相手に、もう食べるものがなくなつてからも、酒ばかり飲んでゐた。はじめのうちは、酔つ拂ひも手品の種らしく見えてゐたんだ。それから、ほんの十分ばかりすると、マトロスが、酔つた調子で、例の口の悪い娘の側へふらついて行つた。處が、この後から立ち上つてマトロスを無理に戸外へ拉し去らうとした夏藏は、可哀相に！ 立ちかけたなりで、床の上にへいつい、くばつて了つた。

「これは了つた！ こんなに酒が弱い私ではなかつたぞのし。酔はせやうと思ふて、こつちが先に」

と、椅子に獅嚙みついたり、黒助の膝に縋つたりして漸く腰を据えるまでに眞個に酔つて了つた。その時分になるとマトロスの目も悪巌くすはつて來た。そして入つたり出たりする群衆に悪罵を浴びせては喜ぶんだ。黒助は何遍も夏藏を置きざりにして跳び出さうとしては、後で夏藏が杖を失なつた盲目見たいに、まごつくのが可憐さうで、それも仕兼ねて、一人で煮え切らずに、立つたり坐つたりしてゐた。

讀者には耳遠い「アポプラ」とか「ヘンプ」とか「コポ・オ・ヴヰドロ」とか、更に無數の言葉を、祖先代々から傳へて來た土着の人々を、數百年來封じ込めたこの不具な街！ 今夜のやうに、ひとりでに咲いた櫻が、構ひ手のないやう、

に、ひとりでに散つて居る廓口のでこぼこした甃石路や陰影の深い家々や！　漂泊者の上から、どしどし重なつて來る漂泊者の群が、蠢めいて行く、悩ましき姿を、酒場の角窓から眺めてゐると、知らず識らずに、

「何を言つてやがるんだい。けちん坊の間抜め！　足が棒になる迄、あちこちぶらついて來て、まだ一文の駄賃にもありつけないマトロスに、よく飽きもしないで、牛蝨見たいに心棒强く、へばり着いてゐられるもんだ。いつまで跟き纏つたつて、どうせ物になるものか」と零したくなるんだ。夏藏やマトロスの相手にされて堪るものかと怒鳴り度い程齒痒くなつて來た黑助の前を、一人の藝者と半玉が、忙しく通り過ぎた。その後から、蹤を追ふて書生風の男が二人密着き合つて、中折帽子を耳の中程まで、すつぽり被り乍ら、そわ〱しく跟いて行つた、その一方の男が、氣の精かも知れないが、兎に角、須原そつくりだつた、黑助は驚いて窓から首を引つ込めた。見損ひなら何でもないことだが、眞個に須原だとすれば、一體何しに來たんだらうと考へる迄は黑助の心にも、まだ餘裕があつた。が、直ぐ「あゝ。俺は今日彼奴に福田退治の返事をする筈だつたんだ」と前夜の約束を偶然思ひ出すと、もう落ち付けなくなつて來た。それ丈ならまだしもいゝ。二人の男の後から、首に繩をつけられた一匹の小犬が、のこ〱小走りに跟いて行つたのが、眞個だつたか、何かしらの影だつたか、と云ふ位、薄ぼんやりに、ほんの一寸ばかり見えたやうだつた。その小犬が、ちよよいちよい酒場に舞ひ込んで來る犬のやうでもあるし、藪の中に匿つてゐる自分の犬(？)にも、よく似て居たから、黑助は二三秒經ゝぬうちに、首を擡げて、怖々往來を覗いたが、もう、その時は須原に似た男も、繩つきの小犬も藝者も半玉も見えなくなつてゐた。彼等の足跡は通行人や、素見の客で埋められてゐたんだ。

「あゝ。よかつた。彼奴が須原だつて見ろ。そしてこの邊で出會して見ろ、ことが面倒になるんだ。須原の奴、留守を食つて、さぞ怒つてるだらう。」と思つたり、「然し彼奴も可憐さうだな。苦し紛れに福田征伐なんか考へ出しやがつて。」

と同情して見たり、そうかと思ふと、「あの小犬は一體どうした譯で、書生の後なんぞ、のそ〳〵歩いてやがるんだらう」彼奴が須原だつたら、藪の中から引出して來たんぢやないかしら」と呟いて見て、ウイスキーの惡醉で、びんびんと總く頭をこつ〳〵と拳で叩いて、窓框へ伸び上る拍子に、先刻の小犬が、はすかひの露次口から、ひよろひよろと出て來た。

「あ！　また來た。」

黒助は窓框に確乎つかまつた。小犬は鷄屋の中から、縄つきで出て來たやうに、よく似てゐるんだ。その露次口には、伊萬里燒の燈籠が立つてゐて、いつの間にか、しよんぼりした灯が入つて「油屋」と云ふ煤けた文字が見えてゐた。小犬はその燈籠と、燈籠に降り合つた遊女屋の茶寮の入口に据えてある枇杷葉湯の手桶との間を迂路つき出した。黒助がすつかりその小犬を自分の飼犬だと決め込んで、あたふたと窓框から辷り下りて、捕へに行かうとした時だつた。何處から出て來たのか、まるで、醉ひの廻つて來た黒助を脅かすやうに、縞の羽織を引つ掛けて、山高帽を被つた福田が、ひよつこり通りかゝつた。廓の中へ行き過ぎやうとした福田の後ろから、先刻の書生がまた跳び出した。書生は矢つ張り須原だ。須原だと思ふと、いきなり福田の頭を狙つて跳びかゝつて、二つ三つ毆つた。けれども須原の拳は福田の頭には觸れずに、山高帽がぽんと飛んで、敷石の上を、ころ〳〵と轉つた。すると、活動寫眞の喜劇のやうに、燈籠の下から、鐵砲玉のやうに圓くなつた小犬が飛んで來た。小犬は山高帽を咬へる積りだつたんだが、眞つ赤になつて慌てた福田は頓間な格好をして、「畜生！」と夢中で小犬の脾腹を酷く蹴つた。小犬が不意を喰つて、宙に跳び上ると、黒助は、マトロスの洋盃を引つ攫くつて、一息に呷つた。それから、往來へ跳び出した。黒助は小犬を救う積りだつた。けれども、油屋の露次口に出て來た黒助を見ると、須原が、彼を突きのめすやうにして、

「お前も居たのか。早く逃げろ。後から油屋の男が追ひ駈けて來るぞ」

と云ひ乍ら、頭から羽織を被つて、まるで燕のやうに通行人の間を潜り潜り逃げた。それと、ほんの一足違ひに、下駄も帽子も何處かへ振り落した橋本が、油屋の絆纏を着込んだ照々坊主見たいな男に捕まつて、頻りに踠き乍ら、露次口へ押し出されて來て、其處へ、ぽかんとして立ちすくんでゐた黒助を見ると

「おい！　何處へ行くんだ？」

と、さも、偶然に味方と出逢つた心强さに驅られたやうに叫んだ。ので、黒助は、探しかけた犬を見棄てゝ逃げなければならなくなつたんだ。照々坊主は、黒助を見ると、「彼奴も左樣だ」と怒鳴つた、黒助は、ぴちつとした。ぴちつとして跳び上つた足で無茶苦茶に駈け出した。一足か二足か遲れて、油屋の露次口から、寢卷のまゝで、ぞろぞろと出て來た女を見ると、

「花魁！　此奴を逃がさぬやうにして下さい。すぐ戻つて來ますからのし」

と橋本を、だらしない風をして、素足になつてゐる遊女の手に引渡して、黒助を追つかけたんだ。黒助は人並外れた大股を踏ん張つて可なり走り續けた。そしてある人通りのない暗い横町ではじめて振り返つて、照々坊主の姿が見えないのを確かめると、大きな吐息を續け樣について、今度は、藪の家へ、よいよい患者見たいな足どりで、ぽとぽと歩るき出し乍らも斷りなしで跳び出した酒場の中の夏藏や、小犬や、須原や捕まつて狂つてゐた橋本や、山高帽を拾つて、こそこそと姿を眩ませた福田のことが、心配でならなかつたんだ。けれども今一度引返して樣子を探るだけの勇氣は無論なかつた。黒助の怯えと怖れとが、これだけに止るならば、よかつたかも知れないが、事實はそうでなかつた。後で落ち着いて考へれば、何でもない程の極めて滑稽な馬鹿げた恐怖と驚愕とは、まだまだ執着く彼につき纒ふて來た。然

の家に戻つて來てからも、獵師に狙はれた兒狐のやうな、おど〳〵した目付で、眞一どんた處から跟をつけられてゐないとも限らぬ恐れがあつたゝめに、急に祖母の部屋にも入り兼ねて、ついぞ踏み分けて入つたことのない藪疊の濕つぽい奧の深みへ泥棒見たいに暫く蹲んでゐた。息の續く限り走り詰めた足のふくら脛の筋が、ひつきりなしに、ぶる〳〵顫へて、容易に動悸が鎭まりさうにないのだ。五分間ばかり經つてから、まだ疑ひ深い用心をして、臺所から梯子段を登りかけた。黑助は一日放つて置いた老婆の樣子が氣掛りだつた。まだ起きてゐたら、今日の出來事の中で、夏藏と彼に取つて、不利益な部分は、話の噫にも出すまいと考へ乍ら、障子の破れ目から、秘然薄暗い部屋の中を覗いて見ると、老婆は一人で寢込んでゐたので、いくらか安心して、今度は藪の中の鷄屋の前へ來た。丁度前の日に天主堂のザンボアの陰から不意に小犬が跳び出した時のやうに、遊廓で捕へ損ねた小犬は、全然別物だと云ふことが解つた。ついぞ泣いたことも吠えたこともない小犬が、籠の中から、腹を凹ませ乍ら、ひよこひよこと顔を見せた時は、黑助は一時何も彼も忘れて喜んだ。夏藏が居ないのを幸に、久しぶりに我子に逢ふやうな心持で始めて抱いて見ると、ほんたうに自分の物だと云ふ心持を味はつたんだが、直ぐ一日物を食はせないで居たことからして、夜になると定つて一粒もない飯櫃が、目先にちらついた。かと思ふと、今度は、夏藏の飯櫃が浮んで來た。

小犬を引つ抱へて裏處へ公然に出掛けやうとするのと、殆んど同時と云つていゝ位の刹那に、疎らな竹の林に狐火ほどの赤い光が、右にも左にも、後ろにも前にも、數百數千となく茫茫と反射するのが見えた。黑助は悸然として立ちすくんだ。然し、それが驚く程の奇怪なものでないことは、やがて、藪の中の小徑に幽かな女の私語が聞えて酸漿提灯が段々近づいて來たと思ふと、酸漿提灯の背中に「油屋」と書いた太い線が見えたときに解ることは解つたが、それに伴つた脊の日のどさくさが電の迅さで黑助の頭に新らしく甦つた。そして、赤い光に包まれて逃げ場を失つて、呆氣に取られ

た瞬間の妖性な戰慄とは違つた人間的の恐ろしさを覺えて、抱えてゐた小犬を、慌てゝ鷄屋の中へ投げ込んだ頃には、酸漿提灯は黑助の物凄いほど蒼褪ざめた顏の先に、ぶら下つてゐて、其處で、ふと立ち停つた女の影の一つが、

「この人ですよ。絲遊さん。この人。この人」

と、たぢろいだ黑助の側へ近寄つて來るんだ。酸漿提灯の灰明が、雁燈の口から迸る光の流れのやうに、提灯をぶら下げてゐる小娘の後ろに、無氣味さうにイむ脊の高い痩せ形の女を、たつた今地の底から浮き上つた藪の精見たいに半身を宙にぼかして見せた。黑助は、何とも言へぬ異樣な不安が、腹の底から、じわ〳〵込み上げて來た。丁度三十年ばかり前に、嚴しい耶蘇の繪踏を避けるために、この藪の近くへ逃げ込んだ人々が、町役人に嗅ぎ出された時や、姿を眩ませた脫獄囚が、安心の吐息をついてゐる山の中で、出し拔けに刑事に行き逢つてふんづかまつた時の氣持が、こんなものだらうと思はれた。そして鷄屋の籠の目から片足を突き出して、頻りに黑助の着物の裾を嬲つてゐる小犬のことも忘れた。酸漿提灯の女は、油屋の仲居の娘と、遊女だつた。遊女は、どうされるんだらうと云ふやうに、いやに怖氣て來た黑助に、最初

「あんたは、修道社の生徒さんぢやろ？」

と言つた。黑助は、女の聲に頭から壓しつけられたやうに、聲が吐けなかつた。で、返事をせずにゐると、確かに、それに違ひないと決めてかゝつて、

「こんな處で、立ち話も出來ませんから、一寸家へ上らせて貰へませんかのし」

と權柄づくで言つた。それにも黑助は反抗が出來なかつた。何の相談があるのだか、聞くことすら恐れて、先に立つた例の小娘が、繃帶を卷いた片足を爪立て乍ら、飛び〳〵に歩き出す後ろから、女郎に跟ついて、丁度、罪人が明るみ

へ突き出される鹽梅に、まるで引摺られる形で、工房の縁側まで來ると、臺所へ廻らうか、このまゝ椽側の雨戸を外さうかと逡めらつた。が、到頭この二人の女に追ひ込まれるやうに、雨戸を繰つて無意識に中へ導いた。手探りに洋燈を點けてから、工房の眞ん中に、こうなれば、もうこつちのものだと云ふ風に、構へ込んだ彼女等を見ると、夏藏が泥醉けになつて戻つて來るまで、梃でも動きさうになかつた。さうかと云つて、人並以上に感の強い、小言屋の老婆が占めてゐる二階へも、通せないのだつた。何故なら、彼女等は、迚も平氣で開ける話を持ち込んで來たのではないことが、黒助にも充分呑み込めてゐたからだ。今にも、夏藏が戻つて來さうな氣持がして、始終びくついてゐる黒助を奪ひ去られた小犬が、藪の中で、鷄屋を引つ掻き廻す音にも、耳を欹てたんだ。

處が、こうして、脅やかされてゐた黒助は、女が、袂を探り乍ら、自分はこう〳〵言ふ者だと名乘りを擧げて、一包みの菓子を土産の積りで與れた時に、突然、不思議な驚愕に打たれたんだ。一度獵師の手に捕まつた小狐が鼻の先に油揚を結びつけた罠を投げ出された時のやうな、譯の分らぬ疑惑に襲はれたと説明した方が解り易いだらう。黒助は、この奇妙な、でも、他所の家へ勝手に押し込んで來る處だけは圖迂々々しい女を、この時、やつと正面から見詰むることが出來た。脊の小高い遊女は綠遊と言つた。綠遊は、物珍らしさうに、工房の中を、ぐる〳〵見廻したり、黒助の容貌を、何と云ふ畸形な人間だらうと云つた目付で、時々、彼女の後ろに、始めから、繃帶の足を投げ出して坐つた小娘を振り返つたりするんだ。

遊女と一口に云へば、讀者は直ちに色摺りの浮世繪から一人の女性を拉し來つて、華やかなる想像を逞うするだらうが、綠遊は——綠遊一人に限らぬけれども——それとはまるで違つた、陰氣な、Brooding な女郎だつた。何の飾り氣も、油氣も、匂ひも、色彩も、潤ひもない陰氣な女ではあるが、遊女には違ひなかつた。と云ふ譯は、彼女が、小作り

な風味のある肩を搖つて、

「他に誰も居ないのかしら」

と、怖々工房の中を覗いて、それから、ふだん、着物を長々と垂れるまでに着つける癖からして、その時ほんの少しばかり踝とすれ〴〵な短い裾を、紮げて踏み石を跨いだのでも知れた。黒助の目に映つた絲遊は二十七八位だつた。簪も櫛もない髮を、分け目の目立たゝぬほどに、中央から分けて、無造作に束ねた髷のある膨らみへ、編み物に使ふ太い長いピンを一本突き通してゐた。黒助は、こんな遊女が停車場や波戸場の舟つきや、港の沖合までも、艀舟に揺られて客を送るのに幾度も逢ふ。ある時は、彼女達を芝居小屋の中で見たり、丘の茂みの中で、ぽつくりであつたりする。彼女達が如何だけ自由な體を持てあぐんでゐると云ふことは、一度、川添ひの淋しい町の石橋の上から、その川に沿ふた家の窓から顏を出してゐる若い男と、(それは情夫であつたかも知れないほどの親しさで)高らかに饒舌り乍ら、放恣な姿を見せて笑つてゐた遊女と行き合つたり、別段にそれを不思議とも思はぬ通行人を持つてゐる街に育つた黒助が、よく知つてゐたんだが、こんな夜まで、勝手な場所へぽか〳〵出掛けるものだとは思はなかつたんだ。絲遊は菓子包みを出してから直ぐ

「あんたは、先刻油屋の前で騷動しなはつたが、何ぞ恨みでもあつてかのし。あの書生の仲間ぢやと云ふので、交番さんに賴まうと云ふ話もありましたが、それほどのことでもないと思ふてのし。直接に逢ふて聞いた方が早解りがすると思ふてな。やう〳〵探し當てゝ來ましたぞなもし」

と切り出した。黒助も、それだけは覺悟してゐたが、そんなことで、執念深く尋ねて來る了見が解らなかつた。

「あの書生の仲間とは、何ですか」

「先刻、うちの前で暴れた人ですよ。」
「知りませんね。書生が暴れたのは知つて居るけど、僕まで、掛り合ひにして呉れては迷惑だ。どうして、そんな難癖つけるんですか。」
絲遊は小娘を振り返つて、そして、「昨日のことを云つて了へば、今日のことは、すつかり帳消しにして了ふのになあ。君ちやん。」
と、暗に、白狀しなければ、そのまゝでは濟まないぞと云ふ口氣だつた。黑助は、それよりも、誰にも隱してゐる藪の中の隱れ家が、片つ端から、どん／＼知れて行くのが、不審でならなかつたんだ。
「どうして僕の家が解りましたか」
「そんなこと。どうでも知れることですよ。あの、ほら、何とか言つたわね。君ちやん。生け擒つた書生さ」
と絲遊は、君ちやんと言ふ小娘を振り返つて見たが、小娘も急に思ひ出せないで、「さうね」と小首を傾けたまゝ、一寸返事に困る樣子だ。惡くすると、油屋の路次口で、掃除男に捕まつた、ひねくれ者の橋本が、仲居や女郎に責められたり脅かされたりして、苦し紛れに、うつかり口を辷らせやしまいかとも、まるつきり考へないことではなかつた。黑助は、怪訝な樣子をして、
「あの男が？　僕の居處を？　僕の居處を敎へて、一體どうする積りなんだらう」
と呟き呟き工房の緣側から、迂散な目つきをして、草生の隅や藪の中を、凝乎と瞭して見たが、藪の中へ、曇つた洋燈の火屑を洩れて流れ込む黃色い光の路を阻んでゐる物の影は、鷄籠の外に何にもなかつた。假令橋本が口先で、かう云ふ處だと一寸ほのめかした位では、容易に尋ね出せる場所柄でもないし、殊に日暮れから先は、眞つ暗で一二度訪ね

て來た人でも、狐に魅まれたやうに、どうかすると藪の手前で路を迷ふことがあるんだから、黒助は橋本が强迫されて、手引をして來たのかも知れないと思つた。處が、そうでもないらしいのだ。臆病な黒助は、ほんの瞬間だけれど、ぶる〱と、何とも言へない異様な身顫をして、やゝ暫く絲遊と小娘とを見詰めたまゝ、默つてゐた。凝乎と見詰めてゐると、不思議な女なんだ。それは坐りがけにふつと目に映つたに過ぎない兩足の五本づゝの指だ。隱元豆の形に美しく揃つてゐる其指先から、縹色の腰卷の裾を陽炎のやうに食み出た小脛へかけて澄み切つた鯰肌の白さが、乳房か胸壺の邊みへかゝると、暈したやうに、淡々しく、ふつくらと黄ばんで行つて、頸筋から顔へ俄かに濃くなつてゐる。ばかりでなく、瞼の周圍にも然とも思はれぬ蒼味が淀んでゐるのだ。そして、その心ばかりに蒼ずんだ圓い眶が瞬く度に、長く太い眞つ黒な睫毛が、一筋に重なり合つて、削り落しても剝げないほど、毒々しい臙脂の鈍染んだ斑猫虫のやうな底氣味の悪い唇を閉ぢたまゝ、うつむく時などは、どうしても蛇つかひとしか見えぬ女だ。

「あんな輕はずみなごたくさに係り合ひもない俺の住居なんか、何だつて数へたんだらう」それも奇怪だ。そうかと思ふと、黒助がこうして畏まつて見せてゐる女も、あの時、血眼になつて狂つてゐた橋本の袖を、しつかり捕へてゐた、ふしだらな風をした五六人の遊女の中に混つてゐたやうな氣がして、段々馬鹿臭くなつて來た。

「あの男はどうしましたか？」

と無意識に尋ねた時、

「今時分は多分自分の家に戻つたでせう。」

と云ふのを追つかけて、

「今時分は、と云ふと、今まであんたの處に留められてゐたのかね」

「そんなこと妾知りませんがのし。男衆があんたを追ひかけて戻るまで、妾達が捕まへてゐましたが、それから先のことは、どうなつたか、妾はあがり湯に行つたので知りませんよ。」

と來たので、愈々左樣だと解つて見ると、黒助は、一層圖滿に構へて來た。

「すると、彼奴は誰に白狀したんだらう。何も彼も白狀したなんて、何を白狀したんだらう」

大抵福田征伐一件だらうとは思つたが、福田征伐に、何の緣もない黒助の隱れ家へ、こんな遊女が小姓見たいな小娘を連れて、言がゝりに來る經緯、腑に落ちぬことなんだ。然し、夏藏に一杯食はされた形で、行く先も判然聞かずに、マドロスを引つ張つて、廓の中でこそないけれども、廓と言へぬこともない酒場へなぐれ込んで、奇蹟のやうに降つて湧いた厄介な災難に埒もなく引つ掛らうとしたことだけは、確かなんだが、只、危ない處で引つ掛らうとしたまでのことで、何も引つ掛つたわけではないのだと思ふのだ。尤も、その前夜、福田退治の相談は須原の口から聞いて知つてゐる。知つてゐるからこそ、須原が橋本を見殺しにして「逃げろ。逃げろ。」と呶鳴つた意味が解つたので、でなければ、橋本見たいに、あの人通りの多い往來の路次口で、見つともない捕り方をして、何にも知らずに痛くもない腹を矢鱈に探らるゝ筈だつたのだ。また、考へ直して見ると、その時、有耶無耶に逃げたのがいけなかつたらしい。とも思つた。

處が、絲遊はこう言ふのだ。

「何を白狀しましたつて？ 妾、すつかり聞いて知つてゐますぞのし。あんたが福田さんを打ちのめさうと言ひ出して、氣の弱い朋輩を煽てたり、焚きつけたりしてさ。自分は異人酒場から、嗾かけてゐなはつたのぢやろがのし。」

黒助は失敗した福田征伐に加擔しなかつたことを、悧巧だと思つてゐる矢先だつた。成功して居つたら、或は義士になり損ねたことを悔んだかも知れないが、そうでなくて、鬼に角、いゝ鹽梅だつたと考へてゐる鼻つ先へ、須原や橋本

の片割れと疑はれるのさい忌々しいのに、この女の口振りでは、黑助が煽動の張本人になつてゐる譯だから、いきなり「それ嘘だ。違つてゐる。まるで違つてゐる」と叫んだ。黑助は、こんな時に限つて躍氣になる男なんだ。

「あんた、此處で相談しなはつたのぢやろ」

と、絲遊に云はせると、藪の中を、まるで惡黨の巣窟と睨んでゐるのだ。黑助が、何か言はうとして、言ひなづむとそれ見ろ、作りごとを考へてるんだらうと云ふやうに、

「でも、あの書生が、あんたも仲間だと白狀しましたぞ」

と、これでも屈伏せぬかと云ふ風に、疊みかけたとき、黑助は、

「橋本が俺も仲間だと云つたのかね」

と口を尖らせて、口惜さうに、絲遊を眞面から、穴のあく程、見詰めた。

この女の様子が段々變つて來た。はじめ、糊がへばり着いて、がさ〳〵した疊に坐つたときに、袂の中から、かさ〳〵と音を立て、「すみませんが、あの容器を鳥渡貸して貰へませんかのし。妾、途中でお茶の子に金米糖を買ふて來ましたけ」

と云ひながら、一閑張の上に伏さつてゐる五郎八の縁のこぼれた糊茶碗を、不遠慮な馴れ馴れしい手附で摘み取らうとした。處が、いつの間にか、茶碗の中へ、こつそり匐ひ込んで、茶碗の底の處々に粘着いてゐる糊の塊を舐めてゐた竈馬が、驚いて明るみへ跳ね出すと、絲遊は小供のやうに「あら。竈馬が！」と悲鳴を擧げて狼狽へたんだ。それから短かい髭を動かしたり、時々ぐる〳〵と目の玉を動かしたりして、小虫が戸袋の中へ、ぴこんぴこんと彈ねて行つて、すつかり姿を隠して了ふまで、坐りきれずに、中腰に構へて、眉を寄せてゐたんだ。こんな馴れ馴れしさを見せた絲遊の

態度が、だん〳〵變つて來た。

「橋本？」

綵遊は、そんな名前だつたかしらと、一寸奇妙な顏をした。そして、漸く思ひ出したやうに、

「廣瀨と云ひましたぞもし。」

「廣瀨でも、何でもいゝよ。彼奴が、そんなことを饒舌つたのかね」

自分の名を隱して、黑助の居處を、平氣で敎へる位の男だから、一層のこと、此處のところで、こつちから裏切つて了はうかとも思つたが、何となく底意の知れぬ、どんな企みを持つて來たのだか解らぬ、物の言ひつ振りから見て、また臆病にも控へて了つた。すると、突然綵遊の後ろから小娘が嘲るやうに、

「憚り乍ら、妾達は、そんな拔作ぢやありませんよ」

と云つたので、本氣になつて怒つてゐた黑助も、流石に擽つたくなつて來た。

「さう怒らんでもえゝがのし。そんなこと尋ねに來たんぢやありませんから」

と云ふ。でも矢張し、胡亂な奴だと云ふやうな調子だつた。

「そんなに疑ふなら、一通り話をしやう。」

綵遊は、黑助の言ひ拔けなんぞ、いくつ聞いたつて、どうなるものかと云ふやうに、

「いゝえ聞かんでもいゝぞなもし。それよりか、あんた、福田さんは、何處へ行きなはつたか、御存じないでせうか」

と、心配さうな顏をした。

「福田さんとは？」

「福田先生ですよ」

「あんたは、福田さんを、どうして知つてゐるのかい」

絲遊は小娘と顔を見合せたかと思ふと、微笑した。「この女だ。この女だ。福田が懸着して、せつせと通つてゐるのはこの女だ」と思ふと、藪の中へやつて來た理由が、段々讀めて來るんだ。當意即妙な皮肉を列べて、夜討に來た復讐をしやうと云ふ氣になつて來た。ふだんから、見知らぬ女の前に出ると、固くなつて、ちゞこまる性の世馴れぬ黒助も、この邊まで話が進んで來ると、あべこべに別人のやうに落ち着いて來るのが、見えるのだ。絲遊は、白い半襟に咬みのいてゐる桃色の、おたまじやくしの留針を弄り乍ら、これも又別人のやうに、おぼこな口元をすぼめて「妾のお客さまなもし。」

と言つた。絲遊の方では、何も相手が、ふやけた藪すぼ見たいな黒助だから、たかを括つて、頭から呑んでかゝつた譯でもなかつたらうが、黒助の方では、「妾のお客さまなもし」と云つたのが、「妾のお客に試験で酷められるのが怖かなくて、あんな悪戯を始めたんだらう」と云ふ風にも聞えたものだから、慌てゝ、半ば無意識に言つた。

「福田？　福田はひらぎ屋に居るだらう」

それも、絲遊が

「先刻、ひらぎ屋に行つて見ましたが、福田さんは、朝出なはつたきり、まだ歸らぬと云ひことでしたが」

と思はくが外れたやうな、何となく氣がゝりな言葉を豫期する積りではなかつたから、今まで、强者の態度を見せて、横柄づくに追究してゐた絲遊が、いつの間にか、打ち沈んで來てゐるのに、一寸意外な氣持がしたんだ。

「ひらぎ屋に居なければ、何處にゐるかな」

「あんたに聞いたら解るだろともて來ましたんがな、知つてゐなはるでせう。隱さずに敎へて呉れたらいゝに」
「俺は知らん」
「ほんたうに御存じないかのし？　爪印捺しても？」
黑助は變な女だと思つた。すると、小娘が、「片意地言はんで、有り體に敎へて呉れたらいゝに。あんたが、遊廓で酒のんだことも、港屋に行くことも、ちやんと種が上つてゐますから、あんたが強情張れば、こつちでも、こじれますののし。そしたら、どつち道、あんたの爲にならんけ。のうし。」
と云ひ乍ら、絲遊の顏色を窺ふんだ。
「爲になるもならんも、俺の知つたこつちやないんだ。何てえ、おぺんちやらだらう。ちびの癖に。港屋つて一體何だ」
「繪草紙屋ぢやありませんか。お神さんからちやんと聞いて居ますよ。あんたは、土曜日の晩方、」
と云ひかけて、膨れつ面を歪めて、横樣に笑ひ出した。そして、「花魁の寫眞を百枚づゝ買ひなはるぢやろが」と投げ出すやうに言つたとき、黑助は、返答に悶へて、意氣地なく顏を赤らめた。此處で弱味を見せてたまるものかと思つて强ひて平氣を粧ふとすれば、餘計赤くなつて來るんだ、小娘は、それ見ろと云はぬばかりに、
「學校に行つて、妾、言ひつけますよ。そうしたら、困らうがのし。」
と脅かしたもんだ。黑助は、この、小ましやまくれた娘に、何とか、溜飮の下るやうな劍突を喰はせたくて、うづ〳〵してゐたが、急處を突かれたやうに、一言も出ずにゐると、小娘は、何も彼も、お前の秘密は嗅ぎ出して、尻つ尾を抑へてゐるのだと云つた風に、急にのさばり出て來て、黑助が福田の居處を隱して居て、しらばつくれる意趣返しに、工房の隅つこの、丁度彼女が、繃帶した片足を崩してゐる壁際に取り散らしてあつた賣れ殘りのローズ物を、まるで、寶

分の玩具をひねくるやうに拾つて見てゐたが、わざ／＼、目を欹てゝ。

「おや。絲遊さん。丁字屋のお絹さんが、これ、竹の額縁に挿まつて、こんな處に！」

と、絲遊の鼻つ先に持ち出すんだ。

「ほんとに。お絹さんですはい。」

絲遊は、微温い微笑を浮べ乍ら、どうして、こんな、狸の巣見たいな家に、遊女の肖像が丁寧な框入りになつて持つてゐるのだらうと云ふ目付で、弱り切つてゐる黒助をじろ／＼見た。

「あんた、何枚も何枚も寫眞を買ふて、何しはるのか。妙な商買ぢやなもし。乾度絲遊さんのもあるぢやろ」

黒助はこの二人の女の前で、丸裸にされてゐるやうに恥しくなつて來た。黒助が手傳つてやる夏臓の商賣も、夏臓といふ奇怪な人間も、自分も、自分の境遇も、すつかり知り抜いて、冷笑しに來た形だ。小娘は、面憎い程落ち着いて「あんたの隱し事を他所に行て吹聽したら、どうしますか」と尻を突つついて脅かしにかゝるんだ。書生だと見くびつて脅かしやがる。こんな女郎や小娘風情に、さう安々と馬鹿にされて堪るものかと考へてゐ乍ら、だん／＼空恐ろしく、おぢけて來て、時々、不意に、腹の底から、大きな戰きがむく／＼と持ち上つて來た。そして堪らなくて、「他所に行つて吹聽するなら、するがいゝ。俺の方にも考へがあるんだ」

と一生懸命で、おろ／＼した聲を力み出して見せた。處が、黒助の一時に蒼褪めた顏色に効目があつたのか、勝手にせると、どうしても云へないで、苦しさの餘りに、吐き出した文句が堪へたのか、絲遊が慌てゝ、でも、丁度汐合を測つたやうに、小娘の膝を、ちよいと突いて、たしなめた。

「お前は默つてお出。脇から餘計な減らず口利かんでもよいがな」

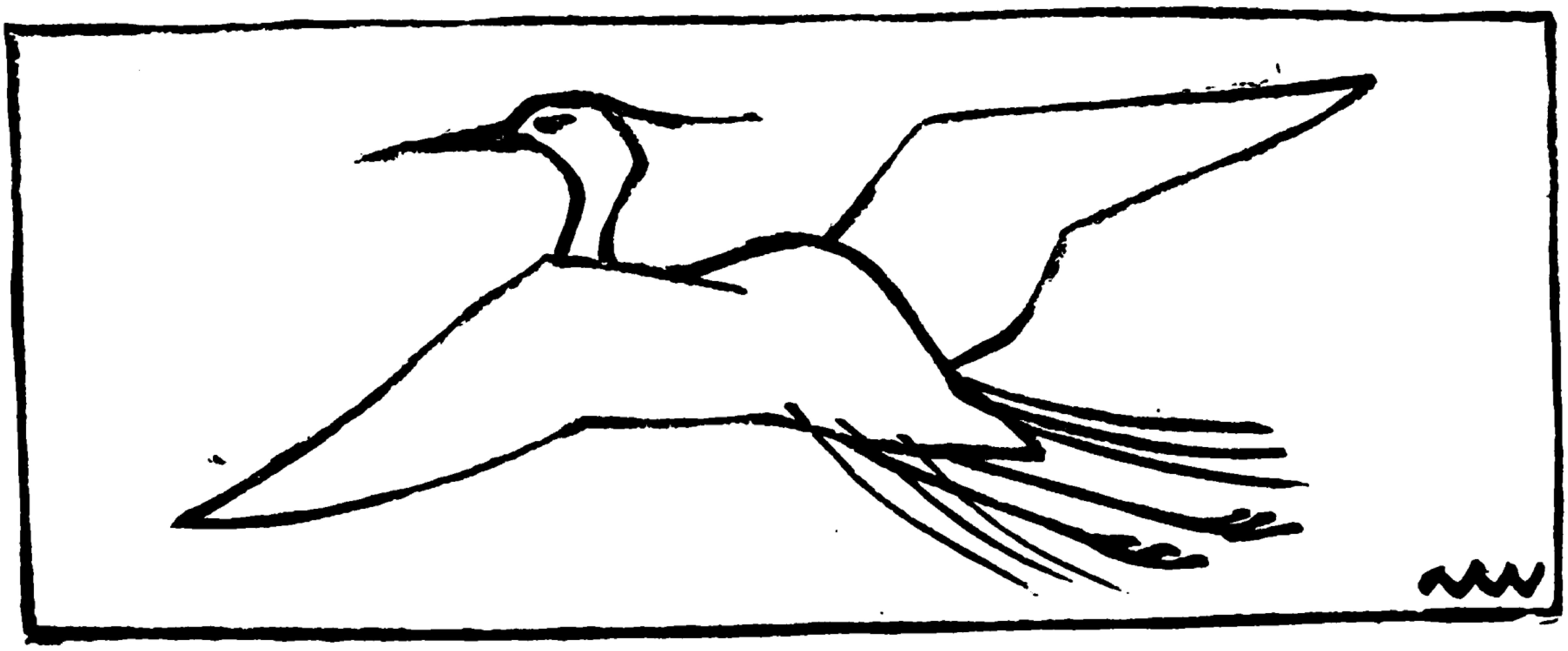
それから黑助が、思ひもつかぬ言葉の裏を推量したと見えて、また、
「何卒、怒らんで下さいな。」
と云つたり、さつきの事は忘れたやうに、
「この子は、偏痛屋で、よう人の氣を惡うしますけ。それでなもし、福田さんの居所は、解らんなら、解らんでもいゝがな。今にひらぎ屋に戾んなはるぢやろからのし。それで、あんた、福田さんが油屋に來なはることは、一切誰にも言はんで貰はんと、そんなことが學校へ知れたら、福田さんも、あんたも、首尾がようないし、その方が、どつちも穩便でよからうと思ひましたから、お賴みに來ました」
と、言ひ出した。黑助は、漸く、緣遊が和談に來てゐることを悟つて、やゝ安心すると、
「俺はいゝが、も一人の男が承知するかね」
と今度は黑助の方から高く止つて來た。
「も一人の書生さんて、あの色の蒼い、眼鏡の人でせう。あの人は何處に住んでゐなはるかしら? これから訪ねやうと思ひますけ」
眼鏡の書生とは、無論須原のことなんだ。
「捕まつた男に聞けばいゝ。」
「聞きましたぞ。でも、探したら、そんな家は、ついぞありませんがな。」
黑助は、橋本がいゝ加減なことを口から出任せに云つたんだらう。それにしても、自分の居處だけ正直に敎へるのが腹立たしかつた。黑助なら、どんなことをしたつて怒れないと思つたんだらう。實際、橋本からばかりでなく、黑助は

世間から、さう考へられてゐたんだ。「黒助」とか「なめくじ」とか奇妙な名前をつけられて。けれども、絲遊や、小娘は橋本から騙されたのが、格別悄々しさうにも見えなかつた。須原の家へなんぞ、こんな風體の女が二人揃つて押しかけやうものなら、須原が、どんな憂き目を見るか解らないことを知つてゐたから、黒助も橋本の眞似をして、途轍もない場所を、さも、まことしやかに教へてやつた後で、絲遊が、また別人のやうな物腰で、別人のやうな粧對で、ちつとも駄目を押す様子もなく、すぐ眞個にして了つて、喜んだときは、流石に済まない嘘をついたと、可憐さうな氣がしたんだ。絲遊は、それから間もなく、小娘を連れて藪の中を出て行つたが、歸りがけに、何だか、遊びに來たやうな口吻で「大層お邪魔しました。早うお寢みなんせ」とお辭儀をしてから、ふつと思ひ出して、今度は改まつて歎願するやうに、

「何卒、今日の一件は内證にして下さらないと、福田さんが可憐さうですから。お頼み申します」と念を押したかと思ふと、またそれも、ふつと忘れたやうに「怖い藪なもし。おゝ。怖。怖。」と、用もない赤い番傘をぶら提げて、外から雨戸を締めて、木履の音が、竹の葉ずれに移るまで、黒助は、縁側にぽかんと突つ立つたまゝ、あくどい熱から冷めた病人見たいに、やつと、悪病神を立ち退かせたと思ふ女が、立ちがけにやつぱり遊女だと、默頭かれる放恣な姿を、ちらと見せて、縒れた唐糸の帯締に、指を挾んでしゆう〳〵と扱いた刹那の輕い柔らかな快よい響が、耳の底から離らいで行くのを心細がつてゐたんだ。だが、そんなことはどうでもいゝ。と云ふのは、それは、ほんの一瞬間か二瞬間の幻に過ぎなくて、黒助は、これが眞個に彼の世界だと押しつけられるやうに、あの遊廓の異風な酒場で、四つん這ひになりかけて、頻りに辻褄の合はぬ御託を列べてゐた夏藏を思ひ出した。夏藏に無断で跳び出した黒助を血眼で探し廻つては、その邊の物を、手當り次第に取つて投げる光景や、とても物になりさうに見えなかつたマトロスを相手に、アメ

リカの水夫がよくやりたがる猛烈な立ち廻りを始めた處まで活動寫眞のやうに、はつきり目に映るんだ。そのどさくさに、正直さうな乞食の老人が、泥醉者のポケットへまた手を突つ込んでいきなり蹴跳ばされたり、蹴跳ばされた老人の顔が、だん／＼佐太郎に變つて來て、天主堂に逃げ歸つたと思ふと、ころ／＼轉つて死んだり、死人を悔みに來た黑紋付の田舍者が、ザンボアの蔭に、こつそり、おふじを引つ張つて、こそ／＼と私語いたかと思ふと、出て來た處を見れば、おふじでも黑紋付でもなくて、福田と絲遊だつたり、まるで疲れ果てた精神稀薄者が、とぼ／＼と往來を歩るき乍ら見てゐる夢のやうな、夢ではないのだけれども、夢としか思はれない程、とりとめもない妄想が、少か一秒間に火花を散らせてゐたんだ。氣がゝりになる夏藏は、黑助が、ぐらぐらする頭に鉢卷をして、二階の部屋の老婆の傍で、前後不覺に寢込んで了ふても、まだ戻つて來たかつた。けれども、前後不覺の狀態は、三十分も續かなかつた。目を醒すと、「クィ／＼。クイ／＼。」と頻りに小犬が藪の中で鳴いてゐたが、手を延ばせば、部屋中のどこへでも手の屆くその部屋の片隅に、ぽつんと片づいてゐる飯櫃を引き寄せて中を覗くと、淋しい飯櫃の奥で、ころころころと一本のしやもじが干燥びて轉がつた。黑助は梯子段の口まで這ひ寄つて、靜かに耳を澄して工房の動靜を窺つたが、夏藏は、まだ戻つてゐなかつた。すると、「クイ、クイ、クイ、クイ、」と小犬が鷄屋の籠を引つ搔く音がまた耳を襲ふて來た。黑助は、首を延べて、臺處の籠の脇を覗いて見た。たしかに夏藏の飯櫃が見えたんだ。見えることが見えたんだが、頭がふらついて、ぐる／＼と目が舞つた。それから、どッした？　一日餌を與れなかつた小犬が飢じさを訴へる聲が、そのまゝばつたり止んで了つた、のではない。小犬と同じやうに、一日飯を食はずに、ぐつすり眠つてゐた老婆の側に戻つて來て、絲遊と小娘に惱まされた黑助が、そのまゝ、梯子段の下り口の踏み板に、ぴつたり片頰をくつつけて、夏藏の飯櫃を恨めしさうに眺めた形で、寢込んで了つたんだ。着物も脫がずに、蒲團も被らずに……。

若し機會があるならば、作者は當然此物語の中程に遡つて、お島とおふじの話をかゝねばなるまい。讀者は、それまで待つて呉れるだらう。(完)



秋

芥川龍之介

一

信子は女子大學にゐた時から、才媛の名聲を擔つてゐた。彼女が早晩作家として文壇に打つて出る事は、殆誰も疑はなかつた。中には彼女が在學中、既に三百何枚かの自敍傳體小說を書き上げたなどゝ吹聽して歩くものもあつた。が、學校を卒業して見ると、まだ女學校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して來た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雜な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、緣談からきめてかゝるべく餘儀なくされた。

彼女には俊吉と云ふ從兄があつた。彼は當時まだ大學の文科に籍を置いてゐたが、やはり將來は作家仲間に身を投ずる意志があるらしかつた。信子はこの從兄の大學生と、昔から親しく往來してゐた。それが互に文學と云ふ共通の話題が出來てからは、愈親しみが增したやうであつた。唯、彼は信子と違つて、當世流行のトルスト

イズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。から云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時々萬事眞面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女は怒りながらも、俊吉の皮肉や警句の中に、何か輕蔑出來ないものを感じない譯には行かなかつた。

だから彼女は在學中も、彼と一しよに展覽會や音樂會へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵そんな時には、妹の照子も同伴であつた。彼等三人は往きも返りも、氣兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時々話の圏外へ置きざりにされる事もあつた。それでも照子は小供らしく、飾窓の中のパラソルや絹のショオルを覗き歩いて、格別閑却された事を不平に思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに氣がつくと、必話頭を轉換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようとした。その癖まづ照子を忘れるものは、何時も信子自身であつた。俊吉はすべてに無頓着なのか、相不變氣の利いた冗談ばかり投げつけながら、目まぐるしい往來の人通りの中を、大股にゆつくり歩いて行つた。――

信子と從兄との間がらは、勿論誰の眼に見ても、來るべき彼等の結婚を豫想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未來をてんで羨んだり妬んだり　た。殊に俊吉を知らないものは、(滑稽と云ふより外はないが)、一層これが甚しかつた。信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。從つて同窓たちの頭の中には、彼等が學校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰も新婦新郎の寫眞の如く、一しよにはつきり燒きつけられてゐた。

所が學校を卒業すると、信子は彼等の豫期に反して、大阪の或商事會社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。

その時中央停車場へ見送りに行つたものの話によると、信子は何時もと變りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同窓たちは皆不思議がつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交つてゐた。或者は彼女を信頼して、すべてを母親の意志に歸した。又或ものは彼女を疑つて、心がはりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釋が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さへ知らない譯ではなかつた。彼女はなぜ俊と結婚しなかつたか？　彼等はその後暫くの間、よるとさはると重大らしく、必この疑問を話題にした。さうして彼是二月ばかり經つと――全く信子を忘れてしまつた。勿論彼女が書く筈だつた長篇小說の噂なぞも。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも、最も閑靜な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、――それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈默を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時時理由もなく氣が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に疊んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た。書簡箋の上にはこんな事が、細々とペンで書いてあつた。

「――もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出來ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が出れて來ます。御姉様。どうか、どうか私を御赦し下さい。照子はもつたいない御姉様の犧牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉様は私の爲に、今度の御緣談を御きめになりました。さうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉様は私に俊さんは好きかと御尋きになりました。それから又好きならば、御姉様がきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けとも仰有いました。あの時もう御姉様は、私が俊さんに差上げる

筈の手紙を讀んでいらしつたのでせう。あの手紙がなくなつた時、ほんたうに私は御姉様を御恨めしく思ひました。(御免遊ばせ。この事だけでも私はどの位申し譯がないかわかりません。)ですからその晩も私には、御姉様の親切な御言葉も、皮肉のやうな氣さへ致しました。私が怒つて御返事らしい御返事も碌に致さなかつた事は、もちろん御忘れになりもなさりますまい。けれどもあれから二三日經つて、御姉様の御緣談が急にきまつてしまつた時、私はそれこそ死んででも、御詫びをしようかと思ひました。御姉様も俊さんが御好きなのでございますもの。(御隱しになつてはいや。私はよく存じて居りましてよ。)私の事さへ御かまひにならなければ、きつと御自分が俊さんの所へいらしつたのに違ひございません。それでも御姉様は私に、俊さんなぞは思つてゐないと、何度も繰返して仰有いました。さうしてとうとう心にもない御結婚をなすつて御しまひになりました。私の大事な御姉様。私が今日鷄を抱いて來て、大阪へいらしやる御姉様に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覺えていらしつて？ 私は飼つてゐる鷄にも、私と一しよに御姉様へ御詫びを申して貰ひたかつたの。さうしたら、何にも御存知ない御母様まで御泣きになりましたのね。

「御姉様。もう明日は大阪へいらしつて御しまひなさるでせう。けれどもどうか何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴、照子は毎朝鷄に餌をやりながら、御姉様の事を思ひ出して、誰にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を讀む毎に、必涙が滲んで來た。殊に中央停車場から汽車に乘らうとする間際、そつとこの手紙を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにいぢらしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれであらうか。さう疑を挾む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい氣持ちを擴げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける爲に、大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に當つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後彼是三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた。

夫は何處か女性的な、口數を利かない人物であつた。それが毎日會社から歸つて來ると、必晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騷がれてゐる小說や戯曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教の匂のする女子大學趣味の人生觀が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頰を赤らめた儘、讀みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆日曜毎に、大阪やその近郊の遊覽地へ氣散じな一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乘る度に、何處でも飲食する事を憚らない關西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背廣からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹼の匂に似た一種淸新な雰圍氣を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈女流作家になるかね。」と云つて、女のやうな口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頰杖をついて、炎天の松林の蟬の聲に、我知れず耳を傾け

ゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が殘暑が初秋へ振り變らうとする時分、夫は或日會社の出がけに、汗じみた襟を取變へようとした。が、生憎襟は一本殘らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顏を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小說ばかり書いてゐちや困る」と何時になく厭味を云つた。信子は默つて眼を伏せて、上衣の埃を拂つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の經費をもう少し輕減出來ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女學生ぢやあるまいし。」――そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の絽刺しをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反つて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした調子で云つた。彼女は猶更口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顏をして、つまらなさうに商賣向きの雜誌か何かばかり讀んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた儘、「もう小說なんぞ書きません。」と、囁くやうな聲で云つた。夫はそれでも默つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く聲が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜泣きは、まだ絕え絕えに聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。…………

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎても、まだ夫が會社から歸つて來ない晩があつた。しかも漸く歸つて來ると、雨外套も人では脫げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐々々しく夫に着換へさせた。夫はそれにも關らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が歸らなかつたから、餘つ程小說が捗取つたらう。」――さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晚床にはいると、思はず淚がほろほろ落ちた。こんな處を照子

が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子。照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一人ぎりだ。——信子は度々心の中でから妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寝息に苦しまされて、殆夜中まんじりともせずに、寝返りばかり打つてゐた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出來上つてゐた。

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて來た。信子は何時か机に向つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文學談を珍しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覺え出した。その上又かう云ふ話題は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時々夫の顏色を窺つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を嚙みながら、何時もより餘程快活に、「これで小供でも出來て見ると——」などと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から、月々の雜誌に從兄の名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたやうに、俊吉との文通を絶つてゐた。唯、彼の動靜は、——大學の文科を卒業したとか、同人雜誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も起さなかつた。が、彼の小說が雜誌に載つてゐるのを見ると、懷しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も獨り微笑を洩らした。俊吉はやはり小說の中でも、冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた。彼女にはしかし氣のせいか、その輕快な皮肉の後に、何か今までの從兄にはない、寂しさうな捨鉢の調子が潜んでゐるやうに思はれた。と同時にさう思ふ事が、後めたいやうな氣もしないではなかつた。

信子はそれ以來夫に對して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ々々と微笑し

てゐる彼女の顏を見出した。その顏は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を擴げながら、彼等が東京で式を擧げた當時の記憶なぞも話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覺えてゐるね。」――夫にかう調戯はれると、信子は必無言の儘、眼にだけ媚のある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の內では、不思議に思ふ事が度々あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が濟んだと云ふ事を報じて來た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる爲に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分當方は無人故、式には不本意ながら參りかね候へども……」――そんな文句を書いてゐる內に、(彼女には何故かわからなかつたが、)筆の澁る事も再三あつた。すると彼女は眼を擧げて、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黑く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮べながら、彼女が妹の口眞似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寐るかな。」――二三時間の後、夫は柔な髭を撫でながら、太儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰へ文字を書いてゐたが、この時急に顏を擧げて、「でも妙なものね。私にも弟が一人出來るのだと思ふと」と云つた。「當り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」――彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を擧げた。當日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は獨り午の食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」――こんな事

を考へながら、信子はじつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪は愈烈しくなつた。が、口中の生臭さは、やはり執念く消えなかつた。……

三

信子はその翌年の秋、社命を帶びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い日限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、來匆々顏を出した時の外は、殆一日も彼女をつれて、外出する機會を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終點から、たつた一人俥に揺られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、——すべてがどの家も變りはなかつた。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、聲に應じて出て來たのは、意外にも從兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顏を見ると、「やあ」と快活な聲を上げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫らく」「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」「照子は？　留守？」「使に行つた。女中も。」——信子は妙に恥しさを感じながら、派手な裏のついた上衣をそつと玄關の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書齋兼客間の八疊へ坐らせた。座敷の中には何處を見ても、本ばかり亂雜に積んであつた。殊に午後の日の當つた障子際の、小さな紫檀の机のまはりには、新聞雜誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。

その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであつた。信子はかう云ふ周圍から、暫らく物珍しい眼を離さなかつた。

「來る事は手紙で知つてゐたけれど、今日來ようとは思はなかつた。」――俊吉は卷煙草へ火をつけると、さすがに懷しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？　幸福？」――信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懷しさがよみ返つて來るのを意識した。文通さへ碌にしなかつた、彼是二年越しの氣まづい記憶は、思つたより彼女を煩さなかつた。

彼等は一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、盡きない位澤山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに、全然暮し向きの問題には觸れなかつた。それが信子には一層從兄と、話してゐると云ふ感じを強くさせた。

時々はしかし沈默が、二人の間に來る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其處には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に從兄の顏を窺はずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と卷煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を裝つてゐる氣色も見えなかつた。

その内に照子が歸つて來た。彼女は姉の顏を見ると、手をとり合はないばかりに嬉しがつた。信子も唇は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以來の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活き々々と、血の色を頬に透かせながら、今でも飼つてゐる鷄の事まで、熱心に話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は卷煙草を啣へた儘、滿足さうに二人を眺めて、相不變にやにや笑つてゐた。

其處へ女中も歸つて來た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速机へ向って、ペンを動かし始めた。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい氣色を見せた。「ぢや御姉様がいらしつた時は、誰も家にゐなかつたの。」

「ええ、俊さんだけ。」――信子はかう答へる事が、平氣を強ひるやうな心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那様に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、悪戯さうにくすりと笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を圍む事になつた。照子の説明する所によると、膳に上つた玉子は皆家の鷄が産んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から――」なぞと社會主義じみた理屈を並べたりした。その癖此處にゐる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。照子はそれが可笑しいと云つて、小供のやうな笑ひ聲を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにはゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も盡きなかつた。微醉を帶びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭辯を弄した。その談論風發が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も續けて小説を書いて見ようかしら」と云つた。すると從兄は返事をする代りに、グゥルモンの警句を抛りつけた。それは「ミュウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グゥルモンの權威を認めなかつた。「ぢや女でなけりや、音樂家になれなくつて？　アポロは男ぢやありませんか。」――照子は眞面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寢る前に俊吉は、椽側の雨戸を一枚開けて、寢間着の儘狹い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく「ちよいと出て御覽。好い月だから。」と聲をかけた。信子は獨り彼の後から、沓脫ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脫いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、瘦せがれた檜の梢にあつた。從兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生へてゐるのね。」――信子は荒れた庭を氣味惡さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ步み寄つた。が、彼はやはり空を見たから、「十三夜かな」と呟いただけであつた。

暫く沈默が續いた後、俊吉は靜に眼を返して、「鷄小屋へ行つて見ようか」と云つた。信子は默つて頷いた。鷄小屋は丁度檜とは反對の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆつくり其處まで步いて行つた。しかし蓆圍ひの內は、唯鷄の匂のする、朧げな光と影ばかりであつた。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆獨り言かと思ふやうに、「寢てゐる」と彼女に囁いた。「玉子を人に取られた鷄が。」――信子は草の中に佇んだ儘、さう考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて來ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。靑い橫ばひがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背廣を着て、食後匆々玄關へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓參をするのだとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと歸つて來るから。」――彼は外套をひつかけながら、かう信子に念を押した。が彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、默つて微笑したばかりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外國の歌劇團の話、——その外愉快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかつた。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと氣がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其處にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顏を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだか、はつきりした事はわからなかつた。

柱時計が十時を打つた時、信子は懶さうな眼を擧げて、「俊さんは中々歸りさうもないわね」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ——」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな氣がした。さう思ふと愈彼女の氣もちは、憂欝に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」——信子は頤を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其處へ忍びこんだ、眞面目な羨望の調子だけは、どうする事も出來なかつた。照子はしかし無邪氣らしく、やはり活き々々と微笑しながら、「覺えていらつしやい。」と睨む眞似をした。それからすぐに又「御姉樣だつて幸福の癖に」と、甘へるやうにつけ加へた。その言葉がぴしりと信子を打つた。

彼女は心もち瞼を上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顏をして、姉と眼を見合せた。その顏にも亦蔽ひ難い後悔の色が動いてゐた。信子は強いて微笑した。——「さう思はれるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈默が來た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鐵瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐ

「でも御兄様は御優しくはなくつて？」――やがて照子は小さな聲で、恐る恐るかう尋ねた。その聲の中には、明かに氣の毒さうな響が籠つてゐた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。新聞には大阪と同じやうに、米價問題が掲げてあつた。

その内に靜な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顏に當てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくつたつて好いのよ。」――照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は殘酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚るやうに、照子の方へ顏をやりながら、「惡るかつたら、私があやまるわ。私は照さんさへ幸福なら、何より有難いと思つてゐるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してゐてくれれば――」と、低い聲で云ひ續けた。云ひ續ける内に、彼女の聲も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。すると突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顏を擧げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照らせてゐた。「ぢや御姉様は――御姉様は何故昨夜も――」照子は皆まで云はない内に、又顏を袖に埋めて、發作的に烈しく泣き始めた。……………

二三時間の後、信子は電車の終點に急ぐべく、幌俥の上に搖られてゐた。彼女の眼にはひる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其處には場末らしい家々と色づいた雜木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ々々と流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄曇を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

彼女の心は靜かであつた。が、その靜かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかつた。照子の發作が終つた後、

和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は從兄の歸りも待たず、この俥上に身を托した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地惡く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。――

信子はふと眼を擧げた。その時セルロイドの窓の中には、ごみごみした町を歩いて來る、杖を抱へた從兄の姿が見えた。彼女の心は動搖した。俥を止めようか。それともこの儘行き違はうか。彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい逡巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて來た。彼は薄日の光を浴びて、水溜まりの多い往來にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。」――さう云ふ聲が一瞬間、信子の唇から洩れようとした。實際俊吉はその時もう、彼女の俥のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俥とすれ違つた。薄濁つた空、疎な屋並み、高い木々の黄ばんだ梢、――後には相不變人通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋――」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。(三十七)



盗者被盗者

菊池寛

淳吉は、久し振で歸着した。妻と一人の子供とを一緒に連れて行つた。

旅行に出る前に、彼は身に付けて行く着物と一二枚の衣更への外の衣類は、スツカリ質に入れた。妻にもさうさせた。何も旅費の融通にするなどゝ云ふ譯ではなく、留守中の火難や盗難を怖れたからであつた。たゞ一人留守をさせる女中は、心からの正直者で、その點では信用が置けたが、田舍者で機轉が利かなかつた。その點では信用が置けなかつた。目ぼしい著物をさへ質に入れて置けば、火事が行からが泥棒がは入らうが、平氣だと思つた。

淳吉は、衣類と云つても、絹物は五六枚しか持つて居ないので、それに洋服類を併せても、品數は幾らもなかつた。妻は、それでも一通のものは持つて居た。彼女は、箪笥の引出しから着物を次ぎ／＼出しながら、

「まあ！　質に入れると云ふことを、お母様が聞いたら、眼を丸くしようわい！」

など云ひながら、それでも餘り嫌がつては居なかつた。田舍の士族の一寸した家柄に育つた彼女は、質に入れたりすることを、可なり惡事だと思つて居たのだが、

淳吉には、さうした心持は、殆ど殘つて居なかつた。學校時代には、着て居た蒲團まで、質屋へ擔いで行つたことなどがあつたから。それでも、費日中質屋の手代が、は入つて來た時は、そんなにいゝ心持はしなかつた。おまけに、戸外に立つて居た隣のおかみさんが、——それは手代と顏馴染だつたと見え——如何にも、大事件でも起つたやうに、追ひ縋るやうに、

「何處！　何處！」と、手代に訊いたのを、硝子戸ごしに見た妻は、一寸悄氣たやうだつたが、

「なに、かまやせん！　お金に困まつて入れて居るのぢやないんぢやけに」と彼女は一寸反抗的に云つて居た。

手代は、着物の柄や地質などを、時々お愛憎に賞めながら、品物を數へてしまふと、

「えゝ！　幾何お借しいたしませうか。お入用の金高を仰つて下さいませんか」と、云つた。

「なに別に金が入ると云ふ譯ぢやないんだ。家内も一所に旅行をするもんだから、用心のために預けて置かうと云ふんだから、金高には望がないんだ」

さう云ひながらも淳吉は、本當に金に困まつて質に入れる人も、やつぱりこんな躰裁のよい事を云ふのではないかと思ふと、此方の云つて居ることも、向うへは躰のよい云ひ譯に聞えやしないかと思つて、一寸不愉快だつた。

「手前共では、幾何でもおよろしいのでムいますが、……」と、先方は淳吉の切り出すのを待つて居た。

「一體幾何まで貸さうと云ふのだ」淳吉は、一寸自分達夫婦の着物が、本當は幾何位の値段があるものかと、好奇心で訊いて見た。

「へえ！　四百五十圓までお貸し致しませう。これで新しくおこしらへになれば千圓以上もかゝりますでせうが」と、

手代はまたお愛憎を云つた。

餘り澤山借り過ぎて、十圓近くの利息を拂つても馬鹿らしかつた。それかと云つて、代價と丸切り掛けはなれた少額の金を借りるのも、何となく不安だつた。それで、彼は利息が丁度五圓位で止まるやうにと、三百圓だけ借りることにした。

手代は、男物と女物とを別々に、大風呂敷に包んでしまふと、連れて來て居た小僧に小さい方を負はし、自分は大きい方を背負ひながら、

「へえ! 歸る時には、北の方を廻つて歸りませうか。隣のおかみさんが、うるさうムいますからよ」と云つた。

淳吉は、自分は少しも恥しくないことをして居るのに、手代までが、此方を何か後暗いことでもして居るやうに、庇はうとするのが、不愉快だつた。

「なに! そんなこと平氣だよ。堂々と歸つて呉れてもいゝよ」と、云つた。

が、手代は小僧を指圖して、やつぱり北の方を廻つて歸つて行つた。が、淳吉にもその方が氣持がよかつた。質に入れた後には、二階と下とに一つ宛置いてある箪笥の引出しには、底の方へ木綿物や銘仙の洗ひ晒しなどが、一二枚宛しか殘つて居ない筈だつた。

淳吉は、留守の心配なしに旅行した。二十日あまりで、淳吉は東京に急な用事が出來たので、歸らうと思つた。が、久し振りに娘を見た妻の母親は、彼女を極力引き止めた。その上、二人子供のある妻の姉が姙娠して、今にも第三の子供が生れさうになつて居た。忙がしくて手が足りなかつけ。それで、手傳ひ旁々、妻丈は滯在を延ばすことになつた。

淳吉は、自分一人東京に歸つた。

東京の家へ歸つて見ると、女中は神妙に留守を務めて居た。

「何かあつたかい」

「いゝえ何もありませんです」と、女中は妙なアクセントのある言葉で答へた。

淳吉は、簞笥の引出しを一通調べて見た。出立の時に、多少周章(あは)てた爲に、錠の下りて居るのもあれば、下りて居ないのもあつた。が、中には何の異狀も見當らなかつた。

彼は、旅行中着詰めて居た外出着を脱いで、衣更へをして寛ぎたいと思つた。ふと妻が仕立て直して呉れたまゝ、まだ一度も手を通したことのない銘仙が、あることを思ひ出した。たしかに質には入れなかつた。質に入れるほど、惜しくもないし、それかと云つて木綿物ではないので、何うしようかと一寸考へた末、たしかに質には入れなかつたと記憶して居た。彼は、引出しを一々開けて見た。所が、不思議にどの引出しにも見付からなかつた。たしかに、質には入れなかつた筈だなと、思ひながら行李まで調べて見た。が、何處にも見付からなかつた。それぢや、やつぱり入れたのだなと思つた。質を出せば、きつとあるに違ない、さう思つて彼は有合せの紡績に着換へた。

二三日經つてから、淳吉は質を受け出した。が、妻の着物は當分必要がなし、自分も外出勝だから、妻の歸るまで捨てゝ置いた方が安全だと思つたので、男物丈を持つて來させた。

彼は質札に合はせながら、品數を讀んだ。質札の通、和洋服〆十七點確にあつた。が、心當にして居た銘仙の着物は見附からなかつた。彼は一寸不思議に思つた。が、多分妻の女物の方へ交じつて居るに違ないと思つた。その上、仕立直したまゝ、彼是一年　着ないのだから、當分入ることもないだらうと思つた。

彼は、元來その着物を餘り好かなかつた。銘仙とは思つて居たが、純な銘仙でもなかつた。それかと云つて、米琉でもなかつた。銘仙と米琉との合の子のやうな、いやにぞべ〳〵とした着物だ。着物の通人などがよく罵倒する「鯨(こうしろ)のや

うにピカ〳〵光る着物」の一種であつた。が、淳吉には可なり思出のある着物であつた。それは彼が生れて始めて、自分の儲けた金で買つた着物であつた。結婚してから、一月目位に妻に勧められて買つた着物だつた。借衣の禮服で、結婚した淳吉は、その時知人からお祝ひに呉れた一枚の高貴織の羽織の外は、銘仙一枚持つて居なかつた。

最初は、この鰺のやうに光る着物を着て、高貴の羽織を着ることが、彼の第一の盛装であつた。その中に、彼の收入も少し宛増したので、一二枚宛着物を買つた。從つて一年位前からは、此の米琉とも銘仙とも付かぬ着物などは、少しも顧みられなかつた。それが、急に見えなくなつたので、一寸淳吉の注意を惹いたのである。「あんな着物位どうでもいゝ」と、淳吉は高を緤つて居た。五日經ち十日經つ裡に、その着物のことは、スッカリ忘れてしまつた。

淳吉より、一月ばかり遲れて、妻は歸つて來た。妻が歸つて來てから、二三日經つた頃だつた。二階の簞笥の引出しを、順々に開けて居た妻は、一寸首を捻りながら、

「怪しいのう。一番下の引出しに入れてあつた私の着物がない！」と云つた。

「お前の着物つて何だ？　好い物は、スッカリ質に入れたのだらう」と、淳吉は云つた。

「けど、もう華美で着られなくなつた紫色のお召と、青い縞の銘仙を玆へ入れて置いた筈ぢやのに。」

「思ひ違だらう。質に入れたのだらう」

「いゝや。たしかに玆へ入れてあつたんぢや」と、妻は自分の記憶を少しも疑つて居なかつた。

「下の簞笥を探して見たかい」

「へえ、もう探して見たの。すみに訊いて見ようかしらん、けど惡いのう。疑つて居るやうで」

「なに惡いことがあるもんか。兎に角、すみが留守をして居たのだから、一應訊いて見るがいゝ。さう云へば、俺の銘

仙も見えないのだぜ」

淳吉は、さう云つたもの丶、此の二つの紛失を一緒にして、考へるほども氣には止めなかつた。妻の着物も自分の着物も、きつと何處かに藏ひ忘れてあるに違ひない、探して居る裡は、却つて見えないで、時が經つてからヒヨツクリ見付かるに違ないと思つて居た。

その日、女中が歸つて來ると、妻は務めて平靜な口調で訊いた。

「すみ！　もしか、私の紫のお召の羽織を知らないかしら、何處かで見なかつた？」

「いゝえ、私は知りませんです。そんな着物一度も見たことありません」女中は何時ものやうに、ニコリともせず答へた。

「さう、そんならいゝの。ちよつと、知つて居るかと思つて訊いてみたの」と、妻は可成女中の氣持を、惡くしないやうに、打ち切つてしまつた。それが贓ひ盜まれて居たにしろ、女中に丈は少しも疑ひはかけなかつたほど、淳吉達はその正直を信じて居た。

五六日して月末になつたので、淳吉は質から女物の方を、受け出した。品數は、ちやんと揃つて居た。が、淳吉がぼんやり心當にして居た銘仙はやつぱり交じつて居なかつた。妻の紫色のお召も、青縞の銘仙も交じつて居なかつた。

「ほんとうに、何うしたのだらう。不思議ぢやのう。やつぱり何處かに、紛れ込んで居るのかしら。盜人が來れは、すみが居つたのぢやから分るし。惜しくはないけれども、お召の方はお美奈ちやんが大きくなつたら、著せようと思つて居たし、銘仙の方は女學校の時に買ふたのぢやから、古いけれども地はよかつたのぢや。が、無くなつてもいゝ、い

ゝ。また買ふて呉れるでせう」と妻は淳吉に云つた。妻は、皮肉の積では云はなかつたが、結婚して以來、いつか双子の不斷着を買つてやつた以外、一枚も着物らしい着物を買つてやつたことのない淳吉には、それが一寸皮肉に聞えた。淳吉は苦笑した。

が、妻も淳吉も、やつぱり見えない着物は、家の中の何處かに在るやうに思つて居た。きつと、何時かヒヨツクリと出て來るに違ないと思つて居た。が、ヒヨツクリ出て來ない裡に、一月ばかり經つた。

十二月の半頃であつた。日曜で朝から宅に居て、二階で原稿を書いて居た。すると、玄關に誰か訪問者があるやうだつた。淳吉は、それが誰だらうかと、一寸期待を持ちながら、妻の上つて來るのを待つて居た。妻は、何時よりも急いで、少し息をはづませながら、二階へ上つて來た。彼女が、興奮すれば何時でもするやうに、烈しく笑ひながら。

「何だい！」淳吉は、妻の態度を、一寸咎めるやうに云つた。

「やつぱり盜られとつたんぢやと」と、云ひながら、妻はそれが非常に可笑しい面白いことでゝもあるやうに笑ひ續けた。

「さうかい！　やつぱり盜られとつたのか。何うしたのだい、巡査が來たのかい？」と、淳吉も一寸興奮しながら、立ち上つた。

「警視廳の刑事が來て居るの。家へは入つた盜人が捕つたのぢやと」と、妻はやつと笑ふのを止めた。

淳吉は、急いで下へ降りた。玄關へ出て見ると、二重廻しを着た刑事にしては、品のいゝ男が、狹い玄關先に突つ立つて居た。

「盜られて居たのですか」淳吉は挨拶もしないでさう云つた。

「さうです。何うも、本郷の警察へ紹介しても、盗難屆が出て居ないと云ふでせう。それかと云つて、當の犯人は何處其處の家で盗つたと云つて居るのでせう。それで、私が實地に調べに來たのです。隨分此の邊を探し廻つたのですよ。犯人が、何でも主人は文學者で大學を出て居ると云ふものですから、それを當に探したのです。丁度此下の町に、私の知つて居る巡査が居ましてね、それに訊いて此方だと云ふことが分つたのです。探すのに骨が折れましたよ」

「へえ！　僕の内のことを、そんなによく知つた泥棒ですか。ぢや此の近所の人ですね」淳吉は、自分の職業を泥棒が知つて居ることに、一寸駭かされながらかう云つた。

「なに！　此方の女中が皆喋べつたのですよ。女中をうまく騙かして持つて行つたのです。たしか下谷に御親類か、何かあるのでせう」

淳吉は一寸考へた。下谷には、親友の樋口が居る外は親類などはなかつた。

「樋口と云ふ友達なら居ります」

「さう〳〵その樋口と云ふ人です。犯人は、岡本と云ふ五十七八の老人ですがね、お宅へ來て、その樋口さんとお宅で會ふ約束があると云つて、女中を騙して二階へ上り込んで、仕事をやつたのです」

「へえ！　新手ですね。それにしても、樋口と僕とが友達であることを知つてるなんて、よつぽど調べた仕事ですね」と、泥棒の頭のいゝのに一寸感心しながら云つた。

「それも、やつぱり此方の女中が話したのです。女中が旅行して居るとかいろ〳〵なことを云つたらしいのです」

「へえ！　それぢやまるで騙される材料を提供して居るやうなものですね」と、淳吉は心の中で、女中の馬鹿らしさを非難しながら云つた。

「いや誰だつて、騙されるのです。此手ぢや大抵の人がやられるのです。」と、刑事は女中を辯護するやうに云つた。
「それで品物は何うしたのでせう。」と、淳吉は今の場合一番肝心なことを訊いた。
「すつかり、上がつて居る筈です。盗られたものは、判つて居るでせうな。何うして盗難屆を出さなかつたのです」
「紛失はして居たのですが、盗られたとは思つて居なかつたのです」
「何でも此方で盗つたものが、四五點ありますよ」
「へえ！　此方ぢや三點しか盗られた積はないのですか」
と、淳吉が云ふと、
「随分呑氣ですなア、、、」と刑事は笑つた。
「男物の銘仙がは入つて居ますか」と、やつぱり何となく氣になつて居たことを、ハツキリ片づけたかつた。
「たしかにあつたやうです。明日九時迄に警視廳へ來て下さい。判を忘れないやうに」と刑事は歸りかけたが、ふと思ひ出したやうに、
「さう／＼女中さんに、逢つて行かう。今居りますか」と云つた。
女中は家には、その時居なかつた。が、家から半町もない廣場に居ることは、判つて居た。妻は、二三間家を出ると、其處から手招きで呼んだ。
女中が歸つて來ると刑事は、馴れた調子で訊いた。
「十月の廿日頃に、此處へ岡本だと云つて、やつて來た老人があるでせう」
「へえ！　來ました。頭の禿げた……」と、女中はあはてたやうな顔をして答へた。

一さう〳〵金歯を入れた。そしてあなたがその男を二階へ上げたのでせう」
「へえ〳〵、樋口さんとお宅で會ふ約束をしてある云ふて、玄關で十分二十分も、待つて居ましたが、なか〳〵來られんものですから、困まつた〳〵云ふてましたけに、二階へ通したのです」女中は、切れ〳〵に答へた。
「それが、泥棒ですよ、樋口さんなんて云ふ名も、あなたが教へたのでせう。何だか知れない人を二階へ上げたりすると、絞め殺ろされますぞ」
と、刑事は最後の言葉にかなり力を入れた。
「へえ！ あれが泥棒！ あのお爺さんが、へえ！ わたしちつとも知らなかつた」女中は頓狂な聲で、云ひながら盗人を二階へ上げた自分の責任などには、少しも氣が付かないで、何か意外な面白いことでゝもあるやうに、ニコ〳〵笑つて居た。淳吉は、女中の平生からの、無智から來る無責任を知つては居たけれども、此時は少し不愉快であつた。
刑事は、訊く丈のことを女中に訊いてしまふと、
「それぢや、明朝來て下さい。盗難の日は、此方で判つて居ますから、時間を正確に訊いて來て下さい」と云つて歸つて居た。淳吉は、刑事の丁寧な物言ひや態度が愉快であつた。盗難屆を怠つて居るので、普通ならば、小言でも聞かされるのではないかしらと思つた。
刑事が歸つてしまふと、女中は盗難の顚末を、クド〳〵と云つた。云ふことに筋道が立たないので、幾度も繰返した。
『『私は岡本です』云ふて、名刺を突き出しましたから、私は旦那さんのお知合かと思ひました。」などと女中は云つた。最初主人が留守だと云ふと、それでは御主人の代理になつて呉れる人を教へて呉れと云つたので、女中が樋口の名を教へたらしかつた。すると、樋口さんに會ふと云つて一旦出て行つたが又歸つて來て今度は樋口さんと、お宅で會ふ約束を

したと云つて、二階へ上り込んでしまつたらしかつた。

「その間お前は、始終下に居たのかい」と、訊くと、

「へえ！　私の外に近所の子供が、五六人も下へ來て、ワイ〳〵騷いで居りましたのです。それで、あの人は時々下へ降りて來て、簞笥の前に立つて『こりやいゝ簞笥だな。東京には珍らしい』と云ふて賞めて居りましたぜ。」と、女中はまだ自分の責任を少しも氣づかないやうに呑氣だつた。

「はゝゝ二階の簞笥が、空つぽなものだから、下の簞笥を覗ひに來たのだよ。『いゝ簞笥だな』と云ふのは、何かは入つて居さうだなと云ふ意味だよ。然し、子供が遊びに來て居てよかつた。お前一人だつたら、騙されて樋口の所へ位、使に遣られたかも知れないぜ」と、淳吉は女中の愚直を笑ひながら云つた。

「へえ！　私が樋口さんの所へ行かうかと云ひましたら、それには及ばん云ひました」と、平氣で云つた。

「何だ！　お前の方から、そんなことを云ひ出したのか」と、淳吉は馬鹿らしくなつてしまつた。が、留守番の責任丈は、問ふて置かねばならぬと思つたので「それは、それでもいゝが、そんな人が來た以上、俺が國から歸つて來た時に、直ぐ云はなければならないぢやないか。」と、淳吉は一寸眞面目になつて云つた。

「ですけれど、あの人が歸つて行く時に、『樋口さんは、幾何待つても來ないから、これから樋口さんの所へ行つて、萬事の話を付けるから』と云ひましたから、旦那さんに樋口さんの方から、お話があるだらうと思つて居ました」と、女中が答へた。

「樋口なんかから話があるもんか」と、淳吉は苦笑しながら云つた、が、女中の云ひ分にも、一理はあるので此上叱る譯には行かなかつた。それに、盜られたものが、スッカリ返つて來る以上、何も云ふことはないと思つた。淳吉と女中

との問答を默つて聞いて居た妻は、
「よかつたのう、やつぱり質に入れといて。質に入れてなかつたら、幾何盜られて居るか知れん。それにいゝ物を盜れば向ふだつて、とうに賣つて居るかも知れん。さう〱お母さんに、さう云つてやらう。質に入れたと云ふたら、まあ！　そんな事をする人があるもんな云ふて、散々叱られたけに」と、淳吉の質屋に預ける處置の效果を、初て知つたやうに云つた。
「それにしても、何うして持つて歸つただらう。その男が歸る時には、お前も居たのだらう」と、淳吉はまだケロリとした顔をして居る女中に訊いた。
「何かしらん、こんな大きいボール紙の箱を二つ持つて來て、一つは此方のですと云つて、一つの方を樋口さんに上げるのだと云つて持つて行きました。後で殘した方をあけて見ると、何も入つて居ませなんだ」と、女中はやつぱり平氣で答へた。
「ぢや二階の簞笥の上に置いてある水色の箱がそれかい。何だちやんと道具まで用意して居やがる」と、淳吉はまた苦笑した。
が、妻は女中の先刻からの平氣な態度が、餘程癪にさはつて居たと見え、
「人樣から、何かいたゞいた時には、ちやんと云つて呉れないきませんよ。譬ひボール箱でも、貰つたものは、ちやんと貰つたと云つて呉れなければいきませんよ。まあ、品物が返つたればこそいゝけれど、……」と、一寸語氣を强めて云つた。が、女中は一寸默つて居た丈で、夫婦が默つてしまふと、直ぐ負ふて居る子供をあやしながら、外へ出て行つてしまつた。

が、無智な女中に、責任論をする譯にも行かなかつた。それよりも、品物が悉く無事に返ると云ふのが、何となく愉快であつた。從つて、盗人を入れた責任者たる女中に對する心持も、少しも險しくはなつて行かないのだつた。

× × ×

現在のやうな散文的な、機械的な平靜な生活を送つて居る淳吉のやうなものに取つて、泥棒には入られるなどと云ふことは、それが何となく一つの事件（ロマンス）であるやうに思へた。尤も之れが强盗などでなく、而も此方が盗難屆も出さないのに、警視廳でちやんと被害品を取返して、向うから此方を探し當て、わざわざ知らせに來て呉れた以上、泥棒に對する憎惡などは、殆ど無くなつてしまひ、たゞ事件その物の興味だけが殘つて居た。警視廳へ出頭する事だけが、一寸億劫だつたが、それでもまだ一度も行つた事のない所へ、その大きいいかめしい建物から、少しの壓迫も受けずに、堂々と出頭し得られると云ふことは、一寸淳吉の好奇心を動かさないことはなかつた。

翌日は、平素もより早起して、八時半頃に家を出た。妻は、

「風呂敷を持つていかな困らうわい」と、云つて可なり大きい風呂敷を出して來ながら、「四五點云ふて外に何を盗られるのか知らん、何か美奈ちやんの一つ身でも盗つてつて居るのかも知れん」と、云つた。

十二月の半過ぎだつたが、暖い好い朝だつた。淳吉が本郷三丁目て電車に乘らうとすると、ヒョツクリ年下の友達の中川に逢つた。

「やあ！ 早いですね」と向うから聲を掛けたが、それは此方から云ひたい事であつた。何時でも十一時頃まで、寢て居る中川がこんなに早く街へ出て居る方が、不思議だつたのだ。

「君こそ早いぢやないか。一體何うしたの」

「急に芝の伯父さんから呼び付けられてね。……貴方は？」

「一寸警視廳へ」

「え、！　警視廳へ！　變な所へ行くのですね。一體何うしたと云ふのです。」

と、何にでも直ぐ興味を持ちたがる中川は、熱心に訊きにかゝつた。中川は、盜難の仕末などを話すのには一番話し栄のする相手だつた。

「泥棒には入られてね。その品物を取りに行くのです」

「泥棒！　へえ！　ちつとも聞かなかつた、一體何時です」と、彼は貪ぼるやうに訊きはじめた。二人一緒に向ひ合つて電車に乘ると、淳吉も乘氣になつて、少しは得意になつて、盜難の顛末を話した。下女の馬鹿らしさを、殊に力說しながら。

「正直だけれども、田舍者でね。何時かも松茸を洗はしたら、氣を利かした積で、スツカリ皮を剝いてしまつたと云ふ調子だから、まるで赤兒の手を捻ぢるやうに泥棒に騙されてしまつたんだ。二階で待つて居る中に、氣を利かして紅茶ぐらゐこしらへて行つたと思ふのだが」と、云ひながら、自分でもうまいことを云つたやうな氣がして笑つた。

「泥棒に紅茶はよかつた！」と、中川は面白がつて哄笑した。

「それで澤山盜られたのですか」

「此方ぢや、三點しか盜られない積なのだけれども、刑事の話ぢや四五點盜られて居るさうですよ。一體、どんなものを盜られて居るのか、一寸樂しみです。その三點以外の品は、只で儲けて居るやうな氣がしますよ」と、淳吉は、自分ながら少し上調子だと、氣の付く位、噪いで話した。

「樂しみはよかつたね。隨分呑氣だな！」と、中川は話全體を可なり面白がつた。

が、そんなに上調子で話して居る中に、ふと印を持つて來ることを忘れたのに氣が付いた。今迄は、凡てが滑然（スムース）に行つて居たことが、一寸ひつかゝりが來たやうに不快だつた。印を持つて行かなければ品物を渡して呉れないかも知れない、折返して二度行くことは、一寸嫌だなあと思ふと、彼は一寸悄氣た。

「あゝしまつた！　判を忘れちやつた！」と、淳吉が云ふと、中川は

「判をね。ハヽヽ益々呑氣ですね」と、云つて呉れたが、悄氣た氣持は恢復しなかつた。

× × ×

受附で訊くと、刑事課は直ぐ判つた。正面の石の階段を上らないで、左の稍薄暗い廊下へ出ると、第一調所、第二調所と云つたやうな札が、その廊下に開かれて居る扉に、順々に掛けてあつた。廊下には木の長椅子が置かれてあつて、呼び出しを受けたらしい學生や、料理屋のお神さんと云つたやうな婦人などが、三四人待つて居た。

淳吉は、昨日尋ねて來て呉れた刑事の名前を云つて、取次を頼むと、直ぐ會ふことが出來た。淳吉は相手の顔を見ると、直ぐ判を忘れたことを云つた。

「いやいゝでせう。それでは、貴方を信用して品物を渡しますから、盜難仕末書と請書（うけしよ）とを郵便で送つて下さい」さう云ひながら、刑事は淳吉を自分の部屋へ案内して呉れた。淳吉は刑事の態度の親切なのが、大變うれしかつた。刑事の部屋には、やつぱり呼び出されて來たやうな、料理屋のお神さんのやうな女が、五六人も控へて居た。刑事は机を中に置いて、淳吉と差し向ひに坐ると、

「盜難仕末書ですがね。私が文句を云ひますから、その通り筆記して下さい。」と、云つた。盜難仕末書位、もしそれが

普通の文法と文章とで、書いていゝものなら、文飾を業として居る俺は、此刑事よりも明晰にでも、巧妙にでも書けないことはないと思つたけれど、淳吉は相手の親切を思ふと、さう不快ではなかつた。

「盜難仕末書と書いて、貴君の住所と姓名とを書いて下さい。後で、綴ぢるのですから、端の方を空けて置いて下さい――右者ですね、大正六年十月十八日關西旅行中……」と刑事は考へ〳〵云つて呉れた。淳吉が、刑事の云ふ通を書いたのは次ぎのやうな文章であつた。

右者大正八年十月十八日關西旅行中女中杉本スミ(十九)只一人留守居致し居り候處、同日午前十時頃、年齡五十八歲ノ岡本某ナル老人尋ネ來リ、主人友人樋口敏夫ト自宅ニ於テ、會合ノ約アリト女中ヲ欺キ、二階ニ上リ暫クシテ立去リタル後、別紙盜難品目錄ノ品々紛失致シ居ルコトヲ發見シ、百方搜索中ノ所、今回御尋ニヨリ、全ク同人ニ窃取サレタルコト判明シ候ニ付キ、別紙盜難目錄書相添ヘ此段御屆ケニ及ビ候也

刑事課御中

と云ふ文句であつた。尋常小學校の時以來、長い間人の敎へる文章を、書取つたりすることはなかつたので、可なり勝手が惡かつた。「右者」と云ふ字で始まつて居ながら、一體その「右者」が、何處まで續いて居るのか、何う收まつて居るのか、一番氣になつた。

「一度讀んで見て下さい。訂しますから」と、刑事は淳吉が書き了るのを見ると云つた。

淳吉は、また小學校時代に先生から、云ひ付けられたやうに、聲を上げて讀まねばならなかつた。かうした境遇を客觀して、面白がれないこともなかつたが、一寸嫌な氣がせぬこともなかつた。

「あ、其處に自宅ニ於テとありますが、それは犯人の自宅に於てと云ふ意味に取れさうですから、一層のこと削つて下

さい。」と、刑事は云ひながら、立つて部屋の隅にある嚴丈な開き扉の付いた簞笥を明けにかゝつて居た。いかにも、贓品でもは入つて居さうな無氣味な簞笥であつた。その中から、質屋の品物のやうに、厚紙に入れた着物を刑事は取り出した。

「これがお宅の品物ですが、一寸お調べ下さい」と、刑事は淳吉の方へ押しやつた。見ると、果して妻の云つた紫色の華美なお召があつた。青い縞の銘仙があつた。その上、淳吉にも見覺えのある友禪の長襦袢と（それは可なり着古したものであつたが）夏物の帷子とがあつた。やつぱり、妻の氣付かないものも盜られて居たのだと、淳吉は思つた。

「これでも六十圓質屋で借して居たのですからね。今こさへると、此のお召丈だつて、六十圓以上もかゝりますよ。ねえ！　さうでせう」と、刑事は傍に神妙に控へて居る女達に、合槌を求めた。

「ほんとうに、此の頃はお高うムいますからねえ」と、その中の一人が答へた。

淳吉は、六十圓と云ふ聲を聞くと、急に品物に對する愛惜を覺えた。六十圓取られることは、彼としては一寸した打擊に違なかつた。やつぱり品物が出てよかつた。さう思ふと、前に坐つて居る刑事が非常に賴もしいやうに、有難いやうに思はれ出した。

が、淳吉が幾何その着物の包みを、探して見ても、あの銘仙、銘仙と米琉との合の子のやうなあの紀念すべき着物は見えなかつた。刑事が何處か外へ藏つてあるのだらうと思つた。

「あのう！　男物の銘仙のやうな著物があつた筈ですが」と、淳吉は切り出した。

「あ、さう〳〵あつた！　あつた！　確か彼奴が著て居るのがそれです」と、云つた。それは淳吉には思ひもかけぬ言葉だつた、淳吉はそれを聞くと、急にイヤな氣持がした。今までは、ある興味を以て、無くなつた品物を取返すと云ふ

嬉しさを以て、やつて來たことに、急にイヤな不快な部分があるのに氣が付いた。自分の著物を盜んで著て居る者に對する憎惡などとは、違つたヘンテコな不快な氣持が起り初めて居た。

刑事は、淳吉の氣持とは全く沒交渉に、

「おい！　平田君！」と、隣室に居る目下らしい刑事に呼びかけた「あの八號の留置場に、岡本と云ふ頭の禿げた老爺が居るだらう。彼奴の著て居る著物を、ひつぺがして來て與れたまへ！」

と、云つた。それを、聞くと淳吉の心は押し潰されたやうに暗くなつた。縱令その著物が正當にその人の所有に屬して居るか居ないかは暫く問はず、今の世の中で、ある人間が身に著けて居る著物を、暴力でひつぺがすと云ふことが、行はれると云ふことは、聞く丈でも一寸堪らないことだつた。而もそれが、自分の利益を擁護する爲に、行はれて居ると思ふと、淳吉には韮を喰ふやうな嫌な心持がした。

「著て居るのなら、當人にやつてもいゝです」と、淳吉は口に出さうとした。が、五六人も刑事以外の人が居る所でそんな事を口にする事が、如何にも芝居がゝつて居るやうに思はれた。その上、犯罪を飽くまでも懲らし良民を保護しようとする刑事に對して、そんな事を云ひ出すことが相手の氣を惡くすることになりはしまいかと思はれた。殊に、刑事がいろ／＼好意を示して居て與れるのに、相手の氣を惡くするやうな事を云ふのは、氣が咎めた。淳吉は、默つて居る外はなかつた。

「さあ！　盜難目錄書を書いて下さい。此方で云ひますから、紫色花模樣お召但し裏褪紅色羽二重附……」などゝ、よつぽど馴れて居ると見え刑事は、淳吉などのとても分らない縞柄や色合を一々云つて與れた。

その時、部屋の扉があいたかと思ふと、

「それ！」と云ふ聲と一緒に、淳吉の膝の前へ投げられたものがあつた。それは正しく、淳吉には、紀念すべき銘仙とも米琉とも分らない例の著物だつた。それを見ると淳吉は、それが何かの罪惡の魁のやうに思はれて仕方がなかつた。岡本と云ふ禿げた老爺のみの罪惡の塊でなく、同時にもつと外のものゝ罪の塊であるやうに思つた。それでも彼は久し振に自分の著物を見たので、オゾ〳〵觸つて見た。それは岡本の老爺のぬくもりを受けて生あたゝかつた。

「また温いでせう。虱が居るかも知れませんよ」と、刑事は苦笑しながら云つた。著物は、もうよほど薄よごれて居た。淳吉は、自分のものでありながら、それを自分のものにすることに、妙な苦痛を感じた。

×　×　×

淳吉は、大風呂敷を持ちながら電車に乘つた。彼は警視廳を出る時に、ふと岡本と云ふ老爺のことを老へた。もう十二月の半すぎであるのに、著物を一枚剝がれて、冷い檻房の中で顫へて居るかも知れぬ老人の姿を思ふと、彼は自分の著物を取り返して——もつと適確に云へば奪ひ返してだか——行くことが心苦しかつた。

彼は、何かの雜誌で、「財産は贓品なり」とか何とか、西洋の學者が云つたと云ふことを讀んだことがある。が、彼は自分で働いた金で買つた著物などを、そんな風に自分で考へて見たことなどは、一度もなかつた。が、銘仙の一枚位（刑事は盜難品目錄に米琉とかいたが）は、淳吉に取つては、在つても無くてもいゝものだつた。妻の四枚の著物も、彼女に取つて、在つても無くてもよいものだつた。その中の二つは、彼女は盜られたことさへ、氣が付いて居なかつた。資產と云ふ資產は、何もない淳吉ではあるが、著物の一枚や二枚位は、どうでもよかつた。それだのに、相手の老爺は、その著物を必死になつて盜んで居る。命懸けで盜んで居る。淳吉夫婦に取つては、在つても無くても、格別變りのない品物に、彼は必死になつて居る。牢に叩き込まれる危險を冒してまで、必死になつて居る方向は、

罪悪の方向である。が、兎に角必死は必死である。

淳吉夫婦は、その品物を失つても、面白半分上調子で、それを取り返す手續をして居る。その間、相手は牢獄に冷たい苦悶の夜を過して居る。淳吉は、英語を習ひかけた時の讀本に、悪戯な子供が、蛙に石を投げ付けることを書いて在つたのを覺えて居る。その時に石を投げられた蛙が、

「貴君方に遊びであることが、我々には死である」と、抗議することを書いてあつた。あの岡本と云ふ禿げ頭の老爺には牢獄であることが、淳吉夫婦に取つては、何であつただらうか。

殊に、盗られたものを、スカツリ取り返した今では、あの老爺と淳吉等との物質上の勘定は濟んで居る。たゞ、あの老爺は一度盗つたことは盗つたものゝ、直ぐ奪ひ返された銘仙一つの爲にも、何年と云ふ苦役を忍ばねばならないのだつた。淳吉には、在つても無くても何うでもいゝ、銘仙をホンの一月ばかり著た爲に、何年となく苦しまねばならぬ老爺の事を思ふことは彼に取つて、決して快いことではなかつた。

家に歸つて、妻に著物を見せながら、いろ〳〵な話をすると、

「まあ！ 着て居たの、それなら一層のこと上げればいゝのに」と、彼女は云つた。着物に就いては、彼よりも執着の深い彼女までが、さう云つたことは、淳吉に取つて一寸愉快だつた。

× × ×

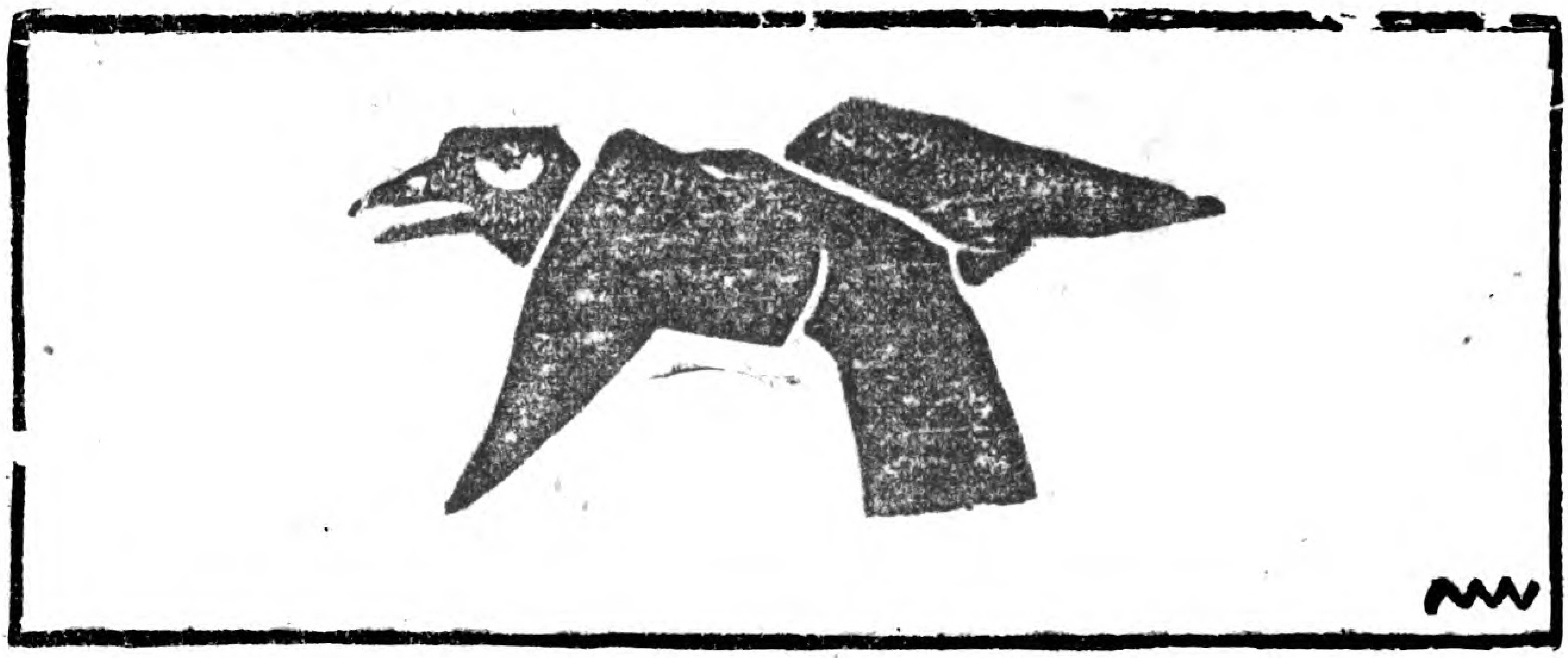
そんな事があつてから、十日ばかりした頃だつた。淳吉は、あの日外出しようとして、着物を着更へながら、足袋を探したが、見付からなかつた。

「足袋！ 足袋！」と、性急な淳吉は、臺所で仕事をして居る妻を、急き立てた。

「押入れの右の方に、盜人が呉れた箱があるでせう。あの箱に入れてあるの。足袋を入れるのに丁度いゝから」と妻は臺所から云つた。

押入を開けると、いかにもあの岡本と云ふ老爺が置いて行つた水色のボール紙の箱があつた。淳吉は、その箱から自分の足袋を取出しながら、思つた。品物を取り返したので、あの老爺との物質上の勘定が濟んで居ると思つたのは淳吉の思違だつた。俺の方がお釣を取つて居る。さう考へると、妙なくすぐつたい苦笑ひが、浮んで來るのを、淳吉は感じた。

——三月十八日稿——



工廠裏にて

久米正雄

家は砲兵工廠の裏門と向き合つて、牛天神の直ぐ下に在つた。附近では鳥渡目に立つ位大きな二階家で、階下は工場着の仕立屋を營んでゐたが、二階を素人下宿として貸してゐた。その一間に久野は松田と住んでゐた。二人は其處から一所に、本郷の大學まで通つてゐた。二人は同じ文科の學生ではあつたが、それ〲專攻科目は違つてゐた。久野は文學科の中の英文科だつたし、松田は哲學科の中の純哲——純粹な哲學科に籍を置いてゐた。併し二人は、滅多に學校へは出なかつた。一週の中でも殆んど二三日、氣が向いた天氣のいゝ日とか、好きな敎授の出る日とかに、鳥渡顏を出して見る位なものであつた。

「まるで散歩に行くやうなものだね。」

「さうさ。が、要するに人生といふものが、墓場へ向つての散歩なんだからね。同じ散歩にしても、吾々は出來るだけ道草を食はなけれあ、——」

こんな事を一つ端の警句の積りで問答しながら、二人は學校を怠け放題に怠けてゐた。

併しそれでゐて二人は、決して遊んでゐるといふのでもなかつた。何か學校の講義より、大切なものが在るやうな積りで、本や雜誌を讀み散らしたり、役にも立たない文章を書いてみたりして、自分たちの勉强は此方にあるやうな顏をしてゐた。彼は學校を怠けるといふ事に、一種の誇りを感じてゐた。何だかそれがアカデミイといふやうなものに對する、ヒロイツクな反抗のやうな氣がして、飽く迄それに楯を突き乍ら、此方は一人で道を切り拓いて見せる、と、そんな青年らしい客氣もあつた。併し勉强その物に對しては、事實さう勉强もしないに係らず、人一倍の尊敬と愛着を持つてゐた。彼らは「敎室」は輕蔑しても、「圖書館」は尊敬してゐた。彼らは「聽講」などよりも、「讀書」とか「習作」とかに將來の準備としての價値を認めようとしてゐた。

二人はよく思想問題だとか、藝術だとかを論じ合つた。二人の所へは同じやうな仲間が、よく訪ねて來ては話し込んだ。

久野の安物の竹で拵へた本立には、乏しい洋書の中に、イプセン、ハウプトマン、ショウ、ブリュウ、ゴルスワシイと云つたやうな人々の、近代の社會劇の書册が並んでゐた。松田の稍〻大きい、曇り硝子を嵌めた本箱の中には、ジェームスや當時流行だつたオイツケン、ベルグソンなぞに交つて、マルクスの資本論やクロポトキンの相互扶助なぞが、樺色な簡素な表紙の背を見せてゐたりした。而して二人は其頃大峯氏や荒木氏の發行してゐた「近代思潮」の愛讀者だつた。――要するに二人は各〻異つた面から、青年らしい社會主義かぶれがしてゐた。それは石川啄木の歌なぞから、「國禁の書を涙して讀む」といつた風な、感傷癖を多分に注入されたためでもあつた。

併し二人の感化の受けやうも、其性質によつて違つてゐた。其專攻によつて色彩を異にしてゐた。松田はそれを批評的に乃至は學者的に讀み耽つて行つた。彼はマルクスとエンゲルスが、どういふ風に共同著作をしたか、といふやうな事

に却つて興味を持つた、久野は只共の内容を知らずに、勞働者に對する人道愛とか、虐げられたゐ者に對する同情とか、そんな風な浪漫的な方面から、社會改良家たらん事を夢想してゐるに過ぎなかつた。彼は寧ろシ ョウ、ブリェウ、ゴルスワシイ等の社會劇から、その社會改良家の態度を眞似ようとしたのだつた。彼はさう云ふ人々の、偶像破壊者的な雰圍氣に憧憬してゐるのだつた。

「君の態度は要するに、デモクラチック・センチメンタリズムだね。」

松田はよく夕食の後などに、久野が一つぱし社會改良家ぶつて、貧民窟の狀態だとか、資本家の横暴だとかを、文學的に叙述するのを聞いては、こんな風に批評を下した。

「さうかも知れない。併しそれでも君の態度よりはいゝぢやないか。僕は心臓を少しも動かさずに、あゝ云ふ主義の本を讀むなんて男を信じない。」

久野もなか〳〵敗けてはゐずに、こんな事を云ひ返すと、松田は只笑つて答へなかつた。

實際久野は、勞働者に深い興味を持つてゐた。心から愛してゐる氣だつた。要するに社會主義といふものは、勞働者を「愛する」に外ならぬと思つてゐた。彼が松田に薦められて、此處の工廠裏の家へ、一緒に下宿するやうになつたのも、一つは下宿料の安いため、又松田との友情のためだつたけれど、もう一つの大きな理由として、さう云ふ所に下宿して、實際に始終勞働者と接觸して見たいからでもあつた。

その宿といふのは、前にも云つた通り、工場着の仕立を本業としてゐた。其主人が松田の同縣人である關係上、松田は保證人の紹介によつて、前から親類同樣に置いて貰つてゐるのだつたが、その主人のおうなる迄の挿話が、又彼らの氣にも入つてゐた。

主人は、若い時に故郷の越後で期米に失敗して、東京へ逃げて來たのであつた。而して何處へも行き所がないので、此處の砲兵工廠に職工として入つた。彼は今は勿論すつかり禿げて了つたが、其頃からして既に、三十になるかならない若い癖に、頭が頂邊から禿げかゝつてゐた。而して其上、これも今は勿論であるが、身長が際立つて低かつた。頭が禿げかゝつてゐる小男。――それは誰の目にも付かずにはゐなかつた。彼はそれを利用した。而して上の人の目につく中で、ひたすら忠實に働いた。仲間の者からも、上の人からも、彼は直ちに勤勉者として、認められ可愛がられた。もと〳〵商人である彼は、何かにつけて氣が付く事が多かつた。それですぐ拔擢されて、職工の組頭のやうな位置に据えられた。すると彼はその位置を利用して、職工の間に一種の共同組合のやうなものを拵へた。それは日給の幾分かづゝを積立てゝ、お互に病氣の時には救濟し合つたり、又最も各人に利益の在つた事では、職工に取つて最も大きい支出の一つである被服代を、出來るだけ少くするために、共同で少しづゝ積み立てゝ置いては、直接に問屋から小倉地を買ひ、仕立屋へも交渉して、數で賃金を廉くさせる方法を講じたりした。それが非常に成功した。彼は殆んど其役目を、一手で引受けるやうになつて了つた。而していつの間にか其仕事に通曉した彼は、一つ自分で工場着を作る店を出さうと考へついた。其方が仕事も荒くないし、且つ儲けも澤山あると思つた。――かうして初めたのが今の店だつた。しかも今では開業後十年近くにもなり、附近に一つ二つはある同業者を壓して、可なり繁昌する店になつてゐた。主人はよく店の中央に座つて、裁ち板を前にしながら、羅紗の口蔽ひをかけた顔で、店の前を通る昔からの馴染に、愛想よく會釋を送つてゐた。店へ入ると小倉の紺の香が、ぷんと埃つぽく鼻を搏つた。

朝の出勤の途中か、夕方の退けの頃には、きつと一人か二人は註文に立寄つた。

「上の大々はありませんか。」

「普通の大を拵らへといて下さい。」

一々身體にきつちり合せて、寸法を取るに及ばない工場着は、大とか大々とか中とか云ふ、型の名でサイズが呼ばれてゐた。それを久野は珍らしがつたり、「矢つ張りデモクラチックでい〻ね。」なぞと詰らない所で嬉しがつたりした。

「そんなら君も今度制服を作る時に、大々とか大とかで誂へたらい〻ぢやないか。」

松田は松田でそんな風に冷かしたりした。

歳暮になると、店は一番忙しかつた。主人の外に、一人ゐる仕立師だけでは足りない程、註文を果す手が廻り兼ねた。其時は神田の方から、知合の仕立師を臨時に頼んで來て、殆んど晝夜兼行でミシン臺を鳴らしてゐた。

「春着を一つ拵へたいんですが、三日の出勤までに出來ますか。」

「へえ。春着は正月になると店を休みますので、暮の中にすつかり御仕立致します。――地は何に致しませうかな。」

「春着だから一つ奮發して、上々にしやうかな。」

「型は大でしたな。」

主人はお客の職工を、目尺で測るやうに云つたりした。かうして店では出來るだけの註文を受けた。

それを「春着」と云つてゐる事が、又ひどく久野を喜ばせた。

「春着か。い〻な。職工服の春着。――彼らにもさういふ心持があるんだ。さう思ふと何だか涙が出るやうな氣がするぢやないか。」

彼はそんな事を云つて、實際目頭を烏渡光らした。それには松田も皮肉な批評を挿まなかつた。

久野は又よく工廠の退ける時刻を目がけて、散歩に出るのが好きであつた。それは七時だつた。丁度夕飯が濟んで、

あたりが暗がりになり初める頃だつた。今まで牛天神の高い樹々の、梢を染めてゐた殘照が消えて、町裏は水を打つたやうにしつとり黄昏れかゝると、久野はわざ〳〵裏門の所まで出掛けて行つて、彼らの門口から開放されるのを待つてゐた。而して彼らの歸る流れと一所に、街筋を歩いて行くのだつた。

七時近くなると、門の前の所には、其處の電柱の影や、近い路次口の陰などに、久野のやうな醉興からでなく、眞に職工たちの出て來るのを迎へに來た人たちがあつた。それは恐らく良人とか、兄弟とか、戀人とかの歸りを待ち詫びて來るのであらう。十中の七人までは若い女であつた。若いけれども、汚ない窶れた姿をしてゐるものが多かつた。或時は一人目に立つて、古びてはゐるが美しい他處行きの羽織を着て、白粉氣もなく白い澄んだ顔に、目鼻立も可なり美しい令孃風の女が、辨當箱のやうな小豆色の包みを持つて、其處の電柱の陰に悄然と立つてゐた事もあつた。久野は其女に興味を持つて、一體どんな人を待つてゐるのかと思つて、暫らく立つて見てゐたが、女工たちがどや〳〵と出て來る間に見渡した拍子で見失つて了つた。それつきり其美しい女は、いつ行つて見ても姿を見せなかつた。

「あれあきつと何處かいゝ家の、立派なお孃さんなんだぜ。而して貧乏な學生と戀にでも落ちて、兩親に反對して家を出たんだ。ところが男は生活費もない程貧乏なものだから、仕方がないから食ふためには何でもしようと、泣く〳〵砲兵工廠へ出たものに違ひないんだ。あれで二人は連立つて家へ歸ると、貴方辛かつたでせうとか何とか云つて、まだハンマア持つにも馴れない白い手を取つて、涙を溢したりする場があるんだぜ。」

久野は家へ歸つてから、羨望と誇張も半ば交へて、松田にそれを話して聞かせた。

「ふん。」それを聞いて松田は笑つた。「至極家庭小説的な連想だね。だが君は偉いよ。さうして日常の見聞の中から、立派にロマンスを發見するんだからね。君の考への中にある勞働者の如きも、たつぷりロマンチファイしてあるんだから仕

合せさ。まあ精々門の前に立つてゐて、面白い種を仕入れ給へ。」

松田にこんな事を云はれながらも、矢つ張り久野は毎日のやうに、そこの門前を起點として、歸路の勞働者に交つて散歩するのを、彼らと提携してゐるやうに感じて、心嬉しくてならなかつた。

開け放つた門の中には、構内の鳥渡した廣場が見えた。其突當りの所には、赤い煉瓦の工場が、所々海鼠色に暮れた空を出せて、さう高くもなく立つてゐた。而して其上にはずつと高く、工廠の三本煙筒の端の一本煙が、まだ輪廓をはつきりさせて、黑くすつくとそゝり立つてゐた。其邊りには猶四五本の煙突が、附屬するやうに群がつてゐて、暮色に紛れ勝ちな其線の先から、ぽつと赤い火を吐いてゐるものもあつた。——而して凡ての上には蒼みがゝつた夜空が、う黃つぽい星をちらつかせて、其上に深く擴がつてゐた。

下の廣場の中には、一本の弧光燈が立つてゐた。その薄紫の光の明滅が、公園などを照らす時とは違つて、却つて陰氣に放射線を顫はしてゐた。其下の土地は石炭殼でも敷いたために、黑く濕つぽいやうに見えた。

其廣場へ、七時近くなると、左右の工場の出口から、幾流れとなく職工の群が、押し出されて來る。而してそれらは一團をなして、ざわめきながら蠢いてゐる。と、門衞の所に立つてゐる役人が、一々それを四列位に並ばせて、人數や所持品を點檢する。而して七時を打つと同時に、先づ女工の群から先に門外へ放つてやるのだ。

彼女らは門を出る時、自づと驅けるやうな足取りになつて、溢れるやうに流れ出る。それは牛天神を上つて富阪へ出る方と、大曲から江戸川の方へ出るのと、飯田橋の方へ外れるのと、直ぐ三方に岐れるのだが、人の密度は變らぬ位ぞろ〳〵と肩を觸れ合つて步み去る。

と、女工が出終るのを待つて、直ちに男工たちが解放される。待ちに待つてゐた彼らは、まだ女工の最後の一人が、

門を出るか出ない中に、勢ひ込んで迸り出る。ち彼忽らは女工らの群に追ひついて、其殿りと先頭とは手もなく交り合ふ。と、その交り合ふあたりでは、そここゝに輕るい叫びや、黄色い笑ひ聲が揚つた。下心ある女工はわざと歩みを遲らし、追ふべき男工は足を早めるに違ひない。其の混り合ひはだん／＼増して來て、その儘で表通りの方まで流されて行く。……

久野は其間に紛はされて、當もなく歩みを運んで行くのが、恰も一日の鬱みから開放されて、兎も角もかうして歸つて行く勞働者の心持を感じるやうに思つて、愉快で／＼ならなかつた。彼はその流れのまゝに、散歩の道をずん／＼伸ばして行つて、いつの間にか自分を圍んでゐた勞働者たちが、こゝの横町あすこの路次と、だん／＼姿を消しつて了て、もうすつかり暮れ切つた街筋に、自分の圍りに誰も從いて來る影もなくなると、其處から踵を返すのだつた。

或時は牛天神の境内をぬけた所で、一と群の女工たちを追ひ越した事があつた。すると其中の一人が、

「書生さん、書生さん。」

と呼びかけた。振り向いて見ると三四人の女工が直ぐ後ろに歩いてゐたが、どれが話しかけたのか解らなかつた。久野は揶揄れるとは知らないで、實際何か注意するのかと思つて立佇つた。すると彼女らは追ひつきしなに、

「貴方よく今時分此處らを歩いてゐるけれど、是から夜學へでも行くの。」と訊ねた奴があつた。

「いえ。さうぢやないんです。」

彼は微笑しながら答へて、前に立つて歩き出した。

「そんなら今夜一緒に、澤藏稻荷の緣日へ行かない。」

續いてどつと笑ふ聲がした。久野は嬉しいやうな、恥しいやうな氣持で足を早めた。――そんな挿話もあつた。

「あれで砲兵工廠の女工さんの中には、隨分凄いのが居るんですつてね。一人で三四人も男を持つて、平氣でゐるのが

在るさうですわ。けれどもそれも無理はないわね。あゝして髮の毛の間に、鉛の屑が溜るほど働いた擧句なんだもの。」

そん風に、彼らが時々行つて酒なぞを飲む、附近の小料理屋の女中が、自分たちとは反對の雰圍氣にゐるが、見ように依つては敵手とも云ふべき女工に反感を持つてゐるらしく云つたりした。が、久野は、

「それでもお前たちよりは立派だぞ。」

と面と向つて云つてやりたい程、强ゐても女工たちを愛護する氣持だつた。

「どうだつたい今日は。何か面白い社會劇の種でも見つかつたかい。」

松田は其散歩から歸つた久野を見ると、久野の無邪氣ともいふべき態度に、堪らない可愛さを感じてゐるらしく、眼を細めるやうに眺めて、併し言葉だけは皮肉に、例に依つてこんな冷かしを云ふのだつた。

「ううん。何にも。」

久野はさう答へながら、別して松田の冷嘲にも氣なんぞ惡くせずに、自分の机の前へ座つた。机の上には、實際松田の云つたやうな社會劇の習作が、半ば以上稿を進めてゐた。

それは「箕浦製作所」といふ、四幕物の社會劇だつた。それには彼の今の雰圍氣から、得られた丈の材料を詰め込んだ。脚本の主旨とする所は、この勞働者と資本家との階級戰は、どうせ人類の最後の幸福が來る日の、一つ手前の日をでは續くんだから、なまじひ溫情主義なぞを垂れて、爭鬪性の鋒先を鈍らせるよりは、寧ろ反抗の爲の反抗を以てしても、出來るだけ鬪爭を徹底せしめた方が、人類進化の大道だと云ふやうな事を、たど〱しく具體化した積りだつた。

やがてそれは書き上げられて、一ケ月ばかり經つと、やうやく赤門文學の卷尾に載せられた。殆んど誰も讀んで呉れ手がないに係らず、久野は嬉しさの頂上に在つた。それでも松田だけは、出た日に直ぐ讀んで呉れた。彼は百何十枚と

いふものを、殆んど三四十分で目讀して了つて、それから批評に饑えてゐながら、惡口をひそかに恐れてゐる久野に、「うん。なかなかうまいよ。だが内容がね。少し非論理な所があつていけない。君は美辭麗句でそこを胡麻化してゐる、肝心な所へ來ると、詩人になり過ぎて了つてゐる。折角これだけの技巧があるのに、御世辭でなく惜しいものだと思ふね。」などゝ批評を下した。兎も角も松田としては、その位は好評の部だつた。それで久野はそれを唯一の反響として、滿足して感謝してゐなければならなかつた。

ところが其反響は、突然意外な方面から起つて來た。

或日の午後久野と松田が、錢湯に出かけて歸つて來ると、お上さんが後から部屋に入つて來て、心持聲を潜めるやうにしながら、

「あの久野さん。あなたがお湯に行つた留守中に、小石川署の者だつて云ふ人が、あなたを訪ねて參りましたよ。突然店へ入つて來ましたから、お客さまかと思つて出てみると、此處に久野つていふ人は止宿してゐるかつて聞くんでせう。私はすぐ居りますが只今お留守ですつて云つたら、何處へ行つたか知つてゐるかつて聞き返すんで、多分お湯へいらしつたんだらうと思ひますがつて申しましたら、そんなら又後で來る、決して惡い事で來たんぢやないが、鳥渡お聞きしたい事が在るから、お歸りになつたら宜しく申上げて異れと云つて、一旦歸つて了ひましたよ。きつと又來るでせう。」

かう云つてお上さんは、不安な眼で店先の方を覗いた。

「惡い事ぢやないつて云つても、一體何の用なんだらう。氣味が惡いね。別に惡事を働いた覺えはなし、取調べられるや

うな筈もないから、警察の人なんかに訪ねられる筈はないんだがな。」

久野もさすがに不安になつてさう云つた。

「何か舊惡が露見したんぢやないか。それともそつと何處かの令孃の跡でもつけた覺えがあるんぢやないかい。」

松田は相變らずそんな事を云つてゐた。

「そんな不良靑年と間違へられるものか。冗談ぢやないぜ。」

「それぢや事に依ると、君の例の勞働者と提携しての散歩から、警察で不審と睨んだんぢやないか。在りさうな事だぜ。」

「さうかも知れないな。」

それには久野も同感だつた。

「まさか家の素人下宿を不可ないと云ふんぢやありますまいね。」

お上さんはお上さんで、又そんな事を心配してゐた。

「いや、決してそんな事は在りませんよ。そんなら久野一人を訊ねて來る譯がありませんからね。きつと久野が不良だからですよ。」

松田はかう辯解するやうに云つて吳れた。

「いや、その點は大丈夫です。決してお宅へ迷惑がかゝるやうな事はありませんから。」

久野もかう云つてお上さんだけは安心させた。が、自分の胸は決して穩かではなかつた。

「早く來て吳れゝばいゝな。たとひ手錠を掛けられるにしても、かう先觸れがあつて、不安に待たされたんぢや遣り切れない。早く來て、早く事が解つて吳れゝばいゝな。」

久野は松田にこんな事を云ひたがら、刑事の來るのを待ち兼ねてゐた。
暫らく立つと、店の方でひそ〳〵人聲がして、彼らの緊張した期待の中に、お上さんが入つて來た。
「いよ〳〵來たんですか。」といふやうに久野は入つて來るお上さんを見凝めた。するとお上さんは笑ひながら、
「成毛さんが參りましたよ。上げてようざんすか。」
と云つた。久野は鳥渡落膽したが、安堵の顏を松田と見合せながら、
「えゝ、どうぞ上げて下さい。」
とこれも笑ひながら答へざるを得なかつた。
成毛は「やあ、どうしたい。今日も學校を休んだぢやないか。それでもよく家にゐたね。」とか何とか云ひながら、元氣よく入つて來た。
「うむ。ずつと家にはゐたが、今は鳥渡待つてゐる人があるんだ。君を今も其人と間違へたんだよ。」
久野はから答へて彼を迎へた。
「實は久野の所へ、小石川署の刑事が來るといふのでね。此の不良青年まだ初心だもんだから、馴れないでびく〳〵してゐるのさ。」
松田も傍からからから註釋した。
「さうか。そいつは困つたな。何か君調べられるやうな事をしたのか。」
成毛は同情しながらも、興味を持つて訊ねるのだつた。
「そんな覺へがある位なら、かうして不安を感じやしないんだがね。どう云ふ理由だか解らないんで、氣味が惡くて不

可ない。」

「大方僕は久野の勞働熱の反應だらうと思ふのさ。」

「さうかも知れないな。が、またそんな事でなく、國勢調査か何かかも知れないよ。何しろ君は本郷から、一番遲く此處へ移つたんだからな。本郷の下宿へ行つてみたら、もうゐないとか何とか云はれたんで、此方へ紹介して來たのかも知れない。だから案じる必要もないよ。大學生の動靜なぞは、一つは學校の方で調べいゝせいなぞもあるだらうが、可なりよく調べてあるらしいからな。」

溫和な成毛はかう慰めるやうに云つたりした。

それで三人は打興じて、暫らく其事も忘れる位に、いろ／＼な雜談に移り耽つてゐると、今度は突然お上さんが入つて來て、ほんとに刑事の來た事を告げた。

久野は居ずまひを正して、机の前へ座を占め直した。松田と成毛とは、松田の机の向う側の、室の隅へ退くやうに座つてゐた。

やがて刑事は、お上さんに導かれて、室の中へ入つて來た。彼は閾の所に立止つて、ちらと三人のゐるのを見て取つたが、さう別にインクィジティヴな態度でもなく、腕に脱いで攜へてゐた人參色の、割りに明るい布地の外套を、ぐる／＼疊みに隅へ置くと、其上へ矢つ張り茶色の、極く普通な型の中折れ帽子を置いた。風采はどう見ても實體な商人としか思はれなかつた。併し顏だけは、彼がそこへ出された座布團の上へ、半分座つてから、

「私は小石川署の、內藤といふ高等係ですが、……お忙しい所を御迷惑でせうけれど、鳥渡お邪魔に上りました。」

と叮嚀に、御辭儀をして上げた所を見ると、皮膚の底が鐵がゝつた色に黑ずんで、鳥渡嚴つい冷酷なやうな感じを與

へた。が、眼なぞは別段に、探偵なぞといふものから想像するやうに、鋭く光つてゐる譯ではなかつた。たゞその鐵磁色が沈澱したやうな顏色が、久野に少し氣味の惡い感じを與へた。

「はあ。私が久野です。何の御用か存じませんが、どうぞ腹藏なく仰有つて下さい。」

する」刑事は別に惡意がないと云ふやうに、先づ袂からバツトなぞを取出しながら、笑顏を見せて云ひ出した。

「さう改まつた仰有られると、却つて恐縮する程の事なんですが、實は御著作をなさる方々の、お家へ時々伺ふやうな役を引受けて居りますので、是非先生がたともお近付をお願ひしたいと存じまして、參つたやうな次第なんでございますが。」

彼はかう叮嚀に云つて、全く他意なく松田らの方をも見廻した。

「さうですか。ではどうぞ御遠慮なく。……」

久野は止むを得ずそんな事を云つてゐた。

「御著作を成さる方々は、直接このいろ〳〵な社會の人民と御交渉を持つておいでなので、別に警戒するといふやうな惡い意味でなく、署の方でも特に名士と云つた人たちと同じく、心を付けて居りますので。——まあ其中には何かにつけて、御便利を計つて差上げられる事もあらうかと存じます。へゝゝへ。」

久野はなか〳〵うまいなと思つた。が、信じ易い彼は、もう手もなく安心しかゝつて、自分が著作家並みに取扱はれる事を、擽つたいながら嬉しいやうに感じたりした。

「ですけれど僕なんさあ、まだどうなるか解らない、謂はゞ雛つ子同然なものなんですからな。そんなに仰有られると却つて皮肉としか思はれません。」

「いゝえ。どう致しまして。先生の何かに御發表なすつた此頃の御文章は、私はまだ拜見しないんですけれど、本廠の方でも役の高い方々が大變感服して居られました。」

刑事はついから語るに落ちた。久野は内心「はゝあ、是だな」と思ひながら、出來るだけ悟つた顏は見せずに、

「いえ、どうも恐れ入ります。」

なぞと謙遜してゐた。而してそつと松田を顧みたら、彼は微笑を含んで、それから刑事に向つて、わざとから言葉を挿んだ。

「あゝ、此間の箕浦製作所ですか。あれは全く傑作でしたね。あれなんぞはもつと廣く讀まれていゝんです。」

彼のその皮肉な氣持は、久野にはすぐ解つた。解ると同時に、少し對手が覺るかと思つて、心の中ではら〱した。

が、刑事は、

「全くさうですな。」

と氣のない相槌を打つしかなかつた。而して猶も他意なげに、知らない中に訊問の歩を進めるのだつた。

「全くあゝいふ御文章一つ書くのにも、並大抵でない苦勞が要るものでせうな。——あゝいふ事はもうよほどお調べになつてゐらつしやるんでせうな。」

「いえ、そんな事もないんです。僕はたゞ出鱈目に、習作のつもりで書いてゐるんですから、此の青二才の頭腦から捻り出すだけで別に大した主義も主張もないんです。社會主義の御心配なんぞ決して在りません。」

久野は先手を打つた積りで、それでも笑ひながら無邪氣に云つてのけた。

「いえ、どう致しまして。」刑事は鳥渡狼狽した。「決してそんな事で、參つたのではありませんから、どうぞ御心配なさ

らないで下さい。先生方がそんな方へ足をお入れになるなんて、そんな事は思ひも致しません。たゞ前にも申上げた通り、御著作をなさる方々だけは、一應帳簿へ載せとくだけの事なんでございますから。――ではもう簡單に用向だけ伺つて參ります。御本籍はどちらでしたかな。」

刑事はとう〳〵手帳を取出した。松田たちはくす〳〵笑つて見てゐた。久野はそれが刑事に、惡い影響を與へはしないかと、はら〳〵し乍ら睨むやうに見やつたが、松田は久野の困惑した顏と、愈々出た手帳とに對して、なか〳〵くす〳〵笑ひを絶たなかつた。

「福島縣です。――福島縣安達郡越野村南町四十八番地。」

久野は問はるゝ儘に答へた。

「はあ。さうですか。」と刑事はそれを記しながら、「福島縣でゐらつしやいますか。はゝあ。此頃は彼方の方も、大分御立身なさる方か多くなりましたな。なか〳〵才氣がある方が多ございますな。私たちの署の方にも、御同縣の方が一人課長を致して居ります。田村嘉作といふ方ですが、御存じ在りませんか。」

「田村と、――知つて居りませんな。」

「さうですか、確かあの方は、須賀川の方だと存じますが、歸つたらさう申して見ませう。向うで知つてゐるかも知れません。かうして東京へ來て居りますと、同縣の誼なんてものもなか〳〵力になるものでしてな。」

「はあ。――」久野は警部の同縣人なんぞ、別に難有くもないので、かう氣がないやうに聞いてゐる外なかつた。

彼は語を次いで訊問を進めて行つた。

「……それから今までは本郷のどちらにおいでゞ、――はあ、四丁目廿七番地小林方ですな。――それから此方へおいで

にてから、——さうですかもう三ケ月におなりですか。で、此方にお出でになつたのは、矢つ張りかういふ所から材料でもお探しになる目的で？　勞働者の狀態でもお調べにならうと云ふのではないのですか。」

とう〳〵刑事は結論のやうに、蘊奥の手を出した。

「いゝえ。それほどの積りもないんです。たゞ此處に友人と一緒にゐると、勉強の都合がよかつたり、下宿料が本郷よりずつと廉いためなんですよ。」

かう答へながら久野は、もう「勞働散步」も迂濶には出來ないと思つた。

「はあ、さうですか。ではさう報告しませう。——御暇だれをかけて濟みませんでした。今日はこれで失禮します。」

刑事は手帳を收めると、かう云つて挨拶をした。久野もたゞ簡單に、

「さうですか。失禮しました。」

と云つただけだつた。すると傍から松田が、

「どうぞ又遊びにいらしつて下さい。」

と云ひ足した。刑事はそれを皮肉には感ぜずに、叮嚀に一禮すると、人蔘色の外套を持ち、茶色の帽子を握つて、何でもなく出て行つた。三人は言葉なく見送つてゐた。

刑事の姿が、店先から出て行つて遠くなつたのを見屆けると、主人が入つて來て、

「どうしたんです。何用だつたんです。」

と訊ねた。久野は直に答へた。

「なあに、心配する程の事ぢやなかつたんです。僕が物なんぞ書くもんだから、一應調べに來たんですつて。」

「御著作をなさる方はよかつたね。本廳の方でも役の高い方々が、大分感心してゐたは更によかつたよ。あれは確かに社會主義の嫌疑なんだぜ。而してやがて僕たちも、此處を巢窟に集つてるやうに疑はれるかも知れんぜ。」

松田はかう云つて成毛を顧みながら笑つた。

「さうですか。」併し主人はそれを聞くと、却つて半ば安心したやうに云つた。「場所が場所ですから、少し警戒したんでせうな。あの方の取締りも、此處らは幸堂事件以來、大變嚴重になりましたよ。もとはもつと寛大なものでした。私どもが工廠にゐた時分は、礫川倶樂部なんぞで、大つぴらによく秋刀の演說を聞いたものでしたよ。あれは演說のうまい男でね。肺病のせいか息の切れるのが、大さう聽衆を感心させたものでした。えゝとあれは日露戰爭の前後だから、もう彼是八九年前にもなりますかな。」

かう云つて主人は、少しは血も湧かせたらしい若い日を、回想するやうに遠くの方を見る目をした。誰も直ぐには物を云はなかつた。

「併し、」主人は續けた。「まつたくお上がさう心配する程の事もありませんや。何ぞつて云ふと野次るに出たがる私でさへ、別にその演說の中身は覺へちやゐないで、たゞ風采を思ひ出す位なもんですからな。其方の偉い人でも出て來りやあ兎も角、理窟でさう世の中は動きもしませんからな。」

「全くだよ御主人。」松田は相槌を打つた。「この久野なんて先生を警戒するなんて、全く愚にも付かない取越苦勞だよ。こんな子供つぽい社會主義者があるものか。刑事に鳥渡きつく訊問されでもしたら、今にも泣き出しさうな顏をする位だもの。もうすつかり懲りてゐるさ。其意味では刑事君の訪問も、確かに效能は在つたがね。どうだい久野。」

「あゝ懲りたよ。懲りたとも。此上尾行にでもつかれた日には、僕だつて少しは悄氣らあね。」

久野はさう冗談らしい口調だが、心の中では全くさう思つてゐるのだつた。

「ほんとに滅多な事は書けないね。」

おとなしい成毛も感に入つたやうに云つてゐた。

「さうとも。君たちは矢つ張り、純粋なラヴ・ストーリーか何かを書いてゐた方がいのさ。」

松田は何處までも冷かすやうに云つた。が、残念ながら久野自身も、さう思はざるを得なかつた。

それから又一週間ほど過ぎると、更に又その田村といふ同縣人の、課長だか部長だかゞ遣つて來た。丁度休みの日に當るとかで、彼は普通の和服を着てゐた。而して此人は柔和な、如何にも少しは上役らしい、鷹揚な態度と顔付とを持つてゐた。けれども見た所はどうしても、警部か軍人かの私服姿には違ひなかつた。

久野も、今度はさう驚かなかつた。が、心の底では、猶の事充分の警戒を解かなかつた。

座が定まつて挨拶が濟むと、田村氏はかう親しげに云ひ出した。

「此間は、署の者が参つて、色々お騒がせしたさうで、誠に相濟みませんでした。歸つてから同縣の方だと聞いたもんですから、そんなら私が参つて、御近付がてらお話を伺へば、少しでもお厭な思ひをおさせ申さずに濟むんでしたのに。」

「いゝえ。――」久野はどちらでも同じだと思つて、曖昧な返事をしてゐた。

「殊に越野の人だと聞いたものですから、急にお懐しく思つて、早速参上したやうな譯なんです。私はあの須賀川の者ですが、家内の親類があるものですから、開盛山へはよく参りまして、知合の者も大分多うがすよ。貴方はあの角の佐藤屋を知つてやせうな。」

彼は殆んど無意識に、語尾に故郷の訛りをさへ出し初めて、そんな事を云ふのだつた。

「えゝ〳〵。存じて居りますとも。あそこの主人とは、小供の中から知つて居ります。あれも身體か小さい癖に、投機つ氣の多い男ですなあ。」

私もそんな風に對手にしてゐた。出來るだけ打融けて、他意なさを示す事が、此際最も必要だと思はれたからである。

「あれが實は家内の叔父分に當りましてな。此間も十日ばかり宅へ來てゐましたよ。何だか又製絲場の方で穴を開けたから、低利資金を融通して呉れないかつて云ふんですがね。たとひ親類にしたところが、危なくつて滅多に他人にも口をきけませんや。あれにも困つちまいやすわい。」

「さうですか。人は極くいゝですがねえ。」

久野は苦笑して取返すやうに云つた。が、別に田村氏は、前の失言を氣にしてゐる樣子もなかつた。

それから二人は、そんな事を端緒にして、要するに何でもない故郷の話や、同郷の先輩の消息なぞを、取りとめもなく語り合つた。而して何等問題に觸れる事もなく、全く私人關係の交渉の中に、別れを告げて立去つた。久野はいつ田村が、探りを出すかと心持ちに、お終ひまで私かに警戒はしてゐたが、かうして殆んど何の蟠りもなく、故郷の噂だけで持ち切つて、歸つて了はれるとなると、少し當が外れたやうな落膽と共に、何となく眞とに一箇の訪問客として、心から親しく接してやらなかつた事を、少し濟まないやうにも思つた。

それで彼は田村氏が歸つた後、さう松田に話したところ、

「ふうむ。それこそ却つて食へないぜ。同縣人の誼を辿つて來る所は確かに手だね。お上もなか〳〵うまいなあ。さう漸層的に陣立を作つて來る所なんさあ。」

と、考へ深く首を傾げるやうに云つた。さう云はれてみれば、久野はなるほどさうかとも思つた。

兎もあれ、かう久野の周りに、二度まで警察の眼が光つては、彼も勢ひ臆病にならざるを得なかつた。若し嚴しく學校へでも云つて行かれて、危險分子として退校でも命ぜられるか、前途でも塞がれる事になつた日には、堪らないと思つた。其頃社會主義者の大峯氏の、著書を出してゐる或る出版屋へ、以後彼の著作を出すと聞かぬぞと云ふやうな、官憲からの警告が行つたといふ噂も文壇にあつたので、彼も若しそんな事になつてはこれから前途がすつかり暗になつて了ふと、小供らしく非常に心配したのだつた。而して外出の度に、時々後を振り返つては、尾行がゐないかと注意して見たり、角の交番で巡査に睨まれるのを、内心びく／＼心配したものだつた。退出時の散歩もすつかり廢した。たまに湯の歸りなどに、丁度七時にぶつつかつて、思はず門前に佇んでみたりする事もあつたが、すぐ何だか何處かの物陰に、例の人蔘色の外套を着た叔父さんが、ぢつと目を光らして立つて見てゐるやうな氣がして、愴惶と其場を立去るのだつた。——かうなると久野は全く意氣地はなかつた。

ところが或日の事、久野の此の意氣地のない態度を、根こそぎ覆して、再び彼の勞働者崇拜的傾向を、振ひ起すやうな事實に彼はぶつつかつた。それは或る一方の人々の、實際のプロパカンダを見たためであつた。

それもお湯からの歸りの事であつた。初冬の日の七時過ぎで、日はもうすつかり暮れて了ひ、寒い風の吹き起らうとする辻々には、もう退けて行く職工の姿も、疎らに歸り遲れた者のみが殘つて、おのづと足を急がせるべき頃だつた。久野は松田と一緒に、手拭をぶらりと下げたまゝ、家の方へ急ぐともなく戻つて來た。

すると其街通りが、砲兵工廠の塀につき當つた辻に、彼らは小さな群集の蠢くのを認めた。久野はそれを初め喧嘩の人だかりか、又はよく此の近邊で見かける、一種の大道商人の店を張つたのでもあらうかと思つた。それにしてはもう

短い日も、すつかり暮れた暗の中で、灯り一つ點してないのが變だつた。又喧嘩にしては餘りに動搖が少なかつた。彼らは何事か初まつたのかと思つて、急ぎ足に近づいて行つた。

見ると、其處の煉瓦塀を背に、一本の電柱を中心にして、二三人の青年が立つてゐた。而してそれを取圍んで、歸り遲れた職工たちが、十二三人も集まつてゐるのだつた。一見して、それは直ぐ何かの宣傳に違ひないと思はれた。しかも猶近づいて見ると、彼等の背にした塀には、恰も演壇の陣形を整へるやうに、左右に長いビラを貼つて、其各々には「資本家の横暴」「勞働者の一致團結、」と書いてあつた。而して更に電柱の面にも、「若し勞働者にして一度團結せば、金權の威力も何かあらん。」と貼紙されてあつた。

久野と松田とは、顏を見合せて驚いた。何といふ大膽な露骨な宣傳であらう。今迄さういふ人々の、路傍演說などいふ事は、屢々聞いてゐた事ではあるが、今は警戒が嚴重で、鳥渡それに類した行爲があつても、すぐ拘引され所罰されるのは知れ切つてゐた。しかも彼らはかういふ大道で、殆んど公然と集會を催ふしてゐる。何だか久野には、彼らがこの危險を敢てしてゐるのを、死をも賭してゐるやうに、空怖ろしく感ぜざるを得なかつた。人々の後ろに立つてゐた久野の足は、少し戰慄を覺えた。彼は逃げ去らうかと思つた。此間刑事の訪問を受けた許りでもあり、かういふ席に愚圖々々してゐて、うつかり警察に發見せられ、捲き添ひでも食つた日には、それこそ大變だと思つた。が、何だかその怖ろしい力が、強い興味となつて彼を抑へつけた。二人は息を殺すやうに、人々の後ろに小さくなつて、何をしてゐるのか見入らざるを得なかつた。

一人の黑い背廣服の男が、丁度其時演說をしてゐた。が、其演說は終りに近づいてゐた。內容は別に理論だつた事を云つてゐるのではなかつた。たゞ、彼は結論に近づいてゐたと見えて、熾んに言葉を励まして、金權の非を鳴らし、勞

働者の覺醒を促してゐるに過ぎなかつた。彼は右手の拳を固めて、打下すやうに左の掌に受けては、悲憤な語調を昂めて行つた。而して最後の一句を云ひ終つて退いた時、彼の額には汗が出てゐたらしく、懐中から手帛を出して拭つてゐた。外の場合と異つて、誰も拍手する者はなかつた。ただ隅つこに蹲つてゐた、もう一人の彼らの同志らしいものが、立つて來て其脊廣に握手をしながら勞を犒つてゐた。平常なら氣障に見える其行爲も、久野には其時鳥渡感動を與へた。松田も彼と顏を見合せたが、これは僅かに微笑を洩したゞけだつた。

其時もう一人の、粗らい飛白の着物を着た三十位の男が、恐らくは此の同志の首魁でゞもあるらしく、徐ろに前へ進み出た。彼は以前の洋服と違つて、ゆつくりした語調で、砕けた文句を用ゐて語り出した。

「……此間亞米利加にゐる友人から、向うの、此方でいへばパックとかポンチ畫報とでも云ふやうな、漫畫の雑誌を貰ひましたが、その第一番の口繪の所に、かういふものが書いてありました。それは『社會』と題しまして、丁度淺草の十二階のやうな建物の、幾つもの層に仕切られた室に、それ〴〵住んでゐる人をあらはしたものですが、勿論其一番上には、立派な着物を着て、血色よく肥つた金持らしい男が、美しい夫人――だか何だか解りませんが、兎に角美しい女と一緒に、立派な食卓について御馳走を食べて居ります。……而して其最下層の地下室には、諸君の如き勞働者が、ハンマアを握り鶴嘴を取つて、一生懸命に仕事に從事して居ります。而して其繪には傍題として、『どつちが天國に近いか』と書いて在りました。勿論これは平凡な漫畫家の、ごく平凡な皮肉に過ぎません。けれども私はそれを見た時、決して一片の皮肉だとは思ひませんだした。これが現在の社會の眞理だと思ひました。而して宗教家でない吾々は、この「どつちが天國に近いか」といへば、明に彼ら富豪こそ、天國に近い狀態に在ると、斷言して憚らないものであると思ひました。しかもそれは吾々の血と汗とを以て、築き上げられた十二階の階上に、平氣で住んでゐるのであります。而

して吾々は地下に、却つて『地獄に近い』生活を營んでゐるのであります。……」

併しこんな事を云ひ出した時に、丁度折惡しく、暗澹と曇つてゐた夜空から、時雨らしい雨粒がぽつり〳〵と落ち出した。群集の中には、ぽつ〳〵歸り出すものもあつた。彼は其樣子を見て、すぐ結論を急いだ。

「で、丁度惡い所へ雨が降り出しまして、甚だ殘念でありますが、私は何故こんなポンチを引合ひに出したか、一言申上げて今日の演説はやめに致します。私たちは今最下層に、下積みとなつて居られる諸君が、何故早くこの位置を、もつと自覺しないのかと云ひたいのです。…………今日は是で散會しますが、今有志の方に吾々の考へを書いた印刷物を差上げますから、どうぞ家へ歸つたら、よく讀んで考へて頂きたい。」

もう近所には手を出す人があつた。彼はそれに、懷中から出した一束の印刷物を、一部づゝ手渡しながら、

「これは今手元にたんとはないんですから、皆さんに悉くは上げられませんが、貰つた人はどうぞ大切に見て下さい。」

と云つて、一々叩き付けるやうに、力を籠めて手渡すのだつた。

群集は貰ふ人もあり、貰はぬ人も在つた。而してだん〳〵散じて行つた。彼の手には一二部しか殘つてゐなかつた。

久野は貰はうか貰ふまいかと、暫らく躊躇してゐた。すると其中に傍から出た一人の男がそれを貰つて行つて了つた。

久野は思ひ切つて歸らうとしたが、何か一言云ひたい氣が胸に滿ちてゐた。

と、彼の傍にゐた一人の內氣らしい若い勞働者が、何だか哀れつぽい物乞ひでもするやうな口調で、

「私にも一つ下さい。初めから演説を聞いてゐたんですから。」

と云ひ出した。演説をした男は、ちつと其方を見たが、自分の手にはもう印刷物がなかつたので、傍の同志の方を向いて、

「おい君。君の方にもう一二部無いか。」

と云つた。幸ひに一二部そつちに殘つてゐた。彼はそれを與へた。まだ一部殘つてゐた。久野は斷念して歸りかけやうとしながら、其樣子を見てゐたが、急にそこへ引返して來て、默つて印刷物を貰つた。貰つて了ふと惡い事でもしたやうに、急に四邊を見廻して急ぎ足に去つた。

松田は十間ほど行つた所に、彼の追ひ付くのを待つてゐた。

「どうしたんだ。」

彼は久野に訊ねた。

「うむ。何か貰つて來た。」

「さうか。」

雨は大粒になつて、ぽた／＼落ちて來た。風がさつと久野の昂奮した頬を吹いた。二人は並んで歩いてゐたが、突然久野は「うゝつ」と呻つて、どん／＼前方へ驅け出した。それは雨に頭を叩かれるのを避けたのでもあつたが、彼の胸の中の昂奮を、さう云ふ形で發散させようとしたのでもあつた。

彼は息を切らして、家へ驅け込んだが、其儘机の前にどつかり座つた。呉れた印刷物を見ると、それはずつと前の「人民新聞」だつた。

やがて松田も、あとからまじり／＼笑ひながら歸つて來た。

「どうしたんだ。」

「うむ。どうもしない。」

「やつてやがつたな。」

松田もさすがに感動したらしく、昂奮した縦皺を眉間に立てゝ、かう云ひながらその「人民新聞」に見入つた。

「うむ。やつてやがつたな。よくあんな大膽な眞似が出來るね。」

久野は感嘆するやうに答へた。

「そこらにゐる、刑事に鳥渡お見舞ひを受けて、急に悄氣たりする弱虫とは違ふさ。兎にも角にも彼らの態度はえらい。」

さう云はれると、久野は答ふる言葉もなかつた。——そこで彼らは別々に、昂奮した顏を見合せて默つてゐた。

翌日から久野は、又例の散歩を初めた。勞働者と見れば、お湯で會つても親しげに話しかけたりした。時折は山二バーなどに行つて、醉つて「兄弟」なぞと盃をさしたりした。

「又勞働者に對する、博大な愛が復活したね。世間の運動の感化かい。」

松田はその樣を見るとから冷かした。

「何でもいゝさ。僕はたゞ彼らが好きなんだ。あの主義の連中のやうに、外から煽動したり教唆したりする氣はないが、せめて内部から彼らを愛する事に依つて、一人でも覺醒させる事が出來れば、それで滿足するんだ。」

「至極結構だね。まあ精々山二バーあたりで、電氣ブランと一緒に『愛』のコップ賣りをするさ。その中に勞働者たちが、聞傳へて、今に君ん所へ金を借りに來るだらう。それも吉原あたりへ行く金をね。」

「そしたら喜んで貸してやるばかりさ。」

久野は松田に冷笑されても、決して其所信をすてまいと決心した。

それから一と月ばかり經つた或夜の事だつた。久野は三度び突然の訪問者に依つて驚かされた。又お上さんが入つて來て、事ありげにかう云ふのだつた。

「久野さん。又貴方ん所へお客さまですよ。」

「誰です。又小石川署の人でゝもあるんですか。」

「いゝえ、さうぢやないやうですよ。どこかの職工みたいな、少し年を取つた方ですが、是非貴方にお目にかゝりたいんですつて。」

「名前は何て云ふ人ですか。」

「それを伺つても仰有らないんですよ。會へば解るつて。——」

「さうですか。では行つて見ませう。」

と、久野は、それが見知り越しの職工か、何處からか來た使ひ者だらうとは思つたが、少し氣味が惡いやうな氣がして、すぐには立上らずに、判斷を乞ふ如く松田の方を見返つた。

併し松田はそれにこんな答しかして呉れなかつた。

「さあ、いよ〳〵君の愛の反響が在つて、勞働者が訪ねて來たのかも知れないぜ。君がどこかで醉拂つて、『おい兄弟、俺はこゝにゐるから云ふ者だから、閑があつたら遊びに來て呉れ給へ。都合さへよければ金位貸すよ。』とか何とか、大

きい事を云つて置いた連中ぢやないか。」

「まさか。」

事實さういふ事もないとは限らないと、久野自身も思つたが、そんな記憶は更になかつた。で、何よりも曾つて見るにしくはないと、思ひ直して店の上り口へ出て行つた。

見ると其處の上り框に、橫向きに腰をかけてゐるのは、色の黑い膩しさうな四十男だつた。灯りの加減で、顏はよく見えなかつたが、その白つぽい縱縞の筒つぽの袷を着て、こゞみ加減に待つてゐる姿には、久野はまるで覺えがなかつた。

「私の所へおいで下すつたといふのは貴方ですか。」

久野は立つた儘で聞いた。すると其人も慌てゝ立上つて、眞正面に向き直つて、日に焦けた顏を灯りに照らされたまゝ、齒ぐきを出して笑つて見せた。而して物倦い聲で云つた。

「あゝまあちやん。あたいだよ。」

久野はさう幼な名を呼ばれて、吃驚して其顏を見直した。

「あゝ代叔父さんですか。そんならさうと早く云つて下さればいゝのに、僕は又誰かと思つた。さあお上んなさい。」

久野は思惑が外れた落膽や、思ひがけなく叔父だつた安心やら、大抵直ぐ推察はついてゐるが、どんな用向だらうといふ心配やら、いろ／＼な感情を一時に浮べて、併し久しぶり會つた叔父に、惡い顏だけは見せないやうにしながら、から座敷へ招じ上げた。

「そんなら、ほんの鳥渡でいゝんだから。——」

かう云ひ乍ら、代叔父は上つて來た。而して彼は松田のゐるのを見て、鳥渡逡巡するやうな様子をしたが、兎も角も部屋へ入つて、そこに出された座布團を、ずつと避けてきちんと坐つた。

「僕の叔父さんだよ。――これは松田といふ僕の友達です。全く兄弟みたいにしてるんですから、遠慮なんぞしないで下さい。」

久野はかう二人を紹介した。叔父は馬鹿叮嚀に長い御辭儀をした。それが如何にも、低い境遇にゐた人の、禮儀といふもの丶考へ方を表はしてゐるやうで、久野はい丶氣持がしなかつた。併し松田はひよいと頭を一つ下げたきり、別に恐縮もしない顔付で、前に一度位ゐ久野から話もあつたらうが、それもすつかり忘れてゐたので、久野にこんな境涯の叔父が在つたのかと、興味を以てまじ／＼眺めてゐた。彼とても叔父の長い御辭儀を、昔氣質の朴直さから來たものとは取つてゐないらしかつた。

「代叔父さんには随分會ひませんでしたね。もう七八年にもなりませうか。」

紹介が終ると、久野はかう云つて、ぢつと叔父の顔を見凝めた。

「そんなになりますかなあ。――尤も前に開盛山で會つた時は、まあちやんは中學へ行つてゐたからなあ。」

かう云つて、實際は考へるでもないのに、其間の推移を考へるやうに、首を傾げた叔父を見てゐると、久野は自づと其時々の、叔父の姿が思ひ浮んで來た。それにしても何故、此處へ來て此の雰圍氣の中にゐながら、叔父の事を思ひ出さなかつたらう。自分の肉親の中なる勞働者、それを忘れてゐたのが、久野自身に取つても不思議だつた。殊に代叔父と砲兵工廠とは、自分の嘗つての記憶の中で、切つても切れない連絡が在つたのではないか。而して久

代叔父、――久野の父の弟である代吉叔父は、どういふ譯か父とも違つて、さう教育も受けないで了つた。

野の生れた時分から、彼の家の厄介になつてゐた。それが或時食客生活を心苦しく思ひ、一奮發する氣でゞもあつたのか、それとも生れ故郷の東京へ、たゞもう一度出て來たい考へからか、どつちだつたか解らなかつたが、兎に角久野が子供の時分に、當時信州の上田にあつた家を飛び出して、東京へ來たものであつた。

久野は子供ごころにも、その代叔父失踪の日の事が、はつきり燒きついて殘つてゐた。それは代叔父が、一つは退屈紛れに、よく自分だちの對手をして、何かと遊んで呉れたために、特別に悲しい記憶となつて止まつてゐたのかも知れない。叔父は或日いつものやうに釣りに行くと云つて、餌筒を提げて出たつきり、夕方になつても歸つて來なかつた。家では格別心配もしないで、晩になつたら歸つて來るだらうと思つてゐたのに、彼は十時過ぎて、門を閉ざす頃になつても歸つて來なかつた。家では心配し出した。が、もう深夜の事ではあり、どこかへ晩くなつて泊つたのかも知れんなどゝ氣休めを云ひ合つて、寢についたが、明くる朝になつても歸つて來る樣子がなかつた。それで愈々大騷ぎになつて、早々から、人を集めて四方を探したけれど、叔父の行方は知れなかつた。たゞ町の釣師のやうな人が、ひとり確かに叔父の姿を、五百淵の方へ行く堤の上で見かけたと云ふものが在つたといふ報告だつたが、それとても確證が在る譯ではなかつた。而して其日一日中、警察へも搜索願ひを出し、手を分けて探したけれど、皆目手がゝりも得られなかつた。當時恐らく七歲位だつた久野も、ひつとしたら叔父を見付けて、功を樹てる事も出來ようかと考へ、そつと千曲川の岸の方まで行つて、川上川下などを見渡したけれど、白い風が磧蓬を吹き、蘆の葉を斜に戰がして、その上に黃ばみかけた午後の日がぼんやり差してゐるのを見ると、すつかり絕望して歸つたものだつた。で、其日の夕方頃はとうとう叔父も、どこかで釣の最中、いつもの呑氣さで居眠りでもしながら、淵の中へ陷り込んだに違ひない、而して死骸が遠く川下へ流れ去つたに違ひないといふ、悲しい判定が下されて了ふに至つた。久野も悲しかつた。いつも夕方門の所に遊ん

でゐると、夕燒の中から黑い姿を現はして、一日の收獲にこ〳〵笑ひ乍ら、鯰の番なぞを振つて見せて、歸つて來るのが常であつた叔父も、もう永久に歸つて來ないのかと思ふと、小供ながら暗く淋しい思ひに閉ざされずにはゐなかつた。けれども彼は、まだ叔父が死んだとは考へられなかつた。彼には其朝鰻筒を提げて、笑ひながら出て行つた姿が、あり〳〵と心に殘つてゐて、どうしても歸つて來るとしか思へなかつた。併し一家の人々は、最惡の場合を豫想して、その用意までしてゐた。が、さうは誰も悲しんではゐなかつた。

　すると二三日經つて、拙い字の簡單な端書が、東京から屆いた。代叔父が默つて出奔したのを、報告旁々詫びて來たのである。一家の人たちは怒つた。が、又腹立ちながらも安心して、やがて其搜索中の珍談などが笑ひ話になつて了つた。而して代叔父は別に呼び戻される迄もなく、まんまと東京の人になり了せた。たゞしさうなつた以上、家では一切お關ひなしと云ふ事だつた。――久野は其話を聞いた時に、叔父があの朝出て行つたなりで、釣道具を肩にした儘、玩具のやうな汽車の窓から、沿道の景色を眺め〳〵行つた樣を想像した。而して東京であの鰻筒をどうしたらうと思つた。

　それから暫らく經つと、叔父が東京で仕事がないので、とう〳〵砲兵工廠へ入つたといふ知らせが在つた。その水戶樣のお邸內へ、建てられた大きな煉瓦作りの事は、老母も知つてゐた。而して時々當時流行の精巧な木版畫の東京名所圖なぞを出しては、孫の久野に「こゝが代吉の出てゐる所だよ」なぞと敎へた。それには矢つ張り今のやうに、煙突から煙の吐いてゐる工場の姿が鏤められて在つた。久野はひどく立派な所だと思つてゐた。それつきり叔父は、ずつと暫らく消息も絕つてゐたし、勿論家へ歸つて來る事なぞはなかつた。

　が、其中に或る出來事で、久野の父は急死して了つた後に、今度は別な方の鄕里、彼の母方の里の方へ一家が移って行つてから、恐らくは老母の心遣ひでゝあつたらう、一年に一度は休暇を取つて家へ歸つて來るやうになつた。

或る輝かしい北國の夏の朝、久野は又何年か振りで、代叔父の日に焦けた顏を見た。彼ももう小學校へ行つてゐて、少しは耻しがる心理も覺へる年頃ではあつたが、すぐ永い年月の隔りを越えて、叔父の岩疊な、併し靜脈の張つた手に、甘へてたぐりつくやうに馴れ親しんだ。叔父は其時に土產として、當時行はれてゐた卷煙草に景物に付いてゐた、色刷りの名所や風俗や動植物や兵隊や、花牌やトランプやのカードを何百枚となく持つて來て吳れた。裏には村井兄弟商會といふマークがついてゐた。

「まあこんなに、こんなに叔父さん煙草喫んだの。」

久野は驚いて貰ふと直ぐ訊いてみた。

「いや、叔父さんは少しも喫まないんだよ。それはみんな工廠の仲間が、吸つてゐるのを貰つて溜めたんだよ。まあ坊にやらうと思つてな。」

久野は嬉しかつた。而して叔父の工場仲間が、工場の休みの時間に、丁度自分たちが遊步の時間には、運動場へ出て遊ぶやうに、どこか廣場へでも集つて、みんなが一盛にヒーローだのピンヘツトだのを喫む有樣を心に描いた。よつぽど澤山の人數が、よつぽど澤山喫まなければ、代叔父がいくら一生懸命貰つて步いても、こんなに澤山札が溜まる筈はないと思つたりした。

其外に叔父は家へ、切通しの干物屋から買つて來た佃煮だの、田舍には珍らしく香ばしい海苔だの、それから特に老母の註文で、空也の菓子だのを持つて來た。それで一家のものはせめてもの東京の匂を嗅いだ。其代りには叔父は、きつと歸りに幾何かの小遣と、父の着た古い洋服なぞを持つて歸つた。

「これだけあると大變助かりますよ。此頃は器械の油注ぎの方へ廻つてるんで、衣物が汚れて困りますからね。」

こんな禮を母に云ひ〲、貰つて行くのを久野は聞いてゐた。

「油注ぎつて、さういゝ役ぢやないんだね。」

久野は叔父がゐない時に、そつと母に訊いてみた事があつた。

「あゝ代さんは教育がないから、どうしても出世が出來ないんだよ。」

それを聞いて小供ながらも、何となく輕蔑するやうな心持になつて、見下したやうな我儘も、云つて差支ないやうな氣さへしたのだつた。とは云へ、後で解つた油注ぎの役の實際の位置よりは、ずつとまだ高く評價してゐたけれども、かういふ年が三四年つゞいた。而して其中に、代叔父の方から、ぱつたり來なくなつて了つた。それが二三年は續いた。忙しくて暇が貰へないのだらうと、家の人たちも推測して、殆んど氣にもかけず忘れ果てゝゐた。

其次に、突然代叔父が現はれた時は、彼はひどく器量の惡いものになつてゐた。叔父は家の知らぬ間に、二人の連れ子まである後家と結婚して、それに追ひ使はれてゐた。話を綜合してみると、それは可なりな悍婦で、代叔父の人の好いのに乘じ、二人の子まで背負つた儘、まんまと擒にして操つてゐるに相違なつた。それも友達のお古か何かを、友人も合意の上で、うまく押付けて行つたものらしく思はれた。いづれにもせよ代叔父の報告は、もう少しは人間の關係も解つて來た當時の久野が、竊み聞くともなしに聞いた所によつてではあるが、可なり要領を得ないものだつた。たゞはつきり家の者にも解つたのは、そのお上さんが產後の病氣で寢てゐる事、家には今一錢の金もない事、困るから產婆の費用始め、藥代生活費まで含めて、百圓ばかり用立てゝ貰へまいか、百圓が駄目ならさしあたり五十圓でもいゝといふ事であつた。

其の頃は久野の家も、困窮の極度に達してゐる頃だつた。何にしろ貧乏な教師の父に死なれて、僅か許りの貯へや不

動產を元にして、一人の働き手もなしに十年もの間、やうやく其日々々を糊塗して來た母の心労や、それを知らたのない家產の狀況から云つても、代叔父がそんな事を云つて來られる筈はなかつた。けれどもすつかり困り込んで、弱つて了つてゐる代叔父の顏を見ると、老母が默つて見てゐられなくなつた。老母が調達してやれと云ひ出しては、嫁たる母も同意しない譯には行かなかつた。家ではやむなく子供の教育費として、母がどんな火の出るやうな場合でも、必ず取つて置からうと思つた公債を、一枚手離して其中から百圓を割く事になつた。老母も廢藩置縣の折に、知行の代りに貰つた公債は、士分の保證のやうな氣がしてゐるので、泣きの涙で手離したくなかつたが、可愛いい――少し痴愚な――子たる代叔父のためには是非もなかつた。代叔父はそれを貰ふと、頭を疊に擦りつけるやうに感謝して、東京のお上さんの許へ歸つて行つた。

が、暫らくたつと彼は、又三十圓ばかり請求して來た。それも老母のお聲がゝりで送つてやつた。又半年ばかりたつたら、今度は五十圓程呉れといつて來た。今度は自分が病氣で、又止むを得ぬ借金のために、身動きが取れぬといふのだつた。それも併しもう後は遣らぬと固く決心されて、家から直ぐに送られた。けれども更に又一年ばかり經つと、今度はお上さんと別れるに就て、二百圓ばかり是非入用だから、それさへ在つたらもう厄介拂ひも出來れば、元氣よくもとの獨身の生活に歸つて、充分働けるからと云つて來たので、家でも金額は大變ながら、さうなつて了へば安心だといふので、もう公債を賣つた金も殘り少なだつたので、わざ〳〵田舍の小さな地面を抵當にまで入れて、町の大きに吳服店から金を借りて手渡したのだつた。ところがそれを持つて歸つてから、鳥渡安着と御禮の手紙が一本あつたきり、其後の別れ話の顚末は、うんともすんとも云つて來なかつた。此方では大抵安心してゐたものゝ、餘り樣子が變なので、東京にゐた知人に賴んで、そつと樣子を覗つて見て貰らつたところ、前の家はとうに疊んで移つて了つたが、まだその女と

は別れられずに、巣鴨の方へ越して行つて、駄菓子屋か何かを營んでゐるとの事だつた。それはそれでもよい。といふのが家の意見だつた。が、それならばそれで、嘘を吐いたのが憎らしい。——と母はよく云つた。それには老母も同感で、今度といふ今度こそ殆んど愛想がつきたやうに見えた。

それつきり家とは絶えた形になつてゐた。——

その代叔父が、今久野の眼前にゐて、昔しながらの人の好ささうな、だらりと垂れ勝ちな瞼と、それだけに黄に濁つて了つて、狡げにさへ見える眼を、しよぼ／＼させてゐるのだつた。

「で、何か御用ですか。」

と、どうせ久野は此の叔父の事だから、碌な事ではあるまいと思ひながら、やゝともすると思ひ出にまつはる感傷を拂ひのけて、わざとぶつきらぼうに訊ね初めた。

「えゝ。まあちやんに少しお願ひがあるんだが、今日は御邪魔ぢやないでせうね。」

叔父はぢいつと下を向き乍ら、逡巡するやうに云つた。

松田は様子を察して、「鳥渡失敬するよ、」といつたまゝ、此時店の方へ出て行つた。それを見送つた久野は、何となく吻と息を吐くやうに、再び問ひかける事が出來た。

「お願ひと云ふのは、何か金の事でゝも在るんですか。」

彼は先手々々と出て、しかも出來るだけ叔父に、早く用件を切り出させようとするのだつた。

叔父ももうさうは因循してもゐなかつた。が、例に依つて、云ひ方の滯り勝ちなのと、語調の愚圖つぽいのとは、人物を小さく可哀さうに見せるよりは、低く腹立だしさを感じさせない譯に行かなかつた。彼はかう語り出した。

「まあちやんにこんな事をお話しするのは、大變お話しにくい事だが、實はそのお金の事で、是非此際五十圓ばかり、入用な事が出來つちまつたものだから、一昨日行けた義理ぢやないんだけれど、開盛山の家の方へ行つて、お金を借りて來ようと思つて出掛けたんですよ。ところが家ぢやあいつの間にか、北海道の方へ越して了つて、今ぢや跡には立川さんつきり、（立川と云ふのが母方の男だつた。）誰れも賴る者はゐないんでせう。それで仕方なしに立川さんに話して、一晩泊めて貰つた上、旅費と金の一部分だけを、お借りして歸つて來たんだけれど、歸つてから北海道へ手紙を出して、貸して呉れるやうに賴んではやつたが、猶まあちやんからも、云つて、此方の事情を手紙で賴んで貰へまいかと思つてね。それで立川さんで聞いて、お前さんが此方の大學へ來てゐるといふんで、お願ひしようと訪ねて來た譯なんですよ。」

「さうですか。それぢや叔父さんは家か先々月向うへ越したのを、まだ知らなかつたんですね。確に通知した筈なんでがなあ。それとも忙しさに取紛れて、まだゆつくりでいゝと思つて、怠つてゐたのかも知れませんがね。」

「知らずにゐたんだよ。それでわざ／＼出掛けて馬鹿を見ちやつたのさ。」

「それはお氣の毒でしたね。まさか家でも匿してゐた譯ぢやないでせう。」と久野は其反對な事を考へながら、「それにしてもよく、僕の住所が解りましたね。此處へ來てゐる事は、立川でも知らなかつたでせうに。」

と、反問せざるを得なかつた。家では、叔父と下らない交渉などがあつては、勉強や出世の妨げになるといふので、叔父には私たちの住所を、知らせない筈になつてゐたからである。

「それは大學へ行つて聞きました。すぐ敎へて呉れましたよ。」

　それには久野も少々啞然とした。もうかうなつては仕方がなかつた。

「さうでしたか。――で、その金の要る事情といふのは？　叔父さんは此の砲兵工廠に出てゐるんでしたつけね」と久

久野はさう云へば、少し前に其處に職工の淘汰があつて、六千人が失職した話があつたので、叔父も其一員ではなかつたかと、ふと思ひ出して聞いてみた。

「いや、あたいはもうとうに此處は廢めましたよ。而して暫らく新橋驛の方へ、車輛の油さしに出てゐたんだが、それも年を取つて來ると、汽車は危險だといふんでやめて了ひました。一つはそれで今困つてゐるんですよ。」

「矢つ張り此間の時、皆と一緒に廢めさせられたんですか。」

久野は少しでも叔父を、同情されるやうに大きく考へたかつた。

「うむ。まあさうですね。――だが、そんな事は先あ兎も角として、實はお金の要る事情といふのは、ほんとに恥を話さなければならないが、家の家内の連れつ子の奴がね。今年もう十八になる厄介ものだが、こいつが此間まで給仕に出てゐた社で、百圓ばかり現金を盗んだんですよ。而してそいつが見つかつて、やめさせられたのは仕方がないとしても、その百圓といふ盗んだ金を、辨償しないと警察沙汰になるといふんで、家内が泣いてわたしに頼むんですがね。その又百圓の金を、少し家へでも持つて呉れば兎も角、彼奴は悪い仲間と一緒になつて、すつかり惡所で費ひ果したといふんですから、何とも手のつけやうがありません。で、いつそ暗い所へやつて了はうかとも思ふんですが、それぢや出來心でついした當人が可哀さうでもあり、家内の嘆くのも心配だし、又家から繩つきを出すのも名にかゝはると思ひましてな。こゝでお金をどこぞから貸して頂いて、當人の身を救つてやつたら、當人も難有く思つて、心を入れ換へませうし、さうすれば又當人の腕次第に依つて、少しづゝでも其金をお返し出來ると思ふんですが、どうでせう。一つさう家の方へもよく、まあちやんから云つてやつて、すぐ調達して貰へますまいかな。百圓とは云つても、どうせ示談で返却するとすれば、少しは負けて貰ふつもりですから、出來なかつたら七十圓でも、五十圓でもいゝんですがね。一つま

あちやんの手で、お救け下さるやうにお願ひ致しますよ。」

代叔父はから語り終つて、自分の話が對手に、どれだけの效果があつたか測るやうに、下を向け勝ちだつた顏を、徐ろに上へあげて見た。と、話の眞僞を分ち兼ねて、ぢつと燃えつく程見凝めてゐる、久野の視線とぱつとかち合つた。すると叔父はどぎまぎして、慌てゝ眼を外らして了つた。そしてへゝゝゝといふやうな、狡猾な愛想笑ひを一つして、

「どうも困つた奴でしてな。」

と付け加へた。

「それはお困りでせうとも。」

久野は取り敢へずかうは云つたが、まだ半信半疑だつた。而して叔父の態度その物にも、表面は可なり叮嚀に出てゐるやうだが、矢つ張り一つ私を動かして搦手から攻めてやれといふやうな、甘く見縊つたやうな所があるやうに思へてならなかつた。

「で、其人の出てゐた會社と仰有るのは?」

久野は突如として思ひついたやうに聞いた。突嗟に査問的に變つたのである。

「それは、あの千住にある染物會社なんですが。――」

叔父は果して少しおど〳〵と答へた。

「何といふ名の會社なんです。」

「えゝと、それは爲渡忘れましたが、何とかモスリン會社とか云ふんで、家へ歸つて聞けば解りますが。――それは兎も角、お知らせしますから、どうぞ何分とも北海道の方へ、よろしく云つてやつて下さい。」

さう云はれて見れば、此上疑ふのは悪いやうな氣もすると共に、久野は不本意ながら、頼みの旨だけば聞いてやらねばたらなかつた。

「宜しうございます。よく云つてやりませう。だが、兄もまだ就任したばかりで、果して快く承知するかどうか解りませんがね。兎に角云つてやる事はやつて見ませう。」

「さうですか。難有うございます。」

と、叔父はそれを聞くと、殆んど他人同志のやうに頭を下げて、それから更に調子を低めて云つた。

「それと一つこれこそ耻知らずのお願ひですが、今日は巣鴨から此處までやつと一枚の切符で來たやうな譯で、電車賃と云つては何ですけれど、差當りの米代として少々ばかり。まあちやんから拜借が願へますまいか。七圓か五圓で結構なんですが、彼方からその金が參りましたら、すぐお返しする事に致しますから。――」

久野はとうとう底を割つたと思ふと同時に、もうすつかり北海道からの金を當にして、それで自分の小遣を借りて行つたのを、返さうとしてゐる心懸けに啞然とした。低い境遇にゐる間に、いつの間にか染みこんだ、さういふ下手に出てゐながら、知らずしらず威嚇するやうな、圖々しい强請の態度を今更ながら情けなく思はざるを得なかつた。

一彼の前にはもう、困窮してゐる、同情すべき勞働者――しかも肉親の關係ある、――は無かつた。たゞ何だか憎らしいやうな、狡い下層民根性だけが在るやうに思つた。而して事實の如何にもせよ、かう云ふ根性があるからには、露も同情する價値がないやうに思はれた。彼は其實感に壓倒されながら、叱咤するやうにはつきりと、

「それはお氣の毒ですが、お斷り申します。今少しも持ち合せがございませんから。」

と云つたが、少しそれでは無情過ぎると自分でも思つて、申譯のやうに嘘を云つて了つた。

「――先刻の男でもゐれば、少々借りて上げる事も出來るんですがね、僕は學費が少ないもんだから、月半ばにはもう少しもなくなるんです。」

「いや、たつてと申すんぢやございません。そんなら失禮しました。何分どうぞ北海道の方へはよろしく。」

叔父はかう云つて、再び叮嚀に頭を下げた。

「えゝ。――」

と久野は簡單に受けただけで、内心では、代叔父がかうは云つて來たが、どうだか眞僞の程も知れないから、いゝ加減にあしらつとけと書く心組みをしながら、禮を返したのだつた。叔父が電車賃を貸せと云つて、無いと云つたらすぐ斷念したのも、何だか行きがけの駄賃に、鳥渡鎌をかけてみたやうな氣がされて、不快でない事もなかつた。

久野は叔父が出て行つた、店先の暗を見凝めながら、今はうまく厄介拂ひをしたとしか思はなかつた。けれども叔父が正に勞働階級の一員であり、その困窮に對して彼は、平常無條件に同情を持つてゐる筈だと考へると、今の此の實感が、甚だ理想と矛盾してゐるのを感ぜざるを得なかつた。

兎に角、彼は頭や胸がむしやくしやして來たので、急いで部屋の帽子を取ると、戸外へぱつと飛び出した。而して一杯酒でも飲まうと思つて、近所の行きつけのバアへ飛び込んだ。すると其處には、思ひがけなく松田が酒を飲んでゐた。

「やあ、濟んだかい。まあ此處へ來いよ。多分君も來るだらうと思つて待つてゐたんだよ。――どうしたい、用件は。」

と、彼は幾らか醉つてゐるらしく、元氣よく迎へるやうに云つた。

「うむ。片がついた。金を貸せつて云ふんだが、餘り蟲がよ過ぎるから斷つてやつた。却つてさばさばしたいゝ氣持だつた。」

久野は少し陰鬱な顔で答へた。

「さうか。では君は金を持つてゐなかつたのか。」

「いや、持つてゐたさ。來月まで延ばせる授業料を十五圓。」

「ふうむ。それでも貸さなかつたといふのだね。どうしてだい。」

「貸したくなかつたからさ。」

「うむ。よし〳〵。それでこそ君だ。」と松田は盃をぐつと飲み干して云つた。「君も進步したよ。それぢやまさかにその肉身の勞働者にも貸さなかつた金で、此處らの緣も由緣もない勞働者諸君を、潤さうなんて氣は起すまいな。君の博大な愛は足許から、僅かな實感ですぐ毀れて了つたんだからな。何にしても萬歲だ。そんな安手なデモクラティック・センチメンタリズムなんぞ棄つてちまへ！　それよりか純粹なラヴ・ストーリーでも書いた方が、まだいいや！」

久野は併しそれでも、持たないよりはいゝとか、何かの爲になるとか云ひたかつたが、そんな事を云つたら、更にどやされると思つたので、心弱くも默して了つた。而して內心ではもうすつかり松田に首が上らなかつた。

それから一二月經つと、久野だけが再び本郷の下宿へ立戻つた。（大正九年三月）

或賣笑婦の話

徳田秋聲

この話を殘して行つた男は、今どこにゐるか行方もしれない。しる必要もない。彼は正直な職人であつたが、成績の好い上等兵として兵營生活から解放されて後、町の料理屋から、或は遊廓から時に附馬を引いて來たりした、これは早朝、そんな場合の金を少しばかり持つて行つた或日の晩、緣日の植木などをもつて來て、勝手の方で東京の職人らしい感傷的な氣分で話した一賣笑婦の身の上である。

その頃その女は、すつかり年期を勤めあげて、どこへ行かうと自由の體であつたが、田舍の家は母がちがふのに、父がもうゐなくなつてゐたし、多くの客の中でどこへ落着かうといふ當もなかつたので……勿論西の方の產れで、可也な締りやであつたから、倉敷を出して質屋へあづけてある衣類なども少くなかつたし、今少し稼ぎためやうと云ふ氣もあつたので、樓主と特別の約束で、いつも二三枚目どころで相變らず氣に向いたやうな客を取つてゐた。

その客のなかに、或私立大學の學生が一人あつた。彼は揉みあげを短く刈つて、女の羨しがるほどの、癖のない、たつぷりした長い髪を、いつも油で後ろへ撫であげ、いかに田舍の家がゆつたりした財産家で、また如何に母親が深い慈愛を彼にもつてゐるかと云ふことを語つてゐるやうな、贅澤でも華美でもないが、どこか奥ゆかしい風をしてゐた。勿論年は彼女より一つ二つ少いと云ふに過ぎなかつたが、各階級の數限りない男に接して來た彼女の目から見れば、それはいかにも乳くさい、坊つちやん／＼した幼な青年に過ぎなかつた。

初めて來たのは、花時分であつた。どこか花見の歸りにでも紛れ込んだものらしく、二人ばかりの友達と一緒に上つて來たのであつたが、三人とも淺草で飲んで來たとかいつて、いくらか酒の氣を帶びてゐた。彼等は彼女の朋輩の一人の部屋へ入れられて、そこで新造たちを相手に酒を飲んでゐたが、彼女自身はちよつと袿を著て姿を見せたゞけで……勿論どんな客だかといふことは、長いあひだ場數を踏んで來た彼女にも、淡い不安な興味で、別にこて／＼白粉を塗るやうなこともする必要がなかつたし、その時は少し病氣をしたあとで、我儘の利く古くからの馴染客のほかはしばらく客も取らなかつたし、初會の客に出るのはちよつと面倒くさいといふ氣もしてゐたので、氣心を呑込んでゐる新造にさう言はれて、氣のおけないやうなお客なら出てもいゝと思つて、袖口の切れたやうな長襦袢に古いお召の部屋着をきてゐた其の上に袿を無造作に引つかけて、その部屋へ顏を出して行つたのであつたが、鳩のやうな其の目はよく其の男のうへに働いた。

「ちよい／＼こんな處へ來るの。」

「いや、僕は初めてだ。」

「お前さんなんかの、餘り度々來るところぢやありませんよ。」

彼女はその男が部屋へ退けてから、自分で勘定を拂はせられて、素直に紙入から金を出してやるのを、新造に取次いだあとで、そんなことを言つて笑つてゐたが、男は女に觸れるのをひどく極惡さうにしてゐた。

「今度來るなら一人でくるといゝわ。あんな取播なんかつれて來ちや可けませんよ。」彼女はまたそんな事を言つて、これも其の男に觸れるのを遠慮するやうにしてゐた。

「それあ何うしたつて、こんな處にゐるものには、惡い病氣がありますからね。不見轉なんか買ふよりか安心は安心だけれど……。」彼女は幾分脅かし氣味で、そんな事を話したが、男が彼女のこゝへ陷ちて來た徑路などを聞かうとして、色々話しかけると、若い癖にそんなことは聞かなくともいゝと言つた風で、笑つてゐた。

しかし何のこともなかつた。朝歸るときに、いつも初めての客にするやうに肩をたゝくやうなことも、わざとらしくて爲る氣がしなかつたので、たゞ「思出したら又おいでなさい」と、笑談らしく言つたきりであつた。

それから其の男は正直に二三度獨りでやつて來た。そして馴染むにつれて、お互に身の上話などするやうになつた。女は別にその男の來るのに、特別の期待をもつた譯ではなかつたが、部屋のあいてゐる時などには、ふと思出すこともあつた。むかし娘時代に、田舍の町で裁縫のお師匠さんに通つてゐる頃、きつと通らなければならない、通りの時計屋の子息に心を惹着けられて、淡い戀の惱みをおぼえはじめ、その前を通るとき、又は思ひがけなく往來で、行合つたりした時に、顏が紅くなつたり心臟が波うつたりして、夜枕に就いてからも角刈の其の丸い顏が目についたり、晝間針をもつてゐても、自然に顏が熱したりした。勿論言葉を交す機會もなかつたし、そんな機會を作らうとも思はなかつたから、單純に美しい幻として目に映つたゞけで、微かなその戀の芽も土の下で其のまゝ枯れ凋んでしまつた。彼女の生家は、町でちよつと名の賣れた料理屋であつたが、その頃から遙かに異性といふものに目がさめはじめると同時に、同じ

やうな戀の對象がそれから夫へと心に映じて來たが、だらしのない父の放蕩の報ひで、店を人手に渡したのは其から間もなくであつた。で、家名相當の縁組をすることもできなくて、今のやうな境涯に陥ちることになつたのであつたが、ちやうど其の時分の淡い追憶のやうなものが、彼の大學生によつて、ぼんやり喚覺まされるやうな果敢ない懷かしさを唆られた。

彼は飲むといふほどには酒も飲まないし、どこか女に臆するやうな樣子で、町に明りのつく時分獨りで上つて來たが、忙しいときなどは、朝客を歸してから部屋へいれて、一緒に飯を食べることもあつた。晩春の頃で、獨活と半ぺんの甘煮なども、新造は二人のために見つくろつて、酒を白銚から少しばかり銚子に移して、銅壺でお燗をしたりした。水桶だのお鉢だの、こまぐ\した世帶道具が一切そこにあつた。女は立膝をしながら、割箸で飯を盛つてくれたり、海苔をやいてくれたりした。彼はこの世界の生活を不思議さうに眺めてゐた。女はとろりとした疲れた目をしてゐたが、やがて又窓を暗くして縮緬の夜具のなかへ入つて行つた。

「一體君たちは、こんなことをしてゐて、終ひに何うなるんだね。」彼は腹這いになつて、莨をふかしながら、そんな事を訊ねた。

「ふゝ」と、女は嗤つてゐたが、「まあ餘り好いことはありませんね。親元へ歸つて行く人もあるし、東京でお客と一緒になる人もあるしさ。」

「君なんか何うするんだね。」

「何うしやうと思つて、今思案中なのよ。」女も起きあがつて莨をふかしながら、「今のところ二人ばかり當があるんだけれど……。」

「商人かね。」

「さうね、一人は日本橋の木綿問屋の旦那だし、一人は時々東京へ出てくる田舎のお金持だけれど、どつちもお爺いさんよ。木綿問屋の方は、まあそれでもまだ四十七八だから、我慢のできないこともないのよ。その代り上さんも子供もあるから、行けばどうせ日蔭ものさ。子供のお守なんかもして、上さんの機嫌を取らなくちやならないから、なか〳〵大變よ。田舎の隱居の方は、それにかけては氣樂だけれど、お爺いさんは世話がやけて爲方がないでせう。だから孰も駄目さ。」

「君のところへは、何うしてさう年寄ばかり來るんだ。」彼は痛ましいやうな表情をして訊いた。「君はまだ若くて美しいぢやないか。」

「ふゝ」と、女は袖口のまくれた白い肱をあげて、島田の髷をなでながら、うつとりした目をして天井を眺めてゐた。

「ほんとうに夢中になつて、君に通つてくるやうな若い男はないのか。」

「まあ無いわね。有つても長續きはしないのさ。」

「でも一度や二度商賣氣を離れて、戀をしたと云ふ經驗はあるだらう。」

「それあ、そんな人は家にも偶にはあるのさ。それあお可笑しいのよ。七おき八おきして、終ひにその男のために年期を増すなんて逆上せ方をして、そのためにお客がすつかり落ちてしまつて、男にも棄てられてしまふつて言つた風なの。そんなのが江戸兒に多いのよ。第一若いお客といへば、まあお店者か獨身もの、勤め人なんだから、深くでもなれば、お互ひの身の破滅ときまつてゐるんですからね。それかといつて、貴方のやうな御母さんの秘藏子息を瞞せば尚罪が深いでせう。先のある人を、學校でもしくじらせてごらんなさい、それこそ大變だわ。」

「だけれど、先きで熱情を以つてくれば爲方がないぢやないか。」

「熱情ですて。それあ然ういふ人もあるわね。少し親切にすると、すぐ上さんにならないかなんて言ふ人があるわね。だけれど共もこゝにゐるからこそ然うなんだよ。出てしまつちや、やつぱり駄目さ。」彼女は悄げな聲で言つて、空で指環を拔差してゐた。

「それはかうした背景に情趣を感ずるとでも言ふんだらうけれど、そんなのは駄目さ。ほんとうにその人を愛してゐるんでなくちや。」

女はまた「ふゝ」と笑つた。

「瞞すつて一體どんな事なんだい。」

「まあ惚れさうに見せかけるのさ。」女は吭で笑ひながら、「だけれど私には何うしてもそれが出來ないの。たゞお客を大事にするだけなの。それに私なんか然う見えても温順しいんだから、鐵火な眞似なんか迚も柄にないの。ほんとうに温順しい花魁だつて、みんなが然う言ふわよ。」

「あゝ」と、男は悩ましげに溜息をついたが、暫くすると、「僕は君のやうな人は、一日も早くこゝを出してあげたいと思ふね。」

「ふゝ」と、女は又持前の笑聲を洩した。「そして、何うするの。お上さんにしてくれて？」

「いや、そんなことは何うでも可いんだ。たゞ金のためにこんな處に縛られてゐて、貴重な青春をむざ〳〵色慾の餓鬼のために浪費されてしまふのが堪らないんだよ。戀もなしにそんな老人と一生寂しく暮すことにでもなれば、尙更ら悲しいぢやないか。君だつてそれは悲しいに違ひないんだからね。」男は熱情的に言つた。

「まつたくだわ」女も感激したといふよりも、寧ろ驚いた風で、「さう言つてくれるのは貴方ばかりよ。」そして彼女はまた腹這ひになつて、莨を吸ひつけて彼の口へ運んで行つた。

「わたし幾許も借金がないのよ。」

「幾許あるの。」

「さうね、御内所の方は勘定したら何のくらゐあるかしら。それに呉服屋の借金がね、これが一寸あるわ。出るとなれば、少しは派手にしたいから、それにも一寸かゝるのよ。」

そして彼女は胸算で、五百圓ばかりを計上した。勿論彼女としては、素人になれば買ひたいものも少くはなかつたが、單に足を洗ふにはそれだけの額は餘りに多過ぎた。

「僕母に言つてやれば、その位は出來ると思ふ。母は僕の言ふことなら、何でも聽いてくれるんだから。僕の母はほんとうに寛容な心をもつた人なんだ。」

「それでも女郎と一緒になるといへば、きつと吃驚するわ。」

新造が入つて來た。

一週間ほどたつと、男はそれだけの金を耳をそろへて持つて來たが、女は其のうち幾分を取つただけで、意見をして殘んど全部を返した。

夏になつてから、その學生は田舍へ歸省してしまつた。勿論その前にも一二度來たが、女は何だか惡いやうな氣がし

て、わざと遠ざかるやうに仕向けることを怠らなかつた。勿論彼女は、飲んだくれの父のために、不運な自分や弟たちが離れ〳〵になつて世のなかの酸苦をなめさせられたことを、身に染みてひどく悲しんでゐた。彼女の唯一の骨肉である親愛者である弟も、人づかひの劇しい大阪の方で、尫弱い體で自轉車などに乘つて苦使はれてゐた。彼女は時々彼に小遣などを送つてゐた。病氣をして、病院へ入つたと云ふ報知の來たときも、退院してしばらく田舍へ歸つたときにも、彼女は出來るだけ都合して金を送つてゐた。最近彼の運も少しは好くなつて、客として上つてくる若いお店者などを見ると、つい厭な氣がして、弟の境涯を思ひやつた。そんな事が妙に心に喰入つてゐたので、自分の境涯に醉ふと云ふやうなことは困難であつた。彼女は所在のない心寂しいをりなどには、針仕事を持出して、襦袢や何かを縫つたり又は引釋きものなどをして單調な重苦しい時間を消すのであつたが、然うしてゐると牢獄のやうな檻のなかにゐる遣瀬なさを忘れて、むかし多勢の友達と裁盤に坐つてゐたときのやうなしをらしい自分の姿に還つて、涙ぐましい懷かしさを感ずるのであつた。しかし客によつては、色氣ぬきに女を面白く遊ばせて、陽氣に飲んで騷いで引揚げて行く遊び上手もあつて、そんな座敷では彼女も自然に心が燥いで、萎えた氣分が生き生きして來た。しかし體の自由になる時が近づいてくると、うかうか過した五六年の月日が今更に懷かしいやうで、世のなかへ放たれて行かなければならぬのが、反つて不安でならなかつた。どこを見ても、耀かしい幸運が自分を待つてゐてくれさうには見えなかつた。

大學生と別れてから、彼から一度手紙をもらつたきりで、こつちからは遠慮して……寧ろ相手になるのが大人氣ないやうな氣もして、また別に書くやうな用事もなかつたので、いくらか氣にかゝりながら返事を怠つてゐた。しかし其と同時に、餘り自分を卑下しすぎたり、彼の心の確實さを疑ひすぎるやうな氣がして、折角磨いて來た好運を、取逃してしまつたやうな寂しさを感じた。取止めのない男の氣持や言草が何だかふわゝゝしてゐて、手頼ないやうにも思はれ

たが、眞實に自分を愛してくれてゐるのは、あの男より外にはないやうに思はれた。彼の好意を退けたのが、生涯の失策だと云ふ氣がした。そして其の考が段々彼女の頭腦に希望と力を與へてくると同時に、彼の周圍や生活を分明見定めたいと云ふ望みが湧いて來た。慈愛の深い彼の老いた母親や、愛らしい彼の弟が世にも懷かしいもののやうにさへ思はれた。

或日の午後、彼女は私と新造に其事を話して、廓を脫け出ると土產物を少し調へて、兩國から汽車に乘つた。近頃彼女は、内所の上さんや新造と一緒に――時としては一人で、時々外出してゐて、東京の地理もほゞ知つてゐたし、千葉や成田がどの方面にあるかくらゐの智識はもつてゐた。彼の妹は今年十九だとかいふので、何か悅びさうなものをもつて行きたいと思ふと、ふら〳〵と遽かに思ひついたことなので、考へてゐる隙もなかつたところから、客から貰つたきり簞笥のけんどんや抽斗の底に仕舞つておいた、半玉でも持ちさうな懷中化粧函だの半衿だのを、無造作に紙にくるんで持つて來た。それに淺草で買つた切山椒などがあつた。

避暑客の込合ふ季節なので、停車場は可也雜沓してゐたが、さうして獨りで旅をする氣持は可也心細かつた。十九から中間の六年間と云ふものを、不思議な世界の空氣に浸つて、何か特殊な忌はしい痕迹が顏や擧動に染込んでゐるやうに、自分では氣がさすのであつたが、周圍の人と自分とを齅ぎわけ得るやうな人もなささうに見えた。實際また不斷からそれを心がけてもゐた。

海岸にちかひ或町の停車場へおりたのは、暑い七月の日も既に沈んで、汐つぽい海風がそよ〳〵と吹き流れてゐる時分であつた。町には電氣がついて、避暑客の浴衣姿が涼しげに見えた。

男の家は、この海岸から一里ほど奥の里の方にあつた。彼女は三時間ばかりの汽車で疲れてもゐたし、町で宿を取つ

て、朝早く彼を訪ねやうと思つたが、宿はどこも一杯で、それに一人旅だと聞いて素氣なく斷はられたので、爲方なしいきなり訪ねることにした。

俥はやがて町端を離れて、暗い田舍道へ差懸つた。黝い山の姿が月夜の空にそゝり立つて、海のやうに煙つた青田から、蛙が物凄く啼きしきつてゐた。太皷や三味の音色ばかりに聞きなれてゐた彼女の耳には、人間以外の聲がひどく恐しいものゝやうに、神經を脅かした。高い垣根を結へた農家がしばらく續いた。行水や蚊遣の火をたいてゐるのが見えたり、牛の啼聲が不意に垣根のなかに起つたりした。

道が段々山里の方へ入つて行くと、四邊が一層閑寂して來て、石山な道を挽き惱んでゐる人間さへが何んな心をもつてゐるが判らないやうに怕れられた。灯の影もみえない藪影や、夜風にそよいでゐる崖際の白百合の花などが、殊にも彼女の心を悸えさせた。でも、彼の家を車夫までゞか知つてゐるのでいくらか心强かつた。

彼の屋敷は山寺のやうな大きな門構や黑い塀やに取圍まれて、白壁の土藏と並んで、都會風に建てられた二階家であつたが、門の扉がぴつたり鎖されて、內は人氣もないやうに閑寂してゐた。それに石段の上にある門と住居との距離も可也遠かつたし、前には山川の流が不斷の音をたゝへて、門內の松の梢にも、夜風が汐の遠鳴のやうに騷めいてゐた。

しかし生活の豐かな此邊は人氣が好いとみえて、耳門を推すと直ぐ中へ入ることができた。女はちよいと氣が臆せて、其のまゝ其俥で引返へさうかと思案したが、四里も五里もの山奥へ來たやうな氣がしてゐたので、引返す氣にもなれなかつた。で、玄間の土間へ立つて、思ひ切つて案內を乞ふてみたが、誰も應じなかつた。遠い奥の方から明がさして人聲が微かにしてゐるやうであつた。古びた廣い家ががらんとしてゐた。何處からか胸のわるい牛部屋の臭氣が通つて來た。

彼女は失望と不安とを强ひて堪えるやうにして、門の內を仕切つてある塀についてゐる小い門の開いてゐたのを幸ひ

に、そつと其處から庭へ入つて見た。庭は木の繁みで微暗く、池の水や植木の鉢などが月明りに光つてゐた。開放した座敷は暗かつたが、籐椅子が取出されてあつたり、火の消えた盆燈籠が軒に下つてゐたりした。ふと池の向ひの木立の蔭に淡赤い電燈の影が、月暈のやうな圓を描いて、庭木や草の上に蒼白く反映してゐるのが目についたが、それは隱居所のやうな一棟の離房で、瓦葺の高い二階建であつた。そして其處に若い男が浴衣がけで、机に坐つて讀書に耽つてゐた。顔は焦けてゐたが、それは疑ひもなく彼であつた。

ふと窓さきへ立つた彼女の白い姿を見たとき、彼はぎよつとしたやうに驚いた。

「私よ。私來たのよ。」彼女は嫣然して見せた。

「誰かと思つたら君だつたのか。僕はほんとうに脅かされてしまつた。」さう言つて彼は彼女を今一度凝視めた。

「わたし何だか急に來て見たくなつて、私と脱出して來たの。まさかこんなに遠い處とは思はないでせう、來てみて驚いてしまつたわ。」

「ほう、そんな好きな眞似ができるのか。」彼は蒼白くなつた顔を紅くして、急いで彼女を内へ入れた。

「上つても可いんですか。」彼女はちよつと氣がひけたやうに入口で躊躇してゐた。

家は上り口と、奥の八疊との二室であつたが、八疊から二階へ梯子が懸わたされて、倉を直したものらしく、木組や壁は嚴重に出來てゐたが、何となく重苦しい感じを與へた。で、上つて行つて、蒲團などを侑められると、彼女は馴れのした態度で、更めて兩手をついて叮嚀にお辭儀をした。彼は面喰つたやうな困惑を感じた。裏の畑にでもできたらしい紅色した新鮮な水蜜桃が、盆の上に轉つてゐた。

「しかし能く來てくれたね。まさか君が今頃來やうとは思はないもんだから、ふつと顔を見たときには、君の幽靈か、

僕の目のせゐで幻が映つたのかと思つて、慄然としたよ。」
「さう。私はまた自分の氣紛れで、飛んだところへ來たものだと思つて、何だか悲しくなつてしまつたの。夢でも見てゐるやうな氣がしてならなかつたんですの。でも貴方に會へて安心したわ。道がまた馬鹿に遠いんですもの、私厭になつちまつたわ。」
「夜だから然う云ふ氣がしたのだよ。」
「貴方はこんな處にゐて、寂しかないの。」女はさう言つて四下を見まはした。
「こゝが一番涼しいから。」彼はさう言ふうちも、どこかおど〳〵した調子で、時々母屋の方へ目をやつた。
「私こゝにゐても可いでせうか。貴方の御母さんや御妹さんに御挨拶もしなければならないでせう。」女も不安さうに言つた。
「いや、いづれ明朝僕が紹介しやう。それに親父は浦賀の方の親類へ行つてゐるんだ。多分二三日は歸らないだらうと思ふ。當分ゐたつて可いんだらう。」
「さうね、御内所の方は幾日ゐたつて介意やしませんわ。私貴方のお手紙で、海へでも遊びにいからうと思つて、來たんですけれど……それには色々話したいこともあるにはあるんですの。でも私こゝにゐても可いの。」
「それあ可いんだけれど、何なら町の方で宿を取つてもいゝと思ふね。」彼は女に安心を與へるやうに言つたが、何處においていゝかと惑つてゐる風であつた。
話が途切れたところで、彼女は持つて來た土産物を出して、「急に思ひついて來たんですから、何にももつて來なかつたのよ」と言ふ言つて、彼の前においた。

彼はたゞ大様に領いたきりであつたが、やがて女の傍を離れて、母屋の方へ行つた。

彼の家は農家ではあつたが、千葉の方から養子に來た父は、元が商人出であつたから、ちよい〳〵色々なことに手を出してゐた。東京へも用達しに始終往復してゐて、さう云ふ時の足溜りに、これまで女を下町の方に圍つておいたこともあつた。

大分たつてから、一人の女中がお茶や菓子を運んで來たが、間もなく彼も飛石づたひに此方へやつて來た。

「母に話したら、是非お目にかゝるから此方へおつれ申せと言つたんだけれど、僕は今夜はもう遅いから明朝にしたら可いだらうと言つておいたよ。」

「さう、貴方のお妹さんもいらつしやるの。」

「妹は東京へ行つてゐて、今家にはゐないんだ。」彼は氣の毒さうに言つて、「僕は母には、友人の姉さんで、海水浴へ來たついでに、わざ〳〵訪ねてくれたんだと、さう言つて話したら、すつかり眞に受けられて極が悪かつた。」

「さう」と、女は寂しい微笑を浮べたが、やつぱり當にならないことを頼りにして來たのだと云ふ、淡い悔ひを感じた。

その晩は葡萄酒などを飲んで、遅くまで話したが、それも取留めのない彼の感激から出る辭ばかりで、期待したやうな實のある話は少しもなかつた。

明朝海岸の町の方へ出て行つたのは、お晝頃であつた。勿論母屋の方へつれて行かれて、二階の座敷も見せられたし、五十ばかりの母親にも紹介された。母は東京で世話になる人だといつて、彼が誇張して話したとみえて、素朴ではある

が、ひどく慇懃に待遇してくれるので、彼女は挨拶に困つて、可成口を利かないことにしてゐるより外なかつた。裏の菓樹園へつれ出されて、彼女は初めて吻とした。水蜜桃の實るところを、彼女は初めて見た。野菜畑なども町で育つた彼女には不思議なもの丶一つであつた。茄子や胡瓜に水をやつてゐる男が、彼女の姿を見て叮嚀にお辭儀をした。ダリヤが一杯咲いてゐた。藪蔭には南瓜が蔓をはびこらせてゐた。朝露が名殘なく吸取られて、太陽がかつ〳〵と照してゐたが、風は涼しかつた。一夏脚氣の出たとき、朝早く外へ出て、跣足でしつとりした土を踏んだことなどあつたが、いくら體が丈夫になつても、こんな處には迚も一生暮せさうもなかつた。彼は東京で暮すのだと言つてゐたが、他の男の子がないところから見ると、つまりは此處に落着くのぢやないかと云ふ氣がした。

彼はそんな事については、少しも語らなかつた。

やがて支度をして、二人は家を出たが、山路とはいつても、海岸に近いので、何處を見ても昨夜あれほどにも心をおの丶かせたやうな深い山は何處にも見えなかつた。蒼々した山松や、白百合の花の咲亂れた丘や、畑地ばかりであつた。

そして思つたよりも早く、いつか町の堤へ出て來てゐるに氣がいつた。

海岸の松原蔭にある新しい宿屋の二階の一室に、やがて彼女は落着くことができた。そこからはそよ〳〵と風に漣をうつてゐる廣い青田が一と目に見わたされ、松原の藁屋の上から、紺碧の色をたゝへた靜かな海が、地平線を淡青黄色の空との限界として、盛りあがつたやうに眺められた。眞夏の日がきら〳〵と光り耀いてゐた。人間と人間との特殊な交渉より外には何物もない隘くて窮屈な小い部屋のなかに住みなれて來た彼女に取つては、際限もない青空を仰ぐことすらが、限りない驚異でもあり喜悅でもあつたが、心ゆくまで胸を開いて、其等の自然に親しむことは迚も出來なかつた。

海風に吹かれながら、晝飯を食べてから、二人はしばらく横になつて話してゐたが、するうち疲れた頭腦も體も融けるやうな懈さをおぼえて、うと〳〵と快い眠に誘はれた。下の部屋で學生がやつてゐるハモニカの音などが、彼等の夢心地をすやした。

四時頃に、二人は一緒に海岸へ出て見た。日は大分傾いてゐたが、風が出たので、海には波が少し荒れてゐた。焦げつくやうな砂を踏んで彼女は汀に立つて、ぼんやり波の戯れを見てゐたが、長く立つてゐられなかつた。目がくら〳〵して波と一緒に引込まれて行きさうであつた。海水衣に海水帽をかぶつた、女學生らしい女の群が、波に輕く體を浮かせながら、愉快さうに毬投をやつてゐるのが彼女には不思議にも羨ましくも思はれた。印度人のやうな黒い裸體が、そこにもこゝにも彼女の目を驚かした。

二人はやがて着物の脫ぎ場へ入つて、足を休めながら海氣に吹かれてゐた。彼は彼女をかうした自由な自然の前へつれて來たことに、この上ない幸福を感じてゐるらしかつたが、彼女の頭腦は其の感じを受容れるには、餘りに自分を失ひすぎてゐた。

すると其の時、ぼうと云ふ空洞な汽笛の音が響いて、いつの間にか汽船が一艘黒い煙を吐きながら、近くの沖へ來て碇泊してゐるのに氣がついたが、間もなく漕ぎ寄つた一艘の端艇に、荷物や人を受取つて、陸の方へやつて來た。

短艇が濱へついたとき、懸わたされた船板から、四五人の男女が上陸して來たが、その中に舊式なパナマを冠つて、小さい手提鞄と細捲とをもつて、肥滿した老人が一人こつちへ遣つて來た。近づくに從つて、其の姿は段々はつきりして來て、白地の帷子の紲や、羽織の茶色地までがきら〳〵する光線に見分けられた。帶の金鎖や眼鏡がちか〳〵光つてゐた。

彼女はじつと其の姿を凝視めてゐたが、それは何うやら能く自分のところへ通つてくる、千葉在だと云ふお爺いらしく思はれて來た。

と、それと同時に、彼の面にも暗い困惑の色が浮んで來て、やがて其處を立て、そろ〳〵葦簾張の外へと出て行つた。

間もなく彼女もそこを離れた。

それが彼の父親だといふことは、後で彼が言つて聞かせたが、彼女は何にも語らなかつた。

其の晩も二人は町や海岸を散歩して、歸つてからも遲くまで月光の漾ひ流れてゐる野面を眺めながら話してゐた。彼は彼女の憂鬱な氣分を悲しく思つたが、女は自分を如何にして幸福にしやうかと惱んでゐる彼を哀んだ。

三日目に、彼はちよつと家へ歸つてくると言つて立つて行つたが、その夕方彼女は宿へも無斷でそこを立つてしまつた。

夜櫻

里見弴

花は「咲きも殘らず散りもはじめず」と詠まれた、その僅かひと日の眞盛を、臨終の緘默めくまでほの白く假睡んでゐた。月は舊暦十五日、更たけては、天心近く棄てられたけれど、有繫に春の空の朧に霞んで、二十歳を四つ五つこえた上﨟の、紅閨の怨を想はせて、艶かしくもうるんでみえる。花の香を含んでか、とろりと黏つて、熟睡の「夜」の息づかひほどの、微々との風もない。――戀はなくとも、甘く、惱ましく、胸を締めつけられるやうな晩だつた。

赤坂の仲の町から、あの、深山のやうに樹をかぶつた、大藏大臣官舍の岸下の、三平坂をおりて鈍角に曲つたあたりへ出ようと云ふのだから、山王臺をぬけるのが、近さも近いが、花の頃、月の宵ゆゑには、少々ならば廻りでもいゝ。が、姉の友達をその永田町の陰氣な窪地にあるうちまで送り屆ける役目を云ひつかつて、眠むさも忘れて、大喜びで飛び出して來た十六と十四になる兄弟では、道の遠い近いでなく、尙更夜櫻の風流でもない、日吉橋を渡つたところから、栗丸太で土止めをした裏道の、二枝に分れたのを頂上までの駈ツこが樂みながらで……。

「いちッと！　勝たアい」

負ン氣の弟が、のめるやうに急な坂を駈けあがつて來たが、吃驚したやうにひよいと立ち止つて、「あ、綺麗だなア。……兄さん。早くこつちへ來てごらんよ」

あがり切つた社の裏手のそのあたりは、まづ杉の大樹、樫、椎、松など、――なかには楓、榎の坊主も混るが、多くは黑々と枝を重ねた常盤木で、地息も急にひやつくほど空を覆ふて暗い彼方に、瓦斯燈の火影をうけて、――雪とは冴えない、もつとあたゝかく、そのあたゝかみに釀されて、粉でもふいたやうに、ほの〴〵と櫻はあたりを白ませてゐた。晝ならば、登つて折つて、すぐ飽きて捨てかねないやんちやながら、パノラマの隧道をぬけて、ちらりと油繪の空を見た瞬間のやうに狂喜の聲をあげたのだ。

中途までは駈けあがつたが、兄は、なんだ子供ぢアあるまいし、馬鹿々々しい、と云つた氣持で、急に足をとめて、谷底のやうな下の道を振り返つた。前には覺えのないことだが、そんな時、ふら〴〵と目がまう……。

「おしんちやアん……早くあがつていらつしやいよウ」

弟の聲が、小さく木精を返して、クワンと、妙に耳に響いて來た。

（どつちの道からあがつて來るかしら……）

毛絲の肩かけだけが靑白く見おろされる。兄は、自分も呼ばふとしたのを、よして、ぢつと見詰めてゐた。

「だつてあたし、勝ちやんみたいには駈けられないわ」

ほんの、部屋のなかの話聲を、心持はつたほどなのが、冴えてリン〳〵と通る。それで兄の心は、締木にかけられたやうに、わけもなく痛んだ……。

「ちア、迎ひに行きませうか」

と弟が叫んだ。

「えゝ、來て頂戴。あゝ、でもね、暗いから、轉ぶといけないからおよしなさいよ」

「大丈夫だア」

すぐもう弟が、とつとゝと駈けおりて行く足音が聞える。

「そんなに駈けださないでよ……」

「平氣さア」

（あゝ、あんなに無邪氣に出來たら……）と兄は羨ましいやうな氣持で、僅か二つ違ひの弟の年齢を羨んだ。もう自分の登つて來た方の道へは來ないにきまつてゐる。そのことが、何もかも總てを失つて了つたやうに悲まれて、蒼白い額を一層陰欝にくもらせて、兄はふら／＼とひとりつまらなくあがつて行つた。急に、破裂したやうな、子供らしい弟の高笑ひが、下の方で起つて、

「……だから、矢野さんは…………だつてんだ……」

「いゝえ、勝ちやんこそ……」

「駄目々々、そんなこと云つたつて、僕ンちちア、そんな……」

娘が何か揶揄つてゐるらしく、二人して大聲に云ひ爭ふ聲が、いかにも樂しさうに聞えて來た。兄は、まるで自分が嗤ひものにされてでもゐるやうに、それで不愉快にされた。二人があがつて來る道の方へは行かずに、そのまゝ神社について右へ、三四軒並んだ茶屋の前を裹へ廻らうした。

「にいさアん」

返事をしずにゐた。

「健ちやアん」

今度は娘が、女らしい憚りをもつて、調子は高いが、かすめた聲で呼んだ。

それでも返事をしずにゐた。どこからか、ちら／＼と花が散つて來る。悲しい氣持で梢を振り仰いでみた。狐狸(きつねたぬき)にでも魅(ばか)されてゐるやうな、けうとい月の光に、滿開の八重が重たい頸をたらりと、ねぼけ色にけむらせてゐる。

一二の三ー　とだれか音頭をとつたとみえて、二人の聲がぴたりと合つて、

「健ちやァん」

しぶ／＼振り返つてみると、もうつい五六間のところまで、二人は手を繋いで、それを大きく振りながら、兵隊の「早足」のやうな歩調で近よつて來てゐた。

「い〻わねえ。……少し遊んで行かない？」

はしやいだ、蓮葉(はすは)な調子で娘がかう云つた。

「だつて、あんまりおそくなるとうちで心配するぜ」

「大丈夫よ。かまやしなくつてよ」

「なにしよう」と弟が勇みたつて、「柱鬼しようか。……だけど三人ぢアつまんないなア。おしんちやん、石けりできる？」

「できるけれど、鬼ごつこの方がい〻わ。あたし、なんだかかう、息が切れるほど駈けてみたいの。だつて、三人でお花

見に來てゐるやうな氣がするんですもの」

「ずいぶんお轉婆だなア」

「いゝことよ、お轉婆だつて」

と、娘は勝次郎の手を地べたに叩きつけるやうに振り離して、「ね、さア、ヂャンケン」

健太郎は、娘が浮きたつほど、尙更淋しい氣持にもぐつて行つた。自分とはまつたく緣のない世界の人のやうに、何か面白くてそんなにはしやぐのだらうと、腹だゝしいほどだつた。

「駄目よ、健ちやん。ヂャンケですつたら……。さア」

と、娘は荒々しく手頸を把つたが、ふと顏を覗き込むやうにして、「いやなの？　健ちやん、どうかしたの？」

匂ふやうなほの白さのなかで、二重瞼の、ぱつちりと大きな目が、情をもつて、

「なんかおこつてるの？」

「おこつてなんかゐないさ」

「ぢやアどうしたのよウ」

「駄目だよ、兄さんは、詩人だから……」

「しじんてなアに。あゝ、詩人？　……生意氣云つてるわ、勝ちやん、詩人てどんなものだか知りもしないくせに……」

「知つてるとも。……あのね、兄さんはね、こんな晩に櫻の下で、鬼ごつこなんぞするのは野暮だと思つてるんだよ。それより、そこらぶら〳〵歩つてたりして、歌でもよんだ方がいゝんだらう？」

「あら、そんなことないわねえ。……ぢやアね、鬼ごつこでなくつてもいゝから、二人してあたしを追ツかけてくれな

い？　あたし、きつとなか〳〵捉らないことよ」

「そんなことしたひにア、ひとが何かと思はア」

「だつて、健ちやん、人ツ子一人ゐないんですもの、かまやアしないぢやないの」

「だアれもゐないから、なほ可訝しいのさ」

「あらへんね、だアれもゐなけれア、だアれも可訝しいともなんとも思ふ人がないわけぢアないの」

「よる夜中、そんな、……氣違ひぢみてゝいやだ。それより、あんなに何遍も電話がかゝつて來たくらゐだから、きつとおしんちやんとこの阿母さん心配してるよ」

「かまやアしなくつてよ」

とぎれつたさうに云ひ放つたやうなものゝ、娘も一寸氣をくぢかれた。そこに、みんなの氣持がちぐはぐになつたやうな沈默が來た。

月の面を雲が行くか、あたりの色が吸ひとられるやうにスウツと暗んで、花がしきりに散る。自分ひとりの氣持から、折角上機嫌になつてゐたみんなを、ふとつまらなくして了つたことで、兄の陰欝は一層暗く、頑にもつれて了つた。

弟はふいとそこを駈け出して行つて、奉納の大砲に攀登つた。

「どうしてそんなに默つてるの？」

暫くぢつとそこに立ちつくしてゐたが、娘は打つて變つたもの優しい、潤ひのある調子になつて尋ねた。

「なんでもないんだけれど……」

どちらが先ともなく、二人は肩を並べて花の下を歩きだしてゐた。「……もういゝんだよ」

「いや〳〵。云ひかけといて云はなくつちア、いや」
「ほんとになんでもない。もうこんなに機嫌がよくなつてるぢアないか」
實際さう云ふ聲が、けろりと元氣になつてゐた。
「でも、さつきはなんだかおこつてたわね」
「おこりアしないけども……」
「あんまりあたしがはしやいでたから？」
その時弟が、「おいち、に、さん」と威勢よくかけ聲をして、ドシンと大砲の上から飛びおりた。
「まア、亂暴ねえ」
と微に笑ひながら呟いて、「勝ちやん、こつちイいらつしやいよ」
御手洗の近くのベンチへ娘は腰をおろした。弟は、主人の口笛を聞いた犬のやうに馳けつけて、いきなりひよいとそこへ跳び乘つた。
「あら、勝ちやん、土足で、いやよ」
云はれて、草履をうしろへ蹴落すと、凭掛を兩手にしつかりと握つて、
「兄さん、こゝで逆立が出來るかしらん」
「出來るもんか」
「出來たらゲンマンか」
「よせ〳〵。また骨でもくぢくくらゐが關の山だ」

「出來るさ。だけど、もう少しこゝの幅が廣いといゝんだた」

さう云ひながら、片足あげて、もう一方の足で跳あがらうとした。と、その足頸を、娘がぐいと掴んだ。

「いやだア、おどかしちアいやだ」

「およしなさいよ。そんなことつまんないわ。それよりこゝにいらつしやいよ」

引きよせられて、弟は、ぴたりと肩を押しつけて坐つた。いつの間にか片手を娘の掌の間にとられてゐる……。

「健ちやんもこゝにいらつしやいな」

兄の坐る場席をつくるために、娘は一層弟の肩へ身をよせて、手頸のところを把つた小さな柔い掌で、自分の手の平をぴた〳〵と叩きながら、「なんかみんなでお話をしませうよ」

けれども兄は、ぶらり〳〵そこらを行つたり來たりしてゐた。急に猫のやうにおとなしくなつて、ひたと娘に身をすりつけてゐる弟を見ると、そこに兄は、決して虚心平氣ではない或る氣持を、はつきりと讀みとることが出來た。そしてそれを、嫉しく、憎らしく感じてゐた。また、各自が、別々に各自の氣持に浸つてゐるやうな沈默が續いた。

「あ、もうほんとに歸らなくつちア駄目ですよ」

と、暫くしてから兄が云つた。

「よくつてよ、いま歸るわ……」

急に、苛立たしく娘が答へて立ち上つた。「さ、勝ちやん行きませう」

弟は兄を憎んだ。ふてくされたやうな氣持で、默つて、たゞたひとり山門をくゞつて、正面の急な石段をおりた。大樹に覆はれて、急にあたりがほの暗くなつたなかに、散り敷いた花瓣ばかりが、幽かに光でも放つてゐるやうに、あち

こちに浮いて見える。頭の上でバサ〳〵と羽音がしたと思ふと、烏が二聲ほど鳴いた。

「おどかすない」

と呟きながら、淋しくなつて、彼方を見ると、女坂の方を廻つた兄が、頸垂れて、コトリ〳〵下駄を引きづりながら石段をおりて來る。そのしよんぼりとした姿で、弟はいくらか胸がすくやうな氣がした。——どうだ、思ひ知つたか、と云ふほどの氣持で……。

ふと、低聲ではあるが、美しいテノールの調子が流れて來た。唄の詞は日本語か外國語か聞きとれなかつたが、譜はラスト・ローズ・オブ・サンマアだつた。娘は一番おくれて、茶寮の前のだら〳〵坂を、唄ひながら、ゆつくり〳〵おりて來る。ほがらかな、靜かに拖れるやうな唄の調子につれて、ふと弟の心は、うづくやうな哀愁に浸された……。

三本の道が一つにあはさるあたりで、弟はぶら〳〵しながらみんなを待ち合せた。

「あゝしイらぎイく、あゝしイらぎイくウ」

弟は低聲に娘の唄に合せて唄つた。——重たくおどんだやうな空氣のなかを、ちらり〳〵花が散つて來る……。

三人一緒になつた時に、娘が突然云つた。

「だけど、こんないゝお月夜で、櫻も眞ツ盛りなのに、どうしてみんな見に來てないんでせう」

「もうおそいもの、歸つちやつたんだよ。うちを出た時、十一時過ぎてたもの」

と弟が答へた。

「何時になつたつていゝぢやないの。こんな晩に寢ないたつて、いつだつて寢られるんですもの。あたしが若し男だつたら、こん晩には、夜ツぴてうろついてるわ」

娘は何かひどく興奮した調子で、寧ろ腹立たしげにそんなことを云つてゐた。

交番の前を通る時、巡査がいやにぢろ〳〵と三人を見た。娘はその無禮な視線に、謂はゞ體で抵抗するやうな氣持で、わざとぶら〳〵歩いた。角の蕎麥屋すら丁度おもてをしめるところだつたから、あの、忘られたやうな谷底の通りは、もうすつかり寢靜まつてゐた。月の光さへ、こゝでは、急に蒼白く冴えでもしたやうに、夜露に濡つた屋根が、冬らしく耀いてゐる。なんとなく、三人とも、口を利くやうな氣になれなくなつて了つた。

ほどなく、娘のうちの門に來た。

「どうもありがたう」

ほんの禮儀めいた、冷たい調子で娘が云つた。けれどもそれは、——さうでもしなければ、急にわけのわからない涙が滯れさうな氣がしたからで……。

「玄關まで行つてあげよう」

と弟が云つた。そこは門から玄關までが一寸離れてゐた。

「もういゝことよ。大丈夫よ」

さう云ひながら、然し娘は、ぢつと兄の目を見詰めた。黒い冠木門の前に、全身に月光をあびてすらりと立つた容子は、とても十八やそこらとは思へないほど臈たけて見えた。

「勝次郎、お前そこで待つといで!」

と、兄が思ひ極めた人の鋭さをもつて云つた。それが、今まで押し默つてしほれ返つてゐた兄として、いかにも唐突な變り方でもあつたし、ひよいと氣を搏たれて、弟は思はず領いて了つた。すぐ二人は耳門のうちに消えた。暫くして

小砂利を踏む音が聞えなくなつた……。

背なかで門柱によりかゝつたまゝ、弟が七つ八つの子のやうに澁面をつくつたと思ふと、ぽろ〳〵と涙は頬へ流れ落ちた。胸がはり裂けるやうな氣持だつた。そして、同時にそれが、さつきからなんとなく滿されずに、どこかしらんに蟠つてゐたそのものだつたやうに、――遂に行くべきところへ落ちついたやうに、せい〳〵とした氣持でもあつた……。

少年は美しい眉をよせて、ぢつと唇を噛んだ。あとから〳〵と溢れてくる涙は、きら〳〵と月の光をやどした。

* * * * * * * * * * * *

十分ほどの後に、兄弟は、山王臺の崖下の道を、左右の溝へよつて、默りこくつて、各自別々な思ひに耽りながら、さつさと歩いてゐた。――花は「咲きも殘らず散りもはじめず」と詠まれた、その僅かひと日の眞盛を、臨終の緘默めくまでほの白く假睡んでゐた。月は舊暦十五日、更たけては、天心近く棄てられたけれど、有繋に春の空の朧に霞んで、二十歳を四つ五つこえた上臈の、紅閨の怨を想はせて、艶かしくもうるんでみえる。花の香を含んでか、とろりと黏つて、熟睡の「夜」の息づかひほどの、習々との風もない。――戀はなくとも、甘く、惱ましく、それは、胸を締めつけられるやうな晩だつた……。



迷へる魂

宇野浩二

一 發端

それから私はどうしたか？

全く話にならない話なのだつた、——月末までにもう五日以上と日がないので、下宿屋の出入口の横手には、一面に硝子障子を嵌めた主人たちのゐる帳場部屋があつて、それはまだ私のヒステリイのをんながゐた時分、彼女の機嫌を取るために彼女を笑はせようと思つて、私がそれを水族館見たいだなアと言つたことがあるところのものだ、そこには小柄な男の主人がいつも變らず魚のこち見たいな顏をして坐つてゐるし、大女の上さんはまつたく比良目そつくりな恰好をしてその傍にゐるのだ、さう言つたら、その時何かの事で丁度ヒステリイを起しかけてゐた私の厄介者のをんなは途轍もなく可笑しがつて、お蔭でやつと機嫌を取止めたことであつた、だが、今はもうそのをんなをもうまく欺して別れてしまつて、一難は辛うじて去つたことだが、その代りもうその帳場部屋が可笑

な水族館に見えるどころか、夜、わざと私が十二時近くに外からのそ〳〵と歸つて行くと、その水族館めいた部屋の中では、こちの主人が長々とお輕のやうな手紙を書いてゐるのである、それが何の！　手紙ではなくて、その中には洩れなく私もまじつてゐるところの、それは下宿人三十幾人かの月の勘定書なのである、私は氣が氣ではないのだ、だが、溜息するより外に私は仕方を知らないのだつた。何といふこの世の苦勞の隙間のなさだ！　早い話が、ヒステリイのをんなを逃れたら、その翌日同じヒステリイのをんなが逃げ戻つて來た、彼女を漸くなだめて送り込んで歸つて來たら、髯の三百代言が待つてゐたことだ、彼を漸くなだめで、五十圓の金を月賦で拂ふことに勘辨してもらふ手紙を昨夜したためて、ほつとしたところへ今度は又下宿屋の勘定書だ、そして肝心の私がからきしの無收入の境遇と來てゐるのだ、まつたく難儀は、錦畫にある楠正成の湊川戰死の場に飛んで來る矢の數よりも隙間なく降り掛つて來るものと見える、おまけにそれ等の矢を薙ぎ拂ふ刀一本、私と來たら持たない次第なのだ。

こんな風に言ふと大層呑氣なやうに聞えるかも知れぬが、どうして！　腹の中は仲々そんなものではなかつたことだ。元來、私はさう威張る性質ではなく、寧ろ大人しい側の人間なんだから、一人や二人ぐらゐ、目下斯う斯ういふ風に難儀してゐますから、何かよい勤め口なり仕事なりを周旋して下さいませんか、と言つて頼みに行く先輩があつても然るべきものなのだが、そんな人間を生憎一人も持ち合はさないものだから、何とその急場の凌ぎようが付かないのだつた、たつた一人の本屋の山本が、彼だつて決して有力なものではなかつたが、これ迄の私の、彼としては力一ぱいに深切を盡してくれるところの、相談相手ではあつたのだが、その彼が破産してしまふし、さて今更逃げようと言つたつて、匿まつてくれる程の餘裕のある友達も思ひ當らず、と言つてあの水族館の帳場部屋から一兩日中に配達されるに違ひない勘定書のことを思ふと、安閑として仲々剝げた机の前にも坐つてゐられないものだつたから、私は又當もなく

町に出たのだが、これも亦無能力者の、それに近頃は國の方からの月々の仕送りの金を減らされて困つてゐるといふ、友達の法學生の鶴丸のところへ行つたとて、どうしていゝ思案が考がへられよう譯もなし、それに又行つたところが、まだ朝の八時頃のことだつたから、彼は漸う寢ついたとこ位だらう、と思案に暮れながらうろ〳〵と二三町歩いてゐるうちに、ふと思ひついたのは佐山といふ、私とは職業はお門違ひだが、先輩の文學者のことだ。彼と私との間柄は、私の友達の或文學をやつてゐる男が、同郷だとかいふ關係から時々そこへ出かけるついでに、二三度私もその男に連れられて行つたことがある位のものなのだが、その方の樣子は餘りよく私は知らないが、彼は何でも十年程も前にはいつぱし文名を馳せたことがあるといふことであるが、いつか行つた時なぞ、文學なんて決して決してやるものぢやあない、外の職業なら自分ほどの年月の間携はつてゐたら、もう一廉の身分になつて、家や藏の一棟は建つてゐる筈だ、ところが、自分を見よ！　得たところは少々の虛名ばかりで、今日好きな酒だつて心置きなく飮めない有樣だ、で、自分は遲れ走せだが、こゝで一奮發して、斷然商賣を變へて見るつもりだ、なぞといふ事を言つてゐたかと思ふと、自分は今或講義錄を出してゐる、それが非常に儲かる、變なもんですね、それが非常に儲かるんですよ、ところが、今一息といふところで、悲しい哉、資金がないんです、だが、折角こゝ迄賣り込んであるものをむざ〳〵潰してしまふのも惜いと思ふから、どうでせう、心當りに、その權利をこの際安く賣りますから、買ふ人がないでせうか、或ひは資金を出してくれて共同にやるといふやうな方法でもいゝのですが？　といふやうなことを言つてゐたことがあつた、要するに彼の言說から推して、今の場合私が尋ねて行つて何彼のことを賴まうといふのに、決して有力な人物とは思へなかつたが、が、他依り少ない時には人間といふ者は隨分弱くなるもので、私はその時ふら〳〵と彼でも訪問して、……と言ふ氣になつたのであつた、もつとも、この二三ケ月のうちに二度ばかり、やつぱり單獨で、それ迄にも彼を尋ねたことがあるのだが、一

度は留守で、一度は病氣だと言つて會つてくれなかつたことであつた。

その日、行つて見ると、彼は、玄關の間から直に段梯子で通じてゐる二階の八疊で、經机のやうな小さな机の前に向う向きに坐つて、その横手には反古紙や書物類やと一緒くたに、正宗の二合瓶の三分の一ばかりになつたのを置いて、何か頻りに書き物をしてゐたが、私が上つて行くと、

「やあ！」と空元氣見たいな聲を出して此方に向き直つた。

「しばらく。」と私はぴよこりと頭を下げて、「お忙しいですか？」といふやうなことで先づ口をきつたところが、

「いやア、どうも、その……」と佐山はその異様に厚い唇の上に、被せるやうに生やした口髭の上に手をかざしながら、苦しいのか、得意なのか、それとも來客をなるべく早々に追拂ふ口實なのか、多分そのいづれもを含んだ口吻でぺらぺらと喋り始めたのであつた。「いやア、どうも、その雜誌の編輯主任といふやうな公務、まあ公務ですな、さう言ふものがある上に、××社の歴史叢書を二冊も受持たされて、それが又毎日ほど電報や使の者で催促に來るし、それにその、雜誌なぞをやつてゐると、知る人知らぬ人、或ひは紹介狀を持つて來る人、——まあさう言つた色んな若い人が原稿を持つて讀んでくれと言つて來るし、それに近頃はどうも青年の藝術家志望が多過ぎるんですなあ、さういふ人達が仕事を頼みに屹度一日に一人位の割合でやつて來るといふ有様でね……」

「はあ、」と私は呆氣に取られて、答へる言葉に困つた末、「大臣より忙しいですね。」と何と思つたのか、屹度大臣の忙しい話でも新聞か何かでその近頃讀みでもしたのだらう、私はそんなことを言つたものだ。

「いやア、」と相手は相變らず元氣だけはいゝ聲で、絶えず口髭に手を觸しながら、「大臣はもつと樂ですよ。」と言ふのだ。

「さうですかなア……」と私。

「ところが、」と相手はつゞけて、「收入と來たら、大臣の月給の半分なんですからな、それぢやあ、家内があつて、子供があつて、この物價騰貴ぢやあ、酒だつてうか〳〵飲めませんよ、ワッハッハッハッハ、」と佐山はそこで聞き手を吃驚させるやうな豪傑笑をした。

「大臣の月給といふのは幾ら位なものですかねえ？」と私が、その半分といふのを羨みながら、但しこの男仲々吹くなと思ひながら、それでも後學のためと思つて聞いて見ると、

「さあ、あれやア年俸ですからなア、」と言つたが、彼も亦はつきり知らないものと見えて、それにあんまり高く言ふと、その半分と稱した自分の收入が多くなり過ぎてもいけないと遠慮したのか、暫く考へてから、「さあ、何でも割合に安いんですよ、七千圓位のもんですかなア。」

だが、お蔭で私の訪問の目的であるところの、何處かコマ繪でも書かしてくれるところはないか、現に彼の編輯主任をしてゐる雜誌社の仕事でも少しくれないか、と言ふやうなことを賴む話はすつかり脫線してしまつた譯だつた、が、どうせこのやうな流儀の人物にそんなことを賴んだところが、とても物にはならなからう、うつかりはしたない事を言つて變な恥さらしをするよりも、結局そんな話を持出さない方が悧巧かな、なぞと思ふ尻から、いや〳〵、今はそんなゆつくりした考をしてゐる時ではない、當つて碎けろといふ事もあるから、こゝのところは一つ辛抱して、何とか話をもう一度落着けて、……と胸の中でいろ〳〵と工夫してゐるところへ、下から主人と年が二十歲位違つて見える細君が上つて來て、

「あの、牛田さんがいらつしやいました、」と段梯子の最上段のところに首を突き出して報告した。

そして、佐山の細君と入れ違ひに、威勢のいゝ足音を立てゝ上つて來た人物を、と見ると、私と同い年位の、無精者らしい髭を延ばした、片方は割れて罅の入つたまゝの赤銅緣の眼鏡を掛けた、善良らしい併しぎよろりと些か飛び出した目付の男で、彼は佐山と挨拶するのにも、私のやうに恐れ入つた風は少しもなくて、隨分馴れた、親しい樣子に見えた。

「此間は失敬しました、あの日は先生大分醉つ拂つてしまつたね、隨分いゝ恰好でしたよ。」とお辭儀を終ると、彼は冒頭にそんな事を一息に喋つたものだ、その有樣を橫から見てゐて、ふと私の氣の附いたことは、その男の全體の顔は決して恰好の惡いものではないのだが、少し大振りな口元の、見る者に一寸氣になる程度にふくれてゐる鹽梅が、何と言つていゝのか、やつぱりその一寸氣になるやうな種類のもので、それが物を言ふ時に唾を含むところなぞ、益々氣になるやうな種類のものなのだ、アハハハハ、とそしてその氣になる口を尖らして、大きく開いて笑ふ癖があつたが、すると、その唇がやつぱり氣になる程赤いのだ。

「いやア、あの時はいつになく頭に來ましてね、」と佐山がこれ又特徴のある唇に、癖の、手を翳しながら、「ワツハツハツハ」と例の豪傑笑で報いて、「あれから電車を逆に乘りこしてね、厩橋で下りると、もう歸る電車がないんでせう、仕樣がないから、それから車に乘つて、家に歸つたら四時でしたよ、それがひどい車屋でね、三圓とられましたよ。」

それだけの會話があつてから、佐山が、

「牛田六郎君です、」とその男を私に紹介した。

「いや、始めまして……」と彼が私にした挨拶は仲々丁寧で、「お名前はいつでしたか、××君から伺つたやうに思ひますが、どうか宜しく、」と述べた。

それから又重に佐山と半田との會話に移つたが、それを傍から聞いてゐて、略々私に分つたことは、後者は文學志望の青年らしく、もつとも佐山に向つて「先生、先生、」と呼び掛けてはゐるが、先にも言つたやうに、口のきゝ方なぞは、前者を先生と呼ばない私よりもずつと自由で且ぞんざいだつた、言はゞ『先生』といふ符牒のやうに聞えた、そして又、彼の出現と共に、佐山の態度がぐつとそれ迄よりは捌けて、同席してゐる私までが樂な氣持になつたのは事實であつた。

そのうちに色々な御馳走と酒が持出されたが、これは無論半田に向けられたもので、私もそのお相伴に預かつた次第に違ひなかつたが、それから兩者の取交はす會話から、私は半田が千葉縣の津田沼にある彼の家の別莊に住んでゐて、現にその日もそこから私たちの前に並べられた御馳走の中のお吸物に入つてゐる蛤を土産に持つて來たこと、彼がそこで親から仕送りを受けて夫婦で水入らずに暮してゐること、東京に來ると彼は佐山のところに來て、二人で酒を飲むらしいこと、東京には佐山の外に別に尋ねる友達らしい者を持たないこと、以前獨乙語の學校に少し行つてゐたことがあつたが、何か放蕩でもして中途退學をしたこと、今のところでは吉井勇張りの歌を作つてゐること、現にその日も佐山の主任をしてゐる雜誌への歌の原稿を持つて來たこと、などを推察することが出來た。

「失敬ですが、君は今何かして居られるんですか、何處かに勤めてゞも……？」と何かの話の切れた時に、半田が私に聞いた。

「いや、何にも、」と言つて私は頭を搔きながら、「何にもすることがなくて困つてゐるんです、」とつひ本音を吐いてしまつた。すると、

「ぢやあ、どうです？」と半田はそのぎよろりとした目を一層大きく見張つて、膝を乘出して言つた、「どうです、津田

泊に來ちやあ？　それや實に氣樂ですよ、景色がもう少しいゝと何なんですがね、だが退屈すれや此方へやつて來れやあいゝんです、汽車賃は往復たつた五十錢ですからね。一人でせう、細君おありになるんですか？……部屋くらゐ何處だつて貸してくれますよ、探したげますよ、兎に角、一遍、どうです、遊びに來ませんか？　さあ？　もう蟹はないが、鳥ならいくらでも御馳走しますよ、ねえ、先生、」とそこで彼は佐山の方に向つた、見ると、佐山は彼が私にそんな風に近しく話しかけるのが、餘り氣に入らないらしい顔附だつた、が、半田はそんな事には一向かまはない風で、「ねえ、先生、この間も黒須や何かゞ二三人でやつて來ましてね、みんな行ける連中ばかりでせう、どうでせう、四人で七升空けましたよ、そして歸りに銘々鳥を一羽づゝお土産だなんて、此方から言ひもしないのに、勝手に持つて歸つてしまふんですからね、堪りませんよ、亂暴な奴等つたら……」

すると、その時佐山が、便所にでもだらう、立つて下に行つたので、後に半田と私とが差向ひになつて殘つた譯だつた。

「あなたは佐山さんとは隨分前からお近附きなんですか？」とそこで私は聞いて見た。

「いゝや、そんな譯でもないんですがね、」と相手は打消すやうに答へた、「つひ東京に來ると、行くとこがないものですからね、友達がみんな國へ歸つたり何かしたものですから……。今話しました黒須といふ男は埼玉縣の粕壁といふとこにゐるんですがね、」と言ふやうな話をしてゐたかと思ふと、何と思つたのか、急に聲をひそめて、「駄目ですよ、駄目ですよ、こゝの大將なんか、意地が汚なくて、老耄れで、それにすけべつたらないんですからね。後で二人で何處かへゆつくり飲み直しに行きませうよ。」

「えゝ、有難う、」と私は答へた、「だけど、僕もう、お先に失敬しようと思つてるんです、あなた方何かお話がおあり

になるんぢやあないんですか？」

「いゝや、」と彼はその色の赤い唇を突き出すやうにして、低い聲で言つた。「用なんかないんですよ、原稿を賣りつけに來たんですからね。だけど、もう少し酒を出さしてやりませうよ、いゝんですよ、いゝんですよ。君も外に用はないんでせう？」

「えゝ、だけど……」と私は曖昧な返事をした。

それから、彼に、どちらにお住居か？ とくどく聞かれたものだから、私は仕方がないので、神田の何町の何といふ下宿、とつひ詳細に教へたものだが、實はまだ前のあの困り者の私のをんなとのいきさつから、僞名をしてゐた續きの時分だつたし、それにその下宿だつたつて、明後日までもゐられるかゐられないか分らない狀態の時だつたのだから、その所を言つてしまつてから、相手に、では、後でか、歸つても明日もう一度此方に出直して來ようと思つてゐるから、その時にか、是非尋ねる、と言はれて、大きに恐縮してしまつたのであつた。そのうちにも、私の事情を知らない彼は、袂から萬年筆と紙の切はしとを探り出して、それに私の所書を念のために書いてくれ、と迫るものだから、私は思ひ切つて、實は少し譯があつて、恥かしい話ですが女の事件なんですがね、と言ふと彼は半分聞いて、如何にも我が意を得たと言つた風に、「ちやあ、屹度女といふのは藝者ですね」(この男、見かけに依らぬ、洞察力の鋭い人物だな、と私に思はせたほどで……)「いや、お互ですよ、お互ですよ、いづれゆつくり詳しいお話を聞きませう、」と言つたものだ、で、私は川下といふ僞名で下宿してゐることと、明日は何だが、明後日あたり外に變らうと思つてゐることを話してゐるところへ、下から佐山が上つて來たので、二人はそこで會話を打切つた。

佐山が現れると、半田の態度はけろりと以前の恰好に一變して、さて今度は何の話をするかと思ふと、田原とかいふ、

退職陸軍大將で、目下は何とか局の局長で兼ねて何とか會社の重役見たいになつてゐる、有名な實業家の息子と、外に何とか言ふ男爵の次男と、その他二三の總て私たちよりはずつと上等の身分の子弟たちと共に、彼等は皆牛田の親友なのださうだが、今度田原の父の手で陸軍の方から一切の皮革類の拂下げをして貰ふことになつて、それで非常に有望な株式會社をこしらへるのだ、その下相談會が四五日中に催される、それ等の人たちは皆多少文學のたしなみのある人たちで、幸ひ佐山の名を知つてゐるから大變好都合だから、その時に出席して、以後、面倒だが、その會社の記錄の方の用事で時々相談に乘つて貰ひたい、その代り金はうんと出させるかどうか? それに先づ差當つてその會社の定欵を三枚位でいゝから書いて欲しい、それはそれで別として、まあその原稿料として五百圓は拂はせる、その方は三四日中に催される下相談會の時に、手附といふと何だか、貰つておいても差支ないでせう、ね? 三百圓だけは屹度出させることにするから、是非來ていたゞきたい、と言つたやうな、私などには極めて緣の遠い、だが盛んな話が始まつたものだ。

「ね、來て下さいね、」と牛田はそして幾度も駄目を抑すやうにして言ふのだ、「屹度來てくれるでせう、ね、僕が迎ひに來ますから、ね、自働車で、先生。今度は此間見たいに醉拂つても大丈夫ですよ、若いのでも年增でもお好み次第の接待役を置いときま〻から、アハハハハ……」と彼は例の氣になる口附を十分に發揮して笑ふのだ。

「えゝ、行きますよ、行きますとも、」と佐山は口髭の上に手を翳して、左手で盃を持ちながら答へるのだ。

「ね、そして定欵を書いて下さいね、三枚位でいゝんですから、」と牛田、

「えゝ、書きますよ、」と佐山、

と言ふやうな話は、どうも餘り神經系統の強くない私には、決して心よい刺戟ではないのだが、惡い癖で、立ち際のはきはきしない私はそれでも去り兼ねて、もぢもぢしてゐると、ふと又牛田が私に向つて、

「梅野君、」とその飛び出した目をぎよろつかして、氣になる口を開いて言ふには、「君は津田沼で當分靜養するつもりで、あそこの役場に勤める氣はありませんか？　勤めるツたつて、僕がうまく談判しますよ、なアに、朝九時頃から行つて午後三時か四時頃まで、たゞ行つて椅子に坐つてさへすればいゝんです、少し馴れたらそこから寫生にでも何でも行けますよ、氣樂ですよ、そして勉强が出來て……。役目は、助役が病身なものですからね、その助役の助役といふやうなものなんです、僕はもう半月ほど前から村長に頼まれて、昨日も途で遇つたら、誰かお友達にでも椅子に坐つてくれる人はないか、と言ふんです、保證人が二人要るんですがね、それは僕と、外に村で一番の資産家で貴島といふのが僕んとこと懇意なんですが、その人と二人で保證人になりますから、ね、どうです？」

「僕のやうな者でもなれるんですか？」と私は膝を乘り出したことであつた、私には外のことを考へて見る餘裕なぞあり得ようがなかつたのだ、この年になる迄、及ばずながら勵んで來た畫をかくことも、土にかじり付いても東京を離れたくないといふそれ迄の考も、をんなとのいきさつ以來姥捨山へのやうに捨てゝ顧みない母のことも、さては半田の話の眞相も、何も考へる暇を持たなかつたことだ、私が別れた、だがいつ舞戻つて來るかも知れない私の厄介者のをんなから、又あの善良には違ひないが、やつぱり恐い髯の三百代言から、そして水族館の帳場部屋のある下宿屋から、逃げて且自分の身だけどうにか入れて匿まつて養つてくれる巣さへ出來ることなら、それが本當に膝を容るゝだけの部屋であり、文字通り口を糊するだけの暮しであらうとも、助役の助役が燈臺守でも別莊番でも何でも厭ひはしない、と考へたのは、凡夫の事なら大した無理からぬ次第に違ひないのだ。「僕で勤まるのなら、僕はもう當分畫なんか止してもかまひません、何とかお世話をして下さい、」と諺に言ふ『地獄で佛』に會つたやうな嬉しさで、さうなると相手の氣になる口附さへ今はもう目に入らないのだ、私は彼の袖に縋るやうにして賴んだことだ。

「君さへ承知なら、いつでもお世話しますよ、」と半田は威勢よく、だが多少空元氣らしいのが氣になつたが、言つてくれた。

「だが、お互にもう少し考へてから定めた方がいゝでせう、」とその時佐山が傍から口を出して、「半田君、さあ、熱いのを一杯どうです？」と彼は確に、私の邪推ではなく、私たち若い者同志が仲よくなることを願はないらしく、多分老人特有の嫉妬心からであらう、私たちの話の進行をどうかして妨げるやうに見えたことだつた。

そこで、それから又彼等同志で頻りに盃の遣り取りをしながら、先の皮革會社に就いてやら、かと思ふと文學美術などを以て生活しようといふことの非常な心得違ひであるといふことに就いての色々な話やら、飛んで酒は何酒が最もうまいか、金釜か、銀釜か、月桂冠か、福娘か、とか、どこの料理屋の酒はどうだ、とか、嘗て飲んだ酒の話に就いてやら、さうして縱横に歡談を交はしてゐるうちに、半田の顏色がだん／＼青くなつて來て、その善良らしい、ぎよろりとした目が更に一層妙に突き出て來たやうに見え出したかと思ふと、彼は

「梅野君、一寸失敬します、先生、御免、」と挨拶して、その場にごろりと手枕をして横たはつたかと思ふと、忽ちぐう／＼と鼾をかき出したが、それから三分間も經つた時分に、けろりとした顏をしてふら／＼と立上つて、何とも言はずに、便所にでも立つたのだらう、下に下りて行つてしまつた。

だが、そして私が彼の直にも坐に戻つて來るのを心待ちに熱心に待つてゐるにも拘らず、ちつともさういふ氣配が見えない上に、彼がゐなくなると共に佐山の態度が急に無愛想になつてしまつたものだから、一向話がはづまなくて、困つて、

「半田君はどうしたんでせう？」と私が相手に聞くと、彼は

「下で寢てるんでせう、」と極めて冷やかに答へる切りなので、私は折角見出した希望の光であるところの、津田沼の役場の話に十分心を殘しながらも、どうにも居堪らなくなつたので、

「では失禮します、」と氣を引くやうに言ふと、相手は待つてゐたと言ふやうに、「さうですか、ちやあ……。今日牛田君と外に一寸込入つた話がありますから、」といふ挨拶なのだ、で、すつかり斷念して、段梯子を私は佐山に送られながら下りて來ると、玄關の次の間のところに、牛田が、多分佐山の細君に掛けられたのだらう、ぐう／＼と鼾しながら蒲團をまとうて寢てゐたものだから、一寸挨拶しようと思つて、「牛田君、牛田君！」と聲をかけると、後からつゞいて下りて來た佐山が、「いゝでせう、少し寢かしておく方がいゝでせう、私からよく言つて置きます、」と又も追ひ立てるやうに言ふので、何か惡いことでもしたやうに、あわてゝそこ／＼に彼に挨拶して外に出て、ばかに赤い色に見える十一月の日光を浴びた町の景色に接しると、今迄のことが夢のやうな氣がしたものだ、そこには走る車も、歩いてゐる色々の人も、犬も、自働車も、電信柱も、巡査も、何も彼にもが、佐山とも、牛田とも、皮革株式會社とも、正宗とも、文學とも、津田沼とも、一切何の關係もなく行動してゐたことだ、そんなものは皆嘘か夢かでせう、と言つてゐるやうに見えるのだ、それに誘はれて一瞬間私も一寸そんな氣がしたことだ、だが、夢か嘘かであつてくれといくら望んでも、水族館の帳場の下宿屋は夢でも嘘でもないのだ、私は泣けさうになる程困る氣に襲はれた、さすれば、津田沼の助役の椅子よ、汝も亦夢でも嘘でもなく、私に現れて、私の今の難儀な狀態から助けてくれエ、と念じながら私はとぼ／＼と赤い日の輝く町を歩いたことだ、

二　發端の續

その翌日、私はいち日首を轆轤首のやうにして、今か今かと牛田六郎の訪問して來るのを待つてゐたが、丁度私の部屋が下宿の入口の、例の水族館の帳場部屋と相對した、左側の取突き(とつつき)にあつたので、三十幾人の止宿人たちを尋ねて來

る客は言ふ迄もなく、帳場部屋にやつて來る八百屋魚屋の足音から呼び聲まで、それ等に一々聞き耳を立てるだけで十分神經衰弱になる程注意して、終には、その下宿屋のある通が横町なので、比較的人通りの少ないために、そこを歩いて通る人の足音にまで耳を立て、果は机の前の障子を細目に開けて、そこに嵌まつてゐる千本格子の隙間から町の樣子を展望までしたが、そのうちに心細い日が暮れてしまつて、その時の私には十七歳の青年の戀人よりも待たれたところの彼が、到頭姿を見せなかつたものだから、そこへ無愛想な女中の手で運ばれた、全く砂を噛むやうな味しかしない夕飯を濟ますと、私はこそ〲と忍ぶやうに、水族館の帳場部屋の前を見て見ぬ振をして通り拔けて、もうすつかり暮れしまつた夜の町に出たが、時は十月の末なのだから、町の空氣はじわ〲と水風呂に浸るやうに膚寒いのだ、貧乏人には時候の冬が敵だといふことは、言葉だけでは合點してゐたが、二十八歳のその秋の晩に、私は始めて、なる程さうだ、貧乏人には時候の冬は確に敵だわい、と心からさう思つたことだ、それ迄は如何に貧乏しても、まだその貧乏を人との會話の種(たね)にする程の多少の餘裕を持つてゐたが、文字通り一枚一枚と着物を上から、それが他人の追剝(おひはぎ)なぞのせゐでなく、自分と自分の手で剝いでしましたことだから、誰を恨みようもなく、一枚の夏のまゝの白木綿に白のメリンスの襟を掛けた、もう地が痛んで腋の下あたりがぼろ〲になつてゐる肌襦袢と、一枚の、正に膝が拔け尻が拔けようとする、最後の一つ手前あたりの風情(ふぜい)のある袷の銘仙の着物と、よれ〲になつた紡績の袷羽織に胴震ひしながら、それでも町にはやつぱり明りがついてゐて、期日期日には間違へずに緣日も催されてゐたやうだ、だが、そんなところを當もなくぶら〲するだけの氣持の餘裕もないものだから、私は用ありげに大急ぎでそこを通り拔けて、そこから二三町行つたところの、勝手知つた鶴丸の下宿の部屋を訪問して見たものだ。

「鶴丸君。」と廊下の外から障子越しに聲をかけると、中に大勢の人の氣配がしてゐたが、誰の聲だか、「おう!」と答へ

て、「お入りなさい、」と言つたので、開けると、そこにはもや〱と紫の煙草の烟で風呂場をのぞいたやうな光景を呈してゐる中に、何でも六七人の人たちが車座になつてトランプをしてゐたが、それ等の人たちは總てそこの下宿の止宿人たちで、いつの間にか鶴丸と知合ひになり、引いて彼を屢々訪問する私とも知合ひになつた連中であつたから、「やあ、仲々賑かですな、」と言つて、私は遠慮なく部屋の一隅に適當な場所を目付けて座りながら、主人の鶴丸はどこにゐるのか、とそれは入つた時から物色したことであつたが、結局その場にゐないらしいことを發見したので、私の坐つた火鉢の向側に、トランプの仲間に加はらずに、所在なささうに煙草ばかりぷか〱吹かしてゐた一人に、「鶴丸君は？」と聞くと、「あの君は、」と何處の國の產だか、その時始めて見かけた人物で、變な言葉癖を以て答へて言ふのだ、「あの君は、この頃、國から親父さんが見えて居られるとかで、閉口しとりますよ。僕はよく知らんのですがね、何でも親父さんは、この上いつ迄あの君を東京に置いといても、成功の見込がないから連れて歸るちふんださうです、この前にも一ぺんそんなことがあつたんださうですがね、その時はあの君が頑張つて、その代りに乾度勉强するちゆふ約束をしたもんだから置いといてもらつたさうだのに、今度親父さんが來て見ると、前の時とちつとも變らない狀態だもんだから、親父さんひどく怒つて、今度はどうしても連れて歸ると言ふとるんださうです。そんな譯で、あの君は此頃毎日感心に朝も早くから起きて、親父さんの泊つとる宿屋へ行きよるんださうですが、さあ、どうなるですか……」

「やあ、川下さん、」とその時一勝負濟んだと見えて、斯う叫んで、例の車座の中から立上つて、私たちの火鉢の傍にやつて來た人物を、と見ると、太つた、太鼓腹をした、それに相當した布袋樣のやうな顏の持主で、彼はそこに集まつてゐた人々の中で私の最も懇意にしてゐた、××省とかに務めてゐる、月讀といふ變な名前の男で、だがその名前の話になると襟を正して自分は月讀命の末孫だといふことを、相手が笑つて聞くと益々眞顏になつて辯じ立てる癖のある、大

體に於いて太つた男によくある陰氣のない男だが、もつともこの男ともこの下宿で知合ひになつただけの間柄であるから、やつぱり川下といふ私の變名だけしか知られてゐないのであつた、彼が言ふには、「鶴丸君も今度は閉口してゐますよ、親父さんの言ふには、今度は歸らなけれや歸らないでいゝ、その代り金を一切送らないからと言ふんださうです、もつともこの最近には、毎月送つて來る金高が無斷で減らされて來ると言ふので、先生大分しよげてゐたところですからね、そこへこの有樣だから、先生もどうも今度は歸らない譯には行かぬかも知れませんよ、猪食つた報いですからね、アハハハハ、」と彼はその太鼓腹を片手で抱へて搖するやうにして笑つた、その時、

「月讀君、拔けるのかい？」とトランプの仲間の一人が叫んだので、

「やるよ、やるよ、」と叫んで、彼は威勢よく立上りながら、私に向つて、「どうです、あなたも入りませんか？」と勸誘した。

が、私は餘り好きなことでもなく、それに流石に呑氣者の私と雖も、目下の迫つた狀態が考へられて、氣が腐つて、とても仲間に交る氣になぞなれなかつたことだ、日一日と近づいて來る月末のことと、就いては牛田が今日來なかつたことと、明日は屹度來るだらう、來るなら、遙々津田沼から出て來るんだから、午前中に違ひない、さうだ、午前中だけ待つて見て、さて午後になつても來なかつたら、その時は何としよう？ こんな時に本屋の山本でもゐてくれたなら、どうせ目下は彼も彼自身の破產後の身の處置に困つてゐるに違ひないのだから、何のいゝ智惠も分別もつけてくれさうにはないが、それでも會つて色々話するだけでも心安めになる、なぞと考へたことだつた。そんなことを取止めもなく、そこはかとなく考へてゐると、その席にゐるのも少し苦痛である程愉快ではないのだが、と言つて、今夜あたりは尙盛んに速度を進めて、あの水族館の帳場部屋では、こちの主人がお輕の手紙めいた書出しの筆を走らせてゐるに違

ひないと思ふと、とてもうか〳〵と十二時を餘り早く前に自分の下宿には歸る氣になれないので、浮かぬ顔を頬杖で支へて、面白さうにトランプに熱中してゐる人々の騒を傍に聞きながら、そして彼等の様子を見てゐると、時々、『主よ、私に正しい生活を與へ給へ、そしたら、賭博も、飲酒も、遊蕩も、卽座に止めて見せます。』と言つた西洋人の言葉を思ひ出して、無意識に口ずさんだことだ、さうして一時間餘りも煙草ばかりぷか〳〵と吹かしつゞけてゐたが、その時突然外の廊下に聞覺えのある、異様な音を發する咳の聲が近づいて來たので、私ははツと生き返つたやうな氣持で顔を上げると、「今晩は、御免なさい、」と障子の外に甲高い聲が叫んだ、

「山本さんですか？」と私は反響のやうに應じた、「お入んなさい、山本さん！」

聲のもとに、山本は獨得の愛想のいゝ笑顔を浮べて入つて來て、私の顔を見ると、「川下さんですか、暫くでしたね、此間から二度ばかりお留守中に伺つたんですが、お留守でした。……皆さん、今晩は、相變らずおそろひですね、」と言つて、そして私の傍に中腰になつて蹲んだ。

「鶴丸君がひよつとすると、國に歸るかも知れないんですつてね、」とそこで私が報告顔に彼に言ふと、

「さうださうですね、」と彼はしかももう夙に知つてゐるといふ様子で、一向氣の乘らなさうな返事で答へて、顔はトランプ仲間の行動に一心にそゝいでゐるのであつた、その横顔を見ると、彼の不思議な頭の禿は、私が前に見た時とは、又場所を變へて、一層ひどくなつたものらしく、僅に頭の五分の一を占めてゐるのに私は驚かされた。

「山本さん、この次から入りますか？」と一坐の大將らしい恰好で、毛だらけの、そして大根のやうに太い足を胡坐に組んで、勝負に熱中してゐた月讀が、當然のことのやうに、顔を振り向けずに言つた。

「えゝ、どうか、」と山本は、これも當然のことのやうに、答へた。

で、私はその場の樣子から察して、「始終いらしつてるんですか？」と山本に聞くと、彼はきまりの惡さうな表情をしながら、

「えゝ、どうも毎日、家にはゐられませんし、お金はありませんし、仕樣がないもんですから……」と答へた。

そのうちに、ばた〳〵と一勝負片づいたと見えて、今迄生えたやうにぢつとしてゐた人々の頭が、急に林が風でも受けたやうにがや〳〵と動くと共に、「一寸、失禮、」と言つて、半ば を逃げるやうに山本はその中に割り込んで行つたので、私は又悄氣で落膽してしまつて、時々例の『主よ、私に正しい生活を與へ給へ、そしたら、賭博も、飲酒も、遊蕩も、即座に止めて見せます、』と云ふ言葉を、胸の中のむしやくしや退散の呪文のやうに口の中で稱へながら、元の無言の行に復ることを餘儀なくされたものだ。私の無言の行に引きかへて、傍の車坐の方はまるで宴席のやうにがや〳〵してゐて、中にも山本の甲高い聲が飛拔けて、「切札は何でしたつけな、」とか、「それや少し手ひど過ぎますね、」とか、「ぢやあ、斯うして置きませう！」とか、そしてその間を縫ふやうに「ヒツヒツヒツヒツ」といふやうな響を發するところの、獨得の笑聲が聞えた、私は益々しよげ返りながらも、ぷかりぷかりと煙突のやうに煙草の烟ばかり吐きながら、陰氣な考に沈み込んで、そして十二時近くまでの時間を潰すことに骨折つたことだ、だが、私の歸る時にも、トランプの車坐は仲々止みさうにない騷をつゞけてゐて、「さよなら、」とそれに向つて挨拶すると「さよなら、」と二三人の聲が答へたが、無論上の空の返事に相違なかつた。

そして、又日が明けて翌日になつたが、豫定の如く私は午前中だけをさへ下宿に蹈止まつてゐることが出來なくなつた、といふのは、此間うちから夜を日に次いで、こちの主人が硝子張りの帳場部屋の中で長々と書いてゐたものが、止宿人の頭數だけの三十幾つかに適宜に切られて、それ等の一人であるところの私にも、到頭その日、朝飯の膳の上に、

箸の下に添えて出されたことであつた。まだ物價が今日程高くならない時分のことだつたが、それでもその月の半分以上、私だけでなく、横濱に行つたをんなの分が含まつてゐるし、それに彼女がゐた時分には餘計な蕎麥だの、一品洋食だの、菓子だのと毎日程取つてゐたので、何と合計五十何圓也と嵩んでゐるのだ。五十何圓がその半分の二十何圓でも拂へないことに於いて同じではあるが、それを見た恐怖加減はやつぱりその文字の數字に比例するものと見えて、その家の習慣として、金を拂ふ月末前後になると定つて不斷よりは少々御馳走をすることになつてゐるらしく、香の物の皿に奈良漬を附け、鷄卵一箇さへ奮發してあつたその時の朝飯が、うまく咽喉を通らないのだつた。辛うじてそれを濟まして、半田が、半田が……と彼の來るのを籠城中の援軍宜しくの思で待ちこがれたものだが、やがて入口一つ隔てた例の水族館の部屋から、ボン、ボン、ボン……と時計が九つ打ち出した時には、私はどうにもぢつと坐つてゐられなくつて、ふと一策を思ひついて、――この部屋も今日限り、だから大事なものだけは身につけて持つて出なければならぬ、とそこらを見廻したが、呆れたことにはそんなやうな物が半分とないのだつた。――いつものまゝの恰好と内容で、こそこそと、出る時に、「お晝過ぎに歸りますから、もし半田といふ人が來たら、」と鶴丸の下宿の電話の番號を言つて、丁度日曜日だつたから月讀の名を言つて、その人に知らしてくれと頼んで、それから鶴丸の下宿に行つて、鶴丸は案の如くゐなかつたので、月讀にその事を話して、もし下宿から半田といふ人が來たと電話が掛つて來たら、その人に電話口に出てもらつて、本郷の斯う斯ういふ所に私が待つてゐるから、そこに直ぐ電話をかけるなり來てくれるなりするやうに言つてくれ、とくれぐれも頼んだものだ。それはやがて私の居所を探すことになるに違ひない下宿屋に、私の行先を知られないための仕事なのだ。

それから私の出かけた本郷の友達といふのは、先に一寸話した、佐山と同郷の、私を彼に紹介したところの、文學を

やつてゐる人物なのだ、私は實はずつと以前に、繪の方の傍ら生意氣に文學をやらうと思つて、一二ケ月ほど或私立大學の文科に籍を置いたことがあつたが、その時に學校で知合ひになつた、以來の彼は友達なのだ、それからもう五六年になるが、私は依然として乏しい繪の具で畫をかいたり、又最近の一二年はヒステリイのをんなのために殆ど何にもしないで碌々と送つたことだが、彼、名を木戸參三と呼ばれる人物も、何をやつてゐるのか、いつ行つても雜誌を讀んでゐるか、私なぞには讀めないから一寸豪さうに見えるところの、原書の小説などを讀んでゐるか、或ひはそれを飜譯してゐるんだと言つて、原稿紙をひろげて何か書いてゐるか、五年前も一二年前も、彼にだけは月日といふ事がちつとも廻らないかのやうに、同じことをやつてゐるとしか見えないが、未だに一向頭角を現さないのであつた、人間は極めて大人しくて、善良で、眞面目で、その辯頭も惡くはなささうだし、人の話では語學は大變出來る男ださうで、念入りにも英吉利語と獨逸語と佛蘭西語とに迄通じてゐると言ふのに、一體何をしてゐるのだらう？ その日も私が尋ねると、枕元に二三冊の古ぼけた本と、回讀會のらしい新刊の雜誌と、原稿紙とを亂雜に散らかして、蒲團をすつぽり頭から被る癖と見えて、その中から三寸近くの長さに延ばした髮の毛の頭を半分のぞかして、十一時に近かつたらうが、まだ『白河夜船』と定めこんでゐたのものだ。

「よを！ 珍らしいね、」と彼は私に起されて、仰向いたまゝ、被つてゐた蒲團を頤の所まで引下げて、眠さうな目を見張りながら言つた。それから、濟まないけれど、そこの柱のとこのベルを押して、女中を呼んで火と茶を命じてくれ、とか、今起きるよ、とか、で、私は、いゝよ、そのまゝにしてゐ給へ、どうだ景氣は、何か仕事をしてゐるか、相變らず貧乏か、なぞとそんなことを聞きながらも、心はその場になかつたことだ、半田はやつぱり來ないのかしら？ 來れば電話が掛るかこゝへ尋ねて來るかする筈だか？ とその事ばかり考へてゐたが、そのうちに私の方から何か言つても一

向返事がないので、見ると、木戸は又眠つてしまつた樣子なので、私はそこらにある雜誌などを手當り次第に見たりしてゐたところが、突然、入口の方でガン、ガン、ガン、と半鐘の音が起つた、私が驚いて目を見張つてゐると、「やあ、」と蒲團の中から、その音に再び目を醒ました木戸が叫んだ、「失敬、々々、此頃はちつとも夜眠れないもんだから、今朝も四時頃に寢た始末だ、今、起きるよ。……」

「何だい、あの半鐘は？」と私が、まだ五つ六つ鳴つて、その最後の音の餘韻がウーウーウーウームと響けてゐる鐘の音に耳傾けながら、聞くと、

「あれや十二時を知らす半鐘なんだよ、」と蒲團の中からの聲が何でもなささうに答へた、「基督教徒でね、こゝの家がお上が女子大學卒業生なんだが、彼女の趣味なんだらう、半鐘は、玄關の横手に吊つてあつたらう？」

女子大學卒業生の、基督教徒の下宿屋のお上の考案になる半鐘は頗る結構だが、それが十二時を報じたと聞くと、私は今日ももう半田は來ないのかな、と思つて大きに心細くなつて、「もう十二時か、困つたなあ、」と獨言ちた。

「どうしたんだい、十二時が困つたといふのは？」と木戸は漸く腹這ひの姿勢になつて、その長い髮の毛の頭を振りながら、色黑の、これと言つて特長のない、小さな頭を上げて聞くのだ。

「いや、なアに、別に大した事ぢやあないだがね、」と私は言つた、「年々歳々一向改まらない月末の心配だよ。君の方は近頃どうだい？」

「いづこも同じ秋の夕暮だよ、」と彼は柄にない言葉を吐いて、後は恥かしさうに笑にまぎらした。

「でも、」と私は執固く追及して、「下宿屋の月々の拂はどうにかやつてるんだらう？」と聞くと、

「どうしてどうして、」と彼は言つた、「今度で丁度半年たまつてるんだ……」

私は驚いて、「そんなによく待つてくれるね、僕んとこなどとてもそんな譯には行かないよ、」と言ふと、「行かないつたつて、なけれや仕様がないぢやないか？」と相手は身體に似合はず仲々太いことを言ふのだ。「催促しに來ないかい？」と聞くと、「それやたまにはしに來るさ、」「たまに位かい？」「まあさうだね、」「その基督教徒のお上が來るのかい？」「いや、來るのは女中だがね、だが、女中など相手にしてゐたんぢやあ氣がきかないから、返事や言譯はいつも文書で、それを女中に持たしてやるんだ。今度はさすがに半年目にもなるのだから、いつもと違つて彼女の方から先を越して手紙をよこしたよ、」「やつぱりお輕の手紙見たいな長いやつかい？」「何だいお輕の手紙といふのは？ レター・ペーパー二枚だよ、」「返事を出したかい？」「今度は困つたよ、あんまりもういつも女中に、女中だつて内容を感じるだらうからね、此方からの手紙をことづけるのも少し恥かしくなつたから、昨夜も寢てから考へたんだが、表へ出て郵便箱にはふり込んで來ようかと思つてるんだ、」「馬鹿にしてるね、フフフフフ、」「だつて仕様がないぢやないか？」

だが、實は私はこの呑氣みたいな會話の後、益々心細くなつて來たのであつた、といふのは、大抵駄目だらうとは思ひながらも、若しかして彼がどうにかうまく下宿屋を過ごしてゐたなら、たとへ一日でも二日でも居候においてもらはう、とさうはつきりではないが、意識の底で多少の期待をしてゐたことだつた、會つたら多少の金を借りよう、とやつぱり暗々のうちに期待してゐた山本とは、昨夜あんな状態で會つて別れたことだし、今又木戸がこんな風なので、愈よ望は津田沼の新らしい友達の半田一人にかゝるのだが、その半田を待つことが、今は又夢よりも他依りない感じになつて來たのであつた、そして自分も、半鐘で睡かされてもいゝから、こんな寛大な、基督教徒の下宿屋に下宿して置けばよかつた、と木戸の身分が大きに羨まれたことだ、が、今更羨んだつて、今迄の水族館の下宿屋に下宿したことを取消す譯には行かないことだ。

「君は一體怠け者だからいけないんだよ。」とそれから私は默つてゐるのも辛いので、途方もない、但し冗談めいた口調でだが、非難の矢を向けたものだ。

「怠けてるもんか、君。」と、すると、木戸は恨めしさうにその小さい、黒い顔を蒲團の中から突出して、「それどころか、當のある仕事は一寸もないんだが、だと言つて、手を束ねてゐると變に心細くて堪らぬ氣がする上に、さうしてゐると頭ばかり活動しやがつて、厭世觀ばかり發達して、退屈病が膏肓に入るもんだから、と言つて僕はその憂さ晴らしの小說も書けないもんだから、手當り次第に飜譯をしてるんだよ。大したもんだよ。そして僕がこの一年半程の間に、こんなものなら賣れるだらうか、あんなものはどうだらうか、とやりもやつたもんぢやないか。コナン・ドイルもあるし、ゾゴオルもやつたし、ロオラン、チエホフ、ストリンドベルヒ、オー・ヘンリイ、……みんなで彼れ此れ三千枚くらゐ、その押入の中に古新聞と一緒に積んであるよ。まだ一つもそれが僕の名前で賣れたものはないんだ。そのうちに流行が遷れてしまつてね。」と言つて、變にうそ寂しい笑ひ方をする男で、「えへへへへ。」と彼は威勢のない聲で笑つて、そしてつゞけた、「もつともその中に二つ三つ人の名前で賣つて貰つたものはあるが、それでまあ六ケ月前までの下宿料になつてゐたんだがね、君、知つてゐるだらう、佐山? 彼のとこへも二つばかり。もつとも今ぢやあもう彼の名前で買ふ本屋もないだらうがね、せい〲彼の名前で通用しさうなものを持込んどいたんだよ、ところが、いつ迄經つても賣つてくれないのはいゝがね、最近に何かの新聞の廣告で見ると、どうだ、僕のその飜譯を燒直して、『何とか何とか物語』だなんて、すつかり先生自家藥籠中のものにしてしまつてゐる譯だ。でね、此間催促のつもりで訪問したら、どうも近頃出版物は不振らしい、殊に飜譯物はてんで駄目ださうだ、と言つて、僕の原稿を返すんだよ。そしてその著書の燒直し問題に就いては一言も斷りなしだ、僕は何とも言はずに歸つて來たがね、えへへへへ……さあ、今度こそ起きようかな。」

と言つて、彼は鼬のやうににゆうと首を蒲團の中から突出したが、「やあ、もう朝夕は大分寒くなつたね。……しかし彼も無理はないよ、前の細君の子供が二人と、前の前の細君の子が一人と、そこへ今度のあの細君、あれはどこかの馬肉屋の女中なんださうだがね、身持になつたもんだから、丁度前の細君に逃げられた後釜に据えられたんださうだが、それが生んだのが双子と來てるだらう、いつそ僕に賣れないのなら、そして彼が僕の十倍も困つてゐるのなら、僕の翻譯をもう二つや三つ提供してもいゝかも知れないがね、僕だつて此間は一寸腹が立つたよ、えへへへへ、……」

「その筆法で言ふと、」と私は言つたことだ。「僕も君から思ふと、母親といふ者を一人餘計に背負つてゐる譯だから、君の翻譯原稿を一つ位たゞで貰ふ資格があるね。」

「どうせ賣れないんだ、いつでもお好みのものをやるよ、コナン・ドイルか、タゴオルか、チエホフか、ストリンドベルヒか、それともオー・ヘンリイか？……」

そして二人で、洞穴の中でのやうな響を籠らす聲で笑つたが、その瞬間、ふと又私は津田沼の牛田のことを考へ出して、彼の姿も見えないし、彼からの電話も掛らないのが無性に心細く感じられたものだから、いきなり默つて飛上るやうに立つて、玄關脇の、成程、半鐘の吊つてある、その隣の電話室に入つて、鶴丸の下宿に電話をかけて、月讀を呼出したところが、電話口に出て來た聲は彼のではなくて、鶴丸ので

「やあ、暫くでした、」とその聲が言ふのだ。「僕、愈よ今夜の汽車で親父に引張られて國に歸らねばならぬことになりました、厭で厭で仕様がないんですけど、もうこの上は一文も金を送らないと言ふもんですからね、さうなると生死問題ですからね、仕様がありません、今度は又いつお目にかゝれますか……」

その聲が、彼のいつもに似ず、ひどく悲しさうなので、私は急に一寸でも彼に會ひたくなつたものだから、「まだ一二

時間はそこにゐますか？」と聞くと、「今親父が來てゐました、これから又彼のお供をして麹町の親類まで行くところです、」との答なのだ、がつかりして、「ぢやあ、さやうなら、」「さやうなら、」と電話を切つた、そして切つてから、肝心の始の用事を思出して、又あわてゝ電話をかけ直して、それが仲々混線なんかして通じなかつたが、やつとして通じたので、鶴丸を呼ぶと、今度は先の反對に月讀が出て來た、「僕の下宿から、さつきお話した電話が掛つて來ませんか？」と聞くと、「いゝえ、掛りません、」と言ふ、そこで切つて、なんだ、掛けるだけなら此方から掛けても差支へない譯だ、と今度は直接に下宿にかけると、こちの主人の聲で、「誰もお見えになりません、」との答だ、「さう、ぢやあ、」と言つて切つてしまつた、私がしをれ返つて木戸の部屋に歸つて來ると、彼は依然として、蒲團の中から首を突出したまゝで、ぷかぷかと眞鍮の煙管で煙草をふかしてゐた。

それから、私はもう氣持がぢつとして居られなくなつたので、他依りにならない人間たちではあるといふものゝ、その木戸がこの狀態だし、その鶴丸が今夜切り東京から姿を消してしまふことだし、何と胸の中を北風が吹き通すやうな氣持に襲はれたことだ、その時私の袂には電車の復の切符と金十錢があつたきりだ、で、木戸に無心すると、彼は一文もないと答へた、で、津田沼行きの事情を打明けて重ねて頼むと、その位なら何とかしようと言つて、彼は押入の中から古新聞と古雜誌とを出して來て、それを、屑屋を呼んで、賣つてくれたが、それが三十錢にしかならなかつた、津田沼往復五十錢には十錢不足だが、それでもよし、それでもよし、有難う、と言つて、貰つて、袂の中に金四十錢をぢやらぢやらと鳴らしながら、私は兩國の停車場に向つたのであつた。

（これは失敗つた！　ほんの前置だけの話が、いつもながら、斯く不しだらに長たらしくなつたことを、平に讀者の寛恕を乞ふ。）

三　津田沼行き

千葉縣なんて同じ日本の國に違ひはなからうが、自分とくつ附けて考へたことなぞはこれ迄一度だつてなかつたし、まして津田沼なんて名前さへ聞いたこともない所に、だが、來て見れば、何處の田舍の停車場の前も殆ど版で押したやうに同じ光景を呈したものだ、驛前の旅籠屋や、支度所や、ガタ馬車の出入する所や、折からそれの客を呼ぶ喇叭の音が、夕暮近い時刻のこととて、センチメンタルな調子に鳴り渡つてゐたことだ。だが、私の行かうとするところは、それさへ通じない海沿ひの村とかで、敎へられたまゝに、私は鐵道線路を横切つて、何かの聯隊の前に出て、それが近道だと敎へられたので、その聯隊を仕切つてゐる土手に沿うて、大きな大きな原つ場に進んだ、ふと傍に立つてゐた立札を見ると、練兵中は通行を禁止するとか何とか認めてあつたから、それは練兵場なのだらう、路さへついてゐないその凸凹の草原は、私の行手の方に無限に廣がつてゐるやうに見えるのだ、その果が海につゞいてゐるのだらう。更に私の驚いたことには、そこでは太陽の色さへ違ふと見えたことだ、なる程、日の暮に近いことだし、秋のことだし、少しは赤いのも不思議はないが、その草原の光景と來たら、これや世界がどうかなるんぢやあないかな？と思はれた程、一面に紅殼でも撒いたやうに、眞赤なのだ、だが、兎に角妙にうそ寂しくて、しう〳〵と膚寒い風が吹いて、自分の吹く口笛の音さへ十里四方に響くやうな氣のする、「いづこも同じ秋の夕暮」の景色だ、おまけに兵營からは夕方の喇叭が鳴り渡るのだ、喇叭の響が兵營の百の窓に震へるのだ。その中を進んで行くと、見渡す原つ場に、兵營と離れて、家の屋根のやうな形をした、規丁面な箱見たいな恰好をした丘のやうなものが見えるのだ、それも亦、言ふ迄もなく、着色したやうに紅いのだが、近づくに從つて、見ると、何かの家か藏かのやうなものを、高い土手で四角に圍つてあるらしく、そ

いので、中の家のほんの屋根の一部しか見えなかつた、何だらう？　兵隊のゐる所には、時々をかしなものがあるもんだが、と思ひながら、南に向つて急ぐ私はその下を通りかゝつた、そこ迄來ても、まだ原つ場の果も見えなければ、つゞく海のおもても顏を出さないのだ。その時、私はふと頭の上に人間の氣配がするので、驚いて見上げると、傍の背の高い土手の塀の上を、一人の鐵砲を擔いだ兵隊がのそり〳〵と歩いてゐたものだ、私ははつとして、これは近づいてはいけないところを、うつかりするとその爲に牢屋にでも入れられるところを、歩いてゐるんぢやないかな？　といふやうな氣がして、と言つて急に足を早めると、尙怪しく思はれては、と氣が引けたので、わざとその土手にもたれて腰を下ろしたものだ。私は何とも心細くてならないことだつた、行先のまだ見當がつかないし、生憎人一人通らないし、この上は一言くらゐ叱られてもいゝから、頭の上の恐らしい番兵の兵隊が、何とか聲をかけてくれたらいゝがなア、とさへ思つたことだつた、さうなると、尙一層變に度胸が出て來たので、私は少し傾斜が强過ぎて具合が惡かつたが、兩腕を頭の下にして、仰向けに寢そべつたものだ、あたりの夕方らしく赤々と燃えてゐるのに引きかへて、天は仲々冴え返つて高いのだ、困つたなア、と。何が困つたのか、何も彼も困るのだが、兎に角譯分らずにそんな獨言を言つて、溜息をついたことだつた、だが、兵隊はもう私の頭の上を背にして通り過ぎたものか、何とも聲をかけてくれないのだ、私は目を閉ぢたが、頭の中が煩だらけのやうに何にも考がつかないのだつた。

　すると、暫くすると、二三分後のことだが、私がもう頭の上の兵隊のことを忘れてゐた時分に、突然天から降つたやうに、

「おい〳〵」と土手の上から聲がした、私が驚いて見上げると、私の鼻の下に髭が附いてゐるのを見たためか、それから、聲の主の頭の上の兵隊は多少言葉を改めて、「君、そんなとこに寢轉んぢやあいけないぢやないか……」

「はあ、」と私は藻拔の殼見たいな聲で應じて、のそ〳〵とお尻を上げながら、「一寸お尋ねしますが、新濱といふのはこゝを眞直に行つたらいいのでせうか？」と何と思つたのか、叮嚀に帽子をとつて聞いたものだ、ところが、相手の兵隊は、これも私見たいな氣質の男と見えて、忽ち鐵砲を持つてゐない方の手を擧げて、おくれ走せに土手の上から敬禮をかへして、

「新濱といひますか？」と彼は知らないらしく、それを大きに氣の毒に思ふ調子で答へた、「知りません、が、こんな方に來ないで、向うの森の横に路があるから、あそこを東に三丁ばかり行くと人家のあるところに出る、そこで聞いて見給へ。」

「有難う、」と言つて、私は彼と別れ際に、「その建物は何ですか、君のその番をしてゐる……？」と聞くと、

「火藥庫であります、」と相手は更に叮嚀な言葉で答へた。

火藥庫と聞いて、臆病者の私はひどく驚かされたので、「有難う、」ともう一度禮を言つて、すた〳〵と教へられた森の横の路に急いだ、そしてそこまで行つた時、やつと安心して、遙かにはなれて來た、四角な小山のやうに見える火藥庫の方を振り廻ると、夕日を背にしてゐるものだから、眞黑にそれが影畫のやうに見える上に、これ又眞黑に小さく、玩具の人形のやうに先の兵隊の歩いてゐるのが見えたところで、「あの火藥庫の番兵の方がまだ俺よりいゝ身の上かな？」と思つたものだ。その時、私に羨まれたものは彼ばかりではなかつた、森の横の細道を通つて、家々の立ち並んでゐる村に出た時、第一に目に止まつた法界屋の夫婦をもさうだ、彼等は手に手をとつて、木賃宿へだらうが、塒に急ぐ小鳥の恰好で、いそ〳〵と私の前を歩いて行くのだつた、歩きながら、それの男の方が、もう明らかに商賣のためではなく、手弄びのやうに『さのさ』を月琴で、足並に合はすやうに、彈いて行くのだ、更に羨ましいことには、後から見ると、

それの連合ひの女が大層別嬪らしく見えるのだ、私も腕に覺えがあつたなら、彼等について行きたい氣が全くしたことであつた。

そして、やうやく新濱といふ村に入つたが、汚い家ばかりの村のことだから、別莊といへば直分るだらうと思つたところが、それが分らないので、私はぶら〳〵と殆ど端から端まで歩いたものだ。そのうちに通りすがりの、魚の臭のする漁夫の、小さな、表から裏までも見通せるやうな家の中さへも暗くなつて行つて、ぽつ〳〵と灯がつき始めたので、私は到頭我を折つて、とある家の前に立つてゐた、氣のよささうなお爺さんに「半田といふ家は、別莊ださうですがこの邊にありませんでせうか？」と聞くと、

「半田？」と言つて、お爺さんは目をしよぼ〳〵させながら考へてゐたが、「東京の人ですね、若い、何にもしないで遊んでる人ですね？」と言ふのだ。

「えゝ、さうです！」と私が勢を得て答へると、

「それなら。」とお爺さんは後の、海の方と反對の側の、丘を指差して、「この上に上るとお不動樣があるから、その前を通つて半町ばかり行くと、垣を廻した家が二軒あります、その手前の家ですよ。」と敎へてくれた。

敎へられた、生垣を廻らした二軒の家といふのは直に分つたが、なる程、奧の方のは庭も廣さうだし、建物も上下で、十間以上は十分にありさうな、立派な家たが、手前のは庭もさう廣くはない、（この間佐山の家で半田が話してゐた、黑須とかの連中が銘々勝手に土産に持つて歸つたといふ、鷄なんてどこにゐるんだらう？）平家造りで、せい〴〵四間か五間の、別莊といふ名を許されさうにない家だが、そしてそこの天然木の頗る風采の上らない門には、標札がなかつたが、先のお爺さんの言葉を信じて、その門の中に入つて、三間ばかりの小路を行くと、ふと家の奥の方で一人の女が戸

を閉めてゐる様子が見えたので、「御免下さい、」と聲をかけた、「半田六郎さんといふのはお宅でせうか？」

「はい、」と頭から被つてゐた手拭を取つた女を、と見ると、二十歳餘りの、色の黒い、何だかにきびの跡や、多少現在のにきびさへあると見える、丸顔の、何處と言つて歪んだところもない癖に、小造りの頗る風采の上らない女中らしいのが、答へて、「はい、半田は私共です、」と言葉も亦相當なぶつきら棒な調子だつた。

「半田君はお出ででせうか？」と私が聞くと、

「はあ、」と彼女は、しまつた！ 留守なんだな、と瞬間に私を失望さしたやうな、そのやうな氣の毒さうな顔付で言ふには、「あの唯今留守なんですが、……あんたは誰方です？」

「えゝ、」と言つて、私は馴れない家なものだから、困つて、「あの私は半田君と近頃お近附になつた者で、梅野といふ者ですが……」

「梅野さんですか？」と彼女は私を忽ち安心させたやうな、そのやうな大變要領を得た調子で、

「あの、今日あたりあなたがお出でになるかも知れないつて、半田も申してゐたんですが……」といふ所から、先程からの言葉の調子から、考へて見るのに、彼女はどうも半田の細君らしいのだ、さう言へばたゞの女中ではなささうに見えるのだが、それにどうかした拍子には、その色黒の、可愛らしい口元で、白い、その歯の荒く大きいのが困るが、どこから見ても山出しに近い恰好なのだが、どこかに、はてな？ と思はせる、言はゞ黒いぽい所も見えるのだ、彼女は言葉をついで、「あなた、停車場からずつとお出でになつたんでせう？ お會ひになりませんでしたかねエ？ あの、お午頃に東京から佐山さんが見えましてね、今し方送つて行くと言つて出かけたんですが、さうすると、舟橋の方へ行つたのかも知れません……？」

「舟橋といふと?」

「津田沼の、東京から言つて、一つ手前です、お通りになつたんでせう?」

「すると、こゝから二人で歩いて行かれたんでせうか?」

「えゝ、舟橋なら、歩いて行つたんだらうと思ひますが……」

「ぢやあ、東京までも歩いて行けるんでもせうね?」と私は變なことを言つたものだ、といふのも、もしそのまゝ半田に會へなければ、四十錢から二十六錢で往の汽車賃を拂つた殘りの、錢が今や十四錢しか袂に殘つてゐないことが氣になるので、十四錢で、東京まで汽車に乘れるところ迄行つて、その後を歩いて行くより外にない、と心にかゝつてゐたからだつたらう。「えゝ、行けますとも、」如何にも善良らしい半田夫人は、私の心も知らないで、「この村から隔日に東京へ出る飛脚がありますが、三時間とかで行くつて話ですからね。……まあ、しかし、もう歸つて來るだらうと思ひますから、どうかお上り下さい。ね、どうか、」

と勸められるまゝに、心細くはあるし、多少先程から歩き疲れてもゐたので、大きに疊の上が戀しくなつてゐた時だから、私は恐る恐る上に上つたものだ、すると、早速火鉢と煙草盆などを出されたが、實は懷の都合でそれをも倹約して、半田がゐたらお先煙草にありつくつもりで買つて來なかつたものだから、もぢ〳〵してゐると、「煙草をお上りにならないんですか?」と聞かれたのを機會に、「いやすふんですが、生憎買ひ忘れて來ましたので……この近くに煙草屋がありますでせうか?」と言つて立ちかゝる見えをした、額が熱くなつて、腋の下から冷汗がにじみ出したものだ。すると、それには氣がつかないで、彼女は私を押し止めて、取敢ず刻煙草と煙管とを持出しておいて、それを自分で買ひに走つてくれた様子だつた、やがて、朝日を一つ買つて來て、それを私に勸めながら、彼女も一本とつてすい付けなが

ら、

「梅野さんは奥さんは？」と何かの話の後に、こんなことを聞いた。

「えゝ、あつたんですが、もうありません、」と正直なところを、可笑しな返事で答へたものだ。

「お別れになつたんですか、」と彼女は持前の頓狂らしい表情の目を丸くして言つた、「どうして？」

「あんまり、そのヒステリイがひどいもんですから……」と言つて、私もをかしな男だ！　相手に聞いて見た、「奥さんはヒステリイはどうです？」

「ヒステリイつてどんな風になるんです？」と彼女は再びくる〳〵と目を丸くした。

「どんな風につてね、いろ〳〵ありますよ、大變なもんですよ、」と私は言ひかけたが、そんな説明をするのが面倒くさくなつて來たといふよりも、仲々半田の歸つて來る氣配がない上に、最早や日も暮れ切つて、部屋の隅々が五燭の電燈の光がとゞかないものだから、じわ〳〵と暗くもなつて來たし、おまけにごろごろと遠くに海の音さへ聞へ出して、大きに又心細くなつて胸が板のやうにつまる感じがして來たので、ヒステリイに就いては切り上げて、「半田君は始終東京へ行くんですか？」と話を變へた。「いゝえ、滅多に、」「不斷家で何をして居られます？」「たまに本を讀んだり、後は掃除が好きでね、掃除ばかりしてゐますよ、」「文學の方は？」「さあ、どうですか？　歌とかを時々作つてゐるやうですが、」「お酒は大分行けるんですか？」「いゝえ、もつとも二三ケ月前まではやつてたやうですか、この頃はすつかりやめてしまひました、」「どうも歸つて來られる樣子がありませんね、いつも出られると遲くなるんですか？」「いゝえ、さうでもありません。あたた、お腹がお空きになつたでせう？」「いゝえ、僕は食べて汽車に乘つたものですから……それよりあなた、どうか御遠慮なしに……」「いえ、私はいつも斯うして半田が歸つて來ない時には待たされるんです、」「へ

え！　十二時が一時になつてもですか？　僕の以前の女房なぞ、機嫌の悪い時には一緒にお膳に着いた時だつて、もし僕が先に箸を下ろすやうなことがあると、ぷッと怒つてしまつて、ヒステリイを起して、もう食べないなどと言つたもんです、あなたは感心ですね、」（まつたく、私はその頃他所の、それが普通なんだらうが、當り前の大人しい細君を見ると、却つてをかしいやうな、不思議なやうな氣がしたものだ。）「まあ、」と彼女は例の如く目をくる〳〵さして言つた、「ヒステリイといふのはそんなんですか？』『いやそんなんばかりぢやありませんがね、」と私は又こゝで引返して來たヒステリイの話を半田に戻して、「一體、半田君はどうしたんでせうね？　あんまり遲くなると、東京に歸る汽車がどうでせうね？」と言ふと、「汽車はまだまだありますよ、それに此頃は月夜ですから、」と彼女は私が心の底で期待する『お泊りなさい、』といふ言葉を一向吐いてくれないのだつた、そこで又私は袂の中の十四錢を思出して、さて東京へ歸つて何處で寢ようといふことを考へ出すと、心細さが板のやうな感じのする胸から咽喉元まで込み上げて來たものだ。それに、そこ迄は二十町あるといふところの、停車場に發着する汽車の汽笛も聞えるのだ、その間には絶えずごろごろと海の音も響くのだ、その外ちよ〳〵と虫の聲が雨の音のやうに聞えるのだ、カッチカッチと時計の刻む音もするのだ。私は無言でゐると、それ等の諸々の心細さをそゝる音に惱まされるので、なるべく間をおかないやうに話をつゞけたが、相手の女性も仲々話好きと見えて、私に餘り骨を折らせない程に喋るのだつた。

「ぢやあ、あなたの奥さんは今はどうして入らつしやいますの？」と彼女は聞くのだ。

「藝者になつてゐます、」と私は答へた。

「まあ！　で、あなたの所に入らつしやる前には？」と彼女、

「やつぱり藝者をしてゐたんです、」

「奥さんが藝者に出てゐて、厭ァな氣がしやしませんか？」

「さうですね、」と私、「いい氣はしませんね、」

「さうでせう、」と彼女、「私が出てゐました時も牛田が、牛田は仲々あなた見たいに大人しくない方ですからね、それは毎晩毎晩來ましてね、私、本當に困りましたわ。」

おやおや！　この女もやつぱり元藝者をしてゐたんだな、この女が？　この木綿のごつ／＼の双子縞の着物を着て、同じ半纒流の羽織の上から前掛を締めた、その着物同様ごつ／＼した恰好の、この女が？　だが、人間の職業なんてものは恐ろしいものだ、どこかにそれ等の藝者上りといふ恰好を裏切るものばかりに見えるこの女にも、どこといふことなしにちらりと黒つぽいところが見えるのは、——男の私を相手にする話振りやら、卷煙草をすふ樣子やら、やつぱりさうだつたのかと思はせたのであつた。

「それで、あの牛田から伺つたんですが、」と彼女の夫は何でも喋る男と見えて、斯う彼女は私に聞くのだ。「名前を變へて下宿して入らつしやるのは、その奥さんとのことでなんですか？」

「え〻、」と私。そして、仕樣がないので、餘り體裁の惡くない範圍で、どつち道決して體裁のい〻話ではないのだが、人間といふ不思議な生き物で盗坊は盗坊に、乞食は乞食に、それ／＼の虚榮心の拔けないものだ、かつたいにはかつたいの見えがあると見えるものだ、私もその流儀で、面白可笑しく話したことだ、即ち二度までも藝者をしてゐた女房と駈落した話、だがその女房が如何にヒステリイがひどくて困らされたかと言ふ話、仲々こ〻の家のやうに一人で出してもらうことは出來なかつた、或朝なぞ、彼女と世帯を持つてから一年以上も、一度も畫をかきに出たことがないので、寫生にと言つたなら一人で出してくれるだらうと思つて、如何にそれが職業でも、一年以上も別れてゐると、あの繪の具箱

を肩にかけて外に出るのが、まるで下ろし立ての下駄でも穿いた時のやうに、變に氣恥づかしい氣がしましたよ、そして、今日は寫生に行つて來る、と出かけようとすると、おや、あなたも寫生に出かけることがあるの？　私、寫生するところを見たいわ、と、どうです？　それでどんな畫が出來るもんですか？　私はその時分どんなに一人で町を歩きたいと思つたか知れませんね、……ヒステリイのことなら、私はもう日本一の學者になりましたよ、だが、ヒステリイを書にかく譯には行きませんからね、そこは文學だといゝんですがね、アハハハハ、なぞと。すると聞き手の喜び方は一通りではないのだ、「そしたら奥さんはどうしました？」「それであなたは默つてゐたんですか？」「まあ、大變ですわね、」……なぞと。

要するに、大きに呆れたり、驚いたり、何といふことでせう？　まあ、まあ！　と到底私なぞには思ひも及ばないことです、言語同斷な婦人ですね、といふやうな言葉を吐きながらも、半田の細君は私の話にひどく好奇心を動かされたらしく、膝を乘り出して喜んで聞くのだつた、すると、馬鹿が！　調子に乘つて、決して名譽にならぬことを、得々として一々例まで擧げて、私は如何にそのヒステリイの女房に悩まされたか、といふことを辯じ立てたものだ、だが、その底に、さうして話で彼女を釣つてゐる間に、早く半田が歸つて來てくれゝばいゝが、早く時間が經つて汽車がなくなればいゝが、と言つて、半田は歸つて來ず、汽車はなくなる、といふやうなことになると、彼女が大きに迷惑するだらう、私自身も少なからず閉口する、と思ひから思ひして、「半田君は歸つて來ないといふやうなことはありますまいね、」と私は又改めて、先から幾度も聞いたやうなことを聞いたものだ、そして、「そんなことはありません、」との彼女の答を得て、又稍々安心の氣を取戻すと、それと共に又、相手に時間の觀念を忘れさせるために、一寸の間もおかずに先の話をつゞけたものだつた。すると、やがて、私たちが話に夢中になつて、もう海の音も、汽笛の響も、一向耳に入らなくなつ

た時分に、肝腎の半田その人を待つてゐることをも忘れかけた時分に、かさ〳〵と表の方に砂利道を踏む音が聞えて、そして半田六郎が歸つて來たのだつた、多分、その時間は東京行の終列車が二十町向うの驛を出た時分だつたらう。

「やあ、梅野君、いつ頃來ました、隨分待ちましたか?」と半田はがたごとと立て附けの惡い戸を開けて入つて來るなり一瞬間窺ふやうな目附で私たちの方を見てゐたが、そこに私を認めると、忽ち斯う不自然な程の歡呼の聲を上げた。

「あなた、」とすると彼の細君は險阻な顔を彼に向けて、とがめるやうに言つた、「あなた、今頃まで何處に行つてたんです?」

「なアに、佐山が舟橋の××屋に下宿してゐる毛利昌光といふ小說家のとこへ寄らうと言ふもんだから、そこへ行つて今迄とめられて遊んでたんだよ。」

「お酒を飮んでますね、」と彼女は更に第二の矢を放つた。

「酒なんか飮んでゐないよ、ハア――」と彼は遠くから細君の鼻に向つて、但し十分に嗅がれると困るといふ風が讀まれたが、息を吹きかけて言つた、が、忽ち私の方に向つて語調を變へて、「梅野君、本當によく來ましたね、隨分待つたんでせう? 今日は泊つて行つてもいゝでせう? 歸るたつてもう汽車がありませんよ。……梅野君に御飯をどうした?」私と細君とに交々言葉をかける調子が、これ又ひどく不自然に愛想がいゝのだ、默つて觀察してゐると、あなた、今頃まで何處に行つてたんです? と先程彼女が彼をとがめたのも、それは客の私を待たして濟まなかつたぢやありませんか、といふ意味よりも、遲くまで外に何をしてゐた? といふことを責めたのらしく、又、今半田が私を盛んに大聲で歡迎するのも、それは歡迎する以上に、不機嫌になりさうな細君をごまかす策らしく見えたものだ。

それから半田六郎と私との話、「すぐ分つたでせう? どつちから來ました? 練兵場を通つて?」「あの邊の景色は

非常に面白いですね、」「かけますか？　どうです、此方にずつと引越して來ては？　あッ此間の話ね、昨日村長が旅行に出かけたさうですから、もう四五日待つて下さいね、」と、そこで「なアに？　何の話？」と細君が口を入れたものだ、すると、半田は何とか言つて話を反らしてしまつた、そして「ね、どこかこの邊に座敷を貸すとこがあるだらう、八百屋の八公に明日でも來たら頼んで上げるといゝね、」と言つて、又私に向つて、「それまでどうです、こゝに、別に御馳走は出來ませんが、僕んとこにゐちやあ？」そして又細君に向つて、「ね、梅野君がどこか間がある迄ゐてもいゝねえ？」と贊成を求めたものだ。

無論、それ等の話は、火藥庫の番兵を羨み、法界屋の尻からくつ附いて行きたいとさへ望んだ私にとつて、この上ない結構な話に違ひなかつたが、變なもので、餘り有難過ぎて、何だか背中がむづ〳〵するやうな氣がしたことだ。そのうちに、又話が一轉して元に戻つて、それは多分彼の細君が口を切つたのだつたが、私のヒステリイのをんなに就いて出たものだ、さうなると、私は又一坐の話し手になつて、大きに、先に細君に話したのと反復しないやうな、別の例話で、何と私の困り者のヒステリイのをんなの話は、それに惱まされた挿話は、濱の眞砂と盡きぬのだ、いろ〳〵と喋たものだ。すると、それに對抗するやうに、彼等が代る代る彼等の身の上のロオマンスに就いて、私に話したことには、始め彼が放蕩時代に藝者をしてゐた彼女に惚れて、彼が彼女を誰にも無斷で連れ出して伊豆の温泉へ駈落したこと、そこで金に窮して、東京の大きな米屋であるところの彼の兩親の家に救の手紙を出して、彼の母親に來てもらつて、少なからぬ金を以てそれまでの片を附けてもらつたこと、そして一時二人は東京で同棲したものだが、半年程して、又彼女が藝者に出ることになつて、その藝者家の近所に彼は二階借りをして暮してゐたが、自分のをんなの藝者姿が見てゐられなかつたと言ふので、半月の後に再び彼の母に泣きついて彼女を受出してもらつたこと、それからこの津田沼の彼の

家の別莊代りの持家に、二人あてがひ扶持で、押し込められた形で、斯うして暮してゐること、などであつた。

やがて、寢る段になつて、茶の間の奥の六疊に彼等二人の床が、そしてその一番奥の八疊に私の床が取られた、その外に、彼の小さな本箱と机との置いてある三疊の間と、それだけがその家の全部だつた。そこで、私は長い一日の疲勞を休めるために、私自身の、あの水族館の下宿に殘して來た蒲團の三倍も上等のそれ等にくるまつて、お休みなさい、とそれは彼等二人にと、それから世界のどこの隅々にも遍在するといふ神樣とに言つたつもりで、そして埋まるやうに横たはつたことだ、二十町離れたところの停車場を、もう一時を過ぎてゐたから、貨物列車でゞもあらう、ご——オと音して通るのも聞えるし、絶えずごろろごろろと波の音が歩いて來るやうに聞えるのだ。と、その波の音の間に交つて聞える聲があるのだ、それは隣室から聞える話聲なのだ、切々でよくは分らないのだが、殊に半田の聲の方が尙聞きとりにくいだが、「梅野さんなどは……」と頻りに私の名を言つて、私を例に引いてゐるらしい聲は彼の細君のだ、「大人しい……あなたは……」などとそれが續くのだ、「ウム……ウム……ウム……ウム……」といふやうに彼の聲は聞えるのだ、「そんなヒステリイの……梅野さんは……」と細君の聲が言ふのだ。「ウム……ウム……ウム……」と彼の閉口したやうな聲、そして絶えずごろろごろろと波の音。——

だが、それ等を私は三分以上と聞いてゐなかつた、せめて夢でゞも、並の人間の、そんなに上等でないのでいゝから結構な身分になつたのでも見て？……私は長い、色んなことのあつた、一日の疲れに、死んだやうに眠り入つたことであつた。

四 「うき草や……」

「それで君は」とその翌朝、朝の日の射す椽側に蹲みながら、半田が私に言ふのだ、「そのヒステリイの細君ともうこれ切り別れてしまふつもりなんですか？」

「えゝ、まあさういふつもりなんですが、」と私は何故か顔を赤くして答へた、恐らく私が彼女を厭になつたから、藝者に賣つてしまつて顧みないのだらう。と相手に思はれてはしないか、とでも考へたものか？「だが……」と私はつゞけた、「彼女がもつと年をとつて世間の苦勞に曝されて、そのためにヒステリイの氣がなくなりさへしたら、無論病氣でせうが、四分や五分の我儘も十分に混つてゐるやうですから、それがなくなりさへしたら、どうして一年でも一年半でも同じ釜の飯を食べ合つた者を、愛すなと言つて、愛さないでゐられませう？」と言つてるうちに、元もと隨分だらしのない、大きな涙嚢を持つた私のことだ、をかしな氣になつて、涙ぐまれて來たものだ、すると半田夫婦は共涙を誘はれた形で、それに年若い夫婦者が獨身者を見ると往々起すのを常とするところの、早く相手の人間も一對にしてやりたいものだ、といふやうな心を起したと見えて、彼等は口をそろへて、「乾度今によくなられるでせう、それ迄にあなたも早く勉強していゝ畫家になつておいて、一緒になつて上げるといゝんですね、」と言ふのだ。

その椽側からは、丘の下の昨日の夕方うろ／＼と私がそこをほつつき歩いたところの、一本道に沿うて立ち並んでゐる村の汚い家々の屋根を越して、どこが動いてゐるのかと思はれるやうな、その癖どろどろどろとそれがやつぱり音を立ててゐるところの、とろんとした鉛色の海が見えた。

「つまらない所でせう？」と並んで椽側に立つてゐる半田が言つた。

「いゝえ」と私は昨日の今頃のこと、昨日の難儀な一日のことなどを考へて、心の底から相手に感謝して言つた。

「これがずつと東京灣です、」と半田は海の方を指差して案内顔に言つた、「あの、向ふに尖がつて突き出たところがある

でせう、あそこが横須賀です、こゝへは東京のでなしに、風の加減なんでせうね、あそこのドンが聞えて來るんですよ。その少し手前の、煙でせうね、ぽーッと空の黒くなつてゐるのが横濱です、あゝ、さうです、あなたの奥さんの居られる横濱です。」

すると、不思議にも、斯うして知らない土地の、馴れない家に來てゐて、心持の十分感傷的になつてゐた私に、瞬間に私の別れた、困り者の、ヒステリイのをんなの顔が、本當に目に見るやうに現れたのであつた。横濱と聞いて、あんまりよく知らないところのことだから、その町の光景が極めて抽象的に、卽ち如何にも繁昌な場所らしく、人や車や犬や何かが、自暴に廻した走馬燈のやうに見えるそれ等のものが總て忙かしく、慌しく、人の目を眩ませるやうな代りに、皆悉く箇性なく見える中に、唯一人、私のヒステリイのをんなが、彼女は髮の毛のいゝ、骨細の、背のすらりとした姿をしてゐたが、惜しいことには肩の恰好の惡い、そして步く時に少し身體を浮かすやうにしてそれをひよい／＼と上下に搖するやうな附きをしたものだ、私はそれを、よく彼女が往來でヒステリイを起して、急に並んで步いてゐたのがすた／＼と先に立つて駈け出すことがあつた、そんな目に屢々會つたので、十分熟知してゐるのだが、今その恰好で彼女はその走馬燈の背景の前を、右に行き又左に歸りしてさ迷うてゐるやうに見えるのだ、彼女は又顔立のいゝ女であつた、眉も美しく、鼻の恰好も大變よく、少しヒステリイめいてはゐたが、目も優れたそれであつた、が、氣の毒なことには口元に於て馬脚を現はしてゐたものだ、それは決して大振なのではないが、上唇が少し上反り加減の上に厚ぼつたいのだ、ヒステリイが起ると、それが更に赤黒く、血を持つて來て、ひどい時には銀光をさへ呈したものだつた、そしてきめは細かだつたが色は不斷から少し青かつた、今私の目の前にもさういふ顔附をした、そして目に一ぱい涙をためた、彼女の涙の分量は異様に多かつた！　悄々とした彼女が、うろ／＼とその走馬燈めいた幻覺の横濱の町を背景に

して、即ち走馬燈めいて人や馬や車が沒個性に右往左往する中を、彼女一人が悲や恨や怒などの性情を多分に附與された生物らしく、右に左にさ迷うてゐるのだ、半田と海の見える、遙かにその窓を黑くしてゐる横濱の遠望される、椽側に並んで蹲んでゐる私の目に、生々とさういふ幻が見えたのであつた。すると、私もその幻の中の彼女のやうに目に一ぱい、多量の涙を感じたことだ。だが、そのさ迷ふ女が私のところへ歸つて來てくれたらやつぱり困る、と私は半田に隱して涙の目をふきながら思ふのだつた。

さうして津田沼の三日間が夢のやうに過ぎ去つてしまつたのであつた、三日間のうちに私は十分半田夫妻の歡心を得たものであつた、從つて一通りならず樂な、愉快な日を送つた、別に彼等の歡心を買つた譯ではないが、と言つて買はない譯でもなかつた、だが、さう思ふと、私の性質が私自身に厭で厭で堪らなくなつて、これには罰がない代りに、自分で自分の頭も物蔭に行つて毆りたいやうな氣がしたことだ、それは別に大した惡心あつての譯ではないが、大體に於いて、考へて見ると、私は半田といふ人物に友達としての敬意が持てなかつた、彼は大層頭の惡い癖に、變に嘘つきなのだ、と言つて、どんな嘘を吐いたとそれ迄のところは例を擧げられぬ程のものなのだが、彼の細君に對する態度、如にお追隨じみたことを言つてるかと思ふと、急に氣狂ひめいた高飛車に出たりする樣子や、等々、といろんなことが、彼の容貌の口附が氣になるやうに、私の腑に落ちないことだらけなのだ、そして又善人であることに露些かも間違ひはないのだつた、だから、可成り困つた人物なのだつた、細君だつてさうだつた、當時二十二歲で、四綠の酉歲だつたと言ふことだが、それでゐて籍なぞ入れてなさうだつたから、年など一つ位間違つてゐたかも知れない、一こくな正直者ではあるらしいが、仲々、昨夜彼女自身が言つたやうに、夫の歸りを十二時が一時までも飯も食はずに待つてゐる、といふだけが彼女の全體ではなささうなのだ、どころか、却つて奸婦に近くさへ見えるのだ、例へば一寸した

ことに、その間は鶏の喧嘩ほどの時間で濟むものだが、夫婦で爭ひを始めると、忽ちイイ、イイ、イイと黒い顔の、小さい口を光らして、白い、大きな歯をむいて夫に嚙みついてかゝるところなぞ、私の別れたをんなの年の、中歳の性質に近いものだつた、そんな風な、兩方とも餘り尊敬の拂へぬ人物で、明らかに當時私を入れる巣さへあつたなら、私は多分三日が二日も泊つてゐない家の人たちに相違ないのだつた、それを私は居心地よくゐたといふのだから、無意識ながらにも彼等の歡心を買つたと言はれて、何と否定のしやうもなかつたらう、こつり〳〵と、これは裁判官も巡査も叱りに來ないことなのだから、私は物蔭で自分と自分の頭を毆りつける外はなかつたのだつた。

さて、なる程、いつか彼の細君が言つた通り、半田は暇さへあると裸足になつて庭を掃いたり、尻はしよりをして椽側を拭いたり、家の內外の掃除をばかりしてゐたものだ。私はいち日何するといふことなしに、椽側に出て掃除してゐる彼と話したり、茶の間で女の用事をしてゐる彼の細君と話したりして日を暮した。夜になると、始めての晩のやうに、私たちは隣同志の部屋で寢たものだが、床に着くと二分間も經たないうちに、半田が大きな鼾をかいて寢てしまふものだから、さう急には寢つかれなかつた彼女と私とは、いつも唐紙越しに、どちらも明りを消した眞暗な部屋の寢床に横たはりながら、彼女は全く話好きな女性と見えた、長い間、時とすると、三時間も色んな話をしたものだ。彼女は藝者をしてゐた時分の自分の話、自分と半田との話、朋輩の藝者の話、それから三味線唄や芝居の話などまで持出したものだ、私は又それに應じて、それ〴〵の自分の見聞を話したものだが、結局、一夜のうちの話の半分以上は、彼女が尋ねるまゝに、例の私のをんなのヒステリイの話に落ちたものだ。それを又彼女は、始めての時よりも一層、次第に露骨に、興味を感じるやうな口振りで私から話を引出すやうに見えた。私も亦、一番手近の、最近の自分の身に沁みた苦勞のことであるから、易々と存分に喋つたが、すると、少しづゝ、僅三日の間の私の見聞に過ぎないのだが、彼女がそ

の私の話のヒステリイを摸倣するやうな言行を夫の牛田に對して現はして行くのを發見した、ヒステリイが恐ろしい傳染病であることは、その後私は屢々私の目で見て來たことだが、恐らくこれがその始めだつたらう。……

そして三日目の夕方近くのことであつた。私がその家に來てからその家にとつての始めての郵便物だつたところの、一枚の葉書が配達されたところが、それを見てゐた牛田の顏が俄に不斷の青さを一層增して、硬張つて行くやうに見えた、そこで「おい／＼、」と言つて呼ばれた彼の細君も、それに一應目を通すと、忽ち狼狽した樣子を現はし出した、それに驚かされて、「何か變つたことが起つたんですか？　どうしたんです？」と私が聞くと、彼等は私の言葉が聞えぬらしく、「ぢやあ、もう間もなくですね？」とか、「俺は納屋の方を掃除するから、お前は家の中をすつかり雜巾掛してくれ、」とか「今日は又生憎ひどい風でしたから、砂利で大變でせう、」とか言ふ慌しい問答があつた後、漸く牛田が私に向つて、「親父が今日の夕方やつて來るんです、葉書が來たんです。掃除の喧ましい親父でね、」と言つて中腰になつておろ／＼して居る樣子は、何か非常に恐ろしい者が來る、それは親父などでない、手取り早く言ふと盜賊の家に巡査が踏込んで來るといふ注進を得たやうな調子なのだ。私は、どんなに恐い親父か知らないが、彼が來るといふことが、そんなに彼等の恐怖を呼起すのを見て、私のやうな者が、讀者諸君、私のやうな甚だ道德家に遠い性質の者が、これは非常に正しくない人たちに違ひないといふ氣がして、氣ばかりでなく、文字通り心が痛くなるのを覺えたものだつた、それは私に歸る巣があつたなら、歸る巣がなくても、昔の士流の『渴しても盜泉の水を飲まず、』といふやうな氣慨があつたら、この門に唾して去りたいと思つた程、これは屹度大變正しくない人たちに違ひないと思はせたことであつた。

だが、私が去る迄もなく、「君濟まないが、」と牛田は私に言つた、「あの親父がもう一二時間中にやつて來ますので、

君、濟まないが、一遍歸つてくれませんか、親父が歸つたら直に知らしますから、」といふのだつた。「あゝ、さうしませう。」と私は額だけは强ひてはつきりした表情を湛えるやうに心掛けて、そして言つた、「今すぐがいゝでせうね？」「えゝ、さうしてくれるといゝんですが……親父が歸つたら、すぐ知らしますから、」と彼は言つて、半分は尻はしよりしながら、納屋の掃除に向はうとして、二三歩行きかけたが、又引返して來て、「すぐ知らしますけど、どこに君はゐます？」と聞かれて私は一寸返事に窮したが、早速氣がついて本郷の木戸參三の名前と彼の下宿の所を言つて、「そこにゐますから、木戸參三氣附として下さい、」と答へた。「さう、何々館、木戸參三、何々館、木戸參三、何々館……」とくり返しながら半田は再び納屋の掃除に向ふために、土間を下りかゝつたが、その癖すぐ忘れてしまつたと見えて、「木戸何でしたつけかね？」と聞き返すので、「參三、」と私が答へると、又「あゝ、參三さん、」と鸚鵡返しに言ひながら、「參三とはどう書くんです？」と今度は下駄を穿きながら言つたが、急に引返して來て、机の引出しから紙と鉛筆とを取出して、私に書いておいてくれと言つた。私は言はれた通りにして、荷物も何もないのだから、さて別れて歸つて行かうとしたが、ふと汽車賃が足りないのに氣がついたので、半田の後を納屋に追つて、躊躇しながら半田にその事を打明けて、東京へ行つてからの電車賃と、合はして二十錢あれば足りるから、と賴むと、さう、と言つて彼は心よく家の方に引返して行つた。で、私が又彼の後を追つて行くと、彼は忍ぶやうに茶簞笥の引出しを開けて、蟇口をだらう、ごそ〳〵と探してゐたが、そこへひよつこり奧の間から手拭を頭から被つて、片手に箒を引つ下げた細君が現れて、「あなた、何を探してゐるの？」と詰るやうに言つた。すると、彼は一瞬間はツと驚いた表情をしたが、「うむ？　なアに、梅野君が汽車賃に細かいものがないといふから……」と言つて、土間に立つてゐる私の方に向つて、「二十錢でいゝんですか、えゝ？　二十錢で？」と聲をかけた、私は腋の下に冷汗を感じながら、「えゝ、」とかすれた聲で答へた。すると、「財布は私が持つてゐま

す、」と言つて、彼女は帶の間から黄色い木綿の萎れた、恐らく幾らも入つてゐなさうな財布の中から、十錢銀貨一枚と五錢白銅二枚出してくれた。「けちな奴だな、」とそこで牛田が、もう先の恐る恐るの態度をからりと變へて、「五十錢銀貨があるだらう、それをお出し、」と叫んだ。「いや、二十錢でいゝんです、」と私は顔を赤くして、一層かすれた聲で叫んだからだ。「さう、」と細君は別に機嫌を惡くせずに、白い、大きな齒を一寸笑はせて、「二十錢つてあなたが言ふもんだから……」と言つた。「二十錢と言つたつて、正直に二十錢出す奴があるもんか、」と牛田も機嫌を直して、「それとも、十圓札をくづして上げるか、くづせないだらう?」と言つたものだ。私は更に顏が火になつたやうな氣した、たら〳〵と腋の下を蟲が這ふやうに冷たい汗が流れるのだ。だが、牛田は平氣でさう言ひ殘して、彼女の手から受取つた一枚の五十錢銀貨を私の手に渡すと、そこ〳〵に私の傍を走り抜けて、納屋の掃除に向つた。

「大變お世話になりました、」と私は細君に向つて叮嚀にお辭儀をすると、彼女は手拭を被つたまゝ頭を下げ返して、「お氣の毒ですね、だけどお父さんはいつでも一晩で歸るんですから、でも念のためにこちらから葉書でお知らせしますから、そしたら又來て下さいね、」と持前のぶつきら棒な調子の言葉で言つた。「本當にお父さんが來るといふと、命が縮まるやうな思をするんですよ、私、大嫌ひだわ、あゝ、やだ、やだ。ぢやあ、さよなら。」「さよなら、」と私は返して、それから納屋の前に行つて、入口から薄暗い中に首を突つ込んで、「いろ〳〵有難う、ぢやあ、さやうなら、」と牛田らしい鼻をすゝる音をさせながら、頻りに掃除をしてゐる黒い影に挨拶した。「さう、ぢやあ、葉書を出したら來給へな、」と中からの答だ。「さよなら。」

そして、豫め敎へられた道に依つて、街道には出ないで、砂利で下駄の埋まるやうな畑道を突き抜けて、此間の大きな大きな練兵場に出たものだ。此間のやうに、やつぱり四方の紅殻を振り撒いたやうに眞赤な景色の中に、行手の遠く

の方には先を削いだピラミツト見たいな形に、赤い中に黒く、小さく、例の火藥庫も見えるのだ。風の强い日で、背中の海の方から吹いて來るそれが、毆るやうに後から私のよれ〳〵の哀れな、紡績の羽織を、襤褸の一つ手前の銘仙の着物の裾を吹きまくるのだ、やけな調子で吹く私の口笛も一向冴えて響かぬのだ。

そして津田沼から東京へ向つて走る汽車の中で、私は三日前にその反對に走つた時とは又別の心細さに襲はれたことであつた、前者の時には、行先きの心細さの中に漠然とした希望があつたが、今度の場合は行先ははつきりしてゐるが、そこに行つたとて何の望があるどころか、當の主人の木戸參三が、いくら寛大な下宿とは言ひながら、六ケ月分も拂を滯らして安閑といつものやうに坐つてゐるかどうか？　彼が坐つてゐようとしたとて、下宿の方で彼を追出しはしなかつたか？　よし又ゐたとしても、私を一日でも二日でもとても置いてはくれられないだらう、さう思ふと、その汽車が兩國驛に着くのが、着いて本鄉の下宿に行くことが、死刑でも受けに行く程恐い氣がしたものだ、いつそのこと、この汽車が、夜になつても、又朝になつても、千年萬年走りつゞけてゐてくれたら、と私は願ひさへした程だつた。

ところが、それから夜になつた東京の町に入つて、私が忍ぶやうに彼の下宿の玄關に立つて、恐る恐る、そこに出て來た猪首の、ちんちくりんの女中にさへ馬鹿叮嚀に平身低頭して、「木戸君は？」と聞くと、「入らつしやいます、」といふ聲に先づ取敢ず力を得て、それから狐狸の住家めいた、荒れた、汚い廊下をこそ〳〵と、吉凶如何にと？　恰も戀人の窓にでも行くやうに、胸を震はせながら、彼の部屋を尋ねると、いつも同じ顏をしてゐる男だが、その時は受取る感じに於いて、どこかゆつたりと私を安心させた態度で、「やあ、」と彼は叫んだ。見ると、彼の小さな、菊版の本の二册以上も並ばないやうな、一閑張りの机の横に、それと同じ位の、これは又ばかに大きな玩具の張子の犬が置いてあるのだ、小さな彼の身體と張子の犬とは、その大きさ何れぞ？　と言はんばかりに、犬が堂々と目を見張つてゐるので、「どうし

たんだ、その犬は？」と私は何よりも先に、坐りながら、聞くと、「買つて來たんだよ、」と持前の表情の鈍い顏で彼は何氣なささうに答へるのだ。

「うまく都合がついたのかい？」と私は我が事のやうに、多少我が事に關係もあるのだから、勢込んで聞くと、

「あゝ、」と彼はやつぱりぽつねんとした調子で答へた、「その代りもう君に約束した飜譯原稿はやれないよ、」

「原稿？　賣れたかい、みんな賣れたのかい？」と私は聞いた。

「賣れたといふ譯でもないんだが、」と彼は一寸にや〳〵して言ふのだ、「兎に角、あの原稿がすつかりなくなつたんだよ。」

「一體どうしたんだ？」

「×××社にあれをすつかり擔ぎ込んだんだよ、そしてね、斯ういふ談判だ、あれを抵當に金を貸してくれ、その代り一ケ月以内にあの中のどれかに適當な、名前のある譯者の名を借りて來る、でなければ、あの原稿を全部煮ようと燒かうと、×××社の自由に、といふ不思議な談判なんだ、」

「それでもまあよかつたね、兎に角、」と私は言つた、「それでいくら貸した？」

「百圓だ、」と彼は相變らず無表情に答へた、「が、その中から九十圓下宿に進呈したんだ……」

「その犬張子は幾らしたい、高かつたらう？」と私は聞いた。彼の吉報に、私自身も大きに愉快になつて、氣持に餘裕が出來たものに違ひながつた。

「五圓だよ、」

「五圓！」と言つて、私は呆れて一寸默つたが、忽ち胸の邊から咽喉元にかけて、泡でも湧き立つたやうな心持を感じ

て、「プッフフフ、」と吹き出した。
「ウフフフフ」と彼もその黒い、小さな顏に皺を寄せて笑つた。
それから私たちは打連れて、大さう機嫌よくカフェーに出かけた。そこで木戸はウイスキイを三杯も飲んだものだ、私は隨分長い附き合ひだが、彼が酒を飲んだのを見たのは、その時が殆ど始めてと言つてよかつた、彼は不斷の赤黒い顏を十二倍も赤くして、但し表情だけはいつもとちつとも變らない誠に變化のないもので、だが、元氣だけはひどくよく振舞つた。
「泊めてくれ給へね、今夜、」と私が何かの話の切れ目に言ふと、
「いゝとも、いゝとも、」と彼は小さい首を前後に振つて言つた、「いゝとも、いゝとも、もう又當分大丈夫だからね。……ところで、君はちつとも飲まないぢやないか？　一杯乾せよ。」
言ひ忘れたが、彼はその顏や形や性質に似ず、のどのいゝ男で、嘗て學校時代に、試驗の日と、丁度その頃習ひ始めだつた清元の稽古會の日とが衝突した時、前者を止めて後者に出席したといふ履歷を持つてゐる男で、もつとも三ケ月後にはその師匠の數多の弟子の中で一番の秘藏弟子になつたといふ、柄にない素質の所有者なのだ、だが、仲々友達などのおだてに乘つて輕はづみにうたつて聞かすといふ性質ではなかつたので、私は彼の唄といふものを一度も聞いたことがなかつた、そしてその時が始めてであつた、彼は三杯目のウイスキイの杯を空けて、それをがちやんと音させて卓子の上に置くと、丁度あたりに人がゐなかつたが、突然その眞赤な顏を空中に向けて、
「へうき草や今日は向うの岸に咲く、ながれ次第や風次第。さりながら誘ふ水にもこりもせず。」とうたつた。そしてつゞいて「さあ、敎へてやらう、」と彼は醉拂ひらしく目を細くして叫んだ、「ついて唄へよ、――へうき草や……」

そして「へうき草や……」と私もうたつたことだ。

「さうぢやない、」と彼は私の間違つた節を聞きとがめては、「へながーアアれ……だよ、さあ！」

「ながーアアれ……か？」と私、

「よし、へしだアーいーや……」と言つた風に彼はつゞけたものだ。

果は、私たちは十二時過に俥に運ばれて、彼の基督教徒の下宿屋に歸つて行つたが、歸ると、急に一變した氣分に襲はれたもので、互に變に默り込んでしまつて、互に妙に不機嫌を感じた、そして唯一言、「今夜はもう遲いから蒲團を借りる譯には行かない、共同の蒲團だよ、」と彼が言つたのに、「結構だよ、」と私が答へたきりだ。そしてそのまゝ二人は背中合はせに身體を固くして寢てしまつた。翌朝、私たちはどんに悄氣たことか？ それは神樣に聞いてくれ給へ。もつとも、私は老人のやうに早く目が醒めて、一度醒めると一度起きなければゐられない性分だし、彼は十二時の例の半鐘に起きるのを習慣としてゐる者だから、彼が起きる迄に、私は一度起きて顏を洗つて、一時間程雜誌を讀んで、又寢て、そして三度目の目を醒ましたものだ、ガン、ガン、ガン、ガンといふ例の玄關の半鐘の音に、私が目を醒ますと、ウー、ウー、ウーと言つて彼が伸をしたことであつた。無論二人とも昨夜のことなど、頭の中には生々と何よりも先に思ひ出してゐるのだが、一言も齒から先には洩らさないで、丁度別々に見た夢のやうに、默つて別々に味つたものだ。夢といへば昨夜のことは餘りにも前後の事情とは關係のないことなので、本當に夢のやうな氣もふとするのだが、證據は、枕元の實物大以上の張子の犬が、木戸に昨日金が入つて、そして昨夜カフェーに二人で行つたのは嘘ぢやあない、と語るのだつた。

さて、その日が過ぎてその又翌日の、午の半鐘が鳴つて間もなくのことだつた、猪首の女中の案内で、津田沼の半田

が木戸の下宿に私を尋ねて突然やつて來たのだつた。彼は何が入つてゐるのだが、持つて來た大きな風呂敷包を入口の障子の際に置くと、私に一寸挨拶してから、「あの木戸さんですか、私は牛田六郎といふもので……どうか宜しく、」と例に依つて仲々物馴れたらしい初對面の挨拶をしたものだ、そんな事には極く馴れない木戸は大きに面喰つたものだ。それに、木戸といふ人物は物言はずな上に、全然人に調子を合はすなぞいふことの出來ない性質だし、牛田は何方かと言ふとがさつな、いゝ加減でも何でもいゝから、胸襟を開いた恰好なぞをしたがる風だつたから、どうも二人の附合がはか〴〵しく行かないやうに見えた。で、一時間もすると、牛田は困つて來たものと見えて、「梅野君、」と私に合圖するやうな口吻で、「その邊に散歩しませんか、そしてどうです、又家の方へ來ませんか？」と言つた、あんなに先日大騷動したのに拘らず、彼の父親は急用が出來たとかで來なかつたのださうた、そして彼は申譯のやうに、「どうです、木戸さんも？」と言つたが、無論、木戸は「いや、僕はどうも……」といふやうな言葉で斷つた。

で、私は牛田について出たところが、彼は半町ばかり歩いたところで、稍々聲をひそめて、私に行きつけの質屋があるか、これを、と言つて、例の大きな風呂敷包を一寸搖すつて、これを置きたいんだが、賴まれてくれないか、といふのだ。私は何といふ譯なく、普通の友達にならば滅多に言はないことなのだが、そんなことをして、細君も承知してるのか、といふやうなことを聞いたところが、「いゝんですよ、」と相手は言下に答へた。その答へ方 隨分不自然で變だつたが、まあ、いゝわい、と思つて、言はれるまゝに、幾何でも貸せるだけといふことで、彼を質屋の外に待たしておいて、私は中に入つて風呂敷を開くと、牛田自身のらしい米琉の袷羽織と綿入着物と、彼の細君のらしいお召の袷羽織とがはひつてゐた、當時の相場で、二十五圓といふのを私は二十八圓にせり上げて、待つてゐた牛田のところに歸つて來て金を渡すと、彼はそれを受取つてから、又半町ほど歩いたところで、「あの、」と少し言ひにくさうに、「僕んとこの奴、あんな

正直者の疳癪持でせう。だから、今日のことは言はないで下さいね、」と言ふのだ、私ははツと思つて、だから、先程念を押したのに、とむツとしたが、それも堪えて、「えゝ、」と答へた。すると、半田は大きに勢を得た樣子で、「これから一杯飲みに行かうぢやありませんか？」と忽ち愉快極まる顏をして、足を早めたものだ。私はその横顏を、その飛び出た目付、氣になる口附をちらと見て、腹の中で、無論、この位のことは誰もすることだし、外の友達　場合なら餘り氣にならないのだが、この善良には違ひないが、愚かな、あゝ、世に愚か程惡いものはない！　人を氣を附けよ、あゝ、厭だ、厭だ！　そして私自身のことを考へて、世界の隅々に遍在する神樣！　私に巣を與へ給へ、と祈ながら、彼について行つたことだ。

　すると、又私といふ人間はどうしたことだ！　半田は五六町來た邊の、薄汚い料理屋に威勢よく上つたのに從つて、座敷に通つてから、私はふと思ひついたやうに、この横町に私の親類がある、そこに五分間ばかりで濟む用を思ひ出したから、と斷つて、表に出て、たとへもう三日でも東京にゐよう、あゝ木戸と無言の行をするやうな部屋でゞもいゝから、あそこに行かう、それには……と考へて、先に行つた私の馴染の質屋の暖簾をくゞつたものなのだ、そしてどうしたかといふと、小僧を捉へて、執固く談判をしたものだ、といふのは、今し方持つて行つた半田の質物を、無論彼に內所で、三十三圓に値上げさせて、金五圓の差を受取つて、今度金が出來た時そつと返しておけばいゝ、なぞと虫のいゝことを考へたものだ、そして着服した五圓の札を潰れるやうに握りながら、外に出は出たが、それから半町も行つた時、その半町を行くのに十分以上かゝつて考へ考へ歩いたものだ、そして又ぶら／＼と質屋に引返して行つて、其間のおどりの利息を貰はねば、といふ小僧に泣くやうに賴んで、今借りた五圓を返して元通り二十八圓に直しておいて、しを／＼と半田の待つてゐる料理屋に歸つて行つたものだ。……

そして、その晩、醉拂つた半田と一緒に再び津田沼の驛を下りた時、半田はまだすつかり醉が醒め切らないからと言つて、驛からの歸り途の、例の大きな大きな練兵場のまん中で、酒が醒める迄と言つて、ごろりとそこの草原の上に大の字になつて三十分以上寢そべつたものだ、私はその間、秋の夜の寒さに震へながら、しつかりと兩腕を、それで自分と自分の身體に抱きつくやうに、組合はして、彼の横手に同じく寢そべりながら、常に空にはある筈だが、あんまり沁々見たことのない天の星を、これは何と澤山あることだらう、と感心して見たものだ。やがて、半田はふら／＼と立上つて、私の鼻の先に、ハアーと彼の息を吹きかけて、もう確に酒の臭がしないと確かめると、又私の先に立つて、海の音のする彼の家の方に歩き出した、月が出ないので、まで道は暗い暗いのだ。

又しても「苦の世界」である。だから、これから未だつゞくのである。

文學博士　芳賀矢一先生序文

廣島高等師範學校教授　文學士　鈴木敏也氏新著

西鶴の新研究

（四六判惣クロース箱入　定價二圓六拾錢送十五錢）

文豪西鶴の著は現今發行禁止の下に世に行はれずと雖も其奇警の觀察と輕妙の行文を以て元祿時代の世相人情を描寫したる多數の名著は實に國文學に於ける大産物にして文藝研究者の忽緒に附すべからざるものたり、德川文藝史の熱心なる研究者たる著者が其蘊蓄を傾注したる本書を繙かば此奔放洒落の文豪の面目と其多數名著の内容價値を充分に知悉し得べし

カーペンター原著　三浦關造氏譯

人間の道と藝術

〔中判箱入一圓六十錢送十五錢〕

舊文化は覆へて新文化は興らんとす、カーペンターはロマンロランと共に此新文代の豫言者鼓吹者なり、ホヰトマン、ミレーヷグナーを說き、イプセンゾラを論じ藝術の民衆化を高唱して徹底的に人生を說けるもの也

慶應義塾大學教授　文學士　内藤智秀氏新著

世界宗教一揆史

熱烈なる信仰の力が社會萬般に及ぼせる影響の如何に偉大なるか、思想と呼び主義と稱ふるものが一とたび人間の行動となり運動となつて表現せらるゝ時は感情的分子に支配さるゝ事頗る多く其結果頗る恐るべきものあり、本書は古來世界に起れる宗教一揆、宗教戰爭の史實を詳細に記述批判して、其間に流るゝ眞理を闡明したるものにして一般人士に裨益する所尠少ならざるべし。

（四六判箱入　三百七十頁　價二圓四十錢　送料十八錢）

東京市麴町區飯田町一の二　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八番　電話番町一七九番

支店　大阪市東區南久寶寺町四丁目心齋橋筋

東京新橋　資生堂化粧品部

香水香粧品と鏡台と手提嚢とスカーフと

婦人公論 春季特別號

人間改造號

■人間改造を論ず……帆足理一郎

▼口繪 部屋の一隅……有島生馬
▼題言 人間改造と婦人……島中雄作

■辯明……公爵 近衞文麿

公論

■頭の改造、心の改造……文學博士 桑木嚴翼
■愛を中心にした生活……吉田絃二郎
■生活の藝術化……本間久雄
■婦人改造の着眼點……文學博士 谷本富

■人種改善學講話……醫學博士 永井潜

■近代文人の見た人間改造……島村民藏

■社會問題とは何ぞや……法學博士 吉野作造

(懸賞當選)現代生活に對する不滿

◉淺ましい男よ◉學歴と學閥の弊◉俸給衣食者の家庭から◉野良犬のやうに◉何より大きい怨み◉汁滑せん老人の權威◉嘗ては模範生たりし女學生の◉平◉姑と名のつく母のために

■自己改造物語(二)……姿から……光子
酌婦から……せき子

■頭ばかり奇麗で根の弱い作り菊……天空來生

(人間改造の生きた物語)

■涙と汗の記……三角錫子
■尼僧から還俗へ……帆足みゆき
■再生美談 鬼から神へ……小松謙三
■舞臺を退いて……衣川孔雀

■下女の時代……生方敏郎

■男(中村吉藏氏 一條忠衞氏 宮田脩氏)から觀た女の改造……

■女(平塚明子氏 遠藤清子氏 矢部初子氏)から觀た男の改造……

((小說))

■艶書代作……江口渙
■小坂部姫……岡本綺堂
■空華……久米正雄
■再び海へ……矢口達
■戰ひの後……秋田雨雀

本號定價六拾錢 郵稅二錢 ◎ 東京本鄉區西片町十(振替東京 三四番) 中央公論社